

聖
靈
論

謝順道 著

前書き

拙作の聖霊論は筆者が一年の神学訓練を受けた時の卒業論文であり、1966年2月に出版され、本教会の神学院教材となった。1985年4月再版の際、奥深い神観問題を一般の読者に理解してもらうため、第一章の「聖霊とは何か」を書き直した。2001年2月、再版の第四刷は早くも売り切れた。2008年、英訳本を出版したことにより、聖霊のメッセージを西洋のキリスト教国家に宣べ伝えることができた。今年は第三版の印刷を計画するに当たって、全書の主なメッセージを更に明白にするため、第一章の神観問題と他の数箇所にも少し手を加えた。それにより幾年来気にかかっていたことがなくなり、ほっとした。

ローマ人への手紙 11章 25～26節の聖句は二つの奥義について触れており、終わりの日が来る前に必ず実現される預言である。その一は、「異邦人の選ばれる予定人数が全部救われる」(25節)事である。誰が「永遠の命を得る」かは神の定めである。「永遠の命にあずかるように定められている者」は、遅かれ早かれ主を信じることになる(使徒 13:48)。網から漏れる魚は絶対一匹もない。いわゆる「異邦人の選ばれる予定人数が全部救われる」とは、福音が全世界に宣べ伝えられ、永遠の命にあずかるように定められている者は必ず主の救いを受け、一人も失われないということである(ヨハ 6:37)。その二は、「イスラエル人は、すべて救われる」事である(26節)。この予言が実現すれば、「これが、彼らの罪を除き去る時に、彼らに対して立てるわたし(神)の契約である」(27節)。私たちが礼拝している神は誠に寄り頼める方で、ご自分の契約を破ることはない(詩 89:34)。たとえイスラエル人のうちに不真実な者があったとしても、神は常に真実である(ロマ 3:3、Ⅱテモ 2:13)。

一の奥義によると、福音は早くにも全世界に伝えられ、最もへんぴな地域でもキリスト教の会堂があるが、一般の教会が宣べ伝えているものは、「御国の福

音」ではなく(マタ 24:14)、変えられたメッセージである。いわゆる「御国の福音」とは「ひとたび伝えられた信仰」であり(ユダ 3)、変えられていない元の純粹の福音のことである。すなわち「真理の言葉」であって、人に「救いの福音」をもたらし、証印を押された「約束の聖霊」を得させる真の福音のことである(エペ 1:13)。よって、人に聖霊を得させることができなければ、彼らが宣べ伝えているものは「御国の福音」とは言えない。

二の奥義によると、やがてイスラエル国に空前絶後の大戦争が起こる。その結果としては、全国三分の二の人は断たれて死に、「三分の一は生き残る」。ただしこの三分の一は安らぎを得られず、火で精錬されなければならない。それらの精錬というのは、死んだ者が生きている者より多く、一時的に死体を取り除くことができないため、疫病が迅速に蔓延する、食物と水が核兵器や化学兵器に汚染されるため、飲食できない、放射線にさらされた者は生き残っていても苦しんでいる... などのことである。これらの巨大な災難に出会った人々は死んだ方がましだと感じ、はじめて「主はわが神である」と神に呼ばれる。神も「彼らはわが民である」と言われる(ゼカ 13:7~9)。この生き残った三分の一はすなわち「残された者」または「残された子孫」である(ロマ 9:27、29)。すなわち戦争に生き残された「全イスラエル人」である(ロマ 11:26)。

「わたしはそのひとりをも、国々のうちに残すことをしない。わたしは、わが霊をイスラエルの家に注ぐ時、重ねてわが顔を彼らに隠さないと、主なる神は言われる」(エゼ 39:28~29)。「わたしはそのひとりをも、国々のうちに残すことをしない」とは、世界に散らばったイスラエル人は空前絶後の大戦争を予知して、祖国と同胞を断たないように守るため、すべて帰国するということである。「わたしは、わが霊をイスラエルの家に注ぐ」とは、イスラエル人が全部帰国した時、神は彼らに聖霊を注ぐということである。(J. N. Darby) 訳本では、未来完成形の「I shall have poured」となっている。

「イスラエル人は、すべて救われる」とは神が世の人を救われる最後の御業である。この予言が一旦成就したら、全世界の聖徒たちが大迫害を受ける預言と世界大戦の預言は同時に実現する。ひいては世の終わりの日、キリストのご再臨、義を以って万民を裁かれる時がやってくる(黙 20:7～15、使徒 17:31)。イエスの預言によると、世の終わりの日とキリストのご再臨の予兆の大半が実現されている事実(マタ 24:3～31)を見れば、かの日は間近に迫っている。正にイエスが言われたようである。「そのように、すべてこれらのことを見たならば、人の子が戸口に近づいていると知りなさい」(マタ 24:33)。

願わくは、各教会のすべてのクリスチャンが一日も早く「再生の洗い」(テト 3:5)を受け、罪を赦され義とされ(使徒 2:38、22:16、I コリ 6:11)、しかも保証なる神の「約束の聖霊」を受け(エペ 1:13)、生ける望みをもって、主の来臨の時、引き上げられ、空中で主に会い、いつも主と共にいるように(I テサ 4:15～17)。

2011年6月25日

謝順道

目次

ページ

第一章	聖霊とは何か？	001
第一節	聖霊の位格	001
第二節	聖霊はどなたであるか？	002
一、	聖霊は即ち天の父の霊	
二、	聖霊は即ちイエスの霊	
第三節	神観に対する探究	001
一、	聖書の主題	
二、	霊の内的一致	
三、	聖霊は時間と空間を超越する	
第四節	いくつかの質問	015
一、	父と子と聖霊との呼称	
二、	神は「われわれ」と自称された	
三、	父と子と聖霊が同時に現れられた	
四、	パウロの祝福	
五、	イエスは神の右におられる	
第五節	聖書にかなう神観	020
一、	イエスの御名によってバプテスマを施す	
二、	アナニヤの欺き	
三、	聖霊の注ぎ	
四、	力ある代弁者	
五、	天地創造の主	

第二章	聖霊の名称	025
第一節	聖霊	025
第二節	真理の聖霊	025
第三節	助け主	026
第四節	知恵と啓示との霊	030
第五節	その他	032
一、	聖霊が神の霊であることを表す	

- 二、 聖霊がイエスの霊であることを表す
- 三、 聖霊の尊さを表す
- 四、 聖霊の働きを表す
- 五、 聖霊の性質を表す

第三章 聖霊の象徴	034
第一節 鳩	034
第二節 露	036
第三節 雨	037
第四節 水	038
第五節 川	040
第六節 油	043
第七節 印	044
第八節 保証	046
第九節 火	047
第十節 雲の柱と火の柱	049
第十一節 光	051
第十二節 剣	052
第十三節 息と風	054
第十四節 七つの目	055

第四章 聖霊と教会	057
第一節 教会の定義	057
第二節 教会の本質	058
第三節 教会の由来	060
第四節 教会に備わるべき条件	060
一、 教会に聖霊があるべき	
二、 教会は遣わされた伝道者がいるべき	
三、 教会は使徒と預言者の土台に建てるべき	
第五節 聖霊が教会を治められる	064
一、 聖霊は教会の唯一の統治者	
二、 聖霊は働き人を立てられる	
三、 聖霊が賜物を分けられる	

第六節	教会を建てる賜物	070
一、	優れた悟りの賜物	
	(ア) 知恵の言葉	
	(イ) 知識の言葉	
	(ウ) 霊を見わける	
二、	優れた力で物事を行う賜物	
	(ア) 信仰	
	(イ) 癒し	
	(ウ) 力あるわざ	
三、	優れた力で語る賜物	
	(ア) 預言をする	
	(イ) 異言を語る	
	(ウ) 異言を解く	
第七節	賜物の基礎	078
一、	コリント教会の誤り	
二、	愛を賜物の土台とすべき	
三、	聖愛と自然愛	
第八節	教会は唯一である	081
一、	宮は一つ	
二、	体は一つ	
三、	花嫁は一人	
四、	神の家は一つ	
五、	真のぶどうの木は一つ	
六、	主の羊は一群	
七、	箱舟は一つ	
八、	取り去られるのは一人	
第九節	教会は必ず一つとなるべし	085
一、	ヴィスロフ、カール・F.の主張	
二、	イエスの御こころ	
三、	いかにして教会が一つになることを促進するか	
	(ア) 主の御名の下に一つになる	
	(イ) 聖霊のうちに一つになる	
	(ウ) 真理において一つになる	

第五章	聖霊と信者	093
第一節	聖霊と義とされること	093
一、	義とされるとは何か	
二、	なぜ義とされるべきか	
三、	聖霊によって義とされる	
第二節	聖霊と清くなること	097
一、	清くなるとは何であるか	
二、	なぜ清くなるべきか	
三、	清くなるには助け手が要る	
四、	聖霊は清くなる助け手	
第三節	聖霊と救い	103
一、	救いとは何であるか	
二、	聖霊の救いに関わる根拠	
第四節	神の子としての保証	106
第五節	神の国を継ぐ保証とする	108
第六節	生ける望みを抱かせる	109
第七節	真理を悟らせる	111
第八節	力を賜る	113
一、	証しする力	
二、	過ちを指摘する力	
三、	奇跡を行う力	
四、	新たになる力	
第九節	信者のために祈る	118

第六章	聖霊の働き	122
第一節	誤りを認めさせる	123
一、	罪のために自分を責める	
二、	義のために自分を責める	
三、	裁きのために自分を責める	
第二節	罪人を御前に来るよう催促する	128
第三節	罪を赦す	129
第四節	解き放つ	131

第五節	命を賜わる	132
第六節	罪に定める	133
第七節	働き人を遣わす	134

第七章 聖霊を賜る約束 136

第一節	預言者たちの預言	136
一、	モーセの預言	
二、	ダビデの預言	
三、	ソロモンの預言	
四、	イザヤの預言	
五、	エゼキエルの預言	
六、	ホセアの預言	
七、	ヨエルの預言	
八、	ゼカリヤの預言	
九、	マラキの預言	
十、	バプテスマのヨハネの預言	
第二節	イエスの約束	150
一、	受難前の約束	
二、	復活後の約束	

第八章 聖霊は果たして降った 163

第一節	前の雨が先に降る	163
一、	前の雨が降る預言	
二、	前の雨が降った歴史	
第二節	聖霊の降臨が止んだ	167
一、	聖霊の降臨が止む預言	
二、	聖霊の降臨が止む預表	
三、	聖霊の降臨が止んだ歴史	
第三節	後の雨がのちに降る	174
一、	後の雨が降る預言	
二、	後の雨が降る預表	
三、	後の雨が降る場所	
四、	後の雨が降った歴史	

- (ア) 世界各国のペンテコステ運動
- (イ) 真イエス教会の起源

第九章 聖霊のバプテスマ 204

第一節 聖霊を受けた根拠 208

- 一、 異言を語る
- 二、 体が揺れ動く
- 三、 目に見え、耳に聞こえる

第二節 異言の働き 222

- 一、 とりなす
- 二、 未信者のためのしるし
- 三、 自分の徳を高める
- 四、 教会の徳を高める

第三節 特殊な賜物 230

- 一、 コリント人への第一の手紙 14 章の真意
- 二、 五旬節の経験

第十節 聖霊の感動 250

第一節 普遍的な誤った観念 250

第二節 各時代における聖霊の感動の働き 254

- 一、 旧約時代
 - (ア) 預言者を感動させる
 - (イ) 士師を感動させる
 - (ウ) 祭司を感動させる
 - (エ) 王を感動させる
 - (オ) その他
- 二、 前の雨が降る前
 - (ア) イエスの降誕について
 - (イ) イエスの功績について
 - (ウ) イエスの身分について
- 三、 前の雨の時代
 - (ア) 主に帰するように催促する
 - (イ) 教会を盛んにする

(ウ) 使命を託する	
(エ) 将来のことをあらかじめ示す	
(オ) 人を清める	
四、 後の雨が降る前	
(ア) 熱心に御言を行うように働きかける	
(イ) 命を捨てるまで福音伝道に努めさせる	
(ウ) 文字伝道に携わらせる	
五、 後の雨の時代	
第三節 一般の教会が取るべき態度	282
一、 聖霊を汚してはいけない	
二、 ガマリエルの勧告を深く考えるべき	
三、 アポロの謙遜に倣うべき	
四、 バプテスマのヨハネに見習え	

第十一章 聖霊のバプテスマの追い求めを妨げる誤論	290
第一節 五旬節の出来事はいつまでも繰り返すことがない	291
第二節 すべての信者は聖霊がある	304
第三節 聖霊のバプテスマを求める必要はない	313

第十二章 如何にして聖霊のバプテスマを受けるのか	332
第一節 真の教会に属する	333
第二節 真理に従う	335
第三節 「ハレルヤ」を唱える	339
第四節 バプテスマを受けて罪の赦しを得る	342
第五節 按手を受ける	346
一、 つながりを表す	
二、 按手して祝福する	
三、 按手して病を癒す	
四、 賜物を分け与える	
五、 式典の一つ	
(ア) 聖職者を立てる	
(イ) 働き人を遣わす	
六、 按手して聖霊を賜る	

(ア) サマリヤ人の経験	
(イ) サウロの経験	
(ウ) エペソの弟子たちの経験	
第六節 貧しい心、清い心	350
第七節 信仰、専念	354
第八節 常に祈る	359
第九節 主の戒めを守る	363

第十三章 御霊に満たされるべき 369

第一節 聖霊に満たされる定義	370
一、 聖霊のバプテスマを受けることを指す	
二、 聖霊に支配されることを指す	
第二節 聖霊に満たされる効果	375
一、 御働きの任務に堪える	
二、 罪の力に勝つ	
三、 御霊の実を結ぶ	
(ア) 愛、喜び、平和	
(イ) 寛容、慈愛、善意、忠実、柔和	
(ウ) 自制	
第三節 聖霊に満たされる必要条件	402
一、 慕いあえぐ	
二、 悪を捨てる	
三、 悔い改める	
四、 服従する	
五、 努力する	

第十四章 聖霊と邪霊を見分ける 416

第一節 聖霊を受ける特徴	416
一、 「ハレルヤ」をよく唱える	
二、 異言を語り、霊の歌を歌う	
三、 心が喜びに満たされる	
四、 御霊の実を結ぶ	
第二節 邪霊を受ける特徴	419

一、	イエス・キリストが肉体をとって来られたことを認めない	
二、	世のことばかりを語る	
三、	真の教会に聞き従わない	
四、	さえずるように、ささやくように語る	
五、	叫び出し、ひきつけ、あわを吹き、引き倒れる	
六、	意識不明になる	
七、	高ぶる	
八、	その他	
第三節	邪霊を受けた実例	424
一、	意識不明	
二、	唾が出る	
三、	秩序がない	
四、	苦しみ悶える	
五、	倒れる	
第四節	邪霊の侵入をいかに防ぐか	428

第十五章	わたしが聖霊を受けた体験談	430
1、	聖霊を受けて大喜びでした	430
2、	夫が変わったことに感動されて、バプテスマを受ける決心をしました	433
3、	聖霊の下りによって、敷地まで揺り動かされました	435
4、	聖霊のバプテスマを受けて、何事も自制できました	440
5、	切に祈り求めて、果たして聖霊に注がれました	446
6、	稲妻が身に落ちて、異言を語りだしました	448
7、	先に聖霊を受け、後にバプテスマを受ける決心がつけました	451
8、	聖霊に満たされて、新しき人を着ます	454
9、	戸を閉め一心に祈って、果たして聖霊が臨まれました	458
10、	聖霊を受けて、肺結核が癒されました	462
11、	「汝によきおとずれを伝えよ」と書いてあるとおりに祈って、 聖霊に満たされました	466
12、	伝道者を反駁した者が逆に神の捕虜となりました	469



第一章 聖霊とは何か？

聖霊とは何か？聖書の示しによれば、その存在は明白のようであるが、おぼろげに見えるようでもあり、はっきり見通しが見つからないのである（I コリ 13:12）。神学の観点から言うと、答えはすでに出されているが、人を納得させるものではない。

第一節 聖霊の位格

ある聖書註解者は、聖霊は神の威力と息であり、「霊」ということばの原文の意味は息や風だと言っている。息や風を聖霊の本質として、しいては聖霊を「聖風」と訳したのは、聖霊の位格の存在をおろそかにすることである。イエスが言われたが、聖霊に対して言い逆らう者は、人の子に対して言い逆らう者より罪が重い（マタ 12:31～32）。もし、聖霊が単なる神の威力また息であるなら、イエスのこのことばは理解しにくくなるのであろう。

ヨハネによる福音書 14 章から 16 章に、イエスは 5 回ほど聖霊について論じられたが、どれも陽性代名詞の「彼」（註：日本語の聖書は「それ」と訳す）で表された（ヨハ 14:26、15:26、16:8、13、14）。「あの方」の意味が含まれるので、聖霊に位格があることを証明する。パウロが言った、「御霊は同じである。すべてこれらのものは、一つの同じ御霊の働きであって、…」（I コリ 12:4、11）。このことばもそれを証明することができる。

そのほかに、聖霊が知性、感情、意志の三種の特性を持つことは、いっそう



その位格の存在する真実であることを証明する。第一、知性から見れば、聖霊は宇宙万物を創造し(創 1:1~2、詩 104:30)、善悪をわきまえ(エペ 4:30)、証をし(ヨハ 15:26)、すべてをきわめ(Ⅰコリ 2:10)、人を教え(ネへ 9:20、ヨハ 14:26)、真理に導き(ヨハ 16:13)、神の奥義を人に啓示される(エペ 3:5)。第二、感情から見れば、御霊は愛がある(ロマ 15:30)、恵みを施し(ヘブ 10:29)、憂え(イザ 63:10、エペ 4:30)、励まし(使徒 9:31)、聖徒のためにとりなされ(ロマ 8:27)。第三、意志から見れば、聖霊は思いがあり(ロマ 8:27)、決意し(使徒 15:28)、命令し(使徒 8:29)、働き人を遣わし(使徒 13:1~4)、弟子があるところへ伝道に行くのを禁じ(使徒 16:6)、聖職を立て(使徒 20:28)、賜物を各自に分け与える主権があり(Ⅰコリ 12:11)、呼ばれる(黙2:7、11、17、29、3:6、13、22)。

第二節 聖霊はどなたであるか？

聖霊は位格を持つ存在者である以上、いったいどなたなのであろうか？これは極めて奥深い神観の問題であり、教会の歴史上において、千年以上も続く懸案である。西暦 325 年に定められた「ニカイア信条」(the Nicene Creed)は三位一体説を確定したが、わたしたちはそれを承認することはできない。パウロが言った、「いったい、人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれが知っていようか。それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない」(Ⅰコリ 2:11)。神観の問題は神の事である。第四世紀以来、ローマ教と一般の新教があやまった神観を持つのは、神の霊がその内にとどまられないからである。どうか、知恵と啓示との霊の導きによって、わたしたちが、世に属する知識によらず、ただ聖霊の教えに頼って、神を認めるように(ヨハ 14:26、16:13、エペ 1:17)。

L.L. Legters 博士は「聖霊に満たされる生活」という著作において「聖霊は三位一体の第三位」と言ったが、F.Wisloff 氏は「わたしは聖霊を信じる」にお



いて「聖霊は即ち三位一体の神の中で、第三位の神聖なる我である」と言った。佐治良三は「いわゆる御霊とは何か」という本の4ページに、「聖霊は明らかに神と区別さるべき独立の『人格』の存在者である」と言った。

明らかに、彼らは皆聖霊の位格の存在を認めるが、ただ三位一体の神観から離れることはできない。特に、佐治氏が聖霊を神とは別な人格の存在者とするので、その信仰に対して疑いを抱かざるを得ない。「聖霊」ということばは、聖書の何箇所にも「神の霊」とされ、神ご自身の霊であることを表明するので、なぜ神と区別のある人格の存在者と言えようか。

一、聖霊は即ち天の父の霊

天地創造のみわざに関して、創世記1章1節に神が創造主と記され、2節には神の霊が水のおもてをおおっていて、そして万物を創造されたと書いてある。

聖霊を賜る約束について、神はしばしば「わが霊」と言われた(エゼ36:27、37:14)(ヨエ2:28~29)。五旬節の日に聖霊が降った。皆が受けたのは、神の霊であり、預言者ヨエルが預言したことが成就されたとペテロは言った(使徒2:16~18)。

神がわたしたちのうちにいます証拠に対して、ヨハネ第一の手紙4章13節は、「神が御霊をわたしたちに賜ったことによって、わたしたちが神におり、神がわたしたちにいますことを知る」と言うが、3章24節は「神がわたしたちのうちにいますことは、神がわたしたちに賜った御霊によって知るのである」と言う。

主イエス曰く、「父がわたしにおり」(ヨハ10:38)、「神は霊である」(ヨハ4:24)から、父がイエスにおるとは父の霊がそのうちにおるという意味である。即ち、

イエスがバプテスマを施された時に受けた御霊は父の霊なのである(マタ 3:16、ルカ 4:18)。

パウロが言った、「すべてのものの中に働いてすべてのことをなさる神は、同じである」(I コリ 12:6)、「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起こさせ、かつ実現に至らせるのは神であって」(ピリ 2:13)、「…すべてのものの内にいます、すべてのものの父なる神は一つである」(エペ 4:6)。しかし、コリント人への第一の手紙 6 章 19 節は、人のうちに宿っているのは聖霊であると言っている。

すべての賜物は、一つの同じ御霊の働きであって、御霊は思いのままに、それらを各自に分け与えられるのであるとパウロはまた言った(I コリ 12:11,7)。ヤコブは、あらゆる良い贈り物は光の父から下って来ると思った(ヤコ 1:17)。

以上に述べた理由に基づいて、聖霊が天の父ご自身の霊であることの証明ができる。聖霊は第三位の神聖なる我ではなく、神と区別のある人格の存在者でもないことがわかる。

二、聖霊は即ちイエスの霊

使徒行伝 8 章 26 節～39 節に記載されているように、ピリポがエチオピアの宦官に福音を宣べ伝え、バプテスマを授ける為に遣わされた。ルカはこの出来事を述べる際、はじめに、「御霊がピリポに『進み寄って、あの馬車に並んで行きなさい』」と言った(29)が、終わりには、「主の霊がピリポをさらって行った」と言った(39)。ルカの神観によると、御霊はイエスの霊である。これと類似した観点は、使徒行伝 16 章にも見られる、「彼らはアジヤで御言を語ることを聖霊に禁じられた」(6)、「ビテニアに進んで行こうとしたところ、イエスの御霊がこれを許さなかった」(7)。



同じくパウロのことばであるが、ガラテヤ人への手紙4章6節は、「わたしたちの心の中に送られたのは御子の霊である」とするが、コリント人への第一の手紙6章19節では、「わたしたちのからだに宿っているのは神から受けた聖霊である」としている。コリントへの第二の手紙3章17節は、「わたしたちに自由を得させるのは、主の霊である」とするが、ローマ人への手紙8章2節では、「わたしたちを解放したのはいのちの御霊の法則である」と言うのである。

天地万物の創造に関しては、創世記1章2節で、「神の霊が水のおもてをおおっていて、そして万物が創造された」と言うが、万物はみな御子にあって造られたと使徒たちはイエスのために証したのである(ヨハ1:1、3、14、Iコリ8:6、コロ1:16~17、ヘブ1:2)。

「あなたがたのうちには、キリストからいただいた油がとどまっているので、だれにも教えてもらう必要はない。この油が、すべてのことをあなたがたに教える」(Iヨハ2:27)。この油とは、わたしたちのうちにとどまっており、すべてのことを教えてくださるので、明らかに聖霊のことを指しているのである。なぜならば、真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろうと、イエスが言われたからである(ヨハ16:13)。注意してほしいのは、ヨハネが特に、「キリストからいただいた油」と言ったところである。言い換えれば、油を象徴とする聖霊は即ちイエスの霊であることになるのである。

以上の理由に基づいて、聖霊はイエスの霊であって、第三位の神聖なる我ではないことが証明できる。

第三節 神観に対する探究



神観の問題に関しては、「ニカイアの初の議会」(Council of Nicea)を開いて以来、カトリックと一般のプロテスタントの共通の信仰は「三位一体」(Trinity)なのである。カトリックはさらに、この信条に違反する神観はすべて異端であり、拒否すべきものだと主張する。

いわゆる「三位一体」を字面の意味から見ると、「位」は即ち位格であり、「三位」は三つの位格である。父と子と御霊とはそれぞれ位格があり、各自は独立した存在で、分けることができるという。この観念は、イエスが昇天する前に弟子たちに命令されたことば、「父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し…」(マタ 28:19)に由来したものである。そのほかに、彼らは何箇所かの聖句を根拠にした。①イエスがバプテスマを受けたとき、神の御霊がその上に下ってきた。また天から声があつて言った、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」(マタ 3:16~17)。②イエスが世におられるとき、よく天の父に祈られた(マタ 11:25~26、14:23、26:39、42、44)、のみならず、弟子たちのためにもよく祈られた(ルカ 22:32、ヨハ 17:9~11、20~23)。③イエス自ら言われた、「父はわたしより大きいかたである」(ヨハ 14:28)。④ステパノが迫害を受けたとき、彼は聖霊に満たされて、天を見つめていると、神の栄光が現れ、イエスが神の右に立っておられるのが見えた(使徒 7:55~56)。⑤イエスは更にすぐれた契約の保証となり、永遠に生きて、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さる(ロマ 8:34、へブ 7:22~25、I ヨハ 2:1)。

そうだとすれば、神は「三位」おられるのか？もちろんそうではない。三位一体を論説する者は神が三位おられるとは思わない。彼らが言うには、それは「一体」となり、一つなのである(ヨハ 10:30、14:9~10、17:21~22)。彼らが一歩進んで解釈した三位一体の神観は「一つの神で三つの身」(Three Persons In One God)という。この「三つの身」とは即ち父と子と聖霊である。しかし、父と子と聖霊は同一の神性であり、同じ地位にあり、同じ栄があり、同じ無限の



権勢があり、同じように永久に変わらず、同じように始めもなく、終わりもないので、「一つの神」なのである。

以上の理由を根拠にして、三位一体説を論じる者は神が三人おられると認めないにしても、聖書の何箇所にも父と子と聖霊と三つの位格が同時に存在すると書かれている事実は否定できない。それで、「三位一体」という神学名詞を作り出して、神の唯一性及び三つの位格の独立性を概括しようとしたのである。

ありがたいのは、「三位一体」にせよ、「一つの神で三つの身」にせよ、いずれもその中身は「唯一の神」という観念があることである。しかし、「三位」と「一体」と「三つの身」ということばに語弊があり、誤解しやすいため、そこがわたしたちには賛成できないゆえんなのである。

そればかりではなく、「三位一体」の神観を解釈する時、彼らがよく言っているのは、「一人目は父なる神、二人目は子なる神、三人目は聖霊なる神」である。三位は三人の神ではなく、父と子と聖霊とそれぞれ人格があると言うにも拘らず、なぜ一人目の神、二人目の神、三人目の神と言うのであろうか？彼らはまた言った、「御子は永遠に生まれられる」。「永遠に生まれられるのは永遠の矛盾」とわたしたちは考える。その道理は簡単なものである。いわゆる「永遠」とは、始めもなく終わりもない。しかし、「生まれる」に始めがある。また、彼らが「一体」と言ったのは、父と子と聖霊との唯一性を強調するためである。実は、「一体」は父と子と聖霊との関係の親密性を表すが、その唯一性を表すことができない。「夫婦が一体となる」(創 2:24)とは、夫婦の関係の親密性を言っていると誰もが知っている。しかし、夫婦はあくまでも二人で、一人ではない。考えてみれば、どうしてこの「三位一体」の神観に対して心服することができようか。



神観に対する概念について、わたしたちは三つの要点に重点を置くべきだと思われる。即ち、①聖書の主題、②霊の内の一致、③聖霊は時間と空間を超えることにある。

一、聖書の主題

聖書の主題は「神の救い」にある。旧約は救いの計画であれば、新約は救いの実現である。この重点をよく把握すれば、神観を理解するのにとても役に立つのである。

救いの計画を実現するため、マリヤは聖霊によって身重になり、生まれた子はイエスであった。彼は全世界の救い主であり、おのれの民をそのもろもろの罪から救われる方である(マタ 1:18~25、ルカ 2:8~11)。聖霊は神の霊(Iヨハ 3:24)なので、イエスは元々大能の神、とこしえの父(イザ 9:6、ロマ 9:5)である。イエスの降誕は神が肉において現れられたのである(Iテモ 3:16、ヨハ 1:1、14)。

救いを全うするために、神は肉において現れたのみならず、十字架につけられ、苦痛を極め(詩 129:3、22:13~18、マタ 27:26~50)、しかも死よりよみがえられた。キリストはわたしたちの罪過のため死に渡され、わたしたちが義とされるためよみがえられた(ロマ 4:25、IIコリ 5:21)。キリストの死また復活によって、彼は同時に神の正義と愛を満足させられた。ゆえに、神の選ばれた者をだれも訴えることが出来ず、だれも罪に定めることはできないのであろう(ロマ 5:6~10、8:33~34)。

但し、いまだに神の救いは完成されていないのである(ロマ 8:23、エペ 1:14、4:30)。神の経綸によって、キリストが再臨され、死人がよみがえり、罪人がさばかれ、義人が引き上げられて、はじめて救いが完成されるのである(ヨハ 5:28



～29、1テサ 4:14～17)。ゆえに、昇天されたイエスは救いの御働きを続けるため、ひたすら神の右に座し、更にすぐれた契約の仲保者となり、選民のためにとりなしておられるのである(ロマ 8:34、ヘブ 7:22～25、12:22～24、Iヨハ 2:1)。

五旬節の日に聖霊が降り、弟子たち一同は聖霊に満たされ、約三千人がバプテスマを受け、教会を建てた(使徒 2:1～4、41)。これも救いの御働きを全うするためであった。なぜならば、聖霊の導きがあつてこそ、真理を悟ることができる(ヨハ 16:13)。聖霊の啓示があつてこそ、イエスが主であることを知ることができる(マタ 16:15～17、Iコリ 12:3)。聖霊の証があつてこそ、バプテスマによって罪が洗われ、義とされ、再生できる(Iヨハ 5:6～7、使徒 22:16、Iコリ 6:11、テト 3:5)。聖霊の感動があつてこそ、わたしたちは、清められ、救いを得ることに至るからである(IIテサ 2:13)。神の救いを全うするのに、聖霊はいかに重要な地位を占めておられるのであろう！

以上の重点を総括すると、キリストの降誕、死、復活、昇天して仲保者となられた、及び聖霊の降臨はすべて救いのためであることがわかる。救いが成し遂げられた後、物質の世界は滅ぼされ、もはや人を惑わすことができない。悪魔は永遠に裁かれ、二度と人を試みることができない。教会は引き上げられ、信者はもはや罪を犯すことがない。その時に、キリストは仲保者となって信者のためにとりなされることはなく、聖霊も地上にとどまって教会を建てることはされない。

これによって推察できることは、キリストが生まれる前に、救いの御働きがまだ始まっていない永遠の過去において、神は唯一であり、キリストが再臨して、救いが成し遂げられた後の永遠に続く将来において、神も唯一である。救いの期間中において、救いを成し遂げるために、神は三位に分かれられたよう

であるが、実は同じ神の御わざである。その間は、キリストの降誕より始まり、キリストの再臨で終る。

二、霊の内的一致

「霊の内的一致」は神観を理解するのに、把握すべき第二の重点である。聖書における聖霊の名称は様々である。例えば、主の霊(士 3:10)、神の御霊(マタ 3:16)、父の霊(マタ 10:20)、主の御霊(ルカ 4:18)、キリストの霊(ロマ 8:9)、イエスの御霊(使徒 16:7)、御子の霊(ガラ 4:6)などである。名前は異なるが、霊は一つである。これはいわゆる「霊の内的一致」である。はっきり言うと、「霊の内的一致」とは、父と子と聖霊という三つの霊が一致するのではなく、父と子と聖霊とが同じ一つの霊である一致なのである。

イエスはかつてご自分を指して言われた「天から下って、なお天におられる人の子のほかには、だれも天に上った人はいない」(ヨハ 3:13、別の抄本による)。この「天から下って、なお天におられる人の子」ということばは、イエスの霊と父の霊とは同じ霊であることを表している。だからこそ、主はピリポに言われた「わたしを見た者は、父を見たのである。・・・わたしが父におり、父がわたしにおられることをあなたは信じないのか」(ヨハ 14:9～10)。これは「霊の内にある一致」のもう一つの有力な説明である。

父と子と聖霊とは同じ霊であるが、イエスが人の子として生まれられてから、救いが成し遂げられるまで、父と子に大小の区別がある。それで、イエスが言われた、「父はわたしより大きいかたである」(ヨハ 14:28)。どの方面において、父は子より大きいのであろうか？次のとおりである：

第一、父の地位は子より大きい。子が父によって遣わされたので、その語るべ



011 第一章 聖霊とは何か

きことは皆父の命令に従い(ヨハ 12:49~50)、その行動も祈りも、すべて父の御旨にかなわれた(ヨハ 7:6~8、マタ 26:39)。

第二、父の力は子より大きい。故にきたる三年の福音伝道のために、子はまず荒野へ行って四十日断食して祈り、聖霊に満たされ、サタンのもろもろの試みに勝ち抜かれなければならない(ルカ 4:1~15)。御働きの最中にも、つねに祈られなければならない(マル 1:35、ルカ 5:15~16)。上からの力を求めて、授けられたわざを成し遂げられるためである(ヨハ 17:4)。子の力の源について、ペテロは証をした、「神はナザレのイエスに聖霊と力とを注がれました。このイエスは、神が共におられるので、よい働きをしながら、また悪魔に押さえつけられている人々をことごとくいやしながら、巡回されました」(使徒 10:38)。イエスの祈りはわたしたちにいい手本を示されたが、もっと大事なのは、ご自分もそれを必要とされるためであった。

第三、父の権威は子より大きい。故に子が弟子たちと別れるとき、ご自分の権威は父がお与えになったと父に祈られた(ヨハ 17:2)。これは、万物を保ち(へブ 1:3)、すべての自然現象を支配する権威である(マル 4:37~41)。ダニエルの見た幻(ダニ 7:13~14)、イエスの祈り(ヨハ 17:2)、及び昇天される前に弟子たちに言われたことば(マタ 28:18~19)によって、これもまた万民を支配する「王者」の権威と言えよう。福音が全世界に宣べ伝えられたとき、世の国はキリストの国となる(マタ 24:14、黙 11:15)。主の弟子となった万民が主に仕え、キリストが「王の王」にあるべき権威を持たれた時になると(黙 17:14、19:16)、ダニエルが見た幻もイエスの望みも完全になし遂げられるであろう。

第四、父の栄光は子より大きい。故に別れる前の祈りに、子は父に言われた、



「わたしは、わたしにさせるためにお授けになったわざをなし遂げて、地上であなたの栄光をあらわしました」(ヨハ 17:4)。御子は父の栄光の輝きである(ヘブ 1:3)。彼がなされたすべてのこと、即ち病を癒され、悪魔を追い出され、死人をよみがえさせられ、十字架につけられ、復活されたことなどは、皆神の栄光のためであった(ルカ 17:15～18、ヨハ 9:1～3、11:3～4、40、13:31～32、17:1、エペ 1:20)。父が定められた御旨は、イエスが先にいばらの冠をかぶり、すべての人のために死を味わい、よみがえり、天にのぼられてから、はじめて栄光の冠を授けられ、最高のほまれを受けられることである(マタ 27:29、ルカ 24:26、ヨハ 7:39、ヘブ 2:9、ピリ 2:8～11)。

第五、父は子より知っておられる。子が語られたのは、皆父の命令に従うものである(ヨハ 12:49～50)。子は父が教えられたままを話される(ヨハ 8:28_)。ゆえに、イエスは終わりの日について語られたが、すべての前兆が次々と起こるのを見たならば、人の子が戸口まで近づいていると知りなさいと言われた。しかし、ご再臨のその日、その時について、イエスは明らかに示された、「だれも知らない。天の御使いたちも、また子も知らない、ただ父だけが知っておられる」(マタ 24:33、36)。なるほど、キリストが再臨される日は重大な機密で、父の指示を受ける前に、子も予測できないのである。そればかりか、いつどこへ行くのか父の指示がなければ、イエスも知られていないのである(ヨハ 7:3～10)。これで、父が知っておられるのは無限で、子には制限がある、子が知っておられるものは、すべて父の指示によることがわかる。

以上の陳述を総括すると、父の地位、力、権威、栄光ならびにご存知のことなどは子より大きい、父の霊と子の霊は一つなのである。これはいわゆる「霊の内にある一致」の奥深いところであろう。



三、聖霊は時間と空間を超越する

「聖霊は時間と空間を超越する」——聖霊は時間と空間とに制限されないことは神観を解き明かす第三の重点である。もしこの重点を把握して、物質的概念を捨てるならば、神観に対して正確な認識を持つことができるのであろう。

周知のとおり、物質は時間と空間の制限があり、同じものが同時に二つ以上の空間に存在することはあり得ない。しかし、聖霊は時間と空間を超えて、宇宙に満ちておられる（詩 139 : 7~10、エレ 23 : 23~24）。「宇」（天地四方）は無限の空間であり、「宙」（古往今来）は無限の時間ということである。

イエスが肉体となって世に来られたとき、時間と空間に制限されて、死なれる前に同時に違った場所に現れられた記載は福音書のどこにもない。しかし、死からよみがえり、霊の体に変わられたイエスはもはや時間と空間に制限されないので、いきなり弟子の前に現れたり、また突然消えたり（ルカ 24:36、31）、戸を叩かずに弟子たちのいる場所に入ったりした（ヨハ 20:19、26）。肉体のイエスと霊の体に変わられたイエスに、それほど明白な区別があったのは、物質は時間と空間の制限を受けるが、神の霊あるいはイエスの霊の体は時間と空間を超越されるからである。

聖霊は物質と異なって、時間と空間を超越し、しかも父と子の霊及び聖霊は霊の内に一致する。それゆえに、マリヤに臨んで身重にならせて、肉において現われられた（マタ 1:18、ルカ 1:35、ヨハ 1:14、I テモ 3:16）。そして、イエスがバプテスマを受けると同時に神の御霊の彼の上により、また天から話しかけて来られた（マタ 3:16~17）。神は同一の時間に天から降りて来られ、地上において人の子となって、「天におられて」（註 : the Son of Man who is in heaven）（ヨハ 3:13）、すべての物を統べ治められる（詩 103:19）。

経験から教えられることであるが、聖霊を受けた百人の信者が同じ時間に百の空間で祈ると、やはり皆聖霊に満たされて、異言を語る。しかし、わたしはそれで百の聖霊のことと断定できず、またおのおの受けた聖霊は百分の一の聖霊だとも言い切れない。なぜならば、「御霊は一つ」（I コリ 12:4、エペ 4:4）、「わたしたちは、皆『一つの御霊』によって…皆『一つの御霊』を飲んだ」（I コリ 12:13）と聖書に書いてあるからである。一つの御霊はわたしのうちであり、あなたのうちであり、また彼のうちにあるのである。

以上の論点を総括すると、聖霊は時空を超越されるし、父と子と聖霊は「霊の内に一致する」ので、肉体となられた一方、天地に充滿されることもできる。また、わたしとあなたの内にありながら、すべての人の内にもあられるということになる。

「三位一体」論者の根本的な間違いは、物質的な概念をもって神観を理解しようとして、聖霊の「唯一性」を数量化するところにある。唯一神観を主張する者が、もし父と子と聖霊が霊の内に一致することを説明するために、イエスは聖霊の「一部分」が世に来られたと言う、もしくはわたしたちおのおの受けたのは聖霊の「一部分」と言うなら、やはり三位一体論者の物質的概念を離れず、いつまでも唯一神観の奥義を悟ることができないのである。

本教会の伝統信仰は「唯一神観」であるので、言外の意はほかの神観が「多神論」のようである。

実は、「三位一体」の概念も唯一神観に基づくが、ただ筋道が通らないため、解釈に少し矛盾が生じた。それ以外に、第三世紀に興じて、キリスト教界で公認の最大の異端である「神格唯一説」（Monarchianism）も唯一神観であるが、その論説に手抜かりが多く、こじつけることができないので、本教会が受け入



れられるものではない。

そのため、本教会の唯一神観を「唯一神霊一神論」と名づけて、父の霊、子の霊、聖霊が同じ霊であることを表すべきだと個人的に考える。なぜならば、肉体となった「子」は、復活し、昇天し、「仲保者」となられた。そして、「聖霊」を降して教会を建てられた。それは同じ神の業であり、神の救いの恵みを成し遂げるためにあったからである。

第四節 いくつかの質問

三位一体論者はよく次のいくつかの質問を持って彼らの見方を支持する。しかし、もし以上の三つの重点が理解できれば、少し考えるだけで、これらの質問を自然に解くことができるであろう。

一、父と子と聖霊との呼称

「父」とは神と人との間に父子関係があることを表す(ルカ 3:38、エペ 4:6)。彼はたましいの父で、肉親の父と異なる(ヘブ 12:9)。現れられた順序によると、彼はイエス・キリストの元であり(ヨハ 3:2、17、7:29)、父と呼べる(ヨハ 3:16、マタ 11:25~27、ヨハ 17:1)。

「子」はもともと「父」であり(ヨハ 14:9)、父とは一つなので(ヨハ 10:30)、世の人を救うために肉において現れられた(ヨハ 1:14、マタ 1:18~21、I テモ 3:16)。ゆえに、イエスを見る者は、父を見るのである。宇宙にもう一人の父がおられることはない(ヨハ 1:18、12:45、14:9~11)。イエス・キリストは「子」の身分で世に来られた以上、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえっておのれをむなしうして僕のかたちをとり、おのれを低くして、十字架の死に至るまで従順であられた。復活して昇天された後、神は彼を高く引き上



げ、すべての名にまさる名を彼に賜った。それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものが、ひざをかがめるためである（ピリ 2:6～10）。

「聖霊」は神の霊であり、「父」と「子」とは一つであるが、三位一体の神の中にある「第三位の神聖なる我」ではない。なぜならば、聖霊に関する聖書の記載は、「神の御霊」（マタ 3:16）、「父の霊」（マタ 10:20）、「御子の霊」（ガラ 4:6）などの呼称があっても、やはり同一の神なのである。

二、神は「われわれ」と自称された

「神はまた言われた、『われわれのかたちになれわれにかたどって人を造り…』」（創 1:26）。

三位一体論者の中にはこの聖句に基づいて、創造主は「多数」の神であることを主張する者もいる。しかし、わたしたちはそれを否定する。理由は次のとおりである：

第一、「われわれ」は古代の君の自称することばであり、国家の元首であること、また絶対的な権威を持つことを表すものである。そのことばは法律であり、全国を服従させるものである。彼の命令はおきてであり、だれも自主的に決められないものである。例えば、伝統的にカトリックの法皇は「われわれ」（We）と自称する、それはその絶対的な権威を表すことばである。それはカトリックが法皇を地上のキリストとし、その地位が全世界のカトリック信者を超越するとしたからである。しかし、法皇ヨハネ二十三世が即位してから、カトリックの伝統を守るいくつかの観念や制度を革新した。その中の一つは、法皇はもはや「われわれ」（We）と自称せず、「私」（I）と改めたことである。「私」と改称したのは、あえて「地上のキリスト」の身分とすることができないからである。



個人の権威がなく、多数の人の意見こそ最高の権威とした表現である。彼はカトリック史上最も進んで、民主思想の深い法皇とされた。その任期は 1958 年 11 月 4 日から 1963 年 6 月 4 日までである。神は天地の支配者であり、王の王、主の主であり(使徒 17:24、I テモ 6:15、黙 19:16)、きわめて尊く、すべてのものの上にあられる(エペ 4:6)。ゆえに、神が「われわれ」と自称されると、それは「多数」の神という意味ではなく、彼には絶対的な権威があり、すべての被造物がその統治に服従すべきことの表現なのである(詩 103:19~22)。

第二、同じ人を造ることについて、27 節は「かれ」のかたちと言って、複数とはなっていない。もし 26 節にある「われわれ」を「複数」と解釈して、「三位一体」の論説を支持するならば、なぜ 27 節は「彼等」となっていないのか。というのは、26 節は神ご自身のことばであり、「われわれ」をもって神の絶対権威を表されるが、27 節はモーセが言ったもので、もちろん複数とすると、「多数」の神と誤解されてしまうからである。

第三、ユダヤ人の神観は「唯一の神」であり、「三位一体」ではない。もし 26 節の「われわれ」を「複数」と解釈すれば、なぜユダヤ人は「唯一神観」を守りとおすが、「三位一体」を認めないのか？これで 26 節の「われわれ」をユダヤ人は「単数」と考えていることが理解できるであろう。

三、父と子と聖霊が同時に現れられた

「イエスはバプテスマを受けるとすぐ、水から上がられた。すると、見よ、天が開け、神の御霊がはどのように自分の上から下ってくるのを、ごらんになった。また天から声があつて言った、『これはわたしの愛する子、わたしの心にかなる者である』」(マタ 3:16~17)。

この聖句に、父と子と聖霊が同時に現れられるように見えるので、神が三位



だと思われる。実は、父と子と聖霊とは霊の内に一致であり、神はとこしえまで唯一の神である。彼の霊は一つであるが、世に来て子となったり、天から聖霊を賜ったり、また子に声を掛けたりすることができる。それだからこそ、聖霊を降す約束について、イエスは聖霊を賜る「父」と、父に祈る「子」及び遣わされた「聖霊」を、同時に別々に述べられることができたのである。イエス曰く「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう」（ヨハ 14:16）。

ご自分に関してイエスはきわめて奥深く言われた、「天から下って、なお天におられる人の子のほかには、だれも天に上った者はない」（ヨハ 3:13、別の抄本による）。彼がまだ世におられるとき、依然として栄えの天国にもおられる。同じ時間にここにもおられれば、そこにもおられる。神は霊であるから（ヨハ 4:24）、時間と空間に制限される人間のように、ほかのところへ行こうとすると、もとのところを離れなければならない状況とは異なるのである。これによってイエスが世に来られたからと言って、すでに天におられないとはいえない。また、今、聖霊は地上で御働きをしておられるから、天におられないともいえないのであろう。

四、パウロの祝福

「主イエス・キリストの恵みと、神の愛と、聖霊の交わりとが、あなたがた一同と共にあるように」（Ⅱコリ 13:13）。

この祝福は神が人に対する関係と御働きを最もほどよく説明されたものである。神は愛である（Ⅰヨハ 4:8）。そのひとり子を賜って、世の人のために命まで捨てられたことによって、神はその愛を示されたのである（ヨハ 3:16、ロマ 5:8）。言は肉体となり、イエスは恵みとまこととに満ちておられた（ヨハ 1:14）。彼はわたしたちの罪をご自分の身に背負われて（Ⅰペテ 2:24）、無償にわたし



たちを救われたのである(テト 3:5)。聖霊の働きの特徴は人を感動させることにある。聖霊によって、わたしたちは、「イエスは主である」と言うことができる(I コリ 12:3)。さらに、聖霊によって、わたしたちは清められ、救を得るのである(II テサ 2:13)。

ゆえに、この祝福は父と子と聖霊の働きの特徴を説明するが、三位一体の論拠にはならないのである。

五、イエスは神の右におられる

「主イエスは彼らに語り終わってから、天にあげられ、神の右にすわられた」(マル 16:19)。

「ステパノは聖霊に満たされて、天を見つめていると、神の栄光が現れ、イエスが神の右に立っておられるのが見えた。そこで、彼は、『ああ、天が開けて、人の子が神の右に立っておいでになるのが見える』と言った」(使徒 7:55~56)。

「だれが、わたしたちを罪に定めるのか。キリスト・イエスは死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである」(ロマ 8:34)。

上記の如く、イエス・キリストは天にあげられ、「神の右にすわられた」、「神の右に立っておられる」、もしくは「神の右に座し」とあるが、これに類似した記載は、聖書の別箇所にもある(エペ 1:20、コロ 3:1、ヘブ 10:12、I ペテ 3:22)。

三位一体論者は、これを「父」と「子」とが並存される証拠としている。しかも、この状況において地上には「聖霊」が依然として教会を治めておられるのである。それにしても、それを三位一体の根拠にしてはならない。なぜならば、救いの業が未完成なので、キリストは大祭司の務を続け(ヘブ 8:1、7:22~25)、聖霊が地上において教会を治める務めも、選民があがなわれる日まで続け



るのである(ロマ 8:23、エペ 1:14、4:30)。

第五節 聖書にかなう神観

五旬節の日に聖霊が降った後、使徒たちは知恵と啓示の霊の導きによって、神観が明白になり、一致したので、始終ぼやけた言い方がなく、互いに食い違ったところもなかった。残念ながら、西暦 325 年に神観を確立するために「三位一体」説を定めた後、かえって正しいように見えて、実は間違っている観念を教会に持ち込んでしまったのである。

次に聖書にかなう神観を述べよう：

一、イエスの御名によってバプテスマを施す

天に上げられる前に、イエスは弟子たちに命じられた、「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し」(マタ 28:19)。しかし、後日に弟子たちはイエス・キリストの名によって(使徒 2:38、10:48)、或いはイエスの名によって(使徒 8:16、19:5)バプテスマを受けさせたが、父と子と聖霊との名にはよらなかった。父と子と聖霊とは名ではなく、ただの呼称である。父に父の名があり、子に子の名があり、聖霊にも聖霊の名があると彼らは知っていたからである。

「名」という文字を見ると、原文も英訳も単数となっている。これは、父と子と聖霊とは唯一の神であり、その名は唯一で、即ち「イエス」であることを意味づける。父の名についてであるが、ヨハネによる福音書 17 章 12 節は「あなたからいただいた御名によって彼らを守り」とあるが、文語訳は「我(われ)かれらと偕(とも)にをる間(あひだ)、われに賜(たま)ひたる汝(なんじ)の御名の中(うち)に彼らを守り」となっている。(英訳は「I kept them in thy



name, which thou hast given me.」となっている。) これで父の名は「イエス」であることがわかる。子の名についてであるが、言は肉体となって救い主となり、言は神である(ヨハ 1:14、1)。イエスの降誕は神が肉において現れられたのである(1テモ 3:16)。子と父とは一つである(ヨハ 10:30)。子を見た者は父を見たのである。子が父におり、父が子におられる(ヨハ 14:8~10)。ゆえに、子の名は「イエス」なのである。そして、聖霊の名について述べるが、聖霊は父の霊であり(マタ 10:20)、神の御霊(マタ 3:16)、御子の霊(ガラ 4:6)、キリストの霊(ロマ 8:9)、またイエスの御霊であるので(使徒 16:7)、聖霊の名も「イエス」なのである。

イエスが言われた「父と子と聖霊との名」という本来の意味を使徒たちはよく知っていたので、イエス・キリストの名(使徒 2:28、10:48)、もしくは主イエスの名によってバプテスマを施したのは(使徒 8:16、19:5)、主の命令に背いたのではなく、逆にもっと正確に明白に御旨を守ることになったのではないか?

二、アナニヤの欺き

教会の初期には、「互いに有無を相通ずる」生活をしていた。ひとりびとりは地所や家屋を売った代金を持ってきて、使徒たちの足の前に置いた。そして、使徒たちはそれぞれの必要に応じて、だれにでも分け与えた。だれひとりその持ち物を自分のものだと主張する者がなく、いっさいの物を共有にしていた(使徒 4:32~35)。教会は一家族のようであった。その時、アナニヤも人に負けずに、資産を売った代金を使徒たちの足のもとに置いたが、下心があって、一部だけを持ってきたのである(使徒 5:1~2)。

ペテロは、聖霊の啓示によって、その心を見透かしたので、責めて言った、「アナニヤよ、どうしてあなたは、自分の心をサタンに奪われて、聖霊を欺き、地所の代金をごまかしたのか。…あなたは人を欺いたのではなくて、神を欺い



たのだ」。三時間ばかりたってから、彼の妻が入ってきた。そこで、ペテロはまた責めて言った、「あなたがたふたりが心を合わせて主の御霊を試みるとは、何事であるか」（使徒 5:3～11）。同じことであるが、3 節は「『聖霊』を欺き」となり、4 節は「『神』を欺いた」となり、9 節は「『主の御霊』を試みる」となっている。明らかに、父と子と聖霊とは位格にまったく差別がないとペテロはわかっていたので、異なった呼称を混用したわけであろう。

三、聖霊の注ぎ

「しかし、神の御霊があなたがたの内に宿っているなら、あなたがたは肉におけるのではなく、霊におるのである。もし、キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではない」（ロマ 8:9）。

この聖句において、同じ聖霊が内に宿ることを述べているが、パウロは「神の御霊」、「霊」、「キリストの霊」と三つの異なった呼称を混用した。呼称が違っても、同じ霊である意味が隠されている。それを三つの霊がわたしたちの内に宿っておられると考えてはならない。ゆえに、10 節になると、「神の御霊」、「聖霊」など呼称を混用せずに、ただ「キリストがあなたがたの内におられる」と言った。即ち聖霊はキリストの霊、また神の霊なのである。

パウロの陳述と前項にあるペテロの陳述を比較してみると、双方は実に同工異曲の妙があるのである。

四、力ある代弁者

イエスは後日に必ず役人たちに捕らえられることを前もって弟子たちに示され、そして何をどう言おうかと心配しないがよいと命じられた。イエスがこのように命じられた理由は、次のとおりである。マタイによる福音書 10 章 20 節は「語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中であって語る父の霊であ



る」と書いてあるが、ほかの三か所は「語る者はあなたがた自身ではなくて、聖霊である」（マル 13:11）、「言うべきことは、聖霊がその時に教えてくださるからである」（ルカ 12:12）、「あなたの反対者のだれもが抗弁も否定もできないような言葉と知恵とを、わたしが授けるから」（ルカ 21:15）と書いてある。

同一の事であるが、「父の霊」と言ったり、「聖霊」と言ったり、もしくは「わたし」キリストと言ったりして、まさに難解である。実は力ある代弁者は一人しかおられなく、即ち「聖霊」なのである。聖書がこのように記したのは、聖霊は父の霊であり、また、イエス・キリストの霊でもあるからである。

五、天地創造の主

天地創造の過程について、創世記 1 章 1 節は神が創造主だと言い、2 節では神の霊（聖霊）が水のおもてをおおっていて、万物がそれによって造られたと言う。だが、新約聖書は所々に、イエス・キリストは創造主であり、彼は万物よりも先にあり、万物は彼にあって成り立っていると記載されている（ヨハ 1:1、3、14、I コリ 8:6、コロ 1:15～17、ヘブ 1:2）。

イエス・キリストが創造主である根拠に関しては、新約聖書のみならず、箴言 8 章 22～30 節にも記されている。そこにソロモンは擬人法の綴り方を用いて、「知恵」の源をもって「キリスト」の先在性を述べた。彼が言うには、「知恵」は自証して言われた、「主が昔そのわざをなし始められるとき、そのわざの初めとして、わたしを造られた。いにしえ、地のなかった時、初めに、わたしは立てられた。…わたしは、そのかたわらにあって、名匠となり、日々に喜び…」。

創造の過程を見ると、父と子と聖霊とは確かに同一の神であり、三位の神々ではないことがわかる。



神の存在について、イエスはご自身を「ただひとりの神」(ヨハ 5:44)、あるいは「唯一の、まことの神」(ヨハ 17:3)と言われた。主の弟子もイエスを「唯一の神」(I テモ 1:17)、「唯一の知恵深き神」(ロマ 16:27)、「救主なる唯一の神」(ユダ 25)、「唯一の神のほかには神がない」(I コリ 8:4)などと言って、枚挙にいとまがない。いわゆる「三位一体説」は聖書にある言葉ではなく、人が世の知恵によって定めたもので、紛らわしい名詞である。願わくは、知恵と啓示の霊の導きによって、わたしたちが聖書にかなう神観を悟ることができるように。

問題

- 一、いかにして聖霊の位格を証明するか。
- 二、「三位一体説」はいかにしてできたか。
- 三、「三位一体説」の誤ったところはどこにあるか。
- 四、なぜ神は「われわれ」と自称されるか。
- 五、イエスがバプテスマを受けた時、父と子と聖霊とが同時に現れられたことをどう解釈するか。
- 六、ステパノが臨終の時、なぜイエスが神の右に立っておられるのを見たか。
- 七、いかにして父と子と聖霊とは同一の神であることを証明するか。



第二章 聖霊の名称

聖霊に関して、聖書には各種の異なった名称がある。これらの名称によって、それぞれの違った特性を見ることができる。

第一節 聖霊

「聖霊」と「御霊」とは最もよく使われる神の霊の名称である。聖書における「聖霊」ということばは百九十九回出ている。

神の本質について言えば、神は霊であるので(ヨハ 4:24)、聖霊はその霊である。神は聖なる者(レビ 11:44、ヨハ 17:11)である以上、神の霊も清くあるべきである。だから、ネブカデネザル王は聖霊を「聖なる神の霊」と呼び(ダニ 4:8、9、18)、パウロは「聖なる霊」と言った(ロマ 1:4)。

御働きについて言えば、聖霊がわたしたちの内に宿っておられる主要な役目は、わたしたちを清めさせ、救いを得させるためである(ロマ 15:16、Ⅱテサ 2:13、Ⅰペテ 1:2)。私達は聖霊の導きに従えば、必ず罪に対抗する力が加わり、決して肉の欲を満たすことはない(ガラ 5:16)。

第二節 真理の聖霊

イエスは真理であり(ヨハ 14:6)、聖霊は彼の霊である(Ⅱコリ 3:17)。イエスは真理である以上、彼の霊も真理であるべき。だから、イエスはよく「真理の御霊」ということばをもって、聖霊を論じられた(ヨハ 14:17、15:26、16:13)。



そのほかに、「迷いの霊」と区別するため、ヨハネはそれを「真理の霊」（Iヨハ4:6）と呼び、「御霊は真理である」（Iヨハ5:7）と証明した。

使命について言えば、聖霊が降ったのはイエスについて証をするためである（ヨハ15:26）。イエスは真理である以上、真理について証をするのは聖霊の使命なのである。

働きについて言えば、御霊が来る時には、あらゆる真理に導いてくださり、来るべき事を知らせてくださる（ヨハ16:13）。真理は封じた書物のようなもので、聖霊によらなければ、だれも悟ることはできない（イザ29:11~12、黙5:1~5、Iコリ2:11）。

第三節 助け主

「助け主」ということばのギリシャ原文は「Paracletos」である。元々「Para」は「そばにある」という意で、「cletos」は「呼ばれてきた者」という意である。二文字を合わせると、「かたわらに立って助けるように呼ばれた者」という意味になる。日本語の文語訳と英訳は「弁護者」（Comforter）となっているが、口語訳とギリシャ語英語対照本は「助け主」（Helper）となっている。この言葉は聖書の四箇所に出ているが、皆ヨハネによる福音書に載っている（14:16、26、15:26、16:7）。はじめて聖書に出たとき、中国語和合訳本の訳者はわざわざ「或いは訓慰師と訳す」と註をつけて、「戒める」と「慰める」との意味が含まれていることを表したのである。

英訳で、まず「助け主」を「安慰者」（Comforter）と訳したのは、John Wycliffe氏である。この英語の今の使い方と、十四世紀末にあった意味とを比較すれば、だいぶ違っている。そのときの意味としては、まさにラテン語の「Advocatus」



から転化した意味と同じように、その字義は「力」なのである。当初、John Wycliffe 氏の心の中で、この字の意味は「力を加える者」と「助ける者」であった。それで、彼はピリピ人への手紙 4 章 13 節を「わたしを強くしてくださる方によって、何事でもすることができる」と訳したのである。その後、元の字義がだんだんなくなり、今はほとんど悩むときの慰めという意味と結合している。しかし、イエスが弟子たちに言われた、「わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない」ということばの中に(ヨハ 14:18)、悩むときの慰めという意味がないわけではないと、わたしたちは正確に推断できるであろう。

事実から教えられるが、文字の定義は時間が経つに連れて変わる場合がよくある。だから、字面ばかり拘るというつまらない争いを止め、むしろ聖書の背景に目を留めよう。「助け主」は元々ヨハネによる福音書 14 章から 16 章までにある聖霊の名称である。この三章の背景を研究して、そしてイエスがいかにかそのことばを発されたかをよく考えるのは、その定義を理解する最もよい方法であろう。その時、弟子たちはすでにイエスと最後の晩餐を取った。朝夕ずっと一緒だった主が離れていかれると考えると、思わず心から形容しがたい憂いが浮かんでくるであろう。イエスが離れられた後、だれが教え、導き、助けてくださるのか、だれが迫害者に抵抗できる力をつけてくださるのかと彼らは考えたであろう。

弟子たちが心を騒がせて、おじけることのないように、イエスは四回連続で「助け主」ということばを用いて聖霊が降る約束をされた。一回目に彼はつけ加えて言われた、「わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたのところへ帰ってくる」(ヨハ 14:16~18)、そこに「慰める」の意味が含まれる。二回目に彼は言われた、「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされた聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起こさせるであろう。…あなたがたは心を騒が



せるな、またおじけるな」(ヨハ 14:26~27)。そこに「教える」、「慰める」、「助ける」と「力をつける」などの意味が含まれる。三回目にイエスは言われた、「助け主…が下る時、それはわたしについてあかしをするであろう」。そこに「弁護する」の意味が含まれる。四回目に彼は言われた、「かえって、わたしがこれらのことを言ったために、あなたがたの心は憂いで満たされている。しかし、わたしはほんとうのことをあなたがたに言うが、わたしが去っていくことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去っていかなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう」(ヨハ 16:6~7)。そこに一回目と二回目と同じく「慰める」の意味が含まれる。

以上に述べた聖書の背景によれば、「助け主」ということばに「慰める」、「教える」、「助ける」、「力をつける」と「弁護する」などの意味が含まれていることがわかる。これらの意味は、即ち各訳本が表現しようとするものである。慰めるについて、使徒行伝 9 章 31 節に書いてあるように、聖霊は励ます使命があられる。教えるについて、聖霊は確かに弟子たちにいろいろなことを悟らせられた(Iヨハ 2:27)。助けると力づけるについて、聖霊は弱くて臆病な弟子たちを強くさせ、大胆に真理のために証をさせられた(使徒 2:4, 14~36, 4:19~20, 31)。弁護するについて、聖霊はキリストの証をされるだけでなく、弟子たちが裁判に勝つのに役に立たれたのである(マル 13:11、ルカ 12:11~12)。

ヨハネの第一の手紙 2 章 1 節にある「助け主」は英訳で、「Advocate」となっている。ギリシャ原語は「Paracletos」であるが、ラテン語の「弁護者」(Advocatus)と意味が一緒である。同じ「助けるように呼ばれる」の意味であり、特にそれは原告や裁判官に対して言うことばであるので、「神の弁護師」と訳して、そのことばに裁判所の性質を深く含ませた者もいる。

古代に、人々は一人か何人か力のある友人と一緒に裁判所に出る習慣があっ



た。このような友人は、ギリシャ語なら、「Paracletos」であるが、ラテン語なら「Advocatus」となる。彼等は自ら裁判所に出て、友人の案件を自分の事にして、知恵をもって友人のために弁解し、愛をもって助ける。これは即ちイエスが世におられる間の弟子との関係であった。だから、弟子たちはイエスが去って行かれるのを考えると、思わず慌てはじめたのである。そこで、イエスは天に上げられた後、彼らの慰める者、教える者、助ける者、力づける者、弁護する者として、「助け主」を遣わして彼らの憂いと臆病を取り除く約束をされたのである。

しかし、天に引き上げられた後のイエスは、ひたすら天にこの務めを持ち続けておられる（Iヨハ2:1）。彼は弟子のために弁護し、祈り、昼夜民を訴える悪魔に抵抗しておられる（ロマ8:33~34、黙12:10、ヘブ7:22~25）。それで、昇天されたキリストの仕事の範囲は天にあるのに対して、遣わされた助け主の仕事の範囲は地上にあると言えよう。キリストは天においてその弁護者の務めを果たしておられるように、助け主もまた同じように地上においてその弁護者の務めを果たしておられる。パウロが言った「御霊もまた同じように、弱いわたしたちを助けて下さる。なぜなら、わたしたちはどう祈ったらよいかかわからないが、御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さるからである」（ロマ8:26~27）。これを根拠にして、助け主の仕事の範囲は特に地上にあるのであるが、天における役目もあると言えよう。これと類似した情況は、キリストが世におられる時にもあったのである（ルカ22:31~32、ヨハ17:9~10、15、17、20）。

キリストが世におられる時、その居場所は大いに肉体に制限されるので、同じ時間は同じ場所しかおられず、ここにまたそこにおられることはできなかった。しかも、弟子たちが彼からいただいた助け、力、教え、慰めなどは外的で、一時的であった。これに比べて、助け主は霊であるので、肉体の制限は完全に



なく、どこにでもおられる。また、彼が来れば、弟子たちの心にとどまるので、必要に応じて、すべての問題はいつでもどこでも解決できるようになる。五旬節の日に聖霊が降り、弟子たちはたくさんの貴重な体験をした後、前にイエスが言われた「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ」(ヨハ 16:7)という理解しにくいことばの実際の意味をやっと悟ったのである。

第四節 知恵と啓示との霊

聖霊は「知恵と啓示との霊」とも言われる(エペ 1:17)。人に知恵を賜り、また隠れた事や未来のことを啓示してくださるからである。

ヨセフは神の霊をもつ人で、知恵と啓示を授かった。それによって、これからエジプトに起こることを預言し、パロの夢を解き明かすことができた。彼はこれで全国のかかさと立てられた(創 41:37~41)。

ユダの部族に属するベザレルとダンの部族に属するアホリアブとに、神はその霊を満たして、知恵と悟りと知識と諸種の工作に長ぜしめ、工夫を凝して金、銀、青銅の細工をさせ、また人をおしえうる力を彼らの心に授けられた(出エジ 35:30~35)。

ヨシュアはモーセが彼の上に手を置いたので、知恵の霊に満ちた人となった。彼はモーセの後継者として、イスラエル人を率いてカナンの地に入った(申 34:9)。

ダニエルのうちに聖なる神の霊が宿っておられたので、ネブカデネザル王のために国がしばらく王を離れ去る夢を解き明かすことができた。その知恵はバビロンのすべての知者に勝った(ダニ 4:4~18, 24~27)。さらに、ベルシャザ



ル王のために、人の手の指が塗り壁に書いた文字を解き明かし、その国がもはや分かたれて、メデアとペルシャの人々に与えられる預言をした(ダニ 5:10～16、25～30)。

その他、旧約時代の預言者たちは皆知恵と啓示の霊に導かれて、素晴らしい仕事を成し遂げた。そして、啓示を受けて、キリストの苦難とそれに続く栄光(Ⅰペテ 1:10～12)と、終わりに再臨されることを前もって証明した(ユダ 14～15)。

「いったい人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれが知っているか。それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない」(Ⅰコリ 2:11)。神には、測り知れない知恵、豊かな恵みと無限の力があるので、人間がまことに彼を知ることは、まったく容易ではない。しかし、もし知恵と啓示の霊に満たされれば、その知恵、恵みと力をより深く知ることができるであろう(ロマ 11:33～34、エペ 1:17～21)。

パウロが言った、「わたしが宣べ伝えた福音は人間によるものではない。わたしは、それを人間から受けたのでも教えられたのでもなく、ただイエス・キリストの啓示によったのである」(ガラ 1:11～12)、「わたしがあなたがたのために神から賜った恵みの務めについて、あなたがたはたしかに聞いたであろう。すなわち、すでに簡単に書き送ったように、わたしは啓示によって奥義を知らされたのである。あなたがたはそれを読めば、キリストの奥義をわたしがどう理解しているかがわかる。この奥義は、いまは、御霊によって彼の聖なる使徒たちと預言者たちとに啓示されているが、前の時代には、人の子らに対して、そのように知らされてはいなかったのである」(エペ 3:2～5)。福音の奥義を悟り、絶えず進歩するには、聖霊の啓示がなければならぬことはこれでわかる。逆に、ただ人からの言い伝えによれば、それは皮袋の水のように使い切ったら無くなるのであろう(参考：創 21:14～19)。



イエスが言われた、「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しおいたことを、ことごとく思い起こさせるであろう」(ヨハ 14:26)、「わたしには、あなたがたに言うべきことがまだ多くあるが、あなたがたは今はそれに堪えられない。けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それは自分から語るのではなく、その聞くところを語り、きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう」(ヨハ 16:12~13)。これはイエスの約束であり、またパウロとほかの弟子たちが体験したことでもある(Ⅰヨハ 2:27)。

第五節 その他

聖霊の呼称は以上に述べた四種類のほかに、また次のようなものもある。

一、聖霊が神の霊であることを表すため

神の霊(マタ 3:16、ロマ 8:9、14、Ⅰコリ 2:11、3:16)、主の霊(士 3:10、サム上 10:6、列王下 2:16、イザ 11:2)、父の霊(マタ 10:20)、生ける神の霊(Ⅱコリ 3:3)、聖なる神の霊(ダニ 4:8、9、18、5:11)、主の御霊(ルカ 4:18)。

二、聖霊がイエスの霊であることを表すため

キリストの霊(ロマ 8:9、Ⅰペテ 1:11)、イエスの御霊(使徒 16:7)、イエス・キリストの霊(ピリ 1:19)、主の御霊(使徒 5:9、Ⅱコリ 3:17、18)、御子の霊(ガラ 4:6、ロマ 8:15)。

三、聖霊の尊さを表すため

霊(マタ 4:1、ルカ 2:27、ヨハ 3:5、6、8、34)、永遠の聖霊(へブ 9:14)、栄光の霊(Ⅰペテ 4:14)。



四、聖霊の働きを表すため

知恵と悟りの霊、深慮と才能の霊、主を知る知識と主を恐れる霊(イザ 11:2)、自由の霊(詩 51:12)、焼き尽くす霊(新改訳イザ 4:3~4)、恵みの御霊(ヘブ 10:29)、恵みと祈りの霊(ゼカ 12:10)。

五、聖霊の性質を表すため

審判の霊(イザ 4:3~4)、さばきの霊(イザ 28:6)、聖なる霊(ロマ 1:4)、良き御霊(ネへ 9:20)。

問題

- 一、神の霊はなぜ聖霊と言うのか。
- 二、神の霊はなぜ真理の聖霊と言うのか。
- 三、例を挙げて助け主の意味を説明せよ。
- 四、なぜイエスが昇天されたことは、世におられたことより弟子たちの益になるのか。
- 五、聖霊はなぜ知恵と啓示の霊と言うのか。
- 六、聖霊が神の霊であることを表す名称を三つ挙げて、引証の聖句を注せよ。
- 七、聖霊がイエスの霊であることを表す名称を三つ挙げて、引証の聖句を注せよ。
- 八、聖霊が尊い霊であることを表す名称を二つ挙げて、引証の聖句を注せよ。
- 九、聖霊の働きを表す名称を三つ挙げて、引証の聖句を注せよ。
- 十、聖霊の性質を表す名称を三つ挙げて、引証の聖句を注せよ。



第三章 聖霊の象徴

「象徴」というのは、具体的な事物をもって、抽象的な事物をたとえ、その意義をより明白でわかりやすくすることである。例えば、聖潔を「白い衣」(黙3:4)、自分を捨てることを「十字架」(マタ 16:24)、権威を「つえ」(出エジ4:17、20、民24:17)に譬えることなどは皆象徴の描写法である。象徴で現れる意義はしばしば文字で説明するより徹底的であるので、最も経済的な文学手段と言っても過言ではない。その理由か、神もこれをもって奥深い事物を表されることによって、わたしたちにことばで解釈しにくい真理を悟らせてくださったのであろう。

聖書の中で、神の聖霊の各品格と働きを象徴の形で表されたのは、合わせて14種の言い方がある。次のとおりである。

第一節 鳩

創世記1章2節には、「神の霊が水をおおっていた」とあり、その後、すべての万物が創造された。ヘブライ原語は「鳩が卵を覆っているよう」という意味が含まれる。日本語の「おおっていた」とは、それにとても近いと言えよう。ユダヤ人の口伝律法である「タルムード (Talmud)」は創世記1章2節を「神の霊は、鳩のように、水の上を覆っている」と述べた。これは、鳩を聖霊のシンボルとした最も原始的な記載なのである。

神が天地万物を創造される前に、地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあったが、とこしえまで生きておられる神の鳩は大地に息を与え、暖め、無



から有を呼び出された（ロマ 4:17）。聖霊はわたしたちの霊的ないのちの再生の母（ヨハ 3:5）である。聖霊が現れられる前にわたしたちはいのちがなくて、何のとりえもなかった（エゼ 37:1）。しかし、聖霊が臨まれると、わたしたちは生きた（エゼ 37:14、ガラ 5:25）。そして、聖霊は罪と死との法則からわたしたちを解放してくださった（ロマ 8:2、エゼ 37:10）。

鳩は最も純情で愛は一途であり、絶対第二の相手を追いかけない。ゆえに、ソロモンは鳩を理想の愛する者の象徴とした（雅 5:2、6:9）。聖霊はわたしたちを一途に愛し、わたしたちにも同じような期待をされる。もし、浮気をして、淫婦になったとすれば、聖霊は嫉妬の炎を燃やされるであろう（ヤコ 4:4~5）。KJV 訳：「For I am jealous over you with godly jealousy: for I have espoused you to one husband, that I may present you as a chaste virgin to Christ.」（Ⅱコリ 11:2）。

鳩は特に自分の小屋が好きで、遠くまで行っても、迷わずに飛び帰ってくる（イザ 60:8）。生ける神の教会は神の家であり（Ⅰテモ 3:15）、聖霊の家である。神の家と言える教会に、神の御霊は宿っておられる（エペ 2:19~22、Ⅰコリ 3:16）。

鳩は平和の象徴である。同じように聖霊は仲裁者となり、和解を成し遂げられた（ヨハ 16:7、Ⅰヨハ 2:1、エペ 2:14~18）。「平和」は聖霊の実の一つとパウロは言った（ガラ 5:22）。

鳩は素直な鳥であり（マタ 10:16）、聖霊の柔和な性質を象徴する。イエスはマリヤが聖霊によって身重になって生れて来られた（マタ 1:18~21）。バプテスマを受けられる時、神の御霊が鳩のようにご自分の上を下ってこられた（マタ 3:16）ので、イエスは柔和な性質を持っておられる（マタ 11:29）。「鳩のように

素直であれ」とイエスは弟子たちに命じられた（マタ 10:16）。「柔和」は聖霊の實の現れの一つとパウロは言った（ガラ 5:23）。

鳩はメッセージを伝える（創 8:8～11）。聖霊はキリストについてあかしをするために遣わされ（ヨハ 15:26）、世の人に神のメッセージを伝えられる。

鳩は燔祭の供え物として神にささげられる。清い鳥なので（レビ 1:14）、聖霊の聖潔な性質を象徴する。

ノアの時代、洪水が完全に引く前に、水面にいろいろな死体が浮かんでいたはずである。ノアが放ったからすは戻って来なかった（創 8:7）。おそらく死体をつついて食べていたであろう。からすは汚れた鳥で（レビ 11:13、15）、死体をつつく習性がある。鳩はからすと異なり、足の裏をとどめる所が見つからなかったの、帰ってきた（創 8:8～9）。清い鳥類なので、汚れたくない。同じように聖霊も二心の者に宿られない。なぜならば、彼らの心には情欲の波が打っているの、聖霊は足をとどめる乾いた地が見つからないからである（参考：ヤコ 4:8）。

ノアは三回に分けて（創 8:8～12）鳩を放った。始めは水が引いていないため、戻ってきた。それは、旧約時代の未熟な時期を預表して、約束の聖霊は人と共におられない時期であった。二回目はオリブの若葉をくわえてきた。五旬節の日に聖霊が降り、原始の教会を建て、選民を立ち帰らせられたことを預表する（詩 52:8、エレ 11:16、ロマ 11:17）。三回目は戻らなかった。後の雨である聖霊が降り、イエスが再臨されるまで、世の終わりの真の教会に宿っておられることを預表する。

第二節 露



露は植物の生命を保つ要素の一つである。特に干ばつの時期に露の潤いが欠けると、すべての植物は枯れ果てて、死んでしまう。

人の心は畑のようなもので、露の潤いがないと、何も生えてこない(エレ 4:3)。露は聖霊の象徴である。聖霊が人の心に降ると、荒れはてた荒野は良き畑に変わり、霊的ないのちを失った死者はよみがえる(イザ 26:19)。

昼間が暑ければ暑いほど夜中に露が多く溜まる。すべての植物は深夜の露が多いことで、昼間の暑さを忘れ、喜びの中で緑の葉を伸ばしてよく楽しむ。教会は迫害が激しければ激しいほど、ますます聖霊に満たされる(使徒 7:54~60、13:50~52、5:40~41)。そこで弟子たちは聖霊に満たされたことによって喜びを得、迫害された苦しみを忘れ、おのおのなえた手と弱くなっている膝とをまっすぐにして、活発で強くなっていたのである。

露は生命と愛の象徴だけではなく、美の象徴でもある。朝日が何万本もの矢のように大地を射ると何万枚もの葉っぱの上の露は、一枚ずつ金色の日射しを反射し、まるで何万粒のダイヤモンドが一斉に光り輝いているようで、何と美しいことであろう。聖霊もまた美の象徴である。その恵み、あらゆる賜物は最も良いとされ(ヤコ 1:17)、世の中のすべてのダイヤモンドより尊く、その中のいちばん美しいものよりも美しいのである。

王の王である神は、豊かな恵みがあられる。主は草の上におく露のようであり、聖霊をすべて信じる人の心に注ぎかけられる。しばしば神に逆らったイスラエル人に対しても喜んで愛され、約束の聖霊を注いでいる(箴 19:12、ホセ 14:5、エゼ 36:26~27)。ハレルヤ、主に感謝します！

第三節 雨



雨は正義と博愛の象徴であり(ホセ 10:12、マタ 5:45)、悪い者の上にも良い者の上にも降ってくる。聖霊は雨の如く、ユダヤ人と異邦人を問わず、その渇いた心を一切潤される(使徒 11:15~18、ホセ 6:3)。

干ばつで畑はからからに乾くが、雨で濡れて産物を出すことができる(レビ 26:4)。人の心は畑のようなもので、聖霊に注がれて、はじめて聖霊の豊かな実を結ぶことができる(ガラ 5:22~23、エペ 5:9)。

乾燥した地は固いので、種蒔きをする前に、雨に潤され、柔らかくなってはじめて種が根ざして芽を出す(詩 65:10)。人の心も強情なので、真理の種を蒔く前に(マル 4:14)、聖霊に注がれ、石の心が肉の心になってはじめて真理の種が根ざして芽を出し、御旨を行うのである(エゼ 36:26~27、ヤコ 1:21)。

神が聖地の農作物に賜る最も重要な雨は、秋の雨と春の雨である(申 11:14、エレ 5:24、ヤコ 5:7)。秋の雨は種を撒く前の秋に降るが、春の雨は刈り入れる前の春に降る。聖霊が降る時期も二つに分かれる。即ち五旬節に原始教会を立てた聖霊の注ぎかけ(使徒 2:1~4、41)、及び終わりの日の前に真の教会を建てた聖霊の注ぎかけである(マラ 4:5、黙 7:2~3、エペ 1:13)。

第四節 水

「わたしは、かわいた地に水を注ぎ、干からびた地に流れをそそぎ、わが霊をあなたの子らにそそぎ、わが恵みをあなたの子孫に与えるからである」(イザ 44:3)。

「イエスは女に答えて言われた、『この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがな



いばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう』（ヨハ 4:13～14）。

「祭りの終わりの大事な日に、イエスは立って、叫んで言われた、『だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおりに、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう』。これは、イエスを信じる人々が受けようとしている御霊をさして言われたのである」（ヨハ 7:37～39）。

聖書の中で水をもって聖霊の象徴とするところが一番多い。露や雨にしても、水の変体物に過ぎない。以上の三つの引証は、約束の聖霊が賜ることに関する聖句であり、水を聖霊の象徴とする最も明らかな記載である。

イスラエル人がレピデムに宿営したとき、飲む水がなかったため、モーセと争った。神は岩を打つようにとモーセに命じられた。すると、水がそれから湧き出て、イスラエル人の問題を解決した（出エジ 17:1～6）。これは水を聖霊の象徴とした初めての記載である。パウロはこの歴史の出来事の霊的な教えを説明した、「みな同じ霊の飲み物を飲んだ。すなわち、彼らについてきた霊の岩から飲んだのであるが、この岩はキリストにほかならない」（Ⅰコリ 10:4）。当時、岩から流れ出た水は、いかにイスラエル人に元気をつけ、心を喜ばせたことか。今、キリストが賜った聖霊も、わたしたちに元気をつけ、わたしたちの心を喜ばせてくださるのである。

水は汚れを清める働きがある（へブ 10:22）。おおよそ器の汚れは、水できれいに洗うことができる（レビ 11:32）。ゆえに、旧約時代、あがないをする時は大抵水で洗い清めた（出エジ 29:4、民 8:7）。聖霊も罪の汚れを洗い落とすことができる。聖霊が人の内に宿っておられるのは、人を清め、救いを得させるためである（ロマ 15:16、Ⅱテサ 2:13）。



水は世界の原動力である。特に電気化の今日において、水は欠くことのできない動力の元である。聖霊は上からの力の元であり(ルカ 24:49)、その感動と助けによって、クリスチャンの命を新たに、豊かに得させられるのである(テト 3:5、使徒 1:8、ヨハ 10:10)。

水は動力を発生させ、動力は電力を発生させ、電力は光熱を発生させる。心が聖霊に満たされると、電力のように人を熱心にさせ、ひいては主のために光を輝かし、栄光を父なる神に帰することができる(マタ 5:16、I ペテ 2:12)。

老子曰く：「江海所以能為百谷王者、以其善下之、故能為百谷王」(海が百川の王に成れるのは、それがよく百川の川下に処している為である)(道徳経六十六章)。水は下へ流れる性質があるので、水が通過した後に、低ければ低いほどそのところに水がよく溜まる。聖霊は喜んで謙虚な人の心に充満される。神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜るからである(I ペテ 5:5)。

水は柔軟な性質があるので、どんな形や大小の器にも入る。聖霊は国境、民族、階級などを問わず、無差別にすべての器に溢れるほどの喜びを与えられる(使徒 11:15~18)。器が大きければ大きいほど入る水も多い。聖霊は喜んで度量が大きい品格を持つクリスチャンに充満される。

水は動物と植物の命を保つ。聖霊はクリスチャンの命を保たれる。クリスチャンが聖霊に満たされれば、その命は更に豊かになる。罪の法則に勝つことができれば、御霊の実を結ぶこともできる(黙 22:1~2、17、ヨハ 10:10、ロマ 8:2、ガラ 5:22~23)。しかも、患難の中でも必ず聖霊が賜った喜び(ロマ 14:17、I テサ 1:6)と生ける望みに溢れるのである(ロマ 15:13)。

第五節 川



エゼキエル書 47 章 1 節～5 節に書いてあるとおり、預言者エゼキエルは神の霊に宮の戸口に帰らせられ、水が宮の敷居の下から東の方へ流れて行き、その勢いがだんだん大きくなった幻を見た。6 節～12 節には、宮から流れ出る水の働きが書かれている。「宮」はイエスを預表する(ヨハ 2:21)。宮から流れ出た「川」はイエスの所から遣わされた聖霊を象徴する(ヨハ 7:37～39、16:7)。

「この水は東の境に流れて行き、アラバに落ち下り」(8 節上半句)。「アラバ」(Arabah)とは「荒れ地」(Desert)の意味である。世の人の心は皆アラバのような荒れ地である(エレ 4:3～4)。しかし、聖霊は彼らの心を満たされる。

「その水がよどんだ海にはいると、それは清くなる」(8 節下半句)。世の人の心は皆よどんだ海のように、言葉で言い伝えられない苦しみに溢れる。平和がなければ、幸せと活気もない。しかし、聖霊が川の如く彼らに満たされると、彼らは癒され清められる(マタ 11:28、ヨハ 16:33、4:14)。

「おおよそこの川の流れる所では、もろもろの動く生き物が皆生き」(9 節上半句)。命は生活の始まりである。すべて生活している生物は、まず命がなくてはならない。命がなければ、生活はできない。生き方は命によって決められる、違う命は生き方も異なる。肉の者はただ肉の命があり、肉の生活をする。霊の者は霊的な命があるので、霊的な生き方をすることができる。聖霊は霊的な命の源である。聖霊が心に宿られると、霊的な命を得、真の信者の霊の生き方をすることができる(ロマ 8:2、ガラ 2:20、6:14、ピリ 3:8)。

「また、はなはだ多くの魚がいる。これはその水がはいると、海の水を清くするためである。この川の流れる所では、すべてのものが生きている」(9 節下半句)。魚は生き生きとした動物で、活気の命のあるクリスチャンを象徴する(マタ 4:19)。それは、崩れずたれてくじけた世の人が生きていても望みがなく、



死んだようなことと違うのである(マタ 8:21~22、エゼ 37:11、エペ 2:12)。聖霊がイエスのために証し(ヨハ 15:26)、その権威を現された時、キリストの内に選ばれた人は主に近づき(エペ 1:4~9)、海の中にいる魚のように生き生きとなる。魚が水を離れると、活気のある命を失ってしまう。同じように、木の枝が木から離れると、枯れてしまう(ヨハ 15:5~6)。聖霊に導かれてキリストに属する者はもし聖霊を離れ、肉の思いをすれば、必ず聖霊による新しい命を失ってしまうのである(ロマ 8:6)。

「すなだる者が、海のかたわらに立ち、エンゲデからエン・エグライムまで、綱を張る所となる。その魚は、大海の魚のように、その種類がはなはだ多い」(10 節)。「すなだる者」は伝道者のことを指す。「魚を捕る」とは福音伝道をして人間をとることである(マタ 4:19)。「多い種類」は各民族と各階級の人を指す(ガラ 3:28)。五旬節の日に聖霊が降り、使徒たちは聖霊に授けられた弁才によって、福音のために活気よく奉仕した後、各民族また各階級から信仰に入った者が多かった。今、後の雨である聖霊が降って、世の終わりにある真の教会を建設した後、やはり同じ現象が起こった。それで預言者エゼキエルが見た幻は、事実となったのである。

「ただし、その沢と沼とは清められないで、塩地のままで残る」(11 節)。享楽主義者は、汚れ果て、肉の欲にふけ、終始悔い改めず、救を拒絶しきった(ルカ 12:16~21、16:19、マタ 22:1~7)。彼らはそれで新しい命を得る資格もなければ(ヨハ 3:19~20、14:17)、清められる望みもないであろう(ガラ 5:16~17、Ⅱテモ 3:6~7)。

「川のかたわら、その岸のこなたかなたに、食物となる各種の木が育つ。その葉は枯れず、その実は絶えず、月ごとに新しい実がなる。これはその水が聖所から流れ出るからである。



その実は食用に供せられ、その葉は葉となる」(12節)。「木」は信者(イザ 5:7)、「実」はよい行い(ルカ 13:6~9)を譬える。信者は聖霊に満たされれば、その内なる豊かな命によって、絶えず御霊の実を結ぶことができる(ガラ 5:22~23、エペ 5:9、ピリ 1:11、黙 22:1~2)、そして、聖霊の権威にたより、病を癒したり悪霊を追い出したりして御言に伴うしるしをもって、その確かなことを示すことができるのであろう(マル 16:20、ヘブ 2:4)。

宮から流れ出る水は、だんだん多くなり、渡れる水から泳げるほどの水と変わった(4~5)。この事は聖霊の権威の無限を象徴し、預言者の預言が成就されるように、後の働きは前の働きよりも大きいのである(ハガ 2:9)。

第六節 油

油はぬるぬるした物質で、機械の歯車に塗ると、摩擦を和らげ、火がつくことを防ぐ。教会は機械のようなものであるが、信者はこの機械を組み立てる部品のようなものである。部品と部品との間に潤滑油がなければ、機械がまわる過程で必ず過激な摩擦が生じ発火する。聖霊は油であり、心に注がれると、わたしたちは平和のきずなに結ばれて、一致となるのである(エゼ 11:19、エペ 4:3)。

油を注ぐことは聖別されるしるしである。旧約時代では祭司、王や預言者を立てる時、注ぎ油をかける手順を欠かしてはならなかった(出エジ 29:7~9、列王上 19:16)。油は御霊を象徴する。油を注ぐ動作は聖霊を受けることを象徴する。聖書の記載によれば、イエスは神が聖霊によって油を注がれた方である(使徒 4:27、10:38)。彼は大祭司として人に代わって燔祭をささげ、罪を贖われる(ヘブ 9:11~15)、王として神の国を治められる(ヨハ 18:36~37、使徒 5:31)、預言者として、神のために福音を宣べ伝えられる(ルカ 4:18、使徒 3:22)。イ



エスの如く、わたしたちも神の霊を注がれた者であり(Ⅱコリ 1:21)、祭司、王、預言者の職務を負わされているのである(Ⅰペテ 2:5、黙 5:10、Ⅰコリ 14:31)。

油で傷が癒される(ルカ 10:34)。わたしたちのたましいは元々、エリコに下って行く者のように、悪者に打たれて、傷だらけで絶望に近かった。幸いにも、聖なる者に油を注がれたことによって(Ⅰヨハ 2:20)、癒され、危急から転じて安泰となった。油を注ぐことに清め、恵みを与える効果があり(レビ 8:12、Ⅰヨハ 2:20)、病を速やかに癒す(マル 6:13、ヤコ 5:14~15)。聖霊が清めと恵みを施す使命を負う(Ⅱテサ 2:13、ヘブ 10:29)。油を注ぐ動作は聖霊を受けることを象徴し、たましいの傷と痛みを癒す。

レビ記 14 章 16~18 節にあるらい病を清める油、及び列王紀下 4 章 2~7 節にあるエリシャがやもめのために奇跡を行った油は、共に聖霊の象徴である。前者は聖霊の罪人を清める権威を象徴するが、後者は聖霊に豊かな恵みがあることを象徴する。

油はともしびを点す(レビ 24:2)。信者はあかりの如く、油を充分用意しておけば(マタ 25:4)、光を放ち、これによって、神をあがめるようになる(マタ 5:16、Ⅰペテ 2:12)。そして迎えられ、花婿と一緒に席につく(マタ 25:10)。そうでない者は拒まれ、戸の外で泣き、後悔しても手遅れである(マタ 25:11~12)。

聖霊は「喜びの油」とも言われる(ヘブ 1:9)。聖霊に満たされた人は聖霊によって憂いがなくなり(使徒 9:31)、限りのない喜びを得る(Ⅰテサ 1:6)。「喜び」は御霊の実の現れの一つであるとパウロが言った(ガラ 5:22)。

第七節 印



印は認証する効果があり、法廷の性質を十分に持つ。契約書もしくは文書に印鑑を押すと、たちまち認証の作用が働く。

王の勅命に王の印が押されると、王が認証したことになり、だれも取り消すことができない(エス 8:8)。王自身でさえそれを変えるか取り消すこともできない(ダニ 6:8、12、15~18)。王の威信はそれによって確立されるものである。聖霊は神の印であり、王の印とも言えよう。なぜなら、神はもろもろの王の王だからである(1テモ 6:15)。額に神の認証を押された人こそ、神が終わりの日に世の人に発せられる怒りから逃れることができ、断じて何の害も受けないのである(黙 7:2~3、3:10)。

王の印は王の信実と権力を充分代表できる。おおよそ身に王の印を所持する人は、印のお蔭で王の職務を行うことができる。神の印(聖霊)を身に帯びている人も、神に授けられた力によって、罪をゆるし、罪をおき、罪を定める権威を行うことができる(ヨハ 20:22~23、マタ 16:19、18:18)。

バプテスマの後にイエスは、御霊の証印を受けられた。その時、天から父の声があつて、ご自分の愛する子であることを証明された(マタ 3:16~17)。今信仰に入っているわたしたちは、もし聖書の教えに合っているなら、必ず約束の聖霊の証印を押され(エペ 1:13)、神の愛する子と認証される。まさにパウロが言ったように、御霊みずから、わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることとキリストと同じ相続人であることを、あかして下さるのである(ロマ 8:16~17)。

エペソは海岸都市である。そこの商売人は木材の大手売買をする。Bickersteth氏は彼らの商売方法を説明した、「商売人は自分が気に入った木材を選び、その上に自分の判を押す。それは皆に認められる所有権のしるしであ

る。商売人は取引が成立してもすぐに木材を運ばずに、ほかの人のいかだと混ぜて、港に置いておく。しかし、すべての木材は皆、選ばれ、売買が成立され、印を押されたものである。時を見て、所有者の商売人は代理人に判を持たせ、同じしるしの木材を見出させ、運ばせて行くのである」。

聖霊が聖徒の証印というのは、イエスがゴルゴタで代価を支払われた一番明白な証拠なのである（Ⅰコリ 6:19～20）。エペソ教会の信者は、証印の意義と重要性に詳しくない。それで、パウロは彼らがよく知っていることをもって説明した。即ち、キリストを信じた以上、贖いの日のために約束の聖霊の証印を受けた（エペ 1:13、4:30）。それは彼らが確かに主に属することを深く認識させるためである。「それに次のような銘が刻まれている。『主はご自分に属する者を知っておられる。』」（Ⅱテモ 2:19、新改訳による）

第八節 保証

「保証」ということばの原文は「質」である（エペ 1:14）。NKJ は「保証金」（earnest）と訳し、ギリシャ語英語対照本は「抵当物件」（pledge）と訳す。ギリシャ原語は「arrhabon」と訳すが、ヘブライ語の「arabon」から来たもので、「保証」と「担保」の意味が含まれる。このことばは、元々ギリシャ人とローマ人の間の貿易用語であった。法廷の性質の視点から見れば、保証、質、保証金、抵当物件、質当、担保などの言葉は、共通の意味を持ち、効果が一致するものである。

主の愛される者は、天地創造の当初から備えてくださった国を必ず受け継ぐ。しかし、この素晴らしい恵みはまだ目に見えなく、イエス・キリストの再臨される時に与えられるのである（Ⅰペテ 1:13）。すると、それを待ち望んでいる人はあらかじめ保証がなければならない。「どうか、あなた自ら保証となられるよ



うに」(ヨブ 17:3)、「わたしに、あなたの恵みのしるしをあらわしてください」(詩 86:17)。見よ、保証の獲得はいかに大事なことであろうか！

御霊は永遠の命を得る保証である(Ⅱコリ 5:4～5)。わたしたちが死んだ後、必ずよみがえり、霊の体を着る(Ⅱコリ 5:1～3)。だから、今は生ける望みをもって死を恐れず、主と共に住むことをはばからなく待ち望んでいる(Ⅱコリ 5:6～8)。

聖霊は神の国をつぐ保証であり(エペ 1:14)、わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることを証し、あらかじめ相続人となる保証をして下さる(ロマ 8:16～17)。それで、将来の嗣業を受け継ぐために、わたしたちはきっぱりと一切のものを損と思ひ(ピリ 3:8)、専ら、上にあるものを思っている(コロ 3:2)。

聖霊はクリスチャンがすべての約束を受ける保証である。「なぜなら、神の約束はことごとく、彼において『しかり』となったからである。だから、わたしたちは、彼によって『アメン』と唱えて、神に栄光を帰するのである。あなたがたと共にわたしたちを、キリストのうちに堅くささえ、油を注いで下さったのは、神である。神はまた、わたしたちに証印をおし、その保証(原文は「質」として、わたしたちの心に御霊を賜ったのである」(Ⅱコリ 1:20～22)。

第九節 火(新改訳、新共同訳：焼き尽くす霊)

「そして主が審判の霊と滅亡の霊とをもって、シオンの娘らの汚れを洗い、エルサレムの血をその中から除き去られるとき、シオンに残る者、エルサレムにとどまる者、すべてエルサレムにあつて、生命の書にしるされた者は聖なる者ととなえられる」(イザ 4:3～4)。

「滅亡の霊」ということばを、「新改訳」と「新共同」は「焼き尽くす霊」と訳す。それは聖霊の名称の一つである。「シオンの娘らの汚れ」とは、教会の疵を指す。「生命の書にしるされ者」とは、永遠の命に入るのに値する聖徒を指す。

火は焼き尽くし、清める効果がある。すべて金や銀の中の混ざり物は、練られると取り除かれる（マラ 3:2～3）。聖霊も人の罪の汚れを練り清める効果がある。聖霊に満たされることによって、人は新たになり（Ⅱコリ 6:6、テト 3:5）、清められる（Ⅰペテ 1:2）。ゆえに、神はイザヤ預言者をとおして、焼き尽くす霊をもって、教会の混ざり物を練り清めることを宣告された。それで黙示録にある象徴の神の国の実現を望ませるのである（黙 21:11、18～27、参考：イザ 1:25）。

火は万物を燃やし尽くして、融和の一つのかたまりにする働きがある（Ⅱペテ 3:10～12）。聖霊は個人の先入観、異民族の間の隔たりや階級への偏見などを燃やし尽くし、キリストにあって様々な人を一つとされる（エペ 4:3、ガラ 3:28）。

火は上に燃え上がる。焼かれた物質を炎と変えて、天に向かって燃えるのである。人の心で焼かれた聖霊は、世のことを離れ、上にある栄えを思い、聖書の尊い教えを実行するように人を激励される（マタ 6:19～20、コロ 3:1～4）。パウロは聖霊に満たされる人（使徒 9:17）のため、聖霊はその心に焼き尽くす効果を十分に発揮する。それでパウロの志は聖霊の炎と共に天に燃え上がり、もっと良い天にあるふるさとを望むことに専念し（Ⅱコリ 5:1～8、ピリ 1:23）、世の一切のものをふん土のように思った（ピリ 3:7～8）。

士師ギデオンはつばを打ち砕き、たいまつを照り輝かせることによって、敵軍を打ち破った（士 7:16～23）。この出来事は、クリスチャンがただ己を捨てる



精神を抱くことのみ、聖霊の働きが十分発揮できることを象徴する(Ⅱコリ 4:10)。

「五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、…舌のようなものが、炎のように分かれて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、…」(使徒 2:1~4)。聖霊の火は、ひとりびとりの上にとどまり、力を与えられる。「無学な、ただの人たち」でも(使徒 4:13)、主のために証をするようになり、ひいては「天下をかき回してきた」と言われたほどである(使徒 17:6)！聖霊もまた燃える心を賜れる。それによって、人は迫害を恐れず、自分の見たこと聞いたことを、語らないわけにはいかない(使徒 4:18~20)。エレミヤ預言者が言ったように、もし彼が主の名によって語る事はしないとせば、主の言葉がその心にあつて、燃える火のようで、それを押さえるのに疲れ果てたのである(エレ 20:9、参考：詩 39:3、ヨブ 32:17~22)。

第十節 雲の柱と火の柱

「主は彼らの前に行かれ、昼は雲の柱をもって彼らを導き、夜は火の柱をもって彼らを照し、昼も夜も彼らを進み行かせられた。昼は雲の柱、夜は火の柱が、民の前から離れなかった」(出エジ 13:21~22)。

イスラエル人がエジプトを出て、見渡す限り果てしない荒野で、四十年間、歩きまわった。その間に、昼間は羅針盤がなければ、夜間も方向を導く明かりがなかった。しかし、迷わず、無事に神が約束されたカナンの地に導かれたのは、雲の柱と火の柱のお蔭である。

雲の柱と火の柱とは聖霊の象徴である。一見、二つのもののようであるが、実は一つのものである。神は光をもってイスラエル人が夜でも歩けるように、

雲の中から火を出されたからである(出エジ 40:38)。世が暗ければ暗いほど、象徴として、聖霊はその輝かしい光を放ち、従ってくる人たちが険しい世の道を終え、もっと良い天にあるカナンの地に入るまで、導き続けるのである。

「このとき、イスラエルの部隊の前に行く神の使は移って、彼らの後ろに行った。雲の柱も彼らの前から移って、彼らの後ろに立ち、エジプトの部隊とイスラエルびとの部隊との間に来たので、そこに雲とやみがあり夜もすがら、かれとこれと近づくことなく、夜が過ぎた」(出エジ 14:19~20)。エジプトの部隊が追いかけてきた時、雲の柱はイスラエルの部隊とエジプトの部隊の間にあった。エジプトの部隊は闇に覆われたが、イスラエルの部隊は光に照らされた。聖霊も信じない人には暗やみであるが、信じる人には道の光なのである。イエスが言われた、「わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであらう」(ヨハ 8:12)。聖霊は主の霊である(Ⅱコリ 3:17)。すべて御霊に導かれる者は、主に従って来る者であり、雲の柱と火の柱に導かれたイスラエル人と同様に暗やみを歩くことがない。雲の柱と火の柱はイスラエル人が荒野を渡る手引きのみならず、いざという時の後ろ盾となり、敵を近づかせなかった。聖霊も同じように、すべてのことを導いて下さり、また危ない時、わたしたちの唯一の頼りになってくださるのである。

「兄弟たちよ。このことを知らずにいてもらいたくない。わたしたちの先祖はみな雲の下にあり、みな海を通り、みな雲の中、海の中で、モーセにつくバプテスマをうけた」(Ⅰコリ 10:1~2)。新約聖書において、これは紅海を渡るのを水のバプテスマ、雲の下におけるのを霊のバプテスマと象徴する最も明白な記載である。イスラエル人にエジプトの軍隊が紅海まで追いついたとき、神は彼らを守るため、雲の柱を彼らの前から彼らの後ろに移された。パウロは御霊に啓示され、この出来事をもって、彼らの祖先が皆雲の中で聖霊のバプテスマを受けたことを語ったのである。



第十一節 光

光は火によってできるものである。火が聖霊の象徴である以上、当然、光も聖霊の象徴と言えよう。それでアサフは詩をもってイスラエル人がエジプトを出る歴史を振り返った、「昼は雲をもって彼らを導き、夜は、よもすがら火の光をもって彼らを導かれた」（詩 78:14）。

イエスは、神は「霊」と言われた（ヨハ 4:24）、ヤコブは、神は「光の父」と言った（ヤコ 1:17）。即ち、聖霊はあらゆる光の源である。真の光は闇を照らし、すべてその光を慕う者を照らされるのである。

光にさらされる時、すべてのものは、明らかになる（エペ 5:13）。御霊も同じような働きがある。だから、聖霊を欺いたアナニヤ夫婦は聖霊の強い光に照らされて、まるで透明な水晶体のように、隠れることなく、ついに災難に遭った（使徒 5:1～10）。「神はすべてのわざ、ならびにすべての隠れた事を、善悪とともにさばかれるからである」（伝 12:14、参考ルカ 12:2）。

光は善良の象徴である。闇の中に輝いているが、闇に受け入れられない（ヨハ 1:5）。しかし、彼は何と言っても闇を追い出す使者である。邪悪な時代は聖霊の光を受けようとなしないが（ヨハ 14:17）、聖霊は結局悪魔のわざを滅ぼす権能を握っておられるのである。

太陽は物質世界の光源であり、誰にも片寄らずに、いつくしみの輝きと熱を与える（マタ 5:45）。聖霊は霊界の光源であり、太陽のようないつくしみをもって、暗黒の中と死の陰に住んでいる人々を、照らされるのである（参考：マタ 4:16、ルカ 1:78～79）。



第十二節 剣

「主なる神は言われた、『見よ、人はわれわれのひとりようになり、善悪を知るものとなった。彼は手を伸べ、命の木からも取って食べ、永久に生きるかも知れない』。そこで主なる神は彼をエデンの園から追い出して、人が造られたその土を耕させられた。神は人を追い出し、エデンの園の東に、ケルビムと、回る炎のつるぎとを置いて、命の木の道を守らせられた」(創 3:22~24)。

これは剣を聖霊の象徴とした最も原始の記載である。先祖は罪を犯した後、エデンの園から神に追い出された。命の木の実が食べられないため、永遠のいのちに入ることができない。善悪を知る木から取って食べると、きっと死ぬという御ことばが成就された(創 2:17)。永遠の命に入るなら、再びエデンの園に入らなければならないが、その道は回る炎のつるぎで守られているのである。

地上のエデンの園は天のエデンの園を象徴する。地上のエデンの園にいのちの木があれば、天のエデンの園にもいのちの木があるからである(黙 22:14)。いのちの木に入る道は、先祖が罪を犯した後から救いが全うされるまで、ずっと神によって封鎖され、だれも入ったことがない。人がエデンの園に入らず、いのちの木の実を得ない唯一の理由は、罪に汚されたからである。この道が通されなければ、人は永遠に神と相和することができず、永遠の命を楽しむこともできない。イエスは死を通して、この道を開いて下さった先駆者である(マタ 27:50~51、ヘブ 10:19~20)。ゆえに、「わたしは道であり、真理であり、命であり、門である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」と主は言われたのである(ヨハ 14:6、10:9)。

炎の剣は聖霊が滅ぼす権威を持つことを表す。あらゆる命の木に至る道に入る者は、必ず死を経らなければならない。第一、バプテスマによってイエスの



死にあずかる（ロマ 6:3）。なぜならば、死は罪の支払う報酬である。罪人が死ななければ、そして、その罪を滅ぼさなければ、主にあつて永遠の命を得ることはできないからである（ロマ 6:6、19、23）。第二、聖霊のバプテスマによって、古き人の行いを殺さなければならない。なぜならば、肉に従って生きるなら、死ぬほかはない。しかし、霊によってからだの働きを殺すなら、生きるからである（ロマ 8:13、ガラ 5:16）。

炎の剣は永遠の命に入る唯一の道である。エデンの園に置かれ、命の木の道を守らされることは、人が救いの問題に対して絶望的なしるしではない。かえって、すべて永遠の命を得る人は、必ず霊と水のバプテスマを受けることを暗示している（ヨハ 3:5、テト 3:5）。聖書によれば、霊と水のバプテスマは、いずれも聖霊によって完成されるのである（ヨハ 3:5、I コリ 6:11、12:13）。だからパウロは「御霊で始めた」と言った（ガラ 3:3）。炎の剣は聖霊の象徴である。この道から入らなければ、だれもエデンの園に入ることはできない。それは聖霊によって入門しなければ、だれも神の国に入ることはできないのと同様である。

「御霊の剣、すなわち、神の言」（エペ 6:17）。

この短い聖句に、三つの意義が含まれる：①剣は聖霊の象徴である。②聖霊は信者の武器であり、信者の欲情を殺す作用と天上にいる悪の霊を制する権能を持つ。③神の言は御霊の剣であり、鋭く厳しいので、人に恐れ的心を生じさせる。

「神の言は生きていて、力があり、もろ刃の剣よりも鋭くて、精神と靈魂と、関節と骨髄とを切り離すまでに刺しとおして、心の思いと志とを見分けることができる。そして、神のみまえには、あらわでない被造物はひとつもなく、すべてのものは、神の目には裸であり、あらわにされているのである。この神に対して、わたしたちは言い開きをしなくてはならない」（ヘブ 4:12～13）。神の



言は剣のように、人の内臓まで刺し通し、人の思いをきわめる。聖霊にも同じような権威がある。アナニヤ夫婦が遭ったことは、これを裏付けるのである(使徒 5:3、9～10)。

第十三節 息と風

「風」ということばは、ヘブライ原語で「ruach」とし、ギリシャ原語は「pneuma」とする。字面の意味は「風」、「息」、「空気」である。聖書に「息」をもって聖霊を象徴したのはただ一回だけであるが、「風」をもって聖霊を象徴したのは二回ある。エゼキエル書 37 章 5～10 節は「息」と訳す。ヨハネによる福音書 3 章 8 節と使徒行伝 2 章 2 節は「風」と訳す。

「時に彼はわたしに言われた、『人の子よ、息に預言せよ、息に預言して言え。主なる神はこう言われる、息よ、四方から吹いてきて、この殺された者たちの上に吹き、彼らを生かせ』。そこでわたしが命じられたように預言すると、息はこれにはいった。すると彼らは生き、その足で立ち、はなはだ大いなる群衆となった」(エゼ 37:9～10)。

旧約聖書において、以上の聖句は「息」を聖霊の象徴とする唯一の記載である。神はエゼキエルを通して、この幻の奇跡を行われたのは、聖霊に死人をよみがえらせる権威があることを表したのである。だから 14 節になるとはっきりと書かれている、「わたしがわが霊(神の霊)を、あなたがたのうちに置いて、あなたがたを生かし」。パウロも言った、「もし、イエスを死人の中からよみがえらせたかたの御霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリスト・イエスを死人の中からよみがえらせたかたは、あなたがたの内に宿っている御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも、生かしてくださるであろう」(ロマ 8:11)。



イエスが言われた、「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生まれる者もみな、それと同じである」(ヨハ 3:8)。風は思いのままに吹き、束縛されない。しかも、目に見えなく、手でつかめないものである。イエスは風を聖霊の象徴とし、両者を同列に論じられたのは、それによって聖霊の特性、またそのわざの神秘性を説明されるためであった。五旬節の日に聖霊が降った時、この象徴は字面のとおりに現れた、「突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起こってきて、一同がすわっていた家いっばいに響きわたった。…すると、一同は聖霊に満たされ、…」(使徒 2:2、4)。

狂風に見舞われた時、その勢いに抵抗できるものは何一つもない。しかし、そよ風が優しく吹くと、ことばで表現しがたい快感をもたらしてくれる。風を聖霊の象徴とするのは、まさに聖霊の強大な力と威厳、及び柔和と慈愛をあらわすためであろう。

風はすべての砂ぼこりを掃き払う。それによって、大地はたちまち新しい風景に変わる。聖霊もわたしたちの心の中のほこりや汚れを払ってくださり、わたしたちを新たにされるのである(テト 3:5)。

第十四節 七つの目

「見よ、ヨシュアの前にわたしが置いた石の上に、すなわち七つの目もっているこの石の上に」(ゼカ 3:9)。

「だれでも小さい事の日をいやしめた…。これらの七つのものは、あまねく全地を行き来する主の目である」(ゼカ 4:10)。

「わたしはまた、御座と四つの生き物との間、長老たちの間に、ほふられたと見える小羊が立っているのを見た。それに七つの角と七つの目とがあった。こ

これらの目は、全世界につかわされた、神の七つの霊である」(黙 5:6)。

「七」は完全な数字であり、「目」は知恵を表す。「七つの目」は完全なる霊の知恵であり、主の目がどこにでもあって、悪人と善人とを見張っておられることを表す(箴 15:3)。

七つの目を聖霊の象徴とするのは、聖霊がすべてのものをきわめる権能と全知をもっておられるからである。第一、聖霊は神の深みまでもきわめられる(1コリ 2:10)。第二、悪魔のわざを見きわめられる(使徒 16:16~18)。第三、人の心を見きわめられる(使徒 5:1~11) からである。

問題

- 一、象徴というのは何であろうか。なぜ神は象徴をもって真理を明らかに表されるのか。
- 二、鳩を聖霊の象徴とする意義を説き明かせ。
- 三、露を聖霊の象徴とする意義を説き明かせ。
- 四、雨を聖霊の象徴とする意義を説き明かせ。
- 五、水を聖霊の象徴とする意義を説き明かせ。
- 六、川を聖霊の象徴とする意義を説き明かせ。
- 七、油を聖霊の象徴とする意義を説き明かせ。
- 八、印を聖霊の象徴とする意義を説き明かせ。
- 九、保証を聖霊の象徴とする意義を説き明かせ。
- 十、火を聖霊の象徴とする意義を説き明かせ。
- 十一、雲の柱と火の柱を聖霊の象徴とする意義を説き明かせ。
- 十二、光を聖霊の象徴とする意義を説き明かせ。
- 十三、剣を聖霊の象徴とする意義を説き明かせ。
- 十四、息と風を聖霊の象徴とする意義を説き明かせ。
- 十五、七つの目を聖霊の象徴とする意義を説き明かせ。



第四章 聖霊と教会

周知のとおり、教会に関するあらゆる存在と活動において、聖霊は最高の権力を握っておられる。教会が一日のうちにできたのは、聖霊の証によるものである。教会が主に期待される効果を達成したのも、聖霊の働きによるものである。

聖霊もまたキリストの命を豊かに教会に注がれる。五旬節の前に、信者たちは元々個人によって一群になった集会であったが、五旬節の後には、火を象徴とする聖霊に焼き尽くされ、打ち解け、団結した一つのかたまりとなった。それは機械の組織ではなく、有機体であり、かしらなるキリストにしっかりとつながる人々の集合なのである。

第一節 教会の定義

「教会」ということばのギリシャ原語は、英語で「Ecclesia」と読む。

「Ecclesia」は古代のギリシャの自由市が議事のために開いた「合法集会」であり、「常例集会」とも呼ばれた。当時、全市民はラッパの音が聞こえると集まって議事を進めた。キリストが生まれる前に、これはギリシャ社会の慣用名詞であった。その本来の意味は「召された集会」である。歴史上、イエスは最初にこの名詞を「教会」とされたのである（マタ 16:18）。

使徒行伝 19 章 39 節にある「正式な議会」ということばは、原文では「Ecclesia」であり、法律的に認められる合法の集会の意味である。だから、呂振中訳本は「合法の集会」と訳し、また「教会と同じことば」と註をつけた。



使徒行伝 19 章 32 節と 41 節の「集会」とは、いずれも原文は「Ecclesia」を用いた。呂振中訳本は二つとも「会集」と訳し、また「教会と同じことば」と註をつけた。しかし、国の法律によれば、今回は常例に違反して全然秩序のない集まりであった。

ユダヤ人は「Ecclesia」を、ラッパの音を聞いて、幕屋の前に集まる一種の「集会」としてきた。使徒行伝 7 章 38 節にある「集会」、及びヘブル人への手紙 2 章 12 節にある「教会の中」とは、同じ意味が含まれる。この二カ所は、原文では「Ecclesia」である。

「Ecclesia」の元の意味から論じれば、旧約時代のイスラエル人と新約時代のクリスチャンとは、理屈みな召された者である。しかし、使用上の意義としては区別がある。新約時代にこのことばが使われたのは、聖書の解釈では、「神が御子の血であがない取られた神の教会」（使徒 20：28）、「神の教会、すなわち…キリスト・イエスにあってきよめられ、聖徒として召されたかたがた」（I コリ 1:2）という意味である。言うまでもなく、キリストの血で贖われ、選ばれたこと、並びにイエス・キリストにあって清められることは、恵みの救いが全うされる前は、十分に明白ではなかったのである。

第二節 教会の本質

「教会」ということばは、原文の意味では一種の「集まり」であるが、本質を論じれば、世の一般の集まりとは異なるものである。その相違点は少なくとも次のようなものがある：

第一、教会は神のものであり（II コリ 1:1、ガラ 1:13）、イエスのものでもある（マタ 16:18）。社会の集まりは神のものでなければ、イエスのもので



もない。

第二、教会は霊的な団体であり、イエス・キリストが世界から選び出され、世の歩調とまったく一致せず、逆にそれを超越した集まりである。社会の集まり会は、おおよそ政治、教育、交通、実業などの討論を目的とするが、教会は神を礼拝し、修業をし、御働きを促進するための集まり会である。しかも、この神聖な目的を達成するために、むしろ世に憎まれる（ヨハ 15:19）。ゆえに、教会は社交性の団体でなければ、形を変えた政体でもない。

第三、教会は時間と空間とに制限されず、民族と階級とにも制限されない。いつでもどこでもすべて主に帰する人は、その中にいる（ガラ 3:27～28、マタ 18:20）。社会の集会は集合したり解散したりするもので、討論が終わればすぐ分かれる。そして、民族、階級、場所などの空間の制限がある。

第四、教会のメンバーは人数が多かれ少なかれ、あるいは個人に特殊な状況があっても、同じ主を礼拝し、同じ望みを抱き、同じ信仰を守り、同じバプテスマを受ける（エペ 4:4～5）。社会の集会のメンバーは、同じ志がなくても、同じ信仰や主張がなくても差し支えない。

第五、教会のメンバーは信仰に入った期間や霊的レベルを問わず、共に同じ父を礼拝する兄弟であり、同じ先生に仕える弟子である（マタ 23:8～9、エペ 4:6）。長老、執事や伝道者などの呼称があるにしても、階級のしるしではなく、人を制限するためにあるものでもない。それは聖徒たちを整えて、奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせるために設けられるのである（Iペテ 5:1～4、エペ 4:11～13）。しかし、社会の集会のメンバーは、王、大臣…など階級上の差異がある（マタ 20:25）。



第三節 教会の由来

一番最初、神に選り召されたのはアブラハムである(創 12:1)。その時、彼と彼の父の家は偶像崇拜の罪の中にあつた(ヨシュ 24:2)。後に、アブラハムの子孫はエジプトに四百年の間、奴隷となつた。神は彼らの苦悩のうめきを聞いたので、モーセを遣わしてエジプトから彼らを救い出された(使徒 7:6、34~36)、また、「主に対して聖なる者で、他の民から区別された」(レビ 20:26)、「ひとり離れて住む民、もろもろの国民のうちには並ぶものはない」(民 23:9)、「主は地のおもてのすべての民のうちからあなたを選んで、自分の宝の民とされた」(申 14:2)と尊ばれた。これは救いの恵みが全うされた後、キリストの血をもって地上から選ばれた新約教会の影である。

イエス・キリストが現れられると、旧約時代が終わり、新約時代の始まりを宣告された(マタ 11:13、マル 1:15、ヨハ 4:23)。そして世からご自分のものを選び出し、神に属する霊的な団体を作られた(ヨハ 15:19)。これは新約教会が建立される先立ちであつた(マタ 16:18)。

五旬節の日に聖霊が降り、弟子たちは力を受け、勇気をもって主のために宣道をし、約三千人が悔い改めて信仰に入り(使徒 2:1~4、14~41)、教会は一日で立てられた。これは新約教会の誕生である。

第四節 教会に備わるべき条件

教会の成立に三つの条件が備わるべきである。

一、教会に聖霊があるべき

教会に聖霊があることは、教会が一般の集会と異なるキーポイントである。



聖書はよく「教会はキリストのからだ」(エペ 1:23、4:12、コロ 1:24) と言い、また「霊魂のないからだは死んだものである」(ヤコ 2:26) と言う。教会がキリストの体である以上、キリストの霊がなければ死んだものであり、形ばかりで命が伴わない殻に過ぎないのである。ゆえに、聖霊のない教会は教会というよりも、むしろ、「社交性の集団」と言ったほうが、もっと相応しいではなからうか。

信者が「聖霊の宮」と言われるのは、神から来た聖霊がその内に宿っておられるからである(Ⅰコリ 6:19)。教会は信者によって構成された集団であるので、聖霊がなければ、なぜ「聖霊の宮」と言えようか(Ⅰコリ 3:16~17)。パウロが言った、「もし、キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではない」(ロマ 8:9)。教会にキリストの霊がなければ、なおさらである。原始の教会の設立は、完全に聖霊自らによるものであり、現代多くの人の意志によって出来た世の教会と、本質に大きな区別があるのである。

聖霊は、あらゆることに主について証しをするために来られた(ヨハ 15:26)。教会に聖霊がなければ、バプテスマは罪を洗い落とす効果がない(使徒 22:16)。なぜならば罪赦しの権威は聖霊による(ヨハ 20:22~23)、水の中に主の尊い血の証しがあるのも聖霊によるからである(Ⅰヨハ 5:6~8)。もし教会に聖霊がなければ、聖餐式はただの記念の式典に過ぎないので、信者は主の約束にあずからずに、何の得もない(ヨハ 6:53~58)。もし教会に聖霊がなければ、通常の集会以さえ、命のない集まりになってしまう。教会においてのわざは、聖霊の証と働きが必要だからである。これは、現代における各教会団体が検討すべきところではないのであろうか。

二、教会は遣わされた伝道者がいるべき

教会に遣わされた伝道者は欠かせない存在である。なぜならば、伝道者は教



会の命を延長継続し、その身たけ（国境）を広げる使命が託されたからである。

預言者エレミヤは偽預言者ハナニヤに言った、「ハナニヤよ、聞きなさい。主があなたをつかわされたのではない。あなたはこの民に偽りを信じさせた」（エレ 28:15）。昔の預言者は神の代言人である（エレ 1:7）。即ち新約時代の伝道者にあたる者である（マタ 2:23、マル 6:4、I コリ 12:28～29、14:32）。昔の預言者は必ず遣わされた者でなければならない。現在の伝道者も必ず遣わされた者でなければならない。「つかわされなくては、どうして宣べ伝えることがあろうか」（ロマ 10:15）。

偽預言者は神の名によって偽りを預言するが（エレ 29:8～9）、まったく人の徳を高めず、破れ口にのぼらず、イスラエルの家のために石垣を築くこともできない（エゼ 13:1～7）。現在、多くの遣わされていない偽預言者は、主の御名によって偽預言を宣べ伝えるが、使徒時代の教会を復興することができず、異端の誤りを正すこともできない。それは昔の偽預言者がダビデの倒れた幕屋を興し、その破損を繕うことができないのと同様である。従って、すべてを犠牲にして故郷を離れ、海と陸とを巡り歩き、多くの人を神の国へ入らせようとしても、結局、彼らを自分より倍もひどい地獄の子にしてしまった（マタ 23:15～16）。見よ、盲目的案内者である偽預言者が後に残す災いは、いかにひどく、怖いものであろうか！

イエスは預言書を引用された、「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ」（ルカ 4:18）。復活された後、イエスはまた弟子たちに言われた、『安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす』そう言って、彼らに息を吹きかけ



て仰せになった、『聖霊を受けよ』（ヨハ 20:21～22）。天の父は、聖霊によってイエスが天国の福音を宣べ伝えるように遣わされた。今日、イエスも同じ方法で、聖霊によって弟子たちにその御わざを継がされるのである。

概括して言うと、神に必要な伝道者は、必ずしも学問、知恵、弁才がある人とは限らない(使徒 4:13、I コリ 4:20)。むしろ聖霊に遣わされ(ルカ 24:49、使徒 1:4、5、8)、聖霊の力に満たされている事がもっと重要なのである(ロマ 15:18、II コリ 12:12、ヘブ 2:4)。

三、教会は使徒と預言者の土台に建てるべき

「そこで、わたしもあなたに言う。あなたはペテロである。そして、わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう」(マタ 16:18)。

「そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。またあなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。主にある聖なる宮に成長し、そしてあなたがたも、主にあつて共に建てられて、霊なる神のすまいとなるのである」(エペ 2:19～22)。

使徒と預言者の土台とは、即ち、使徒と預言者が宣べ伝えた純粋な教えである。キリスト・イエスが隅のかしら石とは、キリストの教えである。教会が信じるものが、もし使徒と預言者が宣べ伝えるのと食い違いがあり、もしくは、キリストの教えを通り過ごせば (II ヨハ 9～11)、神に呪われるのである(ガラ 1:6～9)。

イエスは「真理の御霊」と言われ(ヨハ 16:13)、ヨハネは「御霊は真理だ」と言った(I ヨハ 5:6) が、聖霊と真理とは切り離せない関係にあることの証明である。聖霊のある教会は、必ず聖書に相応しい真理を宣べ伝える。一般の教



会が使徒と預言者を土台にせず、キリストの教えをとおり過ごすのは、聖霊の啓示と尊きがないためである。

第五節 聖霊が教会を治められる

一、聖霊は教会の唯一の統治者

原始教会は聖霊のわざが最も活発な時期であり、教会の働きはすべて聖霊によって進められた。聖霊が命令を下すと、弟子たちはそれに従って行動する(使徒 8:29~30)。聖霊が禁じると、行き先を変更する(使徒 16:6~8)。取り決めた事項の制定も聖霊が決定権を持たれ、弟子たちは二の次の存在に過ぎなかった(使徒 15:28~29、16:4~5)。

五旬節の日の前、弟子たちはかしらの地位を争おうとして、それで互いに恨みあった(マタ 20:20~28)。キリストが受難するその晩ですら、この事で論争が起こった(ルカ 22:24~27)。しかし、五旬節の日に聖霊が降ると、彼らは完全に変わったのである。自分はふつつかな僕であること(使徒 10:25~26、14:8~15、I コリ 3:5~7)、一切の能力と賜物は上から下ってくることを皆悟った(I コリ 4:7、ヤコ 1:17)。さらに、ただキリストだけが教会のかしらであり(エペ 4:15)、弟子たちは肢体に過ぎないということがわかった(ロマ 12:5)。御霊が彼らの生活において、唯一の支配者であるので、彼らは万事につけ、それに従順になればよいことを教えられた(ロマ 8:13、ガラ 5:16、25)。

今、一般の教会の多くは、原始教会の根本的な原則に違反している。彼らは聖霊の地位を人の地位に変え、聖霊の制御を人の統治に変え、聖霊の御旨を人の主張に変え、聖霊と使徒たちが定めたことを人の規定に変え、元来の純正な福音を世の神学に変え、聖霊の賜物を人の権能に変え、聖霊の召しを名誉と利益の追い求めに変え、聖霊の導きを肉体の好みに変えた。このようなものは、



なぜ神の教会と言えようか。なぜ主の御名に栄光を帰することができるか。

黙示録1章から3章までに書かれているが、ヨハネはパトモスという島で主に黙示され、見たものをエペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラデルヒヤとラオデキヤにある七つの教会に書き送った(黙 1:9~11)。手紙を各教会に送る毎に、彼は「耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい」(黙 2:7、11、17、29、3:6、13、22)ということばで終結した。実に再三考えるべき意味深いことばであろう。

二、聖霊が働き人を立てられる

「イエスはまた彼らに言われた、『安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす』。そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、『聖霊を受けよ。…』」(ヨハ 20:21~22)。

これは伝道者が備えるべき条件と証拠である。聖霊につかわされなくては、だれも伝道者たる聖職を担うことができないと聖書に書かれているからである(ロマ 10:15)。これもまた主のために証しすることに必要な備えである。なぜならば、まず上から聖霊の力を求めて、それから主の証人となるようにと、イエスは弟子たちに命令されたからである(ルカ 24:48~49、使徒 1:8)。

五旬節の日に、聖霊が降ったことで、使徒たちは初めて主のために証しをしたが、結局、聖霊に感動され、罪のために自分を責め、ひいては悔い改めてバプテスマを受けた人は、約三千人あった(使徒 2:1~4、37~41)。その次、宮の「美しの門」の入口で、生れながら足のきかないこじきを見て、ペテロはイエス・キリストの名によって彼を癒した。使徒たちはこの良き機会を逃さず、主のために証したので、信仰に入った人は男で五千人ほどあった(使徒 3:1~4:4)。このことで役人たちの怒りと脅迫を招き、イエスの名によって教えるこ



とを禁じられたが、使徒たちはなお大胆に立ち向かって言った、「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従う方が、神の前に正しいかどうか、判断してもらいたい。わたしたちとしては、自分の見たこと聞いたことを、語らないわけにはいかない」（使徒 4:5～20）。聖書には当時の状況を、「一同は聖霊に満たされて、大胆に神の言を語り出した。…使徒たちは主イエスの復活について、非常に力強くあかしをした」と描写している（使徒 4:31、33）。

このような活発な聖霊のみわざは使徒行伝にいくつも書かれて、枚挙に暇がない。これは喜ばしいことではないのか。また今日のわたしたちが検討し、復興すべきところではないのか。

福音を宣べ伝えることについて、五旬節の後に、力を得た秘訣として、それは、「天からつかわされた聖霊に感じて」とペテロは解釈した（I ペテ 1:12）。これは即ち、伝道の力の秘訣である。万事全く聖霊が支配し、人間は聖霊の道具で、その力を表すためにあるだけである。パウロが言った、「そして、わたしの言葉もわたしの宣教も、巧みな知恵の言葉によらないで、霊と力との証明によったのである。それは、あなたがたの信仰が人の知恵によらないで、神の力によるものとなるためであった」（I コリ 2:4～5）。「神の国は言葉ではなく、力である」（I コリ 4:20）。「なぜなら、わたしたちの福音があなたがたに伝えられたとき、それは言葉だけによらず、力と聖霊と強い確信とによったからである」（I テサ 1:5）。説教と演説の根本的な区別はここにある。知恵と弁才の能力によらず、聖霊の力によるのである。

「どうか、あなたがた自身に気をつけ、また、すべての群れに気をくばっていただきたい。聖霊は、神が御子の血であがない取られた神の教会を牧させるために、あなたがたをその群れの監督者にお立てになったのである」（使徒 20:28）。教会内の御働きを進める者は、必ず皆聖霊自らが立てられなければならない。



伝道者のみならず、監督者もそうである（使徒 13：1～4）。聖霊が伝道者を立てられる目的は、福音が地のはてまで伝わるように、彼らが至る所まで主の証しをし、教会を設立するところにある（使徒 1:8、マタ 24:14）。それによって、教会の命を続けさせ、教会の身たけを伸ばす使命を完成される。聖霊が監督者を立てられる目的は、神の教会を牧させ、すべての群れに気を配ってもらうためである。それは強いられたのではなく、みずから進んですることである。また、委ねられた者たちの上に権力を振るうことをせず、むしろ、自分を慎んで、群れの模範となるべきである（I ペテ 5:1～3）。

「そこで、十二使徒は弟子全体を呼び集めて言った、『わたしたちが神の言をさしおいて、食卓のことに携わるのはおもしろくない。そこで、兄弟たちよ、あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判のよい人たち七人を捜し出してほしい。その人たちにこの仕事をまかせ、…』。この提案は会衆一同の賛成するところになった。そして信仰と聖霊とに満ちた人ステパノ、ピリポ、…を選び出して」（使徒 6:2～6）。原始教会は誠に神の教会であり、霊的な雰囲気がかたがた漂った。聖霊は教会の唯一の統治者であり、すべてのわざは聖霊を中心にした。聖霊は教会において確実に最高の権力を握られた。伝道者と監督者（長老）は聖霊自ら立てられるばかりではなく、食卓のことに携わって見た目ではあまり重要な職務でないような執事でも、聖霊に満ちた人を対象にした。すべては聖霊によって決められたのである。

本教会は後の雨である聖霊によって建てられた真の教会である。原始教会を復興する使命を負い、すべての御働きは元来の教会が残した手本を原則とし、聖霊に教会内の職務をことごとく任せる。従って、規定によれば、伝道者、長老、執事には聖霊のしるしが必要のほか、地方の教会の責任者、指導者、宗教教育の教員など、すべて御働きに携わる者は皆、聖霊を受けたことを先決の条件とするのである。



三、聖霊が賜物を分けられる

コリント人への第一の手紙 12 章 1 節にある「霊の賜物」ということばを、原文は「Pneumatika」であるが、「霊的である」、あるいは「霊から来た」という意味で、賜物の性質を表している。同じ 12 章の 4、9、28、30、31 節にある賜物を、原文は「charismata」であるが、「恵みの報い（賜物）」、あるいは「無償の恵み」という意味で、賜物の源を表している。「Pneumatika」と「charismata」を合わせると、「霊の賜物」となる。聖霊が御働きを進め、教会を建てるおのおのの特別な力を信者たちに授けられることを表すのである。

聖霊が教会を治める働きの一つとしては、教会が発展するのに必要な各賜物をひとりびとりに賜ることである（I コリ 12:8～11）。これらの賜物は原始教会において、弟子たちが主の証しをするのに欠かせないしるしであった。なぜなら、彼らは「無学な、ただの人たち」だからである（使徒 4:13）。彼らが宣べ伝えるのは主が死からよみがえられたことであり、彼ら自身でさえも疑った事である（マタ 28:16～17、マル 16:9～14、ルカ 24:9～11、ヨハ 20:24～27）。「さらに神も、しるしと不思議とさまざまな力あるわざとにより、また、御旨に従い聖霊を各自に賜うことによって、あかしをされたのである」（ヘブ 2:4）、もしそうでなければ、だれが弟子たちの話を信じ得ようか。

「イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない」（ヘブ 13:8）、「あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は、上から、光の父から下って来る。父には、変化とか回転の影とかいうものはない」（ヤコ 1:17）。御働きの進展において、原始教会は種々の霊的な賜物が必要である。今日の教会も救いが全うされるまで、霊的な賜物を必要とするのである（参考：I コリ 13:8～10）。

音楽家は単音でハーモニーが取れる曲を作ることはできない。画家は単色で



傑作を描くことはできない。文学家は一文字で著作を完成することはできない。「実際、からだは一つの肢体だけではなく、多くのものからできている。もしからだ全体が目とすれば、どこで聞くのか。もし、からだ全体が耳とすれば、どこでかぐのか。もし、すべてのものが一つの肢体なら、どこにからだがあるのか」(I コリ 12:14、17、19)。教会はキリストの体であり(コロ 1:24)、キリストにあって一つのからだであり、また各自は互に肢体である(ロマ 12:5)。わたしたちは、キリストを基として、全身はすべての節々の助けにより、しっかりと組み合わされ結び合わされ、それぞれの部分は分に応じて働き、からだを成長させ、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るのである(エペ 4:16、13)。そこで神は御旨のままに、肢体をそれぞれ、からだに備えられ(I コリ 12:18)、そして聖霊が皆にさまざまな霊的な賜物を授けることによって、御旨を実現させられるのである。

ゆえに、各自が御霊の現れを賜っているのは、高ぶるためではなく、全体の益になるためである(I コリ 12:7)。そして聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせるためである(エペ 4:12)。賜物を持っている人は、聖霊が教会を治めるのに必要な道具に過ぎないので、自分を誇ることはなく(I コリ 4:7、3:5~7、ルカ 17:10)、また人をけなすこともないのである(I コリ 12:15~17、21~24)。

霊の賜物は、コリント人への第一の手紙によれば、九つある。即ち：知恵の言葉、知識の言、信仰、いやしの賜物、力あるわざ、預言、霊を見わける力、種々の異言、異言を解く力などである(I コリ 12:8~11)。

霊の賜物について、ここではさておき、本章の第六節の「教会を建てる賜物」のところで、もっと詳しく述べよう。ここで触れているのは、聖霊が教会を治める一面を見いだすことだけである。



第六節 教会を建てる賜物

聖霊が信者に賜物を与えられるのは全体の益になり、キリストの体（教会）を建てるためであって、人に自分を誇らせ、他人をけなさせるためではない。健全なる教会を建てるのに必要な賜物は、コリント人への第一の手紙 12 章 8～10 節にある九つの性質から見れば、三つの類別に分けて、調べることができる。

一、優れた悟りの賜物

1、知恵の言葉

「この賜物について語るにも、わたしたちは人間の知恵が教える言葉を用いなくて、御霊の教える言葉を用い、霊によって霊のことを解釈するのである。生れながらの人は、神の御霊の賜物を受け入れない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」（I コリ 2:13～14）。

御霊が啓示された真理は、皆霊的な事である。それは、血肉に属する人が悟るものではなく、ただ聖霊によって知恵の言葉を賜った霊的な人だけが、解き明かすことができる。この知恵はこの世の者の知恵ではなく、この世の滅び行く支配者たちの知恵でもない。むしろ、隠された奥義としての神の知恵である（I コリ 2:6～7）。パウロが前の時代に知らされていなかった福音の奥義を理解しているのは、御霊の啓示によって知らされ、知恵の言葉の霊を賜ったからである（エペ 3:3～5、1:17）。

そのほかに、教会の事務を取り扱い、執事に立てられるに値する知恵（使徒 6:3）、あるいはキリストのわざのために、だれも抗弁できないような知恵（ルカ 21:15、使徒 6:10）などは、この賜物に属するものである。



2、知識の言葉

聖霊が賜わる知識は、信仰における種々の知識であり(ロマ 15:14、Ⅱペテ 3:18)、即ち真理の知識であるが(テト 1:1)、世の学問と大いに異なるものである(コロ 2:8)。「真理の御霊が来る時には、あらゆる真理に導いてくれる」(ヨハ 16:13)とイエスが言われたのはこの賜物のことである。

人は真理を豊かに宿られて(コロ 3:16)、はじめて何が重要であるかを判別することができ(ピリ 1:9~10)、信仰にゆるぐことがなく、人を指導し、訓戒することができる(ロマ 15:14)。それは、自分の益となると共に人のためにもなる。コリント教会はすべての言葉にもすべての知識にも恵まれたので、パウロはそれでいつも神に感謝している(Ⅰコリ 1:4~7)。

パウロはこの賜物があるため、キリストの福音を深く広く悟った。それによって自分の徳を高め、絶えず人を教えることができた。ガラテヤ人への手紙 1章 11 節以下の聖句から見れば分かるように、パウロの真理における知識はすべてキリスト(または聖霊と言ってもよい)の啓示によったのである。

3、霊を見わける

「愛する者たちよ。すべての霊を信じることはしないで、それらの霊が神から出たものであるかどうか、ためしなさい。多くのにせ預言者が世に出てきているからである」(Ⅰヨハ 4:1)。

「しかし、驚くには及ばない。サタンも光の天使に擬装するのだから」(Ⅱコリ 11:14)。

聖霊が人の内に宿られるほかに、悪霊も人の中で働き、偽りの知識をもって人を惑わし、教会を混乱させる(Ⅰテモ 4:1)。信者は霊を見わける力がなければ、兄弟が受けたのは神によるかサタンによるかをわきまえず、だまされてし



まうであろう。

ペテロもパウロもこの賜物を受けた者なので、それぞれ霊の目で、サタンの悪巧みを見分けることができたのである(使徒 5:3、13:8～11、16:16～18)。

二、優れた力で物事を行う賜物

1、信仰

「信仰」ということばを、Weymouth の訳本は「特別な信仰」とした。それは神に喜ばれる信仰と異なり(ヘブ 11:6)、救われるのに必要な信仰とも異なるが(エペ 2:8)、すべての困難に打ち勝つ信仰であり(詩 119:71、ピリ 4:11～14)、力あるわざを行う信仰である。

「イエスは答えて言われた、『神を信じなさい。よく聞いておくがよい。だれでもこの山に、動き出して、海の中にはいれと言ひ、その言ったことは成ると、心に疑わないで信じるなら、そのとおりに成るであろう』」(マル 11:22～23)。

「神を信じなさい」ということばを、ギリシャ原語の直訳は「神の信仰があつてほしい」(Have You faith of God) とし、Basic English の訳本は「Have God's faith」として、同じ意味である。確実に神の信仰があれば、からし種のように小さくても、山を動かすほど大きな事を行うことができるのである(マタ 17:20)。

「この提案は会衆一同の賛成するところとなった。そして信仰と聖霊とに満ちた人ステパノ、…を選び出して」(使徒 6:5)、「バルナバは聖霊と信仰とに満ちた立派な人であった」(使徒 11:24)。以上の聖句から、ステパノとバルナバの信仰は「聖霊に満ちた」ことと密接な関係にあることがわかる。聖書には明らかに記されていないが、二人の信仰は聖霊によって特別に与えられた賜物だと言えよう。



2、癒し

「神はナザレのイエスに聖霊と力を注がれました。このイエスは、神が共におられるので、よい働きをしながら、また悪魔に押えつけられている人々をことごとくいやしながら、巡回されました」(使徒 10:38)。イエスが病を癒される権威は聖霊の力によると、ここでペテロは証した。

癒しの賜物をイエスは独り占めにせず、昇天される前に、信じる者が御言に伴うしるしをもって、その確かなことを示すと約束された(マル 16:17~20)。しかも信じる者はご自身よりもっと大きいわざをする約束もされた。イエスは父のみもとに行かれるからである(ヨハ 14:11~14)。このことは、五旬節の日に聖霊が降って成就され、しいては普遍的な賜物となったのである。教会の長老たちさえ主の御名によって、病人にオリブ油を注いで祈って、その病を癒した(ヤコ 5:14~16)。ペテロ(使徒 3:1~8、5:15~16、9:32~34)、ピリポ(使徒 8:6~8)、アナニヤ(使徒 9:17~18)、パウロ(使徒 14:8~10、28:8~10)なども、聖霊によってこの賜物を受けた者である。

福音伝道の効果について言うが、癒しの賜物はしばしば人を聞き従わせる特別な働きが伴う(使徒 8:6、14:3)。「わたしは、異邦人を従順にするために、キリストがわたしを用いて、言葉とわざ、しるしと不思議との力、聖霊の力によって、働かせて下さったことの外には、あえて何も語ろうとは思わない」(ロマ 15:18~19)。

実際の状況を言うと、癒しの賜物に確実なわざが伴うには、癒しを求める病人の信仰も関わるのである(マタ 9:27~30、マル 9:21~24、使徒 14:8~10)。癒しを求める病人が信仰をもって、互に罪を告白し合い、互に祈り合うならば、地方の教会の長老たちでもその病を癒することができる(ヤコ 5:14~16) と、わたしたちは、進んで言えよう。



F. Madeley と H. P. Feng は「御霊の力と賜物」という本の 62 ページに、「今日において、しるしをもってたちまち人を癒すことはまれで、もはや使徒時代のように普遍のものではない。偶然に一、二回このようなことが起こっても、驚くべくほどの例外だと思われるであろう」と語った。しかし、本教会の長年の貴い経験より、わたしたちはこう言える、「今日はなおしるしが現れている時代です。癒しの賜物によって、人をたちまち癒すことはまれではなく、驚くべくほどの例外でもありません」。なぜならば、本教会は御霊自ら建てられた真の教会であり、至るところまで聖霊の力あるわざをもって病を癒し、悪霊を追い出すことによって、真理の確かなことを示しているからである。

3、力あるわざ

「力あるわざ」のギリシャ原語は「energemata dunameon」である。直訳すると、勢力と爆薬の意味であるので、このような賜物は神の力の釈放と言えよう。

イエスは四方にわたり福音を宣べ伝える時、町々に数々の力あるわざをなされた(マタ 11:20)。例えば、汚れた霊を追い出し(マル 1:23~28)、死人をよみがえらせ(ヨハ 11:39~45)、海の上を歩き(マタ 14:24~33)、風と海を静められたことなどである(マル 4:35~41)。五旬節の日になると、ペテロは特にこのことをもって、国々から戻ってきて祭りをを行うユダヤ人に、イエスが確かに神から遣わされた救い主であることを証した(使徒 2:22)。

「シモン自身も信じて、バプテスマを受け、それから、引き続きピリポについて行った。そして、数々のしるしやめざましい奇跡が行われるのを見て、驚いていた」(使徒 8:13)。「わたしは、使徒たるの実を、しるしと奇跡と力あるわざとにより、忍耐をつくして、あなたがたの間であらわしてきた」(Ⅱコリ 12:12)。ピリポもパウロも力あるわざの賜物を受けた者である。パウロはこの賜物によって、自分の使徒たる身分を表すことができるとした。ピリポが行った力ある



わざは、汚れた霊を追い出し、中風をわずらっている者や、足のきかない者を癒すことである（使徒 8:7）。パウロが行った力あるわざは、死人をよみがえらせ（使徒 20:9～12）、悪霊を追い出すことなどである（使徒 19:11～12）。ペテロもこの賜物を授けられた（使徒 5:12～16、9:36～42）。

「さらに神も、しるしと不思議とさまざまな力あるわざとにより、また、御旨に従い聖霊を各自に賜うことによって、あかしをされたのである」（ヘブ 2:4）。癒しの賜物と同様に、力あるわざの賜物も福音を宣べ伝えるのに、大いに役に立つであろう。

三、優れた力で語る賜物

1、預言をする

「預言」をする賜物を呂振中訳本は、「神の言を伝える才能」とした。訳し方に食い違いがあるようであるが、実はその意味は似たり寄ったりである。「預言」を字面から解釈すれば、将来のことだけ語ると思われがちであるが、コリント人への第一の手紙 14 章 3 節の聖句によると、現在の事も含めると言えよう。また、旧約時代の預言者を見てみよう。彼らが選民に伝えた言葉は必ずしも将来のことに関わるとは限らない。「神の言を伝える才能」であるので、預言者は神の代言人である以上、人の徳を高め、励まし、慰める言葉を伝えるために設けられたのである。当然、将来のことばかり論じて、現在の身近な問題に全然触れないわけにはいかないであろう。

「愛を追い求めなさい。また霊の賜物を、ことに預言することを、熱心に求めなさい」（I コリ 14:1）。この箇所によれば、「預言する」賜物は、霊的な種々の賜物の中で、重要な地位を占めることがわかる。なぜなら、御霊がこの賜物を授けてくださらなければ、教会の徳を高めようがなく（I コリ 14:4）、教会も長く続かないからであろう。旧約時代に、神が各時期に興された預言者は、多

くはない。その職務は少数人の特権であった。しかし、新約時代になると、みんなが学びみんなが勧めを受けるために、一人残らず預言をすることができる（I コリ 14:30～31）。ゆえに、預言することを熱心に求めなさいとパウロはコリント教会の信者に励ましたのである。

2、異言を語る

「異言」を呂振中訳本は「舌を捲いて語る」とし、浅文理訳本は「霊言」（I コリ 12:10）とした。これらの訳文をまとめると、それは地上のある言葉ではなく、霊の言葉であることがわかる。ゆえに、異言を解く賜物を持っている人がいなければ、理解できないのである（I コリ 14:2）。

「わたしは実際、あなたがたがひとり残らず異言を語ることを望むが、特に預言をしてもらいたい。教会の徳を高めるように異言を解かない限り、異言を語るよりも、預言をする者の方がまさっている」（I コリ 14:5）。ここの聖句は「預言をする」賜物を「異言を語る」賜物の上に並べたが、後者の地位を転覆することはできない。実は、異言を語る賜物はすべての霊の賜物の中で、相当の地位を占めている。なぜなら、解く者がいれば、それによって教会の徳を高めることもできるからである。パウロがそう言ったのは、彼らが順序よく、集会の規則を守らず、解く者がいなくても、異言を語るため、混乱の状態になったからである（I コリ 14:23、27～33、40）。

異言を語る賜物は、コリント人への第一の手紙 14 章から見れば、二つに分けることができる：一つは祈る時、直接神に語るものである（2、14～15）。その目的は自分の徳を高めるところにある。もう一つは御言葉を伝える時、人々に語るものである（4）。その目的は教会の徳を高めるところにある（5～6、26）。コリント人への第一の手紙 12 章 10、28、30 節にある「異言を語る」は「異言を解く」と並列され、特別な賜物であり、人々に語るものに属する。



そのほかに、「異言を語る」についてのいろいろな問題は、本書の第九章第一節・第一項目の「異言を語る」、第二節の「異言の効果」、第三節の「特殊な賜物」の中に、さらに詳しい説明があるのでご参考ください。

3、異言を解く

祈る時に語る異言は直接神に語り、人に対して語るのではないので、特別な状況でなければ、解く必要がない。しかし、会衆向けの異言は、集まった人々の徳を高めるため、解く者がいてこそ、目的を達成することができる（I コリ 14:5、12～13、27）。そうでなければ、人の徳を高めることができなければならず、集会の秩序もそれによって混乱してしまうのであろう（23、33）。

異言を解く者がいない時には、教会では黙っているべきである。それは、異言を語ってはいけないということではなく、目標を移転して、神に対して語ればよいのである（28、39）。

「すべてこれらのものは、一つの同じ御霊の働きであって、御霊は思いのままに、それらを各自に分け与えられるのである」（I コリ 12:11）。

賜物を分け与える主権は、完全に聖霊にある。御霊は思いのままに行われ、人の干渉するところではない。わたしたちは自分が最も不思議に思った賜物を必要とするかもしれないが、御霊は別なのを与えてくださる。だから、人の需要によらず、御霊の需要によることは持つべき認識と態度である。教会を建てるために御霊が分け与えられる賜物は、以上の九つのほかに、ある学者の説によると、ローマ人への第一の手紙 12 章 6～8 節、コリント人への第一の手紙 12 章 28 節、及びエペソ人への手紙 4 章 11 節にも、皆聖霊による職務と書かれているので、「charismata」の中に含まれるべきであろう。



第七節 賜物の基礎

コリント人への第一の手紙 12 章から 14 章までによれば、当時のコリント教会の状況をはっきり見ることができる。教会を建てる賜物という課題に関しては、この認識をなおざりにしてはならない。12 章に、パウロは賜物のそれぞれの違いと体の現象が一致することを以って、コリント教会の偏見を正した。14 章に、パウロは教会が霊の賜物を生かす時、秩序問題に注意を払うべき点を以って、彼らの濫用を警戒した。13 章は 12 章と 14 章のつながりである。12 章にある種々の賜物を正しく生かすには、14 章の注意事項を考えなければならないが、最も根本的な原則は、やはり 13 章にある愛を強調することなのである。

一、コリント教会の誤り

霊の賜物は愛と絶対的な関係はない。コリント教会は種々の賜物を持っているが、貴重な愛に欠けていた。そこから、パウロが指摘したように、教会を建てるのに妨げとなった誤った観念が生じた。第一、彼らの間には紛争があり、「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケパに」「わたしはキリストに」と言い合っていた。みな語ることを一つにし、紛争がないように、同じ心、同じ思いになって、堅く結び合うようにとパウロは勧めた（I コリ 1:10～13、3:1～8）。第二、彼らは体の中に分裂があり、心を一つにしないため、キリストにある一体の関係を失った。パウロは多くの肢体が一つの体につながっていることを譬えにして、キリストにあって一つとなるべきことを勧めた（I コリ 12:4～6、12～16）。第三、彼らは自分の賜物に頼って、人の賜物を見下げ、教会で自分の地位が最も尊いと思っていた。しかしパウロが言うには、すべての賜物にそれぞれの効果があり、人が弱いとしている肢体でも欠かせないものである（I コリ 12:17～24）。

「みんなが使徒だろうか。みんなが預言者だろうか。みんなが教師だろうか。



みんなが力あるわざを行う者だろうか。みんながいやしの賜物を持っているのだろうか。みんなが異言を語るだろうか。みんなが異言を解くのだろうか」(I コリ 12:29~30)。健全なる教会を建てるのに、聖霊が各自に分け与えられた種々の賜物は皆必要である。コリント教会はこの真理を悟らず、互いに見下げ、高ぶり、党派心があったので、明らかに愛の精神に逆らっていたのである。それで、体の中に分裂がなく、それぞれの肢体が互にいたわり合うようにパウロは勧めた。もし一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶからである(I コリ 12:25~26)。

二、愛を賜物の土台とすべき

神の教会において最も危険なのは、賜物を持っているが愛がなく、皆虚栄を重んじ、自分のことばかり考えて人のことを考えない事である(参考：ペリ 2:3~4)。パウロはコリント教会の状況をよく知った上で、コリント人への第一の手紙 12 章を書いて、彼らの誤った観念を正した。しかも 13 章を書いて、彼らに最も優れた道を示し(I コリ 12:31)、彼らを分裂の危機から救い出そうとしたのである。

「たといわたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい鐃鉢と同じである」(I コリ 13:1)。「人々の言葉を語る」という文句を、KJV 訳は「人の巻舌音で語る」とし、それは賜物の中の一つである「異言を語る」と同じ意味である。12 章と 14 章に書いてあるコリント教会の状況から見れば、このように推測してもよかろう。人には、もし愛がなければ、異言を語る賜物があり、パラダイスに通じる言葉を知っていても、何の価値もない。それはやかましい鐘と騒がしい鐃鉢のように、騒音だけを発するが、人の徳を高めることはできない。

「たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識



とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい」(I コリ 13:2)。愛はすべての雄弁やすべての霊の賜物に勝る。愛がなければ、御言葉を宣べ伝える才能があっても、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じて、或いは強い信仰があっても、大したことはない。なぜなら、愛がなければ、すべての賜物は悪用される恐れがある。それによって、教会の秩序を壊し、教会が正常に成長することに影響を及ぼすからである。

「たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益である」(I コリ 13:3)。「全財産を人に施す」のは、最も慈悲深い行いではないのか。しかし、ある人は施しを自分の良い行いとして誇り、単純な動機に基づいて救済をしない(マタ 6:1~2)。その施しは人の益になるが、自分の益にはならない。「自分のからだを焼かれるために渡す」のは、最も偉大なる犠牲ではないのか。しかしある人は自分の名前が永く伝えられ、消え果てることがないために犠牲を払う。そこにまったく愛の本心がないのである。「自分を誇るため」と付け加えた古写本もある。このような犠牲は、いくら勇ましくても、彼にはやはり無益なのである。

愛は最も優れた道であり、霊の賜物にあるべき土台である。愛こそキリストの体を成長させ、そしてわたしたちを育てていくのである(エペ4:16) !

三、聖愛と自然愛

「愛」という文字は、ギリシャ原語に「聖愛」と「自然愛」の区別がある。いわゆる「聖愛」とは、神からの愛であり、あるいは生れ変わった人の信仰から出てくる愛であるが、ギリシャ語の「agape」である。いわゆる「自然愛」とは、生まれつきの愛であり、社会の秩序を維持する人間愛であるが、ギリシャ語の



「philia」である。

「agape」という字は今のギリシャ語の文献に使われているのはまれである。そして、その中に含まれている意味も、聖書のように深刻で広大ではない。もしキリストが命を捨ててくださらなければ、この字の意味は、言うまでもなく、それほどずば抜けることはない（ロマ5:8、Iヨハ3:16）。コリント人への手紙13章に、パウロが言ったのはこの愛であり、新約聖書に出ているあらゆる愛もほとんどこの字が使われた。ヨハネ第一の手紙4章7節から、ヨハネはこの愛の本質を述べた。7節：「愛は、神から出たものなのである。すべて愛する者は、神から生れたもの」、8節：「愛さない者は、神を知らない。神は愛である。」、9節：「神はそのひとり子を世につかわし、…それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである」。

「philia」に含まれている意味は、家族、親類及び友達同士にある自然の愛情であり、すなわち、人間の本能からの愛、天然の愛とも言えよう。

第八節 教会は唯一である

教会は唯一であるべきである。キリスト教と呼ばれる一般の教会は、何千個の教派があるが、すべてをキリストの教会と見てはならない。では、どれがキリストの教会なのであろうか。それは本章第四節「教会にあるべき条件」にすでに述べたが、ここでは、聖書から教会が唯一であるべき根拠を挙げて証明しよう。

一、宮は一つ

信者は聖霊の宮と言われる（Iコリ6:19）。信者によって組み合わせられた教会もまた聖霊の宮と言われる（Iコリ3:16～17、エペ2:22）。それは、旧約時代の



宮を象徴とした。

旧約時代に、宮を建てる材料の多少を問わず、宮はただ一つであった。なぜなら、神は一人しかおられないからである(申 32:39)。新約時代においても、信者数を問わず、信者がキリストにつき建てられた霊の家も、ただ一つであるべきである(Ⅰペテ 2:5)。なぜなら、御霊は一つだからである(Ⅰコリ 12:4、エペ 4:4)。

二、体は一つ

教会はキリストの体であり(コロ 1:24)、信者はキリストにつき各自が互に肢体である(ロマ 12:5)。肢体は多くあるが、体は一つなのである。なぜなら、この体に宿っておられる聖霊は一つであるので、肢体が体の中で分裂してはならないからである(Ⅰコリ 12:20、25、エペ 4:4)。

三、花嫁は一人

教会はキリストの花嫁である(Ⅱコリ 11:2、黙 21:9~10)。キリストの花嫁はただ一人であり、娘たちから特別に選び出されたのである(雅 6:8~9)。従って、キリストと一体となった教会も一つであるべきである(エペ 5:31~32)。

アダムはキリストの型であり(ロマ 5:14)、キリストの預表でもある(Ⅰコリ 15:45)。神はもっと多くの人間を造る霊の力を持っておられる(マテ 2:15)が、最初の人アダムのためには、ただ一人の配偶者を造られた。従って、最後のアダム(イエス・キリスト)にも配偶者(教会)は一人であるべきなのである。

「その日、七人の女がひとりの男にすがって、『わたしたちは自分のパンを食べ、自分の着物を着ます。ただ、あなたの名によって呼ばれることを許して、わたしたちの恥を取り除いてください』と言う」(イザ 4:1)。



「その日」は終りの日を指している(イザ 11:10~12、22:12~13、24:21、27:12~13)。「七」は完全の数字であり、はなはだ多いことを指している。「女」は教会であり、「男」はキリストである。「パン」は主の言葉である(参考:アモ 8:11)。「着物」は行いである(参考:黙 19:8)。「恥」は罪である(黙 3:18、16:15)。

これは世の終わりの一般の教会の真相である。彼女たちは世の知恵に頼り、自分の好みに合う教えを發明するが、キリストの霊によって啓示された真理を好まない。自分が正しいとする汚れた衣のような行いに頼るが(イザ 64:6)、キリストが賜る義を必要としない。彼女たちはこれらの条件の下で、キリストに引き受け、恥を取り除いてもらいたがる。しかし、キリストはそれを認めず、ただ一人だけを愛される。即ち、彼の真理を受け、彼の血潮によってバプテスマを受け、義とされた真の教会なのである。

四、神の家は一つ

教会は神の家である(1テモ 3:15)。神はすべての者の父であり(エペ 4:6)、たましいの父である(ヘブ 12:9~10)。信者は神の家族である(エペ 2:19)。

神の家の子たる者は、いくら多くても、父は同じである(1コリ 12:6)。従って、天の父である神の家は一つであるべきである。

五、真のぶどうの木は一つ

主イエスは真のぶどうの木であり、信者はこの木につながっている枝である(ヨハ 15:1、5)。枝は数多くて数え切れないが、木につながり一体となるのである。

キリストは一人であるので、キリストの命が宿っておられる真の教会は一つである(ヨハ 15:4~6)、真のぶどうの木を象徴とする霊の教会も一つであるべ

きである。

六、主の羊の群は一つ

イエスはよい羊飼いであり、(ヨハ 10:11、14)、信者は羊である(参考：ヨハ 10:26)。羊の数を問わず、やはり一群であり、一人の羊飼いに導かれるのである。「この囲い」とは主が特別に指定された教会のことである(ヨハ 10:16)。

ゆえに、キリストの霊をもつ羊飼いは、真にキリストの教会に属する唯一のものである。

七、箱舟は一つ

ノアの時代は、暴虐が地に満ち、すべての人が地の上でその道を乱した。それによって、神に洪水で滅ぼされた(創 6:11~13、7:11~12、21)。ノアだけは乱れた世の義人であり、悪に遠ざかり、神と共に歩んだ。彼は啓示によって、箱舟を造って、その家族を救った(ヘブ 11:7、I ペテ 3:20、II ペテ 2:5)。

ノアが造った箱舟は、世の終わりの真の教会を預表する。第一、ノアの箱舟は、世の罪が積もりに積もって、洪水で滅ぼされる前に造られた。終わりの真の教会も、世の罪が積もりに積もって、神に滅ぼされる前に建てられた(黙 7:1~3、18:4~5、使徒 2:17~21)。第二、ノアの箱舟は、ことごとく神の命令に従って造り(創 6:14~16、22)、人の意志によって変更はしなかった。終わりの真の教会も、ことごとく神の命令に従って建て(マタ 28:20、参考：ガラ 1:6~9)、あえて人の意志によって変更はしない。第三、ノアの箱舟は中に入ったすべてのものの命を保った(創 6:18~20、7:23)。終わりの真の教会は、再生の洗いを受け、聖霊により新たにされることを神の国を継ぐことの保証とするのである(ヨハ 3:5、テト 3:5、I ペテ 3:20~21、エペ 1:14)。



ノアが造った箱舟は一つであり、神が洪水をもって不信仰な世界を滅ぼされた時に唯一救われたのである(Ⅱペテ 2:5)。終わりの日に、神がこの世界を滅ぼされる時、救われる真の教会もまたただ一つなのである(エペ 4:4、雅 6:9)。

八、取り去られるのは一人

キリストはご自身が再臨される時について語られた、「そのとき、ふたりの者が畑にいと、ひとりを取り去られ、ひとりを取り残されるであろう。ふたりの女がうすをひいていると、ひとりを取り去られ、ひとりに残されるであろう」(マタ 24:40~41)。畑にいる二人の者とうすをひいている二人の女は、二つの教会を象徴している。一人は天の家に召されるが、一人は残される。

現在、人類は地に満ちているが、神の目から見れば、二人しかいないのである。一人はアダムにつながり、結果としては残されて、永遠の死に入る。一人はキリストにつながり、結果としては召されて永遠の命に入る(Ⅰコリ 15:22)。

今日の各教派が部門別に分けている現象は、イザヤ預言者が語った預言が成就されたものである(イザ 4:1)。神の目から見れば、やはり二人である。一人は、肉によって生れて、嗣業を受け継ぐことができない。一人は、約束によって生まれて、嗣業を受け継ぐのである(ガラ 4:23、30)。

第九節 教会は必ず一つとなるべし

一、ヴィスロフ、カール・F.の主張

ヴィスロフ、カール・F. (Wisloff, Carl Fr.)はその著作である「わたしは聖霊を信じる」に、「教会が一つになるのは危険であり、毒蛇を懐に入れるようなことである」と書いた。



これは五体が互につながり、一つの体になったことが危険だという言い方と同じで、でたらめである。なぜならば、第一、教会がキリストの体である以上、人の思いによって分裂してはならない。第二、聖霊が一致を守り続ける心をくださる以上、教会の一つになることを危険と見てはならないからである。今日のクリスチャンは一つにならない原因がどこにあるかを努力して探るべきではないか。決して教派の混雑から教会が一つになることを危険だと見てはならないであろう。

ヴィスロフ、カール・F. はまた書いた、「ある人は教会を統一させ、教会をある方面において、完全に一致するように努めている。イエスはみんなの者が一つとなるためでありますと祈られたが、その意味は、完全に一致することだと彼らは主張する。しかし、イエスのこの話は、各教会が自分の特点を抹殺して、一つとなる境地に至らせるためではない。決してそうではない。なぜなら、その代価があまりにも大きいからである。各教会に対しても、すべてのキリスト教に対しても、その犠牲は大きいものなのである」。

イエスの祈りは、各教会が自分の特点を抹殺して、一つとなるように合わせる意味ではないことが当然である。しかし、問題は決して主が各教会に自己の特点を抹殺するのを望まれるかどうかにあるのではなく、逆に各教会の特点によって、ご自分の体を分裂してしまうのを望まれるかというところにある。教会の分裂と各教会団体に特点があるのは、十六世紀以降に起こったことであるが、イエスが祈られた時、また使徒時代にはなかったものである。

目前の困難だけによって、主の御こころを自分の思いのままに推測してはならない。さらに、代価を払いたくないために、御こころをひっくり返してはならない。これは皆危険だからである（参考：ロマ 8:5～8）。今日のクリスチャンはまず、主の御こころが何であろうか、そして聖書の本意は何であるかをわ



きまえるべきである。そこから、この共通の目標に向かい、心を合わせて努力するのではないか。御ところが天に行われるとおり、地にも行わせる者こそ、キリストの僕である(マタ 6:10、ガラ 1:10)。

二、イエスの御心

イエスが別れる時に祈られた、「聖なる父よ、わたしに賜った御名によって彼らを守って下さい。それはわたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります」。「わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします。父よ、それは、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためであります。すなわち、彼らをもわたしたちのうちにおらせるためであり、それによって、あなたがわたしをおつかわしになったことを、世が信じるようになるためであります。わたしは、あなたからいただいた栄光を彼らにも与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります。わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは、彼らが完全に一つとなるためであり、また、あなたがわたしをつかわし、わたしを愛されたように、彼らをお愛しになったことを、世が知るためであります」(ヨハ 17:11、20~23)。祈りの内容から、イエスは決して教会が分裂することを好まれず、一つとなることを望まれることがわかる。これは極めて明白な事実である：

第一：11 節の「彼らも一つになる」とは、父と御子が一つであるように、使徒たちも一つになってほしいということである。使徒の間が一つになるのは、真理において一つになることである。なぜなら、真理に対して意見が食い違うなら、分裂するに至るからである。

第二：20 節の「彼ら」とは使徒たちのことを指している。「人々」とは主に帰

依した人々であり、五旬節の後に建てられた教会のこととも言えよう。いったい、イエスは使徒たちと彼らによって建てられた教会のために、父に何を求められたのか。21 節に「みんなの者が一つとなるためであります」と言われたとおり、イエスは使徒たちが意見において一致であることを望まれるのみならず、すべて主に帰依した者も、皆真理において一つとなり、互に自分の意見を持ち続けたいことを望まれる。なぜなら、教会は使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものだからである(マタ 16:18、エペ 2:19~20)。

第三：23 節に書いてあるように、すべて主に属する者が完全に一つとなることによって、主はご自身が父に遣わされたひとり子であることを世の人に示し、父が御子と教会を愛されることを示された。

イエスはまた言われた、「わたしにはまた、この囲いにはない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、わたしの声に聞き従うであろう。そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼いのものとなるであろう」(ヨハ 10:16)。これは教会が一つになることに関する聖句であるが、四つの点に分けて説明しよう：

第一、「羊の囲い」は教会である。「この囲い」はある特定のキリストに属する教会である。「羊飼い」はイエス、また彼の霊(聖霊)である。

第二、「他の羊」は、羊飼いの導きがない失われた羊、即ちまだ主を信じない世の人のことである。イエスは彼らが身を託すところがないのを憐れんで、喜んで真理で導き、羊の囲いに入れられる。また、「他の羊」は今日盲人を手引きとし、声を聞き間違え、違った群れに入ったクリスチャンのことをも言っている(参考：マタ 15:3~9、23:15~19、ガラ 1:6~9、エレ 50:6)。主は各羊の囲いに散っているご自分に属する羊をあわれに思って、



一匹ずつ「この囲い」に導いて、真の羊飼い(キリスト・イエス)の名の下に帰されるのである。

第三、主の羊は主の声に聞き従い(ヨハ 10:27)、一つの群れ、ひとりの羊飼いに帰す。神から来た者でなければ、主の羊ではない。御言葉に聞き従わなければ、一つの群れとなることはできないのである(ヨハ 8:47、10:26)。別れる前の祈りに、イエスは天の父に使徒たちが一つになるように求められたが、滅びの子だけは除外された(ヨハ 17:12)。主の御声を聞いたが、近づいてこないすべての者は、滅びの子であるユダに属し、結局一つの群れとならない。ゆえに、教会が一つになるのは、各教会団体を一つにすることではなく、羊飼いの声に聞き従った主の羊が続々と一つの群れとなり、一人の羊飼いに帰すことなのである。そうすれば、簡単であり、安全であり、しかも何の代価も払わずに済み、何の危険もないのである。

第四、「わたしの声」は聖霊の御声である。聖霊はイエスの霊だからである。「この囲い」は真の羊飼いが特定された教会、即ち聖霊が宿っておられる真の教会である。イエスは言われた、「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう」(ヨハ 7:37~38)。「わたしに来る者を決して拒みはしない」(ヨハ 6:37)。「御霊も花嫁も共に言った、『きたりませ』。また聞く者も『きたりませ』と言いなさい。かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」(黙 22:17)。「かわく者」は御霊の注ぎを慕う者、即ち、主に属する羊であり、聖霊の御声を聞いて、続々と聖霊が宿っておられる真の教会に入ってくる者である。

教会が一つになるのは、イエスの御こころであり、今日のクリスチャンが努

力すべき重要な務めでもある。イエスは言われた、「おおよそ、内部で分れ争う国は自滅し、内輪で分れ争う町や家は立ち行かない」(マタ 12:25)。教会を分裂させ、クリスチャンが争い合うのは悪魔が教会を破壊する最も得意なわざである。争いは教会の発展の致命傷である。今のクリスチャンがもし自覚して、一日も早く教会が一つになることを促すなら、神の教会はどんなに盛んになるのであろうか。

三、いかにして教会が一つになることを促進するか

教会が一つになるべきである以上、では、いかにしてこの偉大な目標を達成させるのか。聖書の記しによれば、次の三点は教会が一つになることを促す鍵である。

1. 主の御名の下に一つになる

イエスが別れる時に祈られた、「聖なる父よ、わたしに賜わった御名によって彼らを守って下さい。それはわたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります」(ヨハ 17:11)。教会は形のない霊の集まりである。いつでもどこでも、主を信じるすべての者は、すでに主の御名に帰した。御名に帰した以上、その教会に「イエス」の御名をつけなければならない。御名によって守られ、一つとなるためである。今、多くの教会団体はこのことをおろそかにしている。教義の特徴や人名、地名、制度名などをつけるのが多数である。教会はイエスの教会であり、イエスを信じている以上、なぜ教義の特徴や人名、地名、制度名などを教会の上にむやみにつけることがあり得ようか。

2. 聖霊の内に一つになる

御霊は一つであるので、一つの心を賜ってくださる(エペ 4:3~4、エゼ 11:19)。決してキリストの体を分裂させ、人と人の争いは許さない。それで聖霊を受けた信者は、必ずキリストにあって全体が組み合わされ、霊なる神の住まいとな



る(エペ2:21~22)。パウロが言った、「なぜなら、わたしたちは皆、ユダヤ人もギリシャ人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によって、一つのからだとなるようにバプテスマを受け、そして皆一つの御霊を飲んだからである」(I コリ 12:13)。聖霊は火のようなものであり、おのおのの先入観、異民族の隔たりや階級の偏見を燃えつくす。それであらゆる聖霊を受けた人は、一つの体となり、教会が統一することを実現する。今日、教会の分裂の原因は、聖霊がないことにある。ヨハネは言った、「わたしたちは神から出たものである。神を知っている者は、わたしたちの言うことを聞き、神から出ない者は、わたしたちの言うことを聞かない。これによって、わたしたちは、真理の霊と迷いの霊との区別を知るのである」(I ヨハ 4:6)。すべて真理の霊(聖霊)を受けた者は必ず互に知り合い、互に聞き従い合う。そうでなければ、互に聞き従わないであろう。今日の教会が分裂に至った原因はここにあるのである。

3. 真理において一つになる

教会は使徒たちと預言者たちという土台の上に建てられるべきである(マタ 16:18、エペ 2:19~20)。即ち、彼らが予告した言葉を「信仰を同じようにするもの」とし(ガラ 1:6~8、テト 1:4、ユダ 17)、神の子を信じる信仰において一致することである(エペ 4:13)。彼らが宣べ伝えたのは、主が命じられ、主の啓示によるものである(マタ 28:20、ガラ 1:11~12、エペ 3:3~5)。それに聞き従わない者は、神から出たものではなく、真理の霊を受けていないのである(I ヨハ 4:6)。パウロは言った、「あなたは真理の言葉を正しく教え、恥じるところのない錬達した働き人になって、神に自分をささげるように努めはげみなさい」(II テモ 2:15)。「からだは一つ、御霊も一つである。あなたがたが召されたのは、一つの望みを目ざして召されたのと同様である。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ、神は一つである」(エペ 4:4~6)。聖書は一冊、真理は一つであり、「しかり」と同時に「否」というものではない(II コリ 1:18~19)。各教会団体の教義が、確実に聖書を根拠とし、正しい意味を掴んだならば、

必ず「信仰を同じように」し、分裂にはならないのであろう。今日の各教会団体の信仰は一致せず、バプテスマの仕方も様々である。多くの教派は、バプテスマが罪赦しに関係なく、イエスを救い主と認めれば救われるとまで主張している。このように天国に入る「近道」は一体聖書のどの書巻、何章何節に書かれているのか。教会の分裂は実にここから始まったのである。

以上の三点は教会が一つになる鍵であり、主の羊の囲いに入る基本的な原則である。あなたの教会に「イエス」の御名がつけられているか。あなたは聖霊を受けたか。あなたが信じているのは、使徒と預言者たちが伝えた健全な教えであり、最初の福音であるか。今イエスは聖霊を通して、あなたが「この囲い」に入って、一つの群れ、一つの羊飼いのものとなるように呼びかけておられる。もし強情に拒否すれば、主の羊ではなく、結果見捨てられてしまう。主はただご自分が指定された「羊の囲い」しか認められないからである(ヨハ 10:16)。

問題

- 一、教会の定義は何であるか。
- 二、教会は一般の団体と何の区別があるか。
- 三、教会の由来を述べてみよ。
- 四、教会に備えるべき条件は何であるか。
- 五、聖霊はいかにして教会を治められるか。
- 六、コリント人への手紙 12 章に書いてある教会を建てる霊の賜物は、いくつあるか。いかにして分類するか。
- 七、霊の種々の賜物は何を基礎とすべきであるか。なぜそうしなければならないか。
- 八、教会が一つである根拠を述べてみよ。
- 九、教会はなぜ一つにならなければならないか。
- 十、いかにして教会が一つになるのを促進するか。



第五章 聖霊と信者

教会は信者たちがキリストにあってできた団体である。そこに聖霊が下り、教会を治めるのである。信者も聖霊が宿って、導いてくださることを必要とする。教会に聖霊がなければ、キリストに属さず、霊の命がない集まりとなってしまう。信者はもし聖霊がなければ、キリストと何の係わりもなく、信仰に入る目標を達成することができない。

第一節 聖霊と義となること

一、義となるとは何か

「義となる」というのは、パウロの手紙によく見られる言葉である。その意味を考証すると、聖書の説明は、神に義と認められる(ロマ 4:3、6)、義を得る(ロマ 10:4)、キリストにあって神の義となる(Ⅱコリ 5:21)、あるいは義とされるなどである。概括すると、神の御座の前に、罪が赦され、義となると宣告されることである。この宣告は神の義によって完成される以上(ロマ 5:17～19)、法廷の尊厳を充分持ち、すべての造られた者を黙らせることである(ロマ 8:33～34)。

義とされるには、二つの事が含まれる：第一は消極的な面であるが、神は罪過の責任を罪人に負わせることをせず(ロマ 4:6～8、Ⅱコリ 5:19)、すべての者の不義をイエスの上におかれたことである(イザ 53:6)。第二は積極的な面であるが、神はキリストの義を信者に着せ、信者の義とし(Ⅱコリ 5:21、ガラ 3:27)、そして神の子たる身分を授けてくださったことである(エペ 1:5)。これで、義とされるのは神の義によるが、律法の行いによるのではないことがわかる(ロマ 3:21、ガラ 2:16)。



二、なぜ義とされるべきか

「そして、一度だけ死ぬことと、死んだ後さばきを受けることとが、人間に定まっている」(ヘブ 9:27)。死は罪によるものである。罪のあるところに、死がある。罪のないところに、死はない。裁きは死によるものである。死のあるところに、裁きがある。永遠の命に入り、死なぬ者は、死んだ後の裁きを免れる。神のこの定めは、彼の義を表し、すべての造られた者を黙らせるためなのである。

神がイスラエル人を裁く基準は、彼が授けられた律法である。確かに実行する者は、義とされるのである(ロマ 2:12~13)。しかし、律法が定められて以来、完全に行った者は一人もない(ガラ 5:3)。また律法によって、神のみまえに義とされる者は一人もない。これは明らかな事実である(ガラ 3:11)。即ち、律法の行いによる者は、皆呪いの下にある原由なのである(ガラ 3:10)。

神が異邦人を裁く基準は、その行いが良心に従ったかどうかによる。彼らには律法がないが、自然のまま、律法の命じる事を行うなら、たとえ律法を持たなくても、彼らにとっては自分自身が律法なのである。彼らは律法の要求がその心にしるされていることを現し、そのことを彼らの良心も共にあかしをして、その判断が互にあるいは訴え、あるいは弁明し合うのである(ロマ 2:14~15)。しかし、異邦人は自分を義とすることができないばかりか、イスラエル人以上に深い罪の中に陥り、抜けることができないのである(ロマ 1:18~32、エペ 2:1~3、4:17~19)。

おおよそ律法によって義とされようとしたイスラエル人も、自分のよい行いによって義とされようとした異邦人も、現実の試験の前に、大失敗した。ゆえにパウロはダビデの詩を引用して証した、「義人はいない、ひとりもない。悟りのある人はいない、神を求める人はいない。すべての人は迷い出て、ことごと



とく無益なものになっている。善を行う者はいない、ひとりもない」(ロマ 3:10～12、参考：詩 14:1～3、53:1～3)。

上に述べたように、イスラエル人が律法を守れない罪、及び異邦人が良心に従って善を行えない罪は、自分自身が犯した罪であり、「本罪」と言われる。そのほかに「原罪」がある。それは、人類の祖先から代々伝わってきた罪である(ロマ 5:12)。ダビデは霊を受けて、人が生まれる前に罪の中にあると認めた(詩 51:5)。

「聖書はすべての人を罪の下に閉じ込めた」(ガラ 3:22)。世の中に義人はいない。ユダヤ人もギリシャ人も、聖書によってことごとく罪の下にある(ロマ 3:9)。罪の支払う報酬は死である(ロマ 6:23)。死んだ後は裁きを受ける。裁きの結果は、永遠の滅びに至る刑罰を受けることである(Ⅱテサ 1:7～9)。「罪」と「刑罰」、この惨めで恐ろしい事実は、わたしたちが必ず神に義とされるべき唯一の理由なのである。

三、聖霊によって義とされる

神は世を愛され(ヨハ 3:16)、すべての人が救われ(Ⅰテモ 2:4)、ひとりも滅びることがないことを望んでおられる(Ⅱペテ 3:9)。神はすべてのものの父だからである(エペ 4:6)。神がモーセを通して供え物をささげる律法を告げさせられたのは、神の愛の宣告である(レビ 1:1～4、ヘブ 9:22)。キリストが罪人のために死なれたことは、神のわたしたちに対する愛を示されたのである(ロマ 5:8、Ⅰペテ 2:24)。

聖書はすべての人を罪の下に閉じ込めた。神の御前に立って、人は善が一つもなく、自分を救うことができない(ガラ 3:22)。これは人が神によって義とされる前提なのである。力を尽くして義を追い求めようとしているが、義が行え



ない者は、結果として、良心に責められるばかりである。自分を責めることは、神の義に近づくために渡る架け橋である。これ以上ほかの道がないと、その者は知っているからである(ロマ 7:23～25)。

イエスは言われた、「わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」(ルカ 5:32)。世に元々義人はいないのだが、自分を義とする人は多い。これらの人は、自分の義を立てようと努めている以上、悔い改めて神の義に従うことはしないのである(ロマ 10:3)。ゆえに、自分を義人だと思ふことは、義とされる大きな障害となる。ただへりくだって悔い改め、主の憐れみを求める者だけが、神に義とされるのである(ルカ 18:9～14)。

人が義とされる恵みは、価なしに、いただくのである(ロマ 3:24)。アブラハムでさえ同じである(ロマ 4:2～3)。もし、あえて義とされるのに人が何のしわざをしたかと言うなら、せいぜい悔い改め、信じ、バプテスマを受けたことだけであろう(使徒 2:38、ロマ 4:5)。なぜなら、主はわたしたちの罪過のために死に渡され、よみがえらされた。それでわたしたちは、彼にあって神の義となるからである(ロマ 4:25、Ⅱコリ 5:21)。「なぜなら、律法を行うことによって、すべての人間は神の前に義とせられないからである。…わたしたちは、こう思う。人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるのである」(ロマ 3:20、28)。

義とされる唯一の目的は、神の怒りから救われ、法廷において、裁きに打ち勝つことである(ロマ 5:9)。御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまるのである(ヨハ 3:36)。神に義とされた人こそ、神に対して平和を得(ロマ 5:1、10)、もはや、訴えられることを恐れないのである(ロマ 8:33～34)。



義とされる唯一の方法は、信じてバプテスマを受けることである。だれでもバプテスマを受けたとたんに、義とされる働きが完成されるのである(マル 16:16、使徒 22:16、I コリ 6:11)。バプテスマを受ける効果は、罪人から義人へと身分が変わることである。イエスの尊い血によって神に義とされるこの恵みは、旧約時代にすでにその影が見られたのである(ヘブ 9:22、レビ 17:11)。

バプテスマに罪を赦し、義とする働きがあるというのは、一、罪のない小羊が人のために罪とされ、永遠の聖霊によって、ご自身を祭壇にささげられたからである(II コリ 5:21、I コリ 5:7、ヘブ 9:12~15、ヨハ 10:18)。二、聖霊は罪赦しの権威がある。それはバプテスマを授ける者をとおして、現される(ヨハ 20:22~23)。また自ら真理のために証しされるからである。即ち水の中に主イエスの血があることを証しする(I ヨハ 5:6~8)。「(神の子)とは、洗礼の水と十字架の血によって使命を果たされたイエス・キリストです。水によるだけでなく、水と血によって使命を果たされたのです。そして、聖霊はこのことを証しするかたです。というのは、聖霊は真理だからです」(共同訳: I ヨハ 5:6)。

それで、義とされる効果において、聖霊は確かに極めて重要な位置にあることがわかる。聖霊によって、洗われ、清められ、義とされる真理をわたしたちは認めざるを得ないのである(I コリ 6:11)。

ほかの角度から見れば、罪人が自分の罪を告白し、イエス・キリストを自分の救い主と認め、主の義に近づけることは、すべて聖霊の感動によるものである(ヨハ 16:7~8、I コリ 12:3)。罪を責めることと導くこととは聖霊の予備工作であり、義とされる効果において、おろそかにしてはならず、重要な地位を占めているのである。

第二節 聖霊と清くなること



一、清くなるとは何であるか

「キリストに合うバプテスマを受けたあなたがたは、皆キリストを着たのである」(ガラ 3:27)。この聖句によれば、だれでもバプテスマを受けた当初から、キリストを着たのである。キリストを着るのは、新しき人を着ることであり、真の義と聖とが備わるのである(エペ 4:24)。それは名義上だけではなく、行いが必要である。つかの間のことではなく、永く続くべきものである(ロマ 13:14)。

「清くなる」ことを簡単に言うと、絶えずキリストを着ることによって、肉の欲を満たすことに心を向けないことである(ロマ 13:14)。清くなろうと努める人は、その生活に必ず行いが現れる。最も明白なのは、その外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていくことである(Ⅱコリ 4:16)。なぜなら彼は、もはや古き人を脱ぎ捨て、心の深みまで新たにされたからである(エペ 4:22～23)。

こうして、聖別されることは即ち、この世に対して死んでしまったことであり(ガラ 6:14)、体を神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげることであり、この世と妥協せず、むしろ心を新たにすることによって、造りかえられることである(ロマ 12:1～2)。

二、なぜ清くなるべきか

「ゆえにあなたがたは、みずからを聖別し、聖なる者とならなければならない。わたしはあなたがたの神、主である。あなたがたはわたしの定めを守って、これを行わなければならない。わたしはあなたがたを聖別する主である」(レビ 20:7～8)。「神のみこころは、あなたがたが清くなることである。すなわち、不品行を慎み、各自、気をつけて自分のからだを清く尊く保ち、神を知らない異邦人のように情欲を欲しいままにせず、…。神がわたしたちを召されたのは、



汚れたことをするためではなく、清くなるためである」(Iテサ 4:3~7)。聖別されることは神の御旨であり、旧約時代も新約時代も同じである。召された民が聖別される御ところは、はやくも律法やおきての中に隠されていた。律法とおきては、キリストが十字架の救いを全うされた後(ヨハ 19:30)、より明白になり、固められたのである(マタ 5:17~18、ロマ 3:31)。旧約は影であり、新約は実体だからである(コロ 2:17)。旧約は文字の通りに仕えるものであるが、新約は一步進んで霊に仕えるものである(IIコリ 3:6)。

「従順な子供として、無知であった時代の欲情に従わず、むしろ、あなたがたを召して下さった聖なるかたにならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なる者となりなさい。聖書に、『わたしが聖なる者であるから、あなたがたも聖なる者になるべきである』と書いてあるからである」(Iペテ 1:14~16)。清くなることは信者の本分である：それは異邦人と区別するためである。なぜなら、信者はすべての人から選び出された霊の人だからである(ヨハ 15:19)。人が名実共に従順な子となるためである。なぜなら、聖別されることは神の御旨だからである。人がその召しにふさわしく歩くためである。なぜなら、人を召された神は聖なる方だからである。聖霊を受けた恵みにふさわしくするためである。なぜなら、すべて聖霊を受けた人は神の宮だからである(Iコリ 6:18~19)。自分の身分にふさわしくするためである。なぜなら、イエス・キリストを救い主とした後、わたしたちは皆神の子であり(ガラ 3:26)、また聖徒と呼ばれるからである(ロマ 1:7、Iコリ 1:2)。

「いのちの木にあずかる特権を与えられ、また門をとおって都にはいるために、自分の着物を洗う者たちは、さいわいである」(黙 22:14)。自分の着物を洗い、いのちの木の所に入るのは、単なるバプテスマを受けて義とされる者を指しているのではない。厳格に言うと、死ぬまで聖なる道を離れない聖徒のことを指すべきである。なぜなら、小羊の血で罪を洗い、白い衣を身にまとっている人々



が(黙7:13~14)、もし慎んで聖潔を守り続けなければ、やはり罪によって衣が汚れてしまうからである。このような人は、いのちの木の所まで行けないばかりか、さばきと、逆らう者たちを焼きつくす激しい火とを、恐れつつ待つだけである(ヘブ10:26~29)。

こうして、聖別されることは、信者の本分のみならず、永遠の命に入る望みを抱いている者にも必要なのである。それで、パウロは聖別されることと永遠の命との密接な関係について語った、「…きよきに至る実を結んでいる。その終極は永遠のいのちである」(ロマ6:22)。「聖別されたすべての人々と共に、御国をつがせる」(使徒20:32、26:18)。「御霊によるきよめと、真理に対する信仰とによって、救を得させる」(Ⅱテサ2:13)。

三、清くなるには助け手が要る

「油断することなく、あなたの心を守れ、命の泉は、これから流れ出るからである」(箴4:23)。清くなるには心から始まらなければならない。律法学者とパリサイ人たちは、この最も重要な課題をおろそかにした。彼らは主に責められたが、それは本末を転倒し、外側を清めるが、内側は貪欲と放縦とで満ちているからである(マタ23:25~26、ルカ11:37~41)。

「なぜなら、肉の欲するところは御霊に反し、また御霊の欲するところは肉に反するからである。こうして、二つのものは互に相さからい、その結果、あなたがたは自分でしようと思うことを、することができないようになる。…肉の働きは明白である。すなわち、不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、まじない、敵意、争い、そねみ、怒り、党派心、分裂、分派、ねたみ、泥酔、宴楽、および、そのたぐいである。わたしは以前も言ったように、今も前もって言うておく。このようなことを行う者は、神の国をつぐことがない」(ガラ5:17~21)。情欲は聖別される上での大敵である。バプテスマを受けた者は、今までの罪を洗い



流されたが、罪の支配を追い出すことができない(ロマ6:12)。なぜなら、神に義とされた後、罪はひたすら人を攻めてくるからである。二度と恐ろしい罪悪の中に陥らないように、絶えず古いパン種を取り除き続けなければならない(1コリ5:7)。パン種を取り除くことは、長期に渡る戦いであるが、残念なことに、信者はしばしばこの戦いの失敗者になってしまうのである。

パウロが言った、「そこで、この事をしているのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪である。わたしの内に、すなわち、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている。なぜなら、善をしようとする意志は、自分にあるが、それをする力がないからである。すなわち、わたしの欲している善はしないで、欲していない悪は、これを行っている。もし、欲しないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪である。…わたしの肢体には別の律法があって、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ、そして、肢体に存在する罪の法則の中に、わたしをとりこにしているのを見る。わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」(ロマ7:17～24)。王陽明が楊仕徳と薛尚謙宛の手紙にこう書いた、「山賊を破るは易し、心の賊を破るは難し」。世の人に「至聖先師」と尊ばれた孔子も嘆いた、「義を聞いても改めることができない、悪も改めることができない。これは我が憂いなり！」罪の力はなんと恐ろしいものであろうか。清くなろうとする過程において、多くの人々は失敗に終わった。というのは、人の心は善と悪が戦い合っている戦場であり、しかも、罪の法則はしばしば善の法則より力強いからである。人はそれで、自分を救うことができず、強風に吹かれて、破れかかった舟のようなものである。

熱心に罪の力に勝ち抜き、清くなるように努めているすべての者は、言うまでもなく力のある助け手が必要である。



四、聖霊は清くなる助け手

人間は弱い者であり、自分に頼っては何もできない(ヨハ 15:5)。聖霊だけがこのわたしたちの弱いところの唯一の助け主となり(ヨハ 14:16~17)、弱いわたしたちを助け(ロマ 8:26)、罪の力に勝たせ、清くなるのである。なぜなら、聖霊は上から力を授け(ルカ 24:49、使徒 1:8)、人の道徳意志に根本的な革命をさせてくださるからである。即ち、罪の法則から人を解放し(ロマ 8:2)、神に従順になる肉の心を与えることによって、わたしたちに神のおきてを守らせられるのである(エゼ 36:26~27)。聖書曰く、「御霊のきよめにあずかって、イエス・キリストに従い」(Iペテ 1:2)、「御霊によるきよめと、真理に対する信仰とによって、救いを得させようとし」(IIテサ 2:13)、「聖霊によってきよめられた」(ロマ 15:16)。清くなるには、聖霊は確かにわたしたちの唯一の助け手なのである。

ところが、聖霊を受けた人は、肉に従うことによって死ぬことはあるが、霊に従うことによって、いのちと平安を得ることもある(ロマ 8:5~6)。ゆえに、清くなるかどうかは、体を誰の器としてささげるかによって決められるのである。もし肢体を不義の器として罪にささげるならば、体を罪の支配にゆだねることになる。それで、肉の欲に従い、不法に走ってしまう。もし肢体を義の器として神にささげるならば、罪から解放され、義の僕となって、清められるのである(ロマ 6:12~14、19~20)。

パウロは言った、「霊によってからだの働きを殺すなら、あなたがたは生きる」(ロマ 8:13)。「わたしは命じる、御霊によって歩きなさい。そうすれば、決して肉の欲を満たすことはない」(ガラ 5:16)。これらのことばは、十分に次の二つの事の証明となる。一、あらゆる聖霊を受けた者は、自分の肢体を神にささげる選択を決める自由意志と力を持っている。二、聖霊の導きに従い、聖霊の力に頼れば、必ず念願どおりに欲情を殺し、清められ、永遠に生きるのである。



ヴィスロフ、カール・F. (Wisloff, Carl Fr.)が「わたしは聖霊を信じる」という本にこう言っている、「神はすでに無限なる愛をもってわれわれを救われた。今は、われわれが清められるに努める時である。少なくとも誠実の心と堅固の志をもって、清められるように最後まで努力しつづけるべきである。これは清められるのが神のみわざであることを完全に忘れた主張である」。

われわれの答え：ヴィスロフ、カール・F.の主張は、清められる過程において、人が努力すべき事実を絶対的に否定したものである。イエスが言われた、「天国は激しく襲われている。そして激しく襲う者たちがそれを奪い取っている」(マタ 11:12)。ヘブル人の手紙にも書いてある、「自らきよくなるように努めなさい。きよくならなければ、だれも主を見ることはできない」(へブ 12:14)。天国に入ることと清められることは、密接な関係があり(Ⅱテサ 2:13)、努めることを条件にしている。なぜそれをただ神のみわざだと断言できるのであろうか。もちろん、それは完全に人の力に頼って努力するのではなく、聖霊によって自分の体を打ちたたくことなのである(Ⅰコリ 9:27、ピリ 4:13)。ゆえに、こう言わざるを得ない、「義とされるのは恵みと聖霊によるものであるが、人は信仰をもってそれを受け入れる。清められるのは、聖霊の力によるものであるが、人は努力してそれに従う」。いずれにせよ、清められるには、人は努力すべきである。これは、決して聖書の教えに抵触する主張ではない(Ⅱコリ 7:1)。

第三節 聖霊と救い

一、救いとは何であるか？

救いとは、今までの罪が主の血によって洗い落とされて(使徒 22:16、エペ 1:7、Ⅰヨハ 1:7~9)、義とされ(ロマ 8:33)、今は聖霊に頼って罪の法則から解放され(ロマ 7:24~25、8:2)、自由な者となり(ヨハ 8:36、Ⅱコリ 3:17)、将来天国に引き上げられ、永遠の命を得(マタ 25:34、ヨハ 3:16)、主と共に御国にいるのである(Ⅰテサ 4:17、Ⅱテモ 4:18)。



教会は「正しい者のつどい」(詩 1:5)である故、信仰に入る前の罪がバプテスマによって洗い落とされなければ、なぜ正しい者のつどいの一員として入ることができようか。御国は「義人の国」(マタ 13:43)であるので、主を信じた後、聖霊によって肉の働きを殺して(ロマ 8:13、ガラ 5:16)、清く守らなければ、なぜ正しい者の御国に入って、正しい者と一緒に永遠の命を得ることができようか(ヘブ 12:14、詩 17:15)。

二、聖霊の救いに関わる根拠

人はバプテスマを受けた時、罪が赦され、義とされた(使徒 2:38、I コリ 6:11)。バプテスマの効果は、聖霊の罪赦しの権力と証しによるのである(ヨハ 20:22～23、I ヨハ 5:6～8)。罪は救いの妨げであるが、罪の問題が解決され、義とされれば、救いに入る始まりである。聖霊は罪赦しと義とされることに関わりがある以上、当然、救いにも関わりがあるのである。

神に義とされた者は、義とされた瞬間にたちまち天国に入ったわけではなく、天国に入る道を歩む資格を得ただけである。イスラエル人がエジプトを出たように、紅海を渡ったら、すぐカナン之地に入ったのではなく、ただ一つの始まりだけであったのと同じことである。イスラエル人がエジプトを出てカナン之地に入るまで、前後約四十年の月日が経った。この四十年間は信仰の試練の時期でもあった。ただ勝利を得た者だけがカナン之地に入るのである(民 32:11～12)。新約時代の選民は、義とされた時から天国に入るまでも、まだ一段落の行程がある。それは、清められるまでの過程であり、救いを得る必要な道である(II テサ 2:13)。事実、聖霊は清められる助け手であるので、清められる事は救いに関わっている以上、聖霊を受けたかどうかの問題も、当然救いに関わるのである。

パウロが言った、「もし、キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキ



リストのものではない」(ロマ 8:9)。キリストは人類の救主である(ルカ 2:11)。人はキリストの霊(聖霊)を持たないなら、彼のものではなく、彼にあずからないので、救いに何の望みがあるのか。

「イエスは答えて言われた、『よくよくあなたに言うておく。だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない』(ヨハ 3:3)。新しく生れることは、救いにおける最低限度の条件である。すべて新しく生れない人は、救いにあずからない。ある人は悔い改めることを新しく生れることと考えている。しかし、わたしたちが思うには、悔い改めは新しく生れることに欠かせない要素であるが、新しく生れるそのことではない。特に注意しなければならないが、イエスが言われた新しく生れるのは、罪赦しに効果がある水のバプテスマ、及び心を新たにする霊のバプテスマのことである。「イエスは答えられた、『よくよくあなたに言うておく。だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない』(ヨハ 3:5、参考：テト 3:5)。

イエスがニコデモに話された言葉から、明確で力ある結論が出される。聖霊を受けることは御国に入る最低限度の条件の一つであることである。従って、あらゆる聖霊を受けていない人は、イエスが再臨される時に、油を用意していなかった五人のおとめ(聖霊のない教会や信者)のように、焦って叫び出す、「わたしたちのあかりが消えかかっています」。その時、戸の外で切に主に呼ばわっても、主は「はっきり言うが、わたしはあなたがたを知らない」と言われるであろう(マタ 25:8、11~12)。

「御子を持つ者はいのちを持ち、神の御子を持たない者はいのちを持っていない」(Iヨハ 5:12)。命は内的なものであり、外的なものではない。人の内に神の御子がおられなければ、命がないのである。御子の存在は、彼と関わりがない。なぜなら、彼にとって、それは外的な存在に過ぎないからである。聖霊は



御子の霊(ガラ 4:6)であるので、聖霊を持たなければ、御子を持たず、結局は、命を持たないことになる。だからパウロは言った、「御霊によって生きる」(ガラ 5:25)、「なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の法則は、罪と死との法則からあなたを解放したからである」(ロマ 8:2)。旧約時代に、神は預言者エゼキエルをとおして約束された、「わたしがわが霊を、あなたがたのうちに置いて、あなたがたを生かし、…」(エゼ 37:14)。天国は生きている者の御国であり、死んだ者の御国ではない。命を持たない者は天国にあずかることがあろうかと忘れないように。

ペテロとヨハネはサマリヤ人のところに遣わされた時、まずみんなが聖霊を受けるようにと、手を彼らの上において、彼らのために祈った(使徒 8:14~17)。パウロがエペソに着いて、弟子たちに出会ったところ、まず聞いたのは、「あなたがたは、信仰にはいった時に、聖霊を受けたのか」という言葉である。聖霊を受けていないと知ると、彼らの上に手を置いて、聖霊を受けさせた(使徒 19:1~2、6)。これらの事実から、使徒たちがいかに聖霊を受けることを重視したか窺うことができる。もし、聖霊と救いに関係がなければ、彼らは余計なことをしたことになる。実に再三考えるべき問題ではないのか。

第四節 神の子としての保証

人類は元々神の子であったが(ルカ 3:38)、神の戒めに背いたことで、エデンの園から追い出され(創 3:24)、子としての身分を失った。後に、神はすべての民のうちから、イスラエル人を選び、聖別し、子とされた(申 14:1~2)。しかし、イスラエル人はしばしば反逆し(イザ 1:2~4)、預言者の勧告を聞き入れなかった(ホセ 11:1~2)、再び神の子の身分を失うことに至った(ヨハ 8:44)。



イエスが聖霊を受けるとすぐ、天から声があつて言った、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」(マタ 3:16~17)。バプテスマのヨハネもこのことを証して言った、「わたしは、御霊が鳩のように天から下って、彼の上にとどまるのを見た。わたしはこの人を知らなかった。しかし、水でバプテスマを授けるようにと、わたしをおつかわしになったそのかたが、わたしに言われた、『ある人の上に、御霊が下ってとどまるのを見たら、その人こそは、御霊によってバプテスマを授けるかたである』。わたしはそれを見たので、このかたこそ神の子であると、あかしをしたのである」(ヨハ 1:32~34)。天の父がイエス・キリストはその愛する子と認証されたのは、彼が御霊を受けられた時であった。バプテスマのヨハネは、イエスが神の子であると証明したのは、御霊がその身の上を下ってとどまるのを見たからである。イエス・キリストがこの世に来られた目的は、人類に神の子としての身分を取り戻すためであった(ガラ 4:4~5)。彼はいやしい世の人の立場に立って、手本として水と霊のバプテスマを受け、この教えの重要性を自ら示された。

パウロは言った、「このように、あなたがたは子であるのだから、神はわたしたちの心の中に、『アバ、父よ』と呼ぶ御子の霊を送って下さったのである(ガラ 4:6)。「あなたがたは再び恐れをいだかせる奴隷の霊を受けたのではなく、子たる身分を授ける霊を受けたのである。その霊によって、わたしたちは『アバ、父よ』と呼ぶのである。御霊みずから、わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることをあかしして下さる」(ロマ 8:15~16)。聖霊は「御子の霊」であり、「子たる身分を授ける霊」でもある。御霊を受けなければ、なぜ神の子と呼べるのか。そして、何によって「アバ、父よ」と呼ぶのか。なぜなら、神が人をご自分の子と認証されるのは、彼が聖霊を受けたかどうかによるもので、イエス・キリストを救い主と信じることだけによるものではないからである。

第五節 神の国を継ぐ保証とする

資産は父親が苦勞を掛けて積んできて、子たる者に残すものである。すべてその子は、受け継ぐ権利がある。神の国を継ぐことも同様である。御霊はわたしたちの霊と共に、わたしたちを神の子であると証しされた以上、わたしたちはこの資産を受け継ぐことができるようになる(ロマ 8:16~17、ガラ 4:6~7)。

世の資産は、人の手によって、短時間で蓄えられたものであり、限りがある。しかもそれは、家、畑、事業、金銀、宝物などのようなものばかりであり、時が来ると、すべて消え去るのである(Ⅱペテ 3:10~11)。一生の間に十分楽しめたとしても、僅かな何十年の歳月に過ぎず、息が切れたら空手で去って行くのであろう(伝 5:15~16)。ただし、神がその子らのために用意された国は、世のあらゆる宝物よりもはるかに勝り、測り知れない尊いものである。時間から言えば、神の国は、世の初めから用意されているものである(マタ 25:34)。本質から言えば、それはとこしえまで朽ちず、汚れず、しばむことのないものである(Ⅰペテ 1:4)。価値から言えば、全世界を超える最高の宝物であるので、それを得るために、すべてを捨てるに値するものである(マタ 16:26、ピリ 3:7~8)。

パウロは言った、「兄弟たちよ。わたしはこの事を言うておく。肉と血とは神の国を継ぐことができないし、朽ちるものは朽ちないものを継ぐことがない」(Ⅰコリ 15:50)。イエスも言われた、「肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である」(ヨハ 3:6)。神の国は霊的であるので、肉に属する者は、霊的な永遠の国を受け継ぐことができようか。その資産はしばむことがないので、やがてしばむ血肉の体は、とこしえまで続く神の国を受け継ぐことができようか。肉から生れる者は肉であり、百回生まれ変わっても、やはり肉の体なのである。ただ聖霊を受けた者だけが霊から生れ、しばむことのない霊の命をもって、永遠の国を受け継ぐことができるのである。



「この聖霊は、わたしたちが神の国をつぐことの保証であって、やがて神につける者が全くあがなわれ、神の栄光をほめたたえるに至るためである」(エペ 1:14)。

世の中で、資産を受け継ぐ者は、十分証明できるものがなければ、願いどおりにはならない。そうすると、神の国を継ぐ者に、聖霊の証印がなくてよからうか。「保証」という言葉のギリシャ原語は「arrhabon」として、「保証」と「担保」の意味がある。英文訳は「保証金」(earnest)とあるが、ギリシャ語英語対照本は「抵当物件」(pledge)とある。原語とほかの訳語の意味から見れば、聖霊は神の国を継ぐ事に関しては、法廷で、絶対的な保証を果たす効果がある。それで、聖霊を受けたあらゆる者は、神が備えてくださった資産を受け継ぐ証明を確かに握っている。その日はまだ来ていないが、喜んで待ち望むことができるのである。

第六節 生ける望みを抱かせる

信者が待ち望んでいるのは、天にたくわえてある、朽ちず、汚れず、しぼむことのない資産を受け継ぐことである(1ペテ 1:4)。この希望を持っている者こそ、世に生きている間、慰められ、励まされる。そして神に対して、また人に対して、良心に責められることがないのである(使徒 24:15~16)。わたしたちが望んでいるのは、目に見えない事であるので(ロマ 8:24~25)、確実な保証がなければ、生ける望みを抱くことはできないであろう。

イエスが捕らえられた日から、弟子たちは大いに失望して、恐怖に満ちていた。イエスと一緒に死のうと覚悟をしていたペテロでさえ、危ない時になって、公に主を認めることができなかつた(ルカ 22:33、54~62)。なぜこのようなことになったのか。それは、まだ聖霊の証明を得ていないからである。その後イ



エスがよみがえり、天に上げられ、約束の聖霊が降って以来(使徒 2:1~4)、弟子たちは生ける望みを抱き、至る所で勇敢に主のために証しをするようになった(使徒 4:19~20)。ひいては、死を恐れず殉教まで喜んでいたのである(使徒 7:55~60、12:1~2)。これは聖霊から来た希望ではないのか。

今は使徒時代と二千年離れているが、果たして当時の使徒たちは聖霊を受けたのか。その前に、イエスは復活して天に上げられたのか。将来、新しい天と新しい地の存在は確かであるのか。信者はよみがえるのか。御国に入って永遠に住むことができるのか。キリストは再臨されるのか。…、これらの問題は信じがたく、考証しにくい。従って、聖書に記されている歴史と将来の約束を証明するには、信者はある保証を得なければならない。この保証は即ち聖霊なのである。

イエスは弟子たちに言われた、「わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう」(ヨハ 16:7)。「そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう」(ヨハ 14:3)。今日、後の雨の聖霊が降ったことによって、確かに原始教会に聖霊が降ったとわたしたちは知っている。二千年前の過ぎたことでも、遥かに見えているようなものである。聖霊は保証であり、確実に降ったので、イエスが実際に復活し、昇天し、また将来わたしたちが永遠の国に住むように、迎えに来てくださることをわたしたちは確信しているのである。

聖霊は信者が清くなる助け主であり(Ⅱテサ 2:13)、救われる条件の一つであり(ヨハ 3:5)、神の子であることの証明であり(ロマ 8:15~16)、神の国を継ぐことの保証であり(エペ 1:14)、またよみがえって、永遠の命に入る証拠である(ロマ 8:11、Ⅱコリ 5:1~5)。これらの事実は、即ち聖霊が信者たちに生ける



望みを与える由縁なのである(ガラ 5:5、ロマ 15:13)。

第七節 真理を悟らせる

救いを十分望んでいるクリスチャンにとって、真理を知ることは何よりも重要なのである。真理はクリスチャンが悪の霊に戦うための武具であり(エペ 6:13~14)、人に自由と清きを得させるものであり(ヨハ 8:32、17:17)、また神のさばきの基準となるのである(ロマ 2:2)。

真理は神の口からの言葉であり(詩 119:43、ヨハ 17:17)、即ちクリスチャンの足のともしび、道の光である(詩 119:105)。この光に導かれて、暗闇の世にいても、わたしたちは正しい道をさまよわずに歩むことができる(詩 25:4~5、参考：箴 14:12)。

預言者イザヤは聖書を指して言った、「それゆえ、このすべての幻は、あなたがたには封じた書物の言葉のようになり、人々はこれを読むことのできるものにわたして、『これを読んでください』と言えば、『これは封じてあるから読むことができない』と彼は言う」(イザ 29:11)。ヨハネもその見た幻の中で、聖書を「その内側にも外側にも字が書いてあって、七つの封印で封じてあった」と言った(黙 5:1)。聖書の深いところは、文字ではなく、文字の中に隠された奥義にあるのである(Ⅱコリ 3:6)。しかし、この大事な奥義は七つの封印で封じてあり、即ち聖霊が完全なる権能を持って封じたのである(エペ 1:13)。そうすると、この書物を開き、人に真理を悟らせられるのは、聖霊のほかにはないのであろう。

イエスが世におられた時、あらかじめ弟子たちに示された、「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべて



のことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起こさせるであろう」(ヨハ 14:26)。また、「わたしには、あなたがたに言うべきことがまだ多くあるが、あなたがたは今それに堪えられない。けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それは自分から語るのではなく、その聞くとこを語り、きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう」(ヨハ 16:12~13)。弟子たちはイエスからいろいろな言葉をいただいたが、聖霊がその身に降る前に、ほとんど理解できなかった。しかし、五旬節の日に聖霊が降って、聖霊の導きによって、彼らはやっと隠された真理の奥義を悟ることができたのである。

神は霊であり、神の言葉も霊である(ヨハ 4:24, 6:63)。聖霊の啓示によらなければ、だれも決して真理を悟ることはできない(ガラ 1:11~12、エペ 3:3~5)。聖霊が人に真理を悟らせることができるのは、彼は神ご自身の霊だからである。あらゆる真理が神によるものである以上、神の霊は神ご自身のことを知らないわけがないであろう。「そして、それを神は、御霊によってわたしたちに啓示して下さったのである。御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである。いったい、人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれが知っていようか。それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない」(I コリ 2:10~11)。「あなたがたのうちには、キリストからいただいた油がとどまっているので、だれにも教えてもらう必要はない。この油が、すべてのことをあなたがたに教える。それはまことであって、偽りではないから、その油が教えたように、あなたがたは彼のうちにとどまっていなさい」(I ヨハ 2:27)。

ペテロは言った、「聖書の預言はすべて、自分勝手に解釈すべきでないことを、まず第一に知るべきである。なぜなら、預言は決して人間の意志から出たものではなく、人々が聖霊に感じ、神によって語ったものだからである」(II ペテ



1:20～21)。パウロも言った、「あなたは真理の言葉を正しく教え、恥じるところのない錬達した働き人になって、神に自分をささげるように努めはげみなさい」(Ⅱテモ 2:15)。現在のキリスト教の教派は数え切れないほど多い。同じ聖書を研究しているが、それぞれ異なった主張によって、自分が正しいと思うものを伝えている。その原因を探ると、聖霊の導きがないため、人の知恵によって、勝手に聖書の真意を曲解したのである。なぜなら、同じ霊であるなら、決して互いにあいいれない見解を堅く持たせることはないからである。キリストの体を分裂したのは、紛れもない事実となったのである。

第八節 力を賜わる

イエスが昇天される前に、弟子たちに言われた、「見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい」(ルカ 24:49)。パウロも言った、「御霊もまた同じように、弱いわたしたちを助けて下さる。…」(ロマ 8:26)。聖霊は上からの力の源であり、だれかの身に臨まれれば、その人に力を賜わり、弱いところを助けられる。では、聖霊が賜わるのはどんな力であろうか。

一、証しする力

「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」(使徒 1:8)。

聖霊が人に証しする力を賜わった事実は、五旬節前後の使徒たちの言行を見ればわかる。五旬節の前、弟子たちは主のために証しするどころか、主を認めることができず(マタ 26:69～75)、主を見捨てて逃げ去り(マル 14:50～52)、戸を閉めて集まるなど(ヨハ 20:19)、非常に臆病であった。しかし、五旬節の



後、彼らは怯えることなく勇敢に至る所へ行って神の教えを論じ、よみがえったキリストの証人となった(使徒 2:24~36、3:15、26、4:10~13、31)。脅かされ、迫害されても全く気にせず(使徒 4:18~20、5:17~32)、御名のために恥を加えられるに足る者とされたことを喜んだのである(使徒 5:40~41)。「キリストの名のためにそしられるなら、あなたがたはさいわいである。その時には、栄光の霊、神の霊が、あなたがたに宿るからである」(I ペテ 4:14、参考：マタ 5:10~12)。

ルカによる福音書 24 章 49 節及び使徒行伝 1 章 8 節の聖句から、福音伝道に、聖霊が賜った力がどんなに重要であるかがわかる。神の国は言葉ではなく、聖霊による力である (I コリ 4:20)。主の福音の証人となるために志を立てた者が、もし、聖霊の力に欠ければ、話が理路整然としていても、素晴らしく思われるだけで、人を確実に悔い改めに促すことはできない。この事をよく理解したパウロは言った、「そして、わたしの言葉もわたしの宣教も、巧みな知恵の言葉によらないで、霊と力との証明によったのである。それは、あなたがたの信仰が人の知恵によらないで、神の力によるものとなるためであった」(I コリ 2:4~5)。

二、過ちを指摘する力

「もしあなたの兄弟が罪を犯すなら、行って、彼とふたりだけの所で忠告しなさい。もし聞いてくれたら、あなたの兄弟を得たことになる。もし聞いてくれないなら、ほかにひとりふたりを、一緒に連れて行きなさい。それは、ふたりまたは三人の証人の口によって、すべてのことがらが確かめられるためである。もし彼らの言うことを聞かないなら、教会に申し出なさい。もし教会の言うことも聞かないなら、その人を異邦人また取税人同様に扱いなさい」(マタ 18:15~17)。これは兄弟が罪を犯した時に取るべき方法であり、霊的な交わりがあるべき行動である。しかし、これを実行するのに、しばしば困難に遭うのは、聖



霊に満たされていないからである。

「しかしわたしは主のみたまによって力に満ち、公義と勇気とに満たされ、ヤコブにそのとがを示し、イスラエルにその罪を示すことができる」(ミカ 3:8)。「わたしもまたわたしの分を答え、わたしの意見を述べよう。わたしには言葉が満ち、わたしのうちの霊がわたしに迫るからだ。見よ、わたしの心は口を開かないぶどう酒のように、新しいぶどう酒の皮袋のように、今にも張りさけようとしている。わたしは語って、気を晴らし、くちびるを開いて答えよう。わたしはだれをもかたより見ることはなく、また何人にもへつらうことをしない」(ヨブ 32:17~21)。聖霊に満たされることは、旧約時代の預言者と義人があえて、兄弟の過ちを指摘して、神に託された使命を果たせた原因である。

聖霊が五旬節の日に降った時、あるいは宮の「美しの門」で生まれながら足のきかない男を癒した時、使徒たちはユダヤ人がイエス・キリストを殺したことを責め、そして彼らに強く心を刺された感じをさせ、進んで悔い改めてバプテスマを受けるように催促することができた(使徒 2:22~41、3:13~19、4:4)。それは聖霊が賜わった力によったのである。パウロがペテロに非難すべきことがあったのを見て、勇敢にかたより見ずに皆の前で責めたのも同様である(ガラ 2:11~14)。

三、奇跡を行う力

イエスが世におられる時、人々を驚かした奇跡を多く行われた。即ち、盲人を見えるようにし、足なえた者を歩けるようにし、らい病人を清め、耳のきかない者を聞けるようにし、死んだ者をよみがえらせ(マタ 11:5)、荒れた海を静まらせ(マタ 8:24~27)、海の上を歩き(マタ 14:24~27)、悪魔を追い出されたことなどである(マル 5:2~20)。「イエスは御霊の力に満ちあふれて」(ルカ 4:14)と、ルカは証した。ペテロもイエスの証人となって、「神はナザレのイ



イエスに聖霊と力とを注がれました。このイエスは、神が共におられるので、よい働きをしながら、また悪魔に押さえつけられている人々をことごとくいやしながら、巡回されました」と言った(使徒 10:38)。聖霊に満たされたことは、イエスが奇跡を行えた所以である。

イエスが行われたのみならず、昇天される前、弟子たちに力を賜わると約束して言われた、「信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる」(マル 16:17~18)。また、聖霊のバプテスマを受け、上から来た聖霊の力を受けるまでは、エルサレムから離れるなど命じられた(使徒 1:4~5、ルカ 24:49)。

弟子たちは主の命令に従って、エルサレムに集まり、毎日ひたすら祈りをしていた。五旬節の日が来て、果たして一同は聖霊に満たされ(使徒 1:12~14、2:1~4)、聖霊の力によって、多くの奇跡をあらわした(使徒 3:2~8、5:1~12、8:6~8、9:32~42、13:9~12、16:16~18、28:3~6)。それで、御言の確かなことが示され、広められたのである(マル 16:20、使徒 14:3、へブ 2:4)。

「わたしは、異邦人を従順にするために、キリストがわたしを用いて、言葉とわざ、しるしと不思議との力、聖霊の力によって、働かせてくださったことの外には、あえて何も語ろうとは思わない」(ロマ 15:18~19)。パウロが奇跡をあらわし、異邦人を従順にしたのも、聖霊の力によったのである。

四、新たになる力

人の心は罪の宿っている所であり(ロマ 7:17)、心の法則と罪の法則が戦っている戦場である(ガラ 5:17)。召されて、主の血によって清められた人でも、罪は隙間から入り込むこともありうる。ゆえに、わたしたちは再生の洗いを受け



るだけでなく、聖霊により新たにされなければならない(テト 3:5)。それによって、キリストにあって、真に新しく造られた者になるのではないか(Ⅱコリ 5:17)。

「わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け、あなたがたの肉から、石の心を除いて、肉の心を与える。わたしはまたわが霊をあなたがたのうちに置いて、わが定めに進ませ、わがおきてを守ってこれを行わせる」(エゼ 36:26~27)。

人が古き人を脱ぎ捨て、確実に神の定めとおきてが守れるのは、新しい霊が授かることによるのである。なぜなら、命の泉はこれから流れ出るからである(箴 4:23)。この約束に新約と旧約との相違点が暗示されている：墨によらず、生ける神の霊によって書かれ、石の板にではなく、人の心の板に書かれたものである(Ⅱコリ 3:3)。パウロに啓示されたことは、はるか昔の預言者エゼキエルの預言に隠されていたのである。

パウロは自分がまだアダムのうちにいる有様を告白して言った、「わたしの内に、すなわち、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている。なぜなら、善をしようとする意志は、自分にあるが、それをする力がないからである。すなわち、わたしの欲している善はしないで、欲していない悪は、これを行っている。もし、欲しないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪である」(ロマ 7:18~20)。その次またキリストにあって変わった状況を証した、「なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の法則は、罪と死との法則からあなたを解放したからである」(ロマ 8:2)。聖霊の力によって、パウロは完全に新たにされた。それは真の義と聖とをそなえた神にかたどって造られた新しき人である(エペ 4:24)。「どうか父が、その栄光の富にしたがい、御霊に



より、力をもってあなたがたの内なる人を強くして下さるように」(エペ 3:16)。

「おおかみは小羊と共にやどり、ひょうは子やぎと共に伏し、子牛、若じし、肥たる家畜は共にいて、小さいわらべに導かれ、雌牛と熊とは食べ物を共にし、牛の子と熊の子と共に伏し、ししは牛のようにわらを食い、乳のみ子は毒蛇のほらに戯れ、乳離れの子は手をまむしの穴に入れる。彼らはわが聖なる山のどこにおいても、そこなうことなく、やぶることがない。水が海をおおっているように、主を知る知識が地に満ちるからである」(イザ 11:6～9)。

これはエデンの園の平和の再現である(創 1:30)。狼、豹、獅子、熊、毒蛇は皆猛獣であり、凶暴な人を象徴する。小羊、子やぎ、肥たる家畜、子牛、小さいわらべ、乳飲み子、乳離れの子は弱者であり、弱々しい人を象徴する。彼らが神の聖なる山(真の教会)でお互いに愛し、仲良く生活できる主な原因は、弱い人が凶暴な人に伏すのではなく、凶暴な人が根本的に変わったからである。人に信じられないほどのこの変わり方は、聖霊の力によるものである。

第九節 信者のために祈る

祈りは信者が神と交わる唯一の方法である。祈りのない生活は、橋のない川のようなものであり、兩岸の交通はそれで絶たれてしまう。祈りは霊の命が豊かになる唯一の秘訣でもある。祈りのない生活は木の枝が木から離れたように、いずれは枯れてしまうのである(ヨハ 15:5～6)。

パウロが言った、「詩とさんびと霊の歌とをもって語り合い、主にむかって心からさんびの歌をうたいなさい」(エペ 5:19)、「何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」(ピリ 4:6)。恵みをいただいた時、感謝する。神



の権能を体験した時、ほめたたえる。自分の罪を知った時、悔い改める。願い事があった時、祈り求める。わたしたちはこのように絶えず祈と願いをし、どんな時でも御霊によって祈ることが必要である。また御前に跪いて素直に心を注ぎ出すことが必要である(詩62:8)。

「御霊もまた同じように、弱いわたしたちを助けて下さる。なぜなら、わたしたちはどう祈ったらよいかわからないが、御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さるからである。そして、人の心を探り知るかたは、御霊の思うところがなんであるかを知っておられる。なぜなら、御霊は、聖徒のために、神の御旨にかなうとりなしをして下さるからである」(ロマ8:26~27)。

「もまた」とは前の段落に引き続き、これから述べることを展開していく意味である。「弱い」とは、クリスチャンが神のみこころに無知で愚かである、もしくは生半可な弱さであることだ。「助けて下さる」とは、原語の「sunantilambanomai」であり、参加する、助ける、協力するの意味である。「とりなして下さる」とは、原語の「huperentugchan0」であり、とりなす、助禱する意味である。

「それだけではなく、御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、心の内でうめきながら、子たる身分を授けられること、すなわち、からだのあがなわれることを待ち望んでいる」(ロマ8:23)。ローマ人への手紙8章26~27節は19~25節の主題である。19~22節は被造物のうめきであるが、23~25節はクリスチャンのうめきである。26~27節は、御霊のうめきが書かれている。神ののろいにより(創3:17)、世の中に苦痛が満ちている。被造物は各自のほねおりと悩みがある。それ以外に、クリスチャンも苦しみがある。例えば、福音のために苦難を受けること(ロマ8:17~18)、自然界の混乱(ロマ8:19~22)、目に見



えない心にある罪の戦い(ガラ 5:17)、世に遍在する罪の力(Iヨハ 2:16)、神による試練(ヨブ 23:10) などである。ゆえに、クリスチャンはキリストが再臨され、子たる身分を得、体が贖われて霊の体になり(Iコリ 15:42~54、Iテサ 4:16~17)、苦しみのない永遠の栄光の国に入ることを待ち望んでいる。

弱いため、わたしたちは常に苦しみ嘆き、心が混乱になりがちである。どう祈ったらよいかわからない。しかし、聖霊はわたしたちの重荷を担い、自ら言葉に表せない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さり、助け手の使命を果たしておられるのである。神は御霊の思うところがなんであるかを知っておられる故、必ず彼の助祷を受け入れ、わたしたちを苦しむうめく状態から救い出して下さる。なぜなら、聖霊は主の御旨に従って、とりなされるので、効果がないことはないからである(Iヨハ 4:14~15)。

時によって、わたしたちは弱さに束縛され、肉の生活から離れないまま、霊的に害を及ぼす肉のことを求めても、なお悟らない。しかし、もし聖霊がわたしたちのうちに宿っておられるなら、必ずうめきをもってわたしたちの間違った祈りを正し、改めて祈って下さるのである。なぜなら、聖霊は神によるのであり、神の深みまでもきわめ(Iコリ 6:19、2:10)、主の御旨にふさわしく、人の祈りの不足を補って下さるからである。

聖霊のない人なら、知性の祈りしかできない。願いたいことを言い終わったら、話がなくなる。心に別のことが浮かべばまた祈るが、その後主に話すことがなくて終わってしまう。そうすると、聖霊によってどんな時でも祈る体験をすることができなく(ユダ 20、エペ 6:18)、そして、聖霊がとりなして下さる目的を達成することもできなくなるではないか。「もしわたしが異言をもって祈るなら、わたしの霊は祈るが、知性は実を結ばないからである。すると、どうしたらよいのか。わたしは霊で祈ると共に、知性でも祈ろう。霊でさんびを歌



うと共に、知性でも歌おう」(I コリ 14:14~15)。

問題

- 一、聖霊は義とされることとどんな関係があるか。
- 二、聖霊は清められることとどんな関係があるか。
- 三、聖霊は救われることとどんな関係があるか。
- 四、聖霊は神の子となるとにどんな関係があるか。
- 五、聖霊は神の国を継ぐこととどんな関係があるか。
- 六、聖霊は望みとどんな関係があるか。
- 七、聖霊は真理を悟ることとどんな関係があるか。
- 八、聖霊はわたしたちにどんな力を授けて下さるか。
- 九、聖霊のとりなしを述べてみよ。



第六章 聖霊の働き

聖霊は聖書の中心である。旧約聖書から新約聖書にかけて、ほとんどの書巻に聖霊の働きが多く書かれている。それで、聖霊の働きがどんなに幅広くわたっているかわかる。

旧約時代にあった聖霊の働きは：天と地とを創造したこと(創 1:2、ヨブ 26:13、33:4、詩 104:30)、人を教えること(ネへ 9:20)、人に知恵(創 41:38~39、出エジ 31:2~6、申 34:9、ダニ 4:8~18、5:11~16)と力(士 14:6、15:14~15)とを与えること、預言者たちをとおして預言し(歴代下 20:14~17、エゼ 11:24~25、ルカ 2:25~35)、戒めること(歴代下 15:1~7、24:20~22、ネへ 9:30、ミカ 3:8、ゼカ 7:12)、及び預言者と義人たちに霊を臨ませること(サム上 16:13)などである。

新約時代における聖霊の働きは、キリストの証をすること(ヨハ 15:26、使徒 5:32)、キリストに栄えを得させること(ヨハ 16:14)、人にイエスを認識させること(I コリ 12:3)、人を新しく生れさせること(ヨハ 3:5)、信者に恵みを与えること(へブ 10:29)、信者を目覚ますこと(黙 2:7、11、17、29、3:6、13、22)、人に喜びを与えること(ルカ 10:21、使徒 13:52、ロマ 14:17、I テサ 1:6)、人をさらうこと(使徒 8:39~40)、幻や夢を見せること(使徒 2:17、7:55、黙 4:2、17:3、21:10)、預言を語らせること(使徒 2:18、11:27~28、20:23、21:4、10~14)、励ますこと(使徒 9:31)、及び終りの日によみがえらせることなどである(ロマ 8:11)。

そのほかに、本書の第四章「聖霊と教会」に書いてあるように：必要事項を決めること(使徒 15:28、16:4~5)、働き人を立てること(使徒 6:2~6、20:28)、



種々の霊の賜物を分けること（I コリ 12:8～11）、教会を一つにすること（I コリ 12:13、エペ 4:3～4、エゼ 11:19）などがある。もしくは、第五章「聖霊と信者」に書いてあるように、人を義とすること（I コリ 6:11）、清めること（ロマ 15:16、II テサ 2:13、I ペテ 1:2）、子たる身分を授けること（ロマ 8:15～16、ガラ 4:6）、神の国を継ぐことの保証を与えること（エペ 1:14）、生ける望みを抱かせること（I ペテ 1:4、ヨハ 16:7、II コリ 5:1～5、ロマ 15:13、ガラ 5:5）、真理に導くこと（ヨハ 14:26、16:12～13、I コリ 2:10～11、I ヨハ 2:27）、力を授けること（ルカ 24:49、使徒 1:8、4:31、ロマ 15:18～19、エペ 3:16）、信者のためにとりなすこと（ロマ 8:26～27、I コリ 14:14～15、エペ 6:18、ユダ 20）など、枚挙にいとまがなく、すべては聖霊の働きである。

ゆえに、本章に述べる聖霊の働きは、僅か一部分だけである。

第一節 誤りを認めさせる

「しかし、わたしはほんとうのことをあなたがたに言うが、わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたのところには助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう。それがきたら、罪と義とさばきとについて、世の人の目を開くであろう」（ヨハ 16:7～8）。

「世の人の目を開くであろう」という言葉を、ギリシャ語・英語対照本及びイギリス改訂版は「誤りを感じさせる」（convict）とし、新改訳は「世にその誤りを認めさせます」とする。ギリシャ原語は「elencho」とし、自覚するか自分を責めるという意味であり、ヨハネによる福音書 3 章 20 節にある「明るみに出されるのを恐れて」と同じ字である。ヨハネによる福音書 8 章 46 節では、「罪があると責める」と訳した。



罪、義と裁きの内容は一切の宗教の中心問題である。これらの問題に対しどう解釈するかによって、その宗教の本質が判明できる。聖霊は弁護士的身で信者のために弁護をして、キリスト教の有力な保護者になるだけでなく、さらに、原告にその誤りを悟らせて、キリストに反対して福音を拒否する者を説得するのである。聖霊が降る前に、世の人は罪、義と裁きの問題について、間違った立場に立っているのを知らなかった。聖霊が降ってから、今までの誤りを知り、観念の大革命を体験した。これは聖霊が降ってからの新しい働きであり、キリストが肉体となられた当時に実現できなかった不思議なわざである。

一、罪のために自分を責める

「罪についてと言ったのは、彼らがわたしを信じないからである」(ヨハ 16:9)。

イエスを信じないのはすべての罪の根本であり、最大の罪でもある(ヨハ 8:24、15:22、24)。ほかの罪は、皆ここから始まり(参考：ロマ 1:28～32)、信じないことよりは罪が軽い。なぜイエスを信じないのは罪であるのか。第一、もし主が世に来て彼らに語らなかつたならば、彼らは罪を犯さないで済んだであろう。もし聞いた者が主の言葉を捨てたならば、彼らには、その罪について言い逃れる道がないからである(ヨハ 15:22、12:48、参考：ヨハ 9:39～41、ロマ 3:20、4:15)。第二、もし、ほかのだれもがしなかつたようなわざを、主がしなかつたならば、彼らは罪を犯さないで済んだであろう(ヨハ 15:24)。しかし、主がなされたわざを見たが、悔い改めて信じなければ、さばきの日には、彼らは、御前に立つことができないからである(マタ 11:20～24)。第三、聖霊が人の身に降り、異言を語らせるのは、未信者のためのしるしであり(1コリ 14:22)、神の存在をわからせるためである。そして、そのことをとおして、イエスが確実によみがえり、天に引き上げられて、やがて、信者たちを永遠の住まいに迎えるように再臨されることを(ヨハ 16:7、14:1～3)、世の人に証しするからである。ゆえに、もし人が聖霊の賜物が真理のために証しするのを見て



も信じず、尊い救いをなおざりにするなら、報いを逃れることができないであろう(ヘブ 2:3~4)。

天国の福音、キリストの奇跡、聖霊の降臨は、皆イエスのための証しである。彼を信じる者は、永遠の命を得るが、彼を信じない者は、必ず裁かれる(ヨハ 3:16~19)。使徒時代はそうであるが、今の時代も同様である。但し、世の人は、これが最大の罪とは知らず、最も危険な罪であるとも知らない。ただ道徳に違反することを罪とする。なぜなら、一般の道徳に反する罪は、良心によって責められるが、イエスを信じない罪は良心によって責められることではないからである。御霊が来たら、イエスを信じないことを最も重い罪と悟らせ、罪に対する新しい観念を持たせるのである。五旬節の日に聖霊が降り、ペテロはユダヤ人の放縦な生活ぶりを責めなかったが、彼らが栄光の主を十字架につけたことを責めた。また、彼らが明確なしるしを知りながら、イエスを拒んだのは、いかに危険であることかを戒めたのである(使徒 2:22~24、32~36)。結果として、彼らは聖霊に強く心を刺され、信じない罪を自覚し、解決の道を求めるに至ったのである(使徒 2:37)。

二、義のために自分を責める

「義について言ったのは、わたしが父のみもとに行き、あなたがたは、もはやわたしを見なくなるからである」(ヨハ 16:10)。

イエスが世におられる時、見るべき姿がないため、軽んじられ(イザ 53:1~3、Ⅱコリ 5:16)、義とされなかった。ひいてはイエスは神をけがす言葉を発したと断定した(マル 2:7、マタ 26:63~66)、また安息日を破り(ヨハ 5:18)、悪魔に取りつかれ(ヨハ 8:48、52)、民を煽動し(ルカ 23:2、5)、罪人であると論じられた(ヨハ 9:24)。イエスはそれで十字架につけられ、死なれたのである(イザ 53:4)。一方、世の人は、真の義を知らないため、道徳の義を義とする。即



ち、律法の義を義とし(ルカ 18:9～14、ピリ 3:4～6)、もしくは、自分の義を義とするが(マタ 6:1～2、5、16)、神の義に従わないのである(ロマ 10:3)。

イエス・キリストは神の義を示されるため、かつて血を流して十字架に死なれた(ロマ 3:25)。主は神の義を福音の中に啓示された(ロマ 1:17)。ご自分が義なる方を証しされるため、わたしたちを義とされるため、主はよみがえって、天に上げられた(使徒 3:14～15、Iヨハ 2:1、ロマ 4:25、8:33～34)。彼が罪人であるならば、わたしたちの罪を担い、死の苦しみを味わうことはできなかった。さらに、よみがえって天に上げられ、仲保者となって、とりなしてください、わたしたちを義とされることもできなかったであろう(IIコリ 5:21)。イエスの義はユダヤ人の義と異なった。彼の義は神に忠実なものである。それは死に、よみがえり、昇天されたことによって明らかになったものである(ピリ 2:6～8、Iペテ 3:18)。それに対して、ユダヤ人の義は、パリサイ人の言い伝えを守り、肉によって律法を行うものである(マタ 15:1～6、参考:ロマ 8:4)。イエスがよみがえり、天に上げられ、父のみもとに行かれた後、五旬節の日に聖霊が降った。そこで、世の人はもはや彼の姿を見ることができず、ただ聖霊の感動によって彼が義なる方、また義の源であることを認識する。しかも、それによって、義の新しい標準を得た。即ち、イエスを信じる信仰によって義とされ(ロマ 3:22～26)、律法を行うことを義としないことである(ロマ 3:12、28、ガラ 2:16、21)。そこから、世の人の義に対する誤った考えは破壊されてしまった。これも聖霊が人自身を責める働きの一つである。

三、裁きのために自分を責める

「さばきについてと言ったのは、この世の君がさばかれるからである」(ヨハ 16:11)。

全世界は悪しき者の配下であり、罪の奴隷である(ヨハ 8:34、Iヨハ 5:19)。



悪魔は死の権勢を握り、死の恐怖をもって、人々を束縛する(ロマ 5:12～14、6:23)。しかし、イエスは悪魔に従わず、神のみに従われた(ルカ 4:1～12、マタ 16:21～23、26:39)。彼は、人の罪を背負い、死にまた復活された(イザ 53:4～6、使徒 2:23～24)。それによって、すべてイエスの内にある者は、罪に対して死に、神に生きているのである(ロマ 6:8～11)。神の義が明らかにされる前に、悪魔は人を訴えることができる。人は罪を犯したので、神は正義をもって人を悪しき者の配下に渡す(Iヨハ 3:8 上、5:19)。しかし、神の義が明らかにされた後、仲保者であるイエスは訴えられる。彼は自ら、人の罪を担い、人が受くべき刑罰を受けられたので、悪魔の支配権を解除し、世の人を自分に戻さなければならぬ(ロマ 8:33～34)。結果として、イエスは十字架によって凱旋し(コロ 2:15、ヨハ 10:30)、悪魔のわざを滅ぼされてしまい(Iヨハ 3:8 下)、悪魔は裁かれて敗訴となり、人を支配する権力を失う(へブ 2:14～15)。そして人は、悪魔との係わりが絶たれ(ロマ 6:4～7、14、17～18)、キリストにあって解放されたのである(ヨハ 8:36、ロマ 8:2)。

ユダヤ人は皆終りの日に裁きがあると知っているが、すべて律法を守る者は必ず救われ、神から賞与を得ると、裁きに対して誤った観念を持っている。この誤りはルカによる福音書 11 章 37～41 節の教えと、18 章 9～14 節の譬えを見ればわかる。この誤った観念に基づき、彼らはイエスが律法を守らず、神をけがしたことによって裁かれたと思ったので、十字架は当然の報いになったわけである(イザ 53:4、ヨハ 19:6～7)。しかし、イエスは復活し昇天されたことで、彼らの見方を否定された。裁かれたのは世の君(サタン)及び、あらゆるサタンに属する世の人であるが(使徒 17:31)、ご自身ではないことを主は証明された。聖霊は、ユダヤ人に次のことを悟らせるために来られた：悪魔は彼らの手をおして、御子のイエス・キリストを十字架につけたので、すでに神の裁きを受けた。悪魔に惑わされたのはユダヤ人であるが、本心から悔い改めなければ、やはり神によって裁かれる。決してユダヤ人であることを自負せず(マタ 3:7～



12)、裁きに対して考え方を改めなければならないのであろう。

キリストの受難、復活また昇天は、彼の勝利を確定したものであるのと同時に、悪魔の失敗を宣告したのである。善悪に対する正しい判断と、神とこの世の対立はみな聖霊が来られたことによって明らかになった。おおよそキリストに反する者、福音を拒む者は、結局、神に裁かれるのは確かなことであろう。

第二節 罪人を御前に来るよう催促する

罪のため、義のため、裁きのために、自ら責めることを人に感じさせることは、聖霊の最終の目的ではない。この事とおして、救いの道を捜し、主の御前に来ることを聖霊は催促されるのである。

神はねたむ方であり、その名が「ねたみ」と言うのである(出エジ 34:14)。裁きの日に、神の怒りは不義をもって真理を阻もうとする人間のあらゆる不信心と不義とに対して、天から啓示される。このような人は、御前に立つことができようか(ロマ 1:18、黙 6:12~17)。今はこの時期はまだ来ていないが、神は「罪をもって罪を処罰す」という法則で戒め、死んだ後裁きを受ける事実を信服させられる(ヘブ 9:27)。

十字架につけられた最大の苦痛の時、イエスは大声で、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれた。昼の十二時から地上の全面が暗くなって、三時にまで及んだ(マタ 27:45~46)。法廷の裁判は、罪が深ければ深いほど、その刑罰も残酷である。それで正義が現れるのであろう。イエスは、世の人の代わりに神の最も公義なる裁きを受けられた。その刑罰の残酷さこそ、人の罪がどんなに深いかを示した。おののき恐れるその情景は、まさに、地獄の刑罰の縮図なのであろう。聖書に記載されている永遠の火、永



遠の刑罰、永遠の死とは(マタ 25:41、46)、この残虐な刑罰が永遠に続くものである。

ノアの時代に世は乱れて、地を暴虐で満たしたので、神の怒りを招いた(創 6:11～13)。但し、洪水で滅ぼされる前に、神はあらかじめ活路を開いてくださった。すべて箱舟に入った者は、救われたのである(創 6:18～20、7:23)。同様に、終りの日に世が滅ぼされ(Ⅱペテ 3:10)、永遠の刑罰に入る前に(Ⅱテサ 1:7～9)、神は活路を開いてくださった。それは、御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである(ヨハ 3:16)。

罪の支払う報酬は死であるが(ロマ 6:23)、神は人の罪のために、罪を知らないキリストを罪とし、懲らしめ、死なせられた(Ⅱコリ 5:21、イザ 53:5～6)。それによって、十字架は救いに欠かせないものとなった。すべて十字架によりかかって、キリストの元に来る者は、神の怒りから救われるのである(ロマ 5:9)。

聖霊は人の罪を悟らせるばかりではなく、聖徒をとおして神の裁きをも宣告された。それによって、罪の恐ろしい結果をより深く認識させられた。そして、罪から逃れ、悔い改めに至るまでの道を指示し(使徒 11:18)、罪人を御前に来るよう催促する目的の達成を期するのである(使徒 2:37～41)。

第三節 罪を赦す

「主はあわれみに富み、めぐみふかく、怒ること遅く、いつくしみ豊かでいらせられる。主は常に責めることをせず、また、とこしえに怒りをいだかれない。主はわれらの罪にしたがってわれらをあしらわず、われらの不義にしたがって報いられない。天が地よりも高いように、主がおのれを恐れる者に賜わるいつくしみは大きい。東が西から遠いように、主はわれらのとがをわれらから遠ざ

けられる。父がその子供をあわれむように、主はおのれを恐れる者をあわれまれる」(詩 103:8~13)。

聖霊の催促の下で、罪人が悔い改め、神の懐に寄りかかるならば、神は永遠に続く愛をもって彼らを赦される。神の受けられるいけにえは砕けた魂である。神は砕けた悔いた心をかるしめられないからである(詩 51:17)。このような事は旧約時代に前例があって(ネヘ 9:26~31)、神のいつくしみの確証であった。新約時代に、神ご自身は肉体となって(ヨハ 1:1、14)、世に来られた目的を人々に宣告された。即ち罪人を招いて悔い改めさせることである(マタ 9:13)。「神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。彼を信じる者は、さばかれない。…」(ヨハ 3:17~18)。「神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされた。それは神の義を示すためであった。すなわち、今までに犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしておられた」(ロマ 3:25)。

イエスが世におられる時、多くの人々の罪を赦したり、病を癒したり、「安心して行きなさい」と言ったりされた(マタ 9:2、ルカ 7:48)。最後に十字架の上で息が取られる前でも、ご自分の苦痛を気にせず、敵の過ちのために祈られた(ルカ 23:34、イザ 53:12)。よみがえった後、さらに罪を赦す権威を聖霊によって、後継ぎの弟子たちに授けられた。イエスは彼らに息を吹きかけて仰せになった、「聖霊を受けよ。あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、…」(ヨハ 20:22~23)。

「すると、ペテロが答えた、『悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい。…』(使徒 2:38)。

「そこで今、なんのためらうことがあるうか。すぐ立って、み名をとнаえてバ



「バプテスマを受け、あなたの罪を洗い落としなさい」(使徒 22:16)。

なるほど、聖霊が働きかけて、罪と義と裁きのために己を責めさせ、罪人を主の前に催促する目的は、人の罪を赦し、義とされるところにある。キリストの血によらなければ、罪を赦すことはできない(エペ 1:7)：なぜならば、ほとんどすべての物が、律法に従い、血によって清められたのである。血を流すことなしには、罪のゆるしはあり得ないからである(ヘブ 9:22)。罪を赦す唯一の方法は、イエスの御名によって、バプテスマを受けることである。バプテスマを受ける時、聖霊の証によって、主の血の効果が水に現れる(Ⅰヨハ 5:6~8、ヨハ 19:34~35)。しかも、罪を赦す一番重要な権威を、聖霊はバプテスマを施す者をとおして行われるのである(ヨハ 20:22~23)。

すべて聖霊に迫られて、御前に来た罪人がもしさらにへりくだって聖徒の指示に従って、悔い改め、バプテスマを受けるなら、罪赦しはたちまち成立するのである(使徒 2:38)。ルカによる福音書 15 章 11 節から書かれている「放蕩息子」の譬えは、罪人が悔い改めて、天の父に赦された、一枚の絵画のようなものである。この絵画に、神のいつくしみがいかに深いか、神がいかに罪人の悔い改めを待望されたか、また罪人がどんなに切に赦しを求めたかが描かれている。

第四節 解き放つ

全世界は悪しき者の配下であり、罪の奴隷である(Ⅰヨハ 5:19、ヨハ 8:34)。因って、人は自主の力を失い、自分の欲する事は行わず、かえって自分の憎む事をしている(ロマ 7:15、19)。それは良心によらず、自分の内に宿っている罪の働きによると知りながらも、そこから逃げることはできない(ロマ 7:17~18、20)。なぜなら、人の肢体には、別の律法(情欲)があり、心の法則(良心)



に対して戦いを挑み、そして、肢体に存在する罪の法則中に、人をとりこにしているからである（ロマ 7:21～23）。こんな悲惨な状況の下に、人は悲しみうめくであろう、「わたしは、なんとというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」（ロマ 7:24）。神の全世界を救われる計画の全般を探してみると、罪人のこの絶望的なうめきは、救いの恵みをいただく前提であって、聖霊の「解放作業」の準備作業とも言えよう。

「なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の法則は、罪と死との法則からあなたを解放したからである」（ロマ 8:2）。

この聖句は第7章の続きである。第7章では、キリストによれば、罪の律法から解放されると言っているが（ロマ 7:25）、ここでは、御霊の法則は、罪と死との法則からわたしたちを解放したと言っている。キリストは罪と死の法則から解放する権威をすでに聖霊に授けられた。それで、聖霊の証しの下で、バプテスマによって罪を赦されたすべての人は、同時に罪の法則から解放され、真の自由を得られたことがこれでわかる（Ⅱ コリ 3:17）。神学者シペーネルが言った、「聖書を指輪とすれば、ローマ人への手紙は指輪の上の宝石であり、第8章は、その宝石の輝いている尖端である」。誠に、第7章にある絶望と苦しみに比べれば、第8章の変化は不可能に近いが、測り知れない恵みである。惜しいことに、多くのクリスチャンは、第7章の状態に留まって、第8章のように、キリストの内にある真の自由を得た境地には達していないのである。

第五節 命を賜わる

死は罪によって入ってきた（ロマ 5:12）、罪の支払う報酬は死だからである（ロマ 6:23）。罪は因であるが死は果である、両者は切り離せない関係にある。罪による死は魂の死であり、その続きは永遠の死である。エゼキエル預言者が



見た幻の谷の中は、この世を象徴している。谷にある骨は、肉体は生きているが、魂は死んでいる世の人の象徴である(エゼ 37:1~2、マタ 8:22)。皆いたく枯れていた。自分に頼るだけで、復活の望みが全くない(エゼ 37:11)。しかし、神の霊は彼らのうちに置かれ、彼らを生かせ、はなはだ大いなる群衆とされた(エゼ 37:4~5、9~10、14)。

「たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になるうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか」(マタ 16:26)。一人の命は全世界より尊い、その代価は全世界のすべての価値より勝るとイエスは計られた。この命の賜わりは、聖霊が直接聖徒に働きかけることである(ロマ 8:2)。聖霊は死ぬべき体を生かし(ロマ 8:11)、さらにその中にある新しい命を豊かにさせられるのである(ガラ 5:25、ヨハ 10:10)。

第六節 罪に定める

「彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである」(ヨハ 3:18)。

「だからわたしは、あなたがたは自分の罪のうちに死ぬであろうと、言ったのである。もしわたしがそういう者であることをあなたがたが信じなければ、罪のうちに死ぬことになるからである」(ヨハ 8:24)。

世の人は自力で抜けられない罪の淵に陥っているが、信仰によって聖霊の下で罪が赦され、解放され、命が賜わって、キリストのうちに新たな人となる。逆に言うと、あらゆる信じない者は、聖霊によって罪に定められ、一生罪の奴隷となり、永遠に滅びるのであろう。

「よく言うておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天でも皆つながれ、あ

あなたが地上で解くことは、天でも皆解かれるであろう」(マタ 18:18)。

「そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、『聖霊を受けよ。あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう』(ヨハ 20:22~23)。

「つなぐ」とは罪に定める意味が含まれている。「罪をゆるさずにおく」とは、罪に定めると係わっている。主の約束によって、罪に定める権威は聖霊から弟子たちに委ねられた。ただ、その主権は聖霊によるものであり、自分を責めること、催促すること、罪を赦すこと、命を賜わることと同様である。

聖霊が聖徒を遣わして宣べ伝える福音に、神の恵みが豊かであると同時に、激しい怒りも伴われる。信じてバプテスマを受ける者は救われる(マル 16:16)。しかし信じない者、逆らう者は罪に定められる(ヨハ 3:16~18、Ⅱテサ 1:7~9、ヘブ 6:4~8、10:26~29)。使徒行伝 5 章 1~11 節に書かれている歴史は、聖霊が聖徒をとおして罪に定めた働きの最も明白な実例である。

第七節 働き人を遣わす

「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ」(ルカ 4:18)。

イエスは聖霊によって生れられた。その一生の福音伝道も直接聖霊に遣わされたものである。昇天される前、伝道の使命を使徒たちに託されるために、彼らに息を吹きかけて、聖霊に遣わされることを約束された、「父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす。…聖霊を受けよ」



(ヨハ 20:21～22)。

「使徒行伝」は、また「聖霊行伝」とも呼ばれている。五旬節の日に聖霊が降った後、福音を宣べ伝えるのに、使徒たちは受動的な器として、すべてのことに直接聖霊に導かれた(使徒 16:6～8)。その中で最も明らかなのは、御霊自ら声を出して、ピリポをエチオピヤの宦官に福音伝道に遣わしたこと(使徒 8:29～35)、ペテロをカイザリヤへ遣わして、コルネリオ一家族と親族や親しい友人に証をさせたこと(使徒 10:19～43)、またバルナバとサウロに授けておいた仕事に当たらせられたことなどである(使徒 13:2～4)。

問題

- 一、聖霊の旧約時代における三つの働きを引用聖句付きで述べてみよ。
- 二、聖霊の新約時代における七つの働きを引用聖句付きで述べてみよ。
- 三、聖霊が人々に罪のために己を責めさせる働きを述べてみよ。
- 四、聖霊が人々に義のために己を責めさせる働きを述べてみよ。
- 五、聖霊が人々に裁きのために己を責めさせる働きを述べてみよ。
- 六、聖霊が人々を御前に促す働きを述べてみよ。
- 七、聖霊が罪を赦す働きを述べてみよ。
- 八、聖霊が解き放つ働きを述べてみよ。
- 九、聖霊が命を賜る働きを述べてみよ。
- 十、聖霊が罪に定める働きを述べてみよ。
- 十一、聖霊が働き人を遣わしたわざを述べてみよ。



第七章 聖霊を賜る約束

聖霊を賜る問題に関しては、聖書の記載の順序によって、預言者たちの預言とイエスの約束とに分けることができる。

第一節 預言者たちの預言

霊を注ぐことは、元々神の約束によるものであり、預言者たちをとおして各時代の選民に預言されたものである。時の満ちるに及んで、1千年余りの約束がやっと完全に実現し、神が各預言者に預言させたことが成就された。ここで、これらの預言を分けて述べよう。

一、モーセの預言

「主はあなたがたの地に雨を、秋の雨、春の雨ともに、時にしたがって降らせ、…」(申 11:14)。

パレスチナ(Palestine)の土壌は、石灰質が多く、小石が交ざり、水分が足りないため、はなはだしく硬いものである(参考：詩 65:10)。秋の雨によって地を潤わさなければ、耕すことはできない。撒いた種を根ざし、芽を出すこともできない。刈り入れの前に、春の雨の潤いも必要とする。それによって豊作の収穫を倉に納め、地主を喜ばすことができる(参考：レビ 26:4)。パレスチナのような地質は、石のように硬い人の心を象徴する。雨を象徴とする聖霊の潤いがないと、耕すこともできなければ、撒いた真理の種を根ざし、芽を出し(エゼ 36:26~27)、御霊の実を豊かに結ばせることもできないのであろう(ガラ 5:22~23)。



秋の雨は種を撒く前に必要な雨水であり、原始教会を立てられた聖霊を象徴する(使徒 2:1~4、41)。春の雨は刈り入れる前に必要な雨水であり、世の終りの真の教会を立てられた聖霊を象徴する(マラ 4:5、黙 7:2~3、エペ 1:13)。

二、ダビデの預言

「あなたの家の豊かなのによって飽き足りる。あなたはその楽しみの川の水を彼らに飲ませられる」(詩 36:8)。

神の家の豊かなのは真理であり、それをもって慕う人に飽き足りるほど養う(アモ 8:11、エレ 15:16)。神の楽しみの川の水とは聖霊のことである。なぜなら、第一、聖霊は泉もしくは川をもって象徴する。人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が湧き上がり、飲む者はいつまでも渴くことがない(ヨハ 4:13~14)。また人の腹から生ける水が川となって流れ出て、人の心がいつまでも乾くことがない(ヨハ 7:37~39)。第二、聖霊は喜びの油をもって象徴する(ヘブ 1:9)。それによって憂いがなくなり、真の慰めと喜びを得ることができるからである(イザ 61:3)。

この聖句に書かれている「彼ら」とは、7 節にある「人の子ら」のことである。聖霊の注ぎはユダヤ人のみならず、万民に与えるものだからである(使徒 11:15~18、参考：使徒 10:34~35、ロマ 3:20)。

三、ソロモンの預言

「わたしの叱責に心を留めるなら、今すぐ、あなたがたにわたしの霊を注ぎ、…」(新改訳：箴 1:23)、(口語訳：「わたしの戒めに心をとめよ。見よ、わたしは自分の思いを、あなたがたに告げ…」)。

箴言はソロモンによって書かれたものであるが、聖霊を賜るこの預言の中の

「わたし」とは、ソロモンが自称するものではなく、キリストの前身を言っている。なぜなら、第一、ソロモンは自分の霊を人に与えることができない。第二、20 節に書かれているように、「わたし」は即ち「知恵」である。第三、8 章 12、22、23 節に隠された意味は、「知恵」は即ち「キリスト」の前身だからである。

この預言から、聖霊を受けるのは、キリストの教えに聞き従い、悔い改めた者でなければならないことがわかる。使徒行伝 5 章 32 節の聖句もこのことを証する。

四、イザヤの預言

「そして主が審判の霊と滅亡の霊(新改訳：焼き尽くす霊)とをもって、シオンの娘らの汚れを洗い、エルサレムの血をその中から除き去られるとき、シオンに残る者、エルサレムにとどまる者、すべてエルサレムにあつて、生命の書にしるされた者は聖なる者ととなえられる」(イザ 4:3~4)。

「審判の霊」と「焼き尽くす霊」とは聖霊の名称である。「シオンの娘らの汚れ」とは教会の疵である。「生命の書にしるされた者」とは、永遠の命に入るに値する聖徒である。

教会が清められ、聖徒が神の永遠の命に入るには、時の満ちるに及んで、神の約束された聖霊が上から注がれなければ、成就されないのである(Ⅱテサ 2:13、参考：イザ 1:25) →本書の第三章第 9 節「火」を見よ。

「しかし、ついには霊が上からわれわれの上にそそがれて、荒野は良き畑となり、良き畑は林のごとく見られるようになる」(イザ 32:15)。



「荒野」も「良き畑」も人の心を言っている。手入れをされない荒野は、人の乾いた心を象徴するが、青くつやつやした良き畑は、人の生き生きとした心を象徴する。「荒野は良き畑となり」とは、想定外の大きな変化であり、「大海原が変じて桑畑となる」素晴らしい風景を思い起こす。この不可能な変化は、神の愛と権能を現し、人にも幸福と尊い地位をもたらすのである。「良き畑は林のごとく見られるようになる」とは、穀物が林のように茂っていて、豊作の望みが描かれていることである。

荒野が良き畑となり、良き畑が豊作をもたらす。それは聖霊を与えられた者こそ、体験できる恵みである。

「貧しい者と乏しい者とは水を求めても、水がなく、その舌がかわいて焼いているとき、主なるわたしは彼らに答える、イスラエルの神なるわたしは彼らを捨てることがない。わたしは裸の山に川を開き、谷の中に泉をいだし、荒野を池となし、かわいた地を水の源とする」（イザ 41:17～18）。

渴いている人に、特に舌が渴いて焼いている人には、「水」は命のように貴重（パレスチナは乾季になると、水は金銭を払って手に入れるものである）。17節の預言に、彼らは最初の時、水が見つからなかったが、永遠にそうではない。なぜならば、渴いた苦しみ及び水を欲する切なる心は、神の憐れみを得て答えられるからである。イエスが言われた、「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう」（マタ 7:7）。もし聖霊のない者が心の渴きを感じ、ねんごろに祈れば、必ず聖霊の命の水を得て、渴かなくなるであろう。

18節にある「荒野」も「かわいた地」も人の心を指す。「川」、「泉」、「池」とは聖霊のことである。荒野と乾いた地は、人の心が悩み憂いに満ち、全く望

みがないことを表す。しかし、神の約束の聖霊に注がれ、川、泉、池となるのである。

「見よ、わたしは新しい事をなす。やがてそれは起る、あなたがたはそれを知らないのか。わたしは荒野に道を設け、さばくに川を流れさせる。…わたしが荒野に水をいだし、さばくに川を流れさせて、わたしの選んだ民に飲ませるからだ」(イザ 43:19~20)。

「さばく」は人の心を象徴する。「川」は聖霊を象徴する。砂漠に川を流れさせるのは新しい事であり、前になかったのである。聖霊が降ることもまた新しい事であり、五旬節の日の前になかったのである(ヨハ 7:39、使徒 2:1~4)。川の水は選ばれた民しか飲めない。ほかの者は、それにあずかることができない(20)。弟子たちが受ける御霊を、この世は受けることができないと、イエスも言われた(ヨハ 14:16~17)。

「わたしはかわいた地に水を注ぎ、干からびた地に流れをそそぎ、わが霊をあなたの子らにそそぎ、わが恵みをあなたの子孫に与えるからである」(イザ 44:3)。

渴いた者は水を欲しがる。乾いた地は水の注ぎを必要とする。同じように、聖霊のない者も、命の水また川をもって象徴する聖霊に注がれなければならない。

この預言を二部分に分けることができる：前半は象徴の描き方をもって、神を慕っている者に聖霊が注がれることを言っている。後半は聖霊の恵みをヤコブの子孫に与える神の約束をはっきりと言っている。

「さあ、かわいている者はみな水にきたれ。金のない者もきたれ。来て買い求



めて食べよ。あなたがたは来て、金を出さずに、ただでぶどう酒と乳とを買い求めよ」(イザ 55:1)。

これはいかに豊かな恵みであるか。主はわたしたちが代価を払うことを決して望まれない。ただ渴いたと自覚し、謙虚に主に近づくなら、主は無償で聖霊の命の水を飲ませて下さる。「御霊も花嫁も共に言った、『きたりませ』。また聞く者も『きたりませ』と言いなさい。かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」(黙 22:17)。

五、エゼキエルの預言

「そしてわたしは彼らに一つの心を与え、彼のうちに新しい霊を授け、彼らの肉から石の心を取り去って、肉の心を与える。これは彼らがわたしのために歩み、わたしのおきてを守って行い、…ためである」(エゼ 11:19~20)。

この預言によれば、聖霊が降ると、二つの大事が必ず成し遂げられることがわかる：①真の信者は必ず心一つにして、教会が聖霊による一致を守る(エペ 4:3)。即ち、真の教会にあって、一つの群れとなることである(ヨハ 10:16)。②真の信者は、柔和で従順な心をもって、神の定めに従い、そのおきてを守り、名実ともに神の子となることである。

「わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け、あなたがたの肉から、石の心を除いて、肉の心を与える。わたしはまたわが霊をあなたがたのうちに置いて、わがために歩ませ、わがおきてを守ってこれを行わせる」(エゼ 36:26~27)。

ここの預言は 11 章の預言と大同小異である。ただ 11 章には「新しい霊」を神の約束の聖霊とするが、ここは「新しい霊」以外に、また「わが霊」という

言葉をもって、その預言を一段と明らかにしたのである。

「わたしがわが霊を、あなたがたのうちに置いて、あなたがたを生かし、…」
(エゼ 37:14)。

本章 1 節から 14 節までのとおり、エゼキエルは主の霊に満たされ、枯れた骨が生き返った幻を見た。11 節によると、枯れた骨はイスラエルの全家である。この幻は預表であって、パウロが聖霊の啓示によって書いた、イスラエルの家が全部救われる預言と密接な関係がある(ロマ 11:25~27)。

イスラエル人は頑なにキリストを十字架につけて殺した(使徒 2:22~24、3:13~15)。そして、使徒たちが宣べ伝えた福音を拒んだことによって、真理は異邦人のところに伝わった(使徒 13:46)。しかし、神はいつくしみ深く、信実の方であるので、永遠まで怒りを抱かず、アブラハムとの約束をも忘れられない。異邦人の入り来たりて数満つるに及ぶ時まで、神は彼らを救い、その霊の命を御霊にあってよみがえらせられるのである。

「わたしは、わが霊をイスラエルの家に注ぐ時(《口語聖書》の訳文は未来形、《文語聖書》は『そそぎたれば』と訳し、過去形である。未来完了形の意味がある)重ねてわが顔を彼らに隠さないと、主なる神は言われる」(エゼ 39:29)。

これは聖霊を賜る約束であり、将来に成し遂げられることである。J, N, Darby 訳本は、「I shall have poured」とし、未来完了形である。

28 節にある復国の約束により、この聖霊を賜る預言は、春の雨の聖霊であって、秋の雨の聖霊ではない。言い換えれば、春の雨の聖霊が建てられた真の教会は、やがて必ずイスラエルに伝えられる。それによって、37 章 1~14 節に書



いてある幻およびローマ人への手紙 11 章 25～27 節に書いてある預言が成就されるのであろう。英訳は「注ぐ」の次に「out」という字があり、聖霊が注がれる勢いの無限を表している。神のくすしき御恵みは何と大いなるものであろうか。

六、ホセアの預言

「わたしたちは主を知ろう、せつに主を知ることが求めよう。主はあしたの光のように必ず現れいで、冬の雨（新改訳：大雨）のように、わたしたちに臨み、春の雨のように地に潤おされる」（ホセ 6:3）。

あしたの光は曙のしるしである。それが現れ出る前、全地は暗闇にあり、暗夜のものである。しかし、その万本の光が矢のように大地を射ると、大地はたちまち光を放ち、昼間に入るのである。あしたの光は聖霊を象徴する。わたしたちが切に神を知ることが求めれば、神の霊はわたしたちの内に宿り、心の暗闇を追い払い、霊の光をもって満たしてくださるのである。

大雨と春の雨とも聖霊を象徴する。大雨は聖霊の恵みを表すが、春の雨は後の雨の聖霊に注がれることを表す。畑に春の雨が注がれると、大いに収穫ができる。わたしたちの心も聖霊に注がれて、はじめて御霊の実を結ぶことができる。切に主を知ることが努めれば、神の霊は大雨のように臨まれ、畑を潤す春の雨のように降られるのであろう。

七、ヨエルの預言

「シオンの子らよ、あなたがたの神、主によって喜び楽しめ。主はあなたがたを義とするために秋の雨を賜い、またあなたがたのために豊かに雨を降らせ、前のように、秋の雨と春の雨とを降らせられる」（ヨエ 2:23）。



「シオンの子ら」とはイスラエル人であるが、新約時代の選民とも言えよう。雨が降らなかったとは、聖霊がとどめられたことを預表する。神に逆らったからである。雨がまた降るとは、聖霊が再度降ることを預表し、神が選民に怒りを抱かれないことを表す。それで、選民は主によって喜び楽しむべきであろう。

「主はあなたがたを義とするために秋の雨を賜い」により、雨がとどめられたのは、イスラエル人の罪とがのためであることがわかる。しかし、神は雨を降らせることによって、彼らを義とする保証とされる。霊的に解釈すると、聖霊がとどめられた原因は、ローマ教の墮落、キリストの福音を変更したところにある。但し、主は永久に怒らず、預言者ヨエルをとおして、聖霊が降り、民を義とすることを約束された。

「その後わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ。あなたがたのむすこ、娘は預言をし、あなたがたの老人たちは夢を見、あなたがたの若者たちは幻を見る。その日わたしはまたわが霊をしもべ、はしために注ぐ」(ヨエ 2:28~29)。

ある聖書学者が言うに、聖書にある聖霊が降る約束についての記載は、大部分がヨエル書のこの預言から取って主題としている。五旬節の日にペテロが引証したのも(使徒 2:16~21)、本章 28~32 節によることがわかる。

この預言から、注意すべき点が三つある：第一、主の霊はすべての人に注ぐのである。謙虚に求めれば、だれでも聖霊を受ける機会が与えられることである。第二、預言、夢、幻は従来神が人を黙示される方法である。聖霊に注がれた者は、これらの不思議な体験ができることである。第三、聖霊を賜る者の対象は、種族、性別、年齢、階級の制限がないことである。

八、ゼカリヤの預言



「すると彼はわたしに言った、『ゼルバベルに、主がお告げになる言葉はこれです。万軍の主は仰せられる、これは権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである。…』」（ゼカ 4:6）。

ゼルバベルはシャルテルの子、ユダの総督である（ハガ 1:1）。また、預言者の預言を成し遂げるため（イザ 44:28、エズ 1:1～6）、紀元前 536 年、ペルシャ王クロスの治世に、王の許可を得て、五万人を率いて国へ帰って、主の宮を再建したリーダーである（エズ 2:2、64～65）。しかし、その地の民は建築を妨げ、ペルシャ王アルタシャスタにまで手紙を書いて、腕力と権力とをもって、ユダの民の工事をやめさせたのである（エズ 4:4～5、7、23）。当時、預言者ゼカリヤは神の名によって励ましたので、彼らは立ち上がって神の宮を建て始めた（エズ 5:1～2）。

ゼカリヤ書 4 章 6 節の聖句によって、あらゆる妨げを勝ち抜き、神の宮の再建を完成するには、神の霊によらなければならないことがわかる。逆に言うと、人の権勢や能力に頼るのは、必ず成功しない。霊的な意味としては、旧約時代の宮は、新約時代の教会を預表する。神の宮が壊されたのは、前の雨の聖霊によって建てられた教会が変わったことを預表する。宮の再建は、世の終りに真の教会が現れることを預表する。ゼルバベルの時代に、宮を再建するには、聖霊によらなければ敵の妨げを乗り越えることはできない。この世の末においても、原始教会を復興するには、やはり聖霊の力によらなければ、すべての妨げに打ち勝つことはできない。ゆえに、後の雨の聖霊が降らなければ、原始教会を復興させる終りの真の教会も現れないのである。

「そこには、平和と繁栄との種がまかれるからである。すなわちぶどうの木は実を結び、地は産物を出し、天は露を与える。わたしはこの民の残れる者に、これをことごとく与える」（ゼカ 8:12）。

露は聖霊の象徴であり、人の心に降った時、荒れ果てた荒野は変わって、肥えた畑となる。そこで、ぶどうの木は実を結び、地は産物を出す。すべては新しい命に生きる状況である。

「民の残れる者」とは、世の終りに大艱難が過ぎた後、「残された者」であり、世の終りに救いの恵みにあずかる「残された者」である(ロマ9:27、29、11:5、25～27)。これでわかるように、ゼカリヤ書8章12節の記載は、後の雨の聖霊がくだる預言である。また、それは、後の雨の聖霊が建てた真の教会が必ずイスラエルに伝えられ、彼らに神の約束の祝福を注ぐ預言とも言えよう。

「あなたがたは春の雨の時に、雨を主に請い求めよ。主はいなずまを造り、大雨を人々に賜い、野の青草をおのおのに賜わる」(ゼカ10:1)。

雨降りには季節の決まりがある。雨季になる前に、雨を求めても無駄になる。「春の雨」とは後の雨の聖霊を預表し、「野」とは人の心を預表する。後の雨の聖霊が降り始めると、あらゆる神に求める者は注がれるのである。

「わたしはダビデの家およびエルサレムの住民に、恵みと祈の霊とを注ぐ。彼らはその刺した者を見る時、ひとり子のために嘆くように彼のために嘆き、ういごのために悲しむように、彼のためにいたく悲しむ」(ゼカ12:10)。

「恵みと祈の霊」とは、聖霊の名称の一つである。イスラエル人はしばしば神に背き、キリストまで十字架につけたが、神はなお聖霊を賜る約束をされた。その時、彼らは自分が殺害した救い主を仰ぎ見、かつ己の罪のためにいたく悲しむのであろう。

九、マラキの預言



「見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたにつかわす。彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て、のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである」(マラ 4:5~6)。

この預言を三つの点に分けて考察しよう：

第一、「主の大いなる恐るべき日」とは終りの日のことである。その日には、神の怒りの火は天体を焼きくずし、地とその上に造り出されたものも皆焼きつくしてしまふ(ゼパ 1:18、Ⅱペテ 3:10~12)。聖書はよくその日を大いなる恐るべき日と表現する(イザ 13:6~16、ヨエ 2:31、ゼパ 1:14~17、黙 6:12~17)。イエスが言われた、その日はロトがソドムから出て行った日と同じであり、人々が平和だ無事だと言っているその矢先に、突如としておそってくるのである(ルカ 17:28~30)。

第二、主の大いなる恐るべき日が来る前に、神は先に預言者エリヤをこの世に遣わされた。人を救う神の経綸を見れば、このエリヤは前後二つの時期に現れる預言者の預表であることがわかる。二つの時期とは、救いの恵みを告げる時期、及び救いの恵みが完成した時期である。①救いを宣告する時期について論じると、イエスは福音を宣べ伝えた始まりから言われた、「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」(マル 1:14~15)。また、バプテスマのヨハネをきたるべきエリヤだと言われた(マタ 11:14、17:10~13)。ヨハネが主の道を備える者であるというイザヤ預言者の預言が、これで成就された(イザ 40:3、マタ 3:3)。もちろんバプテスマのヨハネは、エリヤの生まれ変わった者ではないが、それは彼がエリヤの霊と力とを持ったことを言っている(ルカ 1:17)。彼は人々の質問に対して、自分はエリヤではないと答えたのである(ヨハ 1:21)。②救いを完成



する時期について論じると、エリヤは三年六ヶ月の干ばつの後に、再び雨に注がれるよう求めた預言者であるので(ヤコ 5:17~18)、先の雨の聖霊がとどまってから、後の雨に注がれるように求める真の教会の預表である。エリヤを預表とするバプテスマのヨハネは、キリストが御救いを告げられる前に現れ、道を備える使命を負わされた(マタ 3:3)。エリヤを預表とする真の教会は、キリストが再臨される前に現れ、御救いを全うする使命を負わされているのである(黙 7:1~3、21:2)。

第三、「父」とは唯一の神である(エペ 4:6)。「子供たち」とは、アダムを代表とする世の人である(ルカ 3:38、使徒 17:28)。先祖の最初の墮落によって、地は神に呪われ、神は遠ざかり、先祖はエデンの園から追い出された(創 3:17、22~24)。後に、キリストの死は神と人とを和解させて下さったが(コロ 1:20~22、エペ 2:20~22)、教会の墮落で、この平和は再び破壊された。しかしエリヤを預表とする終りの真の教会が現れて、神と人と、父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせ、地が神に呪われることを免れた。なぜなら、真の教会はエリヤの霊と力を持っているゆえに、勇気を持って偽の預言者との戦いに勝ち抜き(列王上 18:19~40、参考：ガラ 1:7~9、ユダ 3)、聖霊の力に頼って、人の心を変え、確実に主のおきてを守って行わせるのである(エゼ 36:26~27)。

これで、マラキ書 4 章 5~6 節は、後の雨の聖霊が降ることを指している預言であることがわかる。

十、バプテスマのヨハネの預言

「わたしは悔改めのために、水でおまえたちにバプテスマを授けている。しかし、わたしのあとから来る人はわたしよりも力のあるかたで、わたしはそのく



つをぬがせてあげる値うちもない。このかたは、聖霊と火によっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう。」(マタ 3:11)。

バプテスマのヨハネがバプテスマを授け始めた頃から、多くのユダヤ人が彼をキリストと誤解したゆえ、彼はそれを否定して、自分はキリストの先駆者として遣わされたと説明した(ヨハ 1:19~20、3:28)。また自分は水でバプテスマを授けるが、その後から来るキリストは、聖霊によってバプテスマを授けられると、彼のバプテスマを受けようとする人達に言った。言い換えれば、キリストが現れられたのは、聖霊が降る前ぶれである。彼が世に来られなければ、預言者たちが歴代に発した聖霊に注がれる預言は、永遠に実現できないことになるであろう。

「ヨハネはまたあかしをして言った、「わたしは、御霊がはどのように天から下って、彼の上にとどまるのを見た。わたしはこの人を知らなかった。しかし、水でバプテスマを授けるようにと、わたしをおつかわしになったそのかたが、わたしに言われた、『ある人の上に、御霊が下ってとどまるのを見たら、その人こそは、御霊によってバプテスマを授けるかたである』」(ヨハ 1:32~33)。

元々ヨハネはイエスがキリストであることを知らなかったが、天の父は、ある人の上に、御霊が下ってとどまるのを見たら、その人こそは、御霊によってバプテスマを授ける方であると前もって示された。その後、イエスがヨルダン川でヨハネのバプテスマを受けられた時、御霊がその上を下ってくるのを見て(マタ 3:16)、彼こそ御霊によってバプテスマを授けるキリストだとヨハネは悟ったのである。

ここまで、イザヤ預言者及び、バプテスマのヨハネの預言(イザ 11:1~2、42:1、61:1、マタ 3:11)は、それぞれ証明された。神の預言者をとおして聖霊が賜る



預言はそれで最後となったのである。

第二節 イエスの約束

聖霊が注がれる約束に関して、神は、昔の預言者をとおして各時代の選民に預言をさせられただけではなく、時の満ちるに及んで、自ら肉体となって世に来られたのである。主は神の国を実現する福音を宣べ伝え、人々を悔い改めるように催促しながら、聖霊に注がれることを再三約束し、全世界に救いの曙の光を放たれた。イエスが聖霊を賜る約束をされたことを、聖書の何ヶ所にも記されているが、「受難前の約束」と「復活後の約束」とに分けられる。次にそれを分けて述べよう。

一、受難前の約束

「このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物を知っているとするれば、天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さらないことがあろうか」(ルカ 11:13)。

切に聖霊を求めるように人を励ますため、ルカによる福音書 11 章に、イエスの譬が二つ書かれている。まずは、パンを借りる譬であるが、しきりに願うことが、門の外にいる者がパンを貸してもらえた原因である(5~8)。次の譬は、父の愛が子の願いを満足させた原因である(11~12)。この二つの譬を語られた後、イエスは 13 節の言葉をもって、その譬の結論として、切に聖霊を求める者は必ず与えられると約束された。なぜならば、神はわたしたちの最も頼もしい友だけではなく(箴 18:24、ヨハ 15:15)、わたしたちの最も憐み深い父でもあるからである(エペ 4:6、I ヨハ 4:8、詩 103:13)。

「あなたがたが会堂や役人や高官の前へひっぱられて行った場合には、何をど



う弁明しようか、何を言おうかと心配しないがよい。言うべきことは、聖霊がその時に教えてくださるからである」(ルカ 12:11~12)。

弟子たちが伝道のために、いつか会堂や役人の前へ引っ張られ、裁かれることをイエスは前もって知り、恐れることなく、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配しないがよいと言われた。言うべきことは、五旬節の日に降った聖霊が、その時に教えてくださるからである。聖霊が弟子にかわって弁明できるのは、彼は彼らの唯一の「助け主」(Helper)であって、いつでもどこでも彼らを助けるだけでなく、しかも、彼らの唯一の「弁護士」(Paracletos)でもあるので、代わりに言うべきことを言い、法廷に勝たせてくださるからである。

「イエスは答えて言われた、『もしあなたが神の賜物のことを知り、また、「水を飲ませてくれ」といった者が、だれであるか知っていたならば、あなたの方から願い出て、その人から生ける水をもらったことであろう』」(ヨハ 4:10)。

「神の賜物」とは、聖霊が神から来るものであることを示す(I コリ 6:19、使徒 10:44~45、11:15~17)。「あなたの方から願い出て、その人から生ける水をもらったことであろう」とは、聖霊を求める時は早ければ早いほどよくて、決して滞ってはならない。「生ける水」とは聖霊の象徴である。聖霊が宿っている人のうちでは、湧きあがる泉のようなものであることを表す。

多くの人がイエスに近づこうとしないのは、彼がキリスト、人類の救い主であることを知らないからである。サマリヤの女はイエスがだれであるかを知っていたならば、その態度はたちまち変わるであろう。イエスは、サマリヤの女の需要を知った上で、徐々にその心を開き、祈る意思を喚起させ、そして霊的な恵みを与えようとした。イエスのいつくしみと知恵はいかに大いなるものであろうか。



「イエスは女に答えて言われた、『この水を飲む者はだれでも、またかわくであろう。しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう』（ヨハ 4:13~14)。

この聖句は 11 節と強烈な対照となっている。11 節にある、井戸水を飲んだすべての者は、また渴くが、主が与えられる生ける水を飲む者だけは、いつまでも、かわくことがない。なぜならば、主が与えられる水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるからである。言い換えれば、この世の一切のもの、例えば金銭、地位、誉れなどはしばらくのものであり（I ペテ 1:24）、しかも井戸水の如く、人の心をいつまでも満足させることはできない。ただイエスが与えられる聖霊だけは、渴いた魂を潤わせ、永遠の命に入るまで、喜びと慰めをもってその心を満ち足らせるのである（イザ 49:10、ヨハ 6:35、黙 7:16、参考：イザ 58:11）。サマリヤの女は物質の水しか知らなかったが、イエスは彼女に霊の水を与えられた。サマリヤの女以外に、大多数の世の人も皆同じではないのであろうか

「祭りの終りの大事な日に、イエスは立って、叫んで言われた、『だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう』。これは、イエスを信じる人々が受けようとしている御霊をさして言われたのである。すなわち、イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊がまだ下っていなかったのである」（ヨハ 7:37~39)。

「祭りの終りの大事な日」とは、七日間の仮庵の祭が終わった翌日のことであり、民は仮庵から自宅へ帰り、最後の聖会を開く日である（レビ 23:33~39）。八日目は安息日であり、聖会の日であるから、どのような労働もしてはならな



い。先祖が荒野の旅を終え、カナンの地に入った事を記念として、イスラエル人は、この日を大事な日とする。「立って、叫んで言われた」とは、イエスが祭の大事な日に相応する態度を取り、魂を救う情熱の元で、真理を語られたことを表す。「聖書に書いてある」とは、ある箇所ではなく、旧約聖書の多くの所に書いてある聖句のことを言っている(イザ 12:3、44:3、55:1、エゼ 47:9)。

イスラエル人が毎年7月15日に仮庵の祭を守る目的は、先祖が荒野で仮庵の生活をしたのを記念するためである(レビ 23:41~43)。祭の期間中、祭司は毎朝金の水がめを持ってシロアムの池に行くが、群衆と共に「あなたがたは喜びをもって、救の井戸から水をくむ」と唱えながら(イザ 12:3)、水を汲んできて、宮の祭壇の西にかける。群衆は引き続き歓呼し、大いに祝う。それは、先祖がレピデムに宿営した時、岩から飲む水を得た歴史の出来事を記念するためである(出エジ 17:1~6、詩 78:15~16)。彼らはその状況を振り返るが、昔、先祖が渴いて、荒野で死にそうだった時、思いがけぬ生ける水の泉を得、新たな命を与えられたように、声高く歓呼する有様である。パウロは聖霊の啓示を受けて解釈した：岩はキリストであり、生ける水の泉は霊の水であって、聖霊の象徴である(1コリ 10:4)。イエスはこの真理を解き明かすため、最もよい機会をつかみ、わたしのところに来て飲むがよいと叫んで言われた。

「渴く」とは肉体のことではなく、心が渴くことである(アモ 8:11)。「わたしのところに来て飲むがよい」とは、イエスが生ける水の泉であることを説明する。おおよそ、心の渴いたことによって主に近づいてくる人の腹からは、生ける水が流れ出るのである。「だれでも渴く者」とは、一見、世に渴かない者もいるように思われるが、実はそうではない。ラオデキヤにある教会が、自分は富んでいる、豊かになった(黙 3:17)と思ったのは、世の人は皆渴いているが、それを知らない人がいることを証明する。「渴く」、「来る」、「飲む」という文字は、渴きを止める三つのステップであり、また聖霊を受ける秘訣でもある。聖霊の



ない者は、まず、自分の渴いている状態を知り、そして信心深く主に近づき、しきりに祈って、はじめて聖霊に満たされるのである。

「イエスはまだ栄光を受けておられなかった」とは、イエスがまだ、復活して天に上げられないことを言っている(ヨハ 12:16、23、13:32、17:1)。神の定めとしては、イエスが復活して天に上げられた後、聖霊が下るのである(使徒 2:1～4、33)。ゆえに、ここで言っているのは、単なる約束だけである。

「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。それは真理の御霊である。この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである。わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたのところに帰って来る」(ヨハ 14:16～18)。

「助け主」とは、ヨハネによる福音書 14 章から 16 章までにある聖霊の名称であり、教える者、助ける者、力づける者、慰める者、弁護者などの意味が含まれる(詳しくは本著第二章第三節の「助け主」を見よ)。「別に助け主を送って…下さる」とは、イエスが世におられる時、助け主の役目を果たされたことを示している(Iヨハ 2:1)。聖霊が降ったのは、彼に引き続き、弟子たちの助け主となるためであった。「いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう」とは、肉体となられたキリストは、しばらくすると弟子たちと会えなくなるが、聖霊はいつまでも離れずに彼らと共におられることを説明している。「真理の御霊」とは聖霊の名称であり、聖霊の本質が真理であることを表している(Iヨハ 5:6、ヨハ 1:14)。また聖霊は真理について証をし(ヨハ 15:26、14:6)、人をあらゆる真理に導いて下さることを表している(ヨハ 16:13)。「この世」とは、全人類のことではなく、まだ新しく生れていない者をさして言うのである。



聖霊を受けることができないのは、救いの恵みを拒んだからである。「あなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいる」とは、聖霊は即ちキリストの霊であり、目で見える形をもって、弟子たちと共におり、昇天された後、また目で見えない霊をもって、彼らのおられるのである。「あなたがたのところに帰って来る」とは、前文と同じ意味で、聖霊が内におられることであるが、キリストの再臨を言っているのではない(マタ 28:20、ヨハ 14:20～21、23)。

しばらく弟子たちと一緒にいるが、やがて離れて行くとかつてイエスは弟子たちに予告された(ヨハ 13:31～33)。弟子たちはそのために心を騒がせたので、場所を用意しに行くのである、そして用意ができたならば、また来て、自分のところへ迎えようと、主は説明された(ヨハ 14:1～3)。しかし、弟子たちはやはり非常に心を騒がせた。彼らが考えるには、イエスが行かれた後、だれに教わるか。だれに助けてもらうか。だれに力をつけてもらうか。だれに慰めてもらうか。だれに弁護してもらうかということである。父母がなくなり、孤児となった子は、だれかに面倒を見てもらい、慰めてもらわなければならない。弟子たちは同じ状況であった。間もなく敵対とした世の中で孤児となり、まるで小羊が狼の群れに入ったようである。どう対処するか分からず、焦るばかりであった。そこで助け主が下り、主ご自分が世におられる時の御働きを引き続きなさり、弟子たちを孤児とせず、彼らの悩みを解消するとイエスは約束された。

「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起こさせるであろう」(ヨハ 14:26)。

「けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それは自分から語るのではなく、その聞くとこを語り、きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう」(ヨハ 16:13)。

聖霊は弟子たちに今まで主に教えられたことを思い起こさせる：①イエスが世におられる時、弟子たちにいろいろなことを教えられたが、彼らはいつでもどこでもそれを書き写せたわけではない。しかし、聖霊が来る時には、彼らの記憶を喚起させ、彼らが主のために証をする時の助けとなる。②当日、イエスが語られた言葉に、奥深い意味が多く隠されていたので、弟子たちはほとんど理解できなかったであろう(ヨハ 16:12)。しかし聖霊が来る時には、今までの教えを思い起こさせ、悟らせる。③イエスの語られた言葉は、きたるべき事も含んでいるため、成し遂げられる日までは当然悟らない。ただこれらの預言が逐一成就された時に、御霊は彼らに主の言葉を思い出させ(ルカ 24:6~9、ヨハ 2:19~22)、深く主を知るようにさせられる。

聖霊は弟子たちをあらゆる真理に導かれた。イエスは弟子たちに、ご自分の話した言葉は霊であると語られた(ヨハ 6:63)。預言者イザヤは「聖書は封じた書物だ」と言った(イザ 29:11)。ゆえに、御霊の導きと啓示によらなければ、だれも真理を悟ることができないであろう(I コリ 2:10~11)。「あなたがたのうちには、キリストからいただいた油がとどまっているので、だれにも教えてもらう必要はない。この油が、すべてのことをあなたがたに教える。それはまことであって、偽りではないから、その油が教えたように、あなたがたは彼のうちにとどまっていなさい」(I ヨハ 2:27)。

御霊はきたるべき事を弟子たちに教えられる。使徒たちが書いた手紙にある多くの預言は、イエスがおられる時には語られなかったものである。もし聖霊の啓示がなければ、彼らは前もってそれを予知することはできなかったであろう。例えば：①異邦人が共に神の国を継ぐ者となり、共に約束の恵みをいただくこと(エペ 3:3~6、ロマ 9:24~26)。②異邦人の数が満ちてから、イスラエル人もすべて救われること(ロマ 11:25~27)。③キリストが再臨される前、教会に背教のことが起こり、高慢な罪人が現れること(II テサ 2:3~4、II テモ 3:1



～5)。ある者が悪霊の教えに気を取られて、結婚を禁じたり、食物を断つことを命じたり、滅びに至らせる異端をひそかに持ち込んだりすること（Ⅰテモ 4:1～3、Ⅱペテ 2:1）。④キリストが再臨される時に、ある信者は死を経ずに霊体に変えられ、天に引き上げられること（Ⅰコリ 15:51～55、Ⅰテサ 4:15～17）。また、地とそこに造り出されたものは、みな焼きつくされることなどである（Ⅱペテ 3:10）。

「わたしが父のみもとからあなたがたにつかわそうとしている助け主、すなわち、父のみもとから来る真理の御霊が下る時、それはわたしについてあかしをするであろう」（ヨハ 15:26）。

御霊がイエスのために証するものには、直接と間接の二種類に分かれる。直接の証しについてであるが、聖霊が自ら証されたのは：①イエスは確かに復活して昇天し、また必ず再臨されること（ヨハ 16:7、14:3）。②聖霊は即ちイエスの霊である。両者は位格に区別がないこと（ヨハ 14:18）。③バプテスマを施す時に、水の中にイエスの貴い血が流れて、人のあらゆる罪を洗われること（Ⅰヨハ 5:6～8、ヨハ 19:34、エペ 1:7、使徒 22:16）。④わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることを証して下さることなどである（ロマ 8:16）。間接の証しについてであるが、聖霊が弟子たちをとおして証させたのは：①イエスは人の子でありながら、神の御子でもあること（ロマ 1:3～4）。②イエスは命の主である。神はイエスをよみがえらせられたこと（使徒 3:15）。③イエスは昇天して、王と救い主と審判者になられたこと（使徒 5:30～32、10:42～43）。④イエスが炎の中で力ある天使たちを率いて、天から現れられること（Ⅱテサ 1:7～10）。⑤その他、キリストが全世界を救われることについてのすべてのことなどである（詳しくは使徒行伝の各章を見よ）。

「しかし、わたしはほんとうのことをあなたがたに言うが、わたしが去って行

くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう」(ヨハ 16:7)。

イエスが弟子たちを離れて、ご自分を遣わされた父のところに行こうとしていると言われたため、弟子たちの心は憂いで満たされた(ヨハ 16:5~6)。それで、父のところに行くことは、彼らにどのような益をもたらしてくるか、イエスは憂いで満たされている心を慰められた。では、イエスの昇天はなぜ世に残られることより、もっと弟子たちのためになるのであろうか：①彼が行かなければ、聖霊は降らないため。②聖霊によって上から力が授けられ(ルカ 24:49)、信仰と御わざに大きな影響があるため。③行かれた後、弟子たちはイエス以上に大きいわざをするため(ヨハ 14:12)。④イエスはいずれ皆と別れられるが、聖霊はいつまでも彼らと共におられるため。⑤肉体となったイエスは同時に両地に存在できないが、聖霊はいつでもどこでもひとりびとりに共におられるため。⑥イエスの教え、助け、力づけと慰め、或いは弁護などは、外からされたが、聖霊は彼らの内にこれらの働きをかけるため(イエスの昇天は世に残られることより、もっと弟子たちのためになることについて、本書第二章 3 節の「助け主」のところを見よ)。

「しばらくすれば、あなたがたはもうわたしを見なくなる。しかし、またしばらくすれば、わたしに会えるであろう」(ヨハ 16:16)。

ここの聖句を二段落に分けることができる：前半のわたしを見なくなるとは、ご自分の死を預言されたものであるが、後半は復活及び聖霊が降ることの預言である。しかし、前半は約束の聖霊と係わりがないのでさて置いて、後半のみを見よ：①イエスの死は、しばらく弟子たちと離れることであるが、三日後に復活してまた会える(ヨハ 13:31~33、16:17~22)。②聖霊はイエスの霊なので、



聖霊を受けたことは、イエスに会ったことに等しい。なのでその日になって、彼らは何も問う必要はない(ヨハ 16:23、13、I ヨハ 2:20、27)。

二、復活後の約束

「イエスはまた彼らに言われた、『安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす』。そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、「聖霊を受けよ。あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう」(ヨハ 20:21～23)。

この聖句を三つの点に分けて調べよう：第一、天の父によって聖霊に遣わされて、天国の福音を宣べ伝えるのは、世の人を天の父に立ち返らせるためだとイエスはご自分について語られた。現在、彼もまた聖霊によって、弟子たちを福音伝道に遣わされる。そして、未完成の御わざを引き継がせられる。第二、イエスが彼らに息を吹きかけて仰せになった、「聖霊を受けよ」とは、約束であって、すでに成就された事実ではない。第三、聖霊を受けてから、罪を赦す権威と罪を残す権威が授けられると約束された。聖霊は神の霊であるから、聖霊を受けた者はこれらの権威がある。

賈玉銘氏は「ヨハネ新講義」の 263 ページにこう書いた、「この使命(福音伝道の使命)は神の力によらなければできない。そこで、息を吹きかけて、彼らに聖霊を受けさせた。今回、イエスが現れたことはいかに大切であろうか」。弟子たちがその時に聖霊を受けたと思ったからである。

千葉勇五郎氏は「現代新約聖書註解全書第四巻」の 373 ページにこう書いた、「されば此らの語(ヨハネによる福音書 20 章 22 節を指している)は一四の一六、一六の七の成就を云ふ」。かつてイエスが弟子たちに語られた聖霊に関するあら



ゆる約束は、この時に実現されたと思ったからである。

実はこれは約束であり、実現ではない。第一、わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろうとイエスは言われた(ヨハ 16:7)。その時はまだ昇天されていないので、当然弟子たちに聖霊を賜うことは不可能である。第二、ヨハネはイエスが祭の終りの日に言われた言葉を解釈した、「これは、イエスを信じる人々が受けようとしている御霊をさして言われたのである。すなわち、イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊がまだ下っていないのである」(ヨハ 7:39)。栄光を受けられることについて、使徒たちは、イエスが天に上げられ、尊い地位を得られるという考えで一致した(使徒 2:33、5:31、ピリ 2:9~10)。その時は、まだ栄光を受けておられないので、当然聖霊を弟子たちに賜うことはない。第三、イエスが天に上げられる時になお弟子たちに聖霊が降るまで都にとどまっていれば、御働きのために上から力を授けられると言い聞かせられた(ルカ 24:49、使徒 1:8)。もし、弟子たちに息を吹きかけた時、弟子たちが聖霊を受けたとすれば、なぜこのように命じる必要があるか。第四、弟子たちに聖霊が注がれたのは、イエスが昇天された十日後の五旬節の日であった(使徒 2:1~4、33)。

「見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい」(ルカ 24:49)。

イエスが天の父のところへ帰ろうとされる頃、神が預言者たちとキリストをとおして伝えさせた聖霊に注がれる約束は、やがて実現される。「までは」とは、おおよそ神に聖霊を求める者は、注がれるまで忍耐強く決心すべきことを表す。「上から力を授けられる」とは、聖霊に注がれた者に神の力が満たされることを表す。この事は、個人の霊的な修業に役立つのみならず、人が御働きを発展させるのにも力となるのである。



「あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタ 28:20)。

「わたし」とは、肉体となり世に来られたイエス・キリストである。「教えよ」の対象は、弟子たちが命の言葉を伝えた人々のことであり、即ち、イエスが預言者たちと使徒たちという土台の上に建てられた教会である。「いつもあなたと共にいる」とは、イエスの霊であり、即ち、イエスが昇天された後に遣わされた聖霊である。

伝道者が聖書の教えに忠実にし、全備なる救いの恵みを伝え、教会全体を厳しく聖書どおりに守らせるならば、世が終わるまで、聖霊は彼らと共におられる。そうでなければ、海と陸とを巡り歩いて、人を入信させたあげく、地獄の子としたとすれば(マタ 23:15~16)、この盲目的案内者は呪われるべきである(ガラ 1:6~9)。ローマ教の内に聖霊が宿っていないのは、彼らが本来の福音を変え、真理に背いたからである。現在世俗化された各教会団体に聖霊が注がれないのも、聖書の教えを完全に復帰させないからである。「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう」(ヨハ 14:15~16)。

「そして食事を共にしているとき、彼らにお命じになった、『エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう』」(使徒 1:4~5)。

この聖句をルカによる福音書 4 章 49 節に書いてある約束と比較すれば、大した食い違いはない。同じ事の叙述かもしれない。それは、使徒行伝もルカによ



る福音書もルカが同じ受信者に送った書簡であるので(使徒 1:1、ルカ 1:1)、そうなった可能性があるからであろう。「間もなく」とは、天の父が約束された聖霊はもうすぐ降るので、イエスは弟子たちに、しばらく忍耐強く待つようにと、注意を与えられたことである。

「ただ、聖霊があなたがたにくる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」(使徒 1:8)。

聖霊は上から授けられる力であるので(ルカ 24:49)、あらゆる聖霊に注がれた者は、必ずその力に満たされるであろう。明らかに、このような力は個人の信仰に必要だけではなくて、福音伝道にも必要である。前者はさて置いて、後者だけを論じるが、本章 4 節と 8 節の聖句より、聖霊が福音伝道の御わざに重要な地位を占めていることがわかる。なぜなら、第一、もし聖霊に遣わされなければ、だれも伝道者の聖職を負うことができない。第二、聖霊は人に弁才と力を与え、御働きの発展において人を助けられる。第三、聖霊は人の罪を赦すのと、赦さずにおく権威を授けて下さる。第四、聖霊は真理を悟らせ、正しく真理を解釈させられるからである。以上は、福音伝道に聖霊が欠かせない理由であり、またイエスが再三、弟子たちにエルサレムにとどまりなさいと言い聞かせられた原因でもある。

問題

- 一、預言者たちが聖霊に注がれる預言をしたことを五つ述べ、また聖書を引証せよ。
- 二、イエスが聖霊に注がれる預言をされたことを五つ述べ、また聖書を引証せよ。



第八章 聖霊は果たして降った

神は契約を守り、恵みを施される方である(申 7:9)。たとい、わたしたちは不真実であっても、彼は常に真実である。彼は自分を偽ることができないのである(Ⅱテモ 2:13)。従って、各時代の預言者たちに聖霊が降ることを預言させ、またイエスを遣わしてこのことを約束させられた以上、時が来ると必ず実現するであろう。

第一節 前の雨が先に降る

バプテスマのヨハネは神に啓示されて、イエスが御霊によってバプテスマを授けられることを預知した。彼は人々にそのことを知らせて(ヨハ 1:32~33)、また自分はただ悔い改めのバプテスマを授けるだけと述べた(マタ 3:11)。そこで、千年余り神が各時代の預言者たちをとおして伝えさせた約束の聖霊は、イエス・キリストの現れに伴い、同時に希望の光をもたらした。

一、前の雨が降る預言

「主はあなたがたの地に雨を、秋の雨、春の雨ともに、時にしたがって降らせ、…」(申 11:14)。

「われわれに雨を与え、秋の雨と春の雨を時にしたがって降らせ、…」(エレ 5:24)。

「秋の雨」と「春の雨」はみな聖霊の象徴である。ヤコブの手紙 5 章 7 節は「前の雨」と「後の雨」となっている。英訳は「the early and latter rain」である。日訳は「秋の雨」と「春の雨」としたのは、前者は秋の種まきする前に、後者は春の刈入れする前に降るからである。聖書によれば、五旬節の日に



降った聖霊が初めてであり、原始教会の種まきの御働きの時に降ったので、それは前の雨であることがわかる。

「わたしは、かわいた地に水を注ぎ、干からびた地に流れをそそぎ、わが霊をあなたの子らにそそぎ、わが恵みをあなたの子孫に与えるからである」(イザ 44:3)。

「あなたの子孫」とは、ヤコブの子孫であるイスラエル人のことである。1 節に書いてあるとおりで、「しかし、わがしもべヤコブよ、わたしが選んだイスラエルよ、いま聞け」。

「そしてわたしは彼らに一つの心を与え、彼らのうちに新しい霊を授け、彼らの肉から石の心を取り去って、肉の心を与える。これは彼らがわたしのために歩み、わたしのおきてを守って行い、そして彼らがわたしの民となり、わたしが彼らの神となるためである」(エゼ 11:19~20)。

「彼ら」とは、イスラエルの全家である。15~16 節に書いてあるとおりで、「あなたの兄弟である捕われ人、イスラエルの全家…。たとえわたしは彼らを遠く他国人の中に移し、国々の中に散らしても…」。

「わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け、あなたがたの肉から、石の心を除いて、肉の心を与える。わたしはまたわが霊をあなたがたのうちに置いて、わがために歩ませ、わがおきてを守ってこれを行わせる」(エゼ 36:26~27)。

「あなたがた」とは、イスラエルの家である。22 節に書いてあるとおりで、「それゆえ、あなたはイスラエルの家に言え。主なる神はこう言われる、イ



スラエルの家よ、わたしがすることはあなたがたのためではない。…」。

「わたしがわが霊を、あなたがたのうちに置いて、あなたがたを生かし、…」
(エゼ 37:14)。

「あなたがた」とはイスラエルの全家であり、11 節に書いてあるとおりである、「そこで彼はわたしに言われた、『人の子よ、これらの骨はイスラエルの全家である。…』」。

「わたしは悔改めのために、水でおまえたちにバプテスマを授けている。しかし、わたしのあとから来る人はわたしよりも力のあるかたで、わたしはそのくつをぬがせてあげる値うちもない。このかたは、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう」(マタ 3:11)。

「おまえたち」とはユダヤ人であり、5 節に書いてあるとおりである、「すると、エルサレムとユダヤ全土とヨルダン附近一帯の人々が、ぞくぞくとヨハネのところに出てきて」。

以上の聖霊が賜る約束は、皆イスラエル人のことだけを言っている。これは前の雨が降る根拠となる。なぜならば、五旬節の日にイスラエル人に降った聖霊は前の雨であるが、後の雨ではないからである。

二、前の雨が降った歴史

「五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっばいに響きわたった。また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、



いろいろの他国の言葉で語り出した」(使徒 2:1~4)。

激しい風が吹いてきたような音、炎のように分かれて現れる舌のようなもの、不思議ないろいろの他国の言葉というのは、約束された御霊が降ったことである。「思いのままに吹く風」(ヨハ 3:8)、及び「焼き尽くす霊」(新改訳イザ 4:3~4)は、祈っている最中の約百二十名の弟子たちの身に降ったのである(使徒 1:14~15)。風は神秘的であり、行ったり来たりして測り知れないものだが、それは聖霊が目に見えないが、音の聞こえることを表している。聖霊が大いに降った時、大勢の人が集まって祈ると、よくある現象である(参考:使徒 4:31、黙 19:6)。火は熱と光を発し、吹き分けて鉱物を溶解する働きがある。それは聖霊が人を熱心にさせ、世の光とし、そして人の罪を清め、一体とすることができのを表している。舌はことばを話す器官であるので、聖霊が人に弁才を賜り、御こころに従って全備なる福音を伝えさせることを表している。一方、舌も聖霊が人に異言を語らせる賜物をくださることを表している(使徒 10:46)。

イエスが天に上って行かれた後、上からの力を受けるために、弟子たちは御ことばどおりにエルサレムに集まり、毎日心を合わせてひたすら祈りをしていた(ルカ 24:49、使徒 1:4~5、12~15)。五旬節の日になって、果たして彼らの祈りが聞き入れられた。約百二十人がみんな聖霊に満たされ、千年余りにわたって聖霊に関わるすべての約束が成就された。国々からエルサレムへ帰ってきたユダヤ人たちは、その意味がわからなくて、驚き怪しんだ。中でも酒で酔っているとあざ笑った者がいる(使徒 2:13)。そこでペテロは預言者ヨエルが預言したことを引証して説明した(使徒 2:16~18、ヨエ 2:28~29)。即ち彼らが受けたのは神が預言者たちをとおして預言させた約束の聖霊のことである。また、だれでも悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受ければ、聖霊の賜物を受けるであろうと言った(使徒 2:37~39)。そこで、彼の勧めの言葉を受け入れた者たちは、三千人ほどバプテスマを受けた。そして一同はひ



たすら、使徒たちの教えを守った(使徒 2:40~42)。これは聖霊が使徒たちをと
おした初めての証であり、原始教会の誕生でもあった。その後、使徒たちは至
る所主のために福音を宣べ伝え、そして、みんなの者に御霊が降った(使徒 8:17、
10:44、19:6)。

第二節 聖霊が止んだ

イスラエル国の雨季は、前の雨と後の雨がある。前の雨は秋の種蒔き前に降
るので、秋の雨とも言われる。後の雨は春の収穫前に降るので、春の雨とも言
われる。二千年ほど前、五旬節の日に聖霊が初めて降ったことによって、約三
千人がバプテスマを受け、原始教会が成立した。それは前の雨の聖霊が種蒔き
の時期であった。二十世紀初、聖霊は再び降って、世の終りの真の教会を建て
られた。それは後の雨の聖霊が収穫の時期である。

前の雨の聖霊は、神の約束されたとおりに降ったが、前の雨と後の雨の間に雨
の降らない(聖霊が止まる)時期がある。それは、イスラエルの冬に雨が
ないというわけではなく、選民の反逆が神を怒らせ、降るべき雨が降ってこ
ないことを言っている。これはほかの問題と同じように、聖書に預言と預表が
すでに前もって書かれていたことである(イザ 46:10)。次に述べよう：

一、聖霊が止む預言

「わたしはあなたがたの誇とする力を砕き、あなたがたの天を鉄のようにし、
あなたがたの地を青銅のようにするであろう。あなたがたの力は、むだに費さ
れるであろう。すなわち、地は産物をいださず、国のうちの木々は実を結ば
ないであろう」(レビ 26:19~20)。

「天を鉄のようにする」とは、天から雨を降らせないことであり、「地を青銅の



ようにする」とは、干ばつで地が堅くなることである。本章の14～16節を参考にすると、「しかし、あなたがたがもしわたしに聞き従わず、またこのすべての戒めを守らず、わたしの定めを軽んじ、心にわたしのおきてを忌みきらって、わたしのすべての戒めを守らず、わたしの契約を破るならば、わたしはあなたがたにこのようにするであろう。…」とある。ここからわかるように、雨が降らない原因は、選民が神に逆らい、神を怒らせたからである。霊的な意味を論じると、旧約の選民は新約の選民を、雨が降らないことは聖霊が止められたことを、地は人の心を、産物と実とは聖霊の実を預表する。聖霊が止まったのは、ローマ教の変質のゆえである。結局、信者の心は固い地のように涸れた。苦しい修行をしても、聖霊の助力がないため、進歩できず、思いどおりに霊の実を豊かに結ぶことができない。これは、千年余りにわたり俗化された教会が墮落した状況であり、または墮落した原因である。

「あなたがたは心が迷い、離れ去って、他の神々に仕え、それを拝むことのないよう、慎まなければならない。おそらく主はあなたがたにむかい怒りを発して、天を閉ざされるであろう。そのため雨は降らず、地は産物を出さず、あなたがたは主が賜わる良い地から、すみやかに滅びうせるであろう」(申11:16～17)。

「目をあげてもろもろの裸の山を見よ、姦淫を行わなかった所がどこにあるか。荒野にいるアラビヤびとがするように、あなたは道のかたわらに座して恋人を待った。あなたは姦淫の悪事をもって、この地を汚した。それゆえ雨はとどめられ、春の雨は降らなかった。しかもあなたには遊女の額があり、少しも恥じようとはしない」(エレ3:2～3)。

申命記11章の記載によれば、他の神々に仕え、拝むことは、旧約の選民が雨の降らない刑罰を受けた理由であることがわかる。エレミヤ書3章に書いてあ



る、選民が姦淫を行ったことによって、春の雨が降らないのも同じ意味である(エレ2:20~25、3:6~14)。新約時代の教会の歴史から見れば、このニカ所の聖句は、さらに聖霊が止まった原因を詳しく語っている。前者にすると、アハブ王の治世に、王と民とも偶像を拜んで主を怒らせ、天が閉ざされて雨が降らなかった(列王上17:1、7、16:30~33)。それで、申命記11章の預言が成就された。後者にすると、ローマ法王は地上のキリストと自称し、公然と人に拜まれる。そして、イエス、使徒、聖徒、殉教者及びマリヤの絵、或いは像を人々に拜ませた。これは、聖霊が止まった原因の一つである。一般の俗化された教会は、偶像崇拝はしないが、神学博士や有名な布教者など、教会のリーダーを崇拝する。しかも、彼らの名前を教会の名として、記念する。栄光を神に帰せず、人に帰するのも、偶像を造ることと偶像を拜むことに等しいのである。使徒ペテロとパウロは、優れた賜物を持ち、主に重用された器であるが、人に拜まれ、ほめられることを止めさせた(使徒10:25~26、14:11~15)。これはわたしたちが深く反省するに当たるところであろう。

「主は川を野に変らせ、泉をかわいた地に変らせ、肥えた地をそれに住む者の悪のゆえに塩地に変らせられる」(詩107:33~34)。

聖霊が降ったのは、元々荒野(人の心)を泉に変わらせるためであったが(ヨハ4:14)、そこに住む者(教会)の罪悪のゆえに、川が荒野に変えられ(聖霊が止んだ)、肥えた地が塩地に変えられ、耕せなくなったのである(聖霊を失ったため、天国の種は教会に根ざし、芽を出し、生長することはできなくなった)。

「わたしはこれを荒して、刈り込むことも、耕すこともせず、おどろと、いばらとを生えさせ、また雲に命じて、その上に雨を降らさない」(イザ5:6)。

主はぶどう畑をイスラエルの家に譬え、ぶどうの木を民に譬えられた。主は



良いぶどう（公平）が結ぶのを待ち望まれたが、彼らは野ぶどう（暴虐）を結んだのである。それで神は、それを荒らして、おどろと、いばらとを生えさせ、また雲に命じて、その上に雨を降らさない（イザ 5:3~7）。ローマ教の墮落のゆえに、とうとう聖霊が降らなくなった。

「ユダは悲しみ、その町々の門は傾き、民は地に座して嘆き、エルサレムの叫びはあがる。その君たちは、しもべをつかわして水をくませる。彼らが井戸の所にきても、水は見つからず、むなしい器をもって帰り、恥じ、かつ当惑して、その頭をおおう。地に雨が降らず、土が、かわいて割れたため、農夫は恥じて、その頭をおおう」（エレ 14:2~4）。

ユダヤ人は何度も背信し、彷徨い、その足をとどめないため主を怒らせたので、主は彼らのいけにえを喜ばず、その呼ばわりを聞き入れず、彼らがききんに遭うことを預言された（エレ 14:7~12）。ローマ教は真理に背き、天の父の御旨に従わないため、聖霊が降らなくなった。

「あなたがたに命じておいたいっさいのことは守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」（マタ 28:20）。

イエスは弟子たちを孤児として捨てず、世の終りまで常に彼らと共におられたいが、その前提は、確実に彼の教えをすべて守るという条件を受けることである。逆に言えば、主の教えを変え、厳しく守らなければ、彼は離れて共におられないことになる。聖霊は主の霊である。主が教会と共におられないことは、聖霊が止められることを意味する。ローマ教が福音を変えたことによって、この約束は実現できなくなり、聖霊が止む預言が成就された。実に惜しいことであろう。



「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。それは真理の御霊である。…わたしのいましめを心にいただいてこれを守る者は、わたしを愛する者である。わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう。もしだれでもわたしを愛するならば、わたしの言葉を守るであろう。そして、わたしの父はその人を愛し、また、わたしたちはその人のところに行って、その人と一緒に住むであろう」（ヨハ 14：15～17、21、23）。「わたしの叱責に心を留めるなら、今すぐ、あなたがたにわたしの霊を注ぎ、あなたがたにわたしのことばを知らせよう」（新改訳 箴 1:23）。聖霊のない各教会団体は心から悔い改め、真の教会に入り、主の戒めを守れば、はじめて聖霊に注がれるのではないであろうか。

二、聖霊が止む預表

「よく聞いておきなさい。エリヤの時代に、三年六か月にわたって天が閉じ、イスラエル全土に大ききんがあった際、そこには多くのやもめがいたのに、」（ルカ 4:25）。

エリヤの時代に、三年六か月にわたって天が閉じたのは、アハブ王が主の戒めを捨て、バアルに仕え、偶像を拝むと共に民までよこしまなことを行わせたほかに理由はないであろう（列王上 16:30～33、18:17～18）。

雨は聖霊を象徴するので、天が閉じたのは聖霊の止まったことを象徴する。一日を一年とすれば（民 14:34、エゼ 4:6）、三年半にわたって雨が降らないのは、千年あまり聖霊が止まったことを預表する。アハブ王の治世に、民は反逆によって三年六か月にわたって、雨が降らない災いを招いた。新約時代もローマ教が原始の福音を変え、神に背いたため、千年あまり聖霊が止まった局面に至ら



せたのである(参考：マタ 28:20)。

三、聖霊が止んだ歴史

聖霊が止んだ歴史を調べるのは、実に容易なことではない。第一、聖書に聖霊が止む預言と預表しか載っていないが、その歴史は全く書いていない。なぜならば、ヨハネが聖書の最終巻である黙示録を書いた時、聖霊はまだ原始教会を離れていなかったからである。第二、ローマ教も一般の世の教会も五旬節の聖霊がずっと教会を離れていないと主張するので、彼らの書いた教会歴史から、聖霊が止んだ資料を見つけることは不可能である。第三、聖霊は信者の墮落によって、徐々に教会を離れていったので、突然なくなったわけではない。ゆえに、これから述べる聖霊が止んだ時期は、推測であり、確定できないものである。次に述べよう。

ドイツ籍の神学者 Weinel は、嘗て使徒時代における霊的な現象を全面的に研究した。彼が言うに、「二世紀になって、なお『靈感の集会』と呼べるものがあった」、また、「聖霊は按手と祈りをとおして、主に属する者に渡され、さらに奇跡と不思議を行わせたのである」。いわゆる「靈感の集会」とは、聖霊を求める者のために開いた特別集会のことである。二世紀になって、なおこのような集会があったと言ったから、その後になくなったことを暗示されているのではないか。

W, T, Ress 博士の著作は、「紀元一世紀の教会は聖霊の働きによって主を知るようになったが、二世紀以降は教会の規定によって主を知るようになったので、おおそ教会の規定に合わない霊的な現象は、皆邪霊と見られた」とあった。二、三世紀の教会は、集会のときの過度な表現に反対するため、極端な立場に立って、聖霊の働きに僅かな空間を与えた。その結果、教会の熱意が冷め、霊的な現れも殆ど止まった状態であった。「御霊を消してはいけない」(I テサ



5:19)と、パウロの注意を再三考えるべきではないか。

使徒ヨハネが、ヨハネの第一の手紙を書いた頃は、ちょうど神哲主義 (Gnostic) が流行っていた。ある者はそれに惑わされ、教会から去って行った (Iヨハ2:19)。救いの恵みは「知識」(ギリシャ語: gnosis) によるものであるので、生活を慎むかどうかと関係がないと彼らは主張した。最も甚だしいのは、知識の衣をもって明るみに出せない淫猥な行為を隠そうとしたところである。

「聖書百科全書」文芸部午上第28ページに書いてある、「ノスチ派 (Gnosticism) は魂と体とを無関係な存在としている。魂は靈的な思いを努めるが、体は肉の欲を放縱に任せる。その理由は、体と魂の性質は完全に異なり、体は如何なる卑劣なことをしたとしても、魂を汚すことはできないということである」。また29ページに書いてある、「彼らは神を知っていると口では言うが、行いは神に背いている。彼らは忌まわしい者、また不従順な者であって、いっさいの良いわざに関しては、失格者である (テト1:16)。多くの罪を積み重ねている者どもをとりこにしている (IIテモ3:5~6)。肉の欲をもって人を惑わす (IIペテ2:14~18)。彼らは不信仰な者であり、神の恵みを放縱な生活に変え、唯一の君であり、わたしたちの主であるイエス・キリストを否定している。それは肉を汚し、利のために反逆をして、肉に属し、御霊を持たない者である (ユダ4、8、11、19)。ヨハネが七つの教会に書き送った手紙の中で、ノスチ派の者にも触れた。いわゆるニコライ宗の者が唱えたのは、罪を犯す自由である。彼らの行いは実にキリストに憎まれるものである。ペルガモにある教会に書き送った手紙にもあるように、彼らの教えは、欲を放縱し、偶像に供えた物を食べ、不品行をするような、神が憎まれた悪である。また、テアテラにある教会に書き送った手紙にも、この宗派は悪ばかり働いているとあるが、前述の如く、邪悪な道を走り、サタンの淵である」。

このような神哲主義はすでに原始教会ではらみつつあり、弊害が多かった。それは使徒たちによって掲げられ、責められたが、完全に一掃することができなかった。教会はそれによって日ごとに墮落し、聖霊が完全に止む状況に至った。ニカイア公会議の先に、コンスタンチノーブル (Constantinople) とローマに、多くの人がそれに随従したので、原始教会の正統な信仰に大きな影響を与えた。ニカイア公会議の後、この学説はだんだんなくなったが、やはり、完全に除き取ることはできなかった。

多数の聖書学者の主張が一致しているのが、ヨハネが黙示録を書いた時期は西暦 95 年から 96 年の間、即ち一世紀の末だとされている。当時、ヨハネはパトモスという島で主の黙示を得、エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラデルヒヤ、ラオデキヤなど七つの教会に手紙を送って、彼らの過ちと冷めた状態を責めた (黙 1:9~11)。二世紀になって、使徒たちはみな、世を去って行き (最後に死亡した使徒のヨハネは西暦 98 年)、教会は指導するリーダーに欠け、しだいに俗化し、聖霊の感動を消したゆえに、聖霊が徐々に降らない状態になった。

前述の理由を見て、聖霊が完全に止んだのは、三世紀以降のことであると推測できる。

第三節 後の雨が降られる

「雲がもし雨で満ちるならば、地にそれを注ぐ、…」(伝 11:3)。

「雲が雨で満ちる」とは、霊的な意味で言うと、御霊が降り注ごうとする時期である。前の雨なる聖霊に注がれる時が定められた以上、後の雨なる聖霊も決まった時間に注がれる。「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざに



は時がある。生るに時があり、死ぬるに時があり、植えるに時があり、植えたものを抜くに時があり、殺すに時があり、いやすに時があり、こわすに時があり、建てるに時があり、泣くに時があり、笑うに時があり、悲しむに時があり、踊るに時があり、石を投げるに時があり、石を集めるに時があり、抱くに時があり、抱くことをやめるに時があり、捜すに時があり、失うに時があり、保つに時があり、捨てるに時があり、裂くに時があり、縫うに時があり、黙るに時があり、語るに時があり、愛するに時があり、憎むに時があり、戦うに時があり、和らぐに時がある」(伝 3:1~8)。

二・三世紀以降の教会が墮落して主を怒らせたことによって、聖霊が止められたが、慈愛なる神は永久に怒らず、時の満ちるに及んで、依然として約束の聖霊を注ぎ、教会を復興させられるのである。「だれかあなたのように不義をゆるし、その嗣業の残れる者のためにとがを見過ごされる神があるろうか。神はいつくしみを喜ばれるので、その怒りをながく保たず、再びわれわれをあわれみ、われわれの不義を足で踏みつけられる。あなたはわれわれのもろもろの罪を海の深みに投げ入れ、昔からわれわれの先祖たちに誓われたように、真実をヤコブに示し、いつくしみをアブラハムに示される」(ミカ 7:18~20)。

一、後の雨が降られる預言

「その日、主は再び手を伸べて、その民の残れる者を…国々からあがなわれる」(イザ 11:11)。

旧約時代の民は神に反逆したことによって、異邦に散ったが、神はなお、再び手を差し伸べて彼らを救われた。新約時代の民が遭遇した事も、やがて受ける救いの恵みも、これに類似したものである。ゆえに、後の雨なる聖霊が降り、再び救われる事については、とうの昔に神が預言されたとわかる。なるほど、アブラハムの子孫には肉による者と霊による者があるのだ(創 20:17)。旧約時



代の選民は肉による子孫であるが、新約時代の民は霊による子孫である（ガラ 3:29）。肉による子孫の遭遇したことが、預言どおりに成就されたように、霊による子孫の遭遇することも成就されるのである。

「しかし、ついには霊が上からわれわれの上にそそがれて、荒野は良き畑となり、良き畑は林のごとく見られるようになる」（イザ 32:15）。

ユダという国は主に逆らったことによって、荒廃したが、主は必ず復興させると約束された。教会は聖霊を失った後、荒野のように荒れ果てた。しかし、主は後の雨を注ぎ、荒地を生気に満ちた豊かな地に変えると約束された。「主はシオンを慰め、またそのすべて荒れた所を慰めて、その荒野をエデンのように、そのさばくを主の園のようにされる。こうして、その中に喜びと楽しみとがあり、感謝と歌の声とがある」（イザ 51:3）。

「その後わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ。あなたがたのむすこ、娘は預言をし、あなたがたの老人たちは夢を見、あなたがたの若者たちは幻を見る。その日わたしはまたわが霊をしもべ、はしために注ぐ。わたしはまた、天と地とにしるしを示す。すなわち血と、火と、煙の柱とがあるであろう。主の大いなる恐るべき日が来る前に、日は暗く、月は血に変わる」（ヨエ 2:28～31）。

この預言は、五旬節の日に聖霊が大いに降った時、ペテロが前の雨である聖霊の引証として語った（使徒 2:17～21）が、最後の二節にある不思議な事を見れば、やはり後の雨である聖霊の預言とみてよかろう。

「あなたがたは春の雨の時に、雨を主に請い求めよ。主はいなずまを造り、大雨を人々に賜い、野の青草をおのおのに賜わる」（ゼカ 10:1）。



春の雨は即ち後の雨であり、世の終りに真の教会を建てる聖霊を象徴する。これは後の雨が降ることに関する最も顕著な預言である。見よ、現在は後の雨が豊かに注いでいる時であるので、真の教会に来て求めるすべての者は、必ず神の約束の聖霊を賜われるであろう。

後の雨が降る預言は、前述の数箇所以外にも、聖書にはまだ多く載っている。本書第七章第一節「預言者たちの預言」のところを参考にしよう（申 11:14、エゼ 39:29、ホセ 6:3、ヨエ 2:23、ゼカ 4:6、8:12 などの註解）。

二、後の雨が降られる預表

「エリヤは、わたしたちと同じ人間であったが、雨が降らないようにと祈をささげたところ、三年六か月のあいだ、地上に雨が降らなかった。それから、ふたたび祈ったところ、天は雨を降らせ、地はその実をみのらせた」（ヤコ 5:17～18）。

「見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたにつかわす。彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て、のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである」（マラ 4:5～6）。

エリヤは雨を求める預言者であり、神に聖霊を求める世の終りにある真の教会を預表する。エリヤがいかにして民を導いて、偶像を離れさせ、主の戒めを守らせたか、それによって主の怒りが離れ、大雨を降らせたように（列王上 18:17～21、39～45）、世の終りの真の教会も信仰のために戦い（ユダ 3）、主に聖霊を求め、人を異端から離れさせ、人を神と和解させるのである。エリヤはまたバプテスマのヨハネを預表する。それは、バプテスマのヨハネはエリヤと同じ志と力があったからである（マタ 17:10～13、ルカ 1:15～17）：バプテスマのヨハネはイエスの先駆者であって、悔い改めて主に近づき、主のご再臨を迎

える用意を整えるよう、人を導いたが(イザ 40:3~5)、世の終わりの真の教会も主のご再臨を迎える用意を整えるよう、人を導くのである(黙 21:2、9~10)。

「彼らはいにしへの荒れた所を建てなおし、さきに荒れすたれた所を興し、荒れた町々を新たにし、世々すたれた所を再び建てる」(イザ 61:4)。

「見よ、わたしはあなたがたに臨み、あなたがたを顧みる。あなたがたは耕され、種をまかれる。わたしはあなたがたの上に人をふやす。これはことごとくイスラエルの家の者となり、町々には人が住み、荒れ跡は建て直される。」(エゼ 36:9~10)。

「主なる神はこう言われる、わたしは、あなたがたのすべての罪を清める日に、町々に人を住ませ、その荒れ跡を建て直す。荒れた地は、行き来の人々の目に荒れ地と見えたのに引きかえて耕される。そこで人々は言う、『この荒れた地は、エデンの園のようになった。荒れ、滅び、くずれた町々は、堅固になり、人の住む所となった』と。あなたがたの周囲に残った諸国民は主なるわたしがくずれた所を建て直し、荒れた所にもものを植えたということを悟るようになる。主なるわたしがこれを言い、これをなすのである」(エゼ 36:33~36)。

列王と民たちが絶えず主に逆らったことによって、旧約時代にソロモンが建てた主の宮は、敵に焼かれ、破壊された。そして残りの群衆はバビロンへ捕らえ移された(列王下 25:8~12)。七十年が満ちて、預言者たちによって伝えた預言を成就するため、主はペルシャ王クロスの霊を感動させ、神の宮の再建を許させられた(歴代下 36:17~23、イザ 44:28、エレ 25:11~12)。この事もまた霊の宮、即ち真の教会(I コリ 3:16~17、I ペテ 2:5)が同じルートを通過すること(建設→破壊→再建)を表す。

「すると彼はわたしに言った、『ゼルバベルに、主がお告げになる言葉はこれです。万軍の主は仰せられる、これは権勢によらず、能力によらず、わたしの



霊によるのである』…」（ゼカ 4:6）。

紀元前 536 年、ペルシャ王クロスの時、ゼルバベルは王の許しを得て、民を率いて主の宮の再建のために国へ戻った。間もなく、当地の敵は腕力と権力とをもって彼らをやめさせた。即ちペルシャ王ダリヨス治世の二年まで中止された（エズ 4:1～24）。その時、神は預言者ゼカリヤをとおしてゼルバベルに指示された。主の霊によらなければ、敵の様々な妨げに勝ち、早く宮の再建を完成することができない。この事もまた、真の教会が託された重大な使命を預表している：真の教会は後の雨の聖霊の助けによって、悪魔の破壊を打ち破り、原始教会を復興させることである。

「あなたの子らは久しく荒れすたれたる所を興し、あなたは代々やぶれた基を立て、人はあなたを『破れを繕う者』と呼び、『市街を繕って住むべき所となす者』と呼ぶようになる」（イザ 58:12）。

「その日には、わたしはダビデの倒れた幕屋を興し、その破損を繕い、そのくずれた所を興し、これを昔の時のように建てる」（アモ 9:11）。

「彼に言われました、『これらの器を携えて行って、エルサレムにある宮に納め、神の宮をもとの所に建てよ』と」（エズ 5:15）。

霊的な意味で言うと、「代々やぶれた基を立てる」とは、二・三世紀以降の教会は墮落したが、悪魔に破壊された信仰の基は、二十世紀初めに真の教会が現れてはじめて再建され、荒れ廃れた所が繕われることを預表する。「これを昔の時のように建てる」と「神の宮をもとの所に建てよ」とは、世の終りに現れる真の教会は、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリストご自身が隅の石であり（エペ 2:19～20）、原始教会を復興し、主が託された使命を全うすることを預表する。

ゼルバベルが民を導いて帰国して、神の宮を再建する時、神は預言者ゼカリヤをとおして、神の霊によらずには何もできることはないと彼に指示された(ゼカ 4:6)。イエスも弟子たちに教えられた、「けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。…」(ヨハ 16:13)。従って、元の基に宮を再建する時は、後の雨の聖霊の導きと助けによらなければ、成功できないのである。

「そして彼はわたしを宮の戸口に帰らせた。見よ、水が宮の敷居の下から、東の方へ流れていた。宮は東に面し、その水は、下から出て、祭壇の南にある宮の敷居の南の端から、流れ下っていた」(エゼ 47:1)。

「宮」とは主イエスの預表である(ヨハ 2:21)。宮の敷居の下から流れていた「水」とは、イエスが遣わされた聖霊を預表する(ヨハ 7:37~39、17:7)。本章3~5節に書いてあるように、水はますます深くなって、泳げるほどの水、越え得ないほどの川になった。それは後の雨の聖霊がますます盛んに働きかけることを預表する。なぜならば、前の雨の聖霊の御働きは、大から小へ、そして完全に消滅に至った。後の雨の聖霊の御働きは逆に、小から大へ、主が再臨され、教会を迎えられるまでに至るからである(黙 21:2、9~10)。「この宮のこれから後の栄光は、先のものよりまさらう。万軍の主は仰せられる」(新改訳ハガ 2:9)。

三、後の雨が降られる場所

イエス・キリストはユダヤでお生まれになった。前の雨の聖霊もユダヤに降った。ユダヤはアジア、ヨーロッパ、アフリカ三大州を往来する大道にあり、アジアに属し、当時の世界の東にある。前の雨の聖霊は東に降り、東で原始教会を成立し、「生命の道」を東から西へ伝え、当時の各民族を救われた。後の雨の聖霊である真の教会も東に建てられ、純正な原始の福音を東より西へ伝え、



各教派の過ちを更正し、終りの救いの恵みを全うするのである。理由は次のとおりである：

「これは我らの神のあわれみの心による。このあわれみによって、あけぼのの光が高い所から我らを訪れ、暗闇と死の陰に座っている人々を照らし、我らの歩みを平和の道に導く」（共同訳ルカ 1:78～79）。

「暗闇と死の陰とに座っている」とは、まだ罪の中にあり、新たに生れていない者のことである。彼らは、光と命と平和の道を必要としている。「あけぼのの光」とはイエスを象徴する。彼は世の太陽であり、暗闇と死の陰に座っているすべての者の救い主である。太陽は東から昇り、西へ沈み、東にいる者を先に照らすように、イエスも東に生まれ、先に東にいる者に恵みを与えられる。聖霊はイエスの霊であるので、前後の雨を問わず、まず東に降って、そして西へ伝わるはずなのである。

「人の子が来るのは、いなくまが東から出て、西にひらめくように、ちょうどそのように来るのです」（新改訳マタ 24:27）。

聖霊は「人の子」の霊である。「人の子が来る」とは聖霊が降ることである（マタ 16:28）。「いなくま」は聖霊であり、真理でもある。いなくまが東から西へひらめき渡るように、聖霊と真理も東から西に伝わるのである。

「セムの神、主はほむべきかな、…、神はやペテを大いならしめ、セムの天幕に彼を住まわせられるように」（創 9:26～27）。

セムは黄色人種の先祖であるが、ヤペテは白色人種の先祖である。「セムの神」とは、セムの子孫が神を拝むことに、特別に祝福されることを暗示している。



従って、アブラハムも救い主のイエスもセムの子孫から出た(創 11:10~27、ルカ 3:23~36)、前の雨の聖霊は彼らの国に降られた。同様に後の雨の聖霊もセムの子孫(中国人)の国に降り、後にヤペテの子孫の国へ伝えられた。「神はヤペテを大いならしめ」とは、ヤペテの子孫が物質文明において特別に祝福され、その領域を拡大しつつあることを預言したものである。後の歴史はそのように流れ行き、この預言の成就を見せた。霊的な意味としては、「神はヤペテを大いならしめ、セムの天幕に彼を住まわせられるように」という言葉は、白色人種の教会がどんなに発展しても、黄色人種によってできた真の教会に入らなければ、真の安息を楽しむことができないことを預言している。

「主なる神は東のかた、エデンに一つの園を設けて、その造った人をそこに置かれた」(創 2:8)。

「エデンの園」は聖霊によって建てられた真の教会を預表する：第一、主はすべての青草を食物として、すべての獣、鳥に与えられた(創 1:30)。それによって彼らは弱肉強食の情況がなく、平和に暮した。真の教会で聖霊によって新たにされた者も(テト 3:5)、互に愛し合い、エデンの園にあった平和な光景を取り戻すのであろう(イザ 11:6~9)。第二、神はご自分のかたちに男と女とを創造され(創 1:27)、清くて罪のない彼らを、エデンの園に置かれた。真の教会で聖霊により新たにされた者も清くて罪がなく(Ⅱコリ 5:17、テト 3:5、使徒 22:16、ロマ 8:2)、真の義と聖とをそなえているのである(エペ 4:24)。第三、エデンの園に命の木があって(創 2:9)、その実を取って食べると永遠に生きる(創 3:22)。真の教会にも命の木があって(黙 22:2、14)、信じる者に永遠の命を与えることができるのである(ヨハ 3:5、16、ガラ 5:25)。第四、エデンの園には食べるに良い木がたくさん生えた(創 2:9)。真の教会で聖霊に満たされた者も、御霊の実を結ぶのである(ヨハ 15:5、ガラ 5:22~23、雅 4:12~14)。第五、エデンの園に尊い純金や宝石がある(創 2:11~12)。真の教会でいろいろな試練を受け



た真の信者にも、金や宝石のような信仰が出て来るのである(I ペテ 1:6~7、黙 21:18~21、ヨブ 23:10)。第六、エデンの園に川が四つあり、園全体を潤した(創 2:10~14)。真の教会にも川を象徴とする聖霊があり、それを飲む者はいつまでもかわくことがないのである(ヨハ 4:13~14、7:37~39)。第七、エデンの園で、人は神とよく接触することができた(創 3:8 上)。真の教会においても、神の霊によって人は神と密接な交わりをするのである(黙 21:3、ヨハ 14:16~17、I ヨハ 3:24)。

エデンの園は東に置かれた。ゆえに、前の雨なる聖霊が設立された原始教会はかつて東に現れた。後の雨なる聖霊が設立された真の教会も必ず東にあるのである(黙 7:2)。

「神は人を追い出し、エデンの園の東に、ケルビムと、回る炎のつるぎとを置いて、命の木の道を守らせられた」(創 3:24)。

エデンの園は東に置かれた。先祖が主に逆らったことにより追い出された後、主は園の東に、ケルビムと回る炎のつるぎとを置いて、命の木の道を守らせられた。それで、これ以上ない唯一の道は東にあることがわかる。この事は、救いの恵みは、東方から出てくることを暗示している。どの時代でも、おおよそ永遠の命を追い求める者は、東に現れた真の教会に帰さなければならない。前の雨なる聖霊によって設立された原始教会の時代はそうであるが、後の雨なる聖霊によって建てられた終りの真の教会の時代もそうである。

「その後、彼はわたしを門に導いた。門は東に面していた。その時、見よ、イスラエルの神の栄光が、東の方から来たが、その来る響きは、大水の響きのようで、地はその栄光で輝いた。」(エゼ 43:1~2)。



「響きは大水の響きのようで」とは神の御声であり、また聖霊に満たされた者が発した「異言を語る」音でもある（黙 19:1、6）。門は東に面していた。神の栄光は東の方から来たが、その声も東から来て、宮に響きわたった。従って、前の雨も後の雨も東に臨まれるべきである。

「そして彼はわたしを宮の戸口に帰らせた。見よ、水が宮の敷居の下から、東の方へ流れていた。宮は東に面し、その水は、下から出て、祭壇の南にある宮の敷居の南の端から、流れ下っていた」（エゼ 47:1）。

宮の敷居から流れていた水はだんだん多くなり、渡れる水が泳げるほどの水になった。これは、後の雨の聖霊の働きがますます大きくなることを象徴する（本書第三章第5節「川」を参考にしよう）。宮は東に面したので、水は東の方へ流れていた。これも後の雨の聖霊が必ず東に臨まれることを預表するのである。

「また、もうひとりの御使が、生ける神の印を持って、日の出る方から上って来るのを見た。彼は地と海とをそこなう権威を授かっている四人の御使にむかって、大声で叫んで言った、『わたしたちの神の僕らの額に、わたしたちが印をおしてしまうまでは、地と海と木とをそこなってはならない』」（黙 7:2～3）。

「日の出る方」とは東の方であるが、「生ける神の印」とは聖霊を象徴する（エペ 1:13、4:30）。この印を持った御使いは東から来たので、後の雨の聖霊も必ず東に臨まれるのである。なぜヨハネが見たこの幻が後の雨の聖霊だけを指しているのか。第一、神の印を持ったこの御使いは、前の雨の聖霊が降った時代に現れるのではなく、終りの日に来る大きな艱難が間近な時に現れるからである。第二、黙示録は、すでに実現した事を言っているのではなく、将来起こるべきことの預言だからである（黙 1:1）。



「それゆえ、東で主をあがめ、海沿いの国々でイスラエルの神、主の名をあがめよ」(イザ 24:15)。

救い主なるイエスは必ず東から出、聖霊も東に降る。そして海沿いの国々に伝わり、全地で神の御名をあがめるのである。

四、後の雨が降られた歴史

聖霊は二つの時期に分かれて降られた：前の雨の聖霊は五旬節の日にユダヤに降り、原始教会を設立し、種蒔きの働きを果たされた。後の雨の聖霊は、最初アメリカに降られたが、後に中国で世の終りの真の教会を設立し、やがて収穫を完成される。次はまず、1900年以降、各国々に起こったペンテコステ運動を紹介し、それから真イエス教会の起源を述べる。それによって、後の雨が降られた歴史を理解することができるであろう。

1. 世界各国のペンテコステ運動

《使徒行伝》は《聖霊行伝》とも言われる。使徒時代は聖霊が最も活躍された時代であり、教会内の働きは聖霊を中心としたからである。しかし、二・三世紀以後、教会の墮落に従って、聖霊は徐々に離れ、最後に止まった状態になった。その後、聖霊が共におられないため、教会はキリストの命を失い、ますます俗化し、世と変わりがなくなった。殊に、アメリカの教会は、信者の歓心を買うために、映画やダンスなどの娯楽まで提供して、礼拝の前後のプログラムに加える。説教内容は、社会教育を重んじるが、忠実に御言葉を伝えない。形式の集会だけに止まり、霊的な雰囲気がない。それで、敬虔な信者は、その腐敗を嘆きながら、天からマナと生ける水が降るのを望んだ。そこで、三々五々とかたまって家に集まり、熱心に聖書勉強と祈りをして、各地に小さい集団ができた。



1900年に、カンザス(Kansas)、テキサス(Texas)、オクラホマ(Oklahoma)などの各州に、信者が集会で祈る時、異言を語ったり、体が動き出したり、霊の笑いをしたりする不思議な現象が起こった。これは使徒行伝2章4節の記載に類似した現象であるので、小さい団体を作り、原始教会の信仰をもって伝道を始めた。結果としては、教会堂と布教所がアメリカの各地に設立され、一部の信者もイギリスへ伝道に行った。これは後の雨の聖霊が大いに注がれる前ぶれであった。

1906年4月に、アメリカのカリフォルニア(California)のロサンゼルス(Los Angeles)市内において、敬虔な信者たちは草屋に集まって、神が聖霊を降らし、全世界の教会を復興させられるようにと切に祈った。彼らは十日間一緒に集まり、心を合わせて聖霊が降られるのを待とうと約束した。使徒行伝2章4節に書いてあるように、聖霊が大いに降られる時、必ず異言を語ると信じた。4月9日の夜の集会に、神は彼らの祈りを聞き入れ、聖霊を豊かに彼らの身に注がせられた。一同は聖霊に満たされ、異言を語ったり、喜んだり、泣いたり、霊の歌を歌ったりして、主が共におられる喜びを深く味わった。不思議なことに、聖霊を受けたこの小さな群れの信者は、白人が一人もなく、みな黒人であった。前の雨の時代の如く、神は偏り見ることがないため、すべての信者が異族に対する軽蔑を取り除くべきことを教えられた(ガラ3:27~29)。

間もなく、この出来事は遠近の各地に広まった。すると、心の飢えた信者は続々と彼らの集会に参加して、共に恵みをいただいた。草屋に多くの者が入りきれないので、アソサ通りにある古い家を借りて臨時的集会所とし、思いがけずにも、馬小屋や倉のようなこのぼろ家は、聖霊が大いに降り注がれた場所となった！その後、昼も夜も聖霊は注ぎ続けられた。集会人数が激増して、家は大変混み合った。ある者は飲食せずに一日中ずっと集会に参加した。ある者は遠いところから遥々やって来た。彼らはよく集会時間を深夜まで延ばして、朝



までのこともあった。早くも、聖霊を受けた者は数百人に達した。奇跡が盛んに現れ、難病が癒され、悪霊が追い出された。遠い所にいる病人は、山や川に隔てられ、集会に出られないので、ハンカチを郵送して信者に祈ってもらった。ハンカチそのものを病人に返して、それを病気のところに当てると、多くの者は癒されたとも言われる。各国の伝道者はこのメッセージを聞いて、次々とやってきた。聖霊を受けた者は、自分の国へ戻り、ペンテコステの真理を伝えはじめた。これ以来、主の恵みに報いろうと志を立てたため、大勢の者は聖霊が二度降られた事を世界へ広めた。彼らは異邦へ行って、熱心に伝えたので、世界中にペンテコステ運動がブームになった。

当時、世の各教派はこの現象を見て、脅かされた思いをして、あざ笑い、排斥し始めた。邪霊を受けたとまで謗り、できる限り滅ぼそうと図った。しかし、聖霊自らはあらゆる御働きを進め、至る所で奇跡を行われ、御言の確かなことを示され、嵐の中にある教会を成長させられた。一方、ある謙虚な伝道者及び敬虔な信者は、彼らが受けたのはまさに五旬節の聖霊であり、伝えたのはまさに原始教会の信仰であることを認識して、きっぱりと偽りを捨て、真に帰したゆえ、信者数は日々増した。彼らが語った異言を解くこともよくあった。解いたものは、大体「イエスはすぐ来られる」のような言葉である。しかも多くの者は、イエスのご再臨の幻や天国の幻を見たので、皆の信仰はそれで固められた。

後の雨がロサンゼルスに降られた半年後、所々に聖霊が相次いで降られた。あるノルウェー(Norway)の伝道者がニューヨーク(New York)で聖霊を受けた時、その頭に非常に輝かしい火の冠がつけてある幻を見た者がいる。この伝道者は間もなく福音をノルウェー、スウェーデン(Sweden)、イギリス、中国、インドなどの国へ広めた。彼が中国とインドにいる間、神はその子どもにしばしば力を現され、またペンテコステの教えを宣べ伝えるようにと新聞を発行させられ



た。その他、オーストラリア(Australia)、スイス、デンマーク(Denmark)、オランダ、ロシア、パレスチナ(Palestine)などにも、聖霊が降られた。1908年まで、世界の各地で霊のバプテスマの重要性とメッセージを伝える新聞を発行して、各住所に無料発送をしたのは十数ヶ所もあった。

インドのクヌールは、インド駐在の伝道者の避暑地であった。1908年の夏、ペンテコステ教会の伝道者たちはそこで集会をし、心を合わせて祈った。最初は多少に妨げがあったが、多くの伝道者が聖霊を受けたゆえ、四ヶ月連続で集会をしていた。ペンテコステ教会の伝道者がインドに着いた時、林馬巴書院で説教するようにと林馬巴氏より招待の手紙が届いた。伝道者たちが緑地に行く前に、四百名の女学生が聖霊を受けて、異言を語った。ある時、千人で一緒に祈ったところ、アメリカのナイアガラ滝(Niagara Fall)の水のような壮大な音がした。彼女たちは聖霊の感動を受けて、異言を語ったが、中には英語を言ったり、古代の方言を言ったりした者がいた。特別な賜物を与えられ、異言を解いたり、手をおいて病を癒したりした者もいた。ナトン(Na Ton)の男子学校は、数キロ離れた所にあるが、六十五名の学生も聖霊を受けた。中にも異言を解く賜物を与えられた者は少なくなかった。

聖霊は南アフリカに大いに降られた。ヨハネスバーグ(Johannesburg)、クルガールズドープ(Krugersdorp)、及びほかの町々に聖霊を受けた者は多かった。ある婦人は聖霊に感動されて、講壇に上がってインドの各原住民の言葉で話し、各方言で歌って主をほめたたえた。群衆の中に、ちょうどインド人がいたので、インド語とわかって驚き、漏れがないようによく聞き取るために、一緒に講壇に上がった。あるインドの青年は彼女の通訳をして、全会衆に意味をわからせた。その内容はインドの救いの問題にかかわった。簡単に言えば、「人が救われるのは、ムハンマド(イスラム回教の創教者)によらず、イエス・キリストの贖罪の功によるのである。やがて彼は雲に乗って来られる。あらゆる彼の尊い



血によって罪が赦され、義とされる者は、天に引き上げられるのであろう」。アフリカに聖霊が降った他に、奇跡も多く現れた。ある盲人の婦人は、台の前で信者たちに助祷するようにと願った後、元の席に戻った。皆が集った時、目が開かれたように感じた彼女は、喜んで講壇に上がって言った、「見えた、聖歌隊の座席が見えた」。そして、会衆に振り向いたとたんに、また叫んだ、「皆さんの顔が見えた！」。

1908年の夏、イギリスのサンダーランド(Sander land)地方に、聖霊を求める大集会が開かれた。参加者はオランダ、イタリア、ノルウェー、スコットランドの各地からの者であった。群衆がひざまずいて大声で祈ると、聖霊が火のように降ってきて、一同は聖霊に満たされて、異言を語った。中にも、病が神に癒されたと証をした者は少なくなかった。あるバロー (Barrow) の婦人は、ノルウェーに帰って、これらの出来事をノルウェー語の新聞に載せた。今回の集会は異言を語ったり、霊の歌を歌ったりして、すべてはノルウェーの首都オスロにあった「靈感集会」を超えたのだという報道であった。

オーストラリアのバララット(Ballarot)で十数名が聖霊を受けた。メルボルン(Melbourne)の外港であるウィリアムスタウン(Williamstown)にも聖霊が大いに降られた。エジプトのアシュット(Asyut)にペンテコステの真理を受け入れた者は百人いて、その大半は聖霊を受けた。またあるイタリア人は、ある兄弟が語った異言を解いた。南アフリカのトランスバル(Transval)のプレトリア(Pretoria) 港に四十数名が聖霊を受けた。ヨハネスバーグ(Johannesburg)で聖霊を受けた者はさらに多く、神に癒された者も少なくなかった。その他、イギリス、スコットランド、アイルランド、イタリア、スウェーデン、オランダ、シリア(Syria)などにも、聖霊が大いに降られた。

1910年まで、各国の伝道者は熱心な信者の援助に頼り、個人の志願のため、



統制が取れない個人の働きに限られた。後に、統制する機関を必要として、総会 (General Council)、アッセンブリーズ オブ ゴッド (Assembly of God) を結成し、そして連絡機関として、友会 (The Fellowship) を組織した。南アメリカと北アメリカにそれぞれ一か所の神学院を設立し、原始教会の信仰に基づいた宣教の人材を育成するのに努めた。1937年のペンテコステ教会の「年報」によると、彼らの神学院を卒業して外国へ派遣された者の中で、按手されたのは三千八十六人であるが、按手されなかったのは二千人あまりであるという。彼らは使徒の信仰伝道団 (Apostolic Faith Church)、アッセンブリーズ オブ ゴッド、ペンテコステ教会、神の教会などの名称を用いて、世界中で伝教をした。異言を語ることを聖霊を受けた絶対証拠と主張するので、中国では「異言派」と称された。

本来、組織というものは各地の教会を一体関係に連結し、すべての御業を強化し、信仰の基盤を強固にし、教会が栄えるのに励む目的にある。しかし、組織ができた後、知らないうちにパン種が入り込んで、聖霊の導きが世のやり方に移り変わったので、聖霊の働きは激減することに至った。結果としては、多数の教会は「異言を語ることを聖霊を受けた当初の証拠とし、その後、異言を語らなくてもよいとするようになった。公の礼拝の時まで、異言を語ることを禁止した故、徐々に俗化して一般の教会と変わらない状態になった。ただ少数の教会だけは、真理を堅く守り、引き続き聖霊に満たされること、異言を語ることを主張し、聖霊の導きに従い、世と聖別したことによって、主の力が現れられたのである。

聖霊が再度降られた後、日本へ宣教に遣わされたのは、神戸にはティラー女史、名古屋と東京の滝野川町にはルアール・コーゼン親子、立川町にはテレサ女史、奈良にはレオナルト・クートなどという初期の宣教師であった。ルアール・コーゼンは文字伝道にも非常に励んだ。「後の雨」によく文章を発表したほ



かに、「霊のバプテスマの感受法」、「霊のバプテスマの証拠」、「霊のバプテスマ」、「再生と霊のバプテスマ」などの著作を残した。どれも「後雨社」によって発行された。しかしながら日本におけるペンテコステ運動はあまり進まなかった。十数ヶ所に教会堂が設立されたが、長くは続かなかった。

1907年に、ペンテコステ教会が中国に伝わってきた。翌年、ペンテコステ教会のモリツ牧師（アメリカ人）が香港で「五旬節真理報」を発行し、聖霊の重要性を宣べ伝えた。ペンテコステ教会は、当時の「使徒の信仰伝道団」と繋がりがあったようで、「使徒の信仰伝道団」と同時に上海へ広めた。彼らは皆聖霊を受けた時、異言を語るべきだと主張した。最初は確かに聖霊の働きが活発であった。それは、中国で最早期のペンテコステ運動であった。後に、集会中に公で異言を語ることが禁止されたので、教会は徐々に俗化し、ついに冷淡になり、衰えてしまった。1911年、中国の華北に、アメリカ人のペタソン牧師が山西省正定府で使徒の信仰伝道団を創立した。そして、「通伝福音真理報」を発行し、クリスチャンが聖霊を受けるべきことを強調した。その後、北京でアッセンブリと改称し、また神の教会と改め、「通伝福音真理報」を休刊し、代わりに福音のビラを配るようにした。ペタソンの教会は、現状を維持するだけで、進展が見当たらなかった。ほかに、ペンテコステ教団の教会が中国における状況も大体これと同じであった。

とにかく、欧米で始まったペンテコステ運動は、組織が出来た後、聖霊の御働きをおろそかにし、外来のあざ笑いを免れるため霊の不思議な現象を抑え、聖霊が発揮するのに小さい空間しか残さなかったのも、聖霊の御働きは徐々に衰え寂びれて、教会もそれにつれ、一般の教派と区別がなく俗化してしまった。ただ否認できない事実は、ペンテコステ運動がアメリカで始まったこと、聖霊が再び降られる福音がアメリカをとおして遠近の各国に伝わり、さらに積極的に全世界を警戒したことである。これは神の御旨である。忠実な伝道者及び敬

虔な信者を世の教会から離れるように喚起するためであった。そして、彼らは主が聖霊によって自ら牧する真の教会に立ち帰り、一つの群れとなり(ヨハ 10:16)、一緒に恵みを蒙るためであった。

東洋は精神文明の発祥地である。おおよそユダヤ教、仏教、儒教、キリスト教、道教、回教等はいずれも東洋に発生したものであり、いわゆる「東洋文化」を形成したのである。欧米は物質文明の先駆者であるが、あたかも唯物主義者が唯心主義を理解し難いように、東洋文化を理解し得ないところが多い。イエスが言われた、「神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである」(ヨハ 4:24)、「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」(ヨハ 6:63)。これでキリスト教が純粹な精神上の宗教であることがわかる。哲学の専門用語を借用すれば、「形而上学」のことである。ゆえに、精神文明に恵まれた東洋人こそ、その奥義を味わうことができる。物質文明に恵まれた欧米人は、従来「形而下学」の観点に基き、科学の方法をもって聖書を研究してきたので、聖書の本意を悟ることはできない。特に、近頃アメリカで興した新神学派は、実証科学で証明できない神秘思想や事実を不合理また不可能と言い、それを打ち消そうとしたので、実に心を痛めることである。

以上の理由に基づいて、後の雨の聖霊はまずアメリカに注がれたが、中国(東洋)で成長し、原始教会を復興する世の終りの真の教会の設立を完成するのである。それは、イエス・キリストがベツレヘムに生まれられたが、預言者が出るものではないナザレで育ち、ナザレ人と呼ばれたのと同じことである(マタ 2:23、ヨハ 1:46、7:52)。

世界各国のペンテコステ運動の参考文献：

- ① 日本語の「真イエス教会要論」(1943年12月31日発行)
- ② 第十一期香港五旬節真理報(1908年11月発行)



- ③ 第二冊第三期香港五旬節真理報（1909年3月発行）
- ④ 第三十三期香港五旬節真理報（1911年8月発行）

2. 真イエス教会の起源

マーティン・ルター（Martin Lutter）が西暦1517年に改教した後、新教は速やかに大混乱の渦中に巻き込まれ、短い四百年の間で何千教派にも分裂してしまったのである。一般の世に属する教会はさておき、単なるペンテコステ教団の教会でも、今では二千以上の教派があるのである。しかも、この分裂の混乱状態は、どの系統でもきりがなく続いていくようである。その原因は、聖霊の啓示と導きに欠けたため、身勝手に聖書の本意を曲解することと、原始の純正な福音を世による神学に変えること、聖霊の統治を人の意思による制御に変えることにあった。

真イエス教会の設立は、あらゆる新教の分裂とは根本的に異なり、ペンテコステ教会とも区別があるのである。新教から言うなれば、真イエス教会は後の雨の聖霊が設立された真の教会であり、聖霊と奇跡によってその確かなことを証され（マル16:20、ヘブ2:4）、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであり、キリストご自身が隅のかしら石であり（エペ2:19～22）、各教派の異端を正す使命が負わされている。ペンテコステ教会から言うと、真イエス教会の教義は皆聖霊の啓示によるもので、いかなる神学の誤った遺伝も受け継がないため、ペンテコステ教会を導いて、御霊にあって一つになることを促進する使命があるのである。

真イエス教会の初期の働き人は、張霊生、張バルナバ、魏パウロなどである。次に彼らを紹介することによって、真イエス教会の起源の大概を述べよう。

張霊生略伝



張靈生は、原名張彬であり、山東省濰県の人である。1900年(37歳)の時に、長老教会に入った。最初の七年間は一般の信者であったが、後の三年間は執事の職務を務めた。合わせて十年間であった。1909年に、長男の張溥泉が上海の中国公学でドイツ語を教えたのをきっかけに、上海の「使徒の信仰伝道団」の丁牧師に導かれ、教会に行き、そして聖霊を受けた。休暇に山東に帰ったのを機に、張彬に証をした。張彬はそれを疑わずに信じたので、同年の9月末に上海に行き、悔い改め、霊の恵みを祈り求め、使徒の信仰伝道団の牧師の按手を受けた。その教会に二十数日間留まったが、聖霊は降られなかった。山東に戻っても引き続き切に祈り求めたので、五十日余り過ぎた12月21日の朝の祈りで、聖霊を受け、異言を語った。彼は主に啓示され、靈生と改名し、そして週の七日目(土曜日)を安息日として守ることを悟らせられた。1910年に蘇州に行き、使徒の信仰伝道団の牧師から湖の中でバプテスマを受けた。それ以来、命と財産を軽んじ、主のために身を捧げようと志を立てた。主の御旨により、同年、濰県の西荘頭で「イエス真教会」を設立し、安息日を守った。主の祝福によって、バプテスマと聖霊を受けた信者は、日々増えた。その中で、主から特別な賜物をいただき、奉仕に役立つ者であったのは、張バルナバという人物である。

1914年に張靈生は北京へ行き、使徒の信仰伝道団のペタソン牧師と奎長老の按手を受け、その教会の長老に立てられた。1916年に張がペタソンに安息日を守るべきだと勧めた後、ペタソンはそれを受け入れ、7月1日から安息日を守り始め、また第十三期「通伝福音真理報」に発表した。1918年の春、天津の真イエス教会に行き、魏パウロと面会し、一緒に安息日を守り、霊的な交わりをした。魏の按手を受けた後、張も更正の力を授けられ、魏の同労者となった。1919年2月に、張靈生は張バルナバと濰県西荘頭から200里(115KM、1里の距離は576Mに当たる)離れた唐家庄で伝道をした。そこはバプテスマを受ける前に聖霊を受けた者が多かった。2月27日バプテスマを受けようと志願した



者は三十数人もいたので、二人は互に、顔を下に向けてバプテスマを施し合ってから、彼らに施した。顔を下に向けてバプテスマを施すことは、魏パウロが啓示されたことによるものである。3月に、魏は山東の濰県へ行き、張霊生と共に働き、第二期「万国更正教報」を企画した。10月に張霊生は三度目に北京へ行って、初めて李曉峰と梁欽明に会って、「万国更正教報」の仕事に携わった。10月29日に、総監督の魏パウロが死去する時、張霊生と梁欽明は付き添ったので、一緒に魏の按手を受け、更正教の監督となり、魏の職務を受け継いだ。

張霊生は南京、長沙各地を巡り、「万国更正教 真イエス教会」を伝えた。1920年の春、北京に戻り監督の職を辞任した。後は、山東へ帰って教会を守ったが、外への発展はなかった。

張バルナバ略伝

張バルナバは原名張殿挙で、山東省濰県西荘頭の農家であったが、骨董品を兼売した。1910年に同宗の張霊生が彼の郷里へ来て、悔い改めて罪が赦される教えと聖霊のバプテスマの福音を伝えた。その妻は教えに感動され、喜んで主の証をした。最初、殿挙は反対をしたが、その後に使徒行伝1章5節の御旨を悟り、そのとおりに罪を認め悔い改めて、朝夕切に霊の恵みを求めた。1911年4月14日の夕方、荒野にいた時、天から「世の終りの救いは東から西へ伝えられ、全世界を救う」という声が聞こえた。そこで、張バルナバはひざまずいて切に祈ったところ、聖霊を受けて異言を語った。それから張霊生は主イエスの御名によって、その一家族にバプテスマを施した。そして、彼の信仰を三、四年間育てた。その後、断食をして祈って、張バルナバを長老に按立した。1916年3月に、張バルナバは路上で主の声を聞いた、「南方へ福音伝道に行きなさい。大きな力をあなたに授けるから」。5月に主の啓示を得て、バルナバと改名した。

1917年8月に、張バルナバは聖霊に催促され、山東の南にある安邱、高密な



どの町々へ伝道に行って、教会を立てた。同年（何月か不詳）、張靈生により消息を得た、「北京の魏パウロは主によく恵まれて、何度も主と対面することができた。ピラにも書いてある。とても不思議」。バルナバは感動を受けて、疑わずに信じた。1919年2月に彼は張靈生と樂安唐家莊へ伝道に行ったが、御働きははなはだ活発であり、聖霊とバプテスマを受けた者は少なくなかった。2月27日に、彼は張靈生と互に顔を下に向けるバプテスマを施し合ってから、三十数人にバプテスマを施した。3月に、魏パウロは山東省の各県に来た時、張靈生と共に働いた。5月3日に濰県西莊頭で二日間の靈恩伝道会を開き、21人にバプテスマを授けた。その時からバルナバは、命を捨てるまで福音伝道に専念しよう決心した。彼は白い旗を四枚作って、その上に「万国更正教真イエス教会」と書いた。そして何度も数日間断食して祈ってから、方々へ万国更正教を宣べ伝えに行き、また郷里で「有無相通」（互いに助け合う意）を提唱した。彼は魏パウロに従って、共に生き共に死に、隅々まで更正教を宣べ伝えようと志した。秋に郭長愷と梁欽明と遠方へ伝道に行ったが、往復で九ヶ月かかり、八省を経て42カ所の教会を設立し、約二千人にバプテスマを施した。

張バルナバは1923年10月30日に福州へ宣教に行った。11月中旬に、まずセブンスデー・アドベンチストの教会堂で布教してから、科貢村の郭トマスの自宅で伝道会を開いたが、対象は皆セブンスデーの信者であった。結局、郭トマス、錢アベル、金復生など12名がバプテスマを受けた。その晩、聖餐式を行い、多くの者は聖霊を受けた。それで3日間の靈恩伝道会を開くことにして、一緒に熱心に宣べ伝えて、御恵みに報いた。3日の間に、22名が聖霊を受けた。3日目に九十三人にバプテスマを授けた。そこで長老を三人、執事を七人立てた。そして家を借りて、設け整えてから、そこで福州教会を設立した。1925年7、8月の間に、温州で伝道会を一週間開いた。御恵みによって、たくさんの病人が癒され、131人がバプテスマを受け、50数人が聖霊を受けた。9、10月に、二度目の福州へ全省の代表大会に参加しに行った。わずか2年の間に、福建省



に教会が 60 数箇所も設立され、皆それぞれの代表者を遣わして、大会に参加した。

1926 年 3 月 3 日に、張バルナバはアモイから日本の汽船で台湾へ伝道に行った。同行者は郭トマス、高ルカ、陳元謙、及び漳州とアモイで真理を受けた台湾人の黄呈總、吳道源、王慶隆、黄醒民などで、合わせて八人であった。3 月 6 日に一同は黄呈總の故里、彰化県線西郷に着いた。その時、そこにはすでに長老教会から真イエス教会に入信した者はたくさんいた。それは 1925 年の秋、黄呈總の父親黄秀両が台湾に帰ってから撒いた種で、ほとんど親戚の者であった。3 月 11 日に、線西郷の十五張犁で 62 人にバプテスマを授け、長老を 2 人、女執事を 2 人按立して、線西教会を設立した。3 月 16 日に、嘉義県牛挑灣で靈恩会を 3 日開いた。バプテスマを受けた 30 余名の者は皆、元長老教会の信者であった。そして牛挑灣教会を設立した。4 月 3 日から台中県清水鎮で三日間の伝道会を開いたが、大部分の聴衆は長老教会の信者であった。4 月 6 日に、清水鎮鹿寮で 11 人にバプテスマを授け、清水教会を設立した。4 月 12 日に、基隆から開城丸に乗って中国大陸へ帰った。その時台湾における働きは、40 日しかなかったが、百数人にバプテスマを授け、教会を三つ設立した。台湾のキリスト教界にとっては、空前の盛況であった。

1929 年 9 月 1 日から 12 日にかけて、第五回臨時全体大会が開かれた。張バルナバは本部の責任者の一人として選ばれた。会議中、真イエス教会の起源を審査することにした。バルナバはこの決議に不満を抱いた。10 月に彼は本部に派遣され廣州へ行った。まもなく、自ら香港で偽本部を設立し、中華真イエス教会と名付け、総監督と自任し、「角聲報」を発刊。そして教会全体を反対し、破壊した。本部からしきりに忠告されても、強情に悔い改めようとしない上、教会のかしらと自称した。そこで、1930 年 5 月 1 日から 9 日までの第六回臨時全体大会で、除名することに決議された。



魏パウロ略伝

魏パウロの原名は魏恩波である。河北省保定府容城県の人で、本職は絹の織物屋であり、恩信永と恩振華という二軒の織物店の社長であった。1902年、家族四人で北京へ行って、織物屋を経営し始めた。ある日、ロンドン会の信者の王徳順に導かれて、磁器口にあるロンドン会で一年余り求道した。1904年の秋、全家族は雙旗杆のロンドン会で密志文老牧師の滴礼を受けた。その後、日曜日になると、必ず休業して、家族全員で教会へ集会に行き、しかも熱心に貧しい信者を助けた。冬に、崇文門外の東茶食胡同で店舗を借りて、毛糸や舶来品を売った。1905年の夏、恩信永織物店を開いたが、依然として、日曜日に休業して30人ほどの店員や徒弟を連れて集会に行った。年末の結算では、負債を返却したほか、なお数万元の生地が残った。そこで、彼は中国の教会は中国人が自立して設立すべきだと密牧師に提案し、密牧師はこの提案を受け入れた。そこで、魏パウロは家屋を売り、三千銀貨を得て、全部を教会に捧げた。しかも、募金に努めたので、北方に最早期の自立教会を設立した。

1915年に、上海セブンスデー・アドベンチストの施列民は魏殿卿と同行して北京に来た。魏は彼らと安息日について話し合ったところ、完全に聖書に合ったところに心を打たれた。1916年6月に、重い病気を患って、胸に痛みを感じ、咳が出て喘息に罹った。漢方と西洋の医者に三ヵ月ほど治療を受けたが、効き目がなかった。9月14日に、使徒の信仰伝道団の新聖民長老が、恩信永織物店に見舞いに来たところ、魏に言った、「医薬に頼らずに決心しよう。私が油を塗って手を置いて祈れば治るから」。魏はイエスが癒して下さると信じて、その言葉を受け入れた。すると二人は二階に上がって祈った。翌日、新長老はまた魏を連れて、東誠にある使徒の信仰伝道団のペタソン牧師（アメリカ人）に会いに行った。魏はペタソンの人柄に感服して、たちまち親友になった。数日後、魏の病が治り、夫婦一緒にペタソンよりバプテスマを受け、霊の感動を深く感じ、さらにペタソンにいろいろと聖書の真理を教えてもらった。使徒の信仰伝



199 第八章 聖霊は果たして降った

道団に入信して、魏はすぐ聖書の教えに従って安息日を守るようにした。(当時、当伝道団はすでに安息日を守っていた)。恩信永織物店の二階で集会をした時、聖霊に注がれたことがよくあり、多くの者は聖霊を受け、異言を語った。その結果、店は主に祝福され、商売繁盛になり、三か月後に前門外打磨廠というところに支店の恩振華織物店を開いた。ある日、恩信永織物店の二階で集会し、祈った時、彼は霊のバプテスマを受け異言を多く語った。

1917年4月に、その娘恵英は重い病気になり、死にかかった。魏が祈ったところ、「あなたの娘は癒された」という声が聞こえた。祈りが終わって、その娘が本当に治ったことがわかった。ある晩、寝る前に悪魔のかしら小僧の悪魔たちをひき連れて、前に立ったのが見えた。魏はイエスの名によって、大声で悪魔を追い出したところ、皆が退いた。これで魏には、全能の主から病を癒し、悪霊を追い出す権威を授けられたことがわかった。5月23日に彼は御声を聞いた、「三十九日間断食しなさい。必ず飢え死にはしないから」。そして彼は主が命じられたとおりに断食を始めた。その間は、毎日三時間しか寝なく、ずっと祈ったり文章を書いたりして、またよく道の傍らで福音を宣べ伝え、よく団川へ行ってバプテスマを施した(往復で8KMもある)。5月25日に北京を去り、黄村へ伝道に向かった。5月28日に大声で祈っている最中、突然天から声が聞こえた、「イエスのバプテスマを受けなさい!」。すると聖霊に導かれて、永定門外の大紅門川に行き、水の中でひざまずいて祈った。二度目の大きな声が聞こえた、「顔を下に向けてバプテスマを受けよ」。彼は言われたように顔を下に向けてバプテスマを受けた。頭を上げたところに、栄光にあるイエスが彼に現れたので、身も魂も清められた感じであった。彼が水から上がって林に入ったところ、またイエスは現れた。主は魏の元の名をパウロに変え、各教派の過ちを正すようにと指示された。それ以来、彼は身を捧げ、主に託された使命を成し遂げようと決心した。5月30日に聖霊によって更正された規条はいくつかあった。①聖霊を受けるべきである。聖霊から生れなければ天国に入る



ことはできないからである。②全身水に浸すバプテスマを受けるべきである。イエスはすでに手本を示して下さったからである。③主イエス・キリストの御名によってバプテスマを授けるが、父と子と聖霊との名によって授けてはいけない。④安息日を守るべきである。日曜日を安息日にしてはいけない。⑤牧師の呼び名を捨てるべきである。先生はただ一人であって、即ちキリストのことだからである。⑥「上帝」や「天主」と呼ばず、神または真の神と呼ぶべきである。6月14日に彼は更正した規条を各教派の教会四十八箇所へ郵送した。

7月1日に、魏は39日間の断食を終え、大いに聖霊に満たされた力を得た。主はまた荒野で彼に現れられて、そしてモーセとエリヤがその両側にいた。7月2日に、聖霊の指示によって黄村を離れ、南苑に寄って北京に帰った。そこで、趙得理と共に主の力に頼り、各教派の誤りを是正して、万国更正教を宣べ伝えた。7月6日に、興隆通りにある使徒信仰伝道団のペタソンを尋ね、聖霊の啓示に従って顔を下に向けるバプテスマを受けるように勧めた。以前、魏をロンドン会に導いた王徳順は7月18日に、大紅門川でバプテスマを受け、魏の御働きの仲間となった。8月10日までは、黄村、南苑、北京の三ヶ所に真イエス教会を設立した。9月2日に、魏善荘のある寺で伝道をした時、目の見えない人に出会った。魏は霊を感じて、「イエスが見えるようにしてくださると信じますか」と聞いた。その人は「信じます」と答えた。そこで魏は彼の頭を手において祈った。御霊は「彼は治った」と言われたので、本当に見えるようになった。9、10月の間に、北京から旅立ち、各町へ行って病を癒し、悪霊を追い出し、福音を広めた。教会を設立し、教会の規条の更正および「聖霊の真の証」という本を印刷する費用の支出のために、11月11日に容城へ行って一部分の土地を売り払った。11月16日にまた二畝半の土地を売った収入の46元を伝道の費用に当てた。11月27日に、もう一つの土地を売った代金の百元余りを伝道者と印刷物の費用にした。1918年1月2日に警察総庁の呉総督に手紙を出して、打磨廠の恩振華織物店で真イエス教会を設立することを申し込んだ。その



時から教会名を「真イエス教会」と決定した。

1918年3月に、ペタソンは第十八期の「通伝福音真理報」でまた日曜日を守ろうと主張したので、魏はその信仰が弱く、落ちたと嘆いた。天津の西沽に蛇の悪霊に38年間つかれた老婦がいた。8月19日にその夫は悪霊を追い出してもらおうように、魏に願いに来た。魏は李ヨハネと同行したが、イエスの御名によって蛇の悪霊を追い出し、そしてその一家族三人にバプテスマを授けた。北京刑部通り大中府巷に、孫子真という口のきけない者が10月5日にバプテスマを受けにやって来た。魏はイエスの名によっておしの悪霊を追い出したところ、その人はたくさんの唾を吐いてから話せるようになった。バプテスマを受けた後、聖霊も受けて、異言を語り、霊の歌を歌ったので、魏と共に働き、全世界を救おうと決心した。同じ日に孫子真の家へ行って、口のきけない者が話せるようになった証しを「京話日報」に載せて方々に伝えて、主の御名を栄えた。そして八千部のチラシを印刷して、各地に配った。魏が真理を得た後、熱心に福音伝道をし、いろいろな病を癒し、織物店を放って、すべての在庫品を負けて売り払い、負債を返してから、これからのことを考えようという記事がチラシの中に書かれた。

1919年2月1日に、第一期「万国更正教報」を発行し、無料で方々へ贈呈した。それがよく伝わったため、返信は相次いで送られてきて、各地方の本教会のために良い基を築いたことになった。3月に魏は山東省の各県へ伝道に行つて、濰県で張霊生と一緒に働き、第二期「万国更正教報」の計画準備に携わった。5月3日に、濰県西荘頭で二日間の霊恩伝道会を開き、21人にバプテスマを授けた。7月に北京へ帰った。10月上旬、張霊生、梁欽明、李曉峰三人は、期せずして同時に北京へ来た。10月29日に、魏が亡くなる時、張霊生と梁欽明は付き添った。聖霊に示された魏は、職務を継いで更正教の監督になるようにと、彼らを按手して祝福した。ペタソンが見舞いに来た時、互いに握手して

号泣した。同日午後4時頃、魏パウロは大笑いをしながら叫んで言った、「見よ、御使いが来た」、そして大笑いをしながら息を引き取られた。

張靈生、張バルナバ、魏パウロなどは、本教会初期の重要な働き人であったが、真イエス教会の創始者ではない。真実を探れば、彼らは神が世の終りの真の教会の基礎を据えるために召された僕に過ぎなかった。

真イエス教会の起源の参考文献：

- ① 魏パウロ著「聖靈真見證書上巻」(1917年発行)
- ② 魏パウロ著「聖靈真見證書下巻」(1919年発行)
- ③ 張バルナバ著「伝道記」(1929年10月発行)
- ④ 日本語「真イエス教会要論」(1943年12月31日発行)
- ⑤ 「台湾伝道三十周年記念刊」(1956年12月発行)
- ⑥ 「真イエス教会総部十周年記念専刊」(1937年4月1日発行)
- ⑦ 吳賢真著「使徒魏パウロ略伝」(1929年5月発行)
- ⑧ 第一期「万国更正教報」(1919年2月1日発行)
- ⑨ 第二期「万国更正教報」(1919年7月27日発行)
- ⑩ 第三期「万国更正教報」(1919年11月22日発行)
- ⑪ 第四期「万国更正教報」(1920年1月22日発行)
- ⑫ 第一号「聖靈報」(1925年3月24日発行)
- ⑬ 第三十五期「香港五旬節真理報」(1912年10月発行)
- ⑭ 「張靈生が総部宛の返信」(1929年7月31日に郵送)
- ⑮ 第十三期「通伝福音真理報」(1916年11月発行)
- ⑯ 第十八期「通伝福音真理報」(1918年3月発行)

問題

一、前の雨の聖霊が先に降る根拠を述べてみよ。



203 第八章 聖霊は果たして降った

- 二、聖霊が止まった預言を述べてみよ。
- 三、聖霊が止まった預表を述べてみよ。
- 四、聖霊が止まった歴史を述べてみよ。
- 五、後の雨の聖霊が降る預言を述べてみよ。
- 六、後の雨の聖霊が降る預表を述べてみよ。
- 七、後の雨の聖霊が降った場所を述べてみよ。
- 八、世界各国のペンテコステ運動の歴史年代表を製作してみよ。
- 九、真イエス教会の起源の歴史年代表を製作してみよ。
- 十、真イエス教会がペンテコステ教派の各教会に対してどんな使命を負っているか。



第九章 聖霊のバプテスマ

いわゆる聖霊のバプテスマとは何であろうか、聖書の定義によれば、①聖霊は人の上に降る（ルカ 24:49、使徒 1:8、11:15～16、19:6）、②聖霊を受ける（使徒 2:38、8:15、17、10:47、エペ 1:13）、③聖霊をいただく（共同訳ガラ 3:14）、④人の上に注がれる（テト 3:6）とある。一言で概括すれば、「霊のバプテスマを受ける」とは「聖霊を受ける」ことである。話し方は異なるが、意味は同じである。時間をもってその過程を述べれば、まず上から人に降って（マタ 3:16、ルカ 24:49）、それから人の心に宿られることである（ヨハ 14:16～17）。従ってコルネリオ一家の上に聖霊が降られたことを、ペテロは、それが約束された聖霊のバプテスマである、または彼らが五旬節の日に受けた聖霊のバプテスマであるとした（使徒 11:15～16）。

▲サンダース（J, Oswald Sanders）は「無量の聖霊」の73ページに記している、「まことの信者はだれもが聖霊を持つ（ロマ 8:9）。ところがそれは必ずしもその人が聖霊のバプテスマを受けたと暗示するのではない」。サンダースが思うには、「聖霊を受ける」と「聖霊によってバプテスマを受ける」とは別のことである。過程で言えば、前者は先であるが、後者は後である。数量で言えば、前者は普遍であるが、後者は特殊である。

われわれの答え： 事実は聖霊を受けるとは、聖霊によってバプテスマを受けることである。聖書はその体験について異なった描写をするが、互に区別があるというわけではない。サンダースがそれを二つの違った体験と分けたのは、おそらく聖霊のバプテスマを「聖となる」という超然とした境地として扱ったためであろう。イエスが昇天される時、弟子たちに言われた、「あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」、また言われた、「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユ



ダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」(使徒 1:5、8)。聖霊によってバプテスマを授けられるのは聖霊を受けることである。聖霊が身に降るのも聖霊を受けることである。

▲サンダースはまた同じ本の 75 ページに記している、「『バプテスマを受ける』と『満たされる』とは、意味が正反対の言葉である。バプテスマを受けるとは、私たちを一つの元素の中に入れることであるが、満たされるとはある元素を私たちの中に入れることである。聖霊のバプテスマはわたしたちが聖霊の内にあることであるが、聖霊に満たされるとは、聖霊がわたしたちの内にあることである。事実、『バプテスマ』この文字自体は、内で聖霊を受ける意味を一切排除したものである」。

われわれの答え：物質をもって例証として論じれば、サンダースの見解は「理」に適っているのである。ところが聖霊は物質ではないので、聖霊のバプテスマを物質のバプテスマと同列に論じることはできない。昇天される前に、イエスは弟子たちに言われた、「すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」(使徒 1:5)。この約束が成就された時、聖書はこう記してある、「すると、一同は聖霊に満たされ、…」(使徒 2:4)。サンダースが言った身の外と身の内について言うなら、聖霊のバプテスマを受けるのと聖霊に満たされるのと何の区別があるのか。もちろん、前者と後者との体験は、必ずしも一致するとは言えなくても、正反対でもない。そして身の外と身の内とをもって境界を定めることでもない。それで、「聖霊によってバプテスマを受ける」問題は、決して「内で聖霊を受ける意味を一切排除する」ことにはならない。

▲J. H. ピックフォード(J. H. Pickford)の「聖霊のバプテスマとは何か」(1957年)(日本聖書図書刊行会編集部訳)の 32~33 ページに記されている、「われわれは、信者が個人的に御霊によってバプテスマを授けられたという、何らの記



録も手にしていない。われわれは、使徒行伝の中に個人が聖霊によってバプテスマを受けたという記事を一この事については聖書のどこにも一見出さないと重ねて言いたい。ペンテコステ以後、使徒時代に神によって用いられたどの弟子たちを見ても、聖霊の満しは、バプテスマ体験ではなかった。それは、神にささげた生涯の日常的経験であった。御霊に満たされることを危機的体験に結びつけることはできない。彼が言うには、①聖霊に満たされる者は必ずしも霊のバプテスマを体験したとは限らない。②聖書に聖霊のバプテスマに関する記事は、団体だけであって個人の例がない。③聖霊のバプテスマは一種の危機的体験である。

われわれの答え：①五旬節の後に聖霊に満たされた者は必ず聖霊によってバプテスマを受けた。②アナニヤは手をサウロの上において、聖霊に満たされるようにした（使徒 9:17）。これは個人が聖霊によってバプテスマを受け、また聖霊に満たされた記事である。③聖霊によってバプテスマを授けられるとはイエスの約束であるので（使徒 1:5）、危機的体験としてはならない。

「わたしはこの人を知らなかった。しかし、水でバプテスマを授けるようにと、わたしをおつかわしになったそのかたが、わたしに言われた、『ある人の上に、御霊が下ってとどまるのを見たら、その人こそは、御霊によってバプテスマを授けるかたである』（ヨハ 1:33)。

「すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」（使徒 1:5)。

「そこでわたしが語り出したところ、聖霊が、ちょうど最初わたしたちの上にくだったと同じように、彼らの上にくだった。その時わたしは、主が『ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは聖霊によってバプテスマを受けるであろう』と仰せになった言葉を思い出した」（使徒 11:15~16)。

聖霊のバプテスマは、天の父とイエスの約束を先にして、原始教会の体験を



後にした。これは歴史的に否認できない事実であり、だれでも聖書を根拠にして考察できることである。使徒ペテロとヨハネはサマリヤの人々が神の言を受け入れたと聞いて、たちまちサマリヤに下って行った。聖霊がまだ誰にも降っていないと知った上で、彼らの上に手をおいたところ、彼らは聖霊を受けた（使徒 8:14～17）。パウロがエペソに着いて、弟子たちに聞いた言葉は、「あなたがたは、信仰に入った時に、聖霊を受けたか」である（使徒 19:1～7）。これで主に帰依した者に聖霊を受けたかどうかは、いかに重大な問題であるかが分かる。

聖霊降臨の歴史は、使徒行伝に五回しか記載されていないが、それ以外に誰も聖霊を受けていないという意味ではない。この五回は代表的であって、その他はその範囲を超えないため、自然に省略されたからである。では、歴史において、一体この五回の出来事はどのような意義があって、一々記録されなければならなかったのか。その理由は、①五旬節の日に聖霊は約百二十人の弟子の上に降られた（使徒 1:15、2:1～4）。それは天の父及び主イエスの約束が実現され、召されたユダヤ人の団体を代表する。②福音がサマリヤに伝えられるとイエスは預言された（使徒 1:8）。その後、サマリヤの人々が神の言を受け入れ、聖霊を受けた（使徒 8:5、14～17）。イエスの預言が成就されたので、記載すべきである。③パウロは最初に教会を迫害したが、主に召されてあらゆる信者の模範となったため（使徒 9:1～6、I テモ 1:15～16）、彼が聖霊を受けたことを特記する必要がある（使徒 9:17）。④元々異邦人はキリストと係わりがなかったが（エペ 2:12）、主は幻をとおして、彼らも清められると啓示された。コルネリオ一家が聖霊を受けたことは、召された異邦人の団体を代表する（使徒 10:44～45、11:5～18）。⑤エペソの弟子たちが信仰に入った時に、聖霊を受けていなかったのは、ヨハネの名によるバプテスマを受けた故である。パウロは改めて主イエスの名によってバプテスマを授けたところ、聖霊が彼らに降られた（使徒 19:1～7）。この事も特記する必要がある。

一般の世の教会は、霊によってバプテスマを受けたことがなく、また謙虚に聖書を勉強しないため、聖霊のバプテスマとは一体どんなものであるのかを知らない。そういうわけで大多数が思うには、①五旬節の日以来、聖霊はずっと教会から離れていない。②すべての信者の内に聖霊が宿っている。そうでなければ、なぜイエスを救い主と認められるのか。③異言を語るのは賜物の一つであり、聖霊を受ける必要な根拠ではない。④五旬節の日弟子たちが語った異言は、それぞれの生れ故郷の国語であったが、なぜ今日のペンテコステ教派は、自分が語った異言さえも聞き取れないか。⑤異言は劣等の賜物であり、しかも使徒時代から徐々に廃除されていた。⑥愛と信心があり、あるいは奉仕に輝かしい成果を挙げたのは、皆聖霊に満たされる確かな証拠である、とある。しかし以上の推測は聖書によって否定される。次の文章を見よ。

第一節、聖霊を受けた根拠

パウロはエペソに来た時、弟子たちに、「あなたがたは、信仰にはいつの時に、聖霊を受けたのか」と尋ねたところ、「いいえ」と答えた（使徒 19:1～2）。聖霊を受けるのは明らかな体験であり、受けたか受けてないかは明白である。わたしが受けたと思えば、受けたというわけではなく、わたしが受けたと信じれば、受けたということでもない。使徒たちがサマリヤで福音を受け入れた人たちの上に手をおいたところ、彼らは聖霊を受けた。それを見た魔術を行ったシモンは金を差し出し、「わたしが手をおけばだれにでも聖霊が授けられるように、その力をわたしにも下さい」と言った（使徒 8:17～19）。エペソの弟子たちが聖霊を受けた時、そばにいる者は受けた人数を数えることができた（使徒 19:6～7）。聖霊を受けたことは本人がはっきりと意識しているだけではなく、ほかの人から見ても明白であることがわかる。

▲胡恩徳は「霊恩問題」の16ページに記している、「聖書曰く、悔い改めて



主を信じれば、罪が赦される（ヨハ 3:18、使徒 10:43）、それでわれわれは聖霊の賜物を受ける（使徒 2:38）。主がこう言われた以上、われわれはそのとおりに信じよう。それは、自分を欺くことではなく、御言を尊ぶことである。感じても、感じなくても、同じく聖霊を受けたのである」。胡恩徳が思うに、①悔い改めて主を信じれば、罪が赦される。②信じれば聖霊を授けられると主は約束された以上、わたしたちはそのとおりに信じる。③聖霊を受けた者は必ずしも感覚があるとは限らない。

われわれの答え：①それは聖句の一部分だけを取って論じることである。「イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい」というところを削除して（使徒 2:38）、自分をごまかして都合のいい聖句だけを取るのには、一般の教会がバプテスマに罪赦しの効果があることを認めないからである。②使徒時代は前の雨の聖霊が盛んに働かれた時期なので、信仰に入った者は、遅かれ早かれ聖霊を受けるはずであった。今日、聖霊のない教会はこれで自分を慰めてはならない。③聖霊を受けた者は必ず自覚する。ほかの人も見えることである。

イエスは弟子たちに言われた、「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。それは真理の御霊である。この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである」（ヨハ 14:16～17）。聖霊のある者こそ、聖霊を明らかに認識する。しかも聖霊のバプテスマを受けた確かな証拠を悟り、それは聖霊のない者の推測より遙かに勝る。では、聖霊を受けるには何の証拠があるのか。この問題の答えは、福音書の中からは見出せない。四つの福音書には聖霊を賜る約束だけが記されているからである。使徒たちの手紙からも見出せない。ローマ人への手紙からユダの手紙までで触れているのは、聖霊を受けた後に行うべきことである。ヨハネの黙示録にも書いていない。預言書なので、終りに起こる事を示しているか

らである。ただ、使徒行伝からのみ正確な答えを見出すことができる。なぜならば、原始教会における聖霊降臨の経緯は、皆この書巻に書かれているからである。

一、異言を語る

「すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した」（使徒 2：4）。

「ペテロがこれらの言葉をまだ語り終えないうちに、それを聞いていたみんなの人たちに、聖霊がくだった。割礼を受けている信者で、ペテロについてきた人たちは、異邦人たちにも聖霊の賜物が注がれたのを見て、驚いた。それは、彼らが異言を語って神をさんびしているのを聞いたからである。…」(使徒 10：44～46)。

「そして、パウロが彼らの上に手をおくと、聖霊が彼らにくんだり、それから彼らは異言を語ったり、…」(使徒 19：6)。

以上の聖句によれば、原始教会は五旬節の日を皮切りに、その後、何度か聖霊を受けた記録があり、彼らが確かに異言を語ったことをはっきり説明した。特に、コルネリオ一家が聖霊を受けた時、割礼を受けている信者で、ペテロについてきた人たちは、彼らが異言を語ったのを聞いたので、聖霊を受けたと認めた。後に、ペテロがエルサレムへ戻って、聖霊がちょうど最初に信者たちの上に降ったのと同じように、コルネリオたちの上にも降ったと皆に告げたところ、一同は神を賛美した（使徒 11：15～18、15：8）。もし多くの人が同じ場所に集まれば、異言を語る声は大きくなる。それは大群衆の声、多くの水の音、また激しい雷鳴のようなものに聞こえるのである（黙 19：6、14：2）。

「異言」という言葉を、ギリシャ原語は「舌」(Glossa) といい、呂振中訳本は「舌を巻いて語る」、浅文理訳本は「霊言」と訳す（I コリ 14：2）。ここまで



きて、異言を語るのが聖霊を受けるのに備えるべき証拠であることは、疑いべくもない。次はさらに各学者の意見を参考にして述べよう：

ある自由見解のイギリス神学者リーズ博士 (Dr, Rees) が言った、「初代教会において、異言を語ること (Glossolalia) は最も顕著で最も流行った賜物であった。これは聖霊が信者の身に降った時によく伴う証拠のようである」。

イエール (Yale) 大学のスティーブン博士 (Dr, Stevens) は彼の「新約神学」著作の中で、使徒行伝 8 章 14～24 節について註解している、「聖霊は特別な賜物と見なされた。信仰に入ってバプテスマを受けると同時に、この賜物が授けられることはあまりない。サマリヤ人は神の言を信じたが、聖霊を受けたと思われぬ。彼らは信じてバプテスマを受けたが、ペテロとヨハネが彼らの上に手をおいたところ、はじめて聖霊の賜物が賜われた。明らかにこれは特別な賜物の体験である」。使徒行伝 19 章 1～7 節について、また次の解釈をした、「エペソの信者は信じた時に聖霊を受けなかったばかりか、キリストの名によってバプテスマを受けた時も受けていなかった。パウロが手をおいたところ、聖霊ははじめて彼らの上に降った。それで彼らは異言を語ったり、預言をしたりした。聖霊の賜物が異言を語ったり、預言をしたりする喜びの霊的な力と同時に発生すると思われることは明白である」。スティーブンが思うには、①聖霊を受けることは格別の体験である。信仰に入ってすぐ受けるのでなければ、バプテスマを受けてすぐ受けるものでもない。②聖霊が降ると同時に、その人は必ず異言を語る。スティーブンの見解は正しく、深く考えるべきものである。

スコットランドの長老会のマクドナルド博士 (Dr, A, B, Macdonald) は言った、「教会が聖霊を信じるのは、実際の経験から生み出したからである。教会が発展する当初、新しい力が自分の内に働いていることを、弟子たちは気づいた。最初に一番目立ったのはやはり「異言を語る」ことであり、喜びの力によって、



理解できない言葉が発せられた。この力を感じた者、及びその現れを見たり聞いたりした者は、レベルの高い世界からの力が彼らの内に入り、発言の力とほかの賜物を賜ったと確信した。この力と賜物は、今までの徐々に成長していく才能と異なるようである。元々ごく普通の者が、突然人を感動させる祈りをしたり、人を感動させる話をしたり、あるいは高尚な心持ちがあるのは、明らかにあの目に見えない神と対話しているからではないか（I コリ 14:2、28）。マクドナルド氏が考えるには、①異言を語ることは聖霊を受けた確実な証拠であり、原始教会の最も顕著な特徴でもある。②異言を語ることは、衝動的なものではなく、人の心が聖霊に激動されて語ったものである。③異言を語ることは、見えない神に語ることで、無意味なことではない。

使徒時代以降の教父たち、例えば Irenaeus、Tertullian、Justin Martyr、Origen などは、四世紀コンスタンティンポル (Constantinople) の弁才伝道者である Chrysostom と同じような事を言った、「凡そ使徒時代で霊のバプテスマを受けた者はたちまち異言を語ったのである。・・・これで聖霊がその人の内で話すことを信者でない人に表すのである」。彼らの肯定的な主張に注目せよ。①おおよそ霊のバプテスマを受けた者はすぐに異言を語る。②異言を語ることはその人に聖霊が宿られることを証明する。

R, A, Torrey 博士がその著作の「聖霊論」に記す、「使徒行伝 2 章、10 章及び 19 章に書かれている霊のバプテスマを受けた者は皆異言を語ったことに気づいた。おのおの聖霊を受けた者は、皆異言を語るのか。もし異言を語るのが使徒時代に限らなければ、なぜ今日、異言を語る人を見かけないのかと、わたしは奇怪に思う」。Torrey は謙虚に聖書を調べたと言えるが、見聞に乏しいので、現在にも使徒時代と同様に聖霊を受けて異言を語る者がたくさんいることを知らなかった。



世界の名著である「レヴィアタン」の作者ホブス (T, Hobbes) は言った、「当時の信者はバプテスマを受け、その身に聖霊が臨まれると、悪霊を追い出し、異言を語り、蛇を手を持っても害を受けず、病人に手を置くと癒すことができた。もし今日の宣教師がこのような力を持たなければ、真の信者はほとんどいないのではないか。世間におけるキリストの真の宣教師は稀ではないのか」。ホブスもわりと謙虚に聖書を調べたが、やはり見聞が狭いため、今日の真の教会に彼が言ったような原始教会の状況があることを知らなかった。

▲サンダース (J. Oswald Sanders) の「無量の聖霊」の 85 ページに記されている、「ペンテコステに三千人が聖霊に満たされた時、この賜物（異言を語ること）の記載は見つからない。その後、教会が五千人に増えた時も、異言を語ることは触れなかった。使徒行伝 8 章に、聖霊がサマリヤ人に賜った記事にも同じ記載はなかった。使徒行伝にパウロの伝道生涯の記載には、コリント教会をもって推測した以外に、始めから終わりまで異言を語ることが、御働きに伴う賜物とは言っていない」。

われわれの答え：①五旬節の日に約三千人がバプテスマを受けたが、聖書には彼らが異言を語ったどころか、聖霊に満たされたことも記載されていない。いわゆる「三千人が聖霊に満たされた」というのは、サンダースの推測に過ぎない。②サマリヤで福音を受け入れた者が聖霊を受けた時、聖書は異言を語るについて言及していないが、「シモンは、使徒たちが手をおいたために、御霊が人々に授けられたのを見て、金をさし出し、『わたしが手をおけばだれにでも聖霊が授けられるように、その力をわたしにも下さい』と言った」（使徒 8:18～19）、と記載しているため、彼らが聖霊を受けた時、必ず明らかな証拠があったことを裏付けている。③コルネリオ一家が聖霊を受けた時、割礼を受けている信者で、ペテロについてきた人たちがそれを確認できたのは、「彼らが異言を語って神をさんびしているのを聞いた」からである（使徒 10:44～46）。④ペテロがエルサレムへこの事を報告に行った時、聖霊がちょうど最初わたしたちの



上に降ったと同じように、コルネリオ一家の上に降ったと証明した（使徒 11:15～16）。⑤異言を語ることが聖霊を受けたことの必要な証拠である以上、異言を語ったかどうかを明記しなくても、異言を語っていないと強いて主張することはできないし、これで真理を否定することもできない。⑥五旬節の日に約三千人がバプテスマを受けた。その後、五千人に増えたが、皆聖霊を受けず、異言を語らなかったのか。決してこの事を勝手に判断することはできない。⑦パウロはコリント教会に言った、「もしわたしが異言をもって祈るなら、わたしの霊は祈るが、…わたしはあなたがたのうちのだれよりも多く異言を語れることを、神に感謝する」（I コリ 14:14、18）。これはパウロが異言を語った証拠となる。なぜ「推測」と言えようか。

▲同書の 86 ページにサンダースはまた記している、「エペソ人への手紙に列挙した昇天されたキリストがキリスト教会を建てるのに賜った各賜物の中で、異言というものはない。この省略は特に著しいものである。ローマ人への手紙は先に書かれたものであり、御働きに関する特別な指示も述べられたが、「異言を語る」ことは触れていない。まさか今日異言を語ることはないというわけではあるまい。現在にこの賜物が現れるのが不可能だとわたしたちは断じて言えない。ところが、この賜物を持っている有様を公言した大多数は、この賜物を使うのに負うべき条件に大いに違反しているので、偽りで真実でないことは充分明らかである」。

われわれの答え：①エペソの教会もローマの教会も聖霊自ら建てられたものである。彼らは異言を語ることが聖霊の必要な証拠であることを深く知っていたので、パウロは一々ドクト言う必要はない。ほかの各教会も同様である。②異言を語る者は自分だけの徳を高める（I コリ 14:4）が、教会を建てるためではないので、教会の賜物として列挙されないのは当然である。③コリント人への手紙の 12 章にある九つの賜物の一つである「種々の異言」とは異言で説教する特殊な賜物なので、聖霊を受ける証拠の異言と混同してはならない。④サ



ンダースは今日にも異言を語る事実があると認めるが、謙虚な心はまだ足りない。⑤祈る時、神に対して語る異言は解く必要がない（I コリ 14:2、28）。それは、内に宿っている聖霊に感動されて語るもので、なぜ「この賜物を使うのに負うべき条件」というものがあるのか。⑥もしサンダースが言ったように、今日異言を語る状況の大部分が捏造によるものであれば、なぜ彼らは捏造をするのか。捏造は自分また人を欺き切れるのか。彼らは皆そのように幼稚で可笑しいのであろうか。

▲グラハム・スクロジー（W, Graham Scroggie, D, D,）が言った、「現在は、ある教が広範囲に流行っている。即ち多くのクリスチャンは従来聖霊のバプテスマを受けたことがなく、皆それを体験するように求めなければならないというのである。いったいこれはどういう事なのであろうか。わたしが言うのは、この教は新約聖書から来るものではなく、伝えた者によって人々を束縛と暗闇に陥らせるものである。これは聖霊に満たされることと聖霊のバプテスマをよく知らないためにもたらした誤りである。それはわざと聖霊の恵みと異言を語る賜物を結び付けたことによってできたものだと思う」。

われわれの答え：①この教は新約聖書から来たもので（使徒 1:5、8:14～17、19:1～7）、人々を解放し（ロマ 8:1～2）、神の国に入れるものである（ヨハ 3:5）。この教は新約聖書からきたものではなく、伝えた者によって人々を束縛と暗闇に陥らせると言ったスクロジ(一)は勝手に福音を変えてしまっているので、これはもう大変な事である。②この誤りのできたのは、聖霊に満たされること及び聖霊のバプテスマを知らないからである。③それは、故意に聖霊の恵みと異言を語る賜物を切り離した結果だと思われる。

▲ J. H. ピックフオード(Pickford)の「聖霊のバプテスマとは何か」の 27～28 ページに記されている、「聖霊の降臨に伴う顕現(異言を語る)が共通の体験でも、また、しばしば起こるような体験でもないことを、『ユダヤ人に聖霊が

注がれたと同様に』神が異邦人にも聖霊を注がれたのを見てペテロが驚いた事実ほど明らかに示しているものはない。もし異言の体験が一般のクリスチャンの体験であったなら、ペテロが驚いたのはなぜか。ペンテコステからペテロがコルネリオを訪れるまでに、アンテオケのニコラオやエチオピヤの宦官など、多くの異邦人が救われていたことを忘れてはならない（使徒 6:5、8:35～39）。もし、『バプテスマ』が当時の常態であったなら、ペテロはその体験の影響を受けた人々を、サマリヤ人やユダヤ人ばかりでなく、異邦人の間にも多く見ていたであろう。そうだとしたら、コルネリオの家で起こった事に対するペテロの驚きは、全然意味がないであろう。もしペンテコステが信者の標準的体験であったなら、ペテロはどうして忘れてしまったのであろうか。

われわれの答え：①聖霊の降臨に伴う顕現（異言を語ること）は、信者共通の体験であり、よくある体験である。②異邦人が聖霊を受けた事で驚いたのは、ペテロではなく、割礼を受けている信者で、ペテロについてきた人たちである（使徒 10:44～45）。これは異邦人が初めて聖霊を受け、主に召された記録であるから驚いたのである。この事によって、ペテロは彼らにバプテスマを授けるのを拒みえなかった（使徒 10:47～48）。③アンテオケのニコラオは異邦人であるが、ユダヤ教に入信していたので、聖霊に満たされても驚くべきことではない。七人の執事の一人として選び出されても異議はなかった（使徒 6:3～6）。④エチオピアの宦官は礼拝のためにエルサレムに上った（使徒 8:27）。明らかにユダヤ教の信者になったので、驚くべきことでもない。⑤使徒行伝 8 章 14 節の「サマリヤの人々」という言葉は、英語の訳本に「人」という文字がない。地域を指すので、主の預言どおりに（使徒 1:8）、福音はすでにサマリヤ地方に伝わったと裏付けた。福音を受け入れた人たちはサマリヤ人ではなかった。ヨハネによる福音書 4 章 9 節にある「サマリヤ人」を、英訳本は「人」がつくので、純粋なサマリヤ人の意味である。サマリヤ人は元々ユダヤ人と交際しなかった。⑥もし使徒行伝 8 章のサマリヤの人々が、サマリヤ人で、そこに住んでいたユダヤ人ではなかったなら、ピリポがバプテスマを授け、ペテロとヨハネが手を



彼らの上に置いたことを、割礼を受けた弟子たちはなぜ咎めなかったのか。⑦ コルネリオ一家が初めて召された異邦人でなければ（参考：使徒 11:19）、割礼を受けている信者で、ペテロについてきた人たちは、彼らに聖霊の賜物が注がれたのを見て、なぜ驚いたのか。ペテロがエルサレムに上った時、なぜ咎められたのか（使徒 10:44～45、11:1～3）。⑧五旬節の日に聖霊を受けたのは信者の体験の手本である（使徒 10:47、11:15）。だれもその確かな事実を否定してはならない。

▲J. H. ピックフオードはまた同書の 56～57 ページに記している、「異言は一時的なしるしとして与えられた（使徒 2:7～8、I コリ 14:22）。現代の異言体験と比較できるようなものは、聖書のどこにも見当たらない。異言体験は、感情抑制力の欠如によって生じるものであるとパウロは説明している」。

われわれの答え：①ピックフオードが引用した二か所の聖句は、異言が一時のしるしであることを証明することはできない。②わたしは、あなたがたのうちのだれよりも多く異言が語れると、パウロはコリント教会に話した（I コリ 14:18、39）。また異言を語ることを妨げてはならないと注意した。それは異言が一時のしるしでないことを証明する。③聖書から現代の異言体験と比較するものを探し出すことは容易な事であり、少しも不思議な事ではない。④人に無実の罪を着せてはならない。パウロは異言体験が感情抑制力の欠如によって生じるものだとは言っていない。もし言ったとしたら、彼が感情抑制力に欠如している者でありながら、なお他人に感情抑制力に注意するようにと教えることはあるのか（I コリ 14:18、39）。まさか、五旬節の日の体験も、感情抑制力の欠如から来たのか（使徒 2:1～4）。

▲J. H. ピックフオードは同書の 40 ページに記している、「火を呼び下そうとして狂気のようになったバアルの預言者たちが、（祭壇のまわりで）逆上して叫んだり、踊ったり狂ったりする有様は、集会後にバプテスマ体験を求めて苦悶



する人たちの姿を思い起こさせる（列王上 18:22～28）。そのような狂信的行動に対して、ついにエリヤの言葉を借りてあざけてみたくなる。『彼は神だから、大声をあげて呼びなさい。彼は考えにふけているのか、よそへ行ったのか、旅に出たのか、または眠っていて起されなければならないのか』と。

われわれの答え：①牧者でありながらこのような謗りを発するのは、実に心が痛むことである。いったい彼は忠実な宣教師、また真のクリスチャンであるかと疑われる。②バアルの預言者が求めた対象は偽りの神であるが、わたしたちが求める対象は真の神である。共通点はいったいどこにあるのか。「狂信的行動」と「切なる祈り」との共通点はどこにあるのか。③「だから、あなたがたに言うておく。人には、その犯すすべての罪も神を汚す言葉も、ゆるされる。しかし、聖霊を汚す言葉は、ゆるされることはない。また人の子に対して言い逆らう者は、ゆるされるであろう。しかし、聖霊に対して言い逆らう者は、この世でも、きたるべき世でも、ゆるされることはない」（マタ 12:31～32）。真に沈痛な気持ちで、かつてイエスがパリサイ人を戒められたこの御言をもって、ピックフオード及びあらゆる彼と同じ論調をする者に警告せざるを得ない。

▲王明道は「聖書の光の中の霊恩運動」の14ページに記している、「信じる者に御約束を証明するために、主は聖霊を賜った時、彼らに異言を語らせられた。現在、様々な事によって福音の真実を証明することはできるので、奇跡を行ったり、異言を語ったりすることは、今日において使徒時代ほど必要なことではなくなった」。2ページにまた書いた、「異言を語るとは聖書の記載であり、古代の聖徒にあった経験であるが、今日のわれわれは断じてこのような経験を求めるべきではない」。

われわれの答え：①前の雨の時代に、御約束を証明するために、主は聖霊を賜った時、彼らに異言を語らせられた。今日もそうである。②異言を語るとは、聖霊を受けた証拠であるが（使徒10:44～46）、必要であるかないかの問題ではない。今日、異言を語るとは使徒時代ほど必要なことではないという



のは、今日において、聖霊を受けることは使徒時代ほど必要なことではないのと同じ意味になる。③聖霊を受けることは、キリストに属する重要な条件の一つである。もし、キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではない（ロマ8:9）。今日、聖霊を受けることはそれほど必要でないというのは、今日、キリストに属することはそれほど必要でないということになる。④聖霊のバプテスマを求めるため、キリストに属するため、今日のわたしたちはひたすら異言を語る経験を必要としている、これは古代の聖徒にあったような経験である。

二、体が揺れ動く

「そこで、ふたりが手を彼らの上においたところ、彼らは聖霊を受けた。シモンは、使徒たちが手をおいたために、御霊が人々に授けられたのを見て、金をさし出し、『わたしが手をおけばだれにでも聖霊が授けられるように、その力をわたしにも下さい』と言った」（使徒8:17~19）。

聖霊を受けたもう一つのしるしは、体が揺れ動くことである。紀元初期の何世紀かの言い伝えによると、シモンは原始教会にとって有名な敵であり、教会を反対するのに重要な地位を占めた者だという。聖書によると、彼は魔術を行って、サマリヤの人たちを驚かし、聞き従わせた。彼がバプテスマを受け、信仰に入ろうとしたのは、主がピリポに数々のしるしやめざましい奇跡を行わせられたため、群衆は彼を離れ、ピリポが伝えた福音を受け入れたからである。金を差し出し、使徒に、「わたしが手をおけばだれにでも聖霊が授けられるように、その力をわたしにも下さい」と言ったのは、使徒が手を人におけば、聖霊が授けられたことをその目で見たからである。これは、聖霊が注がれる時、異言を語るほかに、必ず外見から見える証拠があったに違いない。即ち、「体が揺れ動く」ことである。そうでなければ、魔術を行ったシモンはなぜはっきり見えたか。なぜ金を差し出して、この超然たる賜物を買おうとしたのか。



弟子たちは福音伝道のために迫害された時、迫害に遭わないようにとは求めず、大胆に御言葉を語らせ、御手を伸べて癒しをなし、奇跡を行わせられるようにと祈り求めた。結果として、神はその祈りを聞き入れられた。彼らはその場でさらに不思議な体験をした、「彼らが祈り終わると、その集まっていた場所が揺れ動き、一同は聖霊に満たされて、大胆に神の言を語りだした」（使徒 4:24～31）。

この体験は「地震」をもって「炎の舌」と「激しい風の響き声」に換えたので、聖霊の権力と威厳を明らかに表したゆえ、「第二の五旬節の日」とも呼ばれた。聖霊の力ははなはだ強い。多数の者が同じ場所で祈り、皆聖霊に満たされると、その所が揺れ動くことさえもあると分かる。ならば、聖霊が降った時、人の体が揺れ動くことを、どうして怪しいと思うのか。

三、目に見え、耳に聞こえる

五旬節の日に、聖霊が大いに降られた時、そこにいたある人たちはあざ笑って、「あの人たちは新しい酒で酔っているのだ」と言った（使徒 2:13）。彼らは弟子たちが異言を語り、体も揺れ動いていたのを見て、見苦しく思ったに違いない。なぜならば、酔っ払いの言葉を言ったり、体がふらふらしたりするのは、酒酔いの特徴だからである。彼らの判断が常識に反し、評論し過ぎたので、ペテロはすぐさま彼らを正して、「今は朝の九時であるから、この人たちは、あなたがたが思っているように、酒に酔っているのではない」と言った（使徒 2:15）。「朝の九時」と言ったのは、酔う者は夜酔うが（Iテサ 5:7）、早朝に酔う者はいないからである。それから、ペテロは預言者ヨエルの預言を引用して、約束された聖霊がすでに降ったことを証した。彼らは聖霊に注がれたので、そうなのである（使徒 2:16～18）。

また、ペテロはキリストがすでに復活して昇天し、今約束の聖霊が注がれた



ことを証した。ペテロは聖霊を受けた有様を指して言った、「イエスは…約束の聖霊を受けて、それをわたしたちに注がれたのである。このことは、あなたがたが現に見聞きしているとおりである」（使徒 2:33）。いわゆる「見た」とは、彼らの体が揺れ動いているのを見たことであり、「聞いた」とは、彼らが異言を語っているのを聞いたことである（聖霊が彼らの上に臨まれた時）。「突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっぱいに響きわたった」と彼らは聞き、または、「舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった」という状況を見た（使徒 2:2~3）。それは、上からの不思議な現象なので、驚かされただけで、あざ笑うことまでには至らなかった。ただ「異言を語ること」と「体が揺れ動くこと」だけは、一見全く秩序がないようなので、彼らはあざ笑ったのであろう。ペテロが強調したのは、特にこの二点なのである。今日は後の雨の聖霊が大いに注がれ、五旬節の日の再現であるが、霊のバプテスマを知らない者は謙虚に御言を受け入れず、冷静に御わざを考えないので、聖霊に満たされた者をむやみにあざ笑っている。歴史はこのようにたびたび同じ事を繰り返しているものである。

イエスはニコデモに言われた、「だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」。ニコデモは新しく生れる意味を悟らず、肉体のことと思いついで理解に苦しんで、「人は年をとってから生れることが、どうしてできますか。もう一度、母の胎にはいって生れることができますか」と言った。ニコデモの疑問を解くために、イエスは一歩進んで言われた、「だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない。肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である」。ところが、「霊から生れる」とはいったいどういうことか、どうやって生まれ変わるかとニコデモのために、イエスは「風」を象徴として、霊に生れる（聖霊のバプテスマを受ける）状態を説明された、「あなたがたは新しく生れなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない。風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それ



がどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生れる者もみな、それと同じである3」(ヨハ:3~8)。「風」という文字をギリシャ原語は「Pneuma」とし、「霊」と同じ文字である。イエスの御言葉は次の問題を悟らせて下さる：

- ① 聖霊は風の如く、随意にどこにも届く。人の意志に左右されず、規約に束縛されない。
- ② 肉眼で風が見えないように、聖霊の姿も見えない。どこから来るか、どこへ去って行くかも知らない。
- ③ 風が吹いている時、その音が聞こえて、物体が吹かれている状態も見える。聖霊が降った時、人は感動され、異言を語る声が聞こえ、人の体が動かされる状態も見える。ここからわかるように、聖霊を受けることは、明らかな証拠を得なければならない。目に見え、耳に聞こえることは否認できず、疑ってはいけない事実である。使徒時代がそうであれば、現在もそうである。

第二節 異言の働き

「異言を語る者は、人にむかって語るのではなく、神にむかって語るのである。それはだれにもわからない。彼はただ、霊によって奥義を語っているだけである」(Iコリ 14:2)。

▲この聖句に対して、黒崎幸吉はその註解書に記している、「聖霊に導かれて神秘的なる『奥義』を語るとも聞く(悟る)人が無いのは当然である、故に異言を語る者は神に向かって語るだけで人をば無視して居るのである」。これは聖霊のバプテスマと異言を語る働きを知らない者の考えである。異言を語った経験のない者がそれを批評するのは、いかに可笑しいことであろうか。

われわれの答え：①異言を語るのは、聖霊のバプテスマを受けるのに必要な証拠である。聖霊によって自然に出た言葉なので、はったりをかけることではない。②異言を語る対象は神であり、人ではないので、人が理解できなくて



も構わない。従って、それが人を無視すると思ってはならない。③黒崎氏は「祈りを目的とする」異言と「説教を目的とする」異言を同一に考えたに違いない。この事は第三節の「特殊な賜物」の項目にて詳しく説明する。もし異言を語ることが、人を無視することならば、なぜパウロは「信者たちが一人残らず異言を語ることを望む」と言ったのか（I コリ 14:5）。④「祈りを目的とする」異言は、本人にもわからないが、霊によって奥義を語るので（I コリ 14:2）、無意義なことではない。

聖霊を受けて異言を語るとは霊によって様々な奥義を語る以外に、次の四つの重要な働きがある：

一、とりなす

「御霊もまた同じように、弱いわたしたちを助けて下さる。なぜなら、わたしたちはどう祈ったらよいかわからないが、御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さるからである。そして、人の心を探り知るかたは、御霊の思うところがなんであるかを知っておられる。なぜなら、御霊は、聖徒のために、神の御旨にかなうとりなしをして下さるからである」（ロマ 8：26～27）。

「弱い」とは、クリスチャンが御こころに対して愚かで無知、或いは一知半解の弱さである。「助ける」の原語「sunantilambanomai」は「参加する」、「助ける」、「協力する」の意味である。私たちの知恵は限りがあるため、主の御こころは窮めがたく、その道は測りがたい（ロマ 11:33）。御こころを悟らないことによって、わたしたちは悶え、嘆き、情緒が不安定になり、主に何を求めるかわからない。しかし、聖霊はわたしたちをそのまま放っておかれず、必ず重荷を負ってくださり、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、とりなして下さる。神は聖霊の伝える意思を知り、そのとりなしによって、わたしたちを苦痛から

脱出させてくださる。効果を気にしなくてよい。なぜならば、聖霊が御旨に従って願い求めることを、神は聞き入れてくださるからである（Iヨハ5:14～15）。時にわたしたちは弱さに陥り、肉体の生活から逃れることができないため、霊に損なう肉のことを求め、知らないうちに横道に入り込んでしまう。ところが、聖霊が内に宿っておられるなら、必ずうめきをもってわたしたちの誤った祈りを正し、私たちの不足を補い、新たにとりなして下さるのであろう。

これで「聖霊によって祈る」（ユダ20）、及び「どんな時でも御霊によって祈る」（エペ6:18）の意義を理解することは難しくない。しかも、はばかりことなく、もっと主と親しく有効に交わることができるのである。しかし、聖霊のない者たちは、知性の祈りだけをする。願いたいことを言い終わったら、言うことがなくなる。心に新しいことが浮かび上がると、しばらく祈った後、また願うことがなくてお祈りが終わってしまう。人間の言葉には限りがあって、自分のわかる言葉で心の必要な事を完全に表現できないことは、しばしばあるからである。「もしわたしが異言をもって祈るなら、わたしの霊は祈るが、知性は実を結ばないからである。すると、どうしたらよいのか。わたしは霊で祈ると共に、知性でも祈ろう。霊でさんびを歌うと共に、知性でも歌おう」（Iコリ14:14～15）。異言をもって祈ることは、霊の祈りである。霊の祈りと知性の祈りを併用すべきである。けれども、聖霊が宿っておられない人は、どうやって異言をもって祈るのであろうか。

二、未信者のためのしるし

「このように、異言は信者のためではなく未信者のためのしるしである…」（Iコリ14:22）。

「信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、」（マル16:17）。



上の聖句にある「しるし」は英訳で「sign」とされる。「証拠」または「奇跡」という意味に取れる。即ち、未信者にとって、異言を語るのは顕著な奇跡であり、神が人と共におられるのを認めざるを得ないことである。ヨハネが言ったように、「神がわたしたちのうちにいますことは、神がわたしたちに賜った御霊によって知るのである」(Iヨハ3:24)。特に、マルコによる福音書16章17～18節にある「新しい言葉を語る」ことは、信じる者に伴うしるしの一つとしてイエスが約束されたほどで、よりわたしたちの見方の正確さを意味づけている。しかし、異言を語らない者は、聖霊のバプテスマを受けていないのに、未信者に神が自分のうちにおられることを、いかにして証明することができようか。

五旬節の日に聖霊が大いに降った時、天下のあらゆる国々から祭りを守りに帰って来たユダヤ人たちは、弟子たちが聖霊に満たされ、異言を語ったのを聞いて、驚き怪しんだ。後に、それが聖霊を受けた証拠であることを知って、すぐ悔い改めて、イエス・キリストが救い主であると信じ、罪ゆるしのバプテスマを受けた(使徒2:5～7、37～41)。もし弟子たちが異言を語らないならば、いかにして彼らは神が預言者たちを通して預言された約束の聖霊を受けたと、証明することができるのか。もし聖霊がイエス・キリストの名によって注がれなければ、いかにして彼は確実に復活して昇天されたことを証明することができるのか。もし彼が復活して昇天されなければ、いかにして彼は救い主であることを証明することができるか。「このイエスを、神はよみがえらせた。そして、わたしたちは皆その証人なのである。それで、イエスは神の右に上げられ、父から約束の聖霊を受けて、それをわたしたちに注がれたのである。このことは、あなたがたが現に見聞きしているとおりである」(使徒2:32～33)。「もしキリストがよみがえらなかつたら、わたしたちの宣教はむなしく、あなたがたの信仰もまたむなしい」(Iコリ15:14)。



シモンは魔術を行ってサマリヤの人たちを驚かし、自分をさも偉い者かのように言いふらしていた。後にピリポがそこで数々のしるしやめざましい奇跡を行ったのを見て、彼らはシモンを離れて、ピリポが宣べ伝えた福音を受け入れた。シモンは神のくすしきみわざを見て、また、人々が離れ行き、ピリポについて行ったので、彼も信じてバプテスマを受けた。ピリポには奇跡を行う賜物があり、信じる者にもバプテスマを授けたが、まだだれも聖霊を受けていなかった。ペテロとヨハネがエルサレムからやって来て、皆の上に手をおいたところ、彼らははじめて聖霊を受けた。シモンは使徒たちが手をおいたために、御霊が人々に授けられたのを見て、金を差し出して、その力を買おうとした（使徒 8:5~19）。この歴史の教えはシモンが偽りを捨て、真を迎えたのは、ピリポが主によって行った数々の奇跡をとおして、その伝えた神は全能なる方であり、宇宙の主宰者であることがわかったからである。そして、金を差し出してその力を買おうとしたのは、皆が異言を語るのを聞いて、神が共におられることを知ったからである、ということである。

ゆえに、未信者にとって、病を癒し、悪霊を追い出すことは奇跡で、神のために良き証をするが、異言を語るのも奇跡の一つで、同様に神のために良き証をする働きがあるのである。

三、自分の徳を高める

「異言を語る者は自分だけの徳を高めるが、預言をする者は教会の徳を高める」（I コリ 14:4）。

「自分の徳を高める」を文語訳は「異言を語る者は己の徳を建てる」とし、NKJ は「edifieth himself」（自分を薫陶する）とす。聖霊が人を感動させ、語らせた異言は、地上の言語ではなく、天に属する言葉である。地に属する一切の言語に、「人の徳を建てる」働きがないからである。



自分の徳を高めることは利己主義で、あまり重要ではない、むしろ教会の徳を高める賜物を求めるべきだとある者が言う。聖書の教えから見れば、これは本末転倒の言い方である。嘗てイエスはマルタの家に迎え入れられた。マルタの妹であるマリヤは主の足元に座って御言を聞き入っていたが、マルタは接待のことで忙しくて心を取り乱したところ、妹が手伝いをするように、イエスに願った。しかし、イエスは、マリヤは良い方を選んだと答えられた（ルカ 10:38～42）。マリヤが熱心に御言に聞き入ったのは、自分の徳を高めるためである。マルタは主に奉仕することで忙しくて心を取り乱したのは、力を尽くして教会の徳を高めるのに似たようなことである。教会の徳を高め、主に仕えることは重要であるが、自分の徳を高めるのはさらに重要である。パウロが言った、「すなわち、自分のからだを打ちたたいて服従させるのである。そうしないと、ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分は失格者になるかも知れない」（Ⅰコリ 9:27）。自分の徳を高めない者が、なぜ教会の徳を高めることができようか。パウロは一生熱心に教会の徳を高めるために、キリストの苦しみのなのお足りないところを肉体をもって補っていた（Ⅱコリ 12:15、コロ 1:24）。しかし、注意すべきことは、彼はこれで自分の徳を高めることをおろそかにせず、しかもそのように人を教えなかったのである。従って、クリスチャンは人を建てる前に、まず自分を建てなければならない（ロマ 2:19～24）。これは即ち「己を達成すれば、人を達成することができる。己が自立すれば、人を立てることができる」という道理である。

▲コリント人への第一の手紙 14 章 4 節にある聖句を、黒崎幸吉はその註解書に説明をつけ加えた、「故に愛ある者は自ら後者を選ぶであろう」。彼が考えるに、異言を語ることを重んじ、自分の徳を高めることだけを考えるのは愛のない者であるが、愛のある者は、教会の徳を高めるように預言する賜物を熱心に求めるのである。

われわれの答え：コリント教会の状況について言うと、黒崎氏の見解は正



確である。ところが、神のあらゆる教会及び一般の世に属する教会について、適切ではない。その理由は次のとおりである：①コリント教会は異言で説教する特別な賜物に偏り、預言をする賜物をなおざりにして、特にもっと貴い愛に欠けていた。②パウロは高ぶりと分裂の危険に陥らないように、コリント人への第一の手紙の12章と13章とを書いて、愛がすべての賜物の基礎であることを彼らに悟らせた。また14章では、異言を語る者は自分だけの徳を高めるが、預言をする者は教会の徳を高めて、もっと大事であることを教えた。③「異言を語る」賜物がよくないという意味ではなく、むしろ、それで自己満足しないで、一步進んで、預言することを熱心に求めるがよい。コリント教会以外に、ほかの神の教会には同じようなことは起こらなかったもので、これを根拠にして、異言を語る重要性を否定すべきではない。④コリント教会は御霊自ら設立された教会である。聖霊のない一般の教会は異言の賜物を軽んじることによって、自分がコリント教会を超越したものだと思っはならない。異言を語ることは聖霊の賜物であり、または聖霊を受けた証拠である（使徒10:44～46）。聖霊のない一般の教会は、まず謙虚に聖霊のバプテスマを求めてから、預言する賜物を熱心に求めるべきである。⑤黒崎氏は愛のある者は預言する賜物を選んで、異言を語る賜物を選ばないと言った。それは、異言を語らない者は聖霊がないことを知らないからである。まさに本末転倒であり、自分を欺き、人を欺くことであろう。

四、教会の徳を高める

「すると、兄弟たちよ。どうしたらよいのか。あなたがたが一緒に集まる時、各自はさんびを歌い、教をなし、啓示を告げ、異言を語り、それを解くのであるが、すべては徳を高めるためにすべきである。もし異言を語る者があれば、ふたりか、多くて三人の者が、順々に語り、そして、ひとりがそれを解くべきである。もし解く者がいない時には、教会では黙っていて、自分に対し、また神に対して語っているべきである」（Iコリ14:26～28）。



異言を語る者は、人に向かって語るのではなく、神に向かって語るのである。それ故にだれにもわからない。自分でさえ何を語っているかわからない（I コリ 14:2）。しかし必要に応じて、神は人に異言を解く賜物を授けられる（I コリ 12:10）。それを解いて、悟らせて、教会の徳を高めるのである。コリント教会は普遍的に異言を語る賜物のみならず、異言を解く賜物も持っていたことが12章と14章の記載よりわかる。よく使いこなせば、大いに教会の徳を高めることができる。しかし、彼らはそれを気にせず、解く者がいなくても、異言で全会衆に語ったゆえ、集会が混乱になった。パウロは言ったが、愛は高ぶらない、自分の益ではなく、皆の益を求める（I コリ 13:4～5、10:35）。コリント教会の現象は明らかにキリストの愛の精神に違反したものである。適時に是正しなければ、その結果は考えられないものになるであろう。

コリント教会の誤った観念を訂正するため、一緒に集まる時、すべては教会の徳を高めることを共通の目標とすべきだとパウロは指導した、「各自はさんびを歌い、教をなし、啓示を告げ、異言を語り、それを解くのであるが、すべては徳を高めるためにすべきである。わたしは実際、あなたがたがひとり残らず異言を語ることを望むが、特に預言をしてもらいたい。教会の徳を高めるように異言を解かない限り、異言を語る者よりも、預言をするの方がまさっている。異言を語る者は、自分でそれを解くことができるように祈りなさい」（I コリ 14:26、5、13）。これは、預言する賜物だけが教会の徳を高めるが、異言を語る賜物は教会のためにはならないので、惜しげもなく捨てるべきだというわけではない。異言を解いて人に悟らせる者さえいれば、やはり教会の徳を高めることになる。それは預言によって徳を高めることには劣らないのである。

コリント教会に集会の秩序を定め、混乱を除くために、パウロは異言を語る実例を挙げ、注意すべき点を指示した：①人数については、二人かせいぜい三人を上限とする。②秩序については、順番に語るべきで、二、三人で同時に語

らない。③方法については、解く者が必要である。もし解く者がいない時には、教会では黙っているべきである。④解く者がいなければ、異言を語ってはいけないとは言っていない。それは自分に対し、また神に対して語るべきであるが、集まった人々に対しては語らないのである（I コリ 14:27～28）。

第三節 特殊な賜物

聖霊のない一般の教会は、異言を語ることを霊的な種々の賜物の一つとするが、聖霊を受けるのに必要な証拠とは見なさない。それで、異言を語る賜物がなくても、聖霊は自分の内に宿っていると考える。

当然、異言を語ることは霊的な賜物であるが、生まれつきのものではなく、学習をとおして得たものでもない。聖書の教えによれば、異言を語ることは賜物だけでなく、聖霊を受けた時に必要な証拠でもある（使徒 10:44～47）。聖霊のない一般の教会がこのことで論争し、聖書の本意まで曲解したのは、「普通の賜物」と「特殊な賜物」を一緒にしたからである。これもまた注意すべき鍵である。いわゆる「普通の賜物」と「特殊な賜物」は、元々聖書の用語ではないが、この問題を分別するために、あえて使うことにした。

▲サンダースは「無量の聖霊」の 85 ページに記している、「コリント人への第一の手紙 12、14 章を調べてみれば、異言を語ることは最後、または最小の賜物として並べられたことがわかる。しかも用途に限られているから、それは特別に求めるべきものではない。もし、異言を語ることが聖霊のバプテスマの特別なしるしとするならば、聖書は決してこのように記載するはずはなかった。預言をすることが更に大いなる賜物で熱心に努めるべきものとされたのは、特に教会の徳を高めるためにあるからである。パウロは言った、『一万の言葉を異言で語るよりも、むしろ五つの言葉を知性によって語る方が願わしい』（I コリ



14：19)。『みんなが異言を語るのだろうか』とパウロの問いによれば、異言を語る賜物はあらゆる聖徒に授けるものではないことが明らかである。この問いに対応する答えに『否』が含まれているからである。

われわれの答え：①コリント人への手紙 12 章に挙げられた、最後と最小に思われる「異言を語る」賜物は、「異言を解く」と並列され（10、30）、異言で説教する特殊な賜物なのである。14 章にある、特に追い求めるべきではないとされる「異言を語る」賜物も「異言を解く」と並列され（26～28）、やはり異言で説教する特殊な賜物なのである。解く者がいる時しか語れないので、当然その用途は限られる。②異言を語ることは、確実に聖霊のパプテスマを受けた特別なしるしであるが、「普通の賜物」と「特殊な賜物」との区別がある。使徒行伝とコリント人への手紙の記載に食い違いはない。③預言をする賜物は教会の徳を高めるので、当然切に求めるべきものである。もし集会の時、解く者がいれば、異言を語ることも教会の徳を高めるので、否定してはならない（I コリ 14:5、12～13）。④異言を語ることは聖霊を受けた証拠であり、聖霊は神の国を継ぐ保証である（エペ 1:14）。厳格に言うと、おおよそ聖霊を受けない者には預言をする資格はない（ヨハ 20:21～22、ロマ 10:15）ので、ましてや「更に大いなる賜物」を論じ得ようか。⑤パウロは、「一万の言葉を異言で語るよりも、…むしろ五つの言葉を知性によって語る方が願わしい」と言ったが、それは特に「教会では」であり（I コリ 14：19）、即ち集会の時である。言い換えれば、集会の目的は人の徳を高めることにあるので、解く者のない一万の言葉を異言で語って、人の徳を高める目的を達成しないよりも、むしろ、五つの言葉を知性によって語って、人に悟らせたほうがよいであろう。⑥明らかにこれは異言で説教する特殊な賜物に限って言っているのであり、祈りの時、神に向かって語る異言ではない。だからパウロは、「わたしは霊で祈ると共に、知性でも祈ろう。…わたしは、あなたがたのうちのだれよりも多く異言が語れることを、神に感謝する。しかし教会では、一万の言葉を異言で語るよりも、ほかの人たちをも教えるために、むしろ五つの言葉を知性によって語る方が願わしい」



(I コリ 14:15、18～19) と言ったが、前後に矛盾はない。⑦「みんなが異言を語るのだろうか」が、「異言を解く」と並列されたのは (I コリ 12:30)、異言で説教する特殊な賜物を指して言うのである。もちろんそれはすべての聖徒が授かるものではない。この種の特異な賜物を普通の賜物と同一にしてはならない。前者は、種々の霊の賜物の一つであるが (I コリ 12:8～10)、後者は聖霊を受けるのに必要な証拠だからである。⑧すべての信者は知性で祈ることができるが、皆が預言者になって知性で説教するとは限らない。これと同じように、すべて霊のバプテスマを受けた人は、異言でお祈りすることができるが、異言で預言するとは限らない。

▲J. H. ピックフォードは、「聖霊のバプテスマとは何か」の 34 ページに記している、「このしるし (異言を語ること) は一時的なものにすぎない。コリント人への第一の手紙 12 章における霊の賜物の説明の中で、パウロは異言を賜物の一つに数えているが、それに続く章では、「異言はやむであろう」(I コリ 13:8) と明言している。彼は 13 章において、当時すでに異言はすたれつつあることを示し、『いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは、愛である』(I コリ 13:13) と結んでいる。

われわれの答え：①異言を語ることは一時的なしるしではなく、常に聖霊を受けた者に伴うのである。そのため、パウロは自分がコリント教会のだれよりも多く異言が語れると言い、しかも、異言を語ることを妨げてはならないと注意した (I コリ 14:18、39)。②「異言はやむ」と言ったのは、当時、異言が廃れつつあるのではなく、キリストが再臨される時、必ずやむという意味なので、パウロの言葉を曲解してはならない。③なぜ異言はやむと言うのか。その時には、神と顔と顔を合わせることで、もはや異言で祈ることはなく、異言で自分の徳を高めることもなくなるからである。④その時には、異言はやむだけでなく、預言も知識も廃れる。現在、わたしたちにある賜物の一切は限りがある。全き者が来る時には、限りのある者は当然廃れるであろう (I コリ 13:8)



～12)。⑤キリストの御再臨は間近で、全き者(キリスト)が来るまで、すべての賜物はますます重要になり、進歩し、完全になるべきである。⑥いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛である。廃れたりやんだりすることは絶対にない。そして、そのうちで最も大いなるものは、確かに愛である。愛は神の本質であり、決して変わるものではないからである。現在、それによって異言の重要性を否定し、あるいは「異言を語る」賜物がやんだと憶測してはならない。

▲J. H. ピックフオードはまたその著作の 56 ページに書いた、「異言問題を取扱う際、パウロは、それは制限された劣等の賜物であると教えている」。

われわれの答え：①劣等の賜物とされた異言は、「異言を解く」ことと並列され（I コリ 12:8～10、30、14:26～27）、それは異言で預言する特殊な賜物であり、聖霊のしるしである異言と混同してはならない。②元々賜物には優劣の差がない。健全なる教会を建設するには、どれも忌み嫌うものではない（I コリ 12:7～11、29～30）。同じように、体の肢体も貴賤の別がなく、全身はすべての節々の助けにより、成長していくのであるので、どの肢体も疎かにしてはならない（I コリ 12:14～22、エペ 4:16）。③パウロは殊に預言することを、熱心に求めるようにとコリント教会に勧めたが、一方、異言を語ることも重んじた（I コリ 14:1、18、39）。そのため、なぜ異言を語ることを劣等の賜物と見なし得ようか。たとえ異言を語ることが劣等な賜物だとしても、この賜物は必要ではないという意味ではなく、異言を語ることに加わり、更にもっと優れた賜物を求めるべきだという意味である。④聖霊のない一般の教会は、この最も劣等の賜物とされたものさえ持たないのに、どうしてもっと優れた賜物を言えようか。⑤制限された異言とは、異言で預言する特殊な賜物なので、二人か、多くて三人の者が順番に語り、そして一人がそれを解くべきである（I コリ 14:27）。

▲ある者は、コリント人への第一の手紙 13 章 1 節を、このように説明してい



る、「もし愛がなければ、異言を語っても役に立たない。愛があることは即ち聖霊があることであるので、必ずしも異言を語るとは限らない」。

われわれの答え：①この聖句は 12 章の続きであるので、異言で預言する特殊な賜物を指して言うが、聖霊のしるしである異言ではない。②これは異言で預言をする力を強調しながらも、愛に欠けたコリント教会に対して言ったのである。聖霊のない、異言を語らない一般の教会に対して言うのではない。③これは、愛があることは異言を語ることより勝るという意味であるが、愛だけが必要で異言は不必要ではないという意味ではない。言い換えれば、異言を語る者に愛があれば望ましいが、愛があることは即ち聖霊があることとは言っていない。

一、コリント人への第一の手紙 14 章の真意

異言を語ることを、霊の種々の賜物の一つとし、重要でない、聖霊を受ける必要なしではないと主張する者は、コリント人への第一の手紙 12 章のほか、14 章をも根拠にした。元々 14 章は「普通の賜物」と「特殊な賜物」とに明白な境目を区分したが、いかんせん彼らは混同したことによって、是非の分別もつかないまま、多くの人まで惑わしてしまった次第である。

普通の賜物について言うと、それは祈る時に語る異言であり、パウロが「異言をもって祈る」(14)、もしくは「霊で祈る」(15)と言われたものである。ただ人に向かって語るのではなく、神に向かって語るのも、だれにもわからず(2)、自分さえわからない。解く必要もない。この普通の賜物は、使徒時代において、弟子たちに聖霊のあるべきしるしとされていた(使徒 2:4、10:44~46、19:6)。もしこの賜物がなければ、聖霊を受けたことにならない。その働きは、霊によって奥義を語り(2)、自分の徳を高め(4)、未信者のためのしるしとなる(22)というところにある。従って、それを特殊な賜物と混同してはならない。それを霊の種々の賜物の一つと思い、また一番劣っているとして、忌み嫌ってはい



けない。

特殊な賜物について言うと、それは集会の時に人々に語る異言であり、教会の徳を高める働きにあるので、解く者が要るのである (27)。しかしコリント教会は、集会の時これを気にせず、解く者がいなくても、異言で皆に語ろうとしたので、混乱状態になったわけである。そこで、パウロはいくつかの有力な理由を挙げて、彼らの誤った考えを改め、そして、解く者がいてはじめて異言をもって会衆に語りかけることができると教えた。その理由は：①預言をする者は教会の徳を高める。それは異言を解かないままで語って、教会の徳を高めないことより勝る (4～5)。②異言を語るとしても、解説がなければ、皆に何の役にも立たない (6)。③楽器でも、その音に高低、強弱、長短の変化がなければ、何を吹いているのか、何を弾いているのか、知ることはできない (7)。④戦いの時、ラッパがはっきりした音を出さないなら、だれも戦闘の準備ができない (8)。⑤解く者がいないままで語った異言は、だれにもわからない。それは空に向かって語っていることになる (9)。⑥世の国々の言語は、それぞれ意味がある。語っている人にとってわからない者は、異国人であるが、わからない者にとって語っている人も異国人である (10～11)。⑦教会では、一万の言葉を異言で語るよりも、むしろ五つの言葉を知性によって語る方が願わしい (19)。⑧もし全教会が一緒に集まって、全員が異言を語っているところに、初心者か未信者が入ってきたら、彼らはあなたがたを気遣いだと言うだろう (23)。⑨集会の時、すべては徳を高めるためにすべきである。異言を語ることも除外されない (26、12～13)。⑩神は無秩序の神ではなく、平和の神だから、預言者の霊は預言者に服従するものである。(32～33)。

この特殊な賜物の異言は、霊の種々の賜物の一つであり、聖霊の意志により与えられて (I コリ 12:8～11)、聖霊のある者が皆持っているのではない。それで、パウロは、それをほかの賜物、または異言を解く賜物と並列して説明し



た(26～27、Iコリ12:10、28、30)。普通の賜物と区別があることは明らかである。コリント教会はこの問題を疎かにし、この賜物を頼りに調子に乗りすぎて、高ぶったり、人を軽蔑したりしたので、パウロは、「みんなが異言を語るのだろうか。みんなが異言を解くのだろうか」と言った(Iコリ12:30)。この賜物を用いる時は、解く者が要るほかに、混乱にならないように、秩序問題にも注意すべきである。秩序というのは、①二人か、多くても三人の者が語る。これ以上はできない。②順々に語る。二、三人が同時に語ってはならない。③もし解く者がいない時には、教会では黙っていて、自分に対し、また神に対して語るべきである(27～28)。

異言で預言するには、前述の特殊な賜物以外に、突然聖霊の感動を受けて語るものもある。前者はいつでもどこでも自由に語ることができる。しかし解く者がいない時には、教会では黙るべきである(27～28)。後者は、必要な時に思わず聖霊に迫られ、語らなければならない(ヨブ32:17～22、エレ20:9)。ゆえに、突然聖霊の感動を受け異言で預言する時は、必ず解く者がいなければならない。解く者はその本人か、その場にいるだれかである。集会中にこのような事が起こったら、先に語った者は黙って、啓示を与えられた者に言ってもらう。なぜならば、「みんなが学び、みんなが勧めを受けるために、ひとりずつ預言をすることができるのだから」である(30～31)。

「預言者の霊は預言者に服従するものである。神は無秩序の神ではなく、平和の神である。すべてのことを適宜に、かつ秩序を正して行うがよい」(32～33、40)。パウロがコリント人への第一の手紙14章を書いたのは、すべては徳を高めるために(26)、集会の秩序を守るようにとコリント教会を勧めたのである。しかしその一方、この指示によって彼らの誤解を招き、異言を語る問題を疎かにしないように、パウロは特に注意して言った、「異言を語ることを妨げてはならない」(39)。彼自身もこう言ったのではないか、「もしわたしが異言をもって



祈るなら、わたしの霊は祈る、…わたしは霊で祈る、…わたしは、あなたがたのうちのだれよりも多く異言が語れることを、神に感謝する」(14～15、18)。異言の事について、パウロは疎かにもせず、反対もしなかったことがわかる。

▲胡恩徳は「霊恩問題」の7～8ページに記している、「多数の霊恩派の集会、またいわゆる聖霊に満たされた信者は、大声で叫んだり、大声で霊の歌を歌ったりして、いつも混乱状態を現わしている。改良したものは、一緒に異言を語るか、少数の者が一緒に異言を語る、である。聖書を調べれば、このような状況はあったのか。コリント人への第一の手紙14章に、異言問題が多く取り上げられている。教会で一緒に異言を語ることを主張しない。解く者がいれば、ただ二、三人が順番に語ってよいとされた。それと同時に、14章33節に、『神は、無秩序の神ではなく、平和の神である』とあるように、すべての混乱は神によるものではない。神は平和な方であることを忘れてはならないのである」。

われわれの答え：①大声で叫ぶのが人の意志によれば、当然間違いであるが、霊の感動によるなら、それを否定してはいけない。②パウロは、「わたしは、…霊でさんびを歌うと共に、知性でも歌おう」と言った(Ⅰコリ14:15)。そして信者たちに、「詩とさんびと霊の歌とをもって語り合い、主にむかって心からさんびの歌をうたいなさい」と教えた(エペ5:19、参考：コロ3:16)。だから、どうして霊の歌を混乱と言えようか。③コリント人への第一の手紙14章に、二人か、多くて三人の者が順々に語り、そして一人がそれを解くべきだと論じたのは(26～27)、それは異言で預言をする特殊な賜物であり、異言で祈る事ではない。そうでなければ、知性の祈りには人数の制限もなければ、順々に語る必要もないのに、なぜ異言で祈る時だけこれらの制限を受けるのか。④パウロが、「神は無秩序の神ではなく、平和の神である」と言ったのは、コリントの信者が集まる時、とても秩序がなくて、解く者がいなくても、皆異言で預言をしたからである。⑤胡氏は「混乱状態」を間違いとした上、「一緒に異言を語る事に改めた」をも間違いとした。では、どうすれば正しいのであろうか。二、三



人で順番に語るのか。いや、パウロが言ったのは異言で預言することであり、異言の祈りのことではない。では、語ってはいけないのか。いや、パウロは、「異言を語ることを妨げてはならない」と言った（I コリ 14:39）。

▲「異言を語る者は自分だけの徳を高めるが、預言をする者は教会の徳を高める。わたしは実際、あなたがたがひとり残らず異言を語ることを望むが、特に預言をしてもらいたい。教会の徳を高めるように異言を解かない限り、異言を語る者よりも、預言をする者の方がまさっている」（I コリ 14:4～5）。ある者はこの箇所を引用して、異言を語る者よりも預言をする者の方が勝っていると言う。しかもこれを根拠にして、異言を語る賜物を捨ててしまった。

われわれの答え：①解く者がいない時、異言は自分の徳だけを高めるが、教会の徳を高めない。しかし、預言をする者は、いつでもどこでも教会の徳を高める。この状況において、預言をする者の方が異言を語る者より勝っている。しかし、ただ預言をする賜物を求めて、異言を語る賜物を求めてはいけないとパウロは言っていない。②パウロは言った、「わたしは実際、あなたがたがひとり残らず異言を語ることを望むが、特に預言をしてもらいたい」。直訳すると、「わたしはあなたがたが皆異言を語ることを望む。それはあなたがたが預言することをもっと望むためである」（I would that ye all speak with tongue, but rather in order that ye prophesied）。③異言を解く者がいるなら、教会が高められる徳は、預言によって高められる徳に怠らないであろう。ひいては、異言で説教するのは、預言者の知性で説教するのに勝ると言えよう。④パウロがコリント人への第一の手紙 14 章を書いた目的は、コリント教会の集会の秩序を整えるためであった（40）。なぜならば、彼らはいつも秩序がないため、解く者がいなくても異言で説教するので、教会の徳を高めなければ、混乱状態になる一方であった。この重点をよく把握し、冷静に考えれば、異言の賜物を軽視しないで済むのであろう。



二、五旬節の経過

「五旬節」、別名は「刈り入れの祭」である。原文の意味は「五十番目」であり、即ち過越の祭の後、種入れぬパンの祭の一日目から数えて五十日目のことである（レビ 23:15～17）。これは年中に行われるユダヤ人の祭りの中で最も盛り上がるものである。エルサレムには、国々から祭をするために集まったユダヤ人でいっぱいになる。祭が終わると彼らは荷造りをし、故郷を離れ、居留地に戻る。感謝なことに、キリストがよみがえった初めての五旬節に、歴代における神の約束が実現された。新約の選民たちが聖霊に注がれ、不思議な異言を語ったことである。キリストが十字架につけられた事、及び聖霊が初めて降られたこの重大な事件は、ユダヤ人の外国居留者に大きな興味を引き起こし、この日を平凡でない日とした。キリストの復活と昇天を証明するのに、これは確かに効果のある方法である。なぜならば、キリストがよみがえって天に上げられなければ、聖霊は降られないからである（ヨハ 16:7、使徒 2:33）。神がすべての国民を救われる福音を宣べ伝えることは、まさに千載一遇の好機である。なぜならば、福音はその一日で外国居留者に伝わり、それから世界の国々へ伝わって行くからである。これは即ち、神が五旬節の日を聖霊の降臨日にされた理由なのである。大いなるかな、神のご計画は何と不思議なことよ！

▲聖霊のない一般の教会は、多数が使徒行伝 2 章 1～13 節を引用して言う、「五旬節の日に聖霊が降った時、弟子たちが語った異言は世の各種の言語に違いない。それで、外国居留のユダヤ人は自分の生れ故郷の国語として聞き、理解できたのである。現代の異言派の人が語る異言は、聞いてもわからないので、明らかに五旬節の日にあった事とは異なる」。

われわれの答え：五旬節の日に聖霊が降って、弟子たちが語った異言は聞いて通じたが、それは世の国々の言葉ではなかった。事実今日もそうである。その理由は次のとおりである。



- 第一、「他国の言葉」(4) という言葉によって、弟子たちが語ったのは、いろいろな国々の言葉に思われるが、実は、弟子たちが語ったのは「異言」であり、聖霊によって生れ故郷の国語に聞こえたのである。
- 第二、経験によれば、少人数が同時に違った国語を話すなら、声があまりにも混雑して聞きづらいであろう。まして聖霊が大いに降った五旬節の日に、約百二十人(使徒 1:15) が一同に聖霊に満たされて異言を語ると、その声はもっと混雑するはずである。しかし、国々から帰ってきたユダヤ人たちは、彼らの生れ故郷の国語(十五種)に聞こえ、しかも彼らは弟子たちが「神の大きな働き」を述べるのを聞いたのである(11)。
- 第三、信心深いユダヤの外国居留者にだけ、自分の生れ故郷の国語に聞こえた(5~8)。そうでない者は悟らずに、新しい酒で酔っているとあざ笑った(13)。あざ笑った「ほかの人たち」(13)は、信心深い者とは異なった人たちであろう。もし弟子たちが語ったのが世の言葉なら、信心深いかそうでないかに関係なく、聞いてわかったはずである。
- 第四、神は信仰深いあのユダヤの外国居留者を救うために、異言を解く賜物を与え、弟子たちが「神の大きな働き」を述べるのを聞かせられた。結果、彼らは罪のために自分を咎め、悔い改め、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けて信仰に入った(37~41)。この奇跡に関して、黒崎幸吉はその註解書で八つの学説を紹介した。その中の六つ目は、「神は全会衆の身に奇跡を現し、自国語でない言葉を自国語に聞かせられた」。この学説は最も正確であるが、黒崎氏はそれに賛成しなかった。
- 第五、聖書において異言を解くこの種の賜物は、特殊な賜物の異言と並列されている。聖霊を受けた者は、だれもが備える賜物ではなく、御霊によっ



て与えられるものである（I コリ 12:10～11、30、14:26～28）。しかし、しばらくの間だけこの賜物を与えられるのもある。即ち、必要な時、御霊はその意味を悟らせるのである。五旬節の日に起きた事は、このしばらくの間の賜物であり、いつでもどこでも一緒にある永久な賜物とは異なる。コルネリオ一家が聖霊に注がれ、異言を語ったのを、割礼を受けている信者は「神をさんびしている」と聞こえたのも（使徒 10:44～46）、この種に属するのである。

▲サンダースは「無量の聖霊」の 84 ページに記している、「われわれが注意すべきことは『五旬節の日』に語った異言はだれも理解できないというのではなく、当時語ったのは一緒に集まった者の各国の言葉であった。聖書の記載によると、これと同じような状態は再びなかった」。ピックフオードは「聖霊のバプテスマとは何か」の 17 ページに書いた、「五旬節に現れた異言の賜物は各国の言葉である。それで国々の人に福音を宣べ伝えた」（使徒 2:6～11）。また 55 ページに書いた、「五旬節の日にあった聖霊のバプテスマの特徴は、現代における異言の体験には一つも備えられていない」。

使徒行伝 2 章 1～4 節の記載について、黒崎幸吉はその註解書に書いた、「『他国の言葉で語りだした』とは、皆が聖霊に満たされ、ぼんやりした状態になり、自分のわからない外国語を語り出したが、外国人はすぐ理解できた」。また書いた、「五旬節の後、コリント教会、あるいはほかの場所に、『異言を語る』現象はあったが、五旬節の日にあった特別な現象はもはやなかった。それは聖霊が降るのは常に起こるべき現象ではなく、五旬節一回きりの現象だからである。従って、今日もこの特別な奇跡を望み、この奇跡が現れないと聖霊を受けていないと思うのは、聖霊の降臨の意味を誤解することになる。五旬節の日に降った聖霊は、今日もわれわれと一緒におられるのである」。



概括して言えば、彼らが思うに、①弟子たちが五旬節の日に語った異言は、集まったユダヤの外国居留民の生まれ故郷の言葉なので、彼らは聞いて理解できた。このような記載は、聖書においてただ一度だけで、二度と起こらなかった。②現代の異言の体験は、五旬節の日に降った聖霊のバプテスマの特徴と異なる。③弟子たちが他国の言葉を語ったのは、聖霊に満たされて、ぼんやりした状態で語ったのである。④五旬節の現象は繰り返さない。それは聖霊の降臨がよくあるべき現象ではないからである。この特別な奇跡を望み、しかもこの奇跡が現れなければ聖霊を受けていないと思う者は、聖霊の降臨の意味を誤解することになる。⑤五旬節に降った聖霊は、今日もわれわれと一緒におられる。

われわれの答え：①弟子たちが五旬節に語ったのは世の言葉ではない。集まったユダヤの外国居留民が聞き取れたのは聖霊が異言を解く一時の賜物を分配したからである。これ以外にも、コルネリオ一家が受霊した時も、似たような経験があった。割礼を受けている信者は、彼らが「神を讚美している」と聞こえたからである（使徒 10:44～46）。②五旬節の聖霊のバプテスマの特徴は異言を語ることであるが、各国の居留民は、自分の生まれ故郷の言葉に聞こえた。今日も同じような異言の体験がある。③弟子たちが異言を語っている時、意識ははっきりしていた。人が驚き怪しんだり、あるいはあざ笑ったりするのがわかって（5～8、13～15）、ぼんやりした状態で異言を語ったのではなかった。④聖霊を受けるのに必要な証拠としては異言を語ることであるが（使徒 10:46）、必ずしも聞いてわかるものではない（I コリ 14:2）。エペソの弟子たちが異言を語った時、わかる者がいると聖書には明記されていないが、聖霊を受けたと認められた（使徒 19:1～6）。⑤聖霊が降るのは常にあるべき現象である。だから、悔い改めてバプテスマを受ければ、聖霊の賜物を受けるとペテロは言った（使徒 2:38）。もし、キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではないとパウロも言った（ロマ 8:9）。⑥聖書に五回記録された聖霊が降った現象は、代表的なものであり（使徒 2:4、8:17、9:17、10:44、19:6）、五旬節の経験が完了ではないことを証明することができる。⑦もし「特別な奇



跡」が、皆が異言の内容がわかるということなら、当然間違っている。よくある現象ではないからである。もし、ただ「異言を語ること」を指しているなら、それは非難できない。なぜなら、異言を語らないことは即ち聖霊を受けていないことであり、覆すことができない真理だからである。⑧五旬節に降った聖霊は、すべて異言を語る人の心に宿っておられる。自分や他人を欺くことによって、切に聖霊を求める機会を失うことのないように。

五旬節の日、前の雨の聖霊が降った時代に、異言を解いた経験があったように、今日、後の雨の聖霊が降った時代にも同じ経験がある。筆者がまとめた資料によれば、聖霊が人に感動を与えて、異言を解かせた方法は、少なくとも六つの類別があるが、ここでついでに触れることにしよう。①自分の国の言葉に聞こえて、異言の意味が全部わかる。五旬節の日の体験はそうである。②全部聞いた後、異言の内容が示される。③異言を語った後、全部を一つずつ解いていく。但し、異言を語っている最中は、その意味がわからなかった。④異言を語る者は、異言を一句ずつ解いていく。語る時は理解できないが、その後思わず解けるようになる。⑤意味がわかり、しかも誰が聖霊に感動されて解くのかわかる。思いがけなく、その人は立ち上がって解いた。解かれた言葉は、自分が心で啓示を受けた内容と一致する。⑥自分にはその意味がわからないが、神に感動された者に解いてもらう。

ご参考に、本教会が異言を解いた経験を述べよう：

台湾台中縣和平鄉博愛村の裡冷教会の陳阿貴兄弟の証である。1959年7月26日に、陳兄弟は突然「破傷風」にかかった。すぐに治療には行ったが、三人の医者とも途方に暮れた。それで、医薬に頼らないと決意して、主が憐れんで下さるようにとしきりに祈った。教会の信者たちも心を合わせて一緒に助祷した。その時、林秋菊姉妹は原住民のタイヤル語で異言を解いて言った、「この家に罪

がある」。そこで悔い改めてまた祈ったが、ききめがなかった。林姉妹はまた異言を解いて言った、「祈っている人の中に、死に至る罪を犯した者がいる。すぐ追い出しなさい。その人に祈らせてはいけない」。そしてよく調べたところ、その通りであった。皆は御霊の指示に従い、罪を犯した者をその場から離れさせてから、改めて祈った。結局、陳兄弟は呼吸がおさまり、顔色もだんだんよくなった。翌朝祈る時、林姉妹はまた異言を解いて陳兄弟に言った、「今、あなたの病を癒そう」。本当にその日にお粥が食べられるようになり、五日後に、木のように硬かった体が座れるようになり、歩けるようになり、すっかり回復した。三度異言を解いたこの経験は、林姉妹が語り、解いたものであるが、異言を語っている時、本人にはその意味がわからなかった。

1927年、本教会が台湾に伝えられたばかりの頃、台中教会は郭ピレモン長老が経営した丸中運輸会社の二階にあった。その時、伝道者が欠けていたので、説教する人材を養成すすため、必要に応じて、順番に、信者に説教の練習をさせ、それから伝道者の指導を受けることにしていた。ある安息日の午後の礼拝は楊貴川兄弟の番になった。集会の最後の祈りが終わって、楊兄弟は講壇を離れようとしたところ、思わず銭アベル執事に向かって異言を語った。言葉はひとつひとつはっきりでした。楊兄弟は指で銭執事を指して、責めるような激しい口調であったが、その意味がわからず、どうして興奮しているのかも知らなかった。それで、銭執事は自ら立ち上がって異言を解いた、「今聞いたのは福州語であります。彼がわたしに向かって言ったのは、『あなたは台湾にいるが、故郷のことばかり気を配っている。台湾で福音伝道に専念しなさい』です」。銭執事は福州の人であるが、一心に郷里のことを気に掛けて、主に奉仕する気力がなかった。責められた彼は、深く悔い改めて、熱心になり、御働きに一心に携わるようになった。楊兄弟は台湾の人であるので、当然福州語は話せない。銭執事に語ったものを、会衆は確かに異言に聞こえた。しかし、御霊によって銭執事は福州語に聞こえたので、適時に目を覚まし、託された使命を成し遂げら



れた。

同年のある晩、黄ギデオン長老が説教をした。集会後、会衆が聖霊を求めている時、楊貴川兄弟は聖霊の感動を受け、自分が語った異言を誰かに解いてもらう必要があると感じた。語った異言は、一句ずつはっきりしていた。彼はその意味がわかり、解ける者は誰かさえ知った。祈りが終わったら、解くべき信者は聖霊に催促されたが、立って解く勇気がなかった。そこで、楊兄弟は立って全会衆に話した、「先ほどわたしが祈った時に語った異言を、ある兄弟は解くことができます。恐れなくて、勇敢に解いてください」。すると、楊泉兄弟（貴川の父親）は立って異言を解きはじめた、「エノクは信仰によって、死を見ないように天に移された」。聖霊はこの出来事をおして、聖霊を受けたら異言を語る事に対する楊泉兄弟の疑いを解いて、信仰を固めたのである。

何か月後のある晩、集会が終り、皆が聖霊を求めているところ、清水教会の蔡謀煌兄弟が入ってきた。聖霊は楊貴川兄弟をおして、自ら語った異言を解かせた、「あなたがたの内に、ある者は罪を犯しました」。後に調査した結果によって、清水教会の蔡謀煌兄弟が第七戒を犯したことがわかった。それで、除名の処分をした。今回の出来事は教会を清めるためであった。

1947年、韓国の教会が設立されて間もない頃、信者は少なく、専任の伝道者もいなかった。信者は聖書に詳しくなく、霊の糧に飢え渴いた状態であったため、各教派の異端を改正するのに困難を感じた。目前の必要に応じて、聖霊は自らの意志によって、異言を解く賜物を金泉教会の白仁徳姉妹に授けられた。そこで、九月から数年の間、教会が成長するまで、彼女はよく異言を解いて教会の徳を高めた。白姉妹が異言を解いた状況は次のようである：①最初は異言で祈ったが、後は口調が変わり、異言で説教することになった。②まず、異言で説教し終え、それから一句ずつ韓国語で解いた。③自分で語り自分で解いた。



語る時は意味がわからないが、解いてはじめてわかった。④解く時は、誰でもわかるように、はっきりした発音で、言葉を一つずつゆっくりと言った。⑤解いたものは聖句と聖書の章節である。まず聖句、それから聖書の章節を順序よく解いていった。⑥その場にいる者が聖書を対照したことにより、聖書どおりに一字も漏れていないことがわかった。しかし、異言を解いた者は聖書に詳しくなかった。⑦解いた聖句は、全部当時の需要にぴったりあっていた。参考までに、その体験のいくつかを次に述べよう：

1947年9月のある日、裴相龍兄弟と朴昌煥兄弟は聖霊及びバプテスマの問題について、金泉にある長老教会で、その教会の長老と論じ合っていた。その時、白仁徳姉妹は主の助けを求めるために「校洞」の山に登って祈っていた。ほかの信者たちも一緒に祈っていた。白姉妹は異言を解いた、「すべての人を照す真の光があつて、世にきた。彼は世にいた。そして、世は彼によってできたのであるが、世は彼を知らずにいた。彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受け入れなかった。しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」(ヨハ1:9~12)。洪鐘培兄弟は直ちに山から下りて、裴兄弟と朴兄弟に連絡を取った。真の教会は主の体である、主が世に排斥されたように、真の教会も世に排斥される、ただし真の教会が宣べ伝える教を受け入れる者は幸いである、主から權威が授かり、神の子となるからであると、洪兄弟は証をした。

1949年2月に、金泉教会の近くの小さな川でバプテスマが行われた。バプテスマが終わって、教会に戻って祈ったところ、白姉妹は異言を解いた、「あなたがたはまた、彼にあつて、手によらない割礼、すなわち、キリストの割礼を受けて、肉のからだを脱ぎ捨てたのである。あなたがたはバプテスマを受けて彼と共に葬られ、同時に、彼を死人の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、彼と共によみがえらされたのである。あなたがたは、先には罪の中



にあり、かつ肉の割礼がないままで死んでいた者であるが、神は、あなたがたをキリストと共に生かし、わたしたちのいっさいの罪をゆるして下さった」(コロ 2:11~13)。これでバプテスマに罪赦し、またキリストと共に死に、葬り、よみがえる効果がある事を悟らせた。

裴相龍兄弟は、1941年に日本の大阪で信仰を受けて、韓国教会の初めての種である。彼は1945年1月に帰国して、熱心に宣教し、韓国教会の設立のために熱心に祈った。しかし、1951年に宣教を止めて、事業の経営に力を入れた。約二年後、経営が失敗に終わり、たくさんの負債をして、経済的に困った状態に陥り苦痛であった。ある晩、道端で祈り、詩篇94篇12節を読んだが、大いに感動され、後悔の涙を流した。半年後、白姉妹の解いた異言に教えられた、「そのことを思って、今しばらくのあいだは、さまざまな試練で悩まねばならないかも知れないが、あなたがたは大いに喜んでいる。こうして、あなたがたの信仰はためされて、火で精錬されても朽ちる外はない金よりもはるかに尊いことが明らかにされ、イエス・キリストの現れるとき、さんびと栄光とほまれとに変るであろう。あなたがたは、イエス・キリストを見たことはないが、彼を愛している。現在、見てはいないけれども、信じて、言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれている。それは、信仰の結果なるたましいの救を得ているからである」(Iペテ 1:6~9)。裴兄弟はこれによって大いに慰められ、再び福音伝道に専念した。

金泉教会の朴昌煥兄弟は、平素より邪念を抱き、女性信者に対して体裁のよくない仕草がよくあった。1953年のある日(裴相龍兄弟が指示を受け、慰められた同日)、白姉妹は異言を解いて彼に示した、「なお、あなたがたは時を知っているのだから、特に、この事を励まねばならない。すなわち、あなたがたの眠りからさめるべき時が、すでにきている。なぜなら今は、わたしたちの救が、初め信じた時よりも、もっと近づいているからである。夜はふけ、日が近づい

ている。それだから、わたしたちは、やみのわざを捨てて、光の武具を着けようではないか。そして、宴楽と泥酔、淫乱と好色、争いとねたみを捨てて、昼歩くように、つつましく歩こうではないか。あなたがたは、主イエス・キリストを着なさい。肉の欲を満たすことに心を向けてはならない」(ロマ 13:11~14)。しかし、朴兄弟は知らないふりをして、確実に悔い改めようとしないうえ、三年後に第七戒を犯して教会から除名された。

問題

- 一、聖霊のバプテスマとは何か。
- 二、前の雨の聖霊に関する記録は、なぜ五回しかなかったのか。
- 三、聖霊を受けた保証を述べよ。
- 四、異言の働きを述べよ。
- 五、異言の祈りと異言の説教はどう異なるか。
- 六、神はなぜ五旬節を聖霊降臨の日とされたのか。
- 七、次の誤説を正してみよ。
 - ① 真の信者はすべて聖霊があるが、聖霊のバプテスマがあるとは限らない。
 - ② 洗うというのはわたしたちをある元素の中に入れることであるが、満ちるというのはある元素をわたしたちの中に入れることである。だから、「洗う」という文字自体がすでに、内で聖霊を受けることを一切排除するという意味になる。
 - ③ 聖霊に満たされる者は、必ずしも霊のバプテスマを受けた経験があるとは限らない。
 - ④ 聖書に、個人が聖霊のバプテスマを受けた記事は載っていない。
 - ⑤ 聖霊のバプテスマは、一種の危機的な体験である。
 - ⑥ 聖霊を受けたことは、必ずしも感覚があるとは限らない。
 - ⑦ サマリヤの人の体験は、聖霊を受けても必ずしも異言を語るのではないことを証明する。



- ⑧ ユダヤ人が、コルネリオ一家が異言を語ったのに驚いたことは、異言を語ることが聖霊を受けるのに必要な証拠ではないことを証明する。ニコラオ、宦官、サマリヤ人は皆異邦人だからである。
- ⑨ 異言を語ることが一時的なしるしである。
- ⑩ 異言体験が、感情抑制力に欠如したことから生じたと、パウロは説明した。
- ⑪ 「みんなが異言を語るのだろうか」という一言は、異言を語ることが霊の種々の賜物の一つであることを証明する。
- ⑫ 異言問題に対応する際、パウロはそれが制限された劣等の賜物だと教えている。
- ⑬ 多くの霊恩派の教会は、大声で叫んだり、霊の歌を歌ったりするので、神によるものではないと証明できる（I コリ 14:33）。
- ⑭ 会衆と一緒に異言を語るのを、パウロは反対した。ただ二人か三人が順番に語り、しかも解く者がいる時のみ許された（I コリ 14:27～28）。
- ⑮ 五旬節の日に聖霊が降って、弟子たちが語った異言は、地上の国々の言葉である。



第十章 聖霊の感動

1900年に後の雨の聖霊がアメリカに降り、世界中のあちこちでペンテコステ運動がブームになって以来、世の中の教会は千年余りの眠りから突然目が覚めた。その光景は、鏡のような静かな湖に巨大な石が投げ入れられたように、静寂を破った湖面に、さざ波が輪を描いて広がっていくようなものであった。聖霊のないあらゆる教会にとっては、確かに、それは誰も思いつかない試練であった。聖霊の活発な働き及び明白な召しは、彼らの信仰の試金石となったからである。この試練を受けた後、長期に渡って霊の糧と命の水に飢え渴いた一部の信心深いクリスチャンは、聖霊の呼び掛けを聞いた後、続々と真の教会に入り、一つの群れとなった。主の預言はこれで成就された(ヨハ 10:16)。ほかのあるクリスチャンは、聖霊のバプテスマを求めようとしただけではなく、あざ笑ったり誇ったりして、至る所で真理に敵対し、聖霊が自ら設立された真の教会を滅ぼそうとした。その原因を究めれば、謙虚さに乏しく、聖霊の感動を聖霊のバプテスマと勘違いし、間違った根拠をもって自分の誤説をごまかそうしたからである。

第一節 普遍的な誤った観念

「そこで、あなたがたに言うておくが、神の霊によって語る者はだれも『イエスはのろわれよ』とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』と言うことができない」(Iコリ 12:3)。

聖霊のない一般の教会の多数は、この箇所を引証して言い訳する。即ち、イエスが主であると認め、イエスがのろわれよと言わない以上、聖霊が自分のうちにとどまっていることである。しかし、ここで言う「神の霊によって」を、



文語体聖書では「神の御霊に感じて」と訳している。すなわち神の御霊の感動であって、イエスが約束された「聖霊がいつまでもあなたがたの共におられる」ことではない(ヨハ 14:16~17)。なぜならば、すべて聖霊を受けた者は必ず聖霊の感動を受けるが、聖霊の感動を受けた者は、必ずしも聖霊を受けたのではないからである。サマリヤの町でピリポが宣べ伝えた神の国とイエス・キリストの名を信じて、バプテスマを受けた者は、必ずイエスは主であると言う。イエスがのろわれよと言う者は絶対にないのである。しかし、聖書の記録によれば、彼らはただ主イエスの名によってバプテスマを受けただけで、聖霊はまだだれにも降っていなかった。使徒が手を彼らの上においたところ、彼らは聖霊を受けた(使徒 8:12~17)。エペソの弟子たちも信仰に入った時は聖霊を受けていなかった。パウロが主イエスの名によって彼らにバプテスマを授けた時さえ、だれも聖霊を受けていなかった。パウロが彼らの上を手をおいた時、はじめて聖霊が彼らの上に降り、それから、彼らは異言を語ったり、預言をしたり出した(使徒 19:1~6)。もちろん、聖霊を受ける前に、エペソの弟子たちは皆、イエスは主であると言い、イエスはのろわれよと言う者はなかった。

▲ウイスロフ (F. Wisloff) は「わたしは聖霊を信じる」(戴懐仁・王永生合訳)の329ページに言った、「すべての信者に神の霊が宿っておられる。もしそれを否定するならば、あなたはだれによって目覚めたのか。だれによって自分の罪を告白したのか。だれの催促によってキリストを捜し求めたのか。これらはすべてあの聖霊によることではないのか」。

われわれの答え: ①サマリヤの町で福音を受けた者(使徒 8:12~17)、及びエペソの弟子たちの経験は(使徒 19:1~6)、この憶測を否定したのである。②なぜなら、イエスを信じる決心をする前に、彼らはすでに目覚められ、自分の罪を告白し、またある力の催促によってキリストを捜し求めたからである。ただし、使徒の按手を受ける前に、聖霊はだれにも降らなかった。彼らはイエスの名によってバプテスマを受けただけで聖書に書いてある。③人の目を覚まし、

罪を告白させ、キリストを捜し求めるように催促することなどは、聖霊が人を主の前に導く感動の働きに過ぎないのだ。だから決して聖霊を受けた証拠ではないので、両者を混同してはいけない。

▲ウイスロフはまた同じ本の330ページにコリント人への第一の手紙3章16節を引証して言った、「コリント教会の信者は十分悟らなくても、御霊はそのうちに宿っておられる」。今日のクリスチャンはすでに聖霊を受けたことを十分悟らなくても、神の霊はそのうちに宿っておられると主張したのである。

われわれの答え：①サマリヤの町に居る信者がバプテスマの後、聖霊を受けてないと使徒たちはわかったので、彼らの上に手をおいて祈ったところ、聖霊が人々に授けられた。それを見た魔術師のシモンは、不思議のあまりに金を差し出し、使徒たちにその超然たる賜物を買おうとした(使徒8:12~19)。②ペテロがコルネリオの家で説教をし終えないうちに、それを聞いたすべての人たちに聖霊が降った。割礼を受けている信者で、ペテロについてきた人たちは、異邦人たちにも聖霊の賜物が注がれたのを見て、驚いた。そこでペテロは言い出した、「この人たちがわたしたちと同じように聖霊を受けたからには、彼らに水でバプテスマを授けるのを、だれがこぼみ得ようか」。こう言って、ペテロはその人々に命じて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けさせた(使徒10:44~48)。③パウロがエペソに来た時、ある弟子たちに出会って、彼らに、「あなたがたは、信仰に入った時に、聖霊を受けたのか」と尋ねたところ、「いいえ」と答えた。彼らが受けたバプテスマは正しくないと知って、パウロは主イエスの名によってバプテスマを受けさせた。そして、彼らの上に手をおくと、聖霊が彼らに降り、それから彼らは異言を語ったり、預言をしたりし出した(使徒19:1~6)。④聖霊が人に降る時、この顕著なしるしは、本人がわかり、そばにいる人も見えることなのである。なぜ、コリント教会の信者は十分悟らないと言えるのか。⑤「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか」(Iコリ3:16)とパウロが言ったのは、コリント



の信者がすでに聖霊を受けたことをあまり悟らないのではなく、自覚し、自分を愛し、一心に清い身を守り、聖霊を悲しませてはいけないと教えたのである。

⑥従って、パウロはその次に戒めた、「もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである」(I コリ 3:17)。

▲ウイスロフは同じ本の 347 ページにまた言った、「心が罪に悩んでいるのは、聖霊がうちに宿っていることを証明する」。

われわれの答え：聖霊がうちに宿っていると、必ず罪のために自分を咎めさせ、心を刺すのは否認できない事実である。しかし、罪のために心が苦しんでいる者は、必ずしも聖霊が宿っているのではない。第一、良心は律法の働きを持っている。それによって人は是非の区別がつき(ロマ 2:14~15)、善悪をわきまえ、罪のために悩む(ロマ 7:21~24)。第二、人も聖霊の感動によって、自分の罪を咎め、心が刺される。そして、解決方法を見出し、ひいては悔い改めて、イエスを救い主として受け入れる(使徒 2:37~38、41)。以上に述べたパウロの自白とユダヤの外国居留者の呼び求めは、聖霊を受ける前の経験であった。心が罪のために苦しむのは、聖霊が宿っている証拠とは限らないことがこれでわかるであろう。

▲王明道は「聖書の光の中の霊恩運動」の 15 ページに書いた、「異言を語ったことのない事は、即ち、聖霊を受けたことのない事というのは、いかに勝手な判断であろう。昔と現在において、世界の方々に信仰深く主を愛する聖徒はどれだけいるのか。また、心身ともに献げて神に仕えた偉大な働き人はどれだけいるのか。彼らは異言を語らないが、まさかそれで聖霊を受けていないと言うのか」。

われわれの答え：①「信仰深く主を愛する信者と、心身ともに献げて神に仕える働き人は、異言を語ったことがなくても、すべて聖霊を受けた」という

言い方はいかに勝手な判断であろう。もちろん、聖霊に満たされた者は、信心深く主を愛し、身も心も喜んで主に仕えるに決まっている。ただし、聖霊に感動を受けた者でもこの現れがあるのだから、聖霊を受けた者に限らない。②コルネリオは信心深く、家族一同と共に神を敬い、民に数々の施しをなし、絶えず神に祈りをしていた。彼が正しい人で、神を敬い、ユダヤの全国民に好感をもたれていると彼の僕らも証した(使徒 10:1~2、22)。施しをなし、人を愛することをもって比較すれば、コルネリオに勝る者もあまりいないであろう。それにしても、その時彼は聖霊を受けたとは認められていなかった。彼は異言を語った時に、聖霊を受けたからである(使徒 10:44~46)。③アポロは聖書に精通し、しかも雄弁な人であった。彼は主の道に通じており、霊に燃えてイエスのことを詳しく語ったり教えたりしていたが、ヨハネのバプテスマしか知らなかった(使徒 18:24~28)。心身を献げて神に仕えることに関し、アポロの熱心さと勇氣は、古今を通じて有名な宣教師には劣らないであろう。しかし、プリスキラとアクラに招き入れられる前は、すでに聖霊を受けたとは思われない。その時彼はヨハネのバプテスマしか知らなかった。霊のバプテスマは主イエスによるものだからである(マタ 3:11、ヨハ 1:32~33、使徒 2:33)

第二節 各時代における聖霊の感動の働き

旧約時代から新約時代にかけて、選民の歴史において、聖霊が働きかけて感動を受けさせたことは聖書のあちらこちらに書かれている。それによって、わたしたちは神が選ばれた子らに対する愛の広さ、長さ、高さ、深さに感謝せざるを得ない。

以下に各時代における聖霊の働きによって感動を受けたことの概要を分けて述べるので、聖霊のバプテスマとの区別がいったいどこにあるかを学ぼう。



一、旧約時代

神はアダムを創造して、一つの律法を守らせられた(創 2:16~17)。それは地上で神によって治められる団体、即ち神の国を設けられるためであった。神にはより多くの人を創造される力があるが、ただ一人を造られたのは、神を敬う子孫を得させ、この国の規律を守らせられるためであった(マラ 2:15)。しかし、罪がこの世に入り、こうしてすべての人は罪を犯した(ロマ 5:12)。人は神に属する特性を失い、倫理道徳が落ちて、神の子でさえも俗化された(創 4:8、19~24、6:1~4)。その時、神は言われた、「わたしの霊はながく人の中にとどまらない。彼は肉にすぎないのだ」(創 6:3)。文語訳は、「エホバいひたまひけるは、我霊永く人と争はじ、其は彼も肉なればなり。…」となる。KJ 訳は「My spirit shall not always strive with man, for that he also is flesh」となるが、文語訳の意味と完全に一致している。「我霊永く人と争はじ」とは、神の霊が永遠に人を気にかけて、ほしいままにやらせることを意味する。「其は彼も肉なればなり」とは、神の霊が永遠に人と争わない理由を述べた。神の子らが俗化する前に、ずっと聖霊を感じ、純粋に信仰を守ってきたことがわかる。ただその後、人の子らが二の舞を踏んだことによって、聖霊を感じるものがなくなり、放縦な生活に走ってしまったわけである。

その後、聖霊の感動の働きかけは、普遍性の時期より特殊性の時期に入った。即ち、必要な時に神が選ばれた者を感動させ、神聖な任務を果たさせることである。

1、預言者を感動させる

聖書曰く、「それでもあなたは年久しく彼らを忍び、あなたの預言者たちにより、あなたのみたまをもって彼らを戒められました。彼らは耳を傾けなかった。彼らを国々の民の手に渡されました」(ネへ 9:30)。「なぜなら、預言は決して人間の意志から出たものではなく、人々が聖霊に感じ、神によって語



ったものだからである」(Ⅱペテ 1:21)。旧約時代における聖霊の感動の働きかけの中で、最も顕著で且つ普遍的なのは、歴代の預言者を感動させることによって、主の言葉を選民に宣べ伝え(サム上 3:21)、正しい道に導いたことである。

例えば、①モーセに臨み、民を管理する重い責任を負わせた(参考：民 11:16～17)。②エリヤに霊を感じさせた。エリヤは民を偶像崇拜から導き出して、神に立ち返らせ、勇敢にバアルの預言者たちを皆殺しにした(列王上 18:21～40)。③エリヤが得た力の二つの分をエリシャに継がせた(列王下 2:9～15)。④御霊の感動を受けたミカヤは皆と同じように良い事を言って、王の歓心を買うことはせず、ただ神の啓示に従って預言した(列王上 22:13～23)。⑤神の霊がアザリヤに臨んだ。彼はアサ王と民たちを導いて、憎むべき物を除き、主の祭壇を再興し、心をつくして誓いを立て、精神をつくして主を求めた(歴代下 15:1～15)。⑥ヤハジエルに臨んで、ヨシャパテ王と民たちが勇気をもって敵を迎えるように勧めた。成敗は主により、主はともにおられると伝えさせた(歴代下 20:14～19)。⑦聖霊はイザヤをとおして、民たちに「この民の心は鈍くなり、その耳は聞えにくく、その目は閉じている、主の言葉を悟らない」と語った(使徒 28:25～27、イザ 6:9～10)。⑧主の名によって語るべきことを、心に燃える火が押えきれないほどエレミヤを感動して語らせた(エレ 20:7～10)。⑨エゼキエル的心里に入って、イスラエルの反逆を戒め、滅ぼされないように悪から離れよと勧めさせた(エゼ 2:1～7、3:16～21)。⑩ダニエルがペルシャザル王のために、壁に書かれた神の文字を解き明かし、その死と亡国をあらかじめ示すように感動させた(ダニ 5:5～31)。⑪イスラエルの罪を戒めるように、ミカ預言者に豊かな力と公平と才能を与えた、などである(ミカ 3:8)。

2、士師を感動させる

ヨシュアが死んだ後、イスラエルは指導の中心人物を失った。彼らは神が賜った聖地で、衣食が満ち足りる安定な生活を送っていたが、神に感謝し神を恐



れることを忘れた。その代わりに、異邦の悪い風習に従い、その道を乱し、神が憎まれた偶像まで拝んで、万民と聖別しなかった。正しく慈愛なる神は、彼らの反逆を懲らしめ、彼らが確実に悔い改めるように促し、謹んで律法を守らせるために、しばしば異邦人を興して、彼らを打たせられた。しかし、罰せられて、罪を認めて主に呼ばわれれば、主はいつもその祈りを聞き入れ、霊の感動によって士師たちを通し、彼らを敵の手から救われた。

例えば、①主の霊がオテニエルに臨み、彼はクシャン・リシャタイムに勝って、四十年の間、国の太平を得た(士 3:9～11)。②主の霊がギデオンに臨み、ギデオンはラッパを吹いて、イスラエル人を集め、彼に従わせた。そして共に、ミデアンに勝つことで、四十年間の太平を得た(士 6:34～35、7:19～25、8:28)。③主の霊がエフタに臨み、エフタは二十の町を撃ち破り、アンモン人を攻め伏せた(士 11:29～33)。④主の霊の感動を受けたサムソンは、子やぎを裂くように、若いししを素手で裂いた。またろばの新しいあご骨で一千人のペリシテ人を殺し、イスラエル人に救いを施した(士 14:5～6、15:12～18)。

3、祭司を感動させる

祭司は神に専ら仕えるために立てられた者である。その務めは神と人とのとりなしをし、自分自身と民との過ちのために、祭壇の上で供え物といけにえとをささげるものである(レビ 1:3～9、へブ 5:1～3、9:6～7)。最初は家長や族長の兼任であり、例えばノア、アブラハム、イサク、ヤコブやヨブなどは直接に燔祭をささげた(創 8:20、22:13、26:25、33:18～20、ヨブ 1:5)。律法時代に至ってからは、世襲制度となり、アロンの子孫は代々受け継いだ(出エジ 29:9、29、40:12～15、民 25:11～13)。

祭司が受けた聖霊の感動は、預言者と士師ほど多くはなく、聖書に一か所しか記されていない。即ち、民が主の戒めを犯したことを責めるように、ゼカリ



ヤを民の前に立たせた。そしてゼカリヤはこのために石で撃ち殺された(歴代下 24:20~22)。その原因は、およそ祭司の職務はあまりにも単純で、ただ幕屋で主に仕え、決まった宗教儀式を行っていただけだからであろう。

4、王を感動させる

イスラエルの王国はサウルから始まった(サム上 19:17、10:1)。サウルが預言者サムエルに油を注がれる前は、イスラエルに王はなかった。神ご自身が王として彼らを治められた。ほかの国々と同様に、王に治めてもらおうと彼らが求めた理由は、①サムエルの二人の息子が父の道を歩まないで、利に向かい、まいないを取ってさばきを曲げたからである(サム上 8:1~5)。②敵に攻められ、生活は脅かされ、神を王としたくなかったからである(サム上 8:7、12:12~18)。

サウルが主の命令に背き、見捨てられた後(サム上 13:8~15、15:10~23)、神はご自身の心になかったダビデを選び、サムエルを遣わして彼に油を注がれた(サム上 16:1~13)。ダビデは年がすすんで老いたが、祭司ザドクに命じ、ギホンで息子のソロモンに油を注いで王の位に座させた(列王上 1:28~40)。それで世襲制となった。ソロモンの晩年は、外国の女を愛し、偶像を拝んだ。しかもその子レハベアムは、老人たちの忠告を捨てたため、国の分裂という局面をもたらした(列王上 11:1~13、12:1~20)。

聖霊がイスラエル王を感動させた働きも、預言者と士師ほど多くはなかった。聖書はただサウルとダビデだけに触れた。その中でも、ダビデの方は回数が多かった。サウルにあったのは、①彼が預言者たちと共に預言し、新しい人と変わったことである(サム上 10:6~10)。②選民を率いてアンモン人を撃ち破り、恥を雪いだことである(サム上 11:1~11)。ダビデにあったのは、①油を注がれた日から後、主の霊にはげしく臨まれた(サム上 16:13)。②キリストはとこしえまで王となり、万民は一人の牧者につくことを預言した(サム下 23:1~5、



参考：詩 89:20～29、エゼ 37:24～28)。③御霊より主の宮の計画を示されたが、その計画をソロモンに授けた(歴代上 28:11～12)。④御霊の感動を受けて、キリストを主と呼び、キリストが敵に勝たれると預言した(マタ 22:42～44、詩 110:1)。⑤ユダの裏切りを預言した、などのことである(使徒 1:16、詩 41:9)。

5、その他

旧約時代における聖霊の感動の働きは、神が選ばれた預言者、士師、祭司と王たち以外に、必要に応じて首領、勇士や一般の選民まで及ぶことも常にあった。

例えば：①ヨセフに知恵を与えて、パロの夢を解き明かさせ、エジプトに臨む重大なことを預言させた(創 41:25～32、37～41)。②裁縫師に知恵を与えて、アロンのために聖なる服を作らせた(出エジ 28:2～3)。③ベザレルに神の霊を満たして、知恵と悟りと知識と諸種の工作に長ぜしめ、工夫を凝らした金、銀、青銅の細工をさせ、また宝石を切りはめ、木を彫刻するなど、会見の幕屋と聖なる器などを作らせた(出エジ 31:2～5、35:30～33)。④イスラエルの七十人の長老たちに、モーセと共に民の重荷を負わせ、彼らに霊を与え、預言をさせた(民 11:16～17、24～25)。⑤エルダデとメダデに、宿営で預言をさせた(民 11:26～29)。⑥ヨシュアに知恵の霊を満たし、モーセのような栄えを与え、モーセの後任として引き継がせ、イスラエル人を治めさせた(民 27:15～20、申 34:9)。⑦霊が三十人の長アマサイに臨まれたので、アマサイは主がダビデを助けられることを悟り、喜んでダビデの部隊の長になって、勇士たちを率いた(歴代上 12:18)。⑧ユダにおいては、神の手が人々に一つの心を与えて、王とつかさたちが主の言葉によって命じたことを行わせた(歴代下 30:12)。⑨エリフに言葉を満たせ、だれをもかたより見ることなく、直接ヨブの過ちを指摘させた(ヨブ 32:15～22)。



聖霊の感動と聖霊のバプテスマは同じ聖霊のわざであるが、その効果は異なる。

聖霊の感動の特徴は、①だれかに使命を果たさせる時のみ、その人の上に臨む。使命が終わると、離れる(エゼ 3:22、24、37:1)。②人に、死を恐れずに勇ましくさせるが、使命が終わると、普通の人と同じように弱くなる(列上王 18:17~46、19:1~14)。③神の証印を押して、その人は神がつかわした奴隷であると認める(ロマ 8:15、エゼ 2:1~3)。④異言を語るができない。

聖霊のバプテスマの感動の特徴は、:①永遠に人と共におられ、人を捨てて孤児とはしない(ヨハ 14:16~18)。②人の一生を変える。絶えず人に力を加えて、何事もできるようにさせる(使徒 4:19~20、5:40~42、ロマ 8:2、ガラ 5:16、エペ 3:16、ピリ 4:13)。③人が神の子である身分、キリストと共同の相続人、キリストと栄光を共にすることを証する(ロマ 8:15~17)。④必ず人に異言を語らせる(使徒 10:44~46、19:6)。

旧約時代において、必要な時、聖霊はしばしば預言者、士師、祭司や王などに感動を受けさせて、選民を正しい道に導かせ、信仰の復興を促した。しかし、人の心ははなはだしく悪に染まっていて治せないため(エレ 17:9、13:23)、長く続かない。聖霊はすべての選民に注ぎ、石の心を取って肉の心を与え、その一生を変える。もしそうでなければ、人は神に立ち帰り、謹んで定めとおきてを守ることはできない。この普遍的な聖霊の注ぎかけは、正に歴代の預言者たちが預言したものである。神はその霊をあらゆる選民のうちに置いて、定めとおきてを彼らの心の板に書かれると預言者たちは言った(エゼ 36:26~27、エレ 31:31~34)。また、その時、主はその霊をすべての肉なる者に注ぐと言った。それは即ち年齢、性別、階級と部族を問わないことである(ヨエ 2:28~29、ガラ 3:28)。すると、その時、「主の民がみな預言者となり、主がその霊を彼らに



与えられる」というモーセの願いは（民 11:29）、完全に実現できるであろう。

二、前の雨が降る前

前の雨が降られる前は、旧約時代から新約時代にかけての過渡期であった。救い主なるイエス・キリストが来られると、人類の新紀元の幕開けが宣告され（マル 1:14～15、ヨハ 4:21～23）、律法は十字架の功によって終り（マタ 11:13、コロ 2:14～17、ヘブ 8:7、13、9:10）、楽しい恵みの時代に入ったのである（ヨハ 1:17）。この時期においては、イエスが歴代の預言者たちが預言したメシヤであり、全人類の救い主であることを証するため、聖霊は各階層の信心深い人を主の証人とさせ、主の身分とやがて全うされる救いの恵みを公けにされた。

1、イエスの降誕について

マリヤは自分がみごもって男の子を産み、その子をイエスと名付けよと御使に示された後、立って、ザカリヤの家へ行って、エリサベツにあいさつした。エリサベツがマリヤのあいさつを聞いたとき、その子が胎内でおどった。エリサベツは聖霊に満たされ、声高く叫んで言った、「あなたは女の中で祝福されたかた、あなたの胎の実も祝福されています。主の母上がわたしのところにきてくださるとは、なんとという光栄でしょう。ごらんなさい。あなたのあいさつの声がわたしの耳にはいったとき、子供が胎内で喜びおどりました。主のお語りになったことが必ず成就すると信じた女は、なんとさいわいなことでしょう」（ルカ 1:30～45）。エリサベツがマリヤの胎児を主と呼び、マリヤを祝福し、神が御使いをとおしてマリヤに話した事はことごとく成就されると信じたのは、聖霊の感動によるものであった。

マリヤは言った、「『わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救主なる神をたたえます。この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました。今からのち代々の人々は、わたしをさいわいな女と言うでしょう、力あるかたが、わたしに大



きな事をしてくださったからです。そのみ名はきよく、そのあわれみは、代々限りなく主をかしくみ恐れる者に及びます。主はみ腕をもって力をふるい、心の思いのおごり高ぶる者を追い散らし、権力ある者を王座から引きおろし、卑しい者を引き上げ、飢えている者を良いもので飽かせ、富んでいる者を空腹のまま帰らせなさい。主は、あわれみをお忘れにならず、その僕イスラエルを助けてくださいました、わたしたちの父祖アブラハムとその子孫とをとこしえにあわれむと約束なさったとおりに』(ルカ 1:46~55)。マリヤがエリサベツに話したことも、聖霊の感動によるものであった。聖書に明白な記載はないが、彼女の言葉によって、このように判断を下すことができるであろう。

2、イエスの功績について

バプテスマのヨハネが生れて、その父ザカリヤは聖霊に満たされ、ヨハネとイエスが将来成し遂げる功績について、預言した、「主なるイスラエルの神は、ほむべきかな。神はその民を顧みてこれをあがない、わたしたちのために救の角を僕ダビデの家にお立てになった。古くから、聖なる預言者たちの口によってお語りになったように、わたしたちを敵から、またすべてわたしたちを憎む者の手から、救い出すためである。こうして、神はわたしたちの父祖たちにあわれみをかけ、その聖なる契約、すなわち、父祖アブラハムにお立てになった誓いをおぼえて、わたしたちを敵の手から救い出し、生きている限り、きよく正しく、みまえに恐れなく仕えさせてくださるのである。幼な子よ、あなたは、いと高き者の預言者と呼ばれるであろう。主のみまえに先立って行き、その道を備え、罪のゆるしによる救をその民に知らせるのであるから。これはわたしたちの神のあわれみ深いみこころによる。また、そのあわれみによって、日の光が上からわたしたちに臨み、暗黒と死の陰とに住む者を照し、わたしたちの足を平和の道へ導くであろう」(ルカ 1:67~79)。イエス・キリストが生れ、イスラエルに救いを施し、神がアブラハムに約束されたことを成し遂げ、また自分の子であるヨハネが神の預言者と称し、イエス・キリストの御前に先立って



行き、その道を備える事を、ザカリヤが預言できたのは、聖霊の感動を受けたことによる。

その時、エルサレムにシメオンという名の人がいた。この人は正しく信仰深い人で、イスラエルの慰められるのを待ち望んでいて、聖霊が彼に宿っていた。彼は御霊に感じて宮に入った。律法に定めてあることを行うため、両親がその子イエスを連れて入ってきたので、シメオンは幼な子を腕に抱き、神をほめたたえて言った、「主よ、今こそ、あなたはみ言葉のとおりはこの僕を安らかに去らせてくださいます、わたしの目が今あなたの救を見たのですから。この救はあなたが万民のまえにお備えになったもので、異邦人を照す啓示の光、み民イスラエルの栄光であります」。そして母マリヤに言った、「ごらんなさい、この幼な子は、イスラエルの多くの人を倒れさせたり立ちあがらせたりするために、また反対を受けるしるしとして、定められています。——そして、あなた自身もつぎで胸を刺し貫かれるでしょう。——それは多くの人々の心にある思いが、現れるようになるためです」(ルカ 2:25~35)。聖霊の感動を受けたことによって、シメオンは宮に入り、幼な子イエスを見て、待ち望んでいたメシヤであることがわかり、万民の前に備えられた救をほめたたえ、安らかに去らせてよいとし、そしてイエス・キリストが全うされる功績及び受難される事を預言したのである。

また、アンナという女預言者がいた。彼女は非常に年をとっていた。むすめ時代に嫁いで七年間だけ夫と一緒に住み、その後やもめ暮らしをし、八十四歳になっていた。そして宮を離れずに昼も夜も断食と祈りをもって神に仕えていた。彼女も、ちょうどその時近寄ってきて、神に感謝をささげ、そしてこの幼な子イエスのことを、エルサレムの救を待ち望んでいるすべての人々に語り聞かせた(ルカ 2:36~38)。アンナが信心深い女預言者である以上、そのイエス・キリストに対する証言は、言うまでもなく聖霊の感動によるものであった。



3、イエスの身分について

ヨハネがバプテスマを施すところに、イエスが現れられると、ヨハネは証をして言った、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。『わたしのあとに来るかたは、わたしよりもすぐれたかたである。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この人のことである。わたしはこのかたを知らなかった。しかし、このかたがイスラエルに現れてくださるそのことのために、わたしはきて、水でバプテスマを授けているのである」。ヨハネはまた言った、「わたしは、御霊がはどのように天から下って、彼の上にとどまるのを見た。わたしはこの人を知らなかった。しかし、水でバプテスマを授けるようにと、わたしをおつかわしになったそのかたが、わたしに言われた、『ある人の上に、御霊が下ってとどまるのを見たら、その人こそは、御霊によってバプテスマを授けるかたである』。わたしはそれを見たので、このかたこそ神の子であると、あかしをしたのである」(ヨハ 1:29~34)。バプテスマのヨハネは、イエスが神の御子、神の小羊であり、やがて死に、世の罪を取り除き、聖霊でバプテスマを施されることを知って、人々に証をした。それは聖霊の感動を受けたからである。

イエスが世におられる間、多くの者は彼を知らなかった。ある人々はバプテスマのヨハネだと言っている。他の人たちはエリヤだと言い、またエレミヤ、あるいは預言者の一人だと言っている者もあった。しかしペテロは、人々の推測に従わず、イエスに聞かれてすぐに正しく答えて言った、「あなたこそ、生ける神の子キリストです」。このような正確な認識は、聖霊の感動によるほかにはなかった。すると、イエスは彼にむかって言われた、「バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父である」(マタ 16:13~17)。

ある時、イエスは群衆に、ご自身は天から下ってきた命のパンであり、自分の肉を食べ血を飲む者を、終りの日によみがえらせると語られた。弟子たちの



うちの多くの者は、これを聞いて言った、「これはひどい言葉だ。だれがそんなことを聞いておられようか」。そして去って行き、もはやイエスと行動を共にしなかった。そこでイエスは十二弟子に言われた、「あなたがたも去ろうとするのか」。シモン・ペテロが答えた、「主よ、わたしたちは、だれのところにいきましょう。永遠の命の言をもっているのはあなたです。わたしたちは、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています」(ヨハ6:35~69)。ほかの弟子たちが主を知らず去って行った時、ペテロははっきりと認識し、最後まで従おうと決心した。もし聖霊の感動がなければ、それも不可能なことであろう。「そこで、あなたがたに言うておくが、神の霊によって語る者はだれも『イエスはのろわれよ』とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』と言うことができない」(I コリ 12:3)。

以上をまとめれば、旧約時代あるいは前の雨が降る前に、聖霊の人の身における働きはある時に活発であったが、やはり聖霊のバプテスマではなく、聖霊の感動のみが見られる。なぜならば、①キリストが天にのぼり、栄冠をかぶり、神の右に座さなければ、聖霊は普遍的に注ぐことはできないからである。②言が肉体となった任務を果たさなければ、聖霊の任務は始められないからである。③キリストが神の御前で仲保者とならなければ、ほかに助け主が地上に降ることはあり得ない。聖書の教えは次のとおりだからである。「祭りの終りの大事な日に、イエスは立って、叫んで言われた、『だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう』。これは、イエスを信じる人々が受けようとしている御霊をさして言われたのである。すなわち、イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊がまだ下っていなかったのである」(ヨハ7:37~39)。「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう」(ヨハ14:16)。「しかし、わたしはほんとうのことをあなたがたに言うが、わたしが去って行くこ



とは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう」(ヨハ 16:7)。

三、前の雨の時代

前の雨の時代は、神の約束された聖霊がすでに降られた時代であるため、五旬節の日を教会の歴史の第一ページとして、至る所に聖霊の生ける働きの記録が残された。この期間において、聖霊のバプテスマを受けた信者に聖霊の感動があったのは、否定できない事実である。しかし信仰に入ろうとして、まだ聖霊のバプテスマを受けていない者でも、聖霊の感動を受けたのは、特に注意すべき点である。前者に対する聖霊の感動は、彼らに神の御旨を悟らせ、彼らを歩むべき道に導くためにあった。後者に対する聖霊の感動は、イエスが救い主であることを知らせ、悔い改めて福音を受け入れるように彼らを催促するためにあったのである。

1、主に帰するように催促する

「そこで、あなたがたに言うておくが、神の霊によって語る者はだれも『イエスはのろわれよ』とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』と言うことができない」(Iコリ 12:3)。

「イエスはのろわれよ」とは、原文の「anathema leesus」に当たるが、心からののろいの声である。「イエスは主である」とは、原文の「kurios leesus」に当たるが、心からの呼び声である。前者はイエスに敵対する者による言葉である。おおよそ神の霊に感じた者は、絶対このようにイエスに対立することはない。後者は信仰の告白による言葉であり(マタ 10:32、ロマ 10:9~10)、人が聖霊の感動を受けたしるしである。パウロがこのように判断を下したのは、当時、「イエスは主である」と告白するのが容易な事ではなかったからである。なぜ



ならば、①イエスには美しさが無い(イザ 52:14、53:1~3)。おおよそ外見で人を見る者は、彼を主と告白することはできない(Ⅱコリ 5:16、マタ 13:53~58)。
②イエスをキリストと告白する者を、会堂から追い出す(すなわち除名する)ことは、すでにユダヤ人たちが決めていた(ヨハ 9:22)。あるいは、それで迫害を受けた者もある(使徒 8:1~3、9:1~2、22:4、26:9~11)。彼らは「イエスを主と告白する」ことは、「神を主と認めない」ことに等しく思ったからである。
③異邦人の中で、特に哲学の思想に大きな影響を受けたギリシャ人に、神は肉体となり死なれたことを信じさせるのは、甚だ難しかったからである(Ⅰコリ 1:18~23)。いわゆる「神哲主義」(Gnosticism)はここから来たわけである(Ⅰヨハ 4:2~3)。
④ローマ政府の治世の元で、「イエスを主と告白する」は即ち「カイザルを主と認めない」ことになり、いつでもどこでも殺される危険があるからである(ヨハ 19:12~15、使徒 17:6~8)。
⑤惑わされて偶像を拝んでいる者が、元の信仰を捨て、イエスを主と告白するにはいろいろな困難があるからである(Ⅰコリ 12:2~3)。

使徒行伝の記載により、聖霊は五旬節の日を皮切りとして、活発な働きを展開し、聖霊の感動を受けて、悔い改め、福音を受け入れた者は、数え切れないほど多かったことが分かる。例えば：①国々から祭りを行いに帰ってきたユダヤ人の寄留者たちは、感動を受けて、罪のために自分を責め、歩むべき道を求め、悔い改めてバプテスマを受けた。その数は約三千人ほどあった(2:37~41)。
②ペテロは感動を受けて、足のきかない男を癒したことがきっかけで、主の証人となり、ユダヤ人がキリストを殺害した罪を咎め、悔い改めよと催促した。その男の数は五千人ほどあった(3:12~26、4:4)。
③使徒たちが行った奇跡を見、聖霊の感動を受け、イエスを信じたユダヤ人は男女とも、ますます多くなってきた(5:12~14)。
④ルデヤの心を開いて、パウロの語ることに耳を傾けさせた。そしてその家族にバプテスマを受けさせよと彼女を催促した(16:14~15)。
⑤獄吏を感動して、救いの道を見つけさせた。それで、全家族が神を信じる者と



なったことを共に心から喜んだ、などである(使徒 16:30~34)。

2、教会を盛んにする

イエスは言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」(マタ 16:24)、「よくよくあなたがたに言うておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」(ヨハ 12:24)。教会の興隆と衰微は、クリスチャンが主のために喜んで富や財産を捨て、死まで覚悟する事にかかる。原始教会が猛スピードで盛んになり、小さな群れから天下をかき回す勢いになったのは(ルカ 12:32、使徒 17:6)、主の言を証したからである(ルカ 12:32、使徒 17:6)。クリスチャンが主のために喜んで己を捨てるか否かは、主の愛の広さ、長さ、高さ、深さを理解することによる。その人がいかに主に報いるか、すでに主のために何を捨て去ったかによるのである。パウロはこのような認識の上で(ガラ 2:20、II コリ 5:14~15)、いっさいのものを損と思い(ピリ 3:8)、あらゆる艱難を栄光とすることができた(II コリ 11:23~33、コロ 1:24、II テモ 4:6~8)。クリスチャンの主の愛に対する認識は、聖霊の感動によるものである(ロマ 5:5、エペ 3:16~19)。聖霊の感動が頻繁になればなるほど、主の愛への認識も確実になり、豊かになる。ゆえに、聖霊の感動は、教会が盛んになることに関係するとは、疑うべきではない事実である。

五旬節の日に聖霊が降り、約三千人の者が悔い改めてバプテスマを受けた。信者たちは皆一緒にいて、日々心を一つにして、絶えず宮で祈りをした。彼らは資産を売って、その代金を使徒たちの足元に置いた。そして、それぞれの必要に応じて、だれにでも分け与えられた。誰一人、その持ち物を自分のものだと主張する者はいなかった。そしてすべての人に好意を持たれて、主は救われる者を日々仲間に加えられた。こうして神の言はますます広まり、エルサレムにおける弟子の数が、非常に増えていき、祭司たちも多数、信仰を受け入れる



ようになった(使徒 2:44~47、4:32~35、6:7)。世の人はみな利己主義で世の事を愛するが、彼らは己を捨てる精神を持って、喜んであらゆる物を使徒の足元にささげて、いっさいの物を共有して、日々キリストの愛の内に暮らしていた。考えてごらん下さい。もし聖霊がおのおのの心に働きかけ、主の愛及びいかに愛すべきかを悟らせなければ、人を感激させるこの情景はあったであろうか。

ステパノが殉教した後、エルサレムの教会に対して大迫害が起こり、使徒以外の者は、ことごとくユダヤとサマリヤとの地方に散されて行った。彼らは相次いで主のために死を恐れず福音を宣べ伝えた。主が共におられたゆえ、奇跡は現れ、福音はサマリヤの町に広まった。それで、町では人々が大変な喜び方であった。皆が尊敬した魔術師のシモンまで信じて、バプテスマを受けた。エルサレムにいる使徒たちは、それを聞いて、ペテロとヨハネとをそこに遣わした。二人は皆が聖霊を受けるようにと、彼らのために祈った。そこで、二人が手を彼らの上においたところ、彼らは聖霊を受けた(使徒 8:1~17)。それで、この歴史的イベントは「サマリヤの五旬節」と呼ばれるようになった。

ステパノのことで起こった迫害のために散らされた人々は、ユダヤとサマリヤのほかに、ピニケ、クプロ、アンテオケにまでも及んだ。彼らはユダヤ人以外の者には、だれにも御言を語っていなかった。ところが、その中に数人のクプロ人とクレネ人がいて、アンテオケに行ってからギリシャ人にも呼びかけ、主イエスを宣べ伝えていた。そして、主のみ手が彼らと共にあったため、信じて主に帰依するものの数が多かった。このうわさがエルサレムにある教会に伝わってきたので、教会はバルナバをアンテオケにつかわした。彼はそこに着いて、神の恵みを見て喜び、主に対する信仰を揺るがない心で持ち続けるようにと、皆の者を励ました(使徒 11:19~23)。そこで、アンテオケは異邦人のクリスチャンの中心地となり、キリスト教を世界的な宗教にした。キリスト教はも



はやユダヤ人のみの宗教ではなくなった。

神のみわざはくすしく、測り知れないものであろう。迫害は、福音が広まる原因となったのだ！神の国の苗は、クリスチャンの血に注ぎかけられなければならない。クリスチャンに主のために己を捨てる精神がなければ、福音は全世界に伝わらず、教会は盛んにならない！ところが、人にとって最も貴いのは、自分の命なので、だれもがすべてを捨てても命だけは守るであろう。平安を得、危険から逃れる心はだれにでもあるであろう。ゆえに、聖霊の感動を受けなければ、いつでも喜んで主のために命を捨てようとする多くの者はいなかったであろう。そして、サマリヤの五旬節とアンテオケ教会の設立もなかったであろう。

3、使命を託する

「それどころか、彼らは、ペテロが割礼の者への福音をゆだねられているように、わたしには無割礼の者への福音がゆだねられていることを認め、(というのは、ペテロに働きかけて割礼の者への使徒の務につかせたかたは、わたしにも働きかけて、異邦人につかわして下さったからである)」(ガラ 2:7~8)。

ペテロが召されたのは、ユダヤ人に福音を宣べ伝えるためであったが、パウロが召されたのは、福音を異邦人に宣べ伝えるためであった。使命が異なっても、同じ福音を宣べ伝え、同じ使徒の務につかわされた。ペテロが異邦人に福音を伝えなかったのではなく(使徒 10:44~48、15:7)、パウロがユダヤ人に伝えなかったのでもない(使徒 9:19~22、13:44~46)、彼らには主要な使命があることを言っているのである。パウロはペテロと共に主に託された使命を受けたと認識した。それも聖霊の感動によって、明らかに使命を自覚したのである。従って、パウロはこの務を光栄とし(ロマ 11:13)、忘れずに(使徒 22:21、26:17~18)、一心に異国の国々へ行くために、囚人となり(エペ 3:1、6:20)、ついに殉教することになった(Ⅱテモ 4:6~8)。こうして、キリスト教の異邦におけ



る地位はかためられた。

ここにある「働きかける」という言葉は、原文では「energēō」とし、「力を賜う」、「ききめを生じる」、「運行する」、「感動する」などの意味が含まれている。文語体は「力を賜う」と訳してある。というのは、聖霊がペテロに働きかけてユダヤ人の使徒の務につかせたと同時に、上から力が賜った。同じように、聖霊がパウロに働きかけて、異邦人の使徒の務につかせたと同時に、立派な仕事ができるように、彼に超然とした力を賜ったのである。そこでパウロは言った、「このように恵みを受けたのは、わたしが異邦人のためにキリスト・イエスに仕える者となり、神の福音のために祭司の役を勤め、こうして異邦人を、聖霊によってきよめられた、御旨にかなうささげ物とするためである。だから、わたしは神への奉仕については、キリスト・イエスにあって誇りうるのである。わたしは、異邦人を従順にするために、キリストがわたしを用いて、言葉とわざ、しるしと不思議との力、聖霊の力によって、働かせて下さったことの外には、あえて何も語ろうとは思わない」（ロマ 15:16～19）。しかも彼は得た力を使徒たる実とした、「わたしは、使徒たるの実を、しるしと奇跡と力あるわざとにより、忍耐をつくして、あなたがたの間であらわしてきた」（Ⅱコリ 12:12）。

選ばれてキリストにあって肢体となったわたしたちは、各々の賜物があり、各々の務があることを認識しなければならない。それは正に、体にある肢体は、それぞれの働きが異なるのと同様である（Ⅰコリ 12:4～30）。あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達するために、全身はすべての節々の助けにより、しっかりと組み合わせられ、結び合わされなければならない（エペ 4:11～16）。しかし、さらに大事なものは、わたしたちはそれぞれいただいた賜物を認識して、どのような使命を果たすために聖霊に働きかけられたかを知ることである。そして、パウロが死ぬことをも覚悟していたように、己を捨てて行くべき道を歩けば（使徒 21:10～14）、五旬節の日にあった情景は再びこの世代に現れ、

聖霊の呼び声は必ず全世界に響き渡るであろう。

4、将来のことをあらかじめ示す

原始教会のたくさんの預言者は(使徒 13:1、15:32、21:8~9、エペ 4:11)、みこころを弟子たちに知らせる務をした。聖霊は必要に応じて彼らに働きかけ、旧約時代の預言者のように弟子たちに預言させた。例えば、①アガボが立って、世界中に大ききんが起ころうと、御霊によって預言したところ、実際にクラウデオ帝の時に起こった(使徒 11:27~28)。②ツロにある弟子たちは御霊の示しを受けて、エルサレムには上って行かないようにと、しきりにパウロに注意した(使徒 21:3~4)。③アガボはピリポの家で、明白なしるしで聖霊が告げられたこと、即ち、ユダヤ人たちがパウロをエルサレムで縛って、異邦人の手に渡すことを預言した。後に実際にそうなった(使徒 21:8~11、27~36)。「なぜなら、預言は決して人間の意志から出たものではなく、人々が聖霊に感じ、神によって語ったものだからである」(Ⅱペテ 1:21)。

聖霊が将来のことを、預言の方法を用いる以外に、幻で示すこともよくあった。その中で最も著しかったのは、黙示録に書かれているヨハネの経歴である(1:1~3)。例えば：①ヨハネは御霊に感じて、主の厳かな御姿を見た。そして見ていた幻を書き記して、それをエペソなどの七つの教会に送るようにと命じられた(1:10~16)。②御霊に感じて、御座が天に設けられており、その御座にいます方があった幻を見た。それは、神が恵みと裁きを同時に施されることを示した(4:2~3、参考：ヘブ 4:16、マル 16:15~16、ヨハ 12:48)。③御使は、ヨハネを御霊に感じたまま、荒野へ連れて行った。そこで一人の女が赤い獣に乗っているのを見た。それは、この世に神に敵対する獣のような強い国が興ることを示した(17:3)。④ヨハネを御霊に感じたまま、大きな高い山に連れて行き、聖都エルサレムが、神のみもとを出て天から下って来るのを見せた。それは真の教会がキリストの花嫁であること、そして真の教会が完成された状態を



示したのである(21:9～26、参考：エペ 5:31～32)。

5、人を清める

「しかし、主に愛されている兄弟たちよ。わたしたちはいつもあなたがたのことを、神に感謝せずにはおられない。それは、神があなたがたを初めから選んで、御霊によるきよめと、真理に対する信仰とによって、救を得させようとし、」(Ⅱテサ 2:13)。

この聖句によれば、救いを得る順序としては、選び→信仰→清めである。その中の清めの問題に関しては、パウロは聖霊によらなければならないと特に示した(参考：ロマ 15:16、Ⅰペテ 1:2)。その原因は、①人はどうの昔にアダムの内で罪の虜となり、善を行おうとする志の自由があっても、それを実行する自由がないからである(ロマ 7:14～24)。②御霊はねたむ霊なので、罪のためにやましく思わせ、行くべき道を歩ませるからである(使徒 2:37～39、ガラ 5:17～18、エペ 4:30)。③御霊は上から力を与え、罪と死との法則から人を解放し、肉の働きを殺し、その欲を満たすことはないからである(ルカ 24:49、ロマ 8:2、13、ガラ 5:16)。

聖霊の感動はクリスチャンの清めと救いにかかわる重大な問題なので、パウロは、「御霊を消してはいけない」とテサロニケ教会に注意をした(Ⅰテサ 5:19)。しかも、「…聖霊の交わりとがコリント教会一同と共にあるように」と(Ⅱコリ 13:14)、神の選民が聖霊の内に守られるようにと願った。

以上の各点をまとめると、聖霊の感動の働きかけは人の身において、霊のバプテスマを受けたか否かに拘わらず、前の雨の時代には非常に顕著で活発であったことがわかる。



四、後の雨が降る前

前の雨の聖霊が神によって撤回されてから、後の雨の聖霊が降るまで、一千年余り経った。その間に聖霊のバプテスマがなくても、聖霊の働きがなかったとは言い切れない。なぜならば、聖霊に感じた事も聖霊の働きの一つであり、聖霊の働きは神ご自身の御わざで、絶えないものだからである(ヨハ5:17)。

後の雨が降る前に、千年余りの月日が経ち、神を敬うクリスチャンに聖霊の感動を働きかけつづけた理由は、①キリスト教が滅ぼされないように、地上に存続させ、各時代に神を敬う者に主に近づく機会を与えるためである(参考:詩4:3、使徒10:1~4)。②後の雨の聖霊に注ぎかけられるように、備えるためである。それはバプテスマのヨハネに働きかけて、悔い改めのメッセージを伝えさせ、前の雨の聖霊を待ち望むように、人々を導かせたのと同じである(マタ3:11、ヨハ1:32~34)。

1、熱心に御言を行うように働きかける

新約時代は「信仰によって義とされる」恵みの時代である。キリストが十字架において受難された功績によって、神の義は律法とは別に現された(ロマ3:21~28、8:1~4)。なぜなら、律法を行うことによって、すべての人間は神の前に義とされない。律法によっては、罪の自覚が生じるのみである。それは、信じる人々にイエス・キリストに対する信仰によって、約束の幸が与えられるためである(ロマ3:20、ガラ3:22)。しかし、これでクリスチャンは束縛なく、何でも好き勝手によいと言っているのではない。逆に、わたしたちは世の人と聖別すべきであり(Ⅱコリ6:14~18)、神から賜った自由を、肉の働く機会としてはならない(ガラ5:13)。パウロは、「愛によって働く信仰」と「神の戒めを守ること」が、肉体の形式の割礼より遥かに大事だと強調した(ガラ5:6、Ⅰコリ7:19)。ヤコブは、「行いがなかったら、何の役に立つか」と言って、それが「死んだものである」と指摘した(ヤコ2:14~16、26)。それは「信仰によって行い



をおろそかにする」過ちを摘発することである。キリスト教は行いと真実をもって実践する宗教であり、理論だけあるような口先だけの宗教ではない（Ⅰヨハ 3:17～18）。そうでなければ、なぜ「命の道」と言えようか。聖書曰く：①キリストの愛をもって互に愛し合いなさい。そうすれば、それによって主の弟子であることを、すべての者が認めるであろう（ヨハ 13:34～35）。②あなたがたは地の塩と世の光である。人々があなたがたのよい行いを見て、天にいます父をあがめるようになるであろう（マタ 5:13～16）。③神の言を聞いてそれを守る人たちは、イエスを宿した胎、イエスが吸われた乳房より恵まれている（ルカ 11:27～28）。④律法を聞く者が、神の前に義なるものではなく、律法を行う者が義とされる（ロマ 2:13）。⑤御言を行いなさい。おのれを欺いて、ただ聞くだけの者となってはならない（ヤコ 1:22～25）。⑥天にいますわが父の御旨を行わず、たとえ主の名によって預言して、多くの力あるわざを行ったとしても、天国に入ることはできない（マタ 7:21～23）。これらはすべてわれわれに、行いをもって、正しい良心と偽りのない信仰をあらわすことを戒めているのである（ピリ 2:12～18、Ⅰテモ 1:5、Ⅱテモ 1:5）。

聖霊がとどまった時期（即ち後の雨が降る前の時期）に、多数の者は信仰が俗化して、世と区別がなかった。ただクリスチャンの名だけがあり、クリスチャンに備わるべき美德はなかった。そして、暗闇の中にいる世の人に真理の光を放たないため、主の御名が不信者の中で汚されるばかりであった。しかし各時代には、やはり少数の真の信者が存在し、彼ら是一切の悪を離れ、積極的に善を行うように志を立てていた。彼らは一生を通して主を敬い、主に仕える生活をして、真理の光を遠近に照らしたゆえ、主の聖なる御名があがめられ、主の十字架が高く挙げられた。このような状況は聖霊のバプテスマを体験していない教派から見れば、彼らは聖霊に注がれ、聖霊に満たされたと考えるであろう。ところが、彼らが濁った世の中で聖潔が保たれたのは、聖霊の感動を受けたのであって、聖霊のバプテスマによるのではない。ルカは言った、「カイザリ

ヤにコルネリオという名の人があった。イタリヤ隊と呼ばれた部隊の百卒長で、信心深く、家族一同と共に神を敬い、民に数々の施しをなし、絶えず神に祈をしていた。…御使が言った、『あなたの祈や施しは神のみ前にとどいて、おぼえられている。…』…僕たちは答えた、『正しい人で、神を敬い、ユダヤの全国民に好感を持たれている』（使徒 10:1～4、22）。コルネリオも聖霊の感動を受けたため、熱心に神に仕え、天の父のみこころを行い、確実に神を愛し、人を愛することができた。それは聖霊のバプテスマによるのではない。なぜならば、コルネリオは彼に属する者たちとペテロが主の証しを熱心に聞いている時に、はじめて聖霊を受けたからである（使徒 10:44～46）。

2、命を捨てるまで福音伝道に努めさせる

「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」とは、イエスが天に上げられる前に弟子たちに命じられた言葉である（マル 16:15）。主に召されたすべての人は主の証人となり（ルカ 24:48）、「自分の見たこと聞いたことを、語らないわけにはいかない」という勇気ある志を持ち（使徒 4:20）、ただで受けたものをただで与えなければならない（マタ 10:7～8）。そうでなければ、どうして主の恵みに報いることができようか。どうして天国の福音を全世界に宣べ伝え、主にゆだねられた務めを果たせようか。

神はいつくしみ深く、義なる方なので、一人も滅びることがなく、すべての者が悔改めに至ることを望まれる（Ⅰテモ 2:4、Ⅱペテ 3:9）。この聖なる目標を達成するため、神は各時代にみこころに適う伝道者を選び、彼らが喜んで主のためにすべてを捨て、託された使命を果たすために命を捨てる覚悟までさせられた。彼らは世界を巡って福音伝道に旅立ち、野蛮な地域に入って、つぶさに苦しみを嘗め、勇敢に罪を咎め、人が悔改めて主に帰するように励まし、廃れた各地の教会を復興した。これは彼らがかつて聖霊のバプテスマを受けたからではなく、彼らには喜んで主のために命まで捨てる犠牲の精神があり、輝かし



く仕事を達成できたのは、聖霊の感動を受けたからである。旧約時代に神が興した預言者たちも、ひとりびとり死の覚悟をして、素晴らしい業績を積んだが、だれも聖霊のバプテスマを受けた経験はない。前者は聖霊が止まった時期であり、後者は約束の聖霊が降る前の時期である。

この時期に教会は変質していたため、聖霊のバプテスマがなければ、純正の福音もなく、原始教会にあった霊的な現象も起こらなかった。ところが、キリスト教の存在をつなぎ、後の雨の聖霊を迎え、福音を全世界に宣べ伝えるために、神が彼らを召された役割があったことは否定できない。なぜならば、何がどうであれ、彼らは世界に、イエス・キリストが人類の唯一の救い主であることを知らせ、人々の悔い改めを催促し、偶像礼拝と罪の生活から離れさせる任務を果たしたからである。ある者は神と人を愛する本心から福音を宣べ伝えるのではなく、ほかに何かを企んでいたか、あるいはある者は神の召しによらず、自分の私意によって働いていたか、その成果は聖霊の感動によらず、人の働きによるものだったと、などの考え方もある。当然わたしたちはそれに賛成する。ただし、聖霊がとどまった時期において、ごく少数の伝道者が神によって興され、聖霊の感動を受けて働いたのは、疑えない事実である。

3、文字伝道に携わらせる

事実から見れば、福音伝道において、文字伝道は言うまでもなく相当に重要な地位を占めている。これは初期の弟子たちが重んじていた問題のみならず、今日のわたしたちも重視している問題である。空間については、それに地域の制限がなく、隅々まで無数の群衆にイエスを救い主として受け入れる機会を与えることができる。時間については、年代の制限がなく、代々の子孫にイエスを救い主として伝承することができる。そこで、あえて仮説をするが、もし早期の弟子たちが文字伝道の問題をおろそかにしたならば、新約聖書が欠けるため、わたしたちは原始教会の歴史を知ることができなければ、豊かな真理を受



けることもできなかったであろう。もし、近世の聖職者がこの問題をおろそかにしたならば、キリスト教はなかなか世界的な宗教になりにくく、今日のように多くの人イエスは世人の唯一の救い主であることを認識することもできなかったであろう。そこで福音を広め、そしてずっと宣べ伝え続ける目的を達成するために、神は各時代からみこころに適った人を選び、一生をとおして文字伝道に携わるようにさせた。旧約聖書は、旧約時代の聖徒が神の靈感を受けて（Ⅱテモ 3:16）、聖霊に感じ、神によって書かれたと、わたしたちが認めるように（Ⅱペテ 1:21）、新約聖書も初期の弟子が神の靈感を受けて、聖霊に感じ、神によって書かれたものである（エペ 3:1~5、黙 1:1~2）。同じように、近世に信心深い聖職者が文字伝道に携わったのも、聖霊の感動を受けたと認めるべきであろう。

この期間において神の靈感を受けた文字伝道に注目すべき働きは次のとおりである。①各国に聖書協会が設立され、各種言語の聖書の翻訳によって、全世界に文字の分かる者に読んでもらうことができた。②ストロン博士（James Strong, S. T. D., LL. D.）の著作である「聖書原文コンコルダンス」（The Exhaustive Concordance of The Bible）は 1890 年にニューヨークの出版社「Abingdon Press」によって出版された。聖書を勉強する際に原文を知らない者でも、この著書をとおして、原文を知る者と同じ効果を得ることができる。そのほかに、例えば、①福音パンフレットを配り、イエスが救い主であることを世界に知らせる。②考古学者の発見をまとめ、本として発行して、聖書の正確さを証明する。③聖書の歴史や地理に関することを本にまとめ、聖書背景の知識によって聖書勉強の効果を一層高めることができる。④聖書に対する解釈、註解、研究などの単行本を出版し、疑問があった人の参考になることができる。これらのことは、皆聖霊の感動を受けたことに間違いない。当然、配られた福音パンフレットの内容は、全部真理に合っているとは限らないが、少なくとも世人にイエスが救い主であることを認識させるという彼らの目的は達成された。



聖書の解釈、註解、研究などの本も、絶対に正確とは言い難いが、是非を弁えられる人にとって、役に立つのは事実である。ゆえに、これらの書物を発行するのも聖霊の感動によるものだと言える。それは後の雨の聖霊によって設立された世の終りにある真の教会のために備えた働きである。

五、後の雨の時代

▲現在は後の雨の時代である。一千年余りとどめられた聖霊は再び降られた。全世界に福音を宣べ伝え（マタ 24：14）、羊を一つの群れに導くために（ヨハ 10：16）、聖霊の感動は各教団に働きかけ続けている。ゆえに、多数の教会団体は聖霊のバプテスマはないが、霊に感じた事がないとは言えない。これは否定できない事実であれば、研究に値する問題でもある。しかし、霊を感じたのに、なぜ宣べ伝えるものと信じるものが聖書に合わないのか、なぜ真の教会と一つになれないのかと、疑問を抱く者もいるであろう。

われわれの答え：①宣べ伝えるものと信じるものが聖書に合わないのは、先代の誤りを受け継いだからである。もし真の教会とよく接触するなら、遅かれ早かれ偽りを捨てて真に帰するであろう。②いわゆる「一つになる」とは、聖霊の感動を受けた信心深い者たちが真の教会で一つになることを指し、各教団が真の教会と一つになることを言っているのではない。

▲胡恩徳が書いた「霊恩問題」の7ページにある記載である、「いったいこの運動（異言運動）は神によるものであろうか、実に大きな疑問である。第一、この運動が始まった頃は、ちょうど教会の復興の時期であった。外国で多くの神の僕は主の恵みを受けて、たくさんの人を信仰に導き、積極的に福音を世界中に広め、多くの信者に清く勝利の生活を送るように指導した。これらのリーダーは、ムーディー(Moody)、スポルジョン(Spurgeon)、トーレー(Torrey)、シンプソン(Simpson)、アレキサンダー(Alexander)、ロボス(Lobos)、…である。しかし、異言運動はこれらの神の僕と食い違うので、それが主によるも



のだと信じ難いのである。この運動に参加する者は、しばしば自分こそ聖霊に満たされていると思っているが、その実際の働きは、上記にあげた有名人に上回ることは見られない。概算であるが、ただムーディー一人だけでも百万人近くの罪人を信仰に入れたので、彼が受けた聖霊の力に匹敵できるものは、まれであろう。「無神会」も彼の説教によって戸を締めたぐらいであった。異言派に、彼に敵った者はいるかと伺いたい。なぜ異言派の人は神の僕たちと食い違うのか。

われわれの答え：①確かに異言運動は神によるものである。異言を語るのは聖霊のバプテスマの必要なしるしである(使徒 10:44~46)。神の約束によって神の子たちは必ず聖霊を受けるのである(使徒 2:38~39、ヨエ 2:28~29)。②ムーディーなどは、大勢の人を入信させ、福音を世界の各地に広め、多くの信者に清くて勝利の生活を送らせたのは、聖霊の感動によるもので、聖霊のバプテスマによるものではない。③彼らが伝えたのは、全備なる福音ではなく、改められた不完全なメッセージである。神が彼らを興したのは、彼らをとおして、イエスが救い主であることを人々に知らせ、悔い改めさせるために過ぎない。④彼らが異言運動の人と合わないのは、先代の過ちを受け継いで、異言問題を深く誤解し、一步進んで接触する機会がなかったからである。⑤「わたしにはまた、この囲い(聖霊が設立された真の教会)にいない他の羊(信心深い信者)がある。わたしは彼らをも導かねばならない(真の教会に入る)。彼らもわたしの声に聞き従うであろう(真理に従う)。そしてついに一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになるのである(聖霊のうちに一つになる)」(共同訳ヨハ 10:16)。おおよそ聖霊の感動を受けた真の信者は、真の教会と多く接触すれば、必ず一つになることがわかる。⑥聖霊に満たされた人は、必ずしも百万人近くの罪人を入信させるとは限らない。パウロもペテロも聖霊に満たされた使徒であるが、それほど大勢の人を導かなかったからである。⑦百万人近くの罪人を入信させたにしても、皆聖霊に満たされたとは限らない。旧約時代に神に興された預言者のように、御霊に感じた者も力を受けるからである。⑧主を信じる者のだれ



もが聖霊の感動を受けたとは言い切れない。ある者は、純正でない動機による、ある者は一時の感情によるものであろう。⑨筆者が知っているのは、ロボスはペンテコステ教派の働き人で、即ち胡氏が言った異言派の人であるので、(Oral Roberts' Life Story を見よ)、ムーディーらと同列に論じることはできない。

この時期における御霊の働きは、ムーディーらに福音を広めさせ、イエスが救い主であることを人々に知らせ、そして悔い改めるように促したほか、「後の雨の聖霊が降る前」の項目に挙げたように、熱心に御言を行うように人々を感動させ、そして、文字伝道に携わるようにさせたのである。そしてその働きは今も継続されているので、疎かにできない問題である。

前述の「各時代における聖霊の感動の働き」をまとめると、旧約時代及び前の雨が降る前は、聖霊の感動を受ける時期であることがわかる。即ち神はご自分の霊をとおして預言者や聖徒に、使命を果たさせる時期であった。前の雨の時代は聖霊のバプテスマの時期であれば、聖霊がいつまでも弟子たちと共におられる時期でもあった(ヨハ 14:16)。この間の働きは空前に活発であった。もちろん、この時期に聖霊の感動はあったが、聖霊のバプテスマを受けたかどうかの区別はなかった。後の雨が降る前も聖霊の感動の時期であった。即ち信心深いクリスチャンが聖霊の感動を受けて、キリスト教を地上に存続させた時期である。この期間の御働きは活発ではなかったが、キリスト教が消えなかったのは、聖霊が依然として、各教派にある信心深い者たちに感動を受けさせたからである。後の雨が降る前の働きは、キリスト教を地上に存続させたほか、後の雨が注がれるのを迎えさせたのである。それは聖霊が、バプテスマのヨハネに悔い改めのメッセージを伝えさせて、人々に前の雨の聖霊に注がれるように迎えさせたのと同じである(マタ 3:11、ヨハ 1:32~34)。今は後の雨の時期である。千年余りとどめられた聖霊は、二度降ったのである。預言者ハガイの預言によると、この時期の御霊の働きは前の雨の時代より繁栄する(ハガ 2:9)。当



然、この時期に聖霊の感動が現れるのは、前の雨の時代と一致する。それは福音を世界に広め、主の羊を聖霊にあって一つになるように導くためである。

イエスが言われた、「わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働くのである」(ヨハ 5:17)。天の父の天地創造のわざはとうの昔に終わった(創 2:1~3)。世のすべての罪人を救うため、救いが全うされるまで、御働きは一日も休むことがない。聖霊の感動は天の父が世を救われる重大な働きの一つであり、旧約時代から今日に、そして世の終わりまで絶え間ないのである(参考: エペ 1:14、4:30)。ところが、聖霊の感動と聖霊のバプテスマは区別があるので、両者を混同して真理を混乱させてはいけない。

第三節 一般の教会が取るべき態度

聖霊のない一般の教会は、聖霊のバプテスマの知識に欠け、実際の体験がなく、悪魔に惑わされても知らないので、しばしば聖霊の感動を聖霊のバプテスマと間違える。それだけではなく、伝道者たちは講壇や文章において、極力異言問題を反対し、「異言派」、「狂信派」、「宗教詐欺」だと言う。甚だしい事は、エリヤがバアルの預言者たちをあざけて言った言葉をもって(列王上 18:27)、聖霊のバプテスマを求める人たちをあざけたり、攻撃したり、汚したりする。そして自分は真理を守る立場に立って、神の代わりに発言していると思いつている。その大胆さは、まさに比べるものがない。

一、聖霊を汚してはいけない

イエスが言われた、「人には、その犯すすべての罪も神を汚す言葉も、ゆるされる。しかし、聖霊を汚す言葉は、ゆるされることはない。また人の子に対して言い逆らう者は、ゆるされるであろう。しかし、聖霊に対して言い逆らう者は、この世でも、きたるべき世でも、ゆるされることはない」(マタ 12:31~32)。



最も嚴重で恐ろしい罪は、人の子に対して言い逆らうことではなく、聖霊を汚すことだと、イエスのはっきりとした警告を深く考えなければならない。なぜ聖霊を汚す罪は人の子を汚す罪より嚴重なのか。それは、人の子は肉体となって来た神、己を低くした神であるのに対し、聖霊は栄光の中にある神ご自身である。従って、肉体の人の子の形で現れた神を汚すことと、直接御霊を汚すこととを比較すると、当然大きな区別があるからである。パリサイ人はイエスが神の子であることを全く知らずに、人の子を汚したので(ヨハ 10:30~33、19:7)、その罪はなお赦される。しかし、主がよみがえって天に昇り、ご自身が永遠にあげられるべき神であることを証し、又聖霊の身分で現れられたら、絶対に汚してはいけないのである。

パウロは、「異言は信者のためではなく、未信者のためのしるしである」と言った(Ⅰコリ 14:22)。ここで証明という意味の「しるし」を、いくつかの英訳は「sign」とし、原語では奇跡と同じ字である。言い換えれば、イエスの御名によって病を癒し、悪魔を追い出すことは、しるし(奇跡)であり、神が共におられるしるし(証明)である。異言を語ることも同じである。それで、信じる者にはしるしが伴うとイエスが約束された時、わざわざ新しい言葉(異言)を他の奇跡と並列されたのである(マル 16:17~18)。異言を語ることは聖霊を受けるしるしであり(使徒 10:44~46)、聖霊が賜ったことは、神がわたしたちのうちにいますことの証拠である(Ⅰヨハ 3:24)。この証拠は未信者のためにあるものである。だから、もし賜った聖霊によって異言を語ることを「魔術師」、「邪霊に取りつかれること」、「迷いの霊」と言い、あるいは聖霊が現れる力を悪霊のわざと指摘すれば、それは聖霊を汚すことになるのである。

二、ガマリエルの勧告を深く考えるべき

イエスは弟子たちに預言された、「人々はあなたがたを会堂から追い出すであろう。更にあなたがたを殺す者がみな、それによって自分たちは神に仕えてい

るのだと思う時が来るであろう。彼らがそのようなことをするのは、父をもわたしをも知らないからである」(ヨハ 16:2~3)。後に預言がそのとおりに成就されたように、凡そ教会を迫害した者は、自分が熱心に神に仕えていると思っていた(使徒 7:54~60、8:1~3、12:1~3)。パウロでさえ、自分が主の弟子たちを死に至らしめるまで迫害したと言った(使徒 22:3~4、ピリ 3:6)。昔、教会が大いに迫害された時、国民全体に尊敬されていた律法学者ガマリエルは人々に向かって言った、「イスラエルの諸君、あの人たちをどう扱うか、よく気をつけるがよい。…、そこで、この際、諸君に申し上げる。あの人たちから手を引いて、そのなすままにしておきなさい。その企てや、しわざが、人間から出たものなら、自滅するだろう。しかし、もし神から出たものなら、あの人たちを滅ぼすことはできまい。まかり違えば、諸君は神を敵にまわすことになるかも知れない」(使徒 5:34~39)。ガマリエルの勧告は、やっとうダヤの役人たちの怒りを抑えた。彼は慎重に扱うように皆を勧めた。主の弟子もかまわないでしばらく様子を見て待てばいい、まかり違えば、神を敵にまわす罪人になるかもしれないと言った。

教会はキリストの体であるので(コロ 1:24)、教会を迫害する事はキリストを迫害する事に等しい(使徒 9:1~5)。御霊は神の霊であるので、御霊によって建てられた真の教会を攻撃する事は、直接、神を攻撃する事に当たるのである。これは慎重に考えるべき問題である。体験していない異言の問題を軽率に扱い、また攻撃をし、それで自分が熱心に主に仕えていると思っはならない。ガマリエルの勧告を深く考えるべきではないか。

三、アポロの謙遜に倣うべき

アポロは原始教会の重要な働き人の一人であり、神に重用され、すべての信者の尊重を受けた(Ⅰコリ 1:12、3:4~6、4:6)。彼はアレキサンデリヤ生まれのユダヤ人であった。アレキサンデリヤはアテネと並んだ当時のギリシャ文化



や学問の中心地であり、学術と雄弁を非常に重んじた町であった。ゆえに聖書に精通し、しかも雄弁な人は、当時、当地点においては、ユダヤ人とギリシャ人を説得する力を十分持っていると言える。アポロはこのような権威者であり、博学で雄弁のほかに、なお聖書に精通していたのである。彼はアレキサンデリヤでイエスの事を学び、その一生と教えを知ることによって、霊に燃えてイエスの事を詳しく語ったり、教えたりしていた。しかし、彼はヨハネの弟子であったので、ヨハネのバプテスマだけを知り、イエスのバプテスマは知らなかった。イエスの事を知ることと、イエスを主とすることはまったく違うことである。前者は、誰でも手に入れ、人に伝えることができる知識であるが、後者は、ただ救われた者しか知らない真の信仰である。彼は会堂で大胆に語り、イエスがキリストであることを教えた。プリスキラとアクラは貧しい天幕造りであったが(使徒 18:2~3)、その話を聞いて彼を招き入れ、さらに詳しく神の道を解き聞かせ、キリストの全備なる福音を教えた(使徒 18:24~26)。

この歴史から学べることは、①知識は必要である。イエスに対する知識がなければ、信じることはできない。ただし神学の知識に富んでいても、よい信仰の持ち主とは言い切れない。②知識と熱意をもって人を感動させても、だれでも水と霊とから生れなければ(ヨハ 3:5)、全備なる福音を人に宣べ伝えることはできない。③博学で雄弁なアポロでさえ、信仰においては自分よりも身分が卑しいが、信仰の強い人に教わった。知識から信仰へ進むには、距離があるからである。④彼は謙遜な人であり、熱心に教えを求める人でもあったので、身分の卑しい人の説明に喜んで聞き従った。⑤その結果、彼はキリストの全備なる福音を悟った。後に、彼の学問と雄弁は、福音伝道に大いに役立った。

ピリポはエチオピアの宦官に進み寄ると、彼がイザヤ預言書を読んでいる声が聞こえた。それが、「おわかりですか」と尋ねたところ、彼は「だれかが、手びきをしてくれなければ、どうしてわかりましょう」と答えた(使徒 8:30~31)。



パウロとシラスとがベレヤへ行った。ベレヤにいるユダヤ人は「テサロニケの者たちよりも素直であって」、心から教えを受け入れ、果たしてそのとおりにかどうかを知ろうとして、日々聖書を調べていたと、ルカは使徒行伝にこのように書いた（使徒 17:10～12）。アポロの謙遜と真理を求める心は、エチオピアの宦官とベレヤにいるユダヤ人に匹敵できる。

「ヨハネのバプテスマ」は悔改めのバプテスマであり（使徒 19:4）、ヨハネの使命は、人が確実に悔改めることを促したことだけである（マタ 3:5～11、ルカ 3:10～14）。しかし、「イエスのバプテスマ」は、罪赦しのバプテスマ（使徒 2:38、22:16）、再生の洗い（テト 3:5）、御霊によるバプテスマなのである（ヨハ 1:33、使徒 1:5）。悔改めは再生ではなく、再生の前提である。悔改めたが再生しなかったのはヨハネの弟子たちである。彼らはただヨハネのバプテスマしか知らなかった。プリスキラとアクラに出逢う前のアポロもこの状態にとどまった者である。今日、聖霊のない一般の教会にも、このタイプに属する伝道者が多い。彼らは聖書に精通し、雄弁で心が燃え、熱心に主に仕え、罪を憎み、人を確実に悔改めさせ、イエスの事をよく知り、山上垂訓をほめ、キリストの愛の模範を強調する。しかし、水と聖霊とから生れかわることの必要性には、一言も触れない（ヨハ 3:5）。だから、人にキリストにある豊かな命を得させることができず、上からの力をもって、罪に打ち勝たせることもできない（ヨハ 10:10、ルカ 24:49、ロマ 8:1～2、13）。しかし、アポロは謙遜で、真理を求めるのに熱意のある者であった。願わくは、各教派の伝道者たちが、アポロのように真理を受け態度を正し、すぐに全備なる福音を受けるように。そして、聖霊の感動を聖霊のバプテスマと間違え、異言問題を攻撃することによって、人または自分に害を与えないように。

四、バプテスマのヨハネに見習え

「その翌日、ヨハネはまたふたりの弟子たちと一緒に立っていたが、イエス



が歩いておられるのに目をとめて言った、『見よ、神の小羊』。そのふたりの弟子は、ヨハネがそう言うのを聞いて、イエスについて行った」(ヨハ1:35~37)。

バプテスマのヨハネは、キリストではなく、キリストに先立った者である(ヨハ1:19~23)。イエスに目をとめた時、彼が弟子たちに言った言葉は、即ち、「行きなさい、彼こそキリストです」ということである。だから、彼の弟子たちはイエスについて行ったが、彼は嫉妬しないだけでなく、逆に任務を果たした楽しみがあったのである。

「ところが、ヨハネの弟子たちとひとりのユダヤ人との間に、きよめのことで争論が起った。そこで彼らはヨハネのところにきて言った、『先生、ごらん下さい。ヨルダンの向こうであなたと一緒にいたことがあり、そして、あなたがあかしをしておられたあのかたが、バプテスマを授けており、皆の者が、そのかたのところへ出かけています』。ヨハネは答えて言った、『人は天から与えられなければ、何ものも受けることはできない。わたしはキリストではなく、そのかたよりも先につかわされた者である』とやったことをあかししてくれるのは、あなたがた自身である。花嫁をもつ者は花婿である。花婿の友人は立って彼の声を聞き、その声を聞いて大いに喜ぶ。こうして、この喜びはわたしに満ち足りている。彼は必ず栄え、わたしは衰える」(ヨハ3:25~30)。

ヨハネの弟子たちと一人のユダヤ人が清めの問題でもめたが、それはバプテスマについてのことだったのであろう。ヨハネの弟子はヨハネのバプテスマを主張したが、ユダヤ人はイエスのバプテスマ、そしてイエスが日々盛んになることをもって、相手をけなそうとした。ヨハネの弟子から見れば、イエスがヨハネのバプテスマを受けた以上(マタ3:13~16)、彼らと同じ弟子であるはずが、なぜ、バプテスマを施しているのか、なぜヨハネに勝るのかと実に理解しにくく、且つ耐えられないことであろう。ヨハネとイエスは各自異なった使命を負



わされ、天から異なった賜物を与えられ、その力の差異も天から来るものである。ヨハネはキリストではなく、キリストの先に遣わされた者である。彼もまた花婿ではなく、花婿の友人である。ヨハネは自分を正しく知り、イエスの繁栄に嫉妬をせず、かえって喜びに満ち溢れた。さすが、神に遣わされた預言者である！

見よ、終りの日が近づいている。イエス・キリストが花嫁を迎えられる日は間近である！後の雨の聖霊はすでに降り注がれ、ペンテコステ運動のブームは世界各地の隅々まで渡っている！聖霊自ら設立した真の教会は必ず栄えるが、聖霊のない一般の教会は必ず衰える！願わくは、各教派の伝道者及び信者たちは、バプテスマのヨハネを見習って、嫉妬せず、憎まず、攻撃せず、ただ冷静に考え、早く目を覚ますように。聖霊があなたを呼びかけているから、ためらわず、悔いのないようにせよ！

問題

一、下記の誤説を正してみよ：

- ① 凡そ「イエスは主である」と言える者は皆御霊が宿っている(コリ 12:3)。
- ② 目を覚まし、罪を悟り、主を求めることなどは、皆聖霊の働きであるので、すべての信者に聖霊があることがわかる。
- ③ コリント教会の信者は、あまり悟っていないにも関わらず、神の御霊は彼らのうちに宿っている (I コリ 3:16)。
- ④ 凡そ罪のために心を苦しめる者には聖霊が宿っている。
- ⑤ 凡そ敬虔に主を愛し、心身ともに主に仕える者は、異言を語らなくても聖霊が宿っている。

二、聖霊が下記の各時代に感じさせた働きを述べてみよ：

- ① 旧約時代
- ② 前の雨が降る前



- ③ 前の雨の時代
- ④ 後の雨が降る前
- ⑤ 後の雨の時代

三、異言問題と真の教会に対して、一般の教会が取るべき態度は何であろうか。



第十一章

聖霊のバプテスマの追い求めを妨げる誤論

パウロが言った、「もし、キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのではない」(ロマ8:9)。言い換えれば、キリストの霊を持っている(聖霊のバプテスマを受けた)人こそ、キリストのものである。信者個人がそうであり、教会全体もそうである。キリストのものとはキリストにつながっていることであり(ヨハ15:4~5)、キリストから新しい命を得させられ(エゼ37:14、ヨハ10:10)、上から力を与えられるのである。小さく見れば、死ぬべき体を生かし(ロマ8:13、ガラ5:16)、だんだん清められ、個人の霊的な修業を果たすことができるのである(Ⅱテサ2:13)。大きく見れば、真理と敵対する悪魔に勝ち抜くことができ(エペ6:17)、教会を復興させ、福音を全世界に宣べ伝え、主の再臨を迎えることである(マタ24:14、黙21:2、9~10)。

それで、「聖霊のバプテスマを求めるべき」ということは、当然謙虚さをもって調べるべき最も身近な問題となるのであろう。惜しいことは、この重要な問題に対して、聖霊のない一般の教会は普遍的にひどく誤った観念を持っている。その結果は、数え切れないほどの信者に聖霊のバプテスマを求めない影響をもたらしてきた。これはいかに遺憾で心を痛めることか。彼らの過ちをまとめてみると、①五旬節はただ一度だけあって、いつまでも繰り返すことがない。②聖霊はとっくに昔の原始教会に降り注いだ。二千年以来のすべての信者には聖霊がある。③聖霊は求めるものではなく、くださるものである。この誤説は自分に害を与えるのみならず、説教や文字を通して人に伝えるなら、無知の信者にどれだけ影響を及ぼすか計り知れないものである。それで、彼らの一生に聖霊のバプテスマを受けないままでいさせる問題は決して小事ではない。



次に聖書の正しい意味に基づいて、彼らの誤説を指摘しよう。どうか読者の皆さんが謙虚に調べ、聖霊によって目が開かれ（詩119：18、エペ1：17～18）、いち早く彷徨った道から戻り、熱心に聖霊のバプテスマを受けることに努めるように。

第一節 五旬節の出来事はいつまでも繰り返すことがない

▲J. H. ピックフォード(J. H. Pickford)は「聖霊のバプテスマとは何か？」(聖書図書刊行会編集部訳)の23ページに記す、「ペンテコステは、一回限りの事実として存在している。その日のバプテスマは、くりかえされる経験ではまったくない、御霊は、ただ一回、降臨された。そして、今や、いつまでも神の子たちの中に宿られている」。ランドフ(H. G. Randolph)はその著作の「聖霊に満たされる」の16ページに記す「五旬節の日にあった聖霊のバプテスマはただ一度だけあった」。

われわれの答え：聖霊が最初に降った日は、ちょうどキリストがよみがえられた後の初めての五旬節であった(使徒2：1～4)。その日とその現象は、歴史的にはただ一度だけで繰り返すことがないのは誰も否定できず、言い争う価値もない。しかし、意義上に、聖霊がとまった時期(約一千年余り)以外に、五旬節の聖霊のバプテスマは前の雨の時代に各地でずっと降り注がれていたのだ、「一回限りの事実として存在している」とは言えない。ピリポがサマリヤの町でキリストを宣べ伝えた時、群衆はその話を聞き、その行っていたしるしを見て、大変な喜びであった。その後、使徒たちはそこに行って、みんなが聖霊を受けるようにと、手を彼らの上において祈った。そこで、彼らは聖霊を受けた(使徒8：5～8、14～17)。歴史学者はその経験を「サマリヤの五旬節」と呼んでいる。ペテロは幻で主に啓示されたので、勇敢にユダヤ人の伝統を破り、異邦人—コルネリオ一家に福音を宣べ伝え、彼らと親しくなった。ペテロが言葉をまだ語り終えないうちに、それを聞いていたみんなの人たちに、聖霊が降っ



た。同行していたユダヤ人はそれを見て驚いた(使徒10:9～23、44～48)。歴史学者はその経験を「ローマの五旬節」と呼んでいる。パウロはエペソに来た時、ある弟子たちに出会った。彼らがヨハネのバプテスマを受けたままで、聖霊を受けていないのを知って、主イエスの名によってバプテスマを授けた。そして、彼らの上に手を置くと、聖霊が彼らに降った(使徒19:1～7)。歴史学者はその経験を「エペソの五旬節」と呼んでいる(Charles R. Erdmanの著作「使徒行伝の註解」による)。この歴史の事実は消えるものではないから、なぜ「五旬節の聖霊のバプテスマは、くりかえされる経験などではまったくない」と言え、また「御霊は、ただ一回、降臨された」と言えようか。

主が昇天される前に、弟子たちに言われた、「あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタ28:20)。「わたし」とは、イエスの自称であるが、ここでは特に聖霊を指している。なぜならば、聖霊は「イエスの御霊」であり(使徒16:6～7)、「キリストの霊」とも言われるからである(ロマ8:9)。肉体となってこられたキリストが復活して昇天された後、世の終わりまでいつも弟子たちと共におられるのは御霊—「別に遣わされた助け主」(ヨハ14:16)である。「世の終わりまでいつも教会と共にいる」ことを弟子たちが望むなら、必ず「あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ」、というイエスの御言葉を守らなければならない。言い換えれば、教会が主の命じておいたいっさいのことを守らず、付け加えたり、削ったり、変えたりすると、聖霊はとどまらず、いつも教会にはおられないのである。聖書の別の箇所においてあるように、イエスは使徒たちに同じような言葉を言われた、「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。それは真理の御霊である」(ヨハ14:15～17)。



教会の歴史から教えられるが、ローマ教が変質して、原始の福音を変え、キリストの教えを越したことによって、聖霊が降らなくなった。マルチン・ルーテル (Martin Luther) は改教運動を起こしたが、完全には聖書の真理に立ちかえらなかつたため、聖霊はやはり降ってこなかつた。聖霊が止まったこの期間は、前後一千年余りあり、教会の干ばつ時期であつたが、どの教会にも聖霊のバプテスマはなかつた。ただ一つ慰めになるのは、キリスト教を地上に存続させたのが聖霊の感動ということである。従つて、われわれは「御霊は、ただ一回、降臨された。そして、今や、いつまでも神の子たちの中に宿られている」の誤説を認めないのである。

▲ピックフォードは同書の24ページに記している、「ペンテコステ以後、だれでもキリストを信じるなら、即座に聖霊を受けられる。その唯一の条件は、信仰である。ペテロは、ペンテコステの日に、このことを明らかにしている。『すると、ペテロが答えた、「悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう」(使徒2:38)。ペンテコステ以前に、キリストも同じ真理を強調されていた。『わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となつて流れ出るであろう』これは、イエスを信じる人々が受けようとしている御霊をさして言われたのである。すなわち、イエスはまだ栄光を受けておられなかつたので、御霊がまだ下つていなかつたのである」(ヨハ7:38~39)。また、パウロの手紙は、すべての信者が聖霊の内住を受けている(I コリ3:16)、そして、『キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではない』(ロマ8:9)と断定することによって、この事実をさらに確証している。」

われわれの答え：聖霊を受けるための唯一の条件は、勿論「信仰」である。パウロはガラテヤ教会に尋ねた、「あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行ったからか、それとも、聞いて信じたからか」(ガラ3:2)。また、エペソ教会

に言う、「あなたがたもまた、キリストにあつて、真理の言葉、すなわち、あなたがたの救の福音を聞き、また、彼を信じた結果、約束された聖霊の証印をおされたのである」(エペ1:13)。この二つの言葉はこの観念の正確さを証明することができる。ただし問題は、「正しく信じているかどうか」のところにあつる。もし「信仰が間違えたら」、やはり何の役にも立たず、「信じない」と何の差もない。聖霊のない一般の教会が信じているのは、「真理の教え」、「救いの福音」なのか。いや、それは「間違つた教え」、「変えられたメッセージ」なのである。もし彼らが真理の教えと救いの福音を信じているならば、必ず約束された聖霊の証印をおされるのである(エペ1:13)。しかし、彼らは聖霊の証印を押されていないので、「偽りの教え」を信じていることがわかる。では、この「偽りの教え」を信じれば、聖霊を受けることができるのであろうか。いや、受けられないのである。パウロは言つた、「あなたがたは神の宮であつて、神の御霊が自分のうちに宿つてゐることを知らないのか」(Iコリ3:16)。これは聖霊によって建てられたコリント教会に対して言つたが、現在の聖霊のない教会に対して言つたわけではないので、くれぐれもそれを理由として自分を慰めることのないように。「もし、キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではない」とは(ロマ8:9)、聖霊のない一般の教会に対して最も嚴重な警告であり、この聖句をもつて自分が聖霊を受けた証拠とすることはできない。

▲サンダース(J. Oswald Sanders)は「無量の聖霊」の77ページに記している。「ローマ人への手紙6章3~4節の教えは、教会全体がキリストと共にゴルゴダで死んだ事を言っている。だから、キリストの十字架における死は、重ねて演じ、各信者に『わたしはキリストと共に十字架につけられた』(ガラ2:20)と言わせる必要はない。同様に、五旬節に、教会全体はすでに御霊のバプテスマによってキリストにあずかつた(Iコリ12:13)から、このバプテスマを繰り返して、信者たちに『一つの御霊によって、一つのからだとなる』(Iコリ12:13を参照)



ことを確信させる必要もない」

われわれの答え：ローマ人への手紙6章3～4節に書いてあるのは、わたしたちはキリストにあずかるバプテスマを受けた時にキリストと共に死んだのである。キリストが十字架における死を繰り返す必要はないが、バプテスマを受け、キリストと共に死ぬのは各信者がすべき経験である。誰でもキリストに合うバプテスマを受けなければ、キリストの死にあずかることはないので、無論、彼と共によみがえることもできないのである（ロマ6:5）。パウロはバプテスマを受けたから（使徒9:18）、「わたしは、キリストと共に十字架につけられた」と言えた（ガラ2:19）。かつてパウロとシラスはある獄吏に言った、「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒16:31）。一見、獄吏一人だけがイエスを信じれば、家族が信じなくても救われるようであるが、実は、救いの恵みは主を信じてバプテスマを受けた者に臨まれ、不信仰の者は罪に定められるのである（マル16:16）。従って、その次に、彼とその家族一同とが、神の言を聞き、そして、一人残らずバプテスマを受けたと書いてある（使徒16:32～34）。そのように、五旬節の聖霊がとっくに降ったにしても、聖霊のバプテスマは各信者がすべき経験である。五旬節その日に、聖霊のバプテスマを受けたのは約百二十人であったが、サマリヤの町の人々を代表することはできない。サマリヤの町の人々は聖霊のバプテスマを受けたが、コルネリオ一家を代表することができない。コルネリオ一家が聖霊のバプテスマを受けたが、エペソにある弟子たちを代表することもできない。それは、彼らが受けた聖霊のバプテスマの経験は別々で、時間も場所も異なっていたので、決して五旬節の経験をもって代表することはできない。そうでなければ、どうしてサマリヤ人はバプテスマを受けていただけで、聖霊はまだ誰にも降っていなかったが、使徒たちが手を彼らの上においたところ、彼らは聖霊を受けたのであろうか（使徒8:14～17）。どうしてコルネリオ一家は御言葉を聞いているうちに、聖霊の賜物に注がれて、ペテロについてきたユダヤ人たちを、驚かせたのであろうか（使徒10:44～46）。どうしてエペソにある弟子たちは信仰に入ったときは、

誰も聖霊を受けていなかったが、パウロが彼らの上に手をおくと、聖霊が彼らに降ったのであろうか(使徒19:1~7)。

コリント人への第一の手紙12章13節にパウロは言った、「なぜなら、わたしたちは皆、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によって、一つのからだとなるようにバプテスマを受け、そして皆一つの御霊を飲んだからである」。この言葉は聖霊によって建てられたコリント教会に対して言ったのであり、聖霊のない一般の教会は全く関係のないものである。考えてみよ、どうしてサマリヤの町の人は信仰に入った時に、誰も聖霊を受けていなかったのか。どうしてバプテスマを受けた後に、誰も聖霊を受けていなかったのか。どうして使徒たちが彼らの上に手を置いてから、やっと聖霊が降ったのか。どうしてパウロはエペソの弟子たちに、信仰に入った時に聖霊を受けたのかと聞く必要があったのか。どうして彼らはパウロに「いいえ」と答えたのか。そして、どうしてパウロが彼らの上に手をおくと、聖霊が彼らに降ったのか。これらの疑問はいずれも聖霊のバプテスマを受ける経験の個別性を表すものである。決して五旬節にあった事をもって代表とするものではない。もし、キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではなく(ロマ8:9)、キリストの体にあずからないのである。ゆえに、コリント人への第一の手紙12章13節の言葉は、「五旬節に、教会全体はすでに御霊のバプテスマによってキリストの体にあずかった」という論証に、なりかねるのである。

▲サンダースは同書の78ページにさらに記している、「直接このバプテスマ(聖霊のバプテスマを言う)を記した聖句は、七箇所しかない。①《マタイによる福音書》3章11節、②《マルコによる福音書》1章8節、③《ルカによる福音書》3章16節、④《ヨハネによる福音書》1章33節、⑤《使徒行伝》1章5節⑥《使徒行伝》11章16節、⑦《コリント人への第一の手紙》12章13節。スクロージー博士(W. Graham Scroggie, D.D.)はこれらの聖句を三つに分類した。一、予言的



な見解に基づいて、バプテスマを将来に起こる事とする（マタ3:11、マル1:8、ルカ3:16、ヨハ1:33、使徒1:5）。これらの聖句には時間性の観点がある。それは予言性のもので、直接、使徒の身に応用されただけである。即ち、彼らは「間もなく」の時間に制限されたからである。もし前もって示したこれらのことを今の信者に応用すれば、今の信者を十字架以前の時代に連れ戻し、五旬節の日の事件を常に繰り返すことになる。二、教義的な見解に基づいて、このバプテスマを過去の事とする見方（I コリ12:13）。三、歴史的な見解に基づいて、バプテスマを現在実現する事とする（使徒2:1~4, 11:15~17）。信仰を確実な土台に築くには、歴史的な根拠が必要である。予言性の聖句は将来の事を指しているが、それは何であろうか。教義性の聖句は過去の事を指しているが、それは何であろうか。それは歴史性のある五旬節の日にあった事件を指しているに違いない。五旬節の日とコルネリオの家にあった事は、同じく主が聖霊のバプテスマを成就するために特に与えられた約束だと、ペテロは考えたことに注意を払わなければならない」（使徒11:15~17）。

われわれの答え：直接に聖霊のバプテスマを論じる七箇所の聖句を三つに分け、①予言性（マタ3:11、マル1:8、ルカ3:16、ヨハ1:33、使徒1:5）——ただ使徒に応用するのみ。②教義性（I コリ12:13）——過去を振り返る事③歴史性（使徒2:1~4, 11:15~17）——今実現する事、としているが、それはスローギー個人の見解に過ぎない。実際に聖書はこのような明らかな区別がないのに、どうして無理に区別することができようか。

一について論じれば、《マタイによる福音書》3章11節、《マルコによる福音書》1章8節、《ルカによる福音書》3章16節は、バプテスマのヨハネは水でバプテスマを授けるが、キリストが来られたら、聖霊によってバプテスマを授けられると言っている。《ヨハネによる福音書》1章33節は、イエスが聖霊によってバプテスマを授けるのをバプテスマのヨハネが認識できたのは、御霊が降ってイエスの身の上にとどまるのを見たからだと言っている。《使徒行伝》1章5節

は、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、間もなくイエスの弟子たちは聖霊によってバプテスマを授けられるであろうと言っている。まとめて言うと、スクロージーは予言性の五箇所の聖句が同一の事件を説明していると考えている——即ち、イエスが聖霊によってバプテスマを授けられたことである。例えば、五旬節の日に、約百二十人はイエスによって、聖霊のバプテスマを受けたが、サマリヤの町の人々もイエスによって、聖霊のバプテスマを受けた。コルネリオ一家はイエスによって、聖霊のバプテスマを受けたが、エペソの弟子たちもイエスによって、聖霊のバプテスマを受けた。注意すべき問題は、彼らはそれぞれ違った時間と場所に聖霊を授けられたが、すべて以上の五箇所の聖句に当てはまることができ、五旬節の日に使徒たちが聖霊を受けた経験に制限されないのである。そうでなければ、ペテロがエルサレムに上って、コルネリオ一家が聖霊のバプテスマを受けた事を報告した時、なぜそれが五旬節の日の経験と一緒にと言ったのか。なぜこれを「ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは聖霊によってバプテスマを受けるであろう」という主の御言葉の実現だと考えたのだろうか(使徒11:15~16、1:5)。ペテロの報告により、私たちは肯定的にスクロージーに「五旬節の日にあったのは繰り返す必要のあるべき事である。しかし、ペテロはコルネリオ一家を十字架以前の時に連れ帰らせてはいない」と答えられる。前の雨の時代はそうであったが、今日の後の雨の時代も同様である。従って、以上に述べた五箇所の聖句は今の信者にも適用できるのである。

二について論じれば、コリント人への第一の手紙12章13節に「なぜなら、わたしたちは皆、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によって、一つのからだとなるようにバプテスマを受け、そして皆一つの御霊を飲んだからである」と言ったのは、すべての信者がキリストにあって一つの体である関係を説明している——体は一つであって、それぞれの肢体は調和して互いにいたわり合うべきである(Ⅰコリ12:12~25)。キリストにあずかっていない時、



ユダヤ人とギリシヤ人に種族の隔たりがあった。奴隷と自由人にも階級の差があった。しかし、信仰に入ったら、種族間の垣が壊され、階級上の差別も除かれた。一切の信者はキリストにあって一つとなったからである(エペ2:12～19、ガラ3:27～29)。いわゆる「教義上の見解」とは、スクロージー個人の観点に過ぎず、聖書の実際の本意ではない。「過去を思い起こす」ということは、コリント教会について、しいて言うことができよう(パウロの本意ではないが)。それは聖霊によって建てられた教会だからである。但し、聖霊のない一般の教会はキリストのものではないので(ロマ8:9)、この聖句をどうして彼らに適用できようか。彼らは原始教会といったいどんな関係があるのか。

三について論じれば、使徒行伝11章15～17節に書いてあるのは、ペテロがエルサレムのユダヤ人にした証である。ペテロが語り出したところ、聖霊がちょうど五旬節に皆の上に降ったのと同じように、コルネリオ一家の上に降ったとペテロは言った。この事によって、彼は主が約束された「聖霊のバプテスマ」を思い出し、しかも、神の選びを妨げることができず、思い切って彼らにバプテスマを授けた。それで、コルネリオ一家の経験とペテロの証によって、歴代に隠された奥義は明らかになった——それは、異邦人が、福音によりキリスト・イエスにあって、共に神の国を継ぐ者となり、共に一つの体となり、共に約束にあずかる者となることである(エペ3:3～6、ロマ3:29～30)。人々はペテロの証を聞いて、よく悟った上で神を賛美して、「それでは神は、異邦人にも命にいたる悔改めをお与えになったのだ」と言った(使徒11:18)。スクロージーが言ったように、五旬節の日の経験は「歴史的」であるが、コルネリオ一家の経験も「歴史的」なのである。但し、この二回は時間も場所も異なったので、「五旬節の日の出来事は常に繰り返す必要のあること」を証明する。スクロージーは「五旬節の日とコルネリオの家にあった事は、同じく主が聖霊のバプテスマを成就するために、特別に与えられた約束だと、ペテロが考えたことに注意を払わなければならない」と言った。この言葉はさらにこの論拠の正確性を証明

することができるのに気を付けなければならない。スクロージーはまた言った「信仰を確実な土台に築くには、歴史的な根拠が必要である」。実に素晴らしい！確かに、わたしたちは使徒行伝に基づいて、彼らがいかに聖霊を与えられたか、その状況はどうであったかと原始教会の歴史を調べなければならない。なぜなら、聖霊のバプテスマを与えられた経験がないのに、さらに謙虚に歴史を調べずに、それらしき理論、空説によるのでは人の徳を高められないからだ。

▲サンダースは同書の75～76ページに記している。「Dr. F. B. Meyerは語った、『何年前に、ケジック運動 (Keswick Movement) のリーダたちはこの問題 (聖霊のバプテスマと聖霊に満たされる事) をよく考慮した上、「バプテスマ」という言葉を使徒行伝2章と10章に記してある顕著な事件に限って使い、「満たされる」と「注がれる」という言葉を信者の体験にするように決めた』。その論点は、聖霊がすでにこの時代の教会に賜り、しかもただ一度だけ賜ったことである。だから、キリストの体にある各肢体はキリストの油に注がれ、その受けるべき分がいただけるのである。ゆえに、聖霊のバプテスマは『歴史的な事件』であり、聖霊に満たされることは『個人の経験』なのである」。

われわれの答え：「聖霊のバプテスマを受ける」とは「聖霊を受ける」事である。言い方が異なっても、意味は同じである。聖書は「聖霊が降った」(ルカ24:49、使徒1:8、11:15～16、19:6)、あるいは、「聖霊を受けた」(使徒2:38、8:15、17、10:47、エペ1:13、ガラ3:14)、 「聖霊に注がれた」(テト3:6)と表現するが、皆「聖霊のバプテスマ」を言っている。ペテロはエルサレムでコルネリオ一家が聖霊を受けたことを報告した時、それは五旬節の日に経験したことと同じであり、しかもこの二回の経験を共に「あなたがたは聖霊によってバプテスマを受けるであろう」、という主の約束の実現だと言った(使徒11:15～16)。この事は「聖霊が降った」(ルカ24:49、使徒1:8、11:15～16、19:6)、「聖霊を受けた」(使徒2:38、8:15、17、10:47、エペ1:13、ガラ3:14)という経験が「聖霊のバプテスマ」であることを直接暗示している。そして、「聖霊に注が



れた」(テト3:6)という経験も「聖霊のバプテスマ」であることを間接に暗示したのである。理解しなければならないことは、五旬節の日にあった事、サマリヤの町の人にあった事、コルネリオ一家にあった事、そしてエペソの弟子たちにあった事がすべて聖霊のバプテスマの体験であるということ。使徒行伝2章と10章の経験こそ聖霊のバプテスマであるが、ほかに聖霊を受けた経験が聖霊のバプテスマではないと、誰も勝手に制限することはできない。いわゆる「顕著な事件」も、使徒行伝2章と10章の経験だけに限られるものではない。8章に書いてあるように、御霊がサマリヤの人々に授けられたのを「見て」、魔術師のシモンは金を出して、わたしが手をおけばだれにも聖霊が授けられるように、その力をわたしにもくださいと使徒たちに言ったからである(17~19)。19章に、エペソにある弟子たちは聖霊を受けていなかったと書いてあるが、パウロが彼らの上に手をおくと、聖霊が彼らに降り、それから彼らは異言を語ったり、預言をしたりし出した。その人たちはみんな十二人ほどあって、本人がわかれば、周りで見た人もわかった(1~7)。この二回の出来事は「顕著」ではないのか。どうして2章と10章の出来事のみ「顕著な事件」と言えようか。

「油に注がれる」というのも「聖霊を受ける」事である。言い方が異なっても、やはり意味は同じである。真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう(ヨハ16:13)と、イエスは言われた。この油が、すべてのことをあなたがたに教える(Iヨハ2:27)と、ヨハネは言った。さらに、イエスはイザヤの預言を引証して言われた、「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである」(ルカ4:18)。ヘブル人への手紙の作者も同じ箇所を引用してイエスの証人となった、「それゆえに、神、あなたの神は、喜びの油を、あなたの友に注ぐよりも多く、あなたに注がれた」(1:9)。「油」は聖霊を象徴し、「油に注がれる」は聖霊を受ける事を象徴する。実は、ケジック運動のリーダーたちが言った「注がれる」は「バプテスマ」と一致している。「注がれる」と「バ

プテスマ」との意味が同じであることが分かり、「バプテスマ」が聖霊を受けるすべての経験に適用できることを認め、しかもそれが使徒行伝2章と10章の経験だけに限られないと分かった以上、「油に注がれる」という言葉も例外にしてはならない。

その名の示すとおり、「聖霊に満たされる」とは即ち人の心が完全に聖霊に占められる状態である。これは個人の経験かも知れないし(使徒6:5、9:17)、あるいは団体の経験の可能性もあるが(使徒2:4、4:31)、必ずしも「信者個人の経験」とは限らない。聖書から見れば、聖霊に満たされた経験は五つに分類することができる。①聖霊のバプテスマを経験しない者でも、聖霊に満たされることがある(ルカ1:15、67)——まさに旧約時代の預言者たちのような経験である。②聖霊が降ったと同時に、聖霊に満たされる(使徒2:4、9:17)——だから、時に聖霊のバプテスマを受けるのも聖霊に満たされると言う。③聖霊に満たされたゆえに、聖霊の力に満ち溢れる(ルカ4:1、14、使徒4:8～13、31、13:9～11)。④聖霊に満たされたゆえに、喜びに溢れる(使徒13:50～52)。⑤聖霊に満たされたゆえに、超然たる賜物が与えられるなどである(使徒6:3、5、7:55、59～60、11:24)。

以上の五つを見てわかるように、五旬節の前にも「聖霊に満たされた」実例があった(ルカ1:15、67)。ただしそれは旧約時代の預言者たちの経験と同じだけであった。聖霊が選民の心に働きかけることについて、約束の聖霊が降る前(ヨハ7:37～39)に、それは「いつも共におる」のではなく(ヨハ14:16)、「感動を受ける」のである(Ⅰコリ12:3)。しかし、五旬節の日以降の聖霊のことを話すとなると、それはすべて聖霊のバプテスマを経験した者の事を言っているのである。言い換えれば、前の雨の時代に、聖霊のバプテスマを経験した信者こそ聖霊に満たされることがある。聖霊のバプテスマを受けていない者なら、このような体験はあり得ないのである。



「『バプテスマ』という言葉を使徒行伝2章と10章に記してある顕著な事件に限って使い、『満たされる』と『注がれる』という言葉を信者の体験にするように決めた」とは、聖霊のバプテスマを「歴史的な事件」とし、代表的なものとしたことである。聖霊に満たされることは「個人の経験」であり、個別のものである。そして、「バプテスマ」と「注がれる」とを分けて、二つの経験とする。これらはケジック運動のリーダーたちの共通の誤りであり、Dr. F. B. Meyerとサンダースたちの共通の誤りでもある。誤った原因となったのは、誤った論点を前提にしたからである——「聖霊はすでにこの時代の教会に賜り、しかもただ一度賜ったのである。だから、キリストの体にある各肢体は、キリストの油に注がれ、その受けるべき分がいただけるのである」。「この問題をよく考慮した上」という一句から、彼らは研究に非常に慎重な態度を取り、かつ確かに苦勞をしたことがわかる。ほんとうに尊敬すべきである。いかんせん、この問題に対して経験がないため、ただ闇の中で模索しているのだ。言っていることは正しいようで、誤っている。初めはわずかな差でも、終わりには千里の差となるぐらいである。人にも自分にも害を与えるよりひどいことはないであろう！

▲レグタース(L. L. Legters)は「聖霊に満たされる生活」という著作の52ページに記している、「五旬節の日に、使徒たちが聖霊に満たされて異言を語ったのは、奇跡である。その五旬節の事は再び現れない。というのは、五旬節はただ一つだけだからである」。

われわれの答え：「五旬節の日に、使徒たちが聖霊に満たされて異言を語った」のは、確かに奇跡である。レグタース氏の言葉に間違いがない。パウロは言った、「このように、異言は信者のためではなく未信者のためのしるしであるが、…」(I コリ14:22)。ここの「しるし」の原文また英訳は、マルコによる福音書16章17節にある「しるし」と同じである。いわゆる「しるし」とは神が臨在される証拠——「奇跡」である。従って、信じる者には、このような

しるしが伴うとイエスが言った時は、「新しい言葉（異言）を語る」事を五つのしるしの中に入れられたのである（マル16:17～18）。異言を語る事は聖霊を受けた証拠であり（使徒10:44～46）、聖霊を受けた事は神がわたしたちのうちにいます証拠である（Iヨハ3:24）。だから、異言を語る事はもちろん奇跡である。それは未信者のためのしるしとし、彼らに神が共にいますことを知らせることができるからである。

「その五旬節の事は再び現れない。というのは、五旬節はただ一つだけだからである」と言う前に、レグタース氏はまず、「五旬節の日に、使徒たちが聖霊に満たされて異言を語ったのは、奇跡である」と言った。五旬節の日に聖霊が降ったからこそ、異言を語る奇跡が起こったが、その後にこのような奇跡はないと彼は思ったようである。しかし、コルネリオ一家とエペソの弟子たちが聖霊を受けて、同じような奇跡を体験したと聖書に書いてある（使徒10:44～46、19:1～7）。だれよりも多く異言を語れることを、パウロは自分で証をし、そして、異言を語ることを妨げてはならないと言った（Iコリ14:18、39）。前の雨の時代に、すべて聖霊のバプテスマを受けた信者は異言を語る奇跡を体験したので、それは五旬節の日に限らないのである。聖霊が初めて降った日は、ちょうどキリストが復活されてからの最初の五旬節であった（使徒2:1～4）。その日について、歴史的にはもちろんただ一度だけであるが、意味的に考えると、五旬節に起こったことは一度だけではなく、ずっと繰り返しているのである。

第二節 すべての信者は聖霊がある

▲J.H. ピックフォードの「聖霊のバプテスマとは何か？」の29～30ページに記されている、「すべての信者は御霊によってバプテスマを受けた。このことは、パウロの証言と一致している。パウロは、すべての信者は、ユダヤ人もギリシャ人も、奴隷も自由人も、御霊によってバプテスマを受けている、と断言



する。そしてこのバプテスマの目的は、キリストの体の統一性を証明することである（I コリ12：13）。この聖句に用いられている動詞の時制と、どんな階級の人々がバプテスマを受けたか、に注意してほしい。御霊のバプテスマは、宗教的、人種的、社会的差異がどうであろうとも、すべての信者の過去における経験を団結させる為である。では、いつ御霊のバプテスマが行われたのか。すべての信者は代表的にすでにバプテスマを受けているのである。このことはペンテコステにおけるユダヤ人の経験、或いは異邦人の経験に示された御霊の歴史的顕現によって明らかである。聖書は、さらに別の御霊のバプテスマがある、とは教えていない。言うまでもなく、パウロが説明を加えているように、回心と同時に『一つの御霊を飲んだ』時、一つの体の部分とされているのである。これは決定的な事柄である。すべての者は御霊によってバプテスマを受けたのである。今日、この真理にさからって、救われた後にバプテスマ体験が必要であると強調することは、神に対する公然たる侮辱であり、キリスト教の信仰に偽りの体験を持ちこむことに他ならない。

われわれの答え：コリント人への第一の手紙12章13節のこの内容は、聖霊によって設立されたコリント教会に対して言った言葉であるので、今の聖霊のない一般の教会には適用しない。もし「すべての信者が御霊によってバプテスマを受けた」を真理とするなら、なぜサマリヤの町の人々は信じてバプテスマを授けられた時、聖霊を受けないで、その後、使徒たちが手を彼らの上においたところ、彼らははじめて聖霊を受けたのか（使徒8：14～17）。なぜエペソの弟子たちも同じ体験をしたのか（使徒19：1～7）。まさかサマリヤの町の人とエペソの弟子たちが信仰に入ってバプテスマを授けられた時は、まだ信者と言えないのか。ピックフオードが言う「すべての信者」の定義は何であろうか。「信じる」と「バプテスマを受ける」、また「聖霊のバプテスマを受ける」とは、それぞれ異なる事であることを、分らなければならぬ。これらの問題は信仰において各自のルートがあり、それを同一の時間に体験すると思えばはいけない。使徒行伝の作者であるルカが指摘したように、原始教会の信者が聖



霊のバプテスマに対する経験に対し、ある者は水のバプテスマを受けてから聖霊のバプテスマを受けるのである。例えば、サマリヤの町の人はそのようである(8:14~17)。ある者は聖霊のバプテスマを受けてから、水のバプテスマを受ける。例えば、コルネリオ一家はそのようである(10:44~48)。歴史上にあったこの二つの事件は、以上の論説を証明するのに充分である。

「すべての信者は代表的にすでにバプテスマを受けているのである」とは、最大の偽りであろう。サマリヤの町の人(使徒8:14~17)、パウロ(使徒9:17)、コルネリオ一家(使徒10:44~46)及びエペソの弟子たちの経験は(使徒19:1~7)、この観点を否定するのに有力である。なぜならば、彼らはそれぞれ聖霊を受けた。時間も場所も異なっており、決して五旬節の日にあった歴史的顕現を代表とするものではないからである。もちろん、彼らは同じ聖霊のバプテスマの体験をしてきたが、それは「別の聖霊のバプテスマ」ではない。同じ聖霊のバプテスマを、わたしたちは各々授けられることはできないと言うのか。

「一つの御霊を飲んだ」経験も「回心と同時に」あったのではない。いわゆる「一つの御霊を飲んだ」というのは、「水」を象徴として、聖霊を受けることを説明しているのである(ヨハ4:14, 7:37~39)。原始教会の歴史を辿ると、サマリヤの町の人とエペソの弟子たちが悔い改めた時は、誰も聖霊を受けなかった。一人もなかった。彼らは、水のバプテスマを授けられ、使徒たちが手を彼らの上においた時に聖霊を受けたのである。「すべての者が御霊によってバプテスマを受けたのである。」とは、「決定的な出来事」ではなく、「真理」でもない。「御霊のバプテスマの体験を強調する」ことは聖書の真理であり、使徒たちが一同強調したものである(使徒8:15~17, 19:2~6, ロマ8:9)。これを「神に対する公然たる侮辱である」と思えるのか。公平且つ冷静で論ずると、「すべての信者は代表的にすでにバプテスマを受けているのである」、或いは「御霊のバプテスマを受けた時に必ずしも異言を語るとは限らない」を主張し、



或いは「御霊のバプテスマの体験を強調することは、神に対する公然たる侮辱である」と考えることこそ、「キリスト教の信仰に偽りの体験を持ちこむことに他ならない」。

▲ピックフォードは同書の47ページに記している、「聖書には、御霊のバプテスマを受けよ、という命令は見当たらない。そのような命令は、『わたしたちは皆、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によって、一つのからだとなるようにバプテスマを受け、』とあるコリントへの第一の手紙12章13節と照らし合わせて見ると、全く無意味であろう。われわれは皆、御霊によってバプテスマを受けたのだ」。

▲ランドフは「聖霊に満たされる」の8ページに記している、「主は五旬節の日に彼（聖霊を指す）を遣わされた。それは父が約束された賜物である。その日から今日に至るまで、聖霊は長くすべての信者の間におられる。罪人が信者のかたまりの一員となって、たちまちほかのメンバーと共に聖霊にあずかることになる」。14ページにさらに記されている、「聖書に聖霊のバプテスマを受けよと信者に促し、命じた記載は一箇所もないので、それは彼らがすでに聖霊を受けた証拠である」。

われわれの答え：「その日（五旬節を指す）から今日に至るまで、聖霊は長くすべての信者の間におられる。罪人が信者のかたまりの一員となって、たちまちほかのメンバーと共に聖霊にあずかることになる」とはランドフ氏の独断である。サマリヤの町の人、及びエペソの弟子たちが信者になった時は五旬節の日以降のことであったが、「たちまち」聖霊を受けたのではない。使徒たちが彼らの上に手をおいたところ、彼らは聖霊を受けたのである（使徒8:14～17、19:1～7）。使徒時代に、「異言を語る」ことは聖霊を受けたしるしとされた（使徒10:44～46）。もし「五旬節の日から今日に至るまで、聖霊は長くすべての信者の間におられる」というなら、なぜ今日の一般の教会の多くは「異言を語る」経験がないのであろうか。



「聖書には、御霊のバプテスマを受けよ、という命令は見当たらない。」と「聖書に聖霊のバプテスマを受けよと信者に促し、命じた記載は一箇所もない」とは、ピックフォード並びにランドフの無知を表す言葉である。五旬節の日の前に、わたしは水でバプテスマを授けているが、キリストが来ると、彼は聖霊によってバプテスマを授けられるとバプテスマのヨハネは言っており(マタ3:11)、人々にキリストに従うべきだと指示した。キリストが昇天される前にも同じ言葉を読まれ(使徒1:5)、そして、父が約束された聖霊を授けられるまでは、都に留まっていなさいと命令された(ルカ24:49、使徒1:4~5)。五旬節の後に、ペテロとヨハネはサマリヤの町へ行った。そこの信者には聖霊はまだだれにも下っていないのを聞いて、みんなが聖霊を受けるように、手を彼らの上においたところ、彼らは聖霊を受けた(使徒8:14~17)。エペソの弟子たちに聖霊がない、そして、彼らが受けたのは悔い改めのバプテスマというのを知って、パウロは改めて彼らにバプテスマを授け、そして、彼らの上を手をおくと、聖霊が彼らに下った(使徒19:1~7)。主イエスも使徒たちも「聖霊のバプテスマ」を重視することで一致したのは、信者にその経験がなければ、力が与えられず(ルカ24:49、使徒1:8)、キリストのものではない(ロマ8:9)、と思ったからである。よって、なぜ「聖書には、御霊のバプテスマを受けよ、という命令は見当たらない」と言えるのか。どうして「聖書に、聖霊のバプテスマを受けよと信者に促し、命じた記載は一箇所もない」と言えるのであろうか。

「御霊のバプテスマを受けよ」の命令は、まだ聖霊によってバプテスマを受けていない者に対して言うのであるが、コリント人への第一の手紙12章13節の記載は、すでに聖霊によってバプテスマを受けた者に対して言ったのである。従って、「そのような命令(聖霊によってバプテスマを受けよという命令)を『わたしたちは皆、ユダヤ人もギリシヤ人も、一つの御霊によって、バプテスマを受け、』と照らし合わせれば、「無意味」とは言い切れない。ただし、コリント第一の手紙12章13節の箇所は、聖霊によって建てられたコリント教会に対し



て言っているので、聖霊のない一般の教会とはいっそう無関係である。断じてここを引証して「われわれは皆、御霊によってバプテスマを受けた」と自分を欺きながら人を騙すべきではない。

▲レグタースは「聖霊に満たされる生活」の2～3ページに記している、「およそ信じる者に聖霊が降った（I コリ6:19）。この事実を信じなければ、聖霊に満たされることはできない」。4ページにまた書いた、「信じた時に降った」（使徒11:15、17）。そして、6ページにさらに記す、「信仰によって、キリストがあなたがたの心のうちに住み、…」（エペ3:17）。

われわれの答え：「およそ信じる者に聖霊が降った。この事実を信じなければ、聖霊に満たされることはできない」。注意をせよ！「およそ信じる者は聖霊を受ける」とレグタースは言わず、「およそ信じる者は聖霊を受けた」と言ったのである。「受けた」とは既成の事実であるが、「受ける」とは未来の事実であって、時間的に区別がある。無論、五旬節の日とコルネリオ一家の経験では聖霊が「信じた時に降った」が（使徒11:15、17）、サマリヤの町の人とエペソの弟子たちは違った経験をした（使徒8:14～17、19:1～7）。もちろん「信じる」とは、聖霊を受ける必要条件であるが、聖霊を受けることは必ずしも「信仰に入った」時に体験するとは限らない。たとえ使徒時代にある者が「信仰に入った時に、聖霊を受けた」、或いは「およそ信じる者に聖霊が降った」としても、必ずしも今日の一般の教会と関わっているとは限らない。なぜならば、使徒時代の信者が属する教会は聖霊によって設立されたが、今日の一般の多くの教会は聖霊によって設立されたのではなく、且つ聖書の教えに相応しくないものを信じているからである。

▲サンダースは「無量の聖霊」の78～79ページに記している、「この聖句（コリント第一の手紙12章13節のこと）だけは、聖霊のこの使命における意義と目的を説明してくれる。この聖句において四つの事実が明らかである。①どの信

者でもこのようなバプテスマ（聖霊のバプテスマ）を受けた。『わたしたちは、…皆一つの御霊によって、…バプテスマを受けた』。この『皆』とは、道徳上に罪を犯した者も、偶像に供えたものを食べた者も一切含まれる。②このバプテスマはすべての信者が体験した過去のことである。それは、原文にこの言葉の動詞は不定過去形を使ったからである。③このバプテスマは信者がキリストの体にあずかることにかかわる。信者はキリストの命にあずかり、その体系につながることこそ、『キリストのうちにある』。それで、つながることによる幸いを楽しむことができるからである。④この点において、信者の間に区別がない。『ユダヤ人もギリシャ人も』、一切の特権はなくなった。『奴隷も自由人も』、一切の身分に区別はない。皆一つの体の肢体になったのである。当時はそうであったが、今も同様である」。

われわれの答え：サンダースのコリント人への第一の手紙12章13節から示した四つの事には、ひどい誤りがある。①「皆」という文字は聖霊によって建てられたコリント教会に対して使ったのであり、今日の一般の教会とは関わりがない。②今日の聖霊のない一般の教会は聖霊のバプテスマさえ経験していないので、「使われた動詞」が何であれ役に立たないであろう。③聖霊のない一般の教会は聖霊のバプテスマさえ経験していないのに、なぜ「キリストのうちにある」と言えるのであろうか。なぜ一切の幸いを楽しむことができるのであろうか。④確かに、「一切の特権はなくなった。一切の身分に区別はない。皆一つの体の肢体になったのである」。但し、この一体関係は聖霊のない一般の教会と何のつながりがあるであろうか。

▲サンダースはその著作の83ページにモール（H. C. G. Moule, D. D.）の言葉を引用して記している、「わたしは親切で霊的な同情心をもって話すが、今日信心深いクリスチャンの中で、普遍性の誤りが潜伏しているようである。即ち、奉仕をもっと有効的に運ばせるため、聖霊の特別のバプテスマを『待ち望んでいる』ことである。われわれは『一つの御霊によって、一つのからだとなるよ



うにバプテスマを受ける』とは当然に成し遂げられたことである。ゆえに、今、われわれは最も謙虚の信仰をもって、魂と命のすべての広い道を開いて、すでに授けられた聖霊に満たされることを本分にすべきではないであろうか。

われわれの答え：モール氏が言った「親切で霊的な同情心」などは実に理解しにくいものである。「信心深いクリスチャンは奉仕をもっと有効的に運ばせるため、聖霊の特別のバプテスマを『待ち望んでいる』」ことはなぜ誤りなのか。聖霊を求める人を妨げることを「正しい」とし、聖霊の特別なバプテスマを待ち望むのを「間違い」とするのは、是非を逆さまにするおかしなことであり、これ以上ひどいことはない。モール氏の言う「霊的」なレベルがこんなにも悲惨なところまでいっているとは、実に訳が分からない。「一つの御霊によって、一つのからだとなるようにバプテスマを受ける」ことは、当然成し遂げられたことであるが、聖霊のない一般の教会とは関わりがないので、けっしてこれをもって自分を慰め、聖霊のバプテスマを受ける機会を失ってはならない。

▲サンダースはさらにその著作の132ページに記している、「聖霊が賜われることは成し遂げられたが、教会の肢体はずっと各自に分け与えられるのを待たねばならない。多くの人は聖霊が信者に賜ったことをまだ知らないのである」。

われわれの答え：五旬節の日に聖霊が降ったところ、天下のあらゆる国々から、エルサレムへ祭りを守るために帰ってきたユダヤ人たちは驚き怪しんで言った。それは「見聞き」できたからである（使徒2：1～4、12、33）。使徒たちがサマリヤの町の人の上に手をおいたところ、彼らは聖霊を受けた。魔術師のシモンはそれを「見た」。だから、金を出して、人に聖霊を受けさせる権威を買おうとした（使徒8：17～19）。ペテロについてきたユダヤ人が、コルネリオ一家が聖霊を受けたのを知ったのは、「彼らが異言を語っているのを聞いた」からである（使徒10：44～46）。パウロがエペソの弟子たちに出会って、彼らに「あなたがたは、信仰にはいった時に、聖霊を受けたのか」と尋ねたところ、



「いいえ、聖霊なるものがあることさえ、聞いたことがありません」と答えた。一歩進んで尋ねた結果、彼らが誤ったバプテスマを受けたことが分かった。それで、改めて主イエスの名によって彼らにバプテスマを授けた。そして、パウロが彼らの上に手をおくと、聖霊が彼らに降り、それから彼らは「異言を語った」(使徒19:1~7)。これでわかるように、人が聖霊を受けたかどうかは明白な経験である。自らわかっている、傍観者も見聞きできるのであり、頼りにならない感覚で自分を慰めるのではない。それにも拘らず、なぜ「多くの人は聖霊が信者に賜ったことをまだ知らない」と言うのか。答えは一つしかない。即ち、彼らはあくまでも聖霊を受けたことがなく、心に虚しさを感じ、魂も飢え渴いているあまり、自分を慰めることができないからであろう。

使徒たちが書いた手紙は、聖霊によって建てられた教会や聖霊のバプテスマを受けた個人宛なので、当然「聖霊のバプテスマを受けるべき」、「聖霊のバプテスマを受けた状態」などについては触れなかった。すでに体験してきて、はっきりとしたことなので、くどくどと言う必要はなかったからである。聖霊のバプテスマをテーマにすれば、四つの福音書に書いてあるのは、聖霊のバプテスマの約束であり、心の虚しい人に聖霊のバプテスマを追い求める熱意と望みを引き起こすことである。使徒行伝に書いてあるのは、聖霊が降った歴史であり、すべて聖霊のバプテスマを慕う人にその状況をわからせることである。使徒たちが書いた手紙は、聖霊のバプテスマを受けた人に、聖霊の導きに従い、御霊の実を結ぶように励ました。だから、聖霊のバプテスマを受けていない人は聖霊に満たされ、キリストの体にあずかることを慕って、上から力を得たいならば、謙虚に四つの福音書及び使徒行伝を調べ、熱心に祈るべきではないのか。

しかし、聖霊のない一般の教会の多くはこの最小限度の常識すらなく、謙虚に四つの福音書と使徒行伝を読まないで、使徒たちが書いた手紙だけを読むの



で、実に本末転倒なことである。そして、その手紙を一度かじるとずっと手放さず、自分を欺きながら都合のいいように応用しているので、極めて嚴重な誤った観念をもたらした。「あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか」を読むと（I コリ3:16）、自分が神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていると思い込んでしまう。「わたしたちは皆、ユダヤ人もギリシヤ人も…、一つの御霊によって、一つのからだとなるようにバプテスマを受け、そして皆一つの御霊を飲んだからである」を読むと（I コリ12:13）、自分がキリストのうちにある肢体であって、すでに聖霊のバプテスマを受けたと思い込んでしまう。「あなたがたもまた、キリストにあって、真理の言葉、すなわち、あなたがたの救の福音を聞き、また、彼を信じた結果、約束された聖霊の証印をおされたのである」を読むと（エペ1:13）、自分が福音を聞いた以上、約束の聖霊の証印を押されたと思い込んでしまうのである。

第三節 聖霊のバプテスマを求める必要はない

▲J. H. ピックフォードは「聖霊のバプテスマとは何か？」の21～23ページに記している。「新約聖書において、『聖霊によってバプテスマを受ける』、および、それに相当した表現が用いられているのは、六回だけである。①マタイによる福音書3章11節、②マルコによる福音書1章8節、③ルカによる福音書3章16節、④ヨハネによる福音書1章33節、⑤使徒行伝1章5節、⑥使徒行伝11章16節。引用した各聖句は、聖霊のバプテスマは神が主権をもって送られたものである、ということを示している。どの箇所も、『あなたがたはバプテスマを受ける』と言い、『あなたがたはバプテスマを受けるかも知れない』とっていない。御霊の降臨に人間的条件は全く関与していない。神は、ご自分の主権に基づいて、ペテコステを定められた。それらは、弟子たちの待望や苦悶によって、決定を促されたものではない。しかし、多くの人がこのことを忘れてい



聖霊のバプテスマは、決して求めて与えられたものではなく、送られてきたものである」

われわれの答え：聖霊のバプテスマは当然「神の主権によって送られたもの」である。人の主権によるものだとは決して誰も言わない。神の約束は肯定的なものであり、いずれも「このかたは、聖霊によってバプテスマをお授けになるであろう」、「あなたがたは聖霊によってバプテスマを受けるであろう」と言っているが、「あなたがたはバプテスマを受けるかも知れない」と言っているところはない。神が信者に聖霊を送る主権について言えば、聖霊のバプテスマは神がいつくしもうとする者をいつくしむ賜物であり、だれも阻止することはできない(使徒10:44~45、11:15~17)。神が聖霊を信者に賜う約束の肯定性について言えば、神がその信実によってこう宣言された以上、わたしたちは疑わず信仰によってしきりに求めればよい(ルカ11:8)。聖霊は神の主権によって送られたと言おうか、聖霊を賜う約束は確実だと言おうか、これで求める必要性を否定することにはならない。

聖霊は五旬節の日に降られたが、それは人に促されたり、妨げられたりするのではなく、当然神の主権によるものである。それにしても、わたしたちは「聖霊の降臨に人間的条件は全く関与していない」と言えないし、なおさら「聖霊のバプテスマは、決して求めて与えられたものではない」とも言えないであろう。ルカによる福音書に、切に祈り求めよと励ますために、イエスはまず「パンを借りる」譬えを語り、そして、「あなたがたのうちで、父であるものは、その子が魚を求めるのに、魚の代りにへびを与えるだろうか。卵を求めるのに、さそりを与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物を知っているとすれば、天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さらないことがあろうか」と言われた(11~13)。パン、魚、卵は肉体の命を維持する食物である。父親は子を愛するため、子の要求に応じて、これらの良い物を与える。聖霊は最も良いものであって、霊の命を豊



かにしてくださる。天の父はわたしたちを愛するため、必ず祈りを聞き入れ、聖霊をくださる。ヨハネによる福音書4章10節に主イエスはサマリヤの女に話されたことが書いてある。「もしあなたが神の賜物のことを知り、また、『水を飲ませてくれ』と言った者が、だれであるか知っていたならば、あなたの方から願い出て、その人から生ける水をもらったことであろう」。ここの「神の賜物」は聖霊を指している(使徒10:44~45、11:15~17)。「生ける水」は聖霊の象徴である(ヨハ4:14、7:37~39)。世のあらゆる物質的な楽しみと慰めはヤコブの井戸の水のように、飲む者は誰でもまた渇き、永遠に人の心を満たすことができない(ヨハ4:12~13)。主が与える水は、飲む人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがり、喜びがみちあふれる(ヨハ4:14)。この生ける水を得る方法は、キリスト——生ける水を賜う主を認識して、いち早く彼に「祈り求める」ことである(ヨハ4:10)。従って、聖霊が降るには、人の条件を必要とする。この条件は即ち「祈り求める」ことである。ルカによる福音書11章とヨハネによる福音書4章にはこの事をはっきりと説明している。そのため、「聖霊のバプテスマは、決して求めて与えられたものではない」という観点は極めてひどい誤りである。

▲サンダースは「無量の聖霊」という著作の79ページに記している、「聖書のどこにでもこのようなバプテスマ(聖霊のバプテスマ)を信者に追求せよと勧めていない。また、このバプテスマを受けた信者と受けていない信者とを区別していない」。132ページにさらに書いた、「聖霊を求める讚美歌はたくさんあるが、それはまるで人が願い求めないと聖霊が降らない事のようなので、実に恐ろしい誤りである！この願いは一千九百数年も遅れた。それは、聖霊がとっくの前にここにおられるからである。わたしたちの一生に聖霊の力が明らかに現されるように求めるのは正確であるが、再びそれが降るように求めるのは余計なことである」。

われわれの答え：ルカによる福音書11章13節にイエスが言われた、「この



ように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物を知っているとするれば、天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さないことがあるか」。そして、ヨハネによる福音書4章10節に言われた、「もしあなたが神の賜物のことを知り、また、『水を飲ませてくれ』と言った者が、だれであるか知っていたならば、あなたの方から願い出て、その人から生ける水をもらったことであろう」。いずれも聖霊のバプテスマは「願い求める」ことによって与えられると説明している。そのほかに、ローマ人への手紙8章9節でパウロが言った、「もし、キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではない」。そして、エペソ人への手紙1章14節で言った、「この聖霊は、わたしたちが神の国をつぐことの保証であって、…」。

この二箇所も信者が聖霊のバプテスマを体験すべきことを示したのである。だから、どうして「聖書のどこでもこのようなバプテスマ（聖霊のバプテスマ）を信者に追求せよと勧めない」と言えようか。サマリヤの人々が信仰に入った時、聖霊はだれにも降っていなかった。使徒たちが手を彼らの上においたところ、彼らは聖霊を受けた(使徒8:14~17)。エペソの信者が主を信じた時、誰も聖霊を受けなかった。パウロが主イエスの名によって、彼らにバプテスマを授けた時、やはり聖霊を受けた者がなかった。パウロが主イエスの名によってバプテスマを授けた時も聖霊はだれにも降っていなかった。パウロが手を彼らの上においたところ、彼らが聖霊を受けたのである(使徒19:1~7)。この二つの歴史の出来事は、サマリヤの信者とエペソの信者が聖霊を受ける前後をはっきり区別したのに、どうして「聖書のどこにも聖霊のバプテスマを受けた信者と受けていない信者とを区別していない」と言えようか。

「讚美歌」は心の歌であり、詩人と作曲家がそれを通して自分の感情を表す作品である。礼拝用のすべての讚美歌は、神の偉大なる所を称える、恵みを感謝する、願い求める、悔い改めるであり、どれも作者の真心の表現である。この真心の表現は本人以外には、なかなか徹底的に理解しにくいものであろう。「聖



霊を求める讚美歌はたくさんある」という言葉はちょうど作者たちの心がいかかに飢え渴いているか、聖霊のバプテスマに対してどれだけ慕っているかを表したものである。たとえある者が彼らの観点を「実に恐ろしい誤りである！」と声高く言い、また「この願いは一千九百数年も遅れた。それは、聖霊がとつくの前にここにおられるからである」と言っても、絵に描いたパンのように、ただの空想で一時的に満足するようなものだけである。実はその心は虚しさのあまり、どうしようもない状態である。サンダースが「聖霊を求める讚美歌はたくさんあるが、それはまるで人が願い求めないと聖霊が降らない事のようなので、実に恐ろしい誤りである！この願いは一千九百数年も遅れた。それは、聖霊がとつくの前にここにおられるからである」と言った理由は次のようである。①讚美歌の作者の心が理解できないからである。彼らは受けていない聖霊のために飢え渴いていたが、サンダースは彼らが聖霊を受けたと言い張った。②謙虚に四つの福音書と使徒行伝を調べなかったからである。それで、聖霊が求めて授けられることを知らずに、それを「恐ろしい誤り」と大胆に断言した。③聖霊が千九百年以上前に降られたことだけを知り、聖霊が一時期、降らなくなったことを知らないからである。それで、聖霊は一度しか降らなかった、五旬節の出来事はただ一つしかないと誤解した。④「異言を語る」ことは、聖霊を受けた証拠であり、又聖霊を受けた者に授けられる「一般性の賜物」であることを知らずに、ただ「特殊の賜物」だと思ったからである。⑤すべての信者が聖霊を体験したとは限らないことを知らず、凡そ主イエスを信じる者は信仰に入ったと同時に聖霊を受けたと思ったからである。

「聖霊の力がわれわれのいのちの中で明らかに表すように願い求めるのは正確であるが、再びそれが降るようにと求めるのは余計なことである」、もし讚美歌の作者が聖霊のバプテスマを受けたならば、彼らはだれよりもはっきり知っているはずである。彼らは人に言われなくてもよく解っている、聖霊の力が自分のいのちを豊かにするよう求めるべきだと、だから、聖霊が降るのを求め



ることではないであろう。では、なぜ彼らはなおも聖霊を求める讚美歌を書くのか。センチメンタルな作品を書き、みんなの共感を得られないばかりか、人をいらつかせるということをする程、彼らは幼稚だろうか。実は、彼らは聖霊を受けていないために心の渇きをひどく感じ、思わず切に願い求めていたのだ。それで、文字を綴って詩を書き、音符をもって歌を書き、最も敬虔な心で熱望を歌った。さらに、それを世に公開して、万人に心をつにして歌わせ、聖霊の降臨を求め、五旬節の盛況を再現することによって、すべて熟睡している信者を呼び目覚まし、世のすべての教会を復興させようとしているのである。これ以上喜ばしい事はなく、賞賛すべきであるが、意外にもサンダースは感動を受けず、謙虚に聖霊を求めないばかりか、一切を帳消しにして、聖霊の降臨を求めるのが余計なこととまで断言してしまった！

▲同書の82～83ページにサンダースは記している、「『待つ』ことは必要なのであろうか。ある者はこのバプテスマを受けるには、『待つ』べきだと固守しているため、この問題について簡略な検討をするのは不適切ではない。百二十名の人々が屋上間で待っていたのは、疑えない事実である。且つ彼らがそのとおりにしたのは、キリストの命令に従ったからである(ルカ24:49、使徒1:4)。彼らは指示されたとおりに『エルサレム』にとどまっていた。ただし、その命令は今の信者に適用するのか。もしそうだとすれば、イスラム教徒がメッカへ参拝に行くように、クリスチャンもエルサレムへ行かなければならないことになるではないか。なぜならば、この命令はほかの所では守ることができないからである。聖霊及びバプテスマは使徒たちが待ったことから『引き起こされた』のかは、この問題を研究する鍵である。その答えは明らかに『いいえ！』である。聖霊が降った時は『五旬節の日が来た』からである。その時、復活された主は天の父のところへ行かれた。その時、万物を創造される前に定められた不思議が起こる日がきたのである」。

われわれの答え：昇天される前、イエスは弟子たちに言付けられた、「見



よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい」(ルカ24:49)。「とどまる」とは、ぼんやりと待つことではない。そこに聖霊を受けるまで「求める」意味が付随している。求める意味がなければ、それはただ待つだけで、むだになる一方である。逆に言うと、求めても、待とうとしないなら、中途半端なことになり、やはり何の役にも立たない。イエスが天に上げられてから、約百二十名の弟子がその命令に従って、エルサレムにある屋上の間に集まり、毎日心を合わせてひたすら祈り、少しも気を緩めなかった。やっと五旬節の日に、約束の聖霊が降り、一同は聖霊に満たされ、異言を語り出した(使徒1:12~15、2:1~4)。これで、待つことに求める意味が加わり、ひたすら祈る意味も含まれていることがわかる。待つ効果は聖霊の降臨をもたらすので、すべて聖霊を慕う者は忍耐強く待つべきであろう。

「待つ」ことに求める意味が付随し、聖霊のバプテスマも確かに求めて得るものである以上、「待つ」命令も今日の信者に適用すると言えよう。「ただし、その命令は今の信者に適用するのか。もしそうだとすれば、イスラム教徒がメッカへ参拝に行くように、クリスチャンもエルサレムへ行かなければならないことになるではないか。なぜならば、この命令はほかの所では守ることができないからである」とあって、サンダース氏はこれをもって「待つ」ことの必要性を否定する論理としたのである。確かにイエスは御霊が降るまで待ちなさいと命令された時は、「エルサレム」にとどまる制限を下された(ルカ24:49)。そして、聖霊が初めて降った場所も確かに「エルサレム」であった(使徒1:12~15、2:1~6)。しかし、これは永遠に不変の命令ではない。イエスがそのように指定されたのは、お祭りのためにエルサレムに帰ってきた外国寄留の敬虔なユダヤ人を一日のうちに選び召され、そして、聖霊が降ったという福音を彼らによって世界に広めさせるためであった。



その後、サマリヤ、カイザリヤ、エペソなど、聖霊が降った場所は決まっていなかった(使徒8:14~17、10:1、44~46、19:1~7)。というのは、エルサレムにとどまって聖霊を求める必要性は歴史的に一度しかなく、その時代はすでに過ぎ去ったからである。それ故に、なぜ私たちは「イスラム教徒がメッカへ参拝に行くように、エルサレムへ行かない」と待つ命令を守ったと言えないのか。聖霊のバプテスマを受けるには、待つことは必要であるが、エルサレムでしかできないというわけではない。しかし、エルサレムに限らないのだからこそ、信者が待つ命令を守らなくてもいいと断言してはならない。使徒時代はそうであって、今日もなお同然である。

「聖霊が降ることと、そのバプテスマは使徒たちが待ったことから『引き起こされた』のかは、この問題を研究する鍵である。その答えは明らかに『いいえ!』である。」サンダース氏のこの言葉を借りて言えば、「聖霊が降ることと、そのバプテスマは使徒たちが待ったことから『引き起こされた』のかは、この問題を研究する鍵である。その答えは明らかに『はい!』である。」と。イエスはかつて使徒たちに言われた、「あなたがたに命じておいたいっさいのを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタ28:20)。「わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」というのは、イエスの約束である。「あなたがたに命じておいたいっさいのを守るように教えよ」とは、使徒たちが守るべき命令である。使徒たちは世にいる間、主のこの命令をずっと守り通した。だから、主も約束どおりに彼らと共におられた。四世紀にローマ教は変質し、福音を勝手に変えて、昔のように主の命令を守らなくなった。それで、主は約束した如くいつも教会と共におられることがなく、ついに、五旬節の聖霊が降らなくなった。明らかに約束は主によるものであるが、主の命令を守るのは信者のすべき事である。もし信者が約束の実現を望むなら、主の命令を守らなければならない。同じ道理であるが、キリストが復活された後の五旬節に初めての聖霊が降り注



がれたのは、無論神の定めで、良い計画であった。しかし、「上から力を授けられるまでは、あなたがたは都に『とどまっていなさい』」とは主イエスの命令であった。聖霊を賜う約束は神による。いつ聖霊を注ぐのかも神による。しかし、待ち望むのは使徒たちのすべきことである。神が約束を叶え、聖霊を賜うことを望むならば、使徒たちは主の命令に従って、エルサレムにとどまらなければならなかった。もし、とどまることが聖霊の降臨に関わらないのであれば、なぜイエスは「授けられるまでは、都にとどまっていなさい」と言われたのか。なぜ使徒たちは主の命令を守り、指定された場所で待っていたのか。

▲胡恩徳氏は「霊恩問題」の10ページに記している。「新約聖書は今まで求める事が聖霊に満たされる必要条件であると言う規定はない。霊恩派の者は聖書を根拠にしたつもりでいるが、聖書の意味を間違え、強いて都合のいい解釈で固有の意見を支持している。彼らは使徒行伝1章14節をもって、主が天に上げられた後、使徒たちは屋上の間に婦人たちと共に、『心を合わせて、ひたすらに祈っていた』から、十日後、聖霊が彼らの身に降ったと言っている。実際に、聖書はただ祈っていたとあるが、聖霊の降臨を求めていたとは書いていない。昇天される前に、主は『父の約束を待っているがよい。…聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう』と言って、エルサレムから離れないように命令されたので、弟子たちは都で待っていた。父の約束がやがて降ると主は確実に告げ、そして、聖霊を求めるようには命令されなかったので、弟子たちは求めなくても、必ず与えられた。なぜならば、主は信実で頼れる方であり、無条件の約束を撤回することができないからである。ただし父の約束がやがて叶えられるため、弟子たちはエルサレムで待つべきであった。今日、聖霊はすでに降ったのだから、あらためて待つ必要があるか。その日、使徒たちは心を合わせて、ひたすら祈っていた。それは復活して昇天されたキリストを認識したことによって変わったことを教えてくれた。そして、彼らは敬虔に主と交わり、互いに愛し合っていたが、聖霊を求める気配りはなかったことがわかる。特殊



の教えを聖書の中に読み込ませてはいけない」

われわれの答え：イエスはかつて弟子たちと約束された。①御霊はいつまでも彼らと共におられる。彼らを捨てて孤児とはしない(ヨハ14:16～18)。②御霊が来る時に、彼らをあらゆる真理に導いて、きたるべき事を知らせる(ヨハ16:13)。③言うべきことは、聖霊がその時に教える。反対者のだれもが抗弁も否定もできないような言葉と知恵とを、授ける(ルカ12:12、21:15)。④聖霊が降る時、上から力を彼らに授け、地のはてまで、主の証人とならせる(ルカ24:49、使徒1:8)。⑤聖霊がその身に臨んだ時、彼らを遣わし、罪赦しの権威を授ける(ヨハ20:21～23、ルカ4:18)。主が昇天される前、父が約束した聖霊を受けるまで、エルサレムから離れないで待ちなさい、と命令された。間もなく彼らは聖霊によって、バプテスマを授けられるからであった(ルカ24:49、使徒1:4～5)。しかし、弟子たちはそれを無視して、ただ形式的にエルサレムに十日間とどまって、ほかに求めることがあっても、聖霊のバプテスマを求めようとしなかったのはあり得ようか。それは「聖書の意味を誤解し、強いて都合のいい解釈で固有の意見を支持している」ことではないのか。弟子たちが聖霊のバプテスマを求めるために『心を合わせて、ひたすらに祈っていた』というのは、推測であるが、以上の聖書の背景を根拠にしたのである。「聖書はただ祈っていたとある」という言葉に基づいて、聖霊の降臨を求めなかったというのも、推測である。しかも、それはただ文字によるもので、聖書の根拠がないのである。二つの推測は、いったいどちらが信じられるか。

いわゆる「待つ」とは祈りの意味が付け加えられている。もし待つだけで祈り求めないなら、何の意義があるか。すべて主に願い求める者は待ち望まなければならない。でなければ、聞き入れられる前に、失望してしまう。求めても与えられなければ、何の役に立つだろう。待ち望むには忍耐がなくてはならない。忍耐は信仰の表れであり、信仰は神に喜ばれる保障である(マタ21:22、ヘブ11:6)。信仰と忍耐は正比例している。信仰がよければよいほど、揺れること



なくよく耐え忍んで主を待つことができる。ダビデが耐え忍んで主を待ち望み、やっと聞き入れられた経験は、この事の証明である(詩40:1)。弟子たちが待つだけで祈り求めないと言ったのは、胡氏が「待つ」に祈りの意味が付け加えられていることを知らず、字面の解釈だけで、聖書の真意を悟らず、一部の意味を取って、聖書にある背景を考慮していないからである。「父の約束がやがて降ると主は確実に告げ、そして、聖霊を求めるようには命令されなかったので、弟子たちは求めなくても、必ず与えられる。なぜならば、主はこの無条件の約束を撤回することができず、彼は信実で頼れる方だからである」。あえてこの言い方を借りて言えば、「聖書は『神は、すべての人が救われて、真理を悟るに至ることを望んでおられる』と確実に教え(Iテモ2:4)、そして、イエスを信じなさいとは言っていないので、わたしたちはイエスを信じなくても、必ず救われる。なぜならば、聖書にあるこの無条件の約束は撤回することができず(聖書は人が御霊によって書かれたもの)、主は信実で頼れる方だからである」となる。これは主の「信実」を借用証書として、主が約束を返すように脅迫することになるのではないか。

理解しなければならないことは、聖霊が降るのは主の約束であるが、聖霊を祈り求めるのは弟子たちのすべきことであるということ。信者が祈り求めないでただ主が約束を叶えるのを望むことはあり得ない。すべての人が救われるのは主の御心であるが、イエスを信じるのはわたしたちのすべきことである。だから、主を信じずにその救いを望むわけがない。イエスが昇天された後、弟子たちは聖霊のバプテスマを求めるために、その命令に従ってエルサレムに集まり、心を合わせて、ひたすらに祈っていた(使徒1:12~14)。十日後の五旬節に、果たして主の約束どおり、弟子たちは聖霊に満たされ、異言を語りだした。聖書の記載がこのようにはっきりとしているので、聖霊のバプテスマは確かに求めて得るものであることが分かる。しかし、胡氏はそれを認めず「弟子たちは求めなくても、必ず与えられる」と主張した。



▲同書の11ページに胡恩徳氏はまた記している、「『天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さないことがあろうか』(ルカ11:13)。ここで、主は弟子たちに聖霊を求めなさいと教え込まないのは、この聖句の前半から見ればわかるように、彼は天の父が慈しみ深く、子の祈りを聞き入れられることだけを強調したのである。天の恵みを求めれば、父は必ず聖霊をとおして与えてくださる。だから、聖霊を賜ったら、その恵みは伴われるのである。ルカによる福音書11章13節の約束とマタイによる福音書7章11節と比較をし、二箇所の前半を調べれば、わたしたちの解釈の正確さがわかる。マタイによる福音書7章11節には、『天にいますあなたがたの父はなおさら、求めてくる者に良いものを下さないことがあろうか』とあった。二箇所の前半とも同じ理屈を語っている。マタイによる福音書は、父は求めてくる者に良いものをくださるという約束に対し、ルカによる福音書は、求めてくる者に聖霊をくださるという約束である。合わせれば、良いものは聖霊が降ることによってわたしたちに与えられるという意味になる。だから、ルカによる福音書11章は、聖霊を得る方法を教えているのではない。その求めることも聖霊を得る方法と条件には定められない。ある者はヨハネによる福音書4章10節に、イエスがサマリヤの女に言われたことを引証した。『もしあなたが神の賜物のことを知り、また、「水を飲ませてくれ」と言った者が、だれであるか知っていたならば、あなたの方から願い出て、その人から生ける水をもらったことであろう』。この言葉を引証した者は、聖霊を得る方法は求めることだと主が教えられたと思ったであろう。しかし、主が言われたのはあの女がご自分を知っていれば、生ける水を必ず願い求めたに違いないということに過ぎなかった。言い換えれば、願うことは主を認識するのに自然な表れであるが、生ける水を得る必然条件ではない」。

われわれの答え：ルカによる福音書11章11～13節に、父親の息子に対する慈愛が息子が自分の要求を満足させられる原因であるとイエスは先に述べた後、言われた、「あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物をするのを知っているとすれば、天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を降



らないことがあるか」。これで証明できるのは、天の父がわたしたちを愛するために、必ず聖霊を賜り、わたしたちの必要なものを満たしてくださるということ。しかし、胡恩徳は、「主は弟子たちに聖霊を求めなさいと教えず、ただ天の父が慈しみ深く、子の祈りを聞き入れられることだけを強調した」と無理やりに主張した。

「天の恵みを求めれば、父は必ず聖霊をとおして与えてくださる。だから、聖霊を賜ったら、その恵みは伴われるのである」とは矛盾になり、つじつまが合わない言い方である。なぜならば、10ページに胡氏は、「今日、聖霊はすでに降ったので、われわれはあらためて待つ必要があるだろうか」と言い、五旬節以来、聖霊はいつも教会と共にあり、あらゆる信者は信じた時に聖霊が与えられたと思うからである。そうであれば、天の恵みを求める必要はないではないか。なぜならば、主を信じた時、われわれは既に聖霊を受けた。父が聖霊を賜った時、その恵みは伴われたからである。類推すると、どんな恵みも求めなくて良いということになる。というのは、天の父はとっくに聖霊をとおしてあらゆる恵みを与えてくださったからである。これは正しい観念であろうか。いや、そうではない！ルカによる福音書11章13節の「求める」は、「聖霊を求める」と理解するよりほかない。否定しようとする人がいたら、その人は、つじつまを合わせるができないだろう。

以上の聖句からわかるように、マタイによる福音書7章11節の「良いもの」は、即ちルカによる福音書11章13節の「聖霊」である。もっとはっきり言えば、この二箇所の聖句は同じことに対しての異なったあらわし方である。それは聖霊は宝物で、切に求めるべきものであることを悟らせるためである。但し、胡恩徳氏はこの同じことを二つの事として扱った。「マタイによる福音書は、父は求めてくる者に良いものをくださる約束であるが、ルカによる福音書は、求めてくる者に聖霊をくださる約束である。合わせれば、良いものは聖霊が降る



ことによってわたしたちに与えられることである」。それで、ルカによる福音書11章13節の「求める」が「聖霊を求める」ことではないと否認しているのである。

「もしあなたが神の賜物のことを知り、また、『水を飲ませてくれ』と言った者が、だれであるか知っていたならば、あなたの方から願い出て、その人から生ける水をもらったことであろう」（ヨハ4:10）。この箇所の教えは、①聖霊は神の賜物である（使徒10:44～45、11:15～17）。②イエス・キリストは聖霊を賜る主である（ヨハ1:32～33）。③主に向って聖霊を求める者に、主は必ず「生ける水」を象徴とする聖霊を賜る（ヨハ7:37～39）。しかし、胡恩徳は言った、「主が言われたのはその女がご自分を知っていれば、必ず生ける水を願い求めたに違いないということに過ぎなかった。言い換えれば、願うことは主を認識するのに自然な表れであるが、生ける水を得る必然条件ではない」。これは矛盾であり、どう考えても理解できないことではないか。「その女が主を知っていれば、必ず生ける水を願い求めたに違いない」と言って、生ける水が求めることによって与えられると認めたにも拘らず「願うことは主を認識するのに自然な表れであるが、生ける水を得る必然条件ではない」と言って、前の言葉をひっくり返した。聖書が言うには、主が与える水を飲む者はいつまでも、かわくことがないことを知って、サマリヤの女はイエスに求めた。「主よ、わたしがかわくことがなく、また、ここにくみにこなくてもよいように、その水をわたしに下さい」（ヨハ4:15）。この願い求めは「主を認識した自然な表れ」であろうか。奇妙な理由をつけて事実を曲げようか、とにかく彼女の求めたものは「生ける水」であったのには間違いない。しかも、主が「求める」者に水を与えるのも間違いないのである。（ヨハ4:10）。

▲同書の11～12ページに胡恩徳はさらに記している。「使徒行伝8章に、ペテロとヨハネはサマリヤの弟子たちが聖霊を受けるようにと彼らのために祈っ



た。しかし、そこに聖霊を待ち受ける集会や聖霊を求める集会はなかった。そして、10章を見よう。コルネリオと親族や親しい友人たちの身に聖霊が降ったのは、決して人の按手によるものでもなく、自分で祈ったことでもない。ただ福音を聞いて信じたことによるだけである」。

われわれの答え：「エルサレムにいる使徒たちは、サマリヤの人々が、神の言を受け入れたと聞いて、ペテロとヨハネとを、そこにつかわした。ふたりはサマリヤに下って行って、みんなが聖霊を受けるようにと、彼らのために祈った。それは、彼らはただ主イエスの名によってバプテスマを受けてただけで、聖霊はまだだれにも降っていなかったからである。そこで、ふたりが手を彼らの上においたところ、彼らは聖霊を受けた」（使徒8:14～17）。ここで聖書が言っているのは、ペテロとヨハネは彼らが聖霊を受けるようにと祈り、二人が手を彼らの上においたところ、彼らが聖霊を受けたことである。考えてみよう、使徒たちが、聖霊を受けるようにと彼らのために祈ったとき、彼らも使徒たちと心を合わせて切に祈ったのではなかろうか。あるいは使徒たちに任せて、自分は何もせずにただ見るだけだったのだろうか。無論、サマリヤ人が心を合わせて一緒に祈ったとは聖書に書かれていない。「聖霊を待ち受ける集会や聖霊を求める集会」があったかどうか書かれていない。しかし理屈から言えば、彼らが使徒たちと心を一つにして祈ったのは疑いもないことである。この祈り会こそ「聖霊を求める集会」である。

コルネリオが選ばれたのは、神が喜んで異邦人に恵みを与えることをあらわすほかに（使徒11:18）、彼は信心深く、家族一同と共に神を敬い、民に数々の施しをなし、絶えず神に祈りをし、ユダヤの全国民に好感を持たれていたためであった（使徒10:1～5、22、30～35）。もちろん、ユダヤ人が異邦人と親しく交わりをするのは元々例にない。しかし、誰も汚れたものとしてはならないと神が幻で示されたので、ペテロは断らず誘いに応じた。最初はなぜ行くのか知らなかったが、コルネリオの証を聞いて、ペテロはやっと神は人を偏り見ない



ことがわかった。ユダヤ人に限らず、主を敬い、義を行う世界中のあらゆる者は神に喜ばれるのである。そこで、ペテロは勇敢にユダヤ人の伝統観念を打ち破って、コルネリオとその親族、親友たちと親しくなり、キリストの万民を救う福音を宣べ伝えた。ペテロがこれらの言葉をまだ語り終えないうちに、彼らに聖霊が降ったので、割礼を受けている信者で、ペテロについてきた人たちは、それに驚いた。そこで、ペテロは同行のユダヤ人たちに言い出した。「この人たちがわたしたちと同じように聖霊を受けたからには、彼らに水でバプテスマを授けるのを、だれがこぼみ得ようか」。だれも反対しなかったので、ペテロは異邦人の彼らに、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けさせた。それから、彼らのところに、なお数日の間滞在した(使徒10:23~48)。ペテロのこの対処は当然御心に適い、非難の余地がないのであるが、エルサレムの使徒及び割礼を重んじる者たちは御心を察しないため、彼を大いに咎めた。そこでペテロはその経緯を順序よく説明して言った。「このように、わたしたちが主イエス・キリストを信じた時に降ったのと同じ賜物(聖霊のバプテスマを指す)を、神が彼らにもお与えになったとすれば、わたしのような者が、どうして神を妨げることができようか」。人々はこれを聞いて黙ってしまった。それから神を賛美し、「それでは神は、異邦人にも命にいたる悔改めをお与えになったのだ」と言った(使徒11:1~18)。

この歴史の事実から学ぶことは、神が異邦人—コルネリオとその親族、親友を召されるには、ユダヤ人の伝統観念を打破しなければならなかったことである。神は割礼のある者を信仰によって義とし、また、無割礼の者をも信仰のゆえに義とされる。神はユダヤ人の神でありながら、また、異邦人の神でもある(ロマ3:29~30)、ということを経らせるのである。異邦人が、福音によりキリスト・イエスにあって、共に神の国をつぐ者となり、共に一つのからだとなり、共に約束にあずかる者となること(エペ3:3~6)—即ち、代々にわたってこの世から隠されていた奥義をユダヤ人に悟らせるために、神は奇跡を行われた。それ



らの奇跡は、①ヨッパに人をやって、ペテロを招いてキリストの福音を宣べ伝えてもらうようにと、幻でコルネリオに指示されたこと。②異邦人を汚れたものとしてはならないと幻でペテロに指示されたこと。③求道者は按手されず、自分も聖霊を求めなかったが、聖霊を受けたこと。従って、コルネリオとその親族、親友たちが聖霊を受けたのは、「決して人の按手によるものではなく、自分で祈ったことでもない。ただ福音を聞いて信じたことによるだけである」と言っても、特殊な例である。特殊な例というのは、コルネリオは異邦人であるので、聖霊が彼とその親族、親友の身の上に降った時、ペテロがバプテスマを授けようとしても、同行のユダヤ人の同意が必要であったことである（使徒10:44~48）。その次に、ペテロは割礼のない人たちのところに行って、食事を共にしたことでほかの使徒とユダにいる兄弟たちに咎められた（使徒11:1~3）。事実はこうであったから、ペテロは彼らのために按手することができなかった。この特殊な例は、「人が按手して助祷することや自分で祈ることは良くない」と暗示しているわけではない。また、その必要性を否定することもできない。これは慎重に考え、よくわきまえなければならないことである。

以上の各点をまとめれば、①真理の御霊が来る時には、わたしたちをあらゆる真理に導き（ヨハ16:13）、しかも、上から力を授けてくださる（ルカ24:49）。②聖霊は、わたしたちがキリストのものとなるには重要な条件の一つであり（ロマ8:9）、神の国をつぐことの保証でもある（エペ1:14）、ということがわかる。ゆえに、すべてのクリスチャンは主イエスと使徒たちの命令に従い、聖霊のバプテスマを重んじ、努めて求めなければならないのである。但し、今日の聖霊のない一般の教会のリーダーたちは、多数が誤魔化されてひそかに模索している。はなはだしいことは心を頑なにして、聖霊のバプテスマの真理を受け入れようとしない。あるいは、「五旬節は永遠に繰り返さない」、「すべての信者は聖霊がある」、「聖霊のバプテスマを求める必要がない」とまで言い、方法を尽くして人が聖霊のバプテスマの体験を求めるのを妨げようとしている。こ

のような破壊のわざは昔の律法学者とパリサイ人のしたことと同じである。彼らは、天国を閉ざして人々を入らせない。自分も入らないし、入ろうとする人を入らせもしない。また、ひとりの改宗者をつくるために、海と陸とを巡り歩く。そして、つくったなら、彼を自分より倍もひどい地獄の子にする(マタ23:13、15)。願わくはイエスに、「盲目な案内者たちよ。あなたがたは、わざわいである」(マタ23:16)、と責められないように。聖霊の感動によって、罪のために心が責められ、一日もはやく悔い改めるように。

ゴールドン(A. J. Gordon)が言った。「すべての信者はこの聖霊のバプテスマを受けたとは限らない」。ムレー(Andrew Murray)が言った。「信者は聖霊のバプテスマを求め、待ち望んでよい」。マクネイル(John Mcneil)が言った。「信者が、『主よ、聖霊でバプテスマを授けてください』と祈るのは、聖書の教えに合わないことではない」。これらのリーダーの言葉に注意せよ！すべての信者は聖霊を受けたと限らない、クリスチャンは聖霊のバプテスマを求めるべきだと彼らは主張した。願わくは、聖霊のない教会の信者の皆さんが冷静に吟味し、正しい道に立ち返り、謙虚に聖霊のバプテスマの教えを調べ、聖霊に満たされることを慕うことによって、キリストのうちに永遠の幸を楽しむように！

問題

以下の誤説に対して反論してみよ：

- 一、五旬節以降、誰でもキリストを信じれば聖霊が授けられる(使徒2:38、11:15、17、エペ3:17、ヨハ7:38～39)。
- 二、聖霊は繰り返して降らない。というのは、五旬節の日に、教会全体はすでに聖霊のバプテスマを受けたからである(I コリ12:13)。
- 三、聖霊のバプテスマは「歴史的な事件」であり、聖霊に満たされるのは「信者個人の経験」である。
- 四、聖霊のバプテスマの体験を強調するのは、神に対して公然の侮辱であり、



キリスト教の信仰において偽りの体験を加えることである。というのは、五旬節の日に、すべての信者は代表的に聖霊のバプテスマを受けたからである。

- 五、聖書から「聖霊を受けなさい」という命令が見つからないので、一切の信者はすでに聖霊のバプテスマを受けたことがわかる。
- 六、聖霊を賜うことは完成された事であるが、惜しいことに、多くの信者はまだ知らない。
- 七、聖霊のバプテスマは決して祈りによるものではなく、授かったものである。
- 八、聖霊が降るのを待ち望む命令は今日の信者に適用しない。でなければ、わたしたちはエルサレムに行かなければならないのである。
- 九、主イエスが昇天された後、弟子たちは屋上で十日間も待っていたが(使徒1:14)、それは聖霊を求めるためではなかった。というのは、主は聖霊が降ると約束されたので、求めなくても必ず受けるからである。
- 十、サマリヤの弟子たちが聖霊を受けた時は、聖霊が降るのを待ち望む集會がなかったので、わたしたちも聖霊を求める必要がない。



第十二章

如何にして聖霊のバプテスマを受けるのか

キリストが復活された後に初めての五旬節の日が来たが、天の父がその約束を成就される時もやってきた。弟子たちがみんな一緒に集まっていると、突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっばいに響きわたった。また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した。さて、エルサレムには、天下のあらゆる国々から、信仰深いユダヤ人たちがきて住んでいたが、この物音に大勢の人が集まってきて、彼らの生れ故郷の国語で、使徒たちが話しているのを、だれもかれも聞いてあっけにとられて、驚き怪しんだ。そして、ほかの人たちはあざ笑って、「あの人たちは新しい酒で酔っているのだ」と言った。そこで、彼らの疑問を解くために、ペテロは預言者ヨエルが預言していたことを引証して言った。「神がこう仰せになる。終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう。…その時には、わたしの男女の僕たちにもわたしの霊を注ごう。そして彼らも預言をするであろう」、「この約束（水のバプテスマと霊のバプテスマ）は、われらの主なる神の召しにあずかるすべての者、すなわちあなたがたと、あなたがたの子らと、遠くの者一同とに、与えられているものである」（使徒2:1~7、13~18、38~39）。パウロも言った、「なぜなら、わたしたちは皆、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によって、一つのからだとなるようにバプテスマを受け、そして皆一つの御霊を飲んだからである」（I コリ12:13）。ここからわかるように、世のすべて血肉のある者には聖霊のバプテスマを受ける約束がある。種族の制限がなければ、階級の差別もない。では、この約束はいかにして受けるのであろうか。



第一節 真の教会に属する

霊には、「霊の血種」もしくは「霊の血統」がある。聖書の言葉ではないが、その事実がある。後の雨の聖霊によって本教会——世の終わりの真の教会が設立されて以来、本教会と接触して聖霊を受けた多くの体験がある。それは本教会の信者と真理の討論をしたことによるか、本教会の書物を読んだことによるか、いずれも本教会が示した方法に従って求めて得たものである。これらの経験は、すべて聖霊を渴き慕う者が真の教会と接触すべきであることを教えている。聖霊のない一般の教会のある信者は、本教会が聖霊によって設立されたことを明らかに知っていながら、本教会に入ろうとせず、終始聖霊が得られなくて、しまいには邪霊を得てしまった。ある長老執事や伝道者は本教会で聖霊を与えられたが、人情や地位が捨て難いことにより、結局聖霊を失ってしまった。これらの事実が語っているのは、本教会が聖霊によって設立されたことを知りながらも、わざと捨てた者は、聖霊が得られないことである。そして、元の教会を離れて本教会に属そうと決意しないと、本教会で聖霊を与えられても、必ず失ってしまうということである。それは真の教会が主の体なので、真の教会を捨てたことは即ち主を捨てたことになり、真の教会に属さないことは即ち主に属さないことだからである。

いわゆる「真の教会」とは、原始教会と同様の教会であり、もろもろの山のかしらとして堅く立ち、もろもろの峰よりも高くそびえる(イザ2:2~3)。原始教会は世のすべての教会の模範であるので、どの時代においても、神の教会はそれと切り離して、一つの教派となり、別の旗を揚げることはできない。原始教会は聖霊が伴い、前の雨の聖霊によって立てられた。それは神の宮で、主の体なので(1コリ3:16、エペ1:23)、キリストに属する教会といわれる(ロマ8:9)。原始教会は真理が伴い、信仰の基を主イエスと使徒たちや預言者たちの教えにすえたので(エペ2:19~20)、神の家、真理の柱、真理の基礎といわれる(1

テモ 3:15)。原始教会は御言葉に伴うしるしがあつて、その確かなことを示し、異邦人を従順にしたので(マル 16:20、ロマ 15:18)、主がおられる教会といわれる(使徒 3:12～16、ヘブ 2:4)。真イエス教会にも聖霊、真理、しるしがあり、原始教会と一致している。それは後の雨の聖霊によって立てられ、原始教会を復興する世の終わりの真の教会なのである。

サマリヤの人々が聖霊を受けたのは、ピリポが伝えた神の教えを聞き、聖霊を受けるように、ペテロとヨハネに按手されたからである(使徒 8:14～17)。パウロは主の弟子たちを迫害するためにダマスコへ行く途中、主に呼ばれた。主は直接聖霊を授けず、ただ町に入って、すべき事が告げられると言われただけであった。後にパウロが聖霊を受けたのは、主の言葉に従って、ダマスコに入り、主に遣わされたアナニヤに接し、祈ってもらったからである(使徒 9:3～17)。コルネリオは、信心深く、家族一同と共に神を敬い、民に数々の施しをなし、絶えず神に祈りをしていた。彼の祈りと施しは神のみ前にとどいて、覚えられていたが、神は直接、聖霊を彼に授けられなかった。彼と親族と親しい友人が聖霊を受けたのは、神の指示に従い、僕を遣わしてヨッパへペテロを迎えてきて、その言葉を聞いている最中に、聖霊が降ったのである(使徒 10:1～5、44～46)。エペソの弟子たちは信仰に入った時に、受けた「ヨハネのバプテスマ」が明らかに使徒によるものではないため、だれも聖霊を受けていなかった。彼らはパウロと接触して、新たにバプテスマを受け、按手してもらい、はじめて聖霊を受けたのである(使徒 19:1～7)。霊には「霊の血種」があることはこれらの歴史によって、確かな事がわかる。前の雨の時代に、霊のバプテスマを渴き慕う者は必ず主の弟子たちに接しなければならなかった。今日の後の雨の時代になっても、すべて霊のバプテスマを渴き慕う者は、必ず主が共におられる真の教会と接しなければならぬのである。

イエスが昇天される前、使徒たちに言われた。「見よ、わたしの父が約束され



たものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい」(ルカ24:49)。また言われた。「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」(使徒1:4~5)。エルサレムは主の指定により、前の雨の時代に聖霊が初めて降った場所であった。そのほかの場所ではいかなる所でも聖霊を受けることができない。弟子たちは主の命令に従い、指定された場所で祈って待っていたので、五旬節の日になると、果たして約束の聖霊を受けたのである(使徒1:12~15、2:1~4)。霊的な意味から言うと、このエルサレムは聖霊によって設立された真の教会であり、小羊の花嫁である(黙21:2、9~10)。ゆえに、五旬節の後は、当初の場所に限らず、使徒たちによって設立された教会に属したら、聖霊を受けることができた(使徒8:14~17、10:44~46、19:1~7)。預言者ゼカリヤは言った、「地の諸族のうち、王なる万軍の主を拝むために、エルサレムに上らない者の上には、雨が降らない」(ゼカ14:17)。雨は聖霊の象徴であるので、地の諸族のうち、凡そ真の教会に帰さない者は、聖霊を受けることができないのである。

第二節 真理に従う

国には元首がある。国民は国の元首を敬い、国が制定した法律に従うべきである。それで、社会の秩序が保たれ、生命と財産が保障され、国が安泰で民の暮らしも平安である。家庭には一家の主がいる。家族はその主を敬い、その家訓に従って行うべきである。それで、上下の秩序ができ、親が愛情深く、子が孝行をし、兄弟の仲がよいために、家庭は幸せで円満になる。教会は神の国である。神は君で、わたしたちは民である(エペ2:19、ピリ3:20)。教会もまた神の家である。神は父で、わたしたちはその子である(1テモ3:15、エペ4:6)。ゆえに、神を敬い、あらゆることにその御心に従うことによって、平安と喜び



を与えられる。聖書曰く「あなたのおきてを愛する者には大いなる平安があり、何ものも彼らをつまずかすことはできません」(詩119:165)。「どうか、あなたはわたしの戒めに聞き従うように。そうすれば、あなたの平安は川のように、あなたの義は海の波のようになり」(イザ48:18)。神を恐れ、その命令に従うのは、確かに平安と喜びを得る道である。

神は人類の祖先であるアダムに一条の禁令を下された。「しかし、善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」(創2:17)。アダムはその試験に耐えきれず、主に逆らったため、呪われ、樂園の幸せを失ってしまった(創3:4~6、16~19、24)。しかも、それによって罪がこの世に入り、また罪によって死が入ってきたように、全人類に入り込んだのである(ロマ5:12)。さて、最後のアダム——キリストが来られた。彼は死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで神に従順であった。それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜った。そればかりでなく、彼は復活して、死を滅ぼし、いのちと不死とを明らかに示された(I コリ15:45、ピリ2:8~9、ヘブ2:14、II テモ1:10)。

神の命令どおりに、アマレクを撃ち、そのすべての持ち物を滅ぼし尽くせとサムエルが伝えたが、サウルはアマレク王を憐れみ、肥えた羊と牛を惜しみ、それらを滅ぼしつくすことを好まなかった。サムエルが遣わされて彼を責めた時、彼はただちに悔い改めず、逆に主に捧げるために、羊と牛のもっとも良いものを残したと弁解した。値打ちのない、つまらない物はまだよいが、肥えたものまで滅ぼしつくすのは惜しい、それよりも神に捧げたほうがましだと思ったからであろう。しかし、サムエルは言った、「主はそのみ言葉に聞き従う事を喜ばれるように、燔祭や犠牲を喜ばれるであろうか。見よ、従うことは犠牲にまさり、聞くことは雄羊の脂肪にまさる。…あなたが主のことばを捨てたので、主もまたあなたを捨てて、王の位から退けられた」(サム上15:1~23)。ス



リヤ王の軍勢の長ナアマンはその主君に重んじられた有力な人であった。彼は
大勇士であったが、らい病をわずらっていた。イスラエルに預言者がいるのを
聞いて、ナアマンは馬と車とを従えてきて、エリシャの家の入口に立った。す
るとエリシャは彼に使者をつかわして言った、「あなたはヨルダンへ行って七
たび身を洗いなさい。そうすれば、あなたの肉はもとにかえって清くなるでし
ょう」。しかしナアマンは言った、「ダマスコの川アバナとパルパルはイスラ
エルのすべての川水にまさるではないか。わたしはこれらの川に身を洗って清
まることができないのであろうか」。こうして彼は身をめぐらし、怒って去っ
た。その時、しもべたちは彼に近よって言った、「わが父よ、預言者があなた
に、何か大きな事をせよと命じても、あなたはそれをなさらなかったでしょ
うか。まして彼はあなたに『身を洗って清くなれ』と言うだけではありませんか」。
そこでナアマンは下って行って、神の人の言葉のように七たびヨルダンに身を
浸すと、奇跡が起こって、その肉がもとにかえって幼な子の肉のようになり、
清くなった(列王下5:1～14)。明らかに御言葉に聞き従うことは聖書の重要な教
えであり、神の一切の恵みをいただく必須の条件であるので、聖靈のバプテ
スマを受けることに例外があろうか。

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。そしてイエス・
キリストである言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。それは父のひと
り子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた。言は道であり、
真理であり、命である。だれでも彼によらないでは、父のみもとに行くことは
できない(ヨハ1:1、14、14:6)。だから、イエスに寄り頼むのは即ち神に寄り頼
むことであり、その言葉に従うのは即ち神の言葉——真理に従うことである。
しかし、当時のユダヤ人の多くはイエスを見捨てて、律法によれば、彼が死罪
に当たる者だと思っていた(ヨハ19:7)。召される前のパウロも、教会を迫害す
ることは律法に熱心なことだと思った(ピリ3:5～6)。五旬節の後、イエスはす
でに昇天され、聖靈も降り、しるしと不思議は至る所に現れ、御言葉の確かな



ことを示した(マル16:19～20、使徒2:1～5、23～33、5:12～16)。しかし、ユダヤ人の多数はサタンに欺かれ、真理を捨て去った。彼らは使徒たちの説教を禁じるか、恐喝するか、鞭打つか、監獄に入れるか、真理に逆らうことを尽くした。使徒たちはそれでますます熱心に「神は、あなたがたが木にかけて殺したイエスをよみがえらせた」と証した。また、「わたしたちはこれらの事の証人である。神がご自身に従う者に賜わった聖霊もまた、その証人である」と言って(使徒4:3、21、5:17～33、40)、「従順」が聖霊のバプテスマを受ける秘訣であることを一言で喝破した。

先にあったことは、また後にもある、先になされた事は、また後にもなされる。日の下には新しいものはない(伝1:9)。歴史は常に繰り返すものである。昔、肉体となって来られたイエスを、ユダヤ人は無知で彼を捨て、殺害した。しかも、使徒たちが宣べ伝えた福音に方法をつくして逆らったことを、熱心に神に仕えることだと思っていた。今日、主の御霊は天から降ったが、聖霊のない一般の教会のリーダーの多くはそれを拒否し汚した。しかも、真の教会が宣べ伝えている真理に対して、方法を尽くして逆らったことを、真理のために戦っていると思っている。昔、神は人類の先祖に、命令に背き、善悪を知る木から実を取って食べると、「きっと死ぬであろう」と言われたが(創2:17)、サタンは「決して死ぬことはないでしょう」と言った。そこで、先祖はサタンの言うことに聞き従い、取って食べて、神に逆らった(創3:4～6)。今日の真の教会は聖書を根拠にして、「異言を語るのは聖霊を受けたしるし」と言っているが(使徒10:44～46)、聖霊のない一般の教会のリーダーの多くは「そうとは限らない」と言っている。それで、多くの無知なクリスチャンは彼らに聞き従い、一生聖霊を受けないままで安心している。ここで、「神がご自身に従う者に賜わった聖霊」という使徒たちの言葉を、繰り返し深く考えなければならない(使徒5:32)。昔、使徒たちが前の雨の聖霊の感動によって伝えた真理に従い、イエス・キリストを救い主とした全ての者に聖霊が賜った。今日、もしあなたが後の雨であ



る真の教会が伝えている真理を心から受け入れるならば、聖霊は必ず賜るのである。願わくは聖霊の感動によって、古いパン種を捨て、真の教会の最も純正な福音——全備なる真理を一日も早く受け入れ、約束された聖霊のバプテスマを受けるように。

第三節 「ハレルヤ」を唱える

イエスは弟子たちに約束して言われた。「わたしの名によって願うことは、なんでもかなえてあげよう。父が子によって栄光をお受けになるためである。何事でもわたしの名によって願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう」(ヨハ14:13~14)。主の言葉はいつまでもむだになることはない。聖霊のバプテスマを望む者はすべて主の約束を信じるべきである。求める時はまず「主イエス様の御名によって、お祈りします」と言い、それから「ハレルヤ、主の御名を賛美します。心が聖霊に満たされますように」または「ハレルヤ、主の御名を賛美します」と繰り返して唱える。「ハレルヤ」とはヘブル語で、「主をほめたたえよ」という意味である(参考:詩104:35、黙19:1)。分けて言うと、「ハレ」はほめたたえる、「ル」はすべき、「ヤ」はエホバの略称である。

「ハレルヤ」はしばしば詩篇に現れるが、その書き方によって、三種類に分けることができる。①この言葉を詩の初めとしているのは、111篇、112篇である。②この言葉を詩の終わりとしているのは、104篇、105篇、115篇、116篇、117篇である。③初めにも終わりにもあるのは、106篇、113篇、135篇、146~150各篇である。その中でも、113~118篇は「ハレグループ」(Hallel Grope)と言われ、「讚美歌」の意味である。146~150篇は一つのグループとなり、詩の最初と最後は共に「ハレルヤ」と書かれた。古代の教会ではそれを「ハレルヤ詩集」(Hallelujah Psalms)と呼ばれていた。新約聖書なら、ただ黙示録19章に四回現れただけである(1、3、4、6節)。前三回は、大淫婦のようなバビロンを滅



ぼし、殉教した聖徒の報復をした主の力をほめたたえた。最後の一回は全能者の主が支配者になられたことをほめたたえた。小羊の婚姻の時に来て、花嫁もその用意をした。「わたしはまた、大群衆の声、多くの水の音、また激しい雷鳴のようなものを聞いた。それはこう言った、『ハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、王なる支配者であられる』」（黙19:6）。これは、真の信者が真の教会で賛美する声の描写であるが、本教会の信者が異言で祈る時によくある不思議な現象である。

▲胡恩徳は「霊恩問題」の10ページに書いた。「ある者は聖霊を求める特殊な方法を教え込んだ。即ち、『ハレルヤ、主を賛美します』を繰り返して言うことである。多くの信者はこの言葉を一度に二、三十回も繰り返し、言えば言うほど速くなる。何時間も続けると、神経がほんとうに疲れてしまう。意識的にやっているのか、悪霊に取り付かれているのか、ついに人の理解できない言葉を言い出してしまいが、結局それを聖霊に満たされ、異言を語っていると思い込んでいる。実は、そのやり方が間違っていることは明らかである。異邦人のように、くどくどと祈るなどイエスが戒められたように、異言派のやり方は聖書によるものではない。」

われわれの答え：「祈る場合、異邦人のように、くどくどと祈るな。彼らは言葉がずが多ければ、聞きいられるものと思っている」（マタ6:7）。「くどくど」とは、ギリシャ原語の「Eattalogen」で、通常使われない動詞である。新約聖書にもここしか出て来ない。元の意味は「どもり」であったが、「どもりのようにくどくど喋る」の意に転じて、「空っぽで無意味な言葉を重ねる」ことを表す。

異邦人は祈りの効果と価値が言葉の多少と時間の長短に関わっている。同じ言葉を二十回繰り返すのは十回より二倍の効果があり、二時間の祈りは一時間より二倍の価値があるとしている。それは、一種の錯誤観念に基づくもの



である。くどくど言うと、神を説得し、求めることを叶えてもらえると思っているからである。従って、彼らの祈りの方法は自然に同じ言葉を繰り返す回数や時間の長さにこだわってしまう。異邦人のように、くどくどと祈るなどイエスが戒められたのは、このように意味のない言葉をくどくど重ねた祈りのことである。なぜならば、祈りの効果は祈る者が切に祈るかにより、その言葉の多少、祈る時間の長短にはよらないからである。しかし、それは同じ言葉で同じ事を祈り求めてはならないことを意味するのではなく、長く祈ってはならないことを意味するのでもない。あるいは祈らずにただ神の賜物を待つだけでよいと言っているのでもない。そうでなければ、イエスがゲッセマネで三度も同じ言葉で祈られたことと(マタ26:44)、山へ行つて、夜を徹して祈られたことを(ルカ6:12)、円満に解釈することができなくなるであろう。

「ある者が聖霊を求める特殊な方法を教え込んだ。即ち、『ハレルヤ、主を賛美します』を繰り返すことである」。「ハレルヤ、主を賛美します」を繰り返すのは「特殊な方法」ではなく、聖書の教えに適う言葉である。聖霊を求める際に限ってこう祈るだけでなく、いつもの祈りの時もこのように主を賛美すべきである。「ハレルヤ、主を賛美します」を繰り返すのは間違いではない。問題は祈る者の気は確かで切なのか、あるいは気力なくただ言葉を重ねただけなのかにある。「多くの信者はこの言葉を一度に二、三十回も繰り返し、言えば言うほど速くなる。何時間も続けると、神経がほんとうに疲れてしまう」とは過言であり、伝道者の文章に出てくる言葉とは思えず、実に心を痛めるそりである。一度に二、三十回も繰り返すのは不可能で、十回だけでも呼吸困難になる。「まして、言えば言うほど速くなり、何時間も続ける」というような批評は、だんな心構えを表わすか。実際にこのように祈れば、息つきができなく、ただ「神経がほんとうに疲れてしまい」、珍しい奇跡と言うしかない。そうでなければ胡氏は普通の人間にはない特技があるとでも言うのか。



「意識的にやっているのか、悪霊に取り付かれているのか、ついに人の理解できない言葉を言い出してしまいが、結局それを聖霊に満たされ、異言を語っていると思込んでいる」。聖霊を受けた経験は、本人がよくわかり、傍観者の目にも映ることなので(使徒2:33、8:17~19、10:44~46、19:1~7)、どうして「意識的にやっている」と言えようか。これは人を欺く言葉なので、読者の皆さんは惑わされないように願いたい。「悪霊に取り付かれる」とは人を脅かす言葉で、気の小さい者に聖霊のバプテスマを諦めさせる目的があり、実にひどい手段である。あるクリスチャンが聖霊を求めることを恐れているのもこの類の言葉が関わっているのだろう。「人の理解できない言葉を言い出してしまいが、それを聖霊に満たされ、異言を語っていると思込んでいる」とは愚かな言い方である。「それはだれにもわからない」という聖書の根拠を知らないからである(Ⅰコリ14:2)。「実は、そのやり方が間違っていることは明らかである。異邦人のように、くどくどと祈るなどイエスが戒められたように、異言派のやり方は聖書によるものではない」とは胡氏の結論であり、その観点の錯誤の根拠でもある。彼はマタイによる福音書6章7節の正しい意味を完全に誤解している。事実は雄弁に勝る。本教会にある多くの「聖霊を受けた経験」は同じ事を有力に証明している。「ハレルヤ、主を賛美します」を繰り返すのは正しい。無意味な言葉をくどくど重ねるのではなく、真心から言葉を発すならばよいのである。

第四節 バプテスマを受けて罪の赦しを得る

バプテスマは罪赦しの効果があり(使徒2:38、22:16)、明らかな良心を神に願い求めることができる(Ⅰペテ3:21)。惜しいことに、聖霊のない一般の教会の多数はこの恵みがわからない。水のバプテスマも聖霊のバプテスマを受ける近道である。本教会が設立されて以来、聖霊を受けた多くの経験はこの事を証明した。前の雨の時代にも同様の教えと史実があり、さらに本教会の体験は聖書



に合っていることの証となる。五旬節の日に聖霊が大いに注がれた。一緒にいたユダヤ人が驚き怪しんだところ、ペテロは自分たちが受けたのは世の人々に賜る約束の聖霊であることをまず語り、そして、彼らに殺されて神が立てられたキリストであるイエスは、すでに死からよみがえられたと証をした。人々はそれを聞いて自分の罪と終わりの事を思い出し、強く心を刺され、恐れながらペテロやほかの使徒たちに、「兄弟たちよ、わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか」と言った。すると、ペテロが答えた、「悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう」(使徒2:1~38)。バプテスマは罪赦しの働きがあるだけではなく、聖霊を得る近道でもあることがペテロの答えによってわかる。この答えを簡潔、順序に列挙すれば、悔い改める→バプテスマを受ける→罪が赦される→聖霊を受ける、ということになる。聖書の記録によれば、前の雨の時代に、サウロとコルネリオ一家族以外、聖霊のバプテスマを受けた多くの経験は皆この順序に沿ったのである。

パウロは言った、「なぜなら、わたしたちは皆、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によって、一つのからだとなるようにバプテスマを受け、そして皆一つの御霊を飲んだからである」(I コリ12:13)。「一つの御霊によって…バプテスマを受け」とは、バプテスマの事を言っている(I コリ6:11)。なぜならば、バプテスマを施す者に聖霊があつてこそ、罪を赦す権威がある(ヨハ20:22~23)。聖霊の証があつてこそ、水の中に主の血があるからである(ヨハ19:34、I ヨハ5:6~8)。「一つの御霊を飲んだ」とは「聖霊のバプテスマ」を言っている。聖霊はイエスが人々に飲ませる「いのちの水」だからである。この水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、この水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう(ヨハ4:14、7:37~39)。パウロがここで述べた順序に注意せよ。まず「一つの御霊によって、



…バプテスマを受け」と言い、「そして皆一つの御霊を飲んだ」と言ったのである。これはペテロが五旬節の日に述べた順序と一致する。前の雨の時代に聖霊を受けた経験は殆どそうであったことがわかる。

しかし、なぜ主は先にサウロに御霊を満たし(聖霊のバプテスマのこと)、それから、水のバプテスマを施されたのか。それは彼が異邦人たち、王たち、またイスラエルの子らにも、主の名を伝える器として、主を選んだ者であることを一歩進んで証するためであった(使徒9:10～19)。コルネリオ一家族が聖霊のバプテスマを水のバプテスマより先に受けたのは、彼らがユダヤ人と交際したり出入りしたりしてはならない他国の人であるため、神の選びを聖霊で証して、割礼を受けている信者の口を塞がれたからである(使徒10:28、44～48、11:1～4、15～18)。本教会にも先に聖霊のバプテスマを受けてから、水のバプテスマの受けることがよくある。神は先に証拠を与え、その信仰を固められるためである。

パウロはエペソにきて、ある弟子たちに出会って、彼らに「あなたがたは、信仰にはいった時に、聖霊を受けたのか」と尋ねたところ、「いいえ、」と答えた。パウロは彼らが受けたバプテスマは間違っているだろうと怪しんで思った。なぜならば、前の雨の時代に、水のバプテスマを受けた者は、必ず聖霊のバプテスマも受けるはずだからである。もし水のバプテスマを受けても、聖霊のバプテスマを受けないなら、きっと何か原因がある(参考：使徒8:18～24)。

「では、だれの名によってバプテスマを受けたのか」と彼が聞くと、彼らは「ヨハネの名によるバプテスマを受けました」と答えた。そこで、なるほど、パウロは悟り、彼らが聖霊のバプテスマを受けない原因を指摘して言った、「ヨハネは悔改めのバプテスマを授けたが、それによって、自分のあとに来るかた、すなわち、イエスを信じるように、人々に勧めたのである」。人々はこれを聞いて、主イエスの名によるバプテスマを受けた。そして、パウロが彼らの上に手をおくと、聖霊が彼らにくんだり、それから彼らは異言を語ったり、預言をし



たりし出した(使徒19:1~7)。この歴史の出来事によれば、水のバプテスマが聖書の指示された方法でなければ、罪は赦されないことが分かる。それはバプテスマを受けていないことに等しいので、聖霊は注がれない。同じ状況であれば、エペソの弟子たちのように新たにキリストに合うバプテスマを受けて、はじめて聖霊を受けることができるのである。

聖書の指示された方法の水のバプテスマとは何であろうか。即ち、①授ける者は、「主イエスの名」(使徒8:16、19:5)、あるいは「イエス・キリストの名」(使徒2:38、10:48)によって、バプテスマを受けさせる。イエスによる以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである(使徒4:12)。だから、主の名によってバプテスマを受けなければ、罪は洗い落とされないのである(使徒10:43、22:16、Iヨハ2:12)。

②バプテスマを受けるのは、主の死にあずかることなので(ロマ6:3)、受洗者は頭を下げて、主に結びついてその死の様にひとしくならなければならない(ロマ6:5、ヨハ19:30)。それもまた罪人が神の前で赦しを求める態度である(エズ9:6、詩38:4、40:12、ルカ18:13~14)。

③受洗の時は、全身水に浸して、主が葬られた様にふさわしくならなければならない(ロマ6:3~4)。これはイエスと原始教会が残された模範である(マタ3:16、使徒8:36~39)。ヨハネがわざわざ水のたくさんあった場所を選んだ理由はここにある(ヨハ3:23)。そのほか、授洗者の資格も重要である。授洗者が聖書どおりに資格を備えなければ、授ける方法が聖書に合っても役に立たない。授洗者の資格は①聖書に合ったバプテスマを受けてたことである。そうでなければ、自分の罪が赦されず、キリストにあずからないままで、どうして人にバプテスマを授けることができようか。②神に遣わされた証明となる聖霊のバプテスマを受けている(ロマ10:15、ヨハ3:34、20:21~22、ルカ4:18)。それは、罪を赦す権威は聖霊を受けることによって与えられるからである(ヨハ20:22~23)。



今日の一般の教会はバプテスマを施す際に、多数は聖書が指示したことを疎かにし、「父と子と聖霊との名によって」施したり、「顔を上向きにして」バプテスマを受けたり、「滴礼」を行ったりしている。それは聖書の基準に合わないもので、ただ悔い改めることを促すだけである。その他、授洗者が教えに合ったバプテスマと聖霊のバプテスマ（遣わされた証拠）を受けておらず、聖書の規定による資格は一切備わっていない。このようなバプテスマは「ヨハネのバプテスマ」と一体どんな区別があるのか。なぜ人に聖霊を受けさせられないかの理由は、ここにある。

第五節 按手を受ける

聖書において「按手」はとても重要な地位を占めている。旧約時代も新約時代もそうである。以下数例を挙げよう。

一、つながりを表す

旧約時代の律法は、燔祭を捧げる際に、選民が獣の頭に手を置かなければならないと定めた(出29:10～14、レビ1:3～4)。「按手」の動作はつながりを意味する、即ち捧げる者と犠牲とのつながりを表すことである。そして①捧げる者の罪は犠牲に帰す、②犠牲の無罪は捧げる者に帰す、③犠牲は捧げる者の罪を負って死ぬ、④捧げる者は犠牲が代わりに死ぬことによって生きる。

二、按手して祝福する

聖書によると、旧約時代に按手の方法で人を祝福した最初の例は、ヤコブがヨセフの二人の息子——エフライムとマナセを祝福したことである(創48:8～20)。新約時代にイエスも同じ方法で、幼な子らを祝福された(マタ19:13～15、マル10:13～16)。



三、按手して病を癒す

按手して病を癒すのは、つながりと祝福の二重の効果があるからだ。つながりについて言えば、病人が按手を受ける時、按手者から力が出て病人に帰す。祝福について言えば、按手者が手を病人の上に置くと、病人はこれにより祝福される。つながりと祝福の二重の効果の下で、病人の病が癒されるのである。新約聖書に書いてあるように、イエスは福音を宣べ伝えた時、この方法でたくさん病人を癒され(マル6:5、8:22~25、ルカ4:40、13:10~13)。パウロはマルタと呼ばれた島にいた時、かつて同じ方法で島の首長、ポプリオの父の病を癒した(使徒28:1、7~8)。イエスは天に引き上げられる前に、さらに弟子たちに約束された、「病人に手をおけば、いやされる」(マル16:18)。これで、病を癒す時、按手の祈りは軽視できない効果があることが分かる。

四、賜物を分け与える

つながりと祝福の効果から言うと、按手は自分のもらった賜物を人に分け与える働きも大きい。旧約時代に、イスラエル人のリーダーであるモーセはかつてヨシュアに手を置き、リーダーに備えるべき知恵の霊に満ちた超然たる力を与えたので、イスラエルの人々は彼に聞き従った(申34:9)。そして、新約時代には、パウロが長老たちとテモテに按手をする時、預言によって彼に特殊な賜物を分け、教牧者に値する職を受ける資格を与えた(I テモ4:14、II テモ1:6~7)。

五、式典の一つ

聖書に按手は時によって式典として扱われることもある(へブ6:2)。ただしこの式典を行う時はよく慎まなければならないのである(I テモ5:22)。例えば：

1、聖職者を立てる

旧約時代に、主の会衆を牧者のない羊にしないよう、モーセはひとりの人を



立てることを主に求めた。主は言われた、「神の霊のやどっているヌンの子ヨシユアを選び、あなたの手をその上におき、彼を祭司エレアザルと全会衆の前に立たせて、彼らの前で職に任じなさい」。そこでモーセは主が命じられたようにし、ヨシユアを選んで、全会衆の前に立たせ、彼の上に手をおき、彼を任命した(民27:15～23)。新約時代に、原始教会が出くわした最初の困難は、弟子たちの数がふえてくるにつれて、管理しにくくなったことである。ギリシヤ語を使うユダヤ人たちが、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して、自分たちのやもめらは、日々の配給で、おろそかにされがちだと、苦情を申し立てた。そこで、十二使徒は弟子全体を呼び集めて、その中から、御霊と知恵とに満ちた、評判のよい人たち七人を捜し出した。使徒たちは祈って手を彼らの上において、教会のために執事として食卓の仕事を任せた(使徒6:1～6)。

2、働き人を遣わす

「一同が主に礼拝をささげ、断食をしていると、聖霊が『さあ、バルナバとサウロとを、わたしのために聖別して、彼らに授けておいた仕事に当らせなさい』と告げた。そこで一同は、断食と祈りとをして、手をふたりの上において後、出発させた」(使徒13:2～3)。原始教会では先に手を置く儀式を行ってから、働き人を遣わして伝道に行かせたのであった。

六、按手して聖霊を賜る

按手は上述の各々の効果と意義があるのと同時に、聖霊を受ける早道でもある。事実によれば、前の雨の時代において、五旬節の日とコルネリオ一家族の経験のほか、多くは按手されて聖霊を受けたのである。例えば：

1. サマリヤ人の経験

ステパノが殉教した後、エルサレムの教会に対して大迫害が起り、使徒以外の者はことごとく、ユダヤとサマリヤとの地方に散らされて行った。ピリポは



サマリヤの町に下って行き、人々にキリストを宣べはじめた。群衆はピリポの話聞き、その行っていたしるしを見て、こぞって彼の語ることに耳を傾けた。エルサレムにいる使徒たちは、サマリヤの人々が、神の言を受け入れたと聞いて、ペテロとヨハネとを、そこにつかわした。二人はサマリヤに下って行って、みんなが聖霊を受けるようにと、彼らのために祈った。それは、彼らはただ主イエスの名によってバプテスマを受けていただけで、聖霊はまだだれにも降っていなかったからである。そこで、ふたりが手を彼らの上においたところ、彼らは聖霊を受けた(使徒8:1~17)。

2. サウロの経験

サウロは初めに福音に反対し、教会の迫害者であったが、自分は神に仕えていると思っていた(ピリ3:6、参考：ヨハ16:2~3)。ある時、サウロは大祭司のところに行って、ダマスコの諸会堂あての添書を求めた。それは、クリスチャンを男女別なく縛りあげて、エルサレムにひっぱって来るためであった。ところが、途中で主は彼を異邦人の使徒として選び、又幻の中でアナニヤに現れて、サウロを尋ねるようにと示された。そこでアナニヤは、出かけて行って、手をサウロの上において言った、「兄弟サウロよ、あなたが来る途中で現れた主イエスは、あなたが聖霊に満たされるために、わたしをここにおつかわしになったのです」。そこで彼は聖霊のバプテスマを受け、又水のバプテスマを受けたのである(使徒9:1~18)。

3. エペソの弟子たちの経験

パウロはエペソにきて、ある弟子たちに出会った。彼らが、聖霊を受けていないのは間違ったバプテスマを受けたからだを知り、改めてバプテスマを授けた。そして、パウロが彼らの上に手をおくと、聖霊が彼らにくだり、それから彼らは異言を語ったり、預言をしたりし出した(使徒19:1~6)。

以上の経験から教わることは、彼らが皆按手の祈りによって聖霊を受けたことである。本教会の聖霊を受けた者も多数は同じ経験がある。しかし、五旬節の日の経験が異なったのは、初めて聖霊が降り、だれも聖霊を受けておらず、他の人のために按手できなかったからである。コルネリオ一家族が按手しないままで聖霊を受けたことと、水のバプテスマを受ける前に、聖霊のバプテスマを先に受けたことと理由は同様である。本章第四節の「バプテスマを受けて罪の赦しを得る」を見ればわかる。本教会の聖霊を受けた者の経験もこれに類似した状況がよくある。

第六節 貧しい心、清い心

聖霊のバプテスマを受けるには心の貧しさがなくてはならない。

イエスが言われた、「こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである」(マタ5:3)。貧しい人はきつと何も所有しない。心の貧しい者とは自分を空っぽにする者のことである。天国は彼らのもので、このような人たちから成り立つ国である。彼らは天国の国民、天国を受け継ぐ者、神を王とする者である。聖霊は天国に入るのに欠かせない条件の一つである(ヨハ3:5、エペ1:14)。天国がこころの貧しい人たちのものというのは、彼らは普通の人より聖霊を受けやすく、普通の人より聖霊の導きに服従するからである。教会の信者が集まって一緒に聖霊のバプテスマを求める時、子供の祈りはしばしば大人の祈りより神に聞き入れられる。当時イエスは弟子たちに、「心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう」と言われたが(マタ18:3)、この事実はその教訓の意味を教えてくれるのである。

ラオデキアにある教会は、自分は富んでいる、豊かになった、なんの不自由もないと言っているが、実は、みじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の



見えない者、裸な者であることに気がついていない。これは正に今日の聖霊のない一般の教会の描写である。真理がない(貧しい者)が、あると思っている。聖霊がない(目の見えない者)が、あると思っている。清くない(裸な者)が、清いと思っている。主の呼び声を聞け、「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう」(黙3:14~20)。ラオデキアにある教会と強烈な対照にあるのはスミルナにある教会である。主は言われた、「わたしは、あなたの苦難や、貧しさを知っている(しかし実際は、あなたは富んでいるのだ)」(黙2:8~9)。願わくは、わたしたちはスミルナにある教会を模範にして、心の貧しい人となったことによって富んでいるように。絶対にラオデキアにある教会のようになってはならない。彼らは自分が富んでいる、一つも欠けたことはないと言いながら、実際はずっと貧しくなる一方であった。それは、こころが貧しいことは、神の前で富んでいるのに必要な先決条件だからである。

使徒行伝19章に書いてあるように、パウロがエペソにある弟子たちに「あなたがたは、信仰にはいった時に、聖霊を受けたのか」と尋ねたところ、「いいえ、聖霊なるものがあることさえ、聞いたことがありません」と彼らは素直に答えた(1~2)。今日のクリスチャンの多くは明らかに聖霊を受けていないが、「ある、主を信じた時にあるのだ」、「五旬節の日以来、聖霊は各信者の心に留まっている」と言い張る。パウロはエペソの弟子たちが聖霊を受けないのは間違ったバプテスマによると知ったので、改めて彼らにバプテスマを授けた(3~5)。今日のクリスチャンの多くは洗いなおすことに反対する。彼らは、「バプテスマを受けて主と共に葬られ、同時に、主と共によみがえらされた。それは一生に一度しかできない。私はとっくにバプテスマを受けたのだから、受けなおすわけにはいかない」と言う。しかし、受けたバプテスマが聖書にふさわしくなければ、受けていないのに等しいということを彼らは知らない。エペソ



の弟子たちは改めてバプテスマを受けた。それで、パウロが彼らの上に手をおくと、聖霊が彼らにくだり、それから彼らは異言を語ったり、預言をしたりし出した(6)。しるしは明白であった。但し、今日のクリスチャンの多数は異言問題を攻撃して、聖霊を受けるには必ずしも異言を語るとは限らないことを主張している。器はまずすでにあったものを空けないと、新しいものに入れ替えることはできない。間違った神学の観念を取り出して、はじめて聖霊が満たしてくださるのである。エペソの弟子たちがパウロに出会って、はやくも聖霊を受けたのは、彼らの謙虚な心によるのであった。

老子曰く、「大河や大海は、いかにして峡谷・河川の『王』となるのであろうか。それは己をよく低きに保つからである。それが『百谷の王』となる理由だ」(道德経第六十六章)。水は下に流れる性質を持っているので、地勢が低ければ低いほど水容も大きくなり、ついに大河や大海となる。聖霊はよく「水」として喩えられるので、心の謙虚な人は必ず聖霊に満たされる。「神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜うからである」(I ペテ5:5)。

聖霊のバプテスマを求める者は清い心もなくってはならない。

イエスが言われた、「心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう」(マタ5:8)。神を見た者はまだひとりもない(ヨハ1:18)。しかし、心の清い人たちは神を見るのである。ヨブは言った、「わたしの皮がこのように滅ぼされたのち、わたしは肉を離れて神を見るであろう。しかもわたしの味方として見るであろう。わたしの見る者はこれ以外のものではない。わたしの心はこれを望んでこがれる」(ヨブ19:26~27)。ダビデも神に向かって言った、「しかしわたしは義にあつて、み顔を見、目ざめる時、みかたちを見て、満ち足りるでしょう」(詩17:15)。人が神を見ることは確かに最大の幸であろう。

神が万民の中からわたしたちを召されのは、汚れたことをするためではなく、



むしろ気をつけて自分のからだを尊く保ち、清くなるためである。(Iテサ4:3～7)。これは聖書の重要な真理であり、旧約時代に、すでに律法に定められたおきてをとおして指示されたものである(レビ1:3～4、11:44～47、エレ4:4、9:25)。主は聖なる者であるから、清くならなければ、だれも主を見ることはできない(Iペテ1:15～16、へブ12:14)。神は心の清い者にむかって、まことに恵みふかいのである(詩73:1)。

からだを清く尊く保つには、まず心を守らなければならない。というのは、命の泉は、これから流れ出るからである(箴4:23)。自ら割礼を行って、心の汚れを取り除くように。心に割礼を受けていないすべての人をわたしは罰すると、神が命令されたのは、旧約時代の選民に油断することなく、心を守らせるためであった(エレ4:4、9:25)。外見上の肉における割礼は割礼ではない。文字によらず霊による心の割礼こそ割礼だからである(ロマ2:27～29)。パリサイ人は外見の清潔を重んじるが、心の聖潔を疎かにしたため、昔の人の言い伝えに従って、念入りに手を洗ってからでないと、食事しない。この誤った観念に基づいて、使徒たちが不浄な手でパンを食べるのを非難するばかりか、イエスでさえ洗わない手で食事することにも驚いた。そこで、イエスは指摘して言われた、「いったい、あなたがたパリサイ人は、杯や盆の外側をきよめるが、あなたがたの内側は貪欲と邪悪とで満ちている」(マル7:1～5、ルカ11:37～40)。これで、聖なる生活を送るには心を清く守ることが何よりも重要なことがわかる。パリサイ人が拘っている礼儀上の聖潔は靈的に清くなる準備である。惜しいことに、彼らは神が律法を定めた目的がどこにあるかを知らず、本末を転倒してしまった。

厳格に言うと、「心の清い人」とは心が完全に清く、行いにも欠点のない人のことではない。それは普段から清くなるように努めて、一旦罪過に陥っても確実に悔い改める人のことを言っているのである。なぜならば、神以外によい

方は一人もいないからである(マタ19:17、ロマ3:9~12)。人は神ではないので、過ちのない人はいない。旧約時代に、ヨブはみずから恨み、ちり灰の中で悔いることによって、その目で神を拝見し、苦境から逃れることができた(ヨブ42:5~6、10)。新約時代に、取税人のかしらのザアカイは確実に悔い改めて、イエスの赦しを得、魂を救われた(ルカ19:1~10)。主はあわれみに富み、めぐみふかく、へりくだって心悔い、御言葉に恐れおののく者と共に住まれるからである(詩103:8~9、イザ57:15、66:2)。神の受けられるいけにえは砕けた魂である。神は砕けた悔いた心をかろしめられない(詩51:17)。従って、われわれは、いつも自分の行いを調べ、かつ省みて、主に帰るべきである。どうか、主がわたしを探して、わが心を知るように求めて、そして、確実に悔い改めよう(哀3:40、詩139:23~24)。決してパリサイ人が自分を義人だと自負して、神に義とされる機会を失ったようになってはならない(ルカ18:9~14、参考：箴30:12)。

昔、神はソロモンをとおしてイスラエル人と約束された。「わたしの叱責に心を留めるなら、今すぐ、あなたがたにわたしの霊を注ぎ、」(新改訳、箴1:23)。今は後の雨の聖霊が大いに降り注がれている時期であるので、神の叱責に心を留める(確実に悔い改める)人は、必ず神が約束された聖霊を与えられる。願わくは、ソロモンをとおして残したこの言葉に感動され、または、心からダビデと同じ思いで、「神よ、あなたのいつくしみによって、わたしをあわれみ、あなたの豊かなあわれみによって、わたしのもろもろのところがぬぐい去ってください。神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください」と神に求めて(詩51:1、10)、聖霊を授けられるように。

第七節 信仰、専念

聖霊のパプテスマを求める者は信仰がなくてならない。



「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。なぜなら、神に来る者は、神のいますことと、ご自分を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである」(ヘブ11:6)。信仰のある者は、神に喜ばれる。神に喜ばれる者は求めることが叶う。神は霊であるから、神を見た者はまだひとりもいない(ヨハ4:24、1:18)。外見で真偽を断定する世の人々にとって、神を信じることは困難である。しかし、神に来る者は、神のいますことを、必ず信じなければならない。神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性とは、天地創造このかた、被造物において知られていて、明らかに認められるからである(ロマ1:20)。神を信じることは信仰の始まりであり、もっとも根本的な問題である。信仰は神と人との距離を縮めるものだからである。神は愛であり(Iヨハ4:8)、わたしたちのために自ら肉体となって、命まで捨ててくださった。わたしたちを死から命に移されたほど、究極の愛を示してくださった(ヨハ3:16、ロマ5:7~8)。命まで惜しまないほどわたしたちを愛された以上、どうして、万物をも賜わないことがあろうか(ロマ8:32)。神は全能の方である(創17:1)。人にはできないが、神には何でもできない事はない(マタ19:26)。もろもろの天は主のみ言葉によって造られ、天の万軍は主の口の息によって造られた(詩33:6)。では、主にとって不可能なことがあろうか(創18:14)。彼は信実な神である(申7:9)。たとい、わたしたちは不真実であっても、彼は常に真実である。彼は自分を偽ることが、できないのである(IIテモ2:13)。キリストをとおして、信じて求めるものは、みな与えられるであろうと、約束された以上(マタ21:22)、わたしたちの祈りを拒むことがあろうか。神の慈愛、全能、信実は明らかに信仰の保障であるので、求めることは必ず成就される。

多くのクリスチャンは信仰の重要性をよく知っているが、信仰の本意をあまり把握できていない。聖書曰く、「信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見えない事実を確認することである」(ヘブ11:1)。「そこで、あなたがたに言うが、なんでも祈り求めることは、すでになえられたと信じなさい。そ



うすれば、そのとおりになるであろう」(マル11:24)。これは即ち信仰の定義である。十二年間も長血をわずらっている女がいた。この女がイエスのことを聞いて(目で見ていないが、聞いたことを信じた)、群衆の中にまぎれ込み、うしろから、み衣にさわった。それは、せめて、み衣にでもさわれば、なおしていただけるだろうと、思っていたからである(その時、彼女の望みはまだ見ていないが、確信できた)。すると、血の元がすぐにかわき、女は病気がなおったことを、その身に感じた(癒されると信じたので、ほんとうに癒された)。イエスはその女に言われた、「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。すっかりなおって、達者でいなさい」(マル5:25~34)。病気をしている息子を持つある役人がいた。この人が、イエスのみもとにきて、カペナウムに下って、子供が死なないうち、なおしていただきたいと、願った。肝心な時、イエスは言われたとおりにせず、ただ彼に言われた、「お帰りなさい。あなたのむすこは助かるのだ」。彼は自分に言われたイエスの言葉を信じて帰って行った(その時、彼の望みはまだ見ていないが、確信できた)。その下って行く途中、僕たちが彼に出会い、その子が助かったことを告げた(癒されると信じたので、ほんとうに癒された)(ヨハ4:46~53)。長血をわずらっていた女と役人の言行は、まさにへブル人への手紙11章1節とマルコによる福音書11章24節に書かれている信仰であり、実によく吟味して見習うに値するものであろう。

昔、あるにせ教師が、復活はすでに済んでしまったと言った(彼らが言うには、「復活」とは霊性の復活であり、いのちが新たにされることである)。彼らの言葉は、がんのように腐れひろがる一方で、ある人々の信仰をくつがえしていた(Ⅱテモ2:17~18、Ⅰコリ15:12~22)。今日、聖霊のない一般の教会のリーダーたちは、多数が五旬節は過ぎたと言っている(五旬節はただ一つであって、聖霊は一度だけ降り注がれた後、今日までずっと教会と共にあられると、彼らは主張している)。その言葉もがんのように腐れひろがる一方で、多くの無知の信者の信仰をくつがえしている。それで、彼らは一生聖霊のバプテスマを求めよう



とせず、聖霊を受けないままにいる。認識すべきことは、歴史から言うと、五旬節は過ぎた日のことで、二度と来ないが、意義から言うと、五旬節は一つだけではない。なぜならば、今日でも聖霊は依然として降り注がれている時期だからである。パウロが言った、「それは、アブラハムの受けた祝福が、イエス・キリストにあって異邦人に及ぶためであり、約束された御霊を、わたしたちが信仰によって受けるためである」(ガラ3:14)。神が約束された聖霊は、必ず信仰によって求めるすべての人の身に注がれる。前の雨の時代も、後の雨の時代も同様である。従って、聖書に載っている聖霊を賜る一切の約束に対して、決して疑ってはならない。むしろ、堅い信仰をもって祈り続ければ、聖霊のバプテスマを受けるであろう。

聖霊のバプテスマを求める者は専念もなくてはならない。

「あなたは祈るときには、自分の奥まった部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます」(新改訳マタ6:6)。字面の意味から言うと、奥まったへやは隠れた場所で、だれも見えない、何も聞こえない、真心をもって集中して祈れるところである。霊的な意味を言うと、奥まったへやは心底であり、戸を閉じるとは心の扉を閉めることであり、外との交流を切断し、雑念を捨てて専念して祈ることができるところである。たくさんの尊い経験によれば、奥まったへやに入って霊的な交わりをするのは、確かに主に聞かれる、一番有効的な方法であることがわかる。しかし、イエスのこの教えを字面から見て、信者が祈れる場所は奥まったへやだけだと形式的に解釈するよりも、むしろ、霊的な意味から見て、いつでもどこでも主イエスの教えに従って、誠心誠意で集中して祈ることができると解釈したほうが良からう。なぜならば、第一、イエスがこのように教えられたのは、ある偽善者たちが褒めてもらうために、人に見せようとして、会堂や大通りのつじに立って祈



ることを好んだからである(マタ6:5)。しかし、自分の奥まったへやに入り、戸を閉じると、傍観者がいないため、静かに一人で神といることができ、真に専念して祈ることができるからである。第二、心が落ち着かず、祈りに専念できない人は、形式上奥まったとしてへやに入り、戸を閉じて何の役にも立たない。逆に言うと、雑念を捨て、一心に祈る人は、公衆の前で祈りをしても、神に聞き入れられるからである。

むろん、イエスは祈りに専念するため、常に町や群衆を離れて、山へ行くか(マタ14:23、ルカ6:12、9:28)、もしくは誰もいない静かな荒野へ行かれた(マタ4:1~2、マル1:35、ルカ5:16)。そればかりではなく、ゲッセマネにいた時、しばらく三人の愛する弟子と少し離れて、隠れたところで祈られたことさえあった(マタ26:36~40、ルカ22:39~41)。ただ忘れてはならないのは、イエスはよく群衆の前で、少しもはばからずに祈られたことである(ルカ3:21、11:1、ヨハ11:41~43、12:27~29)。しかも、どんな願い事についても心を合わせて祈りなさい(マタ18:19~20)、わたしの家は、すべての国民の祈の家となえられるべきだと、弟子たちに教えられた(マル11:17)。使徒たちは世にいる間、場所を選んで祈る時があれば(使徒10:9、16:13、16)、そうでない時もあった(使徒21:5、27:35)。そればかりではなく、祈る場所を制限せず、「どんな場所でも祈ってほしい」とパウロは教えた(1テモ2:8)。これらの事実から学べることは、イエスは教会堂で祈ることを禁じておらず、道で祈ることも禁じていないということ。大事なものは、まことをもって祈りに専念することである(ヨハ4:24)。この教えの本当の意味がわかって、まことをもって祈りに専念できれば、人々の前でも差支えがないことなのである。

五旬節の後、弟子の数が増えてくるにつれて、管理上の困難は免れなかったため、苦情を申し立てられた。そこで、十二使徒は弟子全体を呼び集めて言った、「わたしたちが神の言をさしおいて、食卓のことに携わるのはおもしろく



ない。そこで、兄弟たちよ、あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判のよい人たち七人を捜し出してほしい。その人たちにこの仕事をまかせ、わたしたちは、もっぱら祈と御言のご用に当ることになろう」(使徒6:1~4)。この聖句によれば、使徒たちがこのように決定したのは、もっぱら祈と御言のご用に当ることこそ、神に祝福されると思ったからである。旧約時代に、神はエレミヤをとおして、バビロンに捕え移された選民に言われた、「その時、あなたがたはわたしに呼ばわり、来て、わたしに祈る。わたしはあなたがたの祈を聞く。あなたがたはわたしを尋ね求めて、わたしに会う。もしあなたがたが一心にわたしを尋ね求めるならば、わたしはあなたがたに会うと主は言われる」(エレ29:12~14)。聖霊のバプテスマを受けていない者は捕え移された者のように、心は熱しているが、肉体が弱く、罪に勝てないのである(ロマ7:14~24、マタ26:41)。聖霊のバプテスマを受けて聖霊に服従する者は、自由の身で罪と死との法則から解放されたのである(ロマ8:1~2、13、ガラ5:16)。聖霊は神の霊であるので、もっぱら尋ね求めれば、見つかるのである。ゆえに、聖霊のバプテスマを求める時は、心の扉を閉じて、祈りに専念しなければならないのである。

第八節 常に祈る

「常に祈りなさい」(ロマ12:12)。

KJVは「continuing instant in prayer」と訳し、新英語聖書は「persist in prayer」と訳してある。そこに、長く持ち続ける変わらない心、懇ろに、切に、という意味が含まれている。

「雨だれ石をうがつ」、「槌を磨いて針にする」の如く、長続きすることは確かに成功の元である。聖書の中に、ひたすら祈って聞き入れられた例は多く、枚挙にいとまがない。例えば、①アブラハムは、およそ百歳となって、彼自身



のからだが生きた状態であり、また、サラの胎が不妊であることを認めながらも、なお彼の信仰は弱らなかつた。彼は、神の約束を不信仰のゆえに疑うようなことはせず、神はその約束されたことを、また成就することができるかと確信した。アブラハムは忍耐強く待っていたので、約束のものを得たのである(ロマ4:19～21、ヘブ6:15)。②ヤコブはハランから帰ってきて、ペニエルで夜明けまで神と組打ちした。ヤコブに勝てないので、神は果たしてヤコブの求めたとおり、祝福してやった。そこで、ヤコブは彼を去らせた(創32:24～30)。神の力がヤコブに勝ち得ないわけがないが、ヤコブの不屈の精神によってその目的は達成されたことを知らなければならない。わたしたちも祈る時、最後までやり続ける決心がなければならない。③アハブが世を治めたとき、三年六か月にわたって天が閉じ、イスラエル全土に大飢きんがあった(ルカ4:25)。エリヤはカルメルの頂に登り、地に伏して顔をひざの間に入れて、切に祈った。その祈りが神に聞き入れられて、間もなく、雲と風が起り、空が黒くなって大雨が降ってきた(列王上18:41～45、ヤコ5:17～18)。④あるカナンの女の娘が悪霊にとりつかれて苦しんでいた。彼女は主に憐れみと助けを願いに来た。しかし、イエスはひと言もお答えにならなかつた。そして、ご自分は、イスラエルの家の失われた羊以外の者には、つかわされていまいと言われた。最後に彼女を人間扱いせず、「子供たちのパンを取って小犬に投げてやるのは、よろしくない」と言われた。沈黙から暗示、そして、明言へと三度も主に断られ、ひどくなる一方であったが、女は、怒りもせず、落胆もしない、逆に主の言葉に乗って、小犬もその主人の食卓から落ちるパンくずは、いただきますと答えた。そこでイエスはその信仰を褒め、すぐに願いどおりにされた(マタ15:21～28)。⑤ある日、イエスはカペナウムにある家で御言を語っておられたところ、癒しを願うためにひとりの中風の者が四人の人に運ばれて、イエスのところに連れられてきた。群衆のために近寄ることができないが、彼らは諦めずに、屋根をはぎ、穴をあけて、中風の者を寝かせたまま、床をつりおろした。イエスは彼らの信仰を見て、中風の者の罪を赦された。それで、病がすぐに癒された(マル2:1～12)。⑥へ



ロデはペテロを捕えて獄に投げ、四人一組の兵卒四組に引き渡して、見張りをさせておいた。ペテロは二重の鎖につながれ、ふたりの兵卒の間に置かれて眠っていた。番兵たちは戸口で獄を見張っていた。その警戒の厳しさがわかる。しかし、教会では、彼のために熱心な祈りが神にささげられた。そこで、神は彼らの祈りを聞き入れ、御使を遣わしてペテロを獄から救い出された(使徒12:4～19)。熱心に祈ることは、神に叶えていただく秘訣だということを以上の事実からわかる。

落胆せずに常に祈るようにイエスは譬で教えられた、「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わぬ裁判官がいた。ところが、その同じ町にひとりのやもめがいて、彼のもとにたびたびきて、『どうぞ、わたしを訴える者をさばいて、わたしを守ってください』と願いつづけた。彼はしばらくの間きき入れないでいたが、そののち、心のうちで考えた、『わたしは神をも恐れず、人を人とも思わないが、このやもめがわたしに面倒をかけるから、彼女のためになる裁判をしてやろう。そうしたら、絶えずやってきてわたしを悩ますことがなくなるだろう。』」(ルカ18:1～5)。この譬から教わることは不義の裁判官がやもめのために裁判をするのは、彼女を憐れんだ(彼は残酷な人)からではなく、やもめがしきりに願ったので、叶えざるを得なかったからである。神は慈愛なる父であるため、愛する子のわたしたちが信仰強く、揺れることなく常に祈るように決心すれば、必ず叶えてくださるのである。譬で常に祈りなさいと教えたばかりではなく、イエスはさらに行動をもって、切なる祈りが叶えられる秘訣であることを証明してくださった。例えば、①上からの力を求めて、天の父に託された使命を果たすため、イエスは四十日の間断食して夜も昼も祈られた。その結果は、聖霊に満たされて、三度もサタンの試みに勝ち抜いて、将来の働きに良い基をすえられた(ルカ4:1～15)。②宣教中、絶えず父から力が与えられるように祈り、さらに夜明けや徹夜の祈りをされていた(マル1:35、マタ14:23、25、ルカ6:12～13)。イエスはそれで聖霊の力に満ち、至るところまで病を癒し、悪

霊を追い出し、神の権威を現された(マル5:30、ルカ5:17、6:19、使徒10:38)。
 ③とらえられる当夜、イエスはみこころに従い、十字架の救いの恵みを全うすることができるように、ゲッセマネで三度も切に天の父に力を求められた。その時、御使が天から現れてイエスを力づけた。にもかかわらず、イエスは苦しみもだえて、ますます切に祈られた。そして、その汗が血のしたたりのように地に落ちた。その深い信仰(大声で呼ばわり、涙を流して切に祈られた)のゆえに、神はこのイエスを死の苦しみから解き放って、よみがえらせられたのである(マタ26:36~44、ルカ22:41~44、ヘブ5:7、使徒2:24)。

常に祈ることは神に聞き入れられる秘訣である以上、聖霊のバプテスマを求めるには、さらにこの問題を疎かにしてはならないではないか。

ルカによる福音書11章に書いてあるとおり、切に聖霊のバプテスマを求めるように励まされるため、イエスは二つの譬をされた。第一の譬：友に「しきりに願う」ことは、必要なものを出してもらえた原因である(5~8)。第二の譬：「父の子に対する愛」は、子の願いが叶えられた原因である(11~13上)。この二つの譬をされた後、イエスは結論として、13節の下半句の言葉をもって、しきりに聖霊のバプテスマを求める人は必ず与えられる約束をされたのであった。ヨハネによる福音書7章37~39節に、「祭の終りの大事な日に、イエスは立って、叫んで言われた、『だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう』」と書いてある。黙示録22章17節に、「御霊も花嫁も共に言った、『きたりませ』。また、聞く者も『きたりませ』と言いなさい。かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」と書いてある。この二箇所はまさに持ちつ持たれつ双方共にプラスになる聖句である。その教訓は、聖霊のバプテスマを願うものは、自分が渴いていることを知らなければならない(ヨハ4:10、13~14)。というのは、



ラオデキヤにある教会のように自己満足する者がいるからである(黙3:14~17)。渇く者が水を欲しがるとして切に祈ることは、古聖徒が、神よ、鹿が谷川を慕いあえぐように、わが魂もあなたを慕いあえぐと言ったのと同じ心境である(詩42:1)。そうすれば、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう(聖霊に満たされるから)。

昇天される前、イエスは弟子たちに命じられた、「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」(使徒1:4~5)。「見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい」(ルカ24:49)。「待つ」も「~までは」もずっとという意味が隠されている。根気強い者は最後までやり続ける者である。「~までは」は時間性がなく、目的が達成するまで止めないことである。常に、しきりに、切に、ひたすら、という言葉はそれぞれ密接な関係がある。イエスが天に引き上げられた後、弟子たちは命じられたとおりに、ある屋上の間に集まっていた。彼らは毎日心を合わせて、ひたすら祈をしていた(使徒1:12~15)。その結果は、五旬節の日がきて、突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきた。すると、一同は聖霊に満たされた(使徒2:1~4)。また、サウロがダマスコへ行く途中、主に召された。彼は三日間、一心に祈って、食べることも飲むこともしなかった。その後、主の召しによって、アナニヤはサウロのところに来て、手をサウロの上においたところ、彼は聖霊に満たされた(使徒9:8~19)。これらの歴史の事実は、常に、ひたすら祈ることは、確かに聖霊のバプテスマを与えられる秘訣であることを教えている。

第九節 主の戒めを守る



「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう」(ヨハ14:15~16)。

この箇所の教えは、①主の戒めを守るのは主を愛するしるしである。主を愛していると言いながら、その戒めを守らない者は、偽る者である。②主を愛する者に、主は父にお願いして、別に助け主(聖霊)を送って、いつまでも共におらせてくださることである。ゆえに、聖霊のバプテスマを授けられるために(助け主がいつまでも共におられるように)、主を愛さなければならない。真に主を愛することを証明するために、主の戒めを守らなければならない。昔、預言者イザヤをとおして、神はイスラエル人を戒められた。民は多くの犠牲をささげても、神は喜ばれない。聖会を守っても、神は耐えられない。手を伸べて祈っても、神は聞かれない。それは、民は手が血まみれで、悪を行い、くちびるをもって神を敬うが、その心は神から遠く離れたからである。悪い行いを除き、悪を行うことをやめ、善を行うことをならい、公平を求め、虐げられた者を助けることがなければ、神は彼らに近づかない(イザ1:10~17、29:13)。今日のわたしたちが、もし強情な心で、聖霊のバプテスマをひたすら求めながら、主の戒めに背いているならば、どうして主に聞き入れられるのであろうか。

主の戒めは、主がわたしたちを愛されたように、わたしたちも互に愛し合うことである(ヨハ13:34、15:12~14)。主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それは愛の頂点である。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきである(Iヨハ3:16)。なぜならば、教会は主の体、主はかしら、わたしたちは肢体である。肢体が互いにいたわりあい、共に悩み、共に喜ぶのは、主を愛する表れだからである(コロ1:24、Iコリ11:3、12:25~27)。サウロは以前主の弟子たちを迫害した。主が彼に言われた、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」。そこで彼は「主よ、あなたは、どなたで



すか」と尋ねた。すると答があった、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」(使徒9:1~5)。そのとおりである。主にならって、実際に互に愛し合うのは、クリスチャンの信仰生活の特徴である(ヨハ13:34~35)。互に愛し合う美德がなければ、主の弟子であることを、すべての者が認めることがあろうか。互に愛し合うことに、律法全体と預言者とが、かかっている(マタ22:39~40、ガラ5:14)。人を愛する者は、律法を全うするのである。だから、互に愛し合うことの他は、何人にも借りがないように、よく機会を見つけて返済しよう(ロマ13:8)。

「わたしのいましめを心にいだいてこれを守る者は、わたしを愛する者である。わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう。もしだれでもわたしを愛するならば、わたしの言葉を守るであろう。そして、わたしの父はその人を愛し、また、わたしたちはその人のところに行って、その人と一緒に住むであろう」(ヨハ14:21、23)。主の戒めを守るのは主を愛するしるしである。主の戒めは互いに愛し合うことである。聖靈は父の霊であり(マタ10:20、Ⅱコリ3:3)、また、主の御霊でもある(使徒5:9、16:7)。「主がご自身をあらわす」、あるいは、「父と主がその人と一緒に住む」とは、聖靈が内におられることである。もし主の戒めを守り、主の愛にならって、互いに心から熱く愛し合うならば、天の父と主は愛してくださる。そうすると、朝夕渴き慕っている聖靈は臨んで、いつまでも共にいてくださるのである。これは主の約束であり、堅く信じるべきことである。

「そして、願い求めるものは、なんでもいただけるのである。それは、わたしたちが神の戒めを守り、みこころにかなうことを、行っているからである。その戒めというのは、神の子イエス・キリストの御名を信じ、わたしたちに命じられたように、互に愛し合うべきことである。神の戒めを守る人は、神にお



り、神もまたその人にいます。そして、神がわたしたちのうちにいますことは、神がわたしたちに賜った御霊によって知るのである」(Iヨハ3:22~24)。

この箇所の教えは、①主の戒めを守り、愛の実を結ぶならば、何でも望むものは与えられるであろう(参考:ヨハ15:7~10)。②主の戒めはイエスを信じ、その戒めどおりに愛し合うことである。③主を信じることと主の戒めを守るとは影の形に添うようなものなので、主の戒めを守らなければ、真に主を信じることは言えない。④主の戒めを守って互いに愛し合うならば、彼はわたしたちの内におられる。⑤聖霊を賜ったことは、主がわたしたちの内におられる証拠である。ヨハネが言った、「『神を愛している』と言いながら兄弟を憎む者は、偽り者である。現に見ている兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することはできない。神を愛する者は、兄弟をも愛すべきである。この戒めを、わたしたちは神から授かっている」(Iヨハ4:20~21)。神の家というのは、生ける神の教会のことである(Iテモ3:15)。神はすべての者の父である(エペ4:6)。わたしたちは神の子である(ガラ3:26)。神の家で、神の子たちは神を愛し、互いに愛し合うべきである。互いに愛し合うことは神を愛することのほど、神を愛するかどうかの試金石と言えよう。イエスが戒められた、「敵を愛し、迫害する者のために祈れ。こうして、天にいますあなたがたの父の子となるためである」(マタ5:44~45)。敵でさえ愛するに値し、愛すべきなのだから、ましてやわたしたちの兄弟は言うまでもない。もし、兄弟でさえも愛せなければ、どうして敵を愛することができようか。

子たる者が父母を敬い、兄弟が和合して暮らさなければならないのは、父母が先に彼らを愛し、すべてを犠牲にしたからである。それで、子たる者が養育の恩に報いるため、孝行すると、兄弟を愛して父母に喜んでもらうのは天地の大義である。神を愛し、互いに愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛し、ひとり子を遣わしていのちを捨てて下さったからである(Iヨハ4:8~11, 19)。



ゆえに、神の御恩に報いるため、神を敬うのと、喜ばれるため互いに愛し合うのは、なおさら天地の大義なのである。「なぜなら、キリストの愛がわたしたちに強く迫っているからである。そして、彼がすべての人のために死んだのは、生きている者がもはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった主のために、生きるためである」とパウロが言ったのは(Ⅱ コリ5:14~15)、即ちこのような崇高な精神の表れである。パウロのこの言葉は深く吟味するに値するものではないのか。

「世の富を持っていながら、兄弟が困っているのを見て、あわれみの心を閉じる者には、どうして神の愛が、彼のうちにあるか。子たちよ。わたしたちは言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実とをもって愛し合おうではないか。なぜなら、たといわたしたちの心に責められるようなことがあっても、神はわたしたちの心よりも大いなるかたであって、すべてをご存じだからである。愛する者たちよ。もし心に責められるようなことがなければ、わたしたちは神に対して確信を持つことができる」(Ⅰヨハ3:17~21)。ヨハネが前文の22~24節を述べる前に、まずこの言葉を語ったのは、互いに愛し合うことはただのスローガンではなく、兄弟のためになるように、必ず身をもって実行すべきだと私たちに分からせるためである。こうして、真実をもって愛し合うならば、心に責められるようなことがなく、神に対して確信を持つことができるのである。すると、22節以下に書かれている祝福——願い求めるものは、何でもいただける(聖霊のバプテスマを含む)こと、は臨んでくるであろう。

それで、凡そ聖霊のバプテスマを求める者は、主の戒めを守って、互いに熱く愛し合うべきことがわかる。

昔、パリサイ人はイエスを拒んで、十字架で死なせたが、それを熱心に神に仕えていると思っていた(ヨハ19:4~7、参考：ヨハ16:2~3)。パウロも最初、



同じように主を迫害していたが、自分が律法に対して熱心で落ち度のない者だと思っていた(使徒9:1~5、ピリ3:5~6)。今、主の御霊は天から降ってこられたが、聖霊のない一般の教会のリーダーたちの多数は彼を拒み、勝手気ままに異言のことを攻撃し、多くの人を惑わすに至った。それにもかかわらず、彼らはそれが忠実に主に仕え、信仰のために戦っていると思っている。それは最大のおおわれていることである(Ⅱコリ4:3~4)。願わくは、主が彼らの無知を憐んで、聖霊のバプテスマの教えを謙虚に学ばせるために、その目(詩119:18)、その心を開かれるように(参考：ルカ24:45)。

問題

- 一、聖霊のバプテスマを慕う人はなぜ真の教会と接触しなければならないのか。
- 二、真理に従う重要性を述べてみよ。
- 三、「ハレルヤ」を繰り返して唱えるのは間違いなのか。
- 四、水のバプテスマと聖霊のバプテスマは何の関わりがあるのか。
- 五、按手によって聖霊を受けた例を述べてみよ(使徒行伝)。
- 六、なぜ聖霊のバプテスマを求める人はへりくだらなければならないのか。
- 七、なぜ聖霊のバプテスマを求める人は心が清くなければならないのか。
- 八、なぜ聖霊のバプテスマを求める人は信仰がなければならぬのか。
- 九、なぜ聖霊のバプテスマを求める人は専念しなければならぬのか。
- 十、切にひたすら祈る重要性を述べてみよ。
- 十一、主の戒めを守ることは聖霊のバプテスマを求めることと何の関わりがあるのか。



第十三章 御霊に満たされるべき

「酒に酔ってはいけない。それは乱行のもとである。むしろ御霊に満たされて…」(エペ5:18)。

酒に酔うことは快樂をもたらすが、一時の浮薄なもので、楽しみ後に苦しみがある。聖霊に満たされることも快樂をもたらすが、それは真実で永久的なものであり、楽しみに楽しみが加わるものである。酒に酔うことはでたらめに話をし、災いを招き、他人にも自分にも害を与えるのに対して、聖霊に満たされることは言葉に慎みをもたせ、災いが福に転じ、他人にも自分にも益を与える。酒に酔うことは人の徳性をくつがえし、締まりがないようにさせ、失敗に至らせ、地位も名誉もなくすのに対して、聖霊に満たされることは、人の徳を高め、人を悪から善に向けさせ、主の御名に栄光を帰させる。酒に酔うことと聖霊に満たされることとの差別はここにある。大酒飲みにとって、酒は命でその人の主人であるため、毎日酒酔いしないと気が済まない。真の信者にとって、聖霊はその命でその人の主人であるため、毎日聖霊に満たされなければならない。大酒飲みと真の信者の区別はここにあるのである。

ルカによる福音書1章に書いてあるように、バプテスマのヨハネとその父のザカリヤは聖霊に満たされた経験があるが(15、67)、五旬節の日に弟子たちが聖霊に満たされた経験とは異なる。バプテスマのヨハネが聖霊に満たされたのは、エリヤのような志と力を与えられ、イエスに先立って、イスラエルの多くの子らを、神に立ち帰らせるためであった(16~17)。ザカリヤが聖霊に満たされたのは、神の救いの恵みをほめ、ダビデの家に救の角がたてられた預言をさせるためであった(67~69)。バプテスマのヨハネは預言者であるが(マタ11:13)、ザカリヤは祭司である(ルカ1:8)。彼らの体験は旧約時代に聖霊の感動を受けた



聖徒と同じく、一時的であった。五旬節の日の後、主の弟子たちの体験は感動のみではなく、持続的で、聖霊がいつも共にあったものであった(ヨハ14:16～18)。本章で述べる聖霊に満たされることは、バプテスマのヨハネとその父のザカリヤが経験した感動ではない。まずそれを断っておいたのは、五旬節の日以前に同じ経験はあったが、それは五旬節の日以降の経験とは異なっていることを説明するためである。

一般のクリスチャンは聖霊に満たされる問題に対して、普遍的に二つの間違った観念を持っている。一つは、異言の聲が高らかで、体がよく振動すれば、聖霊に満たされていると思うことである。彼らはもっと美しく、もっと重要な満たされることを知らない。もう一つは御霊の実を結んでクリスチャンのしるしを表せば、聖霊に満たされていると思うことである。彼らは異言を語ることを聖霊に満たされることとしない。すでに聖霊のバプテスマを受けたが、霊的にまだ乳飲みの信者は往々にして一つ目の観念を固持し、すべてのことに進歩を求めようとしなない。聖霊のない一般の教会の信者は、信仰に良い成果を収めたならば、二つ目の観念を抱きがちで、聖霊のバプテスマを求めようとしなない。もしあなたが聖霊に満たされることに対し、同じような観念を持っていれば、キリストにある豊かな恵みを楽しむことができなくなるであろう。では、聖霊に満たされるとはいったいどんなことであろうか。聖霊に満たされることはどんな効果を上げられるのか。どんな条件を備えればずっと聖霊に満たされるのか。以下はそれらの問題について述べよう。

第一節 聖霊に満たされる定義

ギリシャ原語では、聖霊に満たされる経験について、不定過去形及び現在進行形の二種類が用いられている。不定過去形は瀬戸際に突然発生した動作に用いられ、使徒行伝2章4節、4章8、31節、9章17節、13章9節などのところ



に見られるのがそれである。しかし、エペソ人への手紙 5 章 18 節に用いられているのは現在進行形で、聖霊に満たされた体験が絶えないものであるので、「常に聖霊に満たされなさい」と訳したほうが正確であろう。

以上の二つの用法に基づくと、聖霊に満たされる経験は時によれば、突然生じる動作があると言えよう。例えば、①聖霊のバプテスマを受け、異言を語る(使徒 2:4、9:17)。②キリストのために力強く証をする(使徒 4:8~13、31)。③必要に応じて神の権能を表す(使徒 13:9~11)。その一方、このような体験もまた真の信者の信仰生活の状態である。例えば、①知恵に満ちる(使徒 6:3)。②信仰に満ちる(使徒 6:5、11:24)。③迫害されても喜びに満ちるなどである(使徒 7:55~56、13:52)。

一、聖霊のバプテスマを受けることを指す

五旬節の日に、聖霊が初めて弟子たちの身に降った時、聖書曰く、「すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した」(使徒 2:1~4)。異邦人に主の名を伝える器として、サウロはイエスに選ばれた。アナニヤが遣わされてユダの家へ行った時、手をサウロの上において言った、「兄弟サウロよ、あなたが来る途中で現れた主イエスは、あなたが再び見えるようになるため、そして聖霊に満たされるために、わたしをここにおつかわしになったのです」(使徒 9:10~17)。この二箇所の聖句に基づけば、聖霊に満たされることは、「聖霊を受け、異言を語る」ことを指している。その動詞は不定過去形が用いられ、突然発生した動作を表しているとはまづはっきりと言えるであろう。

ゆえに、聖霊を受けて異言を語るのを聖霊に満たされることとするのは間違いではないが、問題は聖書にある御霊に満たされることはこれに限っておらず、別の崇高なレベルのことを言っているのである。しかし、聖霊を受けて異言を



語るのを聖霊に満たされることとしないのは大きな誤りである。まして、彼らの主張する「御霊の実」はいったいどういう状況であるか疑問である。前者にしてみれば、エペソ人への手紙5章18節に書いてある聖霊に満たされることは霊的な生活を指しており、本章が論じる主要の問題である。ここで特に聖霊を受けて異言を語ることを取り上げたのは、それも満たされる状態の一つを説明するためである。そのほかに、別の目的はない。後者に見れば、まだ聖霊のバプテスマを受けていない者は、聖霊がその心に宿っていないのに、なぜ聖霊に満たされることができようか。なぜ御霊の実を結ぶことができようか。善を行っても、それは普通の善行に過ぎない。聖霊がなければ、御霊の実を結ぶことができないのは疑わしくない事実だからである。例えば、信仰に入っていない人でも善を行うが、わたしたちはそれを御霊の実としないのと同様である。

「兄弟たちよ。わたしはあなたがたには、霊の人に対するように話すことができず、むしろ、肉に属する者、すなわち、キリストにある幼な子に話すように話した。あなたがたに乳を飲ませて、堅い食物は与えなかった。食べる力が、まだあなたがたになかったからである。今になってもその力がない。あなたがたはまだ、肉の人だからである。あなたがたの間に、ねたみや争いがあるのは、あなたがたが肉の人であって、普通の人間のように歩いているためではないか」(I コリ3:1~3)。コリント教会は聖霊自ら設立された教会であり、パウロに、「神の宮」あるいは「聖霊の宮」と言われた(I コリ3:16、6:19)。そして、皆、ユダヤ人もギリシャ人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によって、一つのからだとなったともパウロに言われた(I コリ12:13)。しかし、彼らは互いに嫉妬心をもって、争い合い、世の人と区別できる聖霊に満たされている生活をせず、霊的に進歩しないため、霊の人とされなかった。この歴史の事実を教わったことは、聖霊を受けて異言を語るのは聖霊に満たされたと言えるが、突然に発生したことで、単なる一種の始まりであり(使徒2:4)、ずっと聖霊に満たされる暮らしをすることができるとは言い切れないということだ。もっと深く聖霊に満たさ



れることを求めようとパウロは言付けた。だから、異言が語れることを満足せずに、むしろ、日常生活において常に聖霊に満たされるべきである。

二、聖霊に支配されることを指す

エペソ人への手紙5章18節に用いられている現在進行形は、聖霊に満たされることが信者の常の体験であるべきことを表している。言い換えれば、聖霊に満たされることは信者の信仰生活にあるべき常態だということになる。イエスが言われた、「しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」(ヨハ4:14)。「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう」(ヨハ7:37~38)。信者が聖霊に満たされるのはただ一度の経験ではなく、それは「泉」のように湧き上がり、「生ける川」の流れのように、いつまでも止まることがないと、はっきりわかる。これはイエスの約束であった。惜しいことに、多くのクリスチャンはこの祝福を楽しむことなく、虚しい中で無駄な人生を送って、到底、名はあるが、実のないクリスチャンで終わってしまう。聖霊のない一般の教会の信者はともかく、恐らく真の教会で聖霊のバプテスマを受けた信者でも、日常生活において、聖霊に満たされているのは多くないのではなかろうか。

「あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである」(I コリ6:19)。聖霊を受けた者は、その体が聖霊の宮で、神に属するものである。ゆえに、聖霊に満たされた生活というのは、自分を完全に神に捧げる生活なのである。コリント教会は聖霊自ら設立された教会でありながら、生活において聖霊に満たされていないため、自覚し、自愛し、自重するようにとパウロは注意を喚起したのである。旧約時代に律法の規定により、燔祭をささ



げる人はその燔祭の獣の切り分けたもの、頭、脂肪、内臓、足などを祭壇の上で焼いて、香ばしいかおりを燔祭として神に捧げなければならなかった(レビ1:6~9)。それは完全の捧げものを表す。犠牲はキリストを預表し(ヨハ1:29)、祭壇は十字架を預表する。御旨を行うために(ヘブ10:5~7)、キリストは喜んでご自身を、神へのかんばしいかおりのささげ物として、不法の者に十字架につけられた(使徒2:23、エペ5:2、I コリ5:7)。キリストは、御旨を行うため、ご自身の命を捨て、完全に神にささげられた。それはまさに聖霊に満たされた生活の極致である(ピリ2:6~8)。

パウロが言った、「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである」(ガラ2:20)。「しかし、わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇とするものは、断じてあってはならない。この十字架につけられて、この世はわたしに対して死に、わたしもこの世に対して死んでしまったのである」(ガラ6:14)。一言でまとめて言うならば、パウロに世は存在しない、世にパウロは存在しないということになる。キリストがパウロの内に生きておられるため、パウロはもはや自分に属さない。パウロのような生活態度はまさにキリストのコピー版であり(I コリ11:1)、聖霊に満たされる生活の表現の極致である。あなたがたの内にキリストの形ができるまでは、わたしは、またもや、あなたがたのために産みの苦しみをすると(ガラ4:19)、パウロがガラテヤ教会に言ったのは、彼らが主につく者となって、主と一つの霊になることを望んでいたからである。それはまたパウロがコリント教会に対する期待でもあった(I コリ6:17)。もしわたしたちがそこまで霊的な修業を積むことができるならば、常に聖霊に満たされている真の信者だと言えよう。



イエスが言われた、「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」(マタ6:33)。神の国と神の義とを求めるとは、心を傾けて神を求め、神に喜ばれることを行うことである(歴代下12:14、19:3)。神の国の統治者は神である。そこに、神が王としてすべてを治め、神の御旨が行われ、神の義が顕われ、神の国が実現されている。従って、神の国と神の義とを求めるとは、御国がきますように、みこころが天に行われるとおりに、地にも行われますように、という願いである。イエスの教えはすべての事を神中心に、まず神の国と神の御旨(神の義)を求めて、それから生活の必要のために祈ることである(マタ6:10~11)。もし神を中心にして、自分の思いではなく、何事も神の御旨に従って願い求め(I ヨハ5:14、ルカ22:42)、どんな行動でも神の導きに従い(ヤコ4:15、I コリ4:19、16:7、使徒20:22~24、21:10~14)、完全に神の支配下にあれば、神の国は、実にわたしたちのただ中にあり(ルカ17:21)、神の御旨と神の義は生活に顕されているのである。このような生活が即ち聖霊に満たされている生活なのである。

聖霊は神の霊であるので、神を王とするのは聖霊を王とすることであり、神の導きに従うのは御霊によって歩くことである(ガラ5:16、25)。それで、聖霊に満たされる生活は聖霊を王とする生活と言えよう。その生活の原則は心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なる神を愛することであり(マタ22:37)、その生活の特徴はからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげることである(ロマ12:1~2、6:13)。生活においてこの原則に従い、その特徴もあれば、わたしたちは聖霊に満たされている人なのである。エペソ人への手紙5章18節の「聖霊に満たされる」とは、この類の満たされることであり、真の信者があるべき生活の常態である。

第二節 聖霊に満たされる効果



「そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、『聖霊を受けよ』」(ヨハ20:22)。この聖句について、黒崎幸吉がその註解書に言った、「而して昇天後のイエスは弟子たちをして使命を果さしめんが為に、ペンテコステの日に聖霊を豊かに上より注ぎ給ひし如く、昇天前のイエス先づ、弟子たちをして其の使命に立ち上らしめんが為に、その聖霊の幾分を初穂として彼らに注ぎ給ふた」。黒崎氏の考えでは、聖霊のバプテスマを受ける体験は一部分の注ぎかけであるが、聖霊に満たされる体験はさらに豊かな注ぎかけである。

われわれの答え：御霊は一つであり(Ⅰコリ12:4、エペ4:4)、分けることがあり得ない一つである。聖霊のバプテスマを受ける体験は、聖霊がわたしたちのうちに入り一緒に住むことであるが(ヨハ14:16~17、23)、物質の概念で一部分が注ぎかけられたと言ってはならない。さらに、聖霊に満たされる体験は、聖霊にもっと豊かに注ぎかけられた経験とは言えず、その経験はすでに受けた聖霊が心に満たされていることである。

聖霊は神の霊であり、力の泉であり、そして、イエスに「上からの力」と言われた(ルカ24:49、使徒1:8)。聖霊を受けた人は新たなる力を得、わしのように翼をはって、のぼることができる。走っても疲れることなく、歩いても弱ることはない(イザ40:31)。それで、聖霊に満たされる経験は、「御霊の力に満ち溢れる」ことを言っている(ルカ4:1、14)。言い換えれば、常に聖霊に満たされる人は、終始聖霊の力に満ち溢れている。イエスが言われた、「わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである」(ヨハ10:10)。生きている人は、必ずしも豊かないのちの生活をしているとは限らない。聖霊を受けた人も、必ずしも聖霊に満たされた生活をしているとは限らない。いのちが豊かな人は、その生活は生き生きとしている。聖霊に満たされた生活をしている人も、聖霊の力に満ち溢れているに違いない。わたしたちは聖霊のバプテスマによって、生かされる。それは主が賜るものである(エゼ37:14、ロマ8:2、ガラ5:25)。なぜなら、聖霊は主の霊であり、いのちの根本だからである(使徒16:7、ヨハ1:4)。



聖霊に満たされることによって、いのちはさらに豊かになる。なぜなら、主は聖霊によって、力をもってわたしたちの内なる人を強くしてくださるからである(エペ3:16)。それで、聖霊に満たされる経験は、「さらに豊かないのち」を得たことになると言えよう。

一、御働きの任務に堪える

「御霊の力に満ち溢れる」、もしくは「さらに豊かないのち」を得ることは、御働きの進めるには欠かせないものである。悪魔は一切の御働きの破壊する強敵であるため、働き人は聖霊に満たされなければ、主に託された使命を果たしがたいのである。

旧約時代に、会見の幕屋を造る職人は皆神の霊に満たされて、知恵と悟りと知識に満ちた人たちであった(出エジ31:1~5、35:30~35)。新約時代に霊の家を築く働き人たちも(Ⅰペテ2:4~5)、信仰と御霊と知恵とに満ちた、評判のよい人たちであった(使徒6:2~5)。エルサレムから離れないで、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい。わたしの証人となるためであると、イエスが弟子たちに命令された理由はここにある(ルカ24:49、使徒1:4~5、8)。

五旬節の後、福音が速やかにエルサレム、ユダヤとサマリヤの全土に伝わったのは、弟子たちが聖霊に満たされ、大きい力を得たからである(使徒1:8、4:33、8:1~5、14、26:20)。これらの歴史は使徒行伝からたくさん見出すことができる。例えば、①五旬節の前に、ペテロはどんな患難でも主とご一緒に行くと言ったが、肉体が弱くて三度も主を認めなかった(ルカ22:33、54~62)。しかし、五旬節の後、彼は強くなり、迫害を恐れず、勇敢に主の証をするようになった(使徒2:1~4、14~40、4:8~20)。②弟子たちは迫害の中、大胆に御言葉を語らせてくださるようにと主に願ったので、一同は聖霊に満たされて、大胆に



神の言を語りだした(使徒4:23～33)。③ステパノは信仰と聖霊と恵みと力とに満ちて、民衆の中で、めざましい奇跡としるしを行っていた。彼はまた主の証をする力が与えられ、知恵と御霊とで語っていたので、人々はそれに対抗できなかった(使徒6:5、8～10)。人々に石で投げつけられて死ぬ間際、ステパノは聖霊に満たされて、神の栄光とイエスがおられるのを見た。血だるまになっても、喜びに溢れて主が自分の霊を受けて下さるようにと祈った(使徒7:54～59)。④聖霊に満たされれば、食卓のことに携わったピリポでも数々のしるしやめざましい奇跡を行い、サマリヤの人々を驚かせた。彼はキリストのためによい証をし、「伝道者ピリポ」と呼ばれた(使徒6:3～5、8:5～13、29～40、21:8)。⑤バルナバは聖霊と信仰とに満ちた立派な人であった。こうして、主に加わる人々が、大ぜいになった(使徒11:24)。⑥パウロがパポスまで行ったところ、魔術師エルマは、総督を信仰からそらそうとして、しきりに邪魔をした。パウロは聖霊に満たされ、彼をにらみつけて、おまえは盲目になって、当分、日の光が見えなくなるのだと責めた。たちまち、かすみと闇とが彼にかかったため、彼は手さぐりしながら、手を引いてくれる人を捜しまわった。総督はこの出来事を見て、主の教にすっかり驚き、そして信じた(使徒13:6～12)。⑦アンテオケで働いていた時、パウロとバルナバはユダヤ人から迫害を受けたが、ますます喜びと聖霊とに満たされていたなど(使徒13:14、50～52)、以上の例は顕著なものである。

無論、学問や弁才に頼って、聖霊に満たされていない伝道者でも人の心を動かし、人々に賞賛されるメッセージを伝えることができるが、それは、あくまでもいのちがなく、人々を罪のために悔い改め、一生キリストに従おうと決心するように導くことはできない。五旬節の日に、エルサレムに集まったユダヤ人はペテロの証を聞いて、強く心を刺され、ペテロやほかの使徒たちに、どうしたらよいのかと言った。そこで、すぐに信じてバプテスマを受け、主に帰依した(使徒2:37、41)。それは、ペテロに学問や弁才があるため、または立派な



証をしたためではなく、一同が聖霊に満たされたからである(使徒2:1~4)。ペテロは無学な者であり(使徒4:13)、イエスも「学問をしたこともないのに」と公認されていた(ヨハ7:15)。しかし、「山上垂訓」を語られた後、人々は驚いた。それは主が律法学者たちのようではなく、権威ある者のように、教えられたからである(マタ7:28~29)。イエスの言葉に権威があるのは、常に聖霊に満たされ、御霊の力に満ちあふれていたからである(ルカ4:1, 14)。「兄弟たちよ。わたしもまた、あなたがたの所に行ったとき、神のあかしを宣べ伝えるのに、すぐれた言葉や知恵を用いなかった。そして、わたしの言葉もわたしの宣教も、巧みな知恵の言葉によらないで、霊と力との証明によったのである。それは、あなたがたの信仰が人の知恵によらないで、神の力によるものとなるためであった(Ⅰコリ2:1, 4~5)。「神の国は言葉ではなく、力である」(Ⅰコリ4:20)。パウロの言葉は深く考えるに値するものである。

聖霊に満たされていない人でも、その世の才能や知識によって、教会のことを計画よく進め、組織を系統的に運ばせ、万事を秩序よく行うことができる。しかし、人の思いが混じり、聖霊の賜物が人の才能や知識に代わり、聖霊の支配が人の制御に代わり、聖霊の導きが人の囚りごとに代わることは免れない。これは教会とすることができようか。あくまでも「形を変えた政体」に過ぎないであろう。

原始教会は完全に聖霊を王にして教会を治めたので、食卓のことに携わる、あまり重要でないようなことでも、「御霊と知恵とに満ちた、評判のよい」人を選ぶ対象としなければならなかった(使徒6:2~5)。今日の一般の教会の多数はかえって相反することをしている。一切のことに、霊の実際よりも世の形式を重んじ、説教が聖霊の力よりも学問や弁才に頼り、働き人が聖霊に満たされるよりもその人の金銭や勢力を重んじている。このような墮落した教会は聖霊のバプテスマを求め、聖霊に満たされない限り、永遠に原始教会の栄光を再見



することはできない。

二、罪の力に勝つ

聖霊に満たされる効果は、大に言うと、御働きの任務に堪えることであるが、小に言うと、罪の力に勝つことである。前者はキリストの体の成長に役立つが、後者は個人の信仰を建てることができる。両者の重要性は互いに優劣がないと言えよう。

パウロはパリサイ人であり、ガマリエルのひざもとで先祖伝来の律法について、きびしい薫陶を受け、神に対して熱心な者であった(ピリ3:5、使徒22:3)。しかし、彼は嘆いて言った。「わたしは自分のしていることが、わからない。なぜなら、わたしは自分の欲する事は行わず、かえって自分の憎む事をしているからである。わたしの内に、すなわち、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている。なぜなら、善をしようとする意志は、自分にあるが、それをする力がないからである。わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」(ロマ7:15、18、24)。その原因は、「わたしは肉につける者であって、罪の下に売られているのである。すなわち、わたしの欲している善はしないで、欲していない悪は、これを行っている。もし、欲しないことをしているとすれば、それを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪である」(ロマ7:14、19~20)。彼はさらに一歩進んで分析した。「そこで、善をしようとするわたしに、悪がはいり込んでいるという法則があるのを見る。すなわち、わたしは、内なる人としては神の律法を喜んでいるが、わたしの肢体には別の律法があって、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ、そして、肢体に存在する罪の法則の中に、わたしをとりこにしているのを見る。わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」(ロマ7:21~24)。これはクリスチ



ヤンであるパウロがパリサイ人であるサウロに対する回顧である。その回顧は実に、悲しいものだ。

「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない。なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の法則は、罪と死との法則からあなたを解放したからである」(ロマ8:1~2)。

信者がいったんキリストについたならば、無罪と宣告され、永遠に罪と死の律法を離れるようになる。今まで神に対して犯した罪は皆撤回され、勝ち得る生活はこれから始まる。罪が撤回されるとは、再生の洗いによって、彼の罪がキリストに帰し、神に義とされ、律法の定めを満足することである(テト3:5、II コリ5:21、ロマ8:33~34、5:9、4:15)。勝ち得る生活を始めるとは、聖霊により新たにされ、豊かないのちを得、聖霊の力に満ち、罪の力に勝つことができることである(テト3:5、ヨハ10:10、ルカ4:14、I ヨハ5:18)。罪が撤回されることは、永遠の命に入る始まりで、重要であるが、勝ち得る生活は聖となるのに必要な過程で、もっと重要である。その理由は、「清くならなければ、だれも主を見ることはできない」からである(へブ12:14)。

キング・ジェームス バージョン(King James)は「キリスト・イエスにある者」に一句の説明を付け加えた。「who walk not after the flesh, but after the Spirit」これは、即ちキリスト・イエスにある者は肉に従わず、霊に従って行う意味である。霊に従って行うとは、聖霊に支配されて、聖霊に満たされることである。言い換えれば、キリスト・イエスにある者は、いつも聖霊に満たされる者である。水のバプテスマと霊のバプテスマにより、キリストにつくのみならず、生活においても彼につくのである。この認識の上で、「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである」という意味深い言葉を悟ることができ



るのである(Ⅱコリ5:17)。さらに、生活において、いつも聖霊に満たされることによって、自分が確かに真の義と聖とをそなえた、神にかたどって造られた新しき人であることを意識することができるのである(エペ4:24)。古いものは過ぎ去った。すべてが新しくなったのである。パウロが罪と死の律法を離れることができたのは、すべて聖霊に従って行い、常に聖霊に満たされた生活を送っていたからである。

「わたしは肉につける者であって、罪の下に売られているのである。すなわち、わたしの欲している善はしないで、欲していない悪は、これを行っている」という罪の奴隷の生活から、「キリスト・イエスにあるいのちの御霊の法則は、罪と死との法則からあなたを解放した」という勝利の生活に入った。これはどんなに大きな変化で、喜ばしい恵みであろうか。残念ながら、水と霊のバプテスマを受けたわたしたちは、しばしば「ロマ7:14~24」に書いてある敗戦の経験に留まり、「ロマ8:1~2」に書いてある勝利を得た生活に入ることができない。わたしたちの敗戦とパウロの勝利から、アダムの敗戦とキリストの勝利を思い出す。アダムの敗戦は肉によったからであるが(創3:6、ロマ8:5~8)、キリストが勝利を得たのは霊に従われたからである(ルカ4:1~14)。われわれとパウロの差異もそこにあるではないか。パウロが言った、「主は霊である。そして、主の霊のあるところには、自由がある」(Ⅱコリ3:17)。いつも聖霊に満たされた生活をしなければ、パウロのように主にある自由を味わうことはできないであろう。

イエスが言われた、「わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」(マタ11:29~30)。パレスチナの農夫は十字型のくびきを用い、左右に一頭ずつの牛やろばを組み合わせて同じくびきを負わせるのである(参考:申



22:10、Ⅱコリ6:14)。人は限りある力でくびきを負うのは不可能で、苦痛と絶望に終わるだけである。しかし、キリストと同じくびきを負うことによって、魂に休みが与えられる。キリストの力は無限であり、しかもわたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではないからである(ヘブ4:15~16)。彼に学び、全力で彼と共に歩めば、彼はわたしたちの不足を補ってくださるであろう。そのみならず、そのくびきが負いやすく、その荷が軽いことを体験させるために力を加えてくださるのである。パウロが言った、「わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか。わたしたちの主イエス・キリストによって、神は感謝すべきかな」(ロマ7:24~25)。自分に頼り、罪の律法に勝つことのできないパウロは、主に頼ることによって釈放された。自分に頼って罪の律法に勝てないのは人の弱いところであるが、主に頼って勝てるのは力が与えられたからである。主の約束の恵をパウロは確実に体験した。わたしたちが罪の律法から釈放されず、天の父の御旨を行いにいく感じるのは、主と同じくびきを負い、主に学び、主と共に歩むことをしていないからである。パウロがキリストにならう者であるように、わたしたちもパウロにならう者になれば(Ⅰコリ11:1)、同じく彼が体験した勝利を得、彼が与えられた恵みにあずかるのではないのか。「神を愛するとは、すなわち、その戒めを守ることである。そして、その戒めはむずかしいものではない」(Ⅰヨハ5:3)。

パウロはまた言った、「主が言われた、『わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる』。それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。…なぜなら、わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである」(Ⅱコリ12:9~10)。人は自分の強さを誇るが、自分の弱さを誇る人はまずいない。それは、強いところは栄光であるが、弱いところは恥だと思うからである。しかし、パウロはキリストの力が宿るように、自分の弱さを誇る。弱さは恥ではなく、むしろ、



隠そうとしてみない振りをして、弱まっていくのが恥じである。弱さは人の共通点であり、血肉のある人間に例外はない。ただし、霊の人と肉の人とは異なった反応をする。霊の人は、弱さを益にして、主に頼って、強くなる。肉の人は弱さを罪の律法から釈放できない都合のよい口実にする。パウロはパリサイ人の典型的な人物であるが(ピリ3:5)、その肉に従って敗戦した経歴は律法の無力と人の弱さを宣告しただけではなく、多くの人を主の救いの恵みにあずからせ、律法の義を、霊により肉によらない人の身にあらわしたのである(ロマ8:3~4)。なんと不思議ないと高き神のご計画であろう！

「あなたは他の神を拜んではならない。主はその名を『ねたみ』と言って、ねたむ神だからである」(出エジ34:14)。「わたしは神の熱情をもって、あなたがたを熱愛している。あなたがたを、きよいおとめとして、ただひとり男子キリストにささげるために、婚約させたのである」(Ⅱコリ11:2)。神はわれわれの夫であり(イザ54:5、エレ3:14)、われわれはその妻である(ホセ2:19~20)。夫が妻に対する愛はねたみの愛であり、絶対に第三者が介入することを許せないものである。主はねたむ神だから、わたしたちの心がよこしまに走り、純粹で清いところを失い、世の友となることによって、淫婦となったならば、彼はねたみから怒りを発せられる(Ⅱコリ11:2~3、ヤコ4:4~5)。神と世は両立できない、だれでもふたりの主人に兼ね仕えることはできない、妻もふたりの夫に属することはできないからである(マタ6:24)。もし、世を愛する者があれば、父の愛は彼のうちにはない(Iヨハ2:15)。彼は、名実共に淫婦となるのである。しかし、聖霊に満たされる人は、神の心を思い、一生奉仕に専念し、世をむさぼらず、汚れに染まらない。彼は清いおとめのように、貞節を守ろうと志して、絶対気移りすることがないのである。

旧約時代の選民は主の全軍であり(出エジ12:41)、神の霊が入ったために生きたのである(エゼ37:10、14)。この預表に当たるのは新約時代の選民がキリス



ト・イエスの良い兵卒として(Ⅱテモ2:3)、御霊によって生きることである(ロマ8:2、ガラ5:25)。彼らの戦いは、天上にいる悪の霊に対するもので、目に見えない敵である(エペ6:12)。悪魔は、ほえたけるししのように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている(Ⅰペテ5:8)。そして、人の欲を利用して試み、自分でしようと思うことを、することができないようにさせる(ガラ5:17)。もし、御霊によって歩く(聖霊に満たされる)ならば、決して肉の欲を満たすことはなく、罪の力に勝つことができるのである(ガラ5:16、ロマ8:13)。ヨハネが言った、「なぜなら、すべて神から生れた者は、世に勝つからである。そして、わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である。すべて神から生れた者は罪を犯さないことを、わたしたちは知っている。神から生れたかたが彼を守っていて下さるので、悪しき者が手を触れるようなことはない」(Ⅰヨハ5:4、18)。「神から生れた者」とは信仰があって、霊に従う者である。彼らはよく慎んで、悪しき者の放つ火の矢を消すことができる(エペ6:16)。逆に言うと、信仰を保たず、霊に従わず、肉に従う者は、悪魔の試みに勝つことができないことになる(ロマ8:7)。彼らはサルデスにある教会のように、生きているというのが名だけで、実は死んでいて、神のみまえに完全であるとは見ていない(黙3:1～2)。

ウィルスは目に見えない敵(顕微鏡を用いてはじめて観察することができる)と言われ、一旦たけり狂うと、容赦なく残虐を見せるのである。悪魔も目に見えない敵である(霊の目ではじめて見分けることができる)。しかし、その残虐はウィルス以上に激しいものである。前者は人の健康に害を及ぼすが、せいぜい肉体のいのちを奪い取るだけである。しかし、後者は人の前途を滅ぼすばかりか、その魂まで永遠に滅ぼしてしまうのである。パウロが言った、「すなわち、自分のからだを打ちたたいて服従させるのである。そうしないと、ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分は失格者になるかも知れない」(Ⅰコリ9:27)。

「恐れおののいて自分の救の達成に努めなさい」(ピリ2:12)。「また、悪魔に



機会を与えてはいけない」(エペ4:27)。これらの聖句は、聖霊に満たされている者が罪と両立しない覚悟をし、悪魔の試みに一層警戒強く、いつでもどこでも用心すべきことを教えている。それはまさに医者が伝染病菌を人類の健康を脅かす大敵として扱い、普通の人以上に敏感で、恐れ、いつでもどこでも早めに予防対策をすることと同じである。逆に考えると、聖霊に満たされていない者は、世の友となり、悪魔の試みに鈍感で、目を覚まして防備しないだけではなく、過ちがあっても自分を責めず悔い改めず、最後は滅亡に至ってしまう。衛生観念のない者のように、ウィルスの怖さを知らず、予防を疎かにして、一旦感染しても早期の治療を拒み、最後に自分と他人に害を与えるばかりである。

予防は治療に勝るという言葉の如く、賢い人は病気前の予防を重んじ、疎かにしない。愚かな人はあまり気にせず、治療を放っておく。伝染病の予防に当たって、ワクチンを注射するのが普通である。接種者はそれによって免疫力を得て、細菌の攻撃に抵抗し、害を免れる。イエスは祈りの仕方を教えられた、「わたしたちを試みに会わせないで、悪しき者からお救いください」(マタ6:13)。キング・ジェームスバージョンは「And lead us not into temptation, but deliver us from evil.」とある。試みは免れないものである。わが主でさえ悪魔の試みに会われたから(ヘブ4:15)、わたしたちはどうして逃れることができようか。しかし、試みに会ったとき、その渦巻きに飲み込まれないよう勝てば、恐れることはないではないか。同じように、予防が効いたならば、免疫力が備わり、細菌の攻撃に抵抗する力があるから、恐ろしいものではない。イエスは荒野で悪魔の試みに会われたとき、聖霊に満ちて、御霊の力に満ちあふれたので、大いに勝たれた(ルカ4:1、14)。彼ははじめに悪魔に答えて言われた、「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」。二回目に答えて言われた、「『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」。そして、三回目に答えて言われた、「『主なるあなたの神を試みてはならない』と書かれている」。悪魔はあらゆる試みをしつつして、どうしても勝てないので、一



時イエスを離れた(ルカ4:3~13)。イエスの生活態度は神中心に置き、万事を神一番にしているということが、その答えからよくわかるのである。これは御霊に満たされた表れであり、悪魔の試みに勝った秘訣でもある(ヤコ4:7)。

別れる前の祈りに、イエスは弟子たちのために神に求められた、「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることです」(ヨハ17:15)。世を離れることは消極的で、不可能であるが、悪しき者から離れることは積極的で、すべきことである。イエスはわたしたちが世から取り去られることではなく、悪しき者から守られることを望まれている。そうである故、わたしたちは試みから免れることができないのである。しかし、主が残してくださった手本にならって、御霊に満たされ、御霊に従って行い、万事を神一番に考えれば、勝ち得て余りがあるのである。「もしわたしたちが御霊によって生きるのなら、また御霊によって進もうではないか」(ガラ5:25)。

三、御霊の実を結ぶ

罪の力に勝つのは保守的で、消極的なものであるが、御霊の実を結ぶのは前進的で、積極的である。わたしたちは世の光であるゆえ(マタ5:14)、消極的な面においては身を清く保ち、世の汚れに染まらないのみならず、積極的な面においては御霊の実を結び、神に栄えを帰し、人の益を求めるべきである(マタ5:16、I コリ10:33)。ただ消極的に罪悪を拒むことだけでは、完全に勝ち抜くことはできない。心の中に真理と崇高な徳性に満たされて初めて、悪しき者を遠くまで追い払うことができる(参考：マタ12:43~45)。戦場で最大の勝利を得るには、消極的に退くと共に、積極的に攻めるのも必要であることはこのような状況と同じである。聖霊に満たされるのは、ちょうど同時にこの二つの需要を満たすことができる。第一、消極的な面においては、罪の力に勝つことができる。第二、積極的な方面においては、御霊の実を結ぶことができる。従って、



われわれは必ず聖霊に満たされなければならないのである。

「あなたがたは、その実によって彼らを見わけるであろう。茨からぶどうを、あざみからいちじくを集める者があるか。そのように、すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。良い木が悪い実をならせることはないし、悪い木が良い実をならせることはできない。その日には、多くの者が、わたしにむかって『主よ、主よ、わたしたちはあなたの名によって預言したではありませんか。また、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの力あるわざを行ったではありませんか』と言うであろう。そのとき、わたしは彼らにはっきり、こう言おう、『あなたがたを全く知らない。不法を働く者どもよ、行ってしまえ』」(マタ7:16~18, 22~23)。

イエスのこの山上垂訓に尊い教えがたくさん残された。

第一、羊には羊なりの性質と生活ぶりがある。狼も狼なりの性質と生活ぶりがある。羊の衣を着た狼はその行動がいつでも羊のようなものではない(マタ7:15)。彼らは君子のような体裁を持って、言葉遣いが上品であり、キリストの博愛精神を主張し、社会福祉に熱心で、信心深いように見える。しかし、結局、時間の検証に耐えられず、いつかは必ず化けの皮が全部剥がれて、正体が現れるのである。

第二、木の良し悪しは外見から見分けられないが、その結ばれた実によってどの種類の木かが判断できる。霊の賜物を持っている人は、必ずしも御霊の実があるとは言い切れない(Ⅰコリ1:4~7, 3:1~3、参考:Ⅰコリ13:1~3)。イエスが信者の真偽に対する判断は、その結ばれた実により、賜物によるのではない。



第三、御霊は思いのままに、霊の賜物を各自に分け与えられるのであるが（I コリ12:11）、御霊の実はずべての信者が結ばなければならないものである（ヨハ15:16）。その理由は、実は賜物よりさらに重要だからである。主の名によって福音伝道をし、主の名によって病を癒し、悪霊を追い出している者の名は、必ずしも天に記されているとは限らない（ルカ10:17～20）。聖霊がこれらの賜物をそれぞれ賜ったのは、キリストのからだを建てさせるためであり（I コリ12:18、エペ4:11～12、16）、救いの保障とするためではない。

第四、イエスを「主よ、主よ」と呼ぶ者は、生活において必ずしも主につくとは限らない。口先で主よ主よと言うのは、キリストがその心の内に住まれるとはまったく異なったことである（エペ3:17）。イエスが言われた、「わたしを主よ、主よ、と呼びながら、なぜわたしの言うことを行わないのか」（ルカ6:46）。これは深く反省するに値する注意の言葉である。

第五、悪い木が悪い実を結ぶのは、よい実を結ぼうとしないのではなく、力がないからである（ロマ7:18、21）。同様に、よい木が悪い実を結ぶのは不可能だからである。イエスが言われた、「善人はよい倉から良い物を取り出し、悪人は悪い倉から悪い物を取り出す」（マタ12:35）。いのちが同じではないと、生活も当然同じではない。

第六、イエスが言われたのは、「あなたがたを全く知らない」。キング・ジェームスバージョンはI never knew youと訳している。それは「わたしは今迄あなたがたを知らない」のであって、「今日、あなたがたを知らない」ではない。これでわかる。彼らは始終悪を行い、しかも悔い改める気配が全くないだと。天の父のみこころに従う志を立てた人は、たちまち達成できるわけではない。悪に慣れている者でも、善人から突然、悪人に



なったのではない。イエスが言われた、「わたしに来る者を決して拒みはしない」(ヨハ6:37)。自ら神から離れ、天の父のみこころに従わないことがない以上、主は必ずわたしたちを見捨てられないのである。

第七、イエスはまことのぶどうの木、天の父は農夫、わたしたちはその枝である。主がわたしたちを選ばれたのは、わたしたちを遣わして実を結び、その実がいつまでも残るようにするためである。実を豊かに結ぶならば、それによって、天の父は栄光をお受けになるであろう。実を結ばないものは、父がすべてこれを取り除かれるであろう(ヨハ15:1、5、16、8、2)。

救いと行いに関わりがあるように、実を結ぶことにも関わりがあるのである。それは、十字架の恵みを無視して、自分の善行を高く挙げることではない。また、「信仰によって義とされる」という信条を覆し、歴史を律法時代に逆戻すことでもない。知っておかなければならないのは、まことの信仰は行いをなくしてはならず(ヤコ2:26)、そこに愛によって信仰が大いに働くものである(ガラ5:6)。恵みの下にある者は罪を犯さず、自分の肢体を義の僕としてささげて、清くなるのである(ロマ6:15~19)。ある時、弟子たちはイエスの教えを聞いて非常に驚いて言った、「では、だれが救われることができるのだろう」。イエスは彼らを見つめて言われた、「人にはそれはできないが、神にはなんでもできない事はない」(マタ19:23~26)。その意味は、自力で救われるのは不可能であることに対し、神に頼れば、問題はないということである。救いと実を結ぶことが関わる以上、自分に頼って実を結ぶことは不可能であるが、神の助けを求めれば、困難はないであろう。

イエスが言われた、「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つ



できないからである」(ヨハ15:5)。「主につながっておる」とは、キング・ジェームスバージョンのローマ人への手紙8章1節の翻訳によれば、それは、「肉について行わず、聖霊について行う者(who walk not after the flesh, but after the Spirit.)」となっている。即ち、すべての事は神を首位にして、常に聖霊に満たされる生活を送る者のことである。その必然的な効果は、「その人は実を豊かに結ぶようになる」である。聖霊は「上から授けられる力」と主が言われた以上(ルカ24:49)、それはわたしたちを新たにし、命を得させ、豊かに得させるためである(テト3:5、ヨハ10:10)。逆に言えば、もし主から離れて聖霊に満たされない生活をしているならば、何一つできることはないであろう。パウロが言った、「わたしを強くして下さるかたによって、何事でもすることが出来る」(ピリ4:13)。願わくは、パウロの信仰のような信仰が与えられ、パウロの経験もわたしたちのものとなるように。

「御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であって、これらを否定する律法はない」(ガラ5:22~23)。

ここの「実」という言葉を、ギリシャ原語は「karpos」とし、単数を表すものである。英訳は「fruit」とし、同じ単数の言葉である。御霊はただ一つなので(Iコリ12:4、エペ4:4)、その実も一つの完備した体系である。ペテロの第二の手紙1章5~7節に書いてある「恵みの輪」のように、一つ欠けたら、輪の全体が壊れてしまう。明らかに、パウロが言っているのは、御霊に満たされている人が九つの実を結ぶことではなく、一つの実が九つの形態を表現しているのである。これらの形態を三つのグループに分けて述べよう。

1、愛、喜び、平和

このグループはクリスチャンの最も根本的な特性である。家の構造から言うと、愛は基礎、喜びはその上にある建物、平和は屋根である。下から上へ緊密



につながり、安危も得失も関わり合うものである。

「愛」という言葉を、ギリシャ原語は「agape」とし、コリント人への第一の手紙13章の「愛」と同じ字である。それは、神より出る愛であり、あるいは、再生した人が信仰より発する愛なのである。御霊の実の九つの形態の中で、愛は首位を占めていて、ほかのものはみな愛と密接な関係がある。

律法全体と預言者の教えは、この二つの掟(神を愛し、人を愛すること)に基づいている(共同訳 マタ22:37~40、Iテモ1:5)。十戒について言えば、神を愛する者は、前の四戒を犯すことはまずない。そして、人を愛する者は、後半の六戒を犯すこともない。神を愛することと人を愛することとは、影が形に添う如く密接な関係にある。神を愛する者は人を愛する、人を愛する者は神を愛する(Iヨハ4:20)。愛は、すべてを完全に結ぶ帯である。それによって、衣服はしっかりと結ばれる(コロ3:14)。愛はクリスチャンのシンボルであり(ヨハ13:35)、死からのちへ移ってきたしるし(Iヨハ3:14)、またはさばきにうち勝つものである(ヤコ2:13、Iヨハ4:17~18)。だから、愛は律法を完成するのである(ロマ13:10)。

敵を愛し、敵の無知なところを思いやることは愛の最高境地である(マタ5:44、ルカ23:34)。神は愛である(Iヨハ4:8)。神の愛はこのような最高のもので、良い者も悪い者も愛され(マタ5:45)、善人も罪人も愛される(使徒10:35、ロマ5:6~8)。パウロが言った、「なぜなら、わたしたちに賜わっている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである」(ロマ5:5)。いつも聖霊に満たされている者は、生活において自然に神のこの超然たる愛を表すのである。ステパノが臨終の時に、迫害者のためにその罪がゆるされるように祈ったのは一番良い例であろう(使徒7:55、60)。



「喜び」という言葉をヘブル原語は「simhah」とし、元の意味は「光に照らされる」であり、象徴的な表現である。喜びの人は、心も表情も明るく、影のないものだからである。ギリシャ原語は「chara」とする。

ソロモンが最も栄華をきわめた時、何でもその目の好むものは遠慮せず、その心の喜ぶものは拒まなかった(伝2:10)。このような享樂はまさに空前絶後のものであった。しかし、年老いた頃、彼は歎いて言った、「金銭を好む者は金銭をもって満足しない。富を好む者は富を得て満足しない。これもまた空である」(伝5:10)。このように、人生の豊かな経験と深い思考に基づいて、彼は物質の享樂は虚しく、暫くであることを一言でずばり言い当てた。ヤコブの井戸の水のように、それを飲む者はだれでも、またかわくのと同じであろう(ヨハ4:13)。ただ、聖霊における喜びは真実で永遠のものである(ロマ14:17、ヨハ15:11)。その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう(ヨハ4:14、7:37~39)。

喜ぶことはわたしたちの力である(ネへ8:10)。真の喜びは環境に影響されず、患難の中でも喜んでいる(ロマ5:3、Iテサ1:6)。喜びの油は聖霊を象徴するので(へブ1:9)、聖霊に満たされた者はどんな災いに出くわしても、喜びに満ち溢れ、悩みもだえない。例えば、①しばしば迫害を受けてきた使徒たちは、御名のために恥を加えられるに足る者とされたことを喜んだ(使徒5:40~41、13:50~52)。②パウロは獄屋に入れられたが、大声で神に祈り、さんびを歌いつづけた。獄屋を天国と見なし、満ち溢れる喜びがあった(使徒16:25、ピリ1:17~18)。これらのことは皆聖霊に満たされた効果である。神の人なるモーセはかつて神に祈った、「あなたがわれらを苦しめられた多くの日と、われらが災にあった多くの年とに比べて、われらを楽しませてください」(詩90:15)。心に真の喜びさえあれば、苦難を恐れることがあろうか。



「平和」という言葉をヘブル原語は「shalom」とし、「悩みを脱ぎ去る」状態を表す。国に戦争がない、あるいは、心が安らかなことである。ギリシャ原語は「eireenee」とする。

キリストの名は「平和の君」ととなえられる(イザ9:6)。彼が宣べ伝えられた福音は「平和の福音」である(使徒10:36、エペ2:17)。彼の使命は、神と人、または、人と人とを和解させられるところにある(エペ2:13~19)。聖霊はキリストの霊であるので(ロマ8:9)、わたしたちは平和のきずなで結ばれて、彼が賜った聖霊による一致を守り続けることができる(エペ4:3、エゼ11:19)。人種差別がなく、階級差別がなく、男尊女卑の差別がなく、皆キリストにあって一つの体なのである(I コリ12:12~13、ガラ3:27~28)。だから、聖霊に満たされている人は、すべての人と平和であるので、争いや党派心を起こすことはないであろう。

「平和」という言葉は、「平安」と訳すこともできる。原文では、平和と平安は共に同じ字である。ユダヤ人は習慣的にこの言葉をもって、人に祝福するのである。平和と平安とは密接な関係にある。平和の人は神につぶやかなければ、人ともめることもしない。だから、彼はいつも心の安らぎと平静を保っている。イエスが弟子たちに賜る平安が一番貴いもので、悩みの中の平安であり、心の静けさである(ヨハ16:33)。約束の助け主が降れば、人知ではとうてい測り知ることのできない平安を味わうのである(ヨハ14:26~27、ピリ4:7)。例えば、①ステパノが亡くなる前、自分の霊を受けようとして、そして自分を迫害した者の罪を赦すようにとイエスに祈った(使徒7:55、59~60)。②ヘロデがペテロを殺害しようとする前夜に、ペテロは厳しく兵卒に見張られている中でも、何事もないかのようにぐっすり眠っていた(使徒12:1~6)。③パウロと囚人たちが海で暴風に遭った時、人々が恐れおののいたが、パウロは格別に落ち着いて彼らを慰めた(使徒27:18~25)。これらはすべて聖霊に満たされた効果であ



る。

2、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和

このグループは他人に対して愛を表すことである。愛のある者は人に傷つけられても、寛容することができる。そればかりでなく、寛容に好意を加え、好意から一歩進んで彼に対して善を行うのである。愛のある者は、人に忠実で、約束を違えることはない。いつも優しい言葉と態度をもって人と接し、怒ることはない。

「寛容」という言葉をヘブル原語は「erekh appayim」とするが、直訳すると、「長い呼吸」となる。それに対して、荒い呼吸は怒ることを表す。旧約聖書はよくこの言葉をもって神が怒ることは遅いことを表現している(出エジ34:6、ネヘ9:17、詩86:15、ヨエ2:13、ヨナ4:2、ナホ1:3)。ギリシャ原語は「makrothuemia」とし、「気質がのろい」という意味である。それは、「長く遠く」(makro)と「緩和」(thuemia)を組み合わせた言葉である。神が罪人を長く忍耐して、すぐに懲らしめない意味で、新約聖書ではよく使われている(ロマ2:4、9:22、Ⅱペテ3:9)。「忍耐強い」(Ⅰコリ13:4 新共同訳)、「忍耐深い」(Ⅱペテ3:15 新共同訳)とは、ギリシャ原語のこの言葉を適切に翻訳したものである。キング・ジェームスバージョンは「longsuffering」としている。別のところでこの文字を「待つ」(マタ18:29)、「猶予」(マタ18:26 新改訳)、「耐え忍び」(コロ1:11)、「寛容」(Ⅱテモ3:10、Ⅰペテ3:20)、「長く忍耐する」と訳している(Ⅱペテ3:9)。

以上の原語と訳語をまとめれば、ここの「寛容」は、おそく怒り、耐え忍ぶことであると言えよう。神はキリストをあがないの供え物として立てられ、わたしたちが今まで犯した罪を、忍耐をもって見のがしておられた(ロマ3:25)。善を行うために受けた苦しみを耐え忍ぶのは、忍耐の最高境地である。イエスはすでに良い模範を残された(Ⅰペテ2:19～24)。それは限度のない寛容であり、



まさに神がわたしたちを赦してくださったことのようなものである(マタ18:21~33)。多くの時、あまり理解してもらえないために、兄弟に責められたり、ののしられたりする。多くの時、隙間に入ってきた敵に非難されたり、欺かれたり、迫害されたりする。しかし、聖霊に満たされていれば、兄弟の誤解を寛容し、敵の傷害を耐え忍び、争いをとどめることができるであろう(箴15:18)。

「慈愛」という言葉をギリシャ原語は「chreestotees」とし、「親切」、「情け」、あるいは「よく人の益になることをする」、という意味である。「慈愛」と訳したのは「ロマ2:4、11:22」、「Ⅱコリ6:6」、「ガラ5:22」、「エペ2:7、4:32」、「コロ3:12」であるが、「エペ4:32」は「情け深い」、「Ⅰコリ13:4」は「愛」、「テト3:4」は「博愛」と訳した。同じ言葉で、「ロマ3:12」は「善」とした。

慈愛は隣人に対する手厚さ暖かさである。即ち、人のことを思い、その人のためになるように、適切な方法で隣り人を助けることである。いわゆる「隣り人」とは、わたしたちに助けを必要としている人のことである。彼らは卑しく、弱く、苦しんでいる者である(ルカ10:27~37)。「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい」とは、慈愛なる心である(ロマ12:15)。「隣り人の徳を高めるために、その益を図って彼らを喜ばすべきである」とは、慈愛なる行いである(ロマ15:1~3)。

寛容と慈愛は敵を征服する最善、最強の武器である。寛容はいらだった雰囲気や争いを止め、争いを止める。慈愛は悪人を感動させ、敵を友に変える。慈愛のある者は人から傷つけられるのを耐え忍び、愛をもって対応する(Ⅰコリ13:4)。あらゆる敵に対して、これは一番ふさわしい仕返し的手段ではないだろうか(ロマ12:20)。



寛容も慈愛も神の徳性である(出エジ34:6、ロマ2:4)。神はわれらの罪に従ってわれらを懲らしめず、イエス・キリストにあつてわれらに恵みを与えられた。そのひとり子を賜るほど、父がその子を憐れむように、われらを憐れまれた(詩103:8~13、エペ2:7、ヨハ3:16)。聖霊に満たされた者は必ず寛容に、慈愛の徳性が加わるのである。

「善意」という言葉をヘブル原語は「tôbh」とし、旧約聖書に書いてある「良きもの」や「恵み」と意味がしばしば一致する(出エジ18:9、詩23:6、エレ31:14、ホセ3:5)。ギリシャ原語は「agathosune」とし、「善」、あるいは「善徳」という意味である(ロマ15:14、エペ5:9、Ⅱテサ1:11)。時に、「慈愛」はある思いや態度であり、行動で示すとは限らない。しかし、善意は積極的に善を行うことであり、慈愛より一歩進んだステップと言えよう。

わたしたちは往々にして主の福音は「人の魂を救うが、人の肉体を救わない」という誤った考えを持つため、肉体を救うことを疎かにしてしまう。むろん魂は肉体より大切であるが、それで肉体を救う必要がないと言い訳にはならない。いつも善に親しみ、良いわざに富むのはクリスチャンが備えるべき徳性であることを知らなければならない(ロマ12:9、Ⅰテサ5:15、Ⅰテモ6:18、テト2:14)。ドルカスは数々のよい働きや施しをして、信者の人々に褒められ、愛されていた(使徒9:36~39)。彼女は教会の歴史において得がたい模範の信者である。

慈愛のある人は世の富を持っていながら、兄弟が困っているのを見て、あわれみの心を閉じないばかりか(Ⅰヨハ3:17)、いと高き者が、恩を知らぬ者にも悪人にも、なさけ深いように、敵を愛するであろう(ルカ6:35)。飢えていて渴いている敵に、食わせ飲ませることによって、その頭に燃えさかる炭火を積むことが、その心を感動させ(ロマ12:20)、悔い改めさせる、最も効果のある方法



であることを彼は知っている。善を行うことに、うみ疲れてはならない。たゆまないでいると、時が来れば刈り取るようになると、彼も知っている(ガラ6:9～10)。

パウロは言った。生まれ変わる前に、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている。なぜなら、善をしようとする意志は、自分にあるが、それをする力がないからである(ロマ7:18)。しかし、キリストに属して、聖霊によって歩いた彼の経験は完全に違ったものになった(ロマ8:1～4)。善意は神の聖なる徳性であり、神と神の命にあずかる者以外によき者はいないからである(マル10:17～18)。

「忠実」という言葉をヘブル原語は「emun」とする。申命記32章20節では「真実」と訳している。ヘブル原語はまた「emunah」ともする。ハバクク書2章4節では「信仰」と訳している。旧約聖書にはこの二箇所しか見出せない。この言葉をギリシャ原語は「pistis」として、「信仰」、「信実」、「真実」、「忠実」、「忠義」などの意味がある。新約聖書では、二百三十余箇所出ている。「忠実」(マタ23:23、ガラ5:22)、「真実」(テト2:10)と数箇所に訳されているほかは、ほとんど「信仰」となっている。

この言葉は原文に「堅持」の意味がある。信仰について言えば、疑うようなことはせず、ますます信仰強くなることである(ロマ4:19～22、コロ1:23)。真実について言えば、約束を最後まで守り続け、ますます堅くなる徳性のことである(申7:9、ロマ3:3～4)。

「また傷ついた葦を折ることなく、ほのぐらい灯心を消すことなく」という聖句は(イザ42:3)、イエスの罪人に対する態度であり、イエスは罪人が悔い改めることを信じ、それを望んでいることを表す。愛はすべてを信じ、すべてを望



む(Ⅰコリ13:7)。慈愛ある人は人間性の中のわずかな善良をも重視し、人のことを善意的に理解し、むやみに人を疑ったり批評したりはしない。たとある人が罪過に陥っていることがわかって、その人が改心することを信じ、望むのである(ガラ6:1~2)。

われわれの神は約束を守り、愛を施される方である。たとい、わたしたちは不信実であっても、彼は常に信実である。彼は自分を偽ることが、できないのである。人の不信実によって彼の信実を損なうことはない(Ⅱテモ2:13、ロマ3:3~4、Ⅱコリ1:18~22)。慈愛ある人は神の信実が伴い、誠実で頼りがいあり、約束を背かない。たとい信じない人に疑われ、約束の実行において損することを知っていても、違約することはないであろう。

「柔和」という言葉をヘブル原語は「anaw」とし、「貧しい者」の意味(ヨブ24:4、詩9:12、18、アモ8:4、詩22:26)、もしくは「へりくだる者」、「謙遜」の意味である(箴3:34、ゼパ2:3)。イザヤ書61章1節にある「貧しい者」は「へりくだる者」とも訳してよい。ギリシャ原語は「praotees」とし、「柔和」の意味である(Ⅰコリ4:21、ガラ5:23、エペ4:2、コロ3:12、テト3:2)。

柔和は軟弱で無能の表れではなく、いい加減で気概のない消極的な態度でもない。柔和な者は大抵頑張りぬく性格を持ち、自制のできる勇士である(箴16:32)。主イエスとモーセは人に勝るほどの柔和の持ち主であり(マタ11:29、民12:3)、そしられても耐え忍びとおし(Ⅰペテ2:23、へブ11:26)、絶対に怒らない。しかし、真理を守るためには、彼らは厳しく罪惡に面と向かって、譲らなかつたのである(ヨハ2:13~16、出エジ32:19~21)。

柔和な人たちは、さいわいである。なぜなら、①彼らは地を受けつぐ(マタ5:5)、②彼らは魂に休みが与えられる(マタ11:29)、③彼らは福音を受け入れ(イザ61:

1)、心に植えつけられている御言を守る(ヤコ1:21)、④主は彼らに恵みを与え(箴3:34)、公義に導く(詩25:9)、⑤主は彼らを支え(詩147:6)、救うからである(詩76:9)。

慈愛ある人は必ず柔和な性質を持っている(I コリ13:5、7)。彼らは真理に反対する者が悔改め、悪魔のわなから逃げられるように柔和な心で教え導く(II テモ2:25~26)。もしもある人が罪過に陥っていることがわかったなら、柔和な心をもって、その人を正すことによって、キリストの律法を全うするであろう(ガラ6:1~2)。

柔和はクリスチャンが備えるべき徳性であり(ガラ5:23、エペ4:2、コロ3:12、I テモ6:11、テト3:2~3)、神のみ前に、きわめて尊いものである(I ペテ3:4)。

3、自制

御霊の実の九つの形態の中でこれは最後のものである。寛容、慈愛、善意、忠実、柔和は他人を愛する表現に対して、自制は自分を愛する表現である。人を愛する重要さは言うまでもないが、自分を愛することも重要なのである。なぜなら、二つとも神を愛することになるからである。自分を愛さなければならぬのは、わたしたちのからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、もはや自分自身のものではなく、イエスが重い代価を払って買いとられたものだからである(I コリ6:19~20)。それで、神を愛する人は、必ず自分を愛し、あらゆることに自制をする。神を愛さない人は、必ず自分を愛せず、放縦に身をゆだねてしまうであろう。

「自制」という言葉をギリシャ原語は「enkrateia」とし、「自治」、「自制」、「管制」の意味である。キング・ジェームスバージョンは「temperance」とし、「節制」(使徒24:25、II ペテ1:6)、「自制」(ガラ5:23、I テモ3:2、11、テ



ト2:2)、「中庸」の意味である。原文はこの字の語源である「力」(kratos)に前置詞の「その中にある」(en)を付け加えたものである。自制は聖霊に導かれる下の意志力のことで、この力があってこそ「自分を制御する」(self control)ことができ、心身の悪習に勝つことができる。テモテへの第二の手紙3章3節にある「無節制」とは、原文では「力がない」(akrates)の意味である。だから、聖霊に満たされ、聖霊の力に満ち溢れている人は必ず自制ができるであろう。

自制は自分の欲望を抑制することである。コリント人への第一の手紙7章9節は「自制することができない」と書き、テモテへの第一の手紙3章11節は「自らを制し」と書いてある。自制もまた自分の感情を抑制することである。創世記43章31節は「自分を制して」と書き、弟を愛する激情を抑制することである(30)。ハマンはモルデカイに対して怒りに満たされたが、「耐え忍んで家に帰った」(エス5:9~10)。それは怒りの感情を抑制することである。

中国の辞書である「辞源」を調べれば、「節制」という言葉の解釈に、①「指揮管轄」の意と②軍律厳格者は「節制の師」といわれる、とがある。節制の生活は即ち規律的な生活であることがわかる。イエスはすべてのことに神のことを思い、自分のことを思うよりも苦い杯を選んだのである(マタ16:23、26:39)。それは自制の生活ぶりである。パウロは自分のからだを打ちたたいて服従させ、自分の考えと言行を義の僕としてささげたのも(I コリ9:27、参考：ロマ6:17~20)、自制の生活ぶりである。

イエス・キリストの道は「節制の道」であり(使徒24:24~25)、節制はキリシチャンが実行すべき生活の原則である。すべて競技をする者は、何ごとにも節制をする。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、朽ちない冠を得ようとするわたしたちはそうしないで得ようか(I コリ9:24~25)。わたしたちが召されたのは自由を得るためであるが、その自由は自制のあるもので、肉の働く機会

とするものではない(ガラ5:13、I コリ10:23)。

愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制は御霊の実の九つの形態であり、キリストの徳性である。だから、聖霊に満たされ、聖霊に従い、キリストの命にあずかる人にこそ備わる徳性である(ヨハ15:5、I コリ12:12～13)。

パウロが言った、「もしわたしたちが御霊によって生きるのなら、また御霊によって進もうではないか」(ガラ5:25)。願わくは、聖霊のバプテスマを受けて、いのちを得たことで満足しているのではなく、さらに聖霊に満たされ、聖霊によって進み、奉仕に励み、からだの働きを殺し、御霊の実を結んで、栄光を天の父に帰するように(I コリ15:58、ロマ8:13、ヨハ15:8、マタ5:16)。

第三節 聖霊に満たされる必要条件

聖霊に満たされる定義と聖霊に満たされる効果を話してきたが、それについてある程度の認識ができたと思う。ここではさらに聖霊に満たされる必要条件に触れることによって、「聖霊に満たされるべき」という問題を全面的に見て、空論にならないよう期する。

一、慕いあえぐ

かつて神は預言者イザヤをとおしてイスラエル人と約束された、「わたしは、かわいた地に水を注ぎ、干からびた地に流れをそそぎ、わが霊をあなたの子らにそそぎ、わが恵みをあなたの子孫に与えるからである」(イザ44:3)。神が肉体となって世に来られた時、さらに自ら叫んで言われた、「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう」(ヨハ7:37～38)。



聖霊のバプテスマを受けていない者は霊にかわき果てて、真の平安と喜びがないため、ヤコブの水を飲む者のように、物質の楽しみがあっても、また渴くであろう(ヨハ4:13)。聖霊のバプテスマを受けた者でも、聖霊に満たされた生活をしていないならば、霊の中で渴きいつも何か欠けたような感じがする。聖霊のバプテスマを受けるのに必要な条件の一つとしては、心のかわきを自覚し、ひいては積極的に追い求めなければならないことである。すでにバプテスマを受けた者でも、この自覚と積極性がなくては、いつも聖霊に満たされることはできない。これでわかるように、上述の二つの聖句は聖霊のバプテスマを求めている者がもっと積極的に励むよう激励しているだけでなく、すでに聖霊のバプテスマを受けた者が、聖霊に満たされる幸いを精いっぱい追い求めるよう励ましている。

慕いあえぐことの積極的な表現は切に祈ることである。どうかわたしたちの内に留まっている聖霊が大いに満たされ、衰えかかっているいのちが復興し、いためられた葦を折ることがなく、煙っている燈心を消すこともないように(参考：マタ12:20)。水がほしくなければ、ほんとうの渴きではない。求めなければ、ほんとうに欲しがることもない。水がほしくなるのは渴いた時の自然の欲求である。渴けば渴くほど水が切に欲しくなる。イエスが言われた、「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう」(マタ7:7)。何かを得ようとするなら、そのために求めるべきである。何かを失ったなら、捜すべきである。主に近づこうとするなら、門をたたくべきである。求めること、捜すこと、たたくことは求める熱がしだいに高くなり、ますます切になることを表している。捜すは求めるより積極的であり、たたくはひたすら答えを待っている表れである。需要を満足させるのに、これは不可欠な条件である。パンを借りる譬において、門の外側にいた友人が必要なものを得たのは、しきりに願ったからである(ルカ11:5～8)。神は恵みを慕いあえぐ人の祈りを聞き入れるが、しいて拒む



人には与えないのである(マタ7:6)。主の約束は確実で、その教えは感動的なので、聖霊に満たされるようしきりに願わなくていられようか。

「あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物を知っているとすれば、天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さないことがあるか」(ルカ11:13)。聖霊のバプテスマを受けていない者は天の父に求めれば、与えられるであろう。聖霊に満たされていない者も彼に求めれば、聞き入れられるであろう。神が肉体となって世に来られたのは、わたしたちに命を得させるだけでなく、豊かに得させるためである(ヨハ10:10)。聖霊をくださるだけではなく、泉のようにずっと満たしてくださるのである(ヨハ4:14、7:38)。五旬節の日に聖霊が降り、神の教会が迅速に発展しつつある時、悪魔の破壊のわざも日に増し続け、ユダヤ教のリーダーたちをとおして真理の妨げをした。そこで、弟子たちは心を合わせて主に求めて祈った、「主よ、いま、彼らの脅迫に目をとめ、僕たちに、思い切って大胆に御言葉を語らせて下さい。そしてみ手を伸ばしていやしをなし、聖なる僕イエスの名によって、しるしと奇跡とを行わせて下さい」。主はその祈りを聞き入れたので、一同は聖霊に満たされて、大胆に神の言を語り出した(使徒4:28~31)。知っておかなければならないことは、聖霊に満たされるために心を一つにして願い求めるのは原始教会の信者だけではなく、今日の真の教会の信者でも必要なのである。なぜなら、聖霊に満たされていなければ、弱くて力がない上、あげくの果てには、悪魔に縛られて終わってしまう。しかし、もし聖霊に満たされていれば、最強になり、勝ち得て余りがあるのである。

イエスが山上で八つのさいわいについて、「義を行う人は、さいわいである」とは語られずに、「義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるであろう」と語られた(マタ5:6)。明らかに、この教えは自己満足の人に対してではなく、神に飢え渴いている人のために論じられたので



ある。心の飢え渴いている人は、この教訓からどんなに慰められるであろうか。昔、ラオデキヤにある教会は自分は富んでいる、豊かになった、なんの不自由もないと言っていたが、実は、その自身がみじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見えない者、裸な者であることに気がついていなかった。主はそれが熱くもなく、冷たくもなく、なまぬるいと言われた(黙3:14~17)。これはまさに聖霊に満たされていない現象であろう。聖霊に満たされないままで自己満足で、吐き出されそうなラオデキヤにある教会の足跡を踏んで歩むことのないように、飢え渴いているのを知り、鹿が谷川を慕いあえぐように、神を慕いあえごう(詩42:1)。どうか御霊が大いにわれらの心を満たされるように。

二、悪を捨てる

旧約時代の選民がカナン之地へ入ろうとする時、エリコに近いヨルダンのほとりのモアブの平野で、主はモーセに言われた、「あなたがたがヨルダンを渡ってカナン之地にはいるときは、その地の住民をことごとくあなたがたの前から追い払い…その地の住民をあなたがたの前から追い払わないならば、その残して置いた者はあなたがたの目にとげとなり、あなたがたの脇にいばらとなり、あなたがたの住む国において、あなたがたを悩ますであろう」(民33:50~55)。彼らが追い払わなければならないのは、ヘテびと、ギルガシびと、アモリびと、カナンびと、ペリジびと、ヒビびと、およびエブスびと、即ち彼らよりも数多く、また力のある七つの民であった(申7:1~3)。モーセが死んだ後、ヨシヤはその後継ぎとし、使命を果たして、イスラエル人を導き、ヨルダン川の中のかわいた地を渡り、カナン之地に入った(ヨシヤ1:1~9、3:14~17)。神が共におられるため、士気が大いに上がった民は大声で叫び始めると、城壁が崩れて、町に入って敵を全滅させることができた(ヨシヤ6:1~21)。神が共におられる以上、破竹の勢いで、向かうところ敵なし、カナン之七つの民を全く滅ぼして、後の災いを絶やすことができたはずであった。しかし惜しいことに、彼らは、御言葉に従わず、カナンの人たちを生かしておいた(申7:2、20:16、ヨシヤ13:13、

15:63、16:10)。

ヨシュアが年を取った時にまた民の注意を喚起して言った、「あなたがたの前から、その国民を打ち払い、あなたがたの目の前から追い払われるのは、あなたがたの神、主である。…それゆえ、あなたがたは堅く立って…あなたがたのうちに残っている、これらの国民と交じってはならない。…主が大いなる強き国民を、あなたがたの前から追い払われた。あなたがたには今日まで、立ち向かうことのできる者は、ひとりもなかった。あなたがたのひとは、千人を追い払うことができるであろう。あなたがたの神、主が約束されたように、みずからあなたがたのために戦われるからである。…しかし、あなたがたがもしひるがえって、これらの国民の、生き残って、あなたがたの中にとどまる者どもと親しくなり、これと婚姻し、ゆききするならば、あなたがたは、しかと知らなければならない。あなたがたの神、主は、もはや、これらの国民をあなたがたの前から、追い払うことをされないであろう。彼らは、かえって、あなたがたのわなとなり、網となり、あなたがたのわきに、むちとなり、あなたがたの目に、とげとなって、あなたがたはついに、あなたがたの神、主が賜ったこの良い地から、滅びうせるであろう」(ヨシュ23:5~13)。しかし、彼らは一向に心を動かさず、目の前を楽しむために「あなたがたのひとは、千人を追い払うことができるであろう」という約束を捨てた。彼らは生き残った者たちを受け入れ、互いに結婚しあい、交わりあっていた(士1:19、21、28~33、3:1~6)。それで、生き残った人たちは彼らの脇にむちとなり、彼らの目にとげとなって、絶えず害を与えた(士1:34、2:1~5、参考：エゼ28:24)。

旧約の選民は新約の選民を預表する(申14:2、ヨハ15:19)。カナンのはわれらの心で、カナンのはわれらの滅ぼされるべき民はわれらの欲情のようなものである。信仰生活は長期にわたる戦争のようであるが(エペ6:12、ヘブ12:4)、この戦いに、わたしたちが清くなる妨げとなる最大の敵はおのれの欲情である(ガラ



5:17)。それを十字架につけなければ、必ず目にとげとなり、脇にむちとなって、わたしたちが滅びるまでいつも付き纏っているであろう(ロマ8:6上、13上)。しかし、もし霊によって肉の働きを殺す決意をすれば、百戦百勝し、決して肉の欲を満たすことはないであろう(I コリ9:27、ロマ8:13下、ガラ5:16)。

「先にあったことは、また後にもある、先になされた事は、また後にもなされる。日の下には新しいものはない」(伝1:9)。歴史はしばしばこのように繰り返していき、古代のイスラエル人がカナンの人々を生き残して、最後まで戦い、彼らを全く滅ぼさなかったように、今日のクリスチャンの多くも小罪を残して、欲情を十字架につけ、最後まで戦わない故、聖霊に満たされない。ほんとうに惜しいことであろう。しかし、霊に属する者は旧約の選民の失敗を鑑にして、罪悪と両立せず、常に恐れおののいて、自分の救いの達成に努めることを知っている(ピリ2:12、I コリ10:12)。なぜなら、少しのパン種が粉のかたまり全体を膨らませることを彼らは知り、小罪を軽んじないからである(伝10:1、I コリ5:6)。罪に対してこのような心構えは、いつも聖霊に満たされる秘訣と言えよう。もしかすると、あなたは肉体の弱さによって、今まで罪と最後まで戦い続けなかったかもしれない。大きな罪は犯さないが、絶えない小さな罪によって、熱くもなく、冷たくもない信者となってしまったかもしれない。では、「事後の補給も遅くはない」と言われるように、聖霊によって欲情を十字架につける最大の決心をすれば、聖霊は喜んでわたしたちの心に満たされるであろう。

三、悔い改める

人は神ではないから、罪のない者は一人もいない(共同訳 マタ19:17)。聖霊のバプテスマを受けていない人はそうであり、受けた人もそうである。ただその罪の多少と大小に差があるだけである。ヤコブが言ったように、わたしたちは皆、多くのあやまちを犯すものである。特に言葉の上であやまちを犯すの

である(ヤコ3:2)。聖霊によってからだの働きを殺す決意をしたとしても、弱く罪過に陥ってしまうことを免れない。神が争うのは、あやまちがあるかないかではなく、むしろ、知っていながら罪を犯すか、直ちに悔い改めるかを重んじておられるのである。主はその名を「ねたみ」と言って、ねたむ神だからである(出エジ34:14)。もし聖霊に満たされることを慕いあえぎながら、心に不義をいただいていたならば、主はお聞きにならないであろう(詩66:18)。しかし、もし全能者に立ち返って、おのれを低くし、天幕から不義を除き去り、罪を言い表わしてこれを離れる者は、憐れみを受けるであろう(ヨブ22:23、箴28:13)。

「主は心の砕けた者に近く、たましいの悔いにくずおれた者を救われる」(詩34:18)。

「立ち帰って、わたしの懲らしめを受け入れるなら、見よ、わたしの霊をあなたちに注ぎ…」(箴1:23、新共同訳)。

「わたし」は「知恵」の自称(箴1:20)である。「知恵」はキリストのことを言っている(箴8:22~30、マタ11:19)。いわゆる「わたしの霊」とはキリストの霊であり、聖霊である。キリストの懲らしめを受け入れ、立ち返る—悔い改めることは、聖霊のバプテスマを受ける秘訣であり、いつも聖霊に満たされる必要条件でもある。だから、キリストの約束をしっかり覚え、ダビデのよく悔い改めて祈ることを習おう。「神よ、あなたのいつくしみによって、わたしをあわれみ、あなたの豊かなあわれみによって、わたしのもろもろのとがをぬぐい去ってください。わたしの不義をことごとく洗い去り、わたしの罪からわたしを清めてください。わたしは自分のとがを知っています。わたしの罪はいつもわたしの前にあります。わたしをみ前から捨てないでください。あなたの聖なる霊をわたしから取らないでください」(詩51:1~3、11)。

「御霊を消してはいけない」(Iテサ5:19)。



「消す」という言葉はギリシャ原語に「火を消す」の意味があり、マタイによる福音書12章20節の「消す」と同じ字である。聖霊は「火」をもって象徴され、「焼き尽くす霊」と言われ、教会の汚れを洗い、それを清めるものである(新改訳 イザ4:3~4)。火のようにわれわれの中に燃えているのは、われわれを悔い改めさせ、心から一切の罪悪を清めるためである。ゆえに、いつも罪に敏感でなければならず、聖霊の火を消してはいけない。罪が小さいからといって、罪を犯したり、心が頑なで悔い改めなかったりしてはいけない。聖霊の火を消してしまうと、罪の勢いを助長し、想像できない結果になってしまうことをぜひ覚えてほしい。

人が神に属する特性を失い、倫理道徳ががた落ちし、神の子まで俗化してしまった(創4:8、19~24、6:1~4)。そこで主は言われた、「わたしの霊はながく人の中にとどまらない。彼は肉にすぎないのだ(文語聖書は『わがみ霊永く人と争はじ、其は彼も肉なればあり』と訳した)」(創6:3)。キング・ジェームスバージョンは「My spirit shall not always strive with man, for that he also is flesh.」と訳し、文語聖書の訳文と全く同じである。神の子たちが俗化するまでに、御霊の火はずっと彼らの内で燃やし続けていた。しかし、人の子の二の舞を演じてから、聖霊の火を消してしまった揚句、神は彼らを情欲に走るままに任せられたのである。新約時代にとって、これは良き鑑である。清くなり、神を知らない異邦人のように情欲をほしいままにしないのは、清い神のみこころであることを教えている(Iテサ4:3~7)。みこころに従わず、汚れ始めたら、聖霊の火は燃え、われわれの中にあるかすや混ざり物をすべて取り除くのである(参考:イザ1:25)。このような状況においても、もしなお頑なで、終始悔い改めようとしなければ、聖霊の火を消したことになり、聖霊はもはやわたしたちと争わないであろう。だから、普段から清くなるように努め、あらゆることにおいて、異邦人と分別し(Iペテ1:14~16、IIコリ6:14~18)、あやまちを犯した時、直ちに悔い改めれば、いつも聖霊に満たされる状態を保つこと



ができるであろう。

四、服従する

コリント教会は聖霊によって建てられた教会であり、パウロに「聖霊の宮」と言われた（I コリ6：19）。なぜなら、彼らは一つの御霊によって、一つのからだとなるようにバプテスマを受け、そして皆一つの御霊を飲んだからである（I コリ12：13）。ところが、彼らは聖霊に満たされず、肉に属する者で、キリストにある幼な子であった。それは、彼らの間に普通の人間のような妬みと争いがあったからである（I コリ3：1～3）。彼らの霊性がとどまって前に進まず、キリストの形になっていないのは、御霊に従って歩まないからである。この事実から学べることは、①聖霊を受けることと聖霊に満たされることは異なった経験である。聖霊を受けてから聖霊に満たされるまで、かなりの道のりがある。②聖霊を受けた多くの人はコリント教会のように、まだ幼子の段階にとどまっているだけで、聖霊に満たされ、全き人となる境地にまで至っていない（エペ4：13）。③再生していない人のように、御霊に従わず、肉とその思いとの欲するままする（エペ2：3）。④人の心はこのように頑ななので、その首は鉄の筋だと主に言われても過言ではない（イザ48：4）。しかし、神に服従する人はさいわいである！

神に服従することは聖霊のバプテスマを受ける秘訣であり（使徒5：32）、また聖霊に満たされる必要条件でもある。イエスが捕えられたその夜に、ゲッセマネの園で祈られた、「父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください」（ルカ22：42）。「この杯」とは十字架に付けられる苦い杯のことであり、最も耐え難い残酷な刑罰である。旧約聖書に書いてあるが、神はモーセに過ぎ越しの祭りを設立させた。ほふられた小羊をもってキリストの預表とし、その肉を火で焼いたことをもって十字架の苦しみを預表した（出エジ12：1～9、I コリ5：7、マタ27：46）。そして、キリストが十字架に付けられる悲惨な光景を



ダビデによって預言させた。主は水のように注ぎ出され、骨はことごとくはずれ、その心臓は、ろうのように、胸のうちで溶けた。その力は陶器の破片のようにかわき、その舌はあごにつく(詩22:14~17)。

主イエスは神であるが、肉において現れたので(Ⅰテモ3:16)、肉体の弱さがある。この弱さのため、彼は天の父にこの杯を取りのけて、十字架の苦しみを免れるようにと願った。しかし、自分の弱さを念頭をおいてみこころに従うことを忘れたわけではなかった。その前提は、「みこころならば」であり、その原則は、「わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください」であった。結局、御使いが天から現れてイエスを力づけた(ルカ22:43)。それで、願いどおりに最後まで従順であり、「おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた」と(ピリ2:8)、よい手本を示してくださった。この出来事から学べることは、まず天の父に服従した、力を得ることができる、ということである。これには一定の順序がある。しかも、その順序は永遠に変わらない。天の父はわたしたちが従順になるよう望み、従えば、必ず力づけてくださるからである。

宇宙にはただ二つの陣営、即ち神と悪魔とがある。神に従うならば、神の陣営に入ることになり、彼につながって、力を得て、実をたくさん結ぶ(ヨハ15:4~5)。神に逆らうならば、悪魔の陣営に入ることになり、彼につながって、放縦に身をゆだね、神のいのちから遠く離れる(エペ2:1~3、4:17~19)。人にはただ二つの団体、即ちアダムにあったすべての人、とキリストにあったすべての人とがある(Ⅰコリ15:22)。アダムは古き人の源であり、かつて神に逆らい、悪魔の言葉に従ったため、神のいのちから離れた(創2:17、3:22~24、エペ4:18)。アダムにあったすべての人はいのちも生活もアダムにつながって、悪しき者の配下にあり、死んでしまった者である(Ⅰヨハ5:19)。キリストは新らしき人の源であり、最後まで神に服従したがため、聖霊の力に満ちあふれ、すべての名



にまさる名、栄光、ほまれと冠が与えられた(ルカ4:14、ピリ2:8~11、へブ2:9、14)。キリストにあるすべての人は、いのちも生活もキリストにつながって、悪しき者の配下から逃れ、死から命に移った者である(ロマ8:1~2、ヨハ5:24、II コリ3:17)。一言でまとめて言うならば、アダムにあったすべての人は、神に逆らい、弱くて悪魔の支配下にいる者であるが、キリストにあるすべての人は、神に従い、聖霊に満たされ、悪魔に勝った者である。

再生前のパウロは、弱く、肉につける者で、罪に買い取られた僕であったことに対し(ロマ7:14~24)、再生後のパウロはキリストにあって解放され、罪の法則に勝ち抜いて、まるで別人のような者であった。弱い者から強い者へ変わったパウロは聖霊に満たされて、聖霊の力を得たのである(ロマ8:1~2、ピリ4:13)。聖霊に満たされたのは、生活において聖霊に従って行う決意をしたからである。それはキリストがみこころを全うすることを生活の原則にされたのと同じである。「御霊によって歩きなさい。そうすれば、決して肉の欲を満たすことはない」とは(ガラ5:16)、パウロの体験談であり、常に聖霊に満たされ、勝利を得るクリスチャンになる秘訣である。聖霊に満たされたい信者にとって、この体験はいかに貴重なものであろうか。願わくは、パウロがキリストにならう者であるように、わたしたちもパウロにならう者になって(I コリ11:1)、完全に神に服従することを決心し、すべてのことにおいて主を第一とし、パウロと同じようにいつも聖霊に満たされる幸を楽しむように。

五、努力する

イエスが言われた、「バプテスマのヨハネの時から今に至るまで、天国は激しく襲われている。そして激しく襲う者たちがそれを奪い取っている」(マタ11:12)。神の国に入るには、努力し、多くの苦難を経なければならない(使徒14:22)。常に聖霊に満たされるのにも、努力しなければならない。



いわゆる「天国は激しく襲われている」とは、主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思っている。キリストのゆえに、すべてを捨てたが、それらのものを、ふん土のように思っている。それは、キリストを得るためだということである。パウロが天にある御国に救い入れられる確信があったのは(Ⅱテモ4:18)、いつも聖霊に満たされる状態を保ち、肉の欲を満たすことはなく、すべてのことにキリストにならい、戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおしたからである(ロマ8:1~2、ガラ5:16、Ⅰコリ11:1、Ⅱテモ4:7~8)。彼がいつも聖霊に満たされる状態を保てたのは、後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標を目ざして走り、賞与を得ようと競技場で走る者のように努力していたからである(ピリ3:13~14、Ⅰコリ9:24)。パウロが述べた悪魔に対抗するために備えた武具の中で、胸当てはあったが、背当てはなかった(エペ6:11~17)。それで、啓示される事は、前のものに向かって走ってこそ勝つが、気が弱くて引いてしまうと、悪魔の権力に負けるしかないということである。それ以外にも、アブラハムの家族はみな、離れ去った地上のふるさとを思わず、もっと良い、天にあるふるさとを望んでいた。彼らは信仰をいだいて死んだ。まだ約束のものは受けていなかったが、はるかにそれを望み見て喜んだ(ヘブ11:13~16)。これも天国に入るのに努力するよい模範である。

イエスはまた言われた、「手をすきにかけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくないものである」(ルカ9:62)。天国に入ろうとする者は、世にあるものをみな後ろに捨てなければならない(Ⅰヨハ2:15~17)。カレブのように完全に主に従った人にならなければ(民14:24)、神の国にふさわしくないのである。ロトはソドムで裕福な生活をしていて、御使いがそこから逃げよと促した時、彼はためらっていた。御使いが強いて彼の手を取って連れ出さなければ、彼はとっくにソドムで火に焼かれたであろう。しかし、ロトの妻はソドムを逃げ出しても未練があって、神が御使いを通して伝えた言葉を信じず、うしろを



顧みたので塩の柱になった(創19:15～17、26)。旧約時代の選民は荒野で四十年の間、乳と蜜の流れているカナンの地に向かったが、神の人であるモーセに背き、エジプトの罪のはかない歓楽にふけることを懂れていた(使徒7:39、出エジ16:2～3、民11:4～6)。結果として、主がかつて彼らの先祖たちに与えると誓った地を見ることができなかった(民14:22～23)。これらから得る教訓は、主に従うように決心して、天国を望む者は必ず苦勞を耐え、すべてを捨て、目標に向かって走りとおさなければならないということでおある(ルカ9:57～62)。

何事も続けて努力しなければ、退歩する。学問の勉強はそうである、技術の勉強はそうである、霊徳の修業もそうである。常に聖霊に満たされている状態を保つことは、天国に入るのに必ず通るべき道である。もちろん天国に入るのには努力しなければならない、いつも聖霊に満たされている状態を保つこともそうである。もし、積極的に霊徳の修練に励まないと、いつも聖霊に満たされることができない。いつも聖霊に満たされるように努力しなければ、神の国に入ることは難しいであろう(マタ7:21～23)。

「また、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえて、神のもとを出て、天から下って来るのを見た」(黙21:2)。

エルサレムは旧約時代に神の宮を建てられたところのゆえ、歴代以来、聖なる都として世界で名高い。歴史上の聖なる都のエルサレムはかつて打ち壊されて、再び建てられた。それは地上にあり、物質に属するものであった。しかし、この聖句にあるエルサレムは新しく、天から下って来て、霊に属するものである。御使いがヨハネに示したように、この聖の都のエルサレムは小羊の妻なる花嫁である(黙21:9～10)。パウロ曰く、教会は上なるエルサレムであり、キリストの妻である(ガラ4:25～26、エペ5:31～32)。それでわかるように、天から下って来るエルサレムは霊の真の教会である。やがて真の教会がキリストに迎



えられるのは、すべての真の信者の喜びとなる。なぜなら、その時、わたしたちの望みが叶え、永遠にキリストと共に住むからである。真の教会は着飾って用意を整えたので、キリストに迎えられる。「着飾った花嫁のように用意を整えた」とは、清くて傷もないし、シミもない聖徒の義を具えている意味である(エペ5:26～27、黙19:7～8)。言い換えれば、それは常に聖霊に満たされ、完全なる徳性を備え、御前に責められるところのないことである(1テサ3:12～13)。

これは真の教会が完成された遠景である。将来の素晴らしい光景を望みながら、今の自分が熱くもなく、冷たくもなく、なまぬるいの気づくと、どんなに心が痛むことであろうか。過去はすでに過ぎ去ったので、将来に向かって努力すれば良い。願わくは、今後常に聖霊に満たされ、心の深みまで新たにされて、真の義と聖とをそなえた神にかたどって造られた新しき人を着て(エペ4:23～24)、キリストの再臨を待ち望むように！

問題

- 一、聖霊に満たされる定義を述べてみよ。
- 二、聖霊に満たされる効果を述べてみよ。
- 三、聖霊に満たされる必要条件を述べてみよ。



第十四章 聖霊と邪霊を見分ける

二十世紀初頭以来、聖霊と邪霊を見分けることができないため、各教会に極めて普遍的に誤った観念が存在し続けている。

一般の世の教会のリーダーたちは聖霊を受けていない現状をごまかすために、信者が聖霊のバプテスマを求めるのに反対して、「聖霊を受けても必ずしも異言を語るとは限らない」、「だれでも主を信じる時にすでに聖霊を受けている。さらに聖霊を求めると、邪霊を受ける恐れがある」と言う。あるいは、「異言を語るのは邪霊を受けた証拠」とまで大胆に断定する。これはその一である。

ペンテコステ系の教会のリーダーたちは言った、「神は聖霊を求めておる者に邪霊を与え給うことは絶対にはないのですから、どんなことがあっても(聖霊を求めている時)心配はいらないのです」(山田盛彦の著作「聖霊を受くる秘訣」の98ページを参考)。これはその二である。

前者のこじつけの考えと小さな障害のために必要の事を止める考えは、むしろ無知で憐れなものであるが、後者のような信仰はあまりにも幼稚過ぎており、かえって邪霊に隙間を与え、多くの無知な信者に惑わす機会を与える。だから、「霊を見分ける力」が与えられるように主に求めよう(Ⅰコリ 12:10)。また聖書を調べ、霊的体験をすることによってこれらの知識を積み、上述の遺憾な事が教会内で繰り返すことのないよう願おう。

第一節 聖霊を受ける特徴

まず「聖霊を受ける特徴」を述べ、聖霊を受けていない信者が伝統的な誤っ



た考え方を一切捨て、勇敢に主の約束された聖霊を求めるように期する。この約束は原始教会だけではなく、今日の教会、即ち主なる神の召しにあずかるすべての者に与えられているのである(使徒 2:38~39)。

一、「ハレルヤ」をよく唱える

「わたしはまた、大群衆の声、多くの水の音、また激しい雷鳴のようなものを聞いた。それはこう言った、『ハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、王なる支配者であられる』」(黙19:6)。

これは真の教会が異言を語り、合わせて賛美する声である。「ハレルヤ」はヘブル語で、「汝主をほめたたえよ」という意味である(詩 104:35)。

宇宙万物を創造された神はほむべきかな。天使は主をほめたたえ、万軍は主をほめたたえ、もろもろ造られたものは主をほめたたえる。これらは主が命じられると造られたからである。その名は高く、たぐいなく、その栄光は地と天の上にあるからである(詩 148:1~14)。聖霊に満たされている人はよく「ハレルヤ」を唱え、心から御名をほめたたえる。

二、異言を語り、霊の歌を歌う

「わたしは霊で祈ると共に、知性でも祈ろう。霊でさんびを歌うと共に、知性でも歌おう」(I コリ 14:15)。

「霊で祈る」とは異言で祈る(I コリ 14:14)ことで、その声は優雅で優しい。

「霊でさんびを歌う」とは異言で歌うことであるが、ほかのところでは「霊の歌」(エペ5:19、コロ3:16)と記載している。「霊の歌」という言葉をギリシャ原語は「Odee pneumatikos」とする。「Odee」は元々一般の歌謡曲の意味である



が、「霊」の形容詞である「pneumatikos」を加えることによって、霊の歌になったわけである。この霊の歌は即ち黙示録の中の「新しい歌」である。そのメロディは豎琴の音のように、奥ゆかしく上品で、和らぎととのい、澄んできれいで、世の歌に勝るものである。ヨハネ曰く、この歌は、地からあがなわれた十四万四千人のほかは、だれも学ぶことができなかつた（黙5：9、14：2～3）。キング・ジェームスバージョンのエペソ人への手紙5章18節の以下の訳文によれば、霊の歌を歌うのは聖霊に満たされた結果で、聖霊によるものであることがわかる。だから、「霊の歌」、あるいは「新しい歌」というのはふさわしいのである。

邪霊を受けた人も異言を語り、霊の歌を歌うが、それは耳障りで聞き苦しいものである。

三、心が喜びに満たされる

「弟子たちは、ますます喜びと聖霊とに満たされていた」（使徒13：52）。

この聖句をギリシャ語から直訳すれば、「弟子たちは、聖霊の喜びに満たされていた」となる。弟子たちの心が喜びに満たされ、迫害に勝ったのは聖霊に満たされた結果であることがわかる。

聖霊は「喜びの油」をもって象徴されている（へブ1：9）。「喜び」は御霊の実の形の一つである（ガラ5：22）。聖霊は確かにわれわれに喜びを与え、特に多くの患難の中で、喜びを与えられる（Iテサ1：6）。イザヤ預言者は、キリストの降誕がシオンの中の悲しむ者に喜びを与え、悲しみにかえて「喜びの油」を与えると預言した（イザ61：3）。真の教会の中で、ある信者が聖霊に満たされると「霊の笑い」をする。それで、すべての憂いと悲しみが消えてしまう事実はこの事の証明となる。



四、御霊の実を結ぶ

「御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であって…」(ガラ5:22~23)。

イエスが言われた、「そのように、すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。良い木が悪い実をならせることはないし、悪い木が良い実をならせることはできない。このように、あなたがたはその実によって彼らを見わけるのである」(マタ7:17~20)。「善人はよい倉から良い物を取り出し、悪人は悪い倉から悪い物を取り出す」(マタ12:35)。誠に、木が良いか悪いかを見分けるには、その実によって決めるのが最も賢くて簡単な方法である。偽善者は一時的に騙すことができても、最後にその正体が必ずばれるからである。

聖霊は「上からの力」(ルカ24:49、使徒1:8)であって、与えられた人を罪と死との法則から解放し(ロマ8:2、Ⅱコリ3:17)、新たにし(テト3:5、Ⅱコリ5:17、Ⅱテサ2:13)、御霊の実を結ばせるのである。

第二節 邪霊を受ける特徴

「愛する者たちよ。すべての霊を信じることはしないで、それらの霊が神から出たものであるかどうか、ためしなさい。多くのにせ預言者が世に出てきているからである」(Ⅰヨハ4:1)。

霊をわきまえないですべてが聖霊だと思って信じるのは、最も危険なことである。それは山田盛彦が言ったように、信者が聖霊を求める時に邪霊が絶対に入って来ないと考えるのと同じ考えである。霊界の事に対する無知は、扉を開いて悪魔を歓迎することになり、悪魔を喜ばせ、真理をごまかし、信仰に未熟な人を惑わすことである。わたしたちはよく警戒して、冷静に観察し、よくわ



きまえることによって、邪霊に惑わされないように慎まなければならない。

ここで聖霊並びに本教会の霊界に対する体験に基づいて、「邪霊を受けた時の特徴」を以下のように述べよう。願わくは、各教会の信者たちが、受けた霊が神によるものかどうかをよく調べ、謙虚に試すように。

一、イエス・キリストが肉体をとって来られたことを認めない

「イエス・キリストが肉体をとってこられたことを告白する霊は、すべて神から出ているものであり…イエスを告白しない霊は、すべて神から出ているものではない。これは、反キリストの霊である。…」（Iヨハ4：2～3）。

使徒ヨハネがヨハネの第一の手紙を書いた時は神哲主義(Gnosticism)の流行っていた頃であった。彼らの主張は、凡そ物質は悪で、霊だけは善である。神は善である以上、物質と接触することができない。だから、「言は肉体となる」ということはあり得ない。神の子も十字架で死なれたことはない、と。明らかに、救いの恵みを破壊するこの思想は、邪霊の働きによるものである。

今日アメリカで盛んになっている新神学は、この類の唯理思想から発展を受け継いだ異端の教派である。彼らはイエスの神性を信じない、その奇跡、復活、昇天、再臨を否認するので、よく慎まなければならない。

二、世のことばかりを語る

「彼らは世から出たものである。だから、彼らは世のことを語り、世も彼らの言うことを聞くのである」（Iヨハ4：5）。

人を生かすものは霊であって、肉はなんの役にも立たない。主が話した言葉は霊であり、また命である(ヨハ6:63)。だから、聖霊に満たされている人は、



霊のことは語るが、世のことは語らない(Ⅰコリ2:1~7)。悪魔はこの世の神で、世の者たちの思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光の福音の輝きを見えなくしている(Ⅱコリ4:4)。邪霊に働かせられた者は人々の勝手な好みに合わせて世のことを語る(Ⅱテモ4:3~4)。

世に属するこのような教会は所々に存在している。

三、真の教会に聞き従わない

「しかし、わたしたちは神から出たものである。神を知っている者は、わたしたちの言うことを聞き、神から出ない者は、わたしたちの言うことを聞かない。これによって、わたしたちは、真理の霊と迷いの霊との区別を知るのである」(Ⅰヨハ4:6)。

原始教会は神に属し、聖霊が共にあり、真理の基に据えられ(エペ2:20~22)、たくさんの奇跡が伴っていた(マル16:20、ヘブ2:4)。ゆえに、凡そ神に属する者は彼らに聞き従ったが、そうでない者は彼らに聞き従わなかった(Ⅰヨハ2:18~19)。

本教会も神に属するものである。それは原始教会の所有条件を備えている。即ち、真の教会があるべき三大条件——聖霊、真理、奇跡を備えているからである。ゆえに、真理の霊に導かれた者はわれわれに聞き従う反面に、迷いの霊に働かれた者はわれわれに聞き従わない。第一、からだは一つ、御霊も一つである(エペ4:4)。第二、キリストは、いくつにも分けられたのではない。御霊はわれわれを一つにする(Ⅰコリ1:13、エペ4:3)。第三、真理は一つである(Ⅱコリ1:18~19)。同じ聖霊が対立した信仰を植えつけることはない(エペ4:5)。第四、主の羊は主の声に聞き従い、一つの群れとなる(ヨハ10:16)。第五、預言者の霊は預言者に服従するものである(Ⅰコリ14:32)。



四、さえずるように、ささやくように語る

「人々があなたがたにむかって『さえずるように、ささやくように語る巫子および魔術者に求めよ』という時、民は自分たちの神に求むべきではないか。生ける者のために死んだ者に求めるであろうか」（イザ8：19）。

さえずるように、ささやくように語るのは巫子および魔術者が邪霊に取りつかれた時の特徴である。今まで悪魔に取りつかれた者が家族に連れられて本教会に癒しを求めにきた時にも、よく見られることである。信者が邪霊に取りつかれてもこのような不気味な声を出す。

五、叫び出し、ひきつけ、あわを吹き、引き倒れる

「霊が取りつきますと、彼は急に叫び出すのです。それから、霊は彼をひきつけさせて、あわを吹かせ、彼を弱り果てさせて、なかなか出て行かないのです。ところが、その子がイエスのところに来る時にも、悪霊が彼を引き倒して、引きつけさせた」（ルカ9：39、42）。

急に叫び出し、ひきつけ、あわを吹き、引き倒れるのは、悪霊に取りつかれた人によくある現象である。信者が邪霊に取りつかれても、急に吼えるように叫び出す。あわを吹くか引き倒れるのはなおさらである。ペンテコステ教派にはこれがよくあることであるが、彼らは聖霊を受けたと思い込んでいる。

六、意識不明になる

聖書朗読：マルコによる福音書5章1～15節

悪霊に取りつかれた人にある明白な特徴は、意識不明で、自由意志を失い、悪魔に操られたままで、自分の知らないもしくは、したくないことをしてしまうところである。マルコによる福音書に書かれているゲネサレ湖畔にいたこの



人は、①家があってもわざわざ墓場に泊まる(2~3)、②昼夜絶えまなく叫びつづけて、静かになれない(5上)、③自分を守れず、石でからだを傷つける(5下)、④自由を好まず、むしろ、いつまでも縛られることを好む(7~8)、⑤衣服があっても着ないままにいる(参考：15)など、考え、言葉、行いがすべて悪魔に操られていた。

ペンテコステ教派の教会が聖霊を求める時、邪霊に取りつかれて気を失うことはしばしばある。しかし、彼らはそれを聖霊と思い込み、主イエスの名によって悪霊を追い出すことをしない。

七、高ぶる

神は預言者をとおしてサタンが神に逆らった事実を描写した、「黎明の子、明けの明星よ、あなたは天から落ちてしまった。もろもろの国を倒した者よ、あなたは切られて地に倒れてしまった。あなたはさきに心のうちに言った、『わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、北の果なる集会の山に座し、雲のいただきにのぼり、いと高き者のようになろう』。しかしあなたは陰府に落され、穴の奥底に入れられる」(イザ14:12~15)。「あなたは知恵に満ち、美のきわみである完全な印である。あなたは神の園エデンにあって、もろもろの宝石が、あなたをおおっていた。…これらはあなたの造られた日に、あなたのために備えられた。わたしはあなたを油そそがれた守護のケルブと一緒に置いた。あなたは神の聖なる山にいて、火の石の間を歩いた。あなたは造られた日から、あなたの中に悪が見いだされた日まではそのおこないが完全であった。あなたの商売が盛んになると、あなたの中に暴虐が満ちて、あなたは罪を犯した。それゆえ、わたしはあなたを神の山から汚れたものとして投げ出し、守護のケルブはあなたを火の石の間から追い出した。あなたは自分の美しさのために心高ぶり、その輝きのために自分の知恵を汚したゆえに、わたしはあなたを地に投げうち、王たちの前に置いて見せ物とした」(エゼ28:12~17)。



高ぶりは悪魔の本来の姿である。だから、信者が邪霊に取りつかれると、高ぶった有り様が現れてくる。でしゃばりを好み、首位にいることを好み、人からの賞賛や崇拝を好む。大局に反抗し、真理に服従せず、戒めを受け入れず、規則正しくない。神から特別な啓示を受けたと言い張り、教会が盛んになるためどう改革すべきかと主張する。兄弟たちのあやまちを指摘することを好み、勝手に人をさばく。あるいは、自分がイエスか某預言者か某使徒であるということまで言うのであろう。

八、その他

そのほかに、次のような状況が現れる：①人を悩ませ、怖がらせ、不安を感じさせる(サム上16:14～15、23)。②狂いわめき、人に害を与える(サム上18:10～11)。③戦いを引き起こし、平和を奪い取り、人を妬む(黙16:14、ヤコ3:14～16)。④汚れ、淫乱である(黙18:2～3、Ⅱペテ2:2、18)。⑤サタンのいわゆる「深み」に聞き従い、真理を捨てる(Ⅱテモ4:1、黙2:24、Ⅱペテ2:1)。⑥舌の異言を語らず、唇の異言を語る。⑦霊を感じた後、心に苦痛を覚える。重荷を負った感じ、嘆き、嘔吐し、顔が真っ青になり、あるいは、四肢が冷えるなど。

以上の状況が現れる一信者が邪霊に取りつかれると、すぐその人を制止して、しばらく祈らないように命令しなければならない。ひどい場合は、その人を叱って、その身から悪魔を追い出さなければならない(マル1:25～26、9:25～26)。

聖書曰く、「サタンも光の天使に擬装する」(Ⅱコリ11:14、参考：使徒16:16～18)。ここで言う「邪霊を受ける特徴」とは一般的に見られる常態だけである。しかし、邪霊のもっと繊細な行動は、諸霊をわきまえる賜物を持っているか、霊界に対し経験が豊富でなければ見破ることができないであろう。

第三節 邪霊を受けた実例



山田盛彦が書いた「聖霊を受くる秘訣」の第六章「受霊体験記」に、悪霊に取りつかれた状態が多く書かれている。ただ諸霊をわきまえる賜物がなく、霊界の経験が乏しいため、著者までそれを聖霊だと思い間違えた。ここで彼らが邪霊を受けた実例を取り上げて、読者の皆さんが分別するための参考にしよう。

一、意識不明

▲ある夜の集會に、「神様は求めば必ず下さいますから、感謝して戴きましょう」と村井先生がおっしゃるので、私は小さい声でハレルヤ、ハレルヤと神様を崇めておりました。その中に、スーと後の方に倒れてしまいました。…後で承りましたが、倒れてから両手を挙げて開いたりと閉じたりしていたそうです(263ページ)。

注意：「～そうです」という言葉によって、彼は倒れた後、すでに意識を失ったことが窺える。そのため、一切の動作は無意識に行われた。これは邪霊を受けた時によくある特徴である。

▲私は踊りたいような、飛び上がりたいような気持ちにかられて、立上りますと、自然に賛美が出て、手足が動いておることだけは判っていましたが自分は何をしたか解りませんでした。後で人が「貴女は舞踊を稽古せられたのですか」と聞かれますから「いいえ」と答えましたら、私は両手の袂を持ってそれを打振り打振り異言の歌を歌いながら、きれいな踊りを躍って会堂を回っていたそうです(266ページ)。

注意：これらの動作も意識がない状態で行われた。

▲私は三月二十九日夜静岡日本聖書教会で山田先生と二人で祈っておりました時、突然私は霊に満され、霊は私を占領してしまわれたのです。私は私の意識しない中に異言で祈っている自分を発見しました。私は異言で一時間余祈ったそうです(317～318ページ)。



注意：また「～そうです」！しかもそれは意識のないままで異言を語ったのである。

二、唾が出る

▲咽喉からどろした唾のようなものがおびただしく出る。波江野兄と森本兄がハンカチで拭きとって下さる。

▲すると、婦人席からトミ子さんが手招きする。行って見ると朝子(夫人)が静かに横に寝たまま、顔を真赤にして眼は僅かに閉じて細かい声で異言を語っている。波江野の奥様が、傍にいてハンカチで拭いてやったり、介抱しつつ祈ってられる(285ページ)。

▲最初なみ子さんは静かに祈っておられましたが七時頃からは唇の自由を失われ、唾液が流れますので、お母さんが拭いて上げておきますと、七時半頃から静かに異言を語りはじめられ、立派に聖霊にてバプタイズされましたので、九時過感謝して帰りました(311～312ページ)。

注意：唾が出るのは邪霊を受けた時によくある特徴である。

三、秩序がない

▲いうところによれば：僕の体は仰臥したまますべり出した。会場を一回りして—その実同じ所で腹部を中心に時計のようにくると一回りしただけであった—静止した。と同時に首が時計の振子のように左右に動き出す。両手がバネ仕掛のように上下する。異様な言葉が口をついて出る(285ページ)。

注意：これらの動作に秩序がなく、しかも意識のない状態で行われた。

▲えみ子さんは小さな声でハレルヤハレルヤを連呼しておられましたが、七時頃になって後ろに静かに倒れました。…えみ子さんが最初倒れた時は、頭を西に、足を東に向けておられましたが、異言を語る中に頭部を中心として、足部が南に漸次回転し、九時頃には正反対に足が西に向って百八十度の転換を致



していました（309～310ページ）。

注意：これらの動作はあまりにも秩序がなく、体裁が悪い。まして受霊者が女子であることはもってのほか！大勢の人の前で神はこのように一人の女子に恥をかかせ得られるか。

四、苦しみ悶える

▲私はその時（異言で祈っている中）胸が苦しくて仕方なかったのですけれども、祈り終わってからは次第に苦しみも去り、同時に私はハッと夢から覚めたような気持ち（318ページ）。

注意：受霊者は往々胸に何かの力に圧迫されたような感じで、呼吸困難になり、苦痛である。

五、倒れる

前述の状況以外に、極めて普遍的な現象は「倒れる」ことである。山田盛彦著の「聖霊を受く秘訣」の第六章「受霊体験記」のほぼ各篇において見られる。聖書の記載によれば、これも邪霊を受けた時の特徴の一つ（ルカ9:42）であり、注意せざるを得ない！

山田盛彦がこれら邪霊を受けた経験を、聖霊を受けた経験としてとらえてしまったのは、諸霊をわきまえる賜物がなく、霊界の体験が乏しかった他に、もう一つ大きな原因があった。それは信者が聖霊を求める時は絶対に邪霊は受けないと考えていたことである。彼が固持していた理由は、神は聖霊を求める人に邪霊を賜ることは決してないと考えていたからである。彼が根拠としている聖句は、ルカによる福音書第十一章 11～12 節である。「あなたがたのうちで、父であるものは、その子が魚を求めるのに、魚の代りにへびを与えるだろうか。卵を求めるのに、さそりを与えるだろうか。」（参考：山田盛彦著の「聖霊を受く秘訣」一書第 98 頁）



父が子に魚の代りにへびを与えることがないように、神は聖霊を求める人に邪霊を賜うことは決してないが、これは信者が邪霊を受けることは絶対にないという保証ではない。悪魔に隙を与えてしまえば、やはり侵入されてしまうのである。私たちは悟らなければならない。主イエスがこの譬を語られた理由は、天の父がいかに私たちを愛しておられるか、いかに私たちの祈りを喜んで聞かれているか、また、私たちが神の愛を深く信じて揺るがない信仰で祈り求めさえすれば、必ず私たちの必要なものを満たしてくださる、ということ私たちに分からせるためである(ルカ 11:9~10、マタ 21:22)。私たちは悟らなければならない。邪霊は決して神が信者に賜うものではなく、邪霊が自ら隙に乗じて入ってくるのである。それゆえ、邪霊が侵入してくる隙を残さないように、信者が聖霊を求める時は決して邪霊を受けることはない、と私たちは誤解してはならない。

第四節 邪霊の侵入をいかに防ぐか

サタンは光の天使に擬装して、悪巧みで人を誘惑する(Ⅱコリ11:14、3)。またほえたけるししのように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている(Ⅰペテ5:8)。聖霊を求める時、邪霊の邪魔は起きない、絶対侵入することがないとはだれも断言できないのである。では、いかにして防備すべきであろうか。

パウロが言った、「悪魔に機会を与えてはいけない」(エペ4:27)。それは、悪魔に機会を与えることが邪霊に侵入させる根本の原因だからである。ちょうど扉をちゃんと閉めないで泥棒に入られるようなものである。例えば、①サウルが神の命令に背き、ダビデを憎んだため、主の霊は彼を離れ、代わりに悪霊が臨んだ(サム上15:23、16:14、18:6~10)。②ユダが公の財布をむさぼって、私用にし、イエスを裏切ろうとしたので、サタンはユダに入って、彼の魂を滅亡に至らせた(ヨハ12:6、13:27)。③アナニヤ夫婦が不正に資産を売った代金



をごまかしたため、その心はサタンに奪われた。夫婦共に主を欺き人を欺いた(使徒5:1~10)。以上は明らかな実例である。

われわれは失敗の例をかがみにして、反逆、妬み、貪欲、偽りの悪から離れなければいけない。むしろ、不潔、不正を捨て、信仰を持ってひたすらへりくだって清い心で祈りに専念すれば良い。そうすれば、邪霊が入り込む隙間がなく、父の約束の聖霊を得ることができるであろう。

問題

- 一、聖霊を受ける特徴を述べてみよ。
- 二、邪霊を受ける特徴を述べてみよ。
- 三、あなたの知っている邪霊を受けた実例を二つ挙げてみよ。
- 四、いかにして邪霊が入ることを防ぐか。



第十五章 わたしが聖霊を受けた体験談

真イエス教会台湾総会が発行した聖霊報の第百五十四号に、「わたしが聖霊を受けた体験談」という新しいコラムが開かれ、本教会の信者が聖霊を受けた経験が載せてあります。読者の皆さんに聖霊を受けた状態と結果をより深く知っていただくため、ここで特別に彼らの証を転載することにしました。願わくは、神の霊によって、本教会が確かに聖霊が自ら建てられた世の末の真の教会であることを認識されますように。そして、皆さんも聖霊のバプテスマの幸を賜われるように。

1. 聖霊を受けて大喜びでした

林悟真

キリスト教に対し元々素人であった私はイエスのことを全然知りませんでした。1929年に、溪口で医者をしていましたが、長年喘息を患っている自分の妻を癒すことはできませんでした。ある日、義理の弟・蔡海濤が訪ねてきて言いました。「真イエス教会が大林に伝わってきました。聖霊があって、医者が治せない難病の患者がそこへ行くと、治ると聞きました。お姉さんの病気が癒されるように、はやく連れて行きましょう」。私はそれを聞いてうるさく思い、「ばか！」と彼を叱った後、その事をすっかり忘れてしまいました。

数日後、大林の郭柱さん（酒飲み仲間で一番気の合う仲間、同じく医者）のところへ行きました。彼は「聖霊報」を手を持ち、読んでいたところでしたが、私を見るや否やすぐ「世間のことはほんとうに不思議です。中国から伝わってきた真イエス教会はほかのキリスト教と大いに違います。聖霊があって、異言を語ったり、病を癒したり、悪霊を追い出したりしています。この教会はきっと真の教会に違いないと思います」と乗り気になって言いました。「いい加減に



しろ！」と私は怒って言いました。「あなたのような賢く、哲学に精通し、神も鬼も信じず、迷信を信じない人が、何で蔡海濤と同じ馬鹿者になったのですか。花屋さんはだれもが自分の花はきれいだと言います。偽物を売っていますと言う人がいるものですか。医者わたしたちも自分の技術は高明で、薬はよく効くというじゃありませんか。もちろん宗教も例外ではなく、どの教派も自分が本物で、人を救うと言っています。真とは何ですか。わたしは信じません！」。ところが、郭さんは答えました。「今回の真イエス教会は確かに今までの教会とは違います。私以上に頑固な人はいないでしょう。だけど、何人かの病人が信じて癒されたのですから、良心に背いてそれを無視するわけにはいきません。少し工夫してこの教会の教えがどんなものであるかを勉強しようと考えていますが。」その話を聞いて、わたしは感心しました。「じゃ、もしあなたの観察どおりに勉強する値打ちがあるのなら、わたしも一緒にしたいです。伝道会が行われる時、連絡してください」。

家に帰ってから三日目に(1929年4月8日)、突然、義理の弟の海濤がある伝道者(須田清基長老)とその令弟の蔡海清(蔡聖民執事)を連れて家に来ました。彼は言いました。「あなたが真理を勉強しようとしている郭柱さんから聞いたので、わざわざやってきました。」すると、私は友達を何人か誘って話を聞きに来させました。その日、須田長老は日本語で説教をして、蔡聖民執事は台湾語で通訳をしました。説教が終わったら、須田長老は家内と子供たちをベッドに跪かせて、「ハレルヤ、主イエスを賛美します。聖霊を満たしてください。」と信仰をもって唱えるよう勧めました。祈りを始めたところ、須田長老と蔡執事は体を揺らして、意味のわからない言葉を語っていました。その後、彼らは言いました。「誠心誠意でイエスを信じれば、どこにいても、わたしたちの按手がなくても聖霊を受けます」。五分後、家内は最初、足が少し揺れましたが、急に全身まで動きはじめました。何かの力によって彼女はベッドから数寸高く引き上げられ、そして、跪いたままで踊り出しました。元々合わせていた両手は



開き、右手が左へ、左手が右へと力を入れて自分の胸をたたきました。口も何かぶつぶつと唱え始めました。この状況を目撃して、私は緊張でたまりませんでした。当時、家内は喘息の発作が起き、目が腫れて痛んでいましたので、そんなに力強くたたいたり、跪いたままで踊ったりしたら、肺が内出血して気を失って死んでしまうのではないかと心配しました。そこで、私は慌ててベッドに上がって、彼女を止めよう、その顔を確かめようと思いました。須田長老は私が異常に恐れたのを見て、手を彼女の頭に置いて、「アーメン」と一言言いました。彼女はそれで元に戻り、静かにニコニコと笑いました。汗びっしょりでしたが、喜んでいるようでした。喘息の人は話さえも難しいのに、まして跪いたままで踊ったり、大声で祈ったり、両手で自分の胸をたたいたりするのでしょうか。しかし、家内は全然苦痛なく、薬と注射を受けた時よりもはやく快復して、上機嫌そうでした。彼女は言いました。「祈りのとき、目の前に稲妻が光ったように輝いていました」。「感謝なことに、あなたは『栄光』を見ました。」と蔡執事は言いました。いったい「栄光」というのは何であるのかと素人のわたしは何も知りませんでした。寝る前に、家内と子供たちは隣の部屋で祈りましたが、やはり聖霊に満たされて、大声で異言を語って、跪いたままで踊りました。「病人なのに、なんでこんなに一生懸命お祈りするのか」と不思議に思ったわたしは聞きました。すると、彼女は答えました。「祈るたびに、病気がその分よくなって、注射や薬よりもずっと気持ちがいいから、祈りが好きです。」

1929年5月20日の午後5時半はわたしが新しく生まれ変わった時です。家内と子供たちがバプテスマを受けて信仰に入ってから、私はたゆまず聖書勉強に励み、教会へ集会に行っていました。主の愛によって、だんだん心が開かれ、教えを悟り、バプテスマを受ける決意までしました。同じ日にバプテスマを受けた信者は男女十数人いました。酒仲間の郭柱と義理の弟の蔡海濤、それに何人かの学校の先生と奇形の病人が一緒でした。それで、見物に来た村人が大勢いて、皆不思議そうな顔で言いました。「まさか酒色にふけていた学問のある人



たちがイエスを信じるようになったなんて」と、迷信だ、ばかだと思い、私たちをあざけったり、謗ったりしました。バプテスマを受けて、教会に戻った後、郭ピレモン長老によって、洗足式が行われました。主の愛はいかに深いものかと思いました。そして、聖餐をいただき、聖霊を求めました。黄ギデオン長老が手を頭に置いて、祈ってくださったところ、きらきらと光った風がわたしの額を吹いてきました。それで、体が温まり、心は爽快でしたが、聖霊は受けていませんでした。

翌日の21日の午後8時半、私は家内と子供たちと家の後ろにある学校の運動場で祈りました。雨の後、濡れた地面に跪けないので、立ったままで聖霊を求めました。何分か後、わたしは両足がふらふらとちゃんと立てない感じがしましたが、心が熱く、もうすぐ聖霊が降るとはっきりわかりました。それで、両手が開かれないようにわざとしっかりと合わせました。そして、意味のわからない異言を語らないように自分の声を気にして、わざと舌を制御しようとしてしました。しかし、人の思いは聖霊の力に勝るものではないでしょうか。聖霊によって、知らぬ間に体が高く引き上げられ、地面より1メートルあまりのところで回ったり、踊ったりし、鳥が舞っているように両手が広げられ、自分のわからない異言を語り始めました。それと同時に、向かい側が昼間のように明るく（その晩は雨で真っ暗でした）、輝いている夜景のように見えました。

聖霊を受けた喜びは言葉では形容し難い初体験であり、王の皇位が目の前にあっても譲りたくないものでした。家に帰った後、各長老、執事と信者宛に九枚の手紙も書いて、聖霊を受けた状況を報告しました。

2. 夫が変わったことに感動されて、バプテスマを受ける決心をしました

楊淑真

私はかつて偶像崇拝者で、イエスを知らぬ望みのない者でした。家は貧しい



山の村にありました。働くことのできない病弱な夫は気短で荒い性質の上、よく私に暴力を振るいました。頼りがなく、ただ絶望的だとしみじみ感じていました。しかし、感謝なことに、夫（蔡聖民執事）に引き続き、私は主に救われ選ばれました。

1928年に、夫は台南にいる長老教の信者の家で療養をした時、聖霊の導きによって真イエス教会で真理の勉強に励みました。よく悟った上で、元の長老教会を離れ、バプテスマを受けて真の信仰に入りました。そして、聖霊を授けられ、生まれ変わりました。後に、ふるさとに戻って、真イエス教会の聖霊の働きの素晴らしい恵みを熱心に宣べ伝えました。今までずっといじめられてきた私はあまりにも惨めな目に逢っていたので、信仰に入ろうとせず、夫をまったく相手にしませんでした。しかし、密かに彼のことを観察していました。何日か経って、彼がすっかり変わり、もう気短な人ではなくなったことに気づきました。

ある日、ある長老が山村へ来てバプテスマを施すと聞き、私は主を信じることを決意しました。「どうしてバプテスマを受けるのか」と主人に聞かれましたが、「罪が洗われて、新たな人になりたいからです」と答えたので、主人はとても喜びました。洗礼の時、水に入ると、目の前に栄光が照らされました。そして、水から上がると、何千キロものの重荷が全部卸されたようにすっきりした感じでした。自由自在になって大喜びで、口で「ハレルヤ」と唱え続けました。帰りに道端のあちらこちらの木の下で五回も祈りました。帰った後、川まで洗濯に行っても川辺で二、三回祈りました。そして、夕飯の支度をしながら、奥の部屋で五回祈りました。夕飯が出来上がって、家族が集まるのを待っている間に、切に祈ったところ、聖霊がわが身に臨みました。聖霊が下る前、祈りの声は小さかったのですが、一旦聖霊を受けると、声が大きくて力強く、体も動き出しました。別の部屋で本を読んでいた主人はそれを聞いて、駆けつけてき



て、一緒に祈って、按手してくれました。よく聖霊に満たされた私はたくさん異言を語りました。その喜びは腹から生ける水が湧き上がりつづける（ヨハ7：37～39）ようなもので、とても言葉と文字で表現するものではありませんでした。

バプテスマによって罪が洗い落とされ、聖霊によって再生されたので、あの憂いに満ちた哀れな人が、日々喜びに溢れて、光の中で満足しながら感謝をする新しい人に一変しました。そればかりではなく、すべての病気もすっかり消えてしまいました。聖霊を受けたこの特殊な経験はいつまでも忘れられないのです。

聖霊を受けて間もない頃、子供が言うことを聞かないので、私はかんかんに怒って厳しくぶってやりました。思いがけずも聖霊はそれでなくなりました。私は大変恐れて、祈りの中で過ちを認め、泣いて主の赦しを求めました。三十分後、離れた聖霊が再び下ったので、喜びが取り戻されました。この経験によって、神の教えに背いて聖霊が離れることのないように、自分の思いや行いをよく慎みました。主に感謝します。真理の聖霊はひたすら私のうちに留まって、教え、慰め、救いのしるしとなってくださいました。私もそれに応えて、主が天から再臨して栄光の日が来るまで、聖霊の助けに頼り、その導きに従い、主の道に歩み、できる限り奉仕に励むようにしています。

3. 聖霊の降臨によって、敷地まで揺り動かされました

陳揚真

わたしは多神教信仰の家庭に生まれ、本名が藹如で、聖名が揚真です。先祖は代々福建蒲田県に住んでいましたが、1910年代に父母に従って龍溪県石碼町に引っ越し商売をしました。キリスト教にはまったく興味がありませんでした。1921年に蒲田に戻って結婚をしました。家内はキリスト教の学校を卒業した者



で、イエスに熱心な信者でした。結婚式に先祖を拝まないと堅持したことが印象深かったのですが、彼女はしだいにうちの多神教信仰に同化されました。私は菓子屋を経営し、仕事でよく上海、杭州方面へ行きました。年末は必ず上海、杭州へ決算に行きました。商売の付き合いで酒色は常のこと、マージャンが大好きな私が日夜連続で賭博にふけるのはよくあることでした。時によって辛いとも思いましたが、なかなかそこから抜け出すことはできませんでした。私から容赦ない刺激を受け冷遇されていた家内は、怒っても終始無言で抗議をしていました。

同郷の陳夢蘭、陳厲、歐玉春らはアヘン依存症で非常に苦しんでいました。1931年1月に、蒲田に真イエス教会が伝わり、祈りをすれば、万病が癒され、アヘンが止められるといううわさが耳に入りました。はやくも癒してもらいたかった彼らは数百里の距離を恐れず、石碼から原籍の蒲田へ辿り着きました。果たして、一ヶ月あまりで、帰ってきた彼らは別人のようで、前より太くなって元気いっぱいな姿で勝利を見せました。蕭ルカ執事と言う者も彼らと同行してやってきて、家を借りて伝道をし、昼夜祈りました。時には夜中まで大声で祈りました。とてもぞんざいで怪しく、嫌われる下流社会の者のように見えました。特に、「真」と名乗って、よくも高ぶったもんだなあと思いました。私の目から見れば、実につまらなく、無意味なことをやっているだけでした。

しかし、その時、家内が重病でした。家内は出産の時に、子宮が傷つき、その後潰瘍になって、下腹部の痛みは耐え難いものでした。半年ぐらい医者にかかっても治らないので、途方に暮れて、すっかりやつれ、病床でうめき、死を待つ日々を送りました。真イエス教会の蕭執事が祈りの力によって、多くの病人を癒したと聞き、友達に相次いでそのことを伝えてきて、家内のために祈ってもらうようにと催促してくれました。半信半疑の私はなかなか決められなかったのですが、熱心な隣人や友達の好意に甘えて、家族と相談した上、義理の



兄の許天由（漢方と灸の医者で、後にたくさんの人を真の教会に導きました）と二人で蕭執事を訪ねることにしました。いったいどういうことか探るため、私は聞きました。「蕭先生は病気を癒すことができるのですよね？」「それはイエス様なのです。私は医者ではないので、誤解しないでください」と蕭執事は答えました。怪しく思った私はまた言いました。「蕭先生でも、イエス様でもいいから、とにかく、うちの病人を癒してもらいたいのですが。」蕭執事は言いました。「イエスを信じれば、イエスにできないことはありません。だから、病状は聞きません。信じると決心すれば治るからです。」「祈って治るなら、もちろん信じます。」と言った私に、蕭執事は答えました。「まず信仰があって、はじめて祈りの効き目が出ます。」と、それぞれ自分の主張を堅持して、お互い譲り合いませんでした。

家に帰って、家族と相談した上、蕭執事に祈ってもらうことに決めました。家に来てもらうと、蕭執事は言いました。「イエス・キリストの力を表すために、祈ると決心した今日から、医療や薬を一切拒みましょう。そうでなければ、祈って癒されても、医者が新しい薬に換えたから効果が出たのだと思い違えるでしょう。それでは神の栄光を奪うことになるし、あなたがたの信仰にもけっしていいことではないですから。」もちろん、私たちはそのアドバイスに同意しました。その時、毎日の医薬代はかなりの負担でした。それに、祈りに効果があるなら、薬に頼る必要がなかったからです。彼の大胆なふりを見て、何か不思議な業が行われるだろうと信じました。蕭執事は更に私たちのあまり理解できない多くの教えを証しましたが、皆はただ好奇心の気持ちだけで、はやく祈りによって何か奇跡でも行って病気を癒してもらいたかったのです。

祈りの最初に、蕭執事は病人に水を飲ませてくださいと頼みました。私は白湯を半分持ってきましたが、蕭執事は経験によると、生水が一番いいと言いました。生水と聞くと、だれもが黙り込みました。家内は出産によって病気にな



ったので、普段の飲食に使う食器はよく拭かなければなりませんでした。お産の病気は誤って生水を飲んでしまうと、病状が悪くなると当時、言い伝えがあったからです。水を飲ませる勇氣はないが、断るわけにもいかないと板ばさみになって、どうしようもありませんでした。やむを得ず、ごく少量の水を渡しましたが、足りないと思った蕭執事は私の弱い気持ちを思いやってくださいました。祈っている最中、魔術でも行われるのかと覗いてみましたが、どうか癒してください、多くの人を信仰に導いてください、はやく教会が成立できるようにと蕭執事の熱心な祈りぶりが目に映りました。それはとても厳粛で、ちっとも軽薄な感じには見えませんでした。祈りが終わって、さっそく冷たい水を病人に飲ませました。「神様は顧みられるので、必ず治ります。」と蕭執事は言いました。そこに何の根拠があるのかと私は聞きました。「先ほど、栄光に照らされました。これは祈りが聞き入れられた証拠です。」と答えました。一緒に祈った家族はだれも栄光を見なかったので、かえって魔術ではないかと心配しました。そうでなければ、どうして彼しか栄光を見なかったのでしょうか。もう生水を飲ませてしまったので、後悔しても手遅れでした。それでいい加減にあしらって、蕭執事を見送った後、とても不安でたまりませんでした。

その晩、家内がひどくなって、眠れないだろうと心配しましたが、不思議なことに、彼女は朝の七時までぐっすりと寝ていました。病気になって以来はじめてのことでした。「お腹痛くない？」と聞きましたが、彼女は手のひらでお腹を撫でながら、「大分よくなりました。もう痛くないです。」と言いました。私はあまりの喜びで、教会へいい知らせを伝えに駆けつけました。蕭執事は喜びながら慰めてくださいました。「昨日言ったように、神様が顧みてくださるから、必ずよくなります。」私は心の中で非常な喜びを感じ、信仰に力がつけられました。再び蕭執事に家に来てもらいましたが、やはり冷たい水を用意するようにと頼まれました。昨日の体験で、今回はたくさんの水を持ってきました。彼は笑いながら、「今日は信仰が強くなりましたね」と言いました。このように、七



日間連続で祈って、家内の病気は完全に治り、寝床から起き上がって歩くようになりました。この不思議な奇跡を経験して、今までの疑い、軽蔑の思いが消え去り、進んで敬い、より頼む思いに変わりました。数日後、全家族は主イエスの貴い血のバプテスマを受けて、真の教会に入信しました。

同年の5月15日は全家族がバプテスマを受けた日です。同時に男女合わせて33人も一緒に受けました。皆蕭執事が施したのです。鳥のような発光体がバプテスマの終わるまで空中を飛んでいるのを二人の姉妹は見ました。蕭執事の説明をとおして、聖霊が共にあることを悟り、皆喜んで感謝の歓声をあげました。教会堂に戻って、一同は心を合わせて感謝の祈りをしました。切に祈っているところ、聖霊が大いに下りました。その声は大水のとどろき、激しい雷鳴のような声でした。地盤まで揺れた感じでした。許葉九という兄弟は建物が倒れるだろうと思い、外へ逃げ出しました。祈りが終わると、当日バプテスマを受けた男女の信者の中で、半数が聖霊に満たされました。喜びに満ち溢れて、自然に言動に現れました。それ以上喜ぶ日はないと皆同じ思いでした。私もその時に聖霊を受けました。そのいきさつは次のとおりです。

感謝の祈りをして間もない頃、軽く感電したような感じで、体が大きく揺らされました。引き続き舌が思わず理解できない言葉を語り始め、語れば語るほど力強くなり、非常に喜びました。それ以来、祈るとき、異言を語ります。聖霊の力によって、今までの悪習を徐々に断つことができました。特に十数年にわたって、何度も止めようとした喫煙の悪い習慣は完全になくなりました。前後を比較すれば、重荷が下ろされた如く、今日まで、主から一切の霊の力を賜っています。これはわたしが聖霊を受けた体験です。

また、母が十八年もアヘンにおかされていましたが、祈りによって断つことができました。聖霊を受けた後、もともと痩せていた体は肉がついて健康にな

りました。八十数歳の彼女は今でも歩くのが飛ぶように速いです。そして、数十年が一日の如く、絶えず朝晩の集会に参加しています。

私の家族を罪と苦痛から救い出し、霊も肉も平安と喜びの中に置かれた主の恵みに感謝します。主イエスの大いなる恵みと愛は永遠に忘れないものです。いつも感謝するだけでなく、ここで証をし、栄光を主の御名に帰しますように。

4. 聖霊のバプテスマを受けて、何事も自制できます

謝錦坤

「イエスを信じ、聖霊を授かれれば、どんな逆境にいても、どんな患難に遭っても、喜ぶことができます。」

両親を失い、人生の虚しさを多く感じ、その上、生まれつき癩癩持ちで、悩みの暮らしにいる私はこの話を聞き、半信半疑でしたが、暗闇の中に輝いている明星に引かれたように教会へ教えを聞きに行きました。祈りの時、皆が体を動かしながらぶつぶつ言っているのを見て、何が何だかさっぱりわからなくなり帰ってしまいました。1957年の夏、学校の夏休みを良机ににして、この宝を求めようと思い、台中教会で二ヶ月ほど求道をしましたが、ためにならなかったので、失望のあまりに学校が始まると止めてしまいました。

人が諦めても、その人を愛する神様は見捨てません。学校が始まって一ヶ月後に、打撃を受け、再び教会に戻りました。ちょうど秋季霊恩会の時期でした。聖霊を求めるために、わたしは熱心に朝の祈り会に参加していました。「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、…その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう」(ヨハ7:37~38)と伝道者はイエスの言葉を引用し、聖霊を慕う者は前に来て、聖霊を求めるように励ましました。心が飢えている私はある力に催促されて、思わず皆と前に行ってひ



ざまずいて願いました。聖霊の感動を受けて、体が自然に動き、涙が止まりませんでした。特に長老、執事の按手を受けた時は一段と感動されました。異言を語っていないので、聖霊を受けたものではありませんでした。しかし、今回の祈りは、聖霊の感動の体験を十分受けました。

聖霊の感動を受けてから、祈っているとき、力が腹から湧いてきて、体が跳ねたり、声が大きくなったりすることがよくあり、いつも夜中に熟睡している家族を起こしてしまいました。祈祷室にいるとき、長老、執事は早く聖霊が受けられるように、よく按手をしてくださいましたが、やはり異言は語られませんでした。聖霊の感動を受けたにもかかわらず、真イエス教会の何でも聖書を根拠にする説教は理解しにくかったので、うんざり思った時はよくありました。しかし、聖書を調べるには、やはりある程度努めなければならないと思い、ほかのいろいろな教会にも回り、特に「集会所」という教派の教えは分かりやすく、適した本もあって読むことができたので、その教派の集会に参加するのを好むようになりました。1958年1月から、説教を聞いたり、教会書籍を読んだりして、約半年の励みを経て、キリスト教に対して大まかな輪郭を描くことができました。その一方、真イエス教会の毎週水曜日にある証会にも喜んで参加しました。信者の証する神の不思議な大能によく感動され、信仰を得るようになりました。

1958年5月28日（水曜日）の夜、いつもどおりに真イエス教会へ証を聞きに行きました。集会後、自転車に乗って帰ろうとしたところ、その晩に限って借りた新しい自転車がなくなったことに気づきました。教会の人に話しましたが、皆とても心配し、電話で自転車管理当番の人に確認をしてくださいました。見つからなかったら、教会が責任を取ると責任者も慰めてくださいました。それでくじけて教会に来なくなって、永遠の幸を見逃さないようにと林悟真長老も勧めてくださいました。実は、私の心はとても穏やかで、少しも憂いや心配



はなかったのです。家に帰って家族に報告した時もハハハと笑う程度だったので、冗談を言っているのかと思われました。真面目に言い直すと、「ばかじゃないか。自転車をなくしたのに、まだ笑えるのか。」と責められました。けれどもこの経験によって、願い通りに喜びを得て、神に感謝しました。もともと求道を始めたのは、「どんな逆境にいても、どんな患難に遭っても、喜ぶことができます」という薬を求めていたからです。一ヶ月分の給料に当たる自転車をなくしたのは災難ではありませんか。どうして平気で笑えて、心配の気持ちが全然なかったのでしょうか。私自身でさえよくわかりませんでした。ただ神の恵みに感謝のみです。今回の恵みを体験して、今まで断ってきたバプテスマを受けようとする気持ちになりました。6月8日（日曜日）、「集会所」でバプテスマが行われるので、主の導きを感じて受ける決心をしました。残念なことに、受ける前の晩に、主催者が言いました。「バプテスマに罪を赦す効果がありません。主を信じるときにすでに罪が赦されました。」それはまさに私に冷たい水を掛けたようなもので、熱々とした心が一瞬にして冷めました。あまりにも失望し、バプテスマを受け損ないました。

6月23日の晩、求道して、そしてバプテスマを受け損なった経過を親友に話しました。その親友は、それはキリスト教を非常に憎んでいた亡くなった両親のせいだと言いました。家に帰ったのは皆がぐっすりと眠っている頃でした。何の音もしない静かな夜中に、親友の言葉が心に響いて消えませんでした。私はひざまずいて祈りました。「慈愛なる主イエス様よ、救ってくださいと信じます。だけど、周りの環境の影響が大きくて、あなたを信じることはなかなか難しいです。今晚もまた亡くなった両親を持ち出して信仰の妨げの言葉を聞いたので、明らかなしるしと絶大な力が現れないと、あなたを信じることはできないのです。周りの家族と友達にも何も言えないのです。聖霊は罪赦しのバプテスマを受けて、清くなった人に賜るものということを知っていますが、どうか私の特殊な環境を思いやって、先に聖霊をくださいますように。」このような内



容の祈りが終わったら、安心して寝ました。

翌日、真イエス教会の郭兄弟が黎兄弟と一緒に訪ねてきました。黎兄弟は七、八年ほど「集会所」の信者でしたが、郭兄弟のお父さんの紹介をとおして、真イエス教会でバプテスマを受けました。彼は「集会所」から真イエス教会に入信した原因と経過を話した後、次の朝の教会の祈り会に参加して聖霊を求めることを勧めました。どこの教会も行かず、しばらく家で聖書を勉強して、真イエス教会と「集会所」の教えの真偽をわきまえようと思いましたが、そう言われてうなずくしかありませんでした。

6月25日の朝、約束を守って祈り会に行きました。参加した人は約十数名でした。黎兄弟はそこで待っていました。讚美歌を歌って、聖書を朗読してから、祈りを始め、大体三十分で祈り会が終わりました。聖霊を求めるため、その後また祈禱室に入って祈りました。祈禱室に入ると、蔡兄弟がそこで耳に心地良い歌を歌っているのが聞こえました。それはいわゆる「霊の歌」だったのでしょう。信者から霊の歌のことを聞きましたが、自分の耳では初めてでした。何を歌っているか、挟まれた「ハレルヤ」以外の言葉は全然わかりませんでした。それは台湾語でも日本語でもなく、もちろん、北京語や英語でもありませんでした。しいて言えばヘブライ語に聞こえました（私は当然ヘブライ語ができませんが、ただ聞いた感じはそうでした）。だけど、彼はどうしてヘブライ語の歌が歌えたのか、ちゃんとした教育も受けていないし、英語も習ったことがないのに、美しいヘブライ語の歌が歌えるなんてと自問自答で、ふと聖霊に感じました。「だから、これは真の神の存在を証明するのではないか。神は明らかに存在するのだ。蔡兄弟をとおして、目で見え、耳で聞こえるが、なんで今までわたしは主を知らず、信じず、かえって抵抗したりけがしたりしてきたのか。」と思うと、自分を責めながら、涙が出てきました。ひざまずくと、体が震えて嗚咽し、腹から抑えられない熱気が湧いてきて、大声を出して泣きました。その



時、体は大きく動いて、時計の鎖が切れたほどに合わせられた両手を激しく動かしました。汗と涙が同時に流れて、ハンカチどころか、袖も下着も上着もびっしょりでした。目が乾き、のどがかれるまで二十分ぐらい大泣きして、やっと体が静まりました。36歳の私がこんなふうに号泣して、後になってとても恥ずかしく思いました。両親が亡くなった時、それほど泣きませんでした。なぜ今日に限って初めての号泣を体験したのでしょうか。しかし、悲しい気持ちに形容できない喜びが混じって、久しぶりに愛する天の父の懐に帰ったような感じでした。そして、その涙によって過去の汚れを洗い落とされたように、すっきりした気持ちでした。これはすなわち「喜びと悲しみが一緒に集まる」ということでしょうか。立ち上がって、汗と涙を拭きましたが、黎兄弟は学校の帰りにまた来ようと言っただけです。言われたとおりに、私は放課後に来て、祈りました。

その晩、教会へ集会に行きました。集会が終わったら、祈禱室で祈りました。そこから出た時、郭兄弟は信者たちに、「彼は聖霊を受けました」と喜んで知らせました。なるほど、けさ号泣したのは聖霊を受けた時だったのです！渇き慕った聖霊がやっと授けられたと心から大喜びでした。すぐに、聖書の表紙の裏に、1958年6月25日の朝、台中の真イエス教会にて聖霊のバプテスマを受けたと記入しました。主に感謝します。それは一生忘れられない日でした。

翌朝、夜が明ける前に目が覚めました。眠気がないので、起きて顔を洗って、教会へ祈り会に行きました。そして、三日目、四日目、五日目も…、毎日のように、同じ時間に起きて、教会へ行きました。よく寝坊をするわたしは、学生の自習時間の監督にさえ間に合わなかったものですが、なんでこの数日は早く目が覚めて、二度寝する気にもならないのかと不思議に思いました。それは聖霊の力でなければ何でしょうか。それから、聖書がわかるようにと聖霊もまた心の目を開いてくださいました。特に使徒行伝に書いてあることは今の真イエ



ス教会と一致しており、興味津々に何回も読みました。それ以来、聖書をもって聖書を解釈する真イエス教会の説教も分かるようになりました。

聖霊を受けてから、癩癩を起ししやすい性格はすぐには直りませんでした。はやく祈って、聖霊に満たされれば、自然に穏やかになることができました。前は家庭にあった怒りを学校に持っていき、学校にあった怒りを家庭に持って帰ることをしていました。よく八つ当たりして、一日中気分がうっとうしくて、晴らすことができませんでした。聖霊を受けた後、どうしようもなかった怒りが何分間の祈りで消えて、本当に感謝です。

その後まもなく、人に貸したお金がその会社の倒産でなくなりました。生活に難儀にしている教員にとって小さくない打撃でした。しかし、私は祈りの中で慰められました。怒りが喜びに、憂いが同情に変わりました。思わず債務者の惨めな状況を憐れみながら、彼らに比べ自分の生活には余裕があることを感謝しました。これと同じように、聖霊によって恵みを味わった体験はいくらもありました。ただ、何千年の歴史もある先祖を祭る問題、また幼い頃から親に従って偶像を拝んできた問題に対し、わたしはなかなか円満に解決できなくて、バプテスマを躊躇していました。

八月中旬、台中で学生霊恩会が行われましたが、私がバプテスマを申し込む気配がないのを皆おかしく思いました。林長老は言いました。「何か解決できない問題でもありますか。いち早くバプテスマを受けないと、聖霊はいつまでも罪の赦されていない人の身には留まらないのですよ。」聖霊が離れると聞いて、呆然としました。貴い聖霊がなくなると、大変なことになる。今度怒ったり悲しんだりする時はどうするのか。だけど、この二つの問題を解決してから、神は必ずバプテスマの機会を与えてくださると心の中で思いました。ほんとうに主の恵みに感謝します。聖霊の導きにより、先祖崇拜と偶像崇拜の過ちが次第



に明らかになり、とうとうその年の11月16日に台中教会の秋季霊恩会でバプテスマを受け、キリストに帰し、新しき人となる条件を備えました。

5. 切に祈り求めて、果たして聖霊に注がれました

朱阿娥

ハレルヤ、主に感謝します。私が聖霊を受けてから、12年経ちました。(朱姉妹は1954年に聖霊を受けました)

私はクリスチャンの家庭に生まれ、小さい時から神の慈しみの元で育ちました。物事がだんだんわかるようになった頃、教会でも家でも聖書の物語を聞くのを好みました。子供の讚美歌はもっと興味がありました。この環境において、少しずつ教えが分かるようになりました。聖霊がないと天国に入れないことを知りました。聖霊が人の身に下ると、どれくらい喜ぶかと聖霊のある人から聞いたので、聖霊を求め始めました。小学校の六年の間に、教会の伝道霊恩会ごとに、涙を流しながら一生懸命祈って、長老、執事の按手も受けましたが、失望するばかりでした。聖霊を授けられた人の喜びの顔を見て、羨ましくてたまりませんでした。毎回の霊恩会の機会をよく掴みましたが、いつもがっかりして終わりました。今振りかえって見れば、主に恵まれて、幼い心を支えられ、「くじけない」気持ちを授けられなければ、私は永遠に聖霊を得ることはできなかったでしょう。

1954年の秋、梅山教会は信者の霊の徳を高めるために、毎週の金曜日に特別の祈禱会を行いました。主の霊に導かれて、毎回必ず誰かが聖霊を受けました。時には、同じ晩に何人も聖霊を得ました。なので、短い期間に、多くの子供が聖霊を授けられました。彼らは異言を語ったり、体を動かしたり、跳ねたりして、その喜びの姿はなんと羨ましいことだったのでしょうか。私は熱心に切に祈りましたが、なかなか得られず、恥ずかしくなって、心が苦しかったです。ど



うして得られないのかと自分に問いかけました。その原因はどこにあるのでしょうか。その晩、私はまた敗戦の兵士のように、がっくりと気を落として教会堂を出ました。帰りの途中で、「最大の決心をしなくちゃ。来週の金曜日の晩、もし願いが叶わなければ家に帰らない」と考えました。家に帰って、決心がついたので、寝ようと思いました。私の決意を知らない父に言われました。「子供たちは次々と聖霊を受けて、弟、妹も受けたから、年上のおまえはもっと頑張らなくては。」父の励ましの言葉を聞き、黙り込みました。私はその言葉に大きく励まされ、志がもっと堅くなりました。

11月27日の夜、待望の時でした。わたしはいつものように教会へ行きました。しかし、その時の心情は普段と違い、まるで戦に行く戦士のように、勝たなければ戻って来ない気持ちでした。その晩は大事なものの一聖霊を得て来なければならなかったからです。ひざまずいて祈り、聖霊をいただかないと起き上がらないとまず自分に言い聞かせ、そしてしきりに祈りました。公平な神は私を試みられ、決心があるから、すぐに聖霊をくださるというわけではありませんでした。しかし、私は落胆せずに、ひたすら祈り続けて、約二時間ほど、ひざまずいた場所から離れませんでした。集会が終わって、皆帰りましたが、両親はそばで休憩しながら、ひとりで祈っているわたしを待っていました。汗びっしょりで涙ぼろぼろになりましたが、主の憐れみと聖霊をただ一心に求めました。ハレルヤ！主の愛に感謝します。やっと私を憐れみ、私の祈りを聞いてくださいました。ちょうどその時、主は貴い聖霊を16歳の少女の私に授けてくださったのです。最初は異言を語り続けて、その後、体が少し動きました。それほど満たされなかったのですが、感動を受けました。夜遅かったので、しばらくすると祈りを止めましたが、気分は非常によく、飛ぶように家へ駆けつけました。翌朝、起きて、すぐ教会へ祈りに行く支度をしました。着いたら五分も祈らないうちに、聖霊に非常に満たされて、体全体が動き、異言を流暢に語り、気持ちがすすすがしくなり、描写し難いほど気分は高揚しました。



聖霊の働きによって、私は熱心になり、信仰が倍に増え、祈りを好み、一日何回祈っても足りないと感じました。特によく辛抱して、やっと得た聖霊なので、なくなるのを恐れて、毎日敬虔に祈り続けました。聖霊を受けた兄弟姉妹も同感だと思います。今、みずから約束の聖霊を味わって、いつも主の霊の岩のそばで貴い霊の水を飲み、霊性がますます成長し、主の恵みの広さを深く感じました。

曲がった邪悪な時代において、女子労働者であった私は、日常生活では思い通りにいかない事がよくあり、人生のさまざまな味を味わってきました。毎日目に見えているのは大抵邪悪なことで、ほんとうに心を痛める俗化した時代です。もし聖霊の助けがなければ、恐らくとつくの前に私は罪の中に陥ってしまったでしょう。主の愛に感謝します。先に聖霊をくださり、それから、私を世の渦の中に入れて、いろいろな試練をとおして、鍛えてくださいました。私はすべてを聖霊の導きにゆだね、まっすぐ行きました。強風が吹いても大波が来ても、祈りによって解決しました。絶望の中で、いつも主に呼びわります。慈愛なる神はわたしの声を聞き、肉体の弱さを憐れみ、道を開いてくださいました。顧みるほかに、主はなお戒めてくださいます。もし正しい道から逸れたら、愛の鞭をもって平安の道に導いてくださいます。真の神の権勢は計り知れず、なんと大きくて、なんと畏れるべきものでしょうか。

今、神の霊は枯れたわが心を潤し、飢えたわが魂を満足してくださいます。神のくすしき恵みはなんと長く、広く、高く、深いのでしょうか。

6. 稲妻が身に落ちて、異言を語りだしました

簡東豪

聖霊を受けた時の状況を、信仰に入る前に、何度も見ました。というのは、家の近くに真イエス教会があって、信者が祈りながら、よく叫び、体が動いて



いるのを知っていたからです。幼い頃でしたから、なぜそんなことをするのか考えようとしませんでした。主を信じて聖霊を授けられた後、やっとその喜びを味わうことができました。

偶像崇拜の家庭で育った私はキリスト教に対し全く素人で、むろん、聖霊のことはまったく知りませんでした。特に、父が熱心に偶像を拝み、祭りごとには、必ず参加していましたので、その影響を受けて、息子のわたしもそれを固く信じていました。真の神に遠く離れた私は、天の父が賜る最高の聖霊をいただくには実に相応しくない身分でした。しかし、神の愛に感謝します。台湾がまだ日本の植民地であった時代に、叔母と叔父は神に選ばれて、信仰に入り、聖霊の喜びを味わいました。そのゆえんで、叔母の証を聞いた父はしばらく一緒に真イエス教会へ求道に行きました。その間、私はよく父について教会に行き、その素晴らしさを知りました。ところが、ある日、教会の長老が訪ねてきて、タバコを吸っている父を見て、主を信じる者はタバコを吸ったりお酒を飲んだりしてはいけない、と遠慮なく父を止めました。その戒めを聞き入れられないために、父は教会へ行かなくなりました。わけのわからない私もそれで教会から疎遠になりました。

十五歳のあの年、私は悪性のマラリヤにかかり、ますます重くなる一方でした。父は一人息子の私のために、焦り、いろいろな医者のところを回りました。叔母は黙って祈ってくれました。感謝なことに、まだ信仰に入っていない私は叔母の祈りによって、徐々に回復しました。しかし、父は医者の方が高明だと思い込み、栄光を神に帰しませんでした。ちょうどその時、隣のある長老教会の信者がよく家に来て証を母に聞かせました。長老教会に少し懂れていた母は私が治ってから、長老教会へ行こうと考えました。今まで叔母がよく真イエス教会の教えを話しましたが、母はずっと断っていました。今回はなぜ長老教会に興味を持ったのか分かりませんが、今振り返ってみると、それは本



教会に入るために主が計らってくださっていたのです。

両親が長老教会でバプテスマを受けてから、牧師は私を誘うためによくうちへ来ました。元々無口で人見知りをする私は、誰も知らない長老教会へ行こうとはしませんでした。「せっかくのご好意なのに、どうして行かないの？」と母に聞かれるたびに、いつも「行きづらいから」と答えました。ある時、私は進んで母に言いました。「教会へ行くなら、真イエス教会へ行ってもいい？そこなら近いし、おばちゃんもおじちゃんもいるから。」母は、「それもそうね、同じ事だから。」と答えました。そこで、真イエス教会での求道が始まりました。主に感謝します。聖霊の感動によって、わたしは徐々に教えを悟るようになりました。

1953年11月22日に、教会の霊恩会を機に、わたしはバプテスマを受けました。その日、叔母は一冊の聖書をプレゼントしてくれ、よく祈って聖霊を求めなさいと励ましてくれました。同じ日に、祈るとき、涙を流しましたが、ほかに何の感じもしませんでした。霊恩会が終わった数日後、「真イエス教会の人が祈りながら、大声で叫んだり、体が動いたりするのは、ある老人のせいだよ。その人は催眠術を使っているから。」と隣のある年寄りが非難の話をし、ほかの隣人もその意見に合わせていたのを耳にしました。彼らが言っている老人とは女執事の張執事でした。若い私はそれを本当だと思い込み、だれにも聞けずに心に留めたので、祈るたびに怯えていました。

翌年の3月5日に、教会の皆さんと病気に患った姉妹のために、祈りました。切に祈ったところ、突然、稲妻のようなものがわが身に臨んで、思わず体が動き出し、口から分からない言葉を語りだしましたが、とても喜びました。その時張執事は教会の仕事で台湾の中部へ行っていました。ずっと疑っていた私は、なるほどわさは真実ではないと悟りました。喜んで家へ帰りましたが、母に



最初に発した言葉は聖霊を受けたことでした。しかしおかしなことに、彼女は全く動じない様子で、「私たちにもあるわよ」と答えました。しばらくすると、真の教会に行っていることを長老教会の牧師は知り、母に、「なんで息子さんを真イエス教会へ行かせたのですか」と責めてきました。それから、迫害が始まりました。私が教会へ行くたびに、母に睨み付けられる、もしくは邪魔をされました。たぶん母の怒りは徐々になくなるだろうと思い、私は全く気にしませんでした。ある日、叔母が家に来ると、「あんたたちだけが真で、私たちは偽りなの？」と母は大声で罵りました。このようにして、私に対する迫害はますますひどくなりました。

まもなく、わたしの胃はなぜか痛み出しました。精神と肉体の苦痛が重なり、大変でした。聖霊の守りと助けがなければ、とても私には勝てない二重の打撃でした。家族が真の教会に入っていないため、こっそりと泣いて主に願いました。慈愛なる天の父はその祈りを覚えられ、数年後に、家族は次々と真の教会に入りました。ただ体にあるとげだけは除けなかったのです。今思えば、それも主の素晴らしいみこころであろうかと思えます。

病気の苦しみはあるのですが、こころは喜んでいました。聖書に書いてあるように、聖霊に満たされる人は、聖霊によって慰められ、喜びを得るからです（使徒9:31、へブ1:9）。それ以外にも、聖霊に導かれて、解決したことは多くあり、一々詳しく述べることができません。ここで聖霊を授かったご恩を感謝し、すべての栄光を天にある真の神に帰ることができますように。

7. 先に聖霊を受け、後にバプテスマを受ける決心ができました

林献生

私は多神教信仰の家庭に生まれ育ちました。母は偶像たちの敬虔な信者でした。隣の医者である周福全先生はクリスチャンでした。汪培英牧師が周先生の



うちで家庭集会をするとき、よく誘われて私は母と一緒に参加しました。従兄弟の徳進が嘉義の東門長老教会の日曜学校で勉強しているお蔭で、私もよくついて行きました。ある年のクリスマスに、彼は子供劇のショーに出ました。その劇名は「万国平和会議」と言い、彼はチャイナ服を着た中国の代表を演じました。皆秩序よく演じることはできませんでしたが、深く印象に残りました。

嘉義中学で勉強した頃、イエスを信じる若者たちがインテリであると自負するのを見て、キリスト教に反感を覚えました。中学を卒業してから、日本の東京に上京し、美術専門学校で美術の専攻をしましたが、ホリー教会の「聖書学院」の近くの路地に住み、曾承坡さんと隣同士でした。曾さんに影響を受けて、毎週日曜日に一緒に柏木のキリスト教会へ集会に行きました。その時、日本語改訳版の聖書は一番の愛読書でした。

後に台湾に帰り、学校の教員となりましたが、環境の変化によって、聖書を書棚に置いたまま、読まなくなりました。1937年の夏、学校が夏休みに入ったため嘉義に帰ってきました。ある夜、従兄弟と買い物に来た時、東門の真イエス教会の門の前を通り、一緒に説教を聞きに入りました。皆は讃美歌を歌って、ひざまずいて祈っていましたが、私たちは座ってきよろきよろみんなの祈りの格好を見ていました。中学時代は、毎日真イエス教会の前を歩いて学校へ行ってました。叔父はその教会の長老でしたが、祈りの仕方は一種の自己催眠だと思って、見ようともしませんでした。しかし、その晩、よく観察した結果、聞いて分からない言葉を語る人がいれば、知性の祈りをしている人もいました。体が震えるように動くのがあれば、静かに祈るのもありました。今までの非難が間違っていたと気付くと、突然、上から厳粛な雰囲気私に臨み、すぐさまひざまずいて知性の祈りを始めました。その後、私は毎日のように、教会へ礼拝に行き、聖霊を求めました。



夏休みが終わって学校に戻ったある晩のことです。10月5日に、真イエス教会の信者である何銀賞兄弟が訪ねてきて、「感謝です。林先生が夏休みに嘉義の真イエス教会で求道していると聞きましたが、…」と言って、寮の畳の上と一緒に祈ろうとすすめました。祈って五分も経たないうちに、私は突然、上から力が降りてきたと感じ、すぐに口から英語でもなくフランス語でもない言葉を語り始めました。体が動いて、ひざまずいたままで畳の上を跳ね回っていました。膝に擦り傷ができましたが、過去にない喜びを感じました。主に感謝です。それは聖霊のバプテスマによることがよく分かりました。林悟真長老が証した聖霊を、今、私もみずから体験しました。祈りが終わり、汗を拭いた後、非常に感謝な気持ちで蔡聖民執事宛に手紙を書き、聖霊を与えられたことを報告しました。そして、安息日に嘉義に帰るついでに、翌日の日曜日にバプテスマを授けてくださるようお願いしました。

主の愛に感謝します。私は予定どおりに10月16日に八掌溪で蔡執事によってバプテスマを授けられ、主の名の下に帰りました。蔡執事宛の手紙が嘉義教会に届いた時、ちょうど日本人の伝道者である須田清基長老が来ていたので、蔡執事は私の手紙を見せました。須田長老はその手紙を読み終わってから、台南へ持って帰り、彼が発行した日本語の「聖霊時代」という雑誌（第三号5ページ）に載せました。

使徒時代において、バプテスマを受ける前に、聖霊を受けて異言を語った人（使徒10:44~48）もいれば、先にバプテスマを受けて、按手してもらってから聖霊を受けた人（使徒8:15~17、19:1~7）もいました。これらの経験は現在の本教会にもあるのです。私は先に聖霊を受け、そしてバプテスマを受けた主の恵みに感謝します。主はわが心をよくご存知です。もし聖霊を先に体験させてくださらなかったら、信仰になかなか入りにくい私は恐らくまだ道に迷っていたでしょう。



1941年10月1日に、私は自分の身を主にささげました。バプテスマを受けた当時に心で立てた誓いを果たし、主に一生仕えることができました。感謝します。これは一番楽しく、光栄なことでしょう。ハレルヤ！

8. 聖霊に満たされて、新しき人を着ます

呉揚道

聖書の記載によると、聖霊を受けることは、①肉の古いアダムが生まれ変わり、霊の新しいアダムに変わる事（参考：Iコリ15:22、ヨハ3:3、5、コロ3:9～10）。②滅びるはずであったが、永遠の命にあずかる事（ロマ5:12、エゼ37:14）。③悪しき者の配下から、自由を得てキリストに属すること（Iヨハ5:19、ロマ8:9）。④罪の奴隷が救われ、神の子となる事（ヨハ8:34、ガラ4:4～7）。⑤空なる世界にいるが、神の国をつぐ保証を得ること（伝9:5～6、9、エペ1:13～14）です。だから、聖霊を受けることはクリスチャンの一大事で、救われる必要条件です。

私は小さい時に父に死なれ、五人の兄も相次いで亡くなったことで、家が非常に貧乏で大変苦勞をしました。後にイエスを信じ、天の父が約束された聖霊を受けたことにより、大いに慰められ、望みを得ました。以下に聖霊を受けた体験を述べますので、聖霊に渴き慕う人の参考にしてください。

パウロが言いました。「かつてはそれらの中で、この世のならわしに従い…」（エペ2:2）偶像崇拜の家庭に生まれた私は、ずっと母と姉に従って偽りの神を拝み、祭りごとにくじ引きをしたり占いをしたりしてきました。大きくなってから、世の名、利、欲のために走っていたせいか、体は弱く、精神も悶えるばかりでした。体を鍛えて健やかになろうとしましたが、それも無駄でした。

29歳の年、玉里で同僚の姜医師が聖書を読んでいるのを見かけて、「大学教



育を受けたあなたは、どうしてそんなばかげたことをしているのか。」と笑って言いました。それを聞いて、彼は優しく答えました。「あなたも読んでみれば、聖書の偉大なところが分かるでしょう。」なるほどと思い、それで創世記とローマ人への手紙から聖書を読み始めました。心を開いてくださった主に感謝します。「わたしの欲している善はしないで、欲していない悪は、これを行っている」（ロマ7：19）のところまで読むと、その真理の真髄を喝破することに感服しました。自分の体験にぴったりであった他、ほかの人にもその弱点があることに気付いたからです。また、「しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである」（ロマ5：8）を読むと、キリストの愛の偉大さに心を深く打たれました。そこで、信仰に入って、主に頼って心身の軟さを克服する決心をしました。

ヨハネによる福音書は特に聖霊を論じるところが多いことに気がつきました。14章16、17節の記載ですが、「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。それは真理の御霊である。この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。…」とあります。主の約束なので、必ず賜ると信じました。しかし、いったいどんな感じで、聖霊を受けたと確信できるのかと思いました。これを問題として、姜医師にたずねましたが、「大きい問題ですね。私もよく分かりません。」と返事をくれました。その後、また何人かのクリスチャンに聞きました。「聖書を読んで理解して、よい行いを行えば、聖霊を得たのではないか。」と言う人もいましたが、その答えに満足できませんでした。

感謝なことに、主のご按配によって、許真信兄弟がこの問題を解決してくれました。ある日、車で顔の見知りでない二人が聖書のことを話し合っている



のが目に入りました。彼らの聖書にはたくさんの赤い線が引かれていました。一目見て古い信者と分かったので、近寄って聞きました。「今日は土曜日ですが、どこへお出かけですか」。相手は、「土曜日の安息日を守るため、今から教会へ行くところです。」と答えました。引き続き安息日のことをたずねました。彼らが聖書に詳しいことを見て、引き続きたずねました。「あなたがたは聖霊がありますか。」許兄弟は、「あります。バプテスマを授けられてから三年経ってやっと受けました。この賜物がほしいなら、私たちの真イエス教会へ勉強に来てください。」と言いました。このメッセージを聞いて、非常に喜びました。後に立山の真イエス教会に行き、陳聖工執事と話し合っ、はじめて聖霊は目に見え耳に聞こえることを知りました(使徒2:33, 8:17~18, 10:46)。聖霊に対する疑問が完全に解け、そこでバプテスマを受けたい志願を提出しました。しかし、陳執事は慎重であったため、即時に施してはくれませんでした。何度かの聖書勉強をとおしてから後、ようやく1951年8月5日にバプテスマを受け、主の御名の下に帰しました。

それ以来、一日に三度ひざまずいて、「ハレルヤ、主イエスの御名を賛美します」(黙19:5~6)と唱えて祈り、切に聖霊を求めました(ルカ11:13)。しかし、一ヶ月経っても、受ける気配がなく、焦り始めました。伝道者が来るたびに、「なんでまだ聖霊をくださらないのですか」と聞きました。主に感謝します。間もなく霊恩会に参加する機会がありました。簡益真長老と楊ヨハネ執事が派遣されてきました。顔を合わせると、彼らはすぐに励ましてくれました。

「私たちは協力に来ましたが、聖霊を授けるのは主イエス様です。切に求めればいいのです。」この指示を得て、休憩の時間になると、祈り室で祈りました。ある時、熱風が体を吹き通った感じを短く体験しました。午後六時に家へ帰ろうとしましたが、伝道者の二人に誘われて、祈ってもらいました。簡長老が手を私の頭に置くと、突然、大きな力が頭から注がれて、しだいに全身に満ちたので、喜びのあまり、まるで天国に入ったかのような感じでした。そして、腹から生



ける水が流れ出した感じになり、舌がその力に制御されて、思わず分からないことばを語りだしました(ヨハ7:37~38、I コリ14:2)。それで、全身が熱くなり、汗をかき、動きましたが、身の上になんかことが起きたのか意識ははっきりしていません。長く慕い求めていた聖霊を授けられ、主に感謝します。

「神の国は飲食ではなく、義と、平和と、聖霊における喜びとである」(ロマ14:17)。聖霊を受けた最初の変化は「聖霊における喜びを」感じたことです。世の喜びは試験の合格、結婚、親になったことなどですが、時間が経つにつれて、その印象はだんだん薄れていきます。しかし、聖霊における喜びは印象深く、忘れがたく、環境によって変遷されにくいものです(使徒16:25)。その喜びは自ら味わってはじめて知るものでしょう。

「けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう」(ヨハ16:13)。その次の体験は、「真理を得ること」でした。主を信じて間もない頃は聖書をよく知りませんでした。しかし、よく霊に燃えていたので、機会があると、証したくなりました(使徒4:20)。友だちが私のことを聞いて、二人の牧師と一緒に訪問に来ました。来たその理由を知らない私は一つ一つ証をしました。結局、彼らは、「それは聖霊ではありません。神は無秩序の神ではなく、平和の神です」(I コリ14:33)と言いました。不思議に思いながら、私は答えました。「私は聖書に従って、証をしただけです。心が喜びに満たされるのは確かなことです。正しいと思います。」彼らは私の証を受け入れようとしなくて、帰ってしまいました。元々神学に対し白紙だった私は、そのことをはっきりさせるため、聖書勉強に励み始めました。神に感謝します！聖霊の導きによって、神の教えと人間のいましめ(マタ15:8~9)の区別を悟り、本教会の教えが聖書に合っていることを認識しました。その後、また訪問に来ましたが、私が聖書に基づいて論じた結果、彼らは答えようがなく、来なくなりました(ルカ21:15)。



「このように恵みを受けたのは、わたしが異邦人のためにキリスト・イエスに仕える者となり、神の福音のために祭司の役を勤め、こうして異邦人を、聖霊によってきよめられた、御旨にかなうささげ物とするためである」(ロマ15:16)。本来、私は弱い人で、いろいろな欠点がありました。たとえば、癩癩持ち、負けず嫌い、嘘つき、感情にもろく、不平不満を抱くことなどでした。しかし、感謝なことに、聖霊を受けてから、変わりました。昔の「激しい」性格がだんだん除かれ(テト3:5、エゼ36:26~27)、御霊の実を結ぶことができるようになりました(ガラ5:22~23)。

以上はわたしの体験です。「科学は実験を重んじ、宗教は体験を重んじる」というように、聖霊は自ら体験して、はじめて天からの賜物を味わうことができるのです(へブ6:4)。願わくは、慈愛なる主イエス様が読者の皆さんを導いて、本教会で貴い聖霊を授けられますように。

9. 戸を閉め一心に祈って、果たして聖霊が臨まれました

楊ヨハネ

五、六歳の頃、兄嫁(長老教会伝道者の妻)に優しく面倒を見てもらったお蔭で、幼い心に、「大きくなったら、お姉さんについてイエスを信じよう」という思いがありました。十歳の時、兄の義理の兄弟が担当する教会でクリスマスの行事が行われました。催し物の応援のため、兄は数十キロ離れたところまで私たちを連れて行きました(兄嫁の四人姉妹の中で、三人が牧師や伝道者の家に嫁ぎました)。

十八歳の時、上海に行っても、いつものようにキリスト教の教会で礼拝をしていました。しかし、その時は教えに対し無知に近く、むしろ異性を見るために教会へ行っていたのです。ほんとうに神に申し訳ありませんでした。一年余り、台湾へ帰ってきました。広東へ行くつもりでしたが、行く前に、真イエス



教会の信者に熱心に誘われて、説教を聞きに行きました。その説教は普通の牧師の説教より力強く、何でも聖書を引証するので、集会に行きやすかったです。ただどうしても理解できなかったのは、彼らが言った「聖霊のバプテスマを受ける」ことでした。彼らは地位や学問がある人でも、皆ひざまずいてからだを動かしながら、分からないことばを語っていました。歌ったり(彼らが言うには、それは霊の歌ですが)、手をたたいたりして、声や音が隣までよく響き渡りました。可笑しくて、みっともないと思いました。

ある日、伝道者の朱恵民執事が台中教会からやってきました。安息日の礼拝の説教にとっても感動をしました。そこで、午前の集会が終わって、初めて喜んで皆と一緒にひざまずいて祈りました。突然、上からの力が体を動かし、合わせられた両手は開閉を繰り返しました。同時に舌からある声が出て、心が打たれて、涙をぼろぼろ流しました。それで、長い間疑っていた「聖霊のバプテスマの問題」が完全に解けました。主に感謝します。聖霊を受けてから、過去の罪過が一つ一つ浮かんで来て、罪人であることを意識し、バプテスマを受けようと思いました(その日、屏東教会はバプテスマを行いました)。しかし、信仰の弱い私を勧めないようにとほかの信者が言っていたのを偶然に聞きましたので、自分の意志の強くないところを恥ずかしく思い、申し込めなくなりました。午後の集会が終わって、不安を抱きながら、真イエス教会と一般の教会との異なった教義——バプテスマ、安息日、洗足式などについて、再度、朱執事に詳しく教わりました。それで、一日もはやく主の貴い血潮のバプテスマを受けて、あらゆる罪を洗い落とし、キリストに帰し、神の子になる決心がつけました(使徒2:38、ガラ3:27)。朱執事は翌日にバプテスマを授けますと、とても喜んで約束してくださいました。

翌日、屏東バス会社のバスは私一人のためにわざわざ隘寮溪まで送ってくれました。受洗した後、罪の重荷がすっかり卸されて、心身ともに清くなり、爽



快でした。しかし、予想外のことが起こってしまいました。教会に戻って祈ると、昨日受けた聖霊を全然感じなくなったのです。とても焦って、朱執事にその原因を教えてもらいました。「ある人は聖書勉強をして、真理から入信しましたが、ある人は病気が癒されて信仰に入りました。あなたはしばらく説教を聞いていましたが、まだ悟っていません。病気もしておらず、主の癒しを必要としていません。主はあなたを愛して、信仰を導くために、先に聖霊を賜りました（使徒10：44～47）。これから、また熱心に求めれば、必ず受けます。」（参考：ルカ11：13）しかし、日々昼夜絶えず求めても、聖霊はなかなか授かりませんでした。

受洗後の25日目に、よく自己反省をし、聖霊を受けられない原因は「集中できないから」とやっと分かりました。それは、祈りは自分の部屋でしていましたが、その家にはまだほかの人も住んでいるので、勝手に玄関の門の鍵をかけてはならなかったからです。信仰の弱い私は、同じ部屋の未信者のことが気になり、大声で祈ることができませんでした。今まで祈りながら人の足音が気になっていました。原因が分かったので、思い切って玄関の門の鍵をかけて、外のことを一切気にしないことにしました（参考：マタ6：6）。

主に感謝します！その日、祈り始めて間もない頃、聖霊が下り、前よりも感動を受けました。畳の上にひざまずいたままで引き上げられ、跳ね回り、目を閉じて壁にぶつかりませんでした。そして腹から力強い異言と霊の歌が出て、よく響きました。隣に住んでいる楊霊泉長老がその声を聞いて、駆けつけてきました。ある人が中へ入ろうとしましたが、楊長老に引き止められました。聖霊によく満たされ、邪魔を受けないように止めてくださったのです（私は外の人の話し声がよく聞こえるほど意識がはっきりしていました）。約一時間、完全に聖霊に占められ、言葉では表現できない喜びと幸福感に満たされました。両膝は擦り傷ができて、まったく痛くありませんでした。また聖霊が離れるの



ではないかと心配し、その日からさらに祈りに励み、聖霊に満たされつづけるように求めました。

九歳の時に母に死なれ、幼い頃から母性愛に欠けていた私は、人生を冷淡に見て、十数歳の時には自殺まで図ろうとしました。しかし、この度、主イエスの大いなる愛によって、永遠の命に入る保証の聖霊をいただき、私以上に幸せな人はいないと思いました。既得の宝を守るために、比較的信仰に有利な田舎生活を送ろうと決心しました。けれども、人の道は自身によるのではなく、歩む人が、その歩みを自分で決めることはできません(エレ10:23)。思いがけないことですが、今のいのちと後の世のいのちの最大の平安と幸を人に得させる一番価値のある仕事に携わるために、私は主に召されました——「救いの福音」を宣べ伝えることです。この福音は聖霊を証拠とし、しるしが伴い、聖書がその確かなことを示し、「聖徒たちによって、ひとたび伝えられた信仰」なのです(ユダ3、エペ1:13～14、マル16:17～20)。

感謝なことに、私が先に恵みを蒙ってから、父及び長老教会で二十年も牧師をしていた兄一家族は皆真の教会に入信して、聖霊を受けました。願わくは、主イエスの救いの恵みが親戚と友達に臨まれますように。今、世の終わりが近づき、後の雨の降臨の時ですので、読者の皆さんも良き機会と認識して、いち早く聖霊を求めて、恵みにあずかれますように。信仰において一致を目指し、一つの群れとなれますように。世の終わりの救いの大使命を共に負い、神の全世界を救う計画にあずかり、主イエスの再臨を迎え、栄光の天国に輝かしく入られますように。



10. 聖霊を受けて、肺結核が癒されました

簡益真

ハレルヤ、主イエスの御名によって、証をします。

1931年12月1日に信仰に入って以来、35年が経ちました。各地の教会で証をしましたが、それを文字にして、主に栄光を帰したことがなく、本当に主に申し訳ありませんでした。

1928年頃、私は嘉義県梅山村で役所勤めをしていました。飲み食い仲間と付き合い、毎晩酒、色、賭から離れない生活でした。あまりにも放縦過ぎて、ついに体を壊してしまいました。最初は喘息にかかり、一年あまりになって肺結核になって血を吐いていました。薬を飲んで、注射をしましたが、治らないばかりか、病状が重くなる一方でした。そして、三年も経って、第三期の肺結核になってしまいました。西洋、漢方両方の治療を受けましたが、効き目がなく、財産も費やして、たくさんの債務まで負いました。あちこちの神を求め、占いをし、妖術をし、呪文を唱えましたが、効果がありませんでした。恵みを蒙る三ヶ月前には、ベッドから起き上がることができなくて、ベッドに座っていました。食べることもできなければ、眠ることもできなくて、すっかりやつれてしまいました。金もなく友もなく、死を待つしかない頃、主は真イエス教会の姉妹を感動させて、家内に言いました。「真イエス教会には神様が共におられて、人の病を癒し、悪魔を追い出します。信仰をもって祈れば、病気は癒されるのです。」家内はそのことを私に知らせましたが、最初私は頑なに信じませんでした。日夜休まず看病して、倒れそうだった家内を見て、仕方なくうなずきました。そこで、彼女は喜んで教会の信者に連絡して祈りに来るようお願いしました。

1931年12月1日の晩、七、八名の信者が自宅に来ました。「横になって、手を組み目を閉じ、『ハレルヤ、主イエスを賛美します』と唱えなさい」と言われま



した。二回祈って、その晩、気持ちよく眠れました。夜中になって、うとうとしている間、突然、黒い毛の生えた悪魔の手が現れました。片方はわたしの背中を押し、片方は胸を押しながら、「信じてはいけないと言ったのに」と三回も言いました。それで私は全身の力が抜けて動けなくなりました。頑張って大声で「ハレルヤ！」と叫んで、やっとその手が消えました。目が覚めたら、汗びっしょりでした。イエスを信じる気になって、悪魔がすぐ邪魔に来るのだから、これは本当の信仰だと思いました。だから、疑わず、逆に信仰が強められました。その後毎晩、教会の信者たちはうちに集会に来てくれました。病気はだんだん快復し、一週間後には、自分でベッドから降りることができました。

十日目の晩、古い信者の郭友兄弟に聞きました。「毎晩祈る時、『ハレルヤ』を唱えてから、分からない言葉を言ったり、体が動いたりするのはどういことですか」。彼は答えました。「それは聖霊です。語っているのは異言です。イエスがこの世で福音を宣べ伝えた時、信じる人に聖霊が下ると約束しました。異言を語るのは聖霊を受けた証拠です。」(ヨハ7:38~39、使徒10:44~46)。「私も聖霊を受けますか」とさらに聞くと、「熱心に祈り求めれば、与えられます。もし聖霊に満たされている人に按手をされたら、もっと受けやすいでしょう」と答えました(使徒8:17~18)。けれども、私は、按手されないで、自分で祈ったほうが良いと思いました。それは、この老人(郭友兄弟)は魔術がうまくて、彼に按手されたら、体が動く以前よく聞いていたからです。もし、彼に按手されて聖霊を受けたならば、かえって私は疑います。神は正義の方だから、あなたに与えられるなら、私にも与えられると思いました。彼は言いました。「自分で祈り求めてもいいですが、切に頑張らなければなりません」。その晩、あるお婆さんが喘息で発作が起き、助禱に来るようにと頼まれたので、彼らは集会後に、すぐ見舞いに行きました。

見送ってから、家内に言いました。「今晚、聖霊を求める。何か異常があつて



も私を呼ばない、蚊帳の中に入らない、ただ外で祈ってくれればいいから。」彼女が承諾したので、私は部屋に入り、ベッドに上がって、蚊帳を下ろしました。最初は正座のままで祈りました。十分経って、声がだんだん大きくなり、体に力を感じました。二十分経つと、全身汗びしょびしょでした。突然、電気のような力が頭に降りてきて、足のつま先から動き始めました。腹から生ける水のような熱気が流れ出て、舌が巻き、異言を語り始めました。そして、体が思わず大きく動き、膝をついたままで立って、ベッドの上で二十分ほど高く跳ね回っていました。それを見た家内はととても怖がりました。何日か前に、家内は隣の奥さんに、「なんで真イエス教会を信じるのですか。あの教会は信じたばかりの頃はまだ大丈夫ですが、しばらくすると、気違いになるのですよ。」と言われたので、聖霊を受けて、膝で立って跳ね回っている私が本当に気違いになったと思ったのです。しかし、私を止めることもできず、蚊帳の外で焦っているばかりです。私は大汗をかき、毛糸の二枚の厚い下着と上着は全部濡れました。一旦祈りをやめて着替えてからまた祈れたらいいなあと思ったとたんに、全身の振動が止まりました。主は人の思いをよく知っておられます。休憩の時、あまりにも喜んでいて、着替えるどころか、喘息のお婆さんのために助祷している信者が戻ってくることが待ちきれず、聖霊をすでに受けたことを彼らにはやく知らせたかったのです。私は下駄を履いて、外へ走りました。その状況を目にして、家内は本当に気違いになったと思い、一段と恐れて、後を追ってきました。途中まで行って、信者たちに会いました。聖霊を受けたことを教えて、一緒に喜んでもらいました。神に感謝しながら、家まで戻ってきてもらいました。着替えてから祈ると、よく聖霊に満たされました。「本当に聖霊を受けました。私たちと同じです。」と彼らは言って、共に神に感謝しました。その後、毎晩うちで集会があり、毎日喜びに溢れました。

一ヶ月後の1932年1月9日に、大林教会へ行ってバプテスマを受けました。主の御血により、一切の罪が洗い流されて、感謝です。病がしだいに回復して、



心身ともにすっきりでした。病気が癒されただけでなく、前の酒、色、賭にふけた悪習も主に取り除かれました。まさに主の言葉のようでした。「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」（マタ11：28）。この難病のために、貯蓄を使いいきり、返済できない債務を負いました。それで、生活が困難になって、栄養不良でした。病気は治りましたが、体はまだ弱く、やつれて醜かったです。このような体でどうやって生きていくのかと思いました。ある日、50歳まで生かしていただき、主のために証ができるようにと、勇気をもって主にお願ひしました（当時は30歳でしたが、そのままでしたら、恐らく5年も持たないと心配しました）。主イエス様の大きい愛に感謝します。彼は祈りを聞いてくださり、人知ではどうも測り知ることのできない平安をくださったのです（ピリ4：6～7）。

1966年に65歳になりました。主はわが体を改造し、寿命を35年も延ばしてくださいました。今の健康状態は青年時代よりも良いです。主のくすしき御わざ、大きい慈愛と豊かな恵みをどうやってほめたたえればいいのか分かりません。ダビデの詩をよく覚えています。「わがたましいよ、主をほめよ。わがうちなるすべてのものよ、その聖なるみ名をほめよ。わがたましいよ、主をほめよ。そのすべてのめぐみを心にとめよ。主はあなたのすべての不義をゆるし、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを墓からあがないだし、いつくしみと、あわれみをあなたにこうむらせ、あなたの生きながらえるかぎり、良き物をもってあなたを飽き足らせられる。こうしてあなたは若返って、わしのように新たになる」（詩103：1～5）。

字数の制限で、簡単に主の恵みと聖霊を受けた体験を証しました（聖霊を受けた初信の時から今に至るまで、聖霊に満たされた経験は同じです）。願わくは、誉れ、感謝、ほめたたえがとこしえまで主イエス・キリストの聖名に帰しますように。



11. 「汝によきおとずれを伝えよ」と書いてあるとおりに祈って、 聖霊に満たされました

李靈実

ハレルヤ、主イエスの御名によって聖霊を受けた経験を証し、聖霊を受けていない兄弟姉妹の参考になればと思います。

1935年（私が21歳の時）のある日、自宅で小説を読んでいたところ、隣の蘇乾執さん（蘇霊安執事）が「汝によきおとずれを伝えよ」という本を持ってきてくれました。その本は台湾真イエス教会が発行したものです。その中に、聖霊に関することが書かれています。台北の博覧会の時に宗教宣伝用に書かれたものだそうです。私はその本を受け取って、一句一句詳しく読んでいくと、大いに感動され、考えまでがらりと変わりました。聖霊を受けた経験がそれほど不思議ならば、私もイエス様を信じようと思いました。

「汝によきおとずれを伝えよ」という本をもらう前は、真イエス教会へ行ったことがありませんでした。その信者がどうやって聖霊を求めるのか、また聖霊を受けた状態も見たことがありませんでした。聖霊がほしくなったことも、聖霊を求める方法を知ったことも、「汝によきおとずれを伝えよ」という本のお蔭でした。祈るとき、「ハレルヤ、主イエスを賛美します。聖霊を賜ってください。」と唱えるべきだとその本に書いてあります。「ハレルヤ」という言葉は元々ヘブライ語から訳した音です。今まで祈ったことのない私は訳が分からなくても、前もってその言葉を暗誦して、人目を忍んで穀物倉で聖霊を祈り求めました。

翌朝の五時に、計画どおりに穀物倉でひざまずいてしきりに「ハレルヤ、主イエスを賛美します。聖霊を賜ってください。」と唱えて祈りました。声は小さいのですが、心は敬虔でした。一時間祈りましたが、何も変わりませんでした。



私はそれでも落胆せずに、これから一日三度、朝、昼、夜祈り続ける決意をしました。三日目になってもやはり何もなく、ただ膝が赤く腫れただけです。四日目の昼、30分ぐらい祈ると、不思議なことに聖霊がわが身に臨みました。

ゆっくりと「ハレルヤ、主イエスを賛美します。聖霊を賜ってください。」を繰り返しているうちに、突然、上から電気が流れてきたような、暖かいお湯が頭から全身に注がれたような感覚があり、文字では表現しにくいほど心がのびのびとして愉快でした。それと同時に、舌が巻き、分からない言葉を語り出しました（I コリ14:2）。それだけではなく、体も動いていました。その動きはなんと気持ちよく、軽快なことでしょうか。一時間後、自然に止まりました。聖霊に満たされたとき、意識が終始はっきりしていて、外の雑音もよく聞こえました。それは聖霊ですから、邪霊を受けた人の体験とは異なるものです。

その時から31年経っても聖霊は私から離れたことがありません。その日に私を満たしたように、今日も同じように私を満たしています。変わることはありません。主が私の心をよく知り、尊い聖霊を賜ってくださった恵みに感謝します。彼は正しくいつくしみ深い神で、人を偏り見ませんので、謙虚に聖霊を求めれば、必ず聞いてくださるのです。

聖霊を受ける前には、重大な罪を犯していませんでしたが、良い人とは言えませんでした。感謝なことに、聖霊を受けた後、性格が大きく変わりました。聖霊の力によって、穏やかで、柔和な人にならなければ、どうして全家族を信仰に導くことができたでしょうか。当時、父と叔父の家族は同居し、合わせて二十人近い大家族でした。祖母は精進して熱心な仏教の信者で、キリスト教が大嫌いでした。一番上の孫として、私はどんな環境にいたか、想像しにくいものではありません。



聖霊を受けてから、内緒で嘉義の真イエス教会へ説教を聞きに行きました。そして、聖書を買って、神の言葉を勉強し始めました。後に民雄にも真イエス教会があると聞いて、民雄で集会するようになりました。しばらくすると、祖母、父、叔父とほかの家族は私がイエスを信じたことを知り、怒りのあまり、責めたり、攻撃したりして、教会から離れるように脅迫しました。主の憐れみと聖霊の力によって、私は信仰を堅く守り、何でも耐え忍んで、善をもって悪に勝ったので、途中で信仰を止めることはありませんでした。逆に、私が聖霊の実を結んだのを見て、私が絶えず主の助けを求めた結果、家族の態度は軟化して、キリスト教を見直しました。二、三年後、祖母と一緒に祈るようになって、そして、聖霊を授けられました。それだけではなく、主の栄光を見るという大きな喜びを得ました。そこで、彼女はイエスを信じると決めて、家にあるすべての偶像を即座に焼き払うようにと言付けたので、当然、父も叔父も反対できず、言われたとおりに従うしかありませんでした。

主の恵みに感謝します。「汝によきおとずれを伝えよ」という本をとおして、教会に行ったことのない私を導いてくださいました。自宅で聖霊を求めた私の祈りは聞きいれられ、昼も夜も切に思い慕った最も貴重な聖霊を賜りました(いまだにその本を大事に保管しています)。また、私をとおして家族全員を真の教会に入らせ、一緒に神のいつくしみにあずかることができました。そればかりではなく、卑しい器の私を選んで福音の伝道者として、さらに多くの人を入信させ、主を救い主とさせました。このような導きを考えれば考えるほど、不思議でたまりません。願わくは、主を信じる信者が、聖霊を受けていなくても落胆しませんように。信仰をもってしきりに祈り求めれば、必ず聞き入れられるからです。さらに、まだ真の教会に入っていない方々が謙虚に聖霊の真理を調べますように。そうすれば、主の約束の聖霊を受けることができるでしょう。アーメン。



1 2. 伝道者を反駁した者が逆に神の捕虜となりました

謝東璧

私は台湾真イエス教会の現役の伝道者です。

1947年6月に姉が私に、「イエス様は宇宙の主宰者で、世の人々が礼拝すべき真の神です。」と、本当に彼女の学問を疑わせる見解を言い出しました。私は聞きました。「外国の歴史を読んだことはありませんか。イエスは明らかにユダヤ人なのに、どうして無理矢理に宇宙の主宰者であるというのですか。いったい宇宙万物が先にあったのか、それともイエスが先にあったのですか。」彼女の啞然とし慌てた様子を見て、機会に乗じてさらに彼女に恥をかかせました。「よし、宇宙を統治する主宰者がいるとしましょう。では、その神の身長と体重はどのくらいあるのですか。」彼女は答えました、「神は人の目では見えないから、どうしてその姿をいうことができますでしょうか。」そこで、私は哲学者っぽい口調で姉を戒めました。「宇宙に神なんかいません。すべて科学で証明できない事物は信用するに足りないものです。しいて神がいると言うなら、良心が個人各自の神なのです。だから、私は神の存在を否認します。ただ自分を信じるだけです。」弁論はこれで終わり、ついに自分は勝利者だと宣告しました。私は自分の独自の見解によって、哀れな迷信家の姉を打ち破って、愉快でした。

数日後、姉は言いました。「私は求道し始めたばかりで、聖書の知識に乏しいから、あなたの疑問を解くことはできません。教会に伝道者がいるから、今晚一緒に集会に行けば、満足できる答えが出てくると思います。」それはおもしろいじゃないか。もし伝道者も答えられないなら、もっと愉快ではないかと私は思いました。というのは、迷信家を不愉快にさせるのは、私の唯一の楽しみだったからです。私は即座にうなずきました。その晩、最初から最後までまじめに聞きました。伝道者の説教の弱点を掴もうとしたためでした。結果、それは無駄でした。伝道者の話した内容は全部聖書ですから、聖書に対し経験のない



私は一時的に負けを認めざるを得ませんでした。それから、伝道者を負かす資料を探すために、私は毎晩集会に行きました。

主の慈愛に感謝します。その間、聖霊の力はずっと私に働きかけていました。弁駁する思いは払い落とされ、説教を聞けば聞くほどおもしろくなり、最後は完全に主の御前で降参するまでに至りました。これは進歩か退歩か一時的に断定はできませんでした。ただ観念が変わったのは確実です。無神論が翻され、私は神のとりこになってしまいました。冷静に考えると、その百八十度の転換によって、往々に自分に対し疑いを生じざるを得ませんでした。もしそれがぼけなのかと言え、私は意識がはっきりしていました。もしそれが浮ついていたのかと言え、私は穏やかでした。もしそれがもろさなのかと言え、私は強情な人でした。もしそれが妥協なのかと言え、私が主張しているのは無神論でした。なぜそんなにも大きな転換になったのか、理解できませんが、無理に解釈する必要もありません。ただそれが奇跡であることは認めました。神の慈愛です。主イエスの恵みです。聖霊の働きによるのです。前に疑った問題、すなわち、姉を反駁して言い負かした問題は、これですでに円満に答えを得ました。

第一、イエス・キリストには人間の性質もあれば、神の性質もあります。人間の性質から言うと、彼はユダヤ人で、アブラハムの子孫でありながら、ダビデ王の子孫です。神の性質から言うと、彼は万物の上において、万物よりも先にあり、万物は彼にあって成り立っているのです(マタ1:1、18、ロマ9:5、コロ1:15～17)。第二、神は霊ですから、物質ではなくて、目に見えなく、手で触れられません(ヨハ4:24)。宇宙に充満する広大さがありながら、人のうちにおられる微小さもあります(詩139:7～10、エペ4:6)。だから、世の人のように身長や体重を量るものではありません。第三、易経繫辭伝に記載されています。「形而下者、謂之器；形而上者、謂之道」(形よりして上なるは、これを道と謂い、形よ



りして下なるはこれを器と謂う)。聖書に記載されています。「言は神であった」(ヨハ1:1)。科学は形而下、物質的な問題を解決するのに対して、宗教は形而上、無形の霊界の問題を解決するのです。だから、科学は神の存在を証明できなくても、神の存在の事実を否定することはできません(ロマ1:19~20)。第四、人の良心は主のともしびであり、主に代わって人の心の奥を探り(箴20:27)、物事の是非をわきまえることができます(ロマ2:14~15)。しかし、良心は神ではなく、また人に悪を捨てさせ善に従わせる力もありません(ロマ7:18~20)。私がずっと重んじてきた良心がこんなにも頼れないものであるのかと思いました(ロマ7:21~24)。

そのほかに、一番私に興味を起こさせ、しかも一番私を悩ませる問題は彼らの祈りの状況でした。気違いでもなく、偽りでもないのに、どうして彼らはひざまずくと体全体が動き出して、分からない言葉を語りだすのでしょうか。説明できないのは当時体験していなかったからです。しかし、否認もできませんでした。それは鉄のような事実だったからです。彼らが言うには、「これは人が聖霊に満たされる状態です。聖霊は神の霊です。聖霊を受けるのは天国を受け継ぐ保証です。聖霊を受けた人は、言葉では言えない喜びを感じるのです。」と。

7月5日に、虎尾教会はバプテスマを行いました。同じバプテスマを受けて主に帰した人は、私を入れて12人です。バプテスマを施す前に、皆が聖霊の導きを求めるために、立って祈りました。それから、一斉に讚美歌の9番「罪贖いの妙なる恵み」を歌いながら、一人ずつ水に浸って受洗をしました。とても厳粛な場面でした。バプテスマを受けた後、気分は快適で、予想外の喜びに溢れました。今日から私はクリスチャンで、新しい生活がこれで始まると思いました。帰る途中、ある老姉妹はバプテスマのとき、血を見たと言っていたので、それが主イエスの血潮だという解釈が出ました。このまぼろしが私の信仰に多く力をつけたのは、今も記憶に残っています。



その日から、教会にいても、自宅にいても、絶えず聖霊のバプテスマを祈り求めました。時に断食もして祈りました。それは、天国を受け継ぐ保証(エペ1:14)を得るため、上からの力を授けられる(ルカ24:49)ためでした。何日か連続して、一緒にバプテスマを受けた信者の何人かが聖霊を授けられましたが、私はなかなか受けられず、絶望に近かったです。しかし、聖書の教えに、神は正義で慈愛なる方で、人を偏り見ず、人に失望をさせないとあるので、私は頑張っけて祈り続けました。7月14日の晩の集会後、多くの信者は帰りましたが、二、三人の執事と兄弟だけが残って、私を待っていました。私は一人で祈禱室に入り、敬虔にひざまずいて、手を組んで主に祈りました。「ハレルヤ、主イエスを賛美します。聖霊を賜って私の心を満たしてください」。このように繰り返して祈って、授けられるまでは夜明けになっても起き上がらない決心をしました。約一、二時間後に両足が痺れたところ、突然、頭の上からある力に押されて、心が熱し、体が動いて、舌も思わず巻き始めました。私は聖霊に満たされました。彼らはそれを見て、「東壁が聖霊を受けた！」と言いました。ある執事の按手によって、聖霊は倍に私を満たしました。異言の音が大きく、体も激しく動きました。しかも、栄光が私の目の前にひらめきました。

聖霊を受けたとき、心が空っぽになった感じがして、意識は明白でしたが、筆で表現できない喜びがうちから湧き上がっていました。それこそいわゆる「うちなる平安」であることを悟りました。私は生涯において初めて霊的な喜びを体験しました。本教会の黄エリシャ長老は信仰に入ってから、「疑いから信仰へ」という文章の中で言いました。「もともと理性から信仰に入るつもりでしたが、今やっと信仰は体験によるものだ」と悟りました。」この言葉は私の経験の最もよい註解となるでしょう。イエスの「パンを借りる譬」です。「しかし、よく聞きなさい、友人だからというのでは起きて与えないが、しきりに願うので、起き上がって必要なものを出してくれるであろう。そこでわたしはあなたがたに言う。求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば見いだすで



あろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。すべて求める者は得、捜す者はいだし、門をたたく者はあけてもらえるからである。あなたがたのうちで、父であるものは、その子が魚を求めるのに、魚の代りにへびを与えるだろうか。卵を求めるのに、さそりを与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物を知っているとすれば、天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さないことがあるか」(ルカ11:8~13)。私が聖霊を受けた経験は主の言葉の确实さを裏付けました---しきりに願うなら、必ず約束の聖霊を受けます。願わくは、まだ聖霊を受けていない方は落胆しないで、聖霊に満たされるまで信仰をもってますます励みますように。共に聖霊の喜びを楽しみますように。とこしえに至るまで、栄えが主イエスの聖名に帰しますように。

問題

- 一. 本章を読んだ感想を述べよ。
- 二. 「わたしが聖霊を受けた体験談」を書いてみよ。

聖 靈 論

非売品

2015年9月 発行

著 者 謝 順道

翻 訳 者 真イエス教会日本連絡所

〒359-0025 埼玉県所沢市上安松 341-1

TEL 04-2994-8336

FAX 04-2935-7000

発 行 者 真イエス教会国際連合總會

印 刷 哲興印刷事業股份有限公司
